



國典經
卷二第

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.2

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



1411

T8J3

1929

v. 2

昭和
新纂 國譯大藏經 經典部 第二卷

佛說無量壽經 目次

卷 卷

上 下

一 元

佛說觀無量壽經 目次

佛說觀無量壽經

五

佛說阿彌陀經 目次

佛說阿彌陀經

八

佛說無量壽經(真宗所用) 目次

卷

上

七

卷

下

二四

佛說觀無量壽經(真宗) 目次

佛說觀無量壽經.....一四

佛說阿彌陀經(真宗) 目次

佛說阿彌陀經.....一五

佛說彌勒上生經 目次

佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經.....一七

佛說彌勒下生經 目次

佛說彌勒下生經.....一八

佛說彌勒大成佛經 目次

佛說彌勒大成佛經……………一九

勝鬘經 目次

勝鬘師子吼一乘大方便方廣經……………三五

百喻經 目次

卷第一……………二四

卷第二……………二九

卷第三……………三一

卷第四……………三二

雜譬喻經 目次

雜譬喻經……………三五

生經 目次

卷 卷 卷 卷 卷

第 第 第 第 第

五 四 三 二 一

.....
.....
.....
.....
.....

四九四

四六三

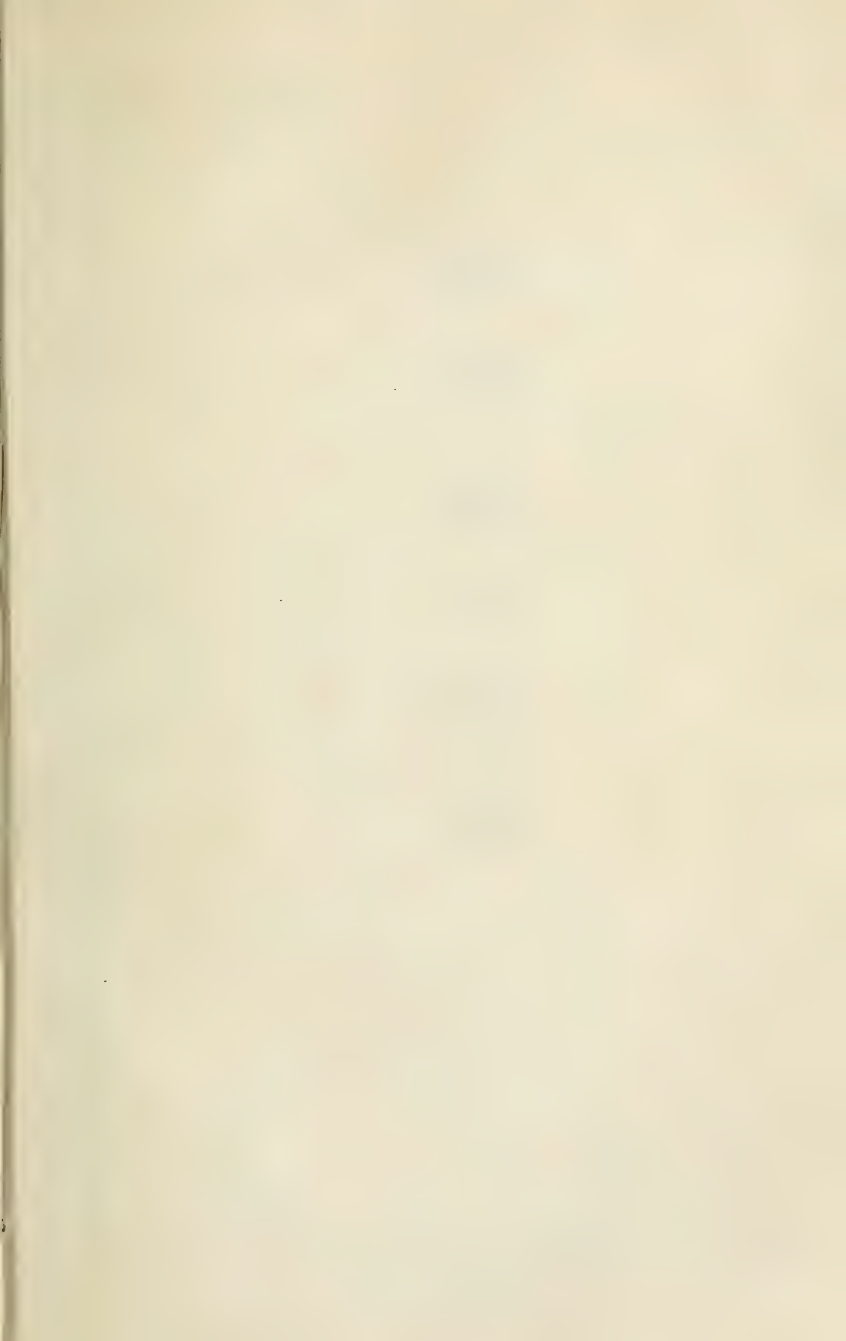
四三七

三九五

三五七

佛說無量壽經

第 二 卷	經 典 部
-------------	-------------



【一】序分中の證信序。

【王舍城】印度摩迦陀國の都城。

【耆闍崛山】靈鷲山。

【優樓頻伽迦葉等】以下の三迦葉は兄弟にして、元事外道なりしも、後佛に歸依して僧團に入れるなり。

【摩訶迦葉】佛十大弟子の一、頭陀第一。

【舍利弗】佛十大弟子の一、智慧第一。

【大目犍連】佛十大弟子の一、神通第一。

【助資那】能く星宿を知ること衆僧中第一。

【滿願子】佛十大弟子の一、說法第一。

【羅云】佛の長子羅睺羅のこと、密行第一。

【阿難】佛十大弟子の一、多聞第一。

【妙德】文殊なり

佛說無量壽經 卷上

曹魏天竺三藏康僧鎧譯す

我聞き是の如きを。一時佛王舍城の耆闍崛山の中に住して、大比丘衆萬二千人と俱なりき。一切の大聖神通已に達せり。其名を尊者了本際、尊者正願、尊者正語、尊者大號、尊者仁賢、尊者離垢、尊者名聞、尊者善實、尊者具足、尊者牛王、尊者優樓頻伽迦葉、尊者伽耶迦葉、尊者那提迦葉、尊者摩訶迦葉、尊者舍利弗、尊者大目犍連、尊者劫賓那、尊者大住、尊者大淨志、尊者那提迦葉、尊者摩訶周那、尊者滿願子、尊者離障、尊者流灌、尊者堅伏、尊者面王、尊者異乘、尊者仁性、尊者嘉樂、尊者善來、尊者羅云、尊者阿羅と曰ひき。皆是の如き等の上首たる者なり。

又大乗の衆の菩薩と俱なりき。普賢菩薩、妙德菩薩、慈氏菩薩等の此賢劫の中の一切の菩薩となり。又此賢護等の十六正士あり。善思議菩薩、信慧菩薩、空無菩薩、神通華菩薩、光英菩薩、慧上菩薩、智幢菩薩、寂根菩薩、願慧菩薩、香象菩薩、寶英菩薩、中住菩薩、制行菩薩、解脱菩薩なり。皆普賢大士の徳に遵へり。諸の菩薩の無量の行願を具して、一切功德の法に安住せり。十方に遊歩して權方便を行じ、佛法藏に入つて彼岸を究竟す。無量の世界に於て、等覺を成ずることを現す。兜率天に處して、正法を弘宣し、彼天

【慈氏】 彌勒なり
 【賢劫】 現在世のこと、此劫中に千佛出世すといふ
 【賢護等の十六正士】 大智度論七に善守等十六菩薩は居家菩薩といへり
 【普賢……德華】 嚴經に擧ぐる普賢の十大願行を指す
 【行願】 願は四弘誓願、十大願等
 【兜率天に處して等】 以下八相化儀を明す、但し連ぬる處は九相なり、第一捨此昇天。
 【彼天宮等】 第二降神入胎の相
 【右脇より等】 第三出胎異常の相
 【七歩】 丈夫の六道を超過して奮迅の力を示すが故。
 【釋梵】 帝釋と梵天のこと
 【算計等】 所謂六藝なり、今第四に童子の相
 【道術】 神仙の方をいふ。

宮を捨てて神を母胎に降し、右脇より生ぜり、現に行くこと七歩するに、光明顯曜にして普く十方を照らし、無量の佛土六種に震動す。聲を擧げて自ら稱すらく、「吾當に世に於て無上尊と爲るべし」釋梵奉侍し天人歸仰す。算計文藝射御を示現し、道術を博練し群籍を貫練す。後園に遊んで武を講ひ藝を試む、宮中色味の間に處することを現す、老病死を見て世の非常を悟り、國と財と位とを棄てて山に入つて道を學す。服乘の白馬、寶冠の瓔珞、之を遺はして還さしむ。珍妙衣を捨てて法服を着し、鬚髮を鬻除す。樹下に端坐して勤苦すること六年なり、行所應に如ふ。五濁の刹に現じて群生に隨順するをもて、塵垢有ることを示して金流に沐浴す。天樹枝を按へて攀ぢて池を出づることを得しむ。靈禽翼從して道場に往詣す。吉祥の感徵功祚を表章す。哀みて施草を受けて佛樹の下に敷て踰跣して坐す。大光明を奮つて魔をして之を知らしむ。魔官屬を率ゐて來りて逼め試む。制するに智力を以てして皆降伏せしむ。微妙の法を得て最正覺を成ず。釋梵祈勸して法輪を轉ぜんことを請す。佛の遊歩を以てし、佛吼をもて吼す。法鼓を扣き、法麤を吹き、法劍を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を曜し、法雨を澍ぎ、法施を演ぶ。常に法音を以て諸の世間を覺せしむ。光明普く無量の佛土を照らし、一切の世界六種に震動するに、總べて魔界を攝し魔の宮殿を動かす。衆魔惴怖して歸伏せずといふこと莫し、邪網を搗裂し諸見を消滅し、諸の塵勞を散じ諸の欲壺を壞す。法城を嚴護して法門を開闢す。垢汙を洗濯すること顯明清白にして、光く佛法を融じて正化を宣流す。國に入つて分衛

【後園に等】 第五
【老病死を見て等】
以下第六に出家の相。

【五濁等】 以下第七に成道の相。

【金流】 尼連禪河のこと。

【吉祥感徵】 佛成道の時に當りて帝釋の草刈人に化現して吉祥と號し、佛に草座を奉るを指す。

【功祚を表章す】 上の瑞を以て成ずべき功果福祚を示す故。

【佛樹】 菩提樹のこと。

【釋梵祈勸し等】 第八に轉法輪の相。

【諸見】 總じて見惑の邪執をいふ。

【塵勞】 煩惱のこと。

【欲壘】 愛欲の心なり。

【法戒を嚴護等】 涅槃の妙果を宣示するに喩ふ。

【分衛】 托鉢のこと。

して諸の豐膳を獲、功徳を貯へて福田を示し、法を宣べんと欲して欣笑を現じ、諸の法藥を以て三苦を救療す。道意無量の功徳を顯現し、菩薩に記を授けて等正覺を成ぜしむ。滅度を示現して拯濟すること極り無し。諸漏を消除して衆の徳本を植ゑしむ。功徳を具足すること微妙にして量り難し。諸佛の國に遊んで普く道教を現す。其修する所の行清淨にして穢無し。譬へば幻師の衆の異像を現するに、男を爲し、女を爲して所として變ぜずといふこと無く、本學明了にして意の所爲に在るが如し。此諸の菩薩も亦復是の如し。一切の法を學して貫綜縷練し、所住安諦にして化を致さずといふこと靡し。無數の佛土に皆悉く普く現す。未だ曾て慢恣せず衆生を慙傷す。是の如きの法一切具足せり。菩薩の經典要妙を究暢し、名稱普く至つて十方を導御す。無量の諸佛咸く共に護念したまふ。佛の所住には皆已に住することを得、大聖の所立には皆已に立てり。如來の導化各能く宣布し、諸の菩薩の爲に大師と作つて甚深の禪慧を以て衆人を開導す。諸法の性に通じ、衆生の相に達し、諸國を明了にす。諸佛を供養するに、其身を化現すること猶し電光の如し、善く無畏の網を學して幻化の法を曉了す。魔網を壞裂し諸の纏縛を解く。聲聞緣覺の地を超越して空無相無願三昧を得たり。善く方便を立てて三乘を顯示し、此中下に於て滅度を現す。亦所作無く、亦所有無く、不起不滅にして平等の法を得たり。無量の總持、百千の三昧、諸根智慧を具足し成就し、廣普の寂定あつて深く菩薩の法藏に入り、佛華嚴三昧を得たり。一切の經典を宣暢し演説す。深定門に住して悉く現在の無量の諸佛を

【福田】 佛又は僧に供養すれば、其福徳は同地のものを生ずるが如くに生ずるをいふ、三寶に捨るるなり。【道意】 菩提のこころ。

【滅度を示現し等】 第九に涅槃の相【本學】 先に學習するの意。【貫經總練】 辭典を通穿し、事理を集括し、玄旨を詮表し、衆疑を陶悉するなり。

【所住】 智悲の境は權衛の所遊なり【佛の所住等】 佛の住する涅槃の妙理には菩薩も亦いたるなり。

【諸法の性……明了にす】 法界衆生界等所謂伏の界無量にして滿せざる種姓なきなり。【幻化の法】 事理ともに如幻ならざるはなし。【空無相無願】 三

親たてまつり、一念の頃に周徧せずといふこと無し。諸の劇難と諸閑と不閑とを濟ひ、眞實の際を分別し顯示するに諸の如來の辯才の智を得たり。衆の言音を入りて一切を開化す。世間の諸の所有る法を超過して、心常に度世の道に歸住す。一切の萬物に於て意に隨つて自在なり。諸の庶類の爲に不請の友と作り、群生を荷負して之を重擔と爲す。如來甚深の法藏を受持し、佛種性を護つて常に絶えざらしむ。大悲を興して衆生を愍み、慈辯を演べて法眼を授け、三趣を杜き善門を開き、不請の法を以て諸の黎庶に施す。純孝の子の父母を愛敬するが如し。諸の衆生に於て視ること自己の若し。一切の善本皆彼岸に度る。悉く諸佛無量の功徳を獲たり。智慧聖明なること思議すべからず。是の如き等の菩薩大士、稱計すべからず、一時に來會せり。

爾時、世尊諸根悅豫し、姿色清淨にして光顔巍巍たり。尊者阿難、佛の聖目を承けて、即ち座より起つて、偏袒右肩し長跪合掌して佛に白して言さく、「今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顔巍巍たること、明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し。威容顯曜にして超絶したまへること無量なり。未だ曾て殊妙なること今の如くなるをば瞻觀たてまつらざりき。唯然り。大聖、我が心に念言すらく、今日世尊奇特の法に住し、今日世雄諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住し、今日世英最勝の道に住し、今日天尊如來の徳を行じたまへり。去來現の佛佛と佛と相念じたまふ。今の佛も諸佛を念じたまふこと無きことを得んや。何が故ぞ威神の光光たること乃ち爾るや。是に於て世尊、阿難に告げて曰はく、

三昧或は三解脱門
 自性を空、萬有の無
 差別相なしと觀ず
 るが無相、念願も
 亦無なるを無願と
 いふ。
 【中下】中は緣覺
 下は聲聞なり。
 【無所作等】實作
 用なき故に無所作
 【平等法】諸法一
 相にして無相の故
 なり。
 【總持】梵にダー
 ラニ(Dharani)と
 いひ、諸善を集持
 して散失せざらし
 むること。
 【諸根】總じては
 一切善法、別して
 は六根を意味す。
 【佛華嚴三昧】法
 界唯心の三昧なり
 【劇難】三途八難
 【諸閑】人天の善
 惡業を作らざる閑
 者の意。
 【不閑】業障惑障
 のあるもの。
 【眞實之際】二空
 ともに眞如にして
 更に過者なきをい

『云何が阿難、諸天汝に教へて來つて佛に問はしむるや、自ら慧見を以て威顏を問ふや。』
 阿難、佛に曰さく、『諸天の來つて我に教ふる者有ること無し、自ら所見を以て斯義を問ひた
 てまつるのみ。佛の言はく、『善い哉阿難、問ふ所甚だ快し、深智慧を發して眞妙の辯才
 有り、衆生を愍念するを以て斯慧義を問へり。如來無盡の大悲を以て三界を矜哀す。所以
 に世に出興して光く道教を闡き、群萌を拯はんと欲して惠むに眞實の利を以てす。無量億
 劫にも値ひ難く見難し。猶し靈瑞華の時あつて乃ち出づるが如し。今問ふ所は饒益する所
 多くして、一切の諸天人を開化す。阿難當に知るべし。如來正覺は其智量り難うして導
 御する所多し、慧見無礙にして、能く遏絶すること無し、一浪の力を以て能く壽命を住む
 ること億百千劫無數無量にして復此に過ぎたり。諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變に
 して光顏異ること無し。所以は何ん。如來は定慧究暢して極り無し、一切の法に於て自
 在を得たり。阿難諦に聽け、今汝が爲に説かん。』對へて曰さく、『唯然り、願樂すらく
 聞きたてまつらんと欲す。』

佛、阿難に告げたまはく、『乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に、錠光如來世に興出し
 て、無量の衆生を教化し、度脱して皆得道せしめて乃ち滅度を取りたまへり。次に如來有
 す、名けて光遠と曰ふ。次をば月光と名け、次をば梅檀香と名け、次をば善山王と名け、次
 をば須彌天冠と名け、次をば須彌等曜と名け、次をば月色と名け、次をば正念と名け、次
 をば離垢と名け、次をば無著と名け、次をば龍天と名け、次をば夜光と名け、次をば安明

【庶類】多くの衆生。

【不請の友】佛大悲を以ての故に請を待たざるなり。

【佛種性】眞如法性のこと。

【慈辯を演べて等】慈定心もて説法し如説に行じて聖地に入り法眼淨をうとなり。

【一】次に發起序説法の起門を明す。

【世雄】佛は世の猛難者にして衆生を伏するが故。

【世眼】佛五眼を以て世間を照く衆生を正道に導くが故に。

【世英】佛は智慧衆生にすぐれて秀づるが故に。

【天尊】佛は五天中最上の第一義天たるを以ていふなり。世尊以下何れも佛の異名なり。

【無盡の大悲】常没の衆生を救ふつきざる大慈悲。

頂と名け、次をば不動地と名け、次をば瑠璃妙華と名け、次をば瑠璃金色と名け、次をば金藏と名け、次をば餓光と名け、次をば餓根と名け、次をば地動と名け、次をば月像と名け、次をば日音と名け、次をば解脫華と名け、次をば莊嚴光明と名け、次をば海覺神通と名け、次をば寶燄と名け、次をば妙頂と名け、次をば離塵垢と名け、次をば捨厭意と名け、次をば寶燄と名け、次をば日月光と名け、次をば日月瑠璃光と名け、次をば無上瑠璃光と名け、次をば最上首と名け、次をば菩提華と名け、次をば月明と名け、次をば日光と名け、次をば華色王と名け、次をば水月光と名け、次をば除癡膜と名け、次をば度蓋行と名け、次をば淨信と名け、次をば善宿と名け、次をば威神と名け、次をば法慧と名け、次をば鷲音と名け、次をば師子音と名け、次をば龍音と名け、次をば處世と名け。此の如き諸佛皆悉く已に過ぎたまへり。

爾時、次に佛有す、世自在王如來應供、等正覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名く。時に國王有り、佛の説法を聞いて心に悅豫を懷き、尋ち無上正眞の道意を發し、國を棄て王を捐てて、行じて沙門と作り、號して法藏と曰ふ。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如來の所に詣でて、佛足を稽首し、右に繞ること三匝、長跪し合掌して頌を以て讚じて曰さく、

光顏巍巍として、威神極り無し

【深智慧等】先にいふ佛の五徳を稱するなり。

【眞實の利】あらゆる機根を淨土に往生せしむるの利益ある念佛の意。

【靈瑞華】優曇華【三】第二段正宗分第一所行今第一に彌陀因位の願行を明す中先づ勝因を明す。

【劫】カルバ(Kalpa) 時と譯す。

【鏡光】ディーバムカラ(Dharmakaram) 即ち然燈佛のこと、以下過去佛名五十四を連ぬ。

【世自在王】世尊以下如來の十號なり。

【法藏】ダルマカラ(Dharmakara) の譯。即ち彌陀の因名なり。

【光顔巍巍等】以下は法藏比丘の頌讚なり。

【摩尼】マニ(Mani)如意珠のこと。

【戒聞等】戒定慧

是の如き微明、與に等しき者無し

日月摩尼の、珠光燄耀なるも

皆悉く隱蔽して、猶し聚墨の若し

如來の容顏は、世に超えて偷無し

正覺の大音、響十方に流る

戒聞精進、三昧智慧

威徳 侶無く、殊勝希有なり

深諦として善く、諸佛の法海を念じ

深を窮め奥を盡くして、其涯底を究む

無明と欲と怒と、世尊は永く無し

人雄師子、神徳無量なり

功勳廣大にして、智慧深妙なり

光明の威相、大千を震動したまふ

願くは我作佛して、聖法王に齊しく

生死を過度して、解脱せずといふこと靡からん

布施調意、戒忍精進

是の如きは三昧と、智慧とを上げたりと爲す

は多聞によつて生
じ、精進によつて
なるなり。
【人雄】 次の師子
と共に佛のこと。
【大千】 三千大千
世界のこと。

【刹土】 國土のこ
と。

【泥洹】 涅槃のこ
と。

吾誓ふ佛を得るまでに、普く此願を行じて
一切の恐懼に、爲に大安を作さん
假使ひ佛有りて、百千億萬
無量にして大聖、數恆沙の如くならんに
一切の斯れ等の、諸佛を供養せんより
道を求めて堅正にして、卻かざるには如かじ
譬へば恆沙の如くなる、諸佛世界
復不可計、無數の刹土あつて
光明悉く照らして、此諸の國に徧からん
是の如く精進にして、威神量り難からんに
我作佛の國土をして、第一ならしめん
其衆奇妙にして、道場超絶し
國泥洹の如くにして、而も等雙無からん
我當に一切を、哀愍し度脱すべし
十方より來生せんもの、心悅清淨にして
已に我國に到らば、快樂安穩ならしめん
幸はくは佛信明したまへ、是れ我真證なり

【四】法藏の發心
を明す。

【時に世饒王佛等】
國土選擇なり、世
饒王佛とは世自在
王佛のこと。

願を彼に發して、所欲を力精せん
十方の世尊、智慧無礙なり

常に此尊をして、我心行を知らしめん

假使ひ身を、諸の苦毒の中に止むとも

我行は精進にして、忍んで終に悔いざらん』

佛、阿難に告げたまはく、『法藏比丘、此の頌を説き已りて、佛に白して言さく、『唯然り、

世尊我無上正覺の心を發せり。願くは佛、我爲に廣く經法を宣べたまへ、我當に修行して佛

國清淨なる莊嚴無量の妙土を攝取すべし、我をして世に於て速かに正覺を成じ、諸の生

死勤苦の本を抜かしめたまへ』佛、阿難に語げたまはく、『時に世饒王佛、法藏比丘に告げ

たまはく、『汝が修行する所の莊嚴佛土、汝自ら當に知るべし』比丘、佛に白さく、『斯義

弘深にして我境界に非ず。唯願くは世尊、廣く爲に諸佛如來の淨土の行を敷演したまへ。

我之を聞き已りて、當に説の如く修行して、所願を成滿すべし』爾時、世自在王佛、其高明

の志願の深廣なることを知ろしめして、即ち法藏比丘の爲に經を説いて言はく、『譬へば大

海の如きも一人升量して劫數を経歴せば尙底を窮めて其妙寶を得べし、人至心有つて

精進に道を求めて止まずんば會ず當に剋果すべし、何の願か得ざらん』と。是に於て世自在

王佛、即ち爲に廣く二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡、國土の麗妙を説きて、其心願に

應じて悉く現じて之を與へたまふ。時に彼比丘、佛の所説の嚴淨の國土を開き、皆悉

く親見して、無上殊勝の願を超發す。其心寂靜にして、志所著無く一切世間能く及ぶもの無し。五劫を具足して莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取す。阿難、佛に白さく、「彼佛の國土の壽量幾何ぞや。」佛の言はく、「其佛の壽命四十二劫なり。時に法藏比丘二百一十億の諸佛妙土の清淨の行を攝取す。是の如く修し已りて彼佛の所に詣でて、稽首して足を禮し、佛を滿ること三匝合掌して住し、佛に白して言さく、「世尊、我已に莊嚴佛土の清淨の行を攝取す。佛比丘に告げたまはく、「汝今説くべし、宜しく知るべし是時なり、一切の大衆を發起し説可せしめよ。菩薩聞き已らば、此法を修行して、終て無量の大願を満足することを致さん。」比丘佛に白さく、「唯聽察を垂れたまへ、我所願の如く當に具に之を説くべし。」

〔一〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、壽終の後、三惡道に更らば正覺を取らじ。

〔二〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、悉く眞金色ならずんば正覺を取らじ。

〔三〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、形色不同にして好醜有らば正覺を取らじ。

〔四〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、宿命を識らず、下百千億那由他諸劫の事を知らざるに至らば正覺を取らじ。

〔五〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、天眼を得ず、下百千億那由他諸佛の國を見ざるに至らば正覺を取らじ。

- 【五】 以下正しく法藏比丘の別願四十八を明す。
- 〔一〕 無三惡趣の類。
- 〔二〕 不更惡趣の類。
- 〔三〕 悉皆金色の類。
- 〔四〕 無有好醜の類。
- 〔五〕 宿命智通の類。
- 〔六〕 天眼智通の類。

願。〔七〕 天耳智通の

願。〔八〕 他心智通の

願。〔九〕 神境智通の

願。〔一〇〕 速得漏盡の

願。〔一一〕 住正定聚の

願。〔一二〕 以上の一十一願は第一科攝衆生の願。

願。〔一三〕 光明無量の

願。〔一四〕 壽命無量の

願。〔一五〕 以上二願は第二科攝法身の願。

〔七〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、天耳を得ず、下百千億那由他の諸佛の所説を聞いて、悉く受持せざるに至らば正覺を取らじ。

〔八〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、見他心智を得ず、下百千億那由他の衆生の心念を知らざるに至らば正覺を取らじ。

〔九〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、神足を得ず、一念の頃に於て下百千億那由他の諸佛の國を超過すること能はざるに至らば正覺を取らじ。

〔一〇〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、若し想念を起し身を貪計せば正覺を取らじ。

〔一一〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずんば正覺を取らじ。

〔一二〕 設し我佛を得たらんに、光明能く限量有つて、下百千億那由他諸佛の國を照さざるに至らば正覺を取らじ。

〔一三〕 設し我佛を得たらんに、壽命能く限量有つて、下百千億那由他劫に至らば正覺を取らじ。

〔一四〕 設し我佛を得たらんに、國中の聲聞、能く計量有つて、下三千大千世界の聲聞縁覺、百千劫に於て悉く共に計校して、其數を知るに至らば正覺を取らじ。

〔一五〕 設し我佛を得たらんに、國中の人天、壽命能く限量無からん、其本願有つて脩短自在ならんをば除く、若し爾らずんば正覺を取らじ。

【二六】 離諸不善の願。

以上の三願は第三科重攝衆生の願。

【二七】 諸佛稱揚の願、これ第四科重攝法身の願。

【二八】 念佛往生の願。

【二九】 來迎引接の願。

【三〇】 係念定生の願。

【三一】 具足諸相の願。

【三二】 必至補處の願。

【補處】 佛處を補ふべき等覺の位。

【二六】 設し我佛を得たらんに、國中の人天、乃至不善の名有ることを聞かば正覺を取らじ。

【二七】 設し我佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずんば正覺を取らじ。

【二八】 設し我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生せずんば正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗するとを除く。

【二九】 設し我佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修し、至心に發願して我國に生ぜんと欲せんに、壽終の時に臨んで、假令大衆の輿に圍遶せられ

て其人の前に現ぜずんば正覺を取らじ。

【三〇】 設し我佛を得たらんに、十方の衆生、我名號を聞いて、念を我國に係けて、諸の徳本を植ゑ、至心に廻向して、我國に生ぜんと欲せんに、果遂せずんば正覺を取らじ。

【三一】 設し我佛を得たらんに、國中の人天、悉く三十二大人の相を成滿せずんば正覺を取らじ。

【三二】 設し我佛を得たらんに、他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生せば究竟して必ず一生補處に至らん。其本願あつて自在の化する所、衆生の爲の故に、弘誓の鐵を被て徳本を積累し一切を度脱し、諸佛の國に遊んで菩薩の行を修し、十方の諸佛

願。三三 供養諸佛の

願。三四 供具如意の

願。三五 説一切智の

一切の法相及び言教に達したる智慧をいふ。

願。三六 得金剛身の

願。三七 堅固力

願。三八 萬物嚴淨の

願。三九 見道場樹の

願。四〇 得辯才智の

如來を供養し、恆沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん、若し爾らずんば正覺を取らじ。

三三

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養せんに、一食の頃に、徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ること能はずんば正覺を取らじ。

三四

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、諸佛の前に在つて其徳本を現せんに、諸の欲求する所の供養の具、若し意の如くならずんば正覺を取らじ。

三五

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、一切智を演説すること能はずんば正覺を取らじ。

三六

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、金剛那羅延身を得ずんば正覺を取らじ。

三七

設し我佛を得たらんに、國中の人天、一切の萬物嚴淨光麗に形色殊特にして、微を究め妙を極めて能く稱量すること無からん。其諸の衆生、乃至天眼を逮得すとも、能く明了に其名數を辯すること有らば正覺を取らじ。

三八

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、乃至少功德の者、其道場樹の無量の光色有つて、高さ四百萬里なるを知見すること能はずんば正覺を取らじ。

三九

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、若し經法を受讀し、諷誦持説して辯才智を得ずんば正覺を取らじ。

願。智辯無窮の

願。以上十三願は第五科重構衆生の願。第六科攝淨土の願。

願。國土嚴淨の願。以上二願は第六科攝淨土の願。

願。觸光柔軟の

願。聞名得忍の

願。【無生法忍】不生滅の眞如法性を忍知して決定安住する位。

願。轉女成男の
願。常修梵行の

〔三〇〕

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、智慧辯才若し限量すべくんば正覺を取らじ。設し我佛を得たらんに、國土清淨にして、皆悉く十方一切無量無數、不可思議の諸佛世界を照見せんこと、猶し明鏡をもて其面像を觀るが如くたらしむ。若し爾らすんば正覺を取らじ。

〔三一〕

設し我佛を得たらんに、地より已上虛空に至るまで、宮殿樓觀、池流華樹、國中の所有る一切の萬物、皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の人天に超えん。其香普く十方世界に熏じて、菩薩聞かん者は皆佛行を修せん、若し是の如くならずんば正覺を取らじ。

〔三二〕

設し我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我光明を蒙りて其身に觸れん者は、身心柔軟にして人天に超過せん。若し爾らすんば正覺を取らじ。

〔三三〕

設し我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我名字を聞いて菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずんば正覺を取らじ。

〔三四〕

設し我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其れ女人有つて我名字を聞いて歡喜信樂して、菩提心を發し、女身を厭惡せんに、壽終の後復女像と爲らば正覺を取らじ。

〔三五〕

設し我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸の菩薩衆、我名字を

【梵行】 佛道修行のこと。

【三七】 人天致敬の願。

【三六】 衣服隨念の願。

【應法】 法量の袈裟を著するなり。

【三九】 受樂無染の願。

【四〇】 見諸佛土の願。

【四二】 聞名具根の願。

【四三】 聞名得定の願。

【清淨解脱】 染惑なき無生忍をいふ

聞いて壽終の後、常に梵行を修して佛道を成ずるに至らん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【三七】

設し我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人、我名字を聞いて五體投地し、稽首作禮し、歡喜信樂して菩薩の行を修せんに、諸天世人敬ひを致さずといふこと莫からん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【三六】

設し我佛を得たらんに、國中の天人、衣服を得んと欲せば念に隨つて即ち至らん、佛の所讚の如くなる應法の妙服自然に身に在らん。若し裁縫擗染浣濯すること有らば正覺を取らじ。

【三九】

設し我佛を得たらんに、國中の天人、受くる所の快樂、漏盡比丘の如くならずんば正覺を取らじ。

【四〇】

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、意に隨つて十方無量嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に應じて願ひの如く寶樹の中に於て皆悉く照見せんこと、猶し明鏡をもて其面像を覩るが如くならん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【四二】

設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて佛を得るに至るまで、諸根闕陋して具足せずんば正覺を取らじ。

【四三】

設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて皆悉く清淨解脱三昧を逮得せん、是三昧に住して一たび意を發さん頃に、無量不可思議の諸

【定慧】 不到三昧をいふ。

【四三】 生尊貴家の願。

【四四】 具足徳木の願。

【徳木】 名號又は六度の義。

【四五】 住定見佛の願。

【普等三昧】 正受見佛のこと。

【四六】 隨意聞法の願。

【四七】 得不退轉の願。

【不退轉】 佛道修行の過程に於て既に得たる功徳を流して退失することなきをいふ。

【四八】 得三法忍の願。

【三法忍】 音響忍柔順忍、無生法忍これなり。

【六八】 法藏の立誓請願。

【我建超世願等】 以下の頌を四番の偈又は重誓の偈といふ。

【超世の願】 三世

【四三】

佛世尊を供養して定意を失せざらん。若し爾らずんば正覺を取らじ。
設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて壽終の後尊貴の家に生ぜん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【四四】

設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて歡喜踊躍して菩薩の行を修し徳本を具足せん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【四五】

設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて皆悉く普等三昧を逮得せん、是三昧に住して成佛に至るまで、常に無量不可思議の一切の諸佛を見たてまつらん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【四六】

設し我佛を得たらんに、國中の菩薩、其志願に隨つて聞かんと欲する所の法自然に聞くことを得ん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

【四七】

設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて即ち不退轉に至ることを得ずんば正覺を取らじ。

【四八】

設し我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞いて即ち第一第二第三法忍に至ることを得ず、諸佛の法に於て即ち不退轉を得ること能はずんば正覺を取らじ。」

佛、阿難に告げたまはく、『爾時法藏比丘、此願を説き已りて、頌を説いて曰さく、

我超世の願を建つ、必ず無上道に至らん

諸佛の誓願を超えたる大悲の本願の意。
【大施主】財施法施無畏施ともに窮ることなきもの。

【離欲と等】この一句は佛の因徳にしてもつて無貪等の三善根或は六度を満足するなり。

【三垢】貪瞋癡のこと。

【智慧】人空法空の智慧。

【諸の悪道】總じて六道を指す。

【功祚】功は因位の行、祚は果位の福をいふ。

【天光】梵天等の光。

【三界の雄】佛果のこと。

斯願満足せずんば、誓つて正覺を成ぜじ
我無量劫に於て、大施主と爲つて
普く諸の貧苦を濟はずんば、誓つて正覺を成ぜじ
我佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超えん
究竟して聞ゆる所靡くんば、誓つて正覺を成ぜじ
離欲と深正念と、淨慧との修梵行をもて
無上道を志求して、諸の天人師と爲らん
神力大光を演べ、普く無際之士を照し
三垢の冥を消除して、廣く衆の厄難を濟ひ
彼智慧の眼を開いて、此昏盲の闇を滅し
諸の悪道を閉塞して、善趣の門に通達せしめ
功祚満足することを成じて、威曜十方に朗かなり
日月重暉を眩め、天光も隠れて現ぜず
衆の爲に法藏を聞きて、廣く功德の寶を施し
常に大衆の中に於て、説法師子吼したまふ
一切の佛を供養し、衆の徳本を具足し
願慧悉く成滿して、三界の雄と爲ることを得たまへり

【斯願等】これ第四の願にして、この偈を四誓偈といふ所以なり。
 【七】以下現瑞證誠を擧ぐ。
 【普地】三千世界の事。

【八】正宗分第二段法藏因位の勝行を明す。

【恢廓】廣大の義。
 【建立常然】國土常住改異なきの意。
 【欲覺……生ぜず】名利を貪らず衆生を損まざらず物命を損せざるなり。
 【忍力】安受苦忍、耐怨害忍、法思惟忍。

【計せず】忍ぶこと。
 【作もなく起もなき】内に用なく果に憚なきなり。

佛の無礙智の如きは、通達して照したまはずといふこと靡し
 願くは我功慧の力、此最勝尊に等しからん
 斯願若し剋果せば、大千應に感動すべし

虛空の諸の天人、當に珍妙の華を雨らすべし

佛、阿難に告げたまはく、『法藏比丘、此頌を説き已るに、時に應じて普地六種に震動し、

天より妙華を雨らして、以て其上に散す。自然の音樂あつて、空中に讚じて言はく、『決定

して必ず無上正覺を成ぜん』と。『是に於て法藏比丘、是の如き大願を具足し修滿して、誠

諦虚しからず、世間を超出して深く寂滅を樂へり。阿難、時に彼比丘、其佛の所の諸天と

魔梵と龍神との八部大衆の中に於て、斯弘誓を發す。此願を建て已りて、一向に志を專

らにして妙土を莊嚴す。修する所の佛國、恢廓廣大にして超勝獨妙なり、建立常然にして

無衰無變なり、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の無量の德行を積植す。欲覺、瞋覺、害覺

を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、忍力成就して、衆苦を計

せず、少欲知足にして樂患癡無し、三昧常寂にして智慧無礙なり、虛偽諂曲の心有るこ

と無し、和顏愛語して、意に先だちて承問す、勇猛精進にして志願倦むこと無く、専ら清

白の法を求めて、以て羣生を惠利す。三寶を恭敬し師長に奉事し、大莊嚴を以て衆行を具

足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空無相無願の法に住して、作も無く起も無く、法

は化の如しと觀ず。麤言と自害と害彼と彼此俱害とを遠離し、善語と自利と利人と人我兼

【九】 正宗分第三
法藏の勝果報を明
す。

【利利】 クシヤト
リヤ(ア・ラ・シ・ニ・シ)印
度に於ける四種階
級の一、貴族階級
なり。

【六欲天】 四王、
忉利、夜摩、兜率
化樂、他化自在天
をいふ。

【四事】 飲食、衣
服、臥具、湯藥。衣
服、臥具、湯藥。衣
服、臥具、湯藥。

【優婆塞】 青蓮華
なり。

【二】 正宗分第四
法藏の所成道果を
明す。

【己に成佛等】 彌
陀現在の教證。

【其佛の國土等】
以下法藏の所在。
第三十二國土嚴飾
の顯成。

【鹿】 雜の義。
【第六天】 欲界天
の最勝、即ち他化
自在天に比するな
り。
【金剛鐵圍】 大小
の鐵圍山なり、金
剛所成といふ。

利とを修習す。國を棄て王を捐て、財色を絶去して自ら六波羅蜜を行じ、人を教へて行ぜしむ、無央數劫に功を積み徳を累ぬ。其生處に隨つて、意の所欲に在つて無量の寶藏自然に發應し、無數の衆生を教化し安立して、無上正眞の道に住せしむ。或は長者居士、豪姓尊貴と爲り、或は利利國君、轉輪聖帝と爲り、或は六欲天主、乃至梵王と爲り、常に四事を以て、一切の諸佛を供養し恭敬したてまつる。是の如き功德稱説すべからず。口氣香潔にして優鉢羅華の如し、身の諸の毛孔より梅檀香を出す。其香普く無量の世界に薰ず、容色端正にして相好殊妙なり、其手より常に無盡の寶、衣服飲食、珍妙華香、繪蓋幢幡、莊嚴の具を出す、是の如き等のこと、諸の天人に超えたり、一切の法に於て自在を得たり。

(二) 阿難、佛に白さく、『法藏菩薩己に成佛して滅度を取りたまふとや爲ん、未だ成佛したまはずとや爲ん、今現に在すとや爲ん。』佛、阿難に告げたまはく、『法藏菩薩今己に成佛して現に西方に在す、此を去ること十萬億刹なり、其佛の世界を名けて安樂と曰ふ。阿難又問ひたてまつる、『其佛成道より已來幾く時を遷とや爲ん。』佛の言はく、『成佛より已來凡そ十劫を歴たり。其佛の國土は自然の七寶、金銀瑠璃、珊瑚琥珀、砗磲碼磧をもて合成して地と爲り、恢廓曠蕩として眼極すべからず、悉く相雜廁し、轉相入間せり、光赫焜耀として微妙奇麗なり。清淨の莊嚴十方一切の世界に超踰せり、衆寶の中の精なり、其寶猶し第六天の寶の如し。又其國土には須彌山、及び金剛鐵圍、一切の諸山無く、亦大海小

【本地獄等】第一無三惡趣の顯成。

【諸難の趣】八難趣なり。

【四王天】六欲天の第一、東方持國南方增長、西方廣目、北方多聞の四天のこと。

【縮天】ヤーマー (Yama) 夜摩天のこと。

【色究竟天】色界十八天の最後天。

【行業果報不可思議】五不思議力の一。

【一】廣く所成を明す。

【威神光明等】第十二光明無量の顯成。

【無量光佛等】以下十二光佛を明す佛の光明、數量なし。

海、谿渠井谷無し。佛神力の故に見んと欲すれば則ち現す。亦地獄餓鬼畜生、諸難の趣無く、亦四時春秋冬夏無し、不寒不熱にして常和調適なり。爾時阿難、佛に白して言さく、

「世尊若し彼國土に須彌山無くんば、其四天王及び忉利天何に依つてか住するや。佛、阿難に語げたまはく、「第三微天、乃至色究竟天皆何に依つてか住するや。阿難、佛に白さく、

「行業果報不可思議なればなり。」佛、阿難に語げたまはく、「行業果報不可思議ならば、諸佛世界も亦不可思議なり。其諸の衆生、功德善力をもて行業の地に住す、故に能く爾るのみ。」阿難、佛に白さく、「我此法を疑はず、但將來の衆生の爲に其疑惑を除かんと欲して、

故に斯義を問ひたてまつるのみ。」佛、阿難に告げたまはく、「無量壽佛の威神光明最尊第一なり。諸佛の光明も能く及ばざる所なり。或は佛光有り、百佛世界、或は千佛世界を照す。要を取りて之を言はば、乃ち東方恆沙の佛刹を照す、南西北方、四維上下も亦復是の如し、或は佛光有り、七尺を照し、或は一由旬、二三四五由旬を照す、是の如く轉倍して乃至一佛刹土を照す。是故に無量壽佛をば無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、徼王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、

智慧光佛、不斷光佛、離思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號したてまつる。其れ衆生有つて斯光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟なり、歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦の處に在つて、此光明を見たてまつれば、皆休息を得て復苦惱無し、壽終の後皆解脫を蒙る。無量壽佛の光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土に聞えずといふこと莫し。

【斯光等】第三十三箇光柔軟の顯成

【其れ衆生ありて等】光明を見る者の利益

【無量壽佛の光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土に聞えずといふこと莫し。】

【其れ衆生ありて等】光明を見る者の利益

【解脱を蒙る】 往生を得ること。
【無量壽佛の等】 第十七諸佛稱揚の願成。

【二三】 彌陀の壽命無量を明す、第十三壽命無量の願成【悉く聲聞緣覺を等】 二乗の解脫分は人中三洲と定むるを以て今人身をえしめと云ふなり【聲聞菩薩天人の等】 徒衆の長壽を明す、第十五着屬長壽の願成。
【聲聞菩薩其數等】 第十四聲聞無數の願成。
【神智洞達】 第三十智見無窮の願成【威力自在】 第六得命剛身の願成【二】 徒衆無數を明す、第十四願成の細説なり。
【初會】 彌陀成道して最初の説法。

佛説無量壽經卷上

但我今其光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛、聲聞緣覺、諸の菩薩衆も咸く共に歎譽したまふこと、亦復是の如し。若し衆生有つて、其光明の威神功徳を聞いて、日夜に稱説して至心不斷なれば、意の所願に隨つて、其國に生ずることを得て、諸の菩薩、聲聞大衆の爲に共に歎譽して其功徳を稱せられん。其然して後佛道を得る時に至つて、普く十方の諸佛菩薩の爲に其光明を歎ぜられんこと亦今の如くならん。佛の言はく、「我無量壽佛の光明威神の巍巍殊妙なるを説くこと、晝夜一劫すとも尙未だ盡すこと能はじ。」佛、阿難に語けたまはく、「又無量壽佛の壽命長久にして稱計すべからず。汝寧んぞ知らんや、假使十方世界の無量の衆生をして皆人身を得しめ、悉く聲聞緣覺を成就せしめて、都て共に集會し、禪思一心に其智力を竭して、百千萬劫に於て悉く共に推算して、其壽命の長遠の數を計るとも窮盡して其限極を知ること能はじ。聲聞菩薩、天人の衆の壽命の長短も亦復是の如し、算數譬喩の能く知る所に非ず。又聲聞菩薩其數は量り難し、稱説すべからず、神智洞達にして威力自在なり、能く掌中に於て一切の世界を持せり。」
佛、阿難に語けたまはく、「彼佛の初會の聲聞衆の數稱計すべからず、菩薩も亦然なり。今大目犍連の如き百千萬億無量無數有りて、阿僧祇那由他劫に於て乃至滅度まで悉く共に計校すとも、多少の數を究了すること能はじ。譬へば大海の深廣無量ならんに、假使人有つて其一毛を析きて以て百分と爲し、一分の毛を以て一滴を活取せんが如し。意に於て云何ぞ、其滯る所の者を彼大海に於てするに、何れか多しと爲る所ぞ。阿難、佛に白さく、

【巧曆】算數に長
ぜる曆師の意。

【二四】正宗分第五

段極樂の依報を明
す、初に寶樹莊嚴
【金樹等】純樹を
明す。

【或は三寶等】雜
樹を明す。

【行行相値ひ】行
樹の出入なくよく
揃へるをいふ。

『彼滂る所の水を大海に比するに、多少の量巧曆の算數、言辭譬類の能く知る所に非ず。』
佛阿難に語げたまはく、『日蓮等の如き、百千萬億那由他劫に於て、彼初會の聲聞菩薩を
計りて、知る所の數は猶し一滂の如く、其知らざる所は大海の水の如くならん。』

又其國土には七寶の諸樹、世界に周滿せり。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、碼
碯樹、砮磈樹有り。或は二寶三寶、乃至七寶共に合成せる有り。或は金樹の銀葉華果なる
有り、或は銀樹の金葉華果なる有り、或は瑠璃樹あり玻璃を葉と爲し、華果亦然なり、或
は水精樹あり瑠璃を葉と爲す、華果亦然なり、或は珊瑚樹あり碼碯を葉と爲し、華果亦然
なり、或は碼碯樹あり瑠璃を葉と爲し、華果亦然なり、或は砮磈樹あり衆寶を葉と爲し、
華果亦然なり。或は寶樹有り、紫金を本と爲し、白銀を莖と爲し、瑠璃を枝と爲し、水精

を條と爲し、珊瑚を葉と爲し、碼碯を華と爲し、砮磈を實と爲す、或は寶樹有り、白銀を
本と爲し、瑠璃を莖と爲して水精を枝と爲し、珊瑚を條と爲し、碼碯を葉と爲し、砮磈を
華と爲し、紫金を實と爲す、或は寶樹有り、瑠璃を本と爲し、水精を莖と爲し、珊瑚を枝
と爲し、碼碯を條と爲し、砮磈を葉と爲し、紫金を華と爲し、白金を實と爲す、或は寶樹
有り、水精を本と爲し、珊瑚を莖と爲し、碼碯を枝と爲し、砮磈を條と爲し、紫金を葉と
爲し、白銀を華と爲し、瑠璃を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

璃を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、碼碯を實と爲す、或は寶樹有り、珊瑚を本と爲し、碼碯を莖と爲し、
砮磈を枝と爲し、紫金を條と爲し、白銀を葉と爲し、瑠璃を華と爲し、水精を實と爲す、
或は寶樹有り、碼碯を本と爲し、砮磈を莖と爲し、紫金を枝と爲し、白銀を條と爲し、瑠

【五音】 宮、商、角、徵、羽のこと。

【二五】 以下道樹莊嚴を明す、第二十八見道場樹の顯成なり。

【道場樹】 彌陀が成道の場にある樹

【月光摩尼】 珠寶

中勝光あるを月光摩尼といふ。

【深法忍】 無相生性に達する初地以上上の忍に名くこれ第四十八得三法忍の顯成。

【音響忍】 佛菩薩の德音を聞いてその説法を信解し、更に驚怖することなし、修習し安住する位。

【柔順忍】 寂靜の理に隨順して諸法の平等を觀じ、深く忍可して更に違背することなき位

璃を葉と爲し、水精を華と爲し、珊瑚を實と爲す、或は寶樹有り、碑磔を木と爲し、紫金を葉と爲し、白銀を枝と爲し、瑠璃を條と爲し、水精を葉と爲し、珊瑚を華と爲し、礪磔を實と爲す。此諸の寶樹行相値ひ、華葉相望み、枝枝相準へ、葉葉相向ひ、華華相順ひ、實實相當り、榮色光耀として勝けて視るべからず、清風時に發りて五音の聲を出す、微妙の宮商、自然に相和せり。

又無量壽佛の共道場樹は、高さ四百萬里なり、其本周圍五十由旬なり、枝葉四に布けること二十萬里なり、一切の衆寶自然に合成せり。月光摩尼、持海輪寶衆寶の玉たるを以て而も之を莊嚴せり、條の間に周匝して寶璣珞を垂れたり。百千萬の色種種に異變す、無量の光徹照耀すること極無し、珍妙の寶網其上に羅覆せり、一切の莊嚴應きに隨つて現す。微風徐く動きて、諸の枝葉を吹くに無量の妙法の音聲を演出す、其聲流布して諸佛の國に徧す、其音を聞かん者は、深法忍を得て不退轉に住す。佛道を成ずるに至るまで、

耳根清徹にして苦患に遭はず、目に其色を視、耳に其音を聞き、鼻に其香を知り、舌に其味ひを嘗め、身に其光を觸れ、心に法を以て緣するに、一切皆甚深法忍を得て不退轉に住す。佛道を成ずるに至るまで六根清徹にして、諸の惱患無し。阿難、若し彼國の人天此樹を見るものは、三法忍を得、一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり。此皆無

量壽佛の威神力の故に、本願力の故に、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故なり。佛阿難に告げたまはく、世間の帝王に百千の音樂有り、轉輪聖王より

【六】宮殿、寶池
德水莊嚴を明す。
第三十二願成の細
説なり。

【精舍】寺院のこ
と。

【交露】珠珍交結
したる慢の意。

【蓋曇摩】赤蓮。
【拘陀利】黃蓮。
【分陀利】白蓮と
譯す。

乃至第六天上の伎樂の音聲、展轉して相勝るること、千億萬倍なり、第六天上の萬種の樂の音は、無量壽國の諸の七寶樹の一種の音聲に如ざること千億倍なり、亦自然の萬種の伎樂有り、又其樂の聲法音に非ずといふこと無し。清揚哀亮にして微妙和雅なり、十方世界の音聲の中に最も第一と爲す。

又講堂精舍、宮殿樓觀あり、皆七寶の莊嚴自然の化成なり、復眞珠明月摩尼の衆寶を以て、以て交露と爲し、其上に覆蓋せり。内外左右に諸の浴池有り、或は十山旬、或は二十三十乃至百千山旬にして、縱廣深淺各皆一等なり。八功德水湛然として盈滿せり、清淨香潔にして味ひ甘露の如し。黃金の池には底に白銀の沙あり、白銀の池には底に黃金の沙あり、水精の池には底に琉璃の沙あり、琉璃の池には底に水精の沙あり、珊瑚の池には底に琥珀の沙あり、琥珀の池には底に珊瑚の沙あり、珊瑚の池には底に磤磤の沙あり、磤磤の池には底に磤磤の沙あり、白玉の池には底に紫金の沙あり、紫金の池には底に白玉の沙あり、或は二寶三寶、乃至七寶轉共に合成せり。其池の岸の上に栴檀樹有り、華葉垂れ布きて香氣普く熏す。天の優曇羅華、蓋曇摩華、拘陀利華あり、雜色の光茂しくして水上に彌覆せり。彼諸の菩薩及び聲聞衆、若し寶池に入りて、意に水をして足を洗めしめんと欲せば、水即ち足を洗めん、膝に至らしめんと欲せば、即ち膝に至らん、腰に至らしめんと欲せば、水即ち腰に至らん、頸に至らしめんと欲せば、水即ち頸に至らん、身に灌がしめんと欲せば、自然に身を灌がん、還復せしめんと欲せば、水即ち還復せ

【波は無量等】 第四十六隨意開法の類成。
 【佛聲】 佛徳の讃歎。
 【法聲】 佛法正理を説くこと。
 【僧聲】 大衆の和合を説くこと。
 【空無我】 諸法縁起なるが故に空無我等。
 【無畏不共法】 無畏は四無所畏、不共法は身不失等十八の佛獨特の力なり。
 【通慧】 六通定慧の義。
 【無所作】 無自性の義。
 【不起滅】 實果起滅なき義。
 【灌頂】 等覺の菩薩が妙覺の位に登る時、佛これに灌頂して佛果をえしむ。
 【三途苦難等】 第十六離諸不善の願成。
 【七】 衣服飲食の自在を明す。
 【清淨の色身】 第一

ん。調和冷煖にして、自然に意に随つて、神を開き體を悦ばしめ、心垢を蕩除す、清明激濁にして淨きこと形無きが若し、寶沙映徹して深しとして照さずといふこと無し。微爛廻流して轉相灌注す、安詳として徐く近きて、遅からず疾からず。波は無量自然の妙聲を揚ぐ、其所應に随つて聞かざる者莫し。或は佛聲を聞き、或は法聲を聞き、或は僧聲を聞き、或は寂靜の聲、空無我の聲、大慈悲の聲、波羅蜜の聲、或は十力無畏不共法の聲、諸の通慧の聲、無所作の聲、不起滅の聲、無生忍の聲、乃至甘露灌頂の妙法の聲、是の如き等の聲、其所聞に稱ひて歡喜無量なり。清淨離欲、寂滅眞實の義に隨順し、三寶力無所畏不共の法に隨順し、通慧菩薩聲聞、所行の道に隨順す。三途苦難の名有ること無く但自然快樂の音のみ有り。是故に其國を名けて安樂といふ。

阿難、彼佛の國土の諸の往生せる者は、是の如き清淨の色身、諸の妙音聲、神通功德を具足す。處る所の宮殿衣服飲食、衆の妙華香、莊嚴の具、猶し第六天の自然の物のごとし。若し食せんと欲する時は七寶の盃器自然に前に在り、金銀瑠璃、磲磔碼磔、珊瑚琥珀、明月眞珠是の如きの諸益意に隨つて至り、百味の飲食自然に盈滿す。此食有りとは雖も、實に食する者無し、但色を見香を聞きて、意に食なりと以爲ば自然に飽足す。身心柔軟にして味著する所無し、事已れば化し去り、時至れば復現す。彼佛の國土は、清淨安穩にして微妙快樂なり。無爲泥洹の道に次げり。

其諸の聲聞菩薩天人、智慧高明に神通洞達し、咸同じく一類にして形異狀無し。但餘

二十一具足諸相の願成。

【妙善聲】第三十智辨無窮の願成。

【神通功德】第五宿命已下第十漏盡通までの願成。

【處る所の宮殿】第二十七萬物嚴淨の願成。

【衣服飲食等】第三十八衣服隨念の願成。

【咸同じく等】第四無有好醜の願成

【餘方に因願等】第八天ありと雖も別あるに非ず、但穢土の業を逐ふが故に別あり、又本業に隨つて別を立つるのみ。

【自然虛無の身】無障にして胎生等に非ることをいふ

【二心】事に寄せて顯勝を比較する

【底極斷下】最陋下の義

【二七】欲界諸天も極樂聖衆に比較すべからざるを明す

方に因順するが故に、天人の名有り、顏貌端正にして、世に超えて希有なり、容色微妙にして天に非ず、人に非ず、皆自然虛無の身、無極の體を受く。

佛、阿難に告げたまはく、『譬へば世間の貧窮乏人の帝王の邊に在るが如き、形貌容狀

寧ぞ類すべきや。』阿難、佛に白さく、『假使此人、帝王の邊に在らんに、羸弱醜惡にして、

以て喩へと爲ること無きこと、百千萬億不可計倍なり。然る所以は貧窮乏人は底極斷下に

して、衣は形を蔽さず、食は趣に命を支ふ、飢寒困苦して人理殆ど盡きなんとす。昔前世

に徳本を積ゑず、財を積んで施さず、富有にして益慳み、但唐に得んと欲して、貪求

して厭くこと無く、肯て善を修めず、惡を犯して山のごとくに積みしに坐る。是の如くし

て壽終りぬれば財寶消散す、身を苦めて聚積して、之が爲に憂惱すれども、已に於て益無

く徒らに他の有と爲る。善として怙むべき無く、徳として恃むべき無し、是故に死して惡

趣に墮して、此長苦を受く。罪畢りて出づることを得れども、生れて下賤と爲り、愚鄙麁

極にして、示れば人類に同じ。世間の帝王の人中に獨尊たる所以は、皆宿世積徳の致す所

に由る、慈惠あつて博く施し、仁愛あつて兼ね濟ひ、信を履み善を修めて違諍する所無し。

是を以て壽終れば福應じて善道に昇ることを得、天上に上生して茲福樂を享く。積善の

餘慶あつて、今人と爲ることを得て、適王家に生れて自然に尊貴なり、儀容端正にして衆

に敬事せられ、妙衣珍饈心に隨つて服御す、宿福の追ふ所故に能く此を致す。佛、阿難に告げたまはく、『汝が言是なり、假如ひ帝王の人中の尊貴にして形色端正な

【三〇】資具身に應ずるを明す。

りと雖も、之を轉輪聖王に比するに、甚だ鄙陋なりと爲す、彼乞人の帝王の邊に在るが猶し。轉輪聖王の威相殊妙は天下第一なれども、之を忉利天王に比すれば、又復醜惡にして諭ふることを得ざることを、萬億倍ならん。假令天帝を第六天王に比すれば、百千億倍にして相類せざるなり。設ひ第六天王を無量壽佛國の菩薩聲聞に比せんに、光顏容色相及速とすること、百千萬億不可計倍なり。

佛、阿難に告げたまはく、『無量壽國の其諸の天人、衣服飲食、華香瓔珞、繪蓋幢幡、微妙の音聲、所居の舍宅、宮殿樓閣、其形色に稱うて高下大小あり、或は一寶二寶、乃至無量の衆寶、意の所欲に隨ひ念に應じて即ち至る。又衆寶の妙衣を以て徧く其地に布けり、一切の天人之を踐んで行く。無量の寶網、佛土に彌覆せり、皆金縷眞珠、百千の雜寶、奇妙珍異なるを以て莊嚴交飾せり、四面に周匝して垂るるに寶鈴を以てす、光色晃耀にして盡く嚴麗を極めたり。自然の徳風徐く起りて、微動するに其風調和にして、寒からず暑からず、溫涼柔軟にして、遅からず疾からず、諸の羅網及び衆の寶樹を吹いて、無量の微妙の法音を演發し、萬種の溫雅の徳香を流布す。其聞くこと有らん者は、塵勞垢習自然に起らず、風其身に觸るるに皆快樂を得、譬へ比丘の滅盡三昧を得るが如し。又風華を吹き散じて佛土に徧滿す、色の次第に隨つて雜亂せず、柔軟光澤にして、馨香芬烈せり。足其上を履むに陷下すること四寸なり、足を舉げ已るに隨つて、還復すること故の如し。華用ひ已れば地輒ち開裂す、次を以て化没して、清淨にして遺無し、其時節

【快樂を得】第三十九受樂無染の願成。
【滅盡三昧】一切の心想すべて滅盡して寂靜となる定。
【二】香華敷地、蓮華放光を明す。

【瞻等】瞻は盛明の觀、瞻は華光、煥爛は鮮明なり。
 【六返】此土に準ずれば、晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜なり。

に隨つて、風華を吹き散ず。是の如くすること六返なり。又衆寶の蓮華、世界に周滿せり、一一の寶華に百千億の葉あり、其華の光明無量種の色あり、青色には青光あり、白色には白光あり、玄黄朱紫の光色も亦然なり、瞻、瞻、煥、爛にして、明曜なること日月の如し。一一の華の中より三十六百千億の光を出す、一一の光の中より三十六百千億の佛を出す、身色紫金にして相好殊特なり、一一の諸佛又百千の光明を放つて、普く十方の爲に微妙の法を説きたまふ、是の如きの諸佛各各無量の衆生を、佛の正道に安立せしめたまふ。

佛説無量壽經 卷下

曹魏天竺三藏康僧鑑譯

【一】正宗分第六 悲化を明す。初に名號得生。

【正定の聚】行位退轉することなく必ず涅槃に至るべきもの、今第十一住正定聚の願成。

【十方恒沙の等】第十七諸佛稱揚の願成。

【諸有る衆生等】第十八念佛往生の願成。

【唯五逆と等】逆誘を除くは抑止の説といふ。

【二】以下三輩往生の説。初に上輩これ第十九來迎引接の願成なり。

【三】次に中輩。

佛、阿難に告げたまはく、『其れ衆生有つて彼國に生ずる者は、皆悉く正定の聚に住す。所以は何ん。彼佛國の中には諸の邪聚及び不定聚無し。十方恒沙の諸佛如来、皆共に無量壽佛の威神功德の不可思議なることを讚歎したまふ。諸有る衆生、其名號を聞いて、信心歡喜して乃至一念、至心に廻向して彼國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得て不退轉に住す。唯五逆と正法を誹謗するとを除く。』

佛、阿難に告げたまはく、『十方世界の諸天人、其れ至心有つて彼國に生ぜんと願するに、凡そ三輩有り。其上輩の者は、家を捨てて、沙門を作り、菩提心を發し、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して、彼國に生ぜんと願す。此等の衆生、壽終の時臨んで、無量壽佛諸の大衆と與に、其人の前に現じたまふ。即ち彼佛に隨つて其國に往生し、便ち七寶華の中に於て自然に化生す、不退轉に住して智慧勇猛、神通自在なり。是故に阿難、其れ衆生有つて今世に於て無量壽佛を見たてまつらんと欲せば、應に無上菩提の心を發し、功德を修行して、彼國に生ぜんと願すべし。』

佛、阿難に告げたまはく、『其中輩の者は、十方世界の諸天人、其れ身心有つて彼國に

【瘡疥】八戒と齋
總じて身心をつ
しむこと。

【四】次に下輩。

【業法】彌陀の勝
法功德。

【五】十方聖者の
來生を明す、第十
七願成の細説。

生ぜんと願せば、行じて沙門と作り、大いに功德を修すること能はずと雖も、當に無上菩提の心を發して、一向に専ら無量壽佛を念すべし。多少に善を修め、瘡疥を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繪を懸け、燈を然し、華を散し、香を燒き、此を以て廻向して彼國に生ぜんと願すれば、其人終りに臨んで、無量壽佛其身を化現したまふ、光明、相好具に眞佛の如し、諸の大衆と與に其人の前に現じたまふ。即ち化佛に隨つて其國に往生す、不退轉に住して、功德智慧次で上輩の者の如し。

佛、阿難に告げたまはく、其下輩の者は、十方世界の諸天人、其れ至心有つて彼國に生ぜんに欲せんに、假使諸の功德を作すこと能はずとも、當に無上菩提の心を發して、一向に意を専らにして乃至十念、無量壽佛を念じて其國に生ぜんと願すべし。若し深法を聞いて歡喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念彼佛を念じて、至誠心を以て其國に生ぜんと願すれば、此人臨終に夢のごとくに、彼佛を見たてまつつて亦往生を得。功德智慧は次で中輩の者の如し。

佛、阿難に告げたまはく、「無量壽佛の威神、極り無し、十方世界の無量無邊不可思議の諸佛如來、稱歎したまはずといふこと莫し、彼東方恆沙の佛國に於て、無量無數の諸の菩薩衆、皆悉く無量壽佛の所に往詣して、及び諸の菩薩聲聞大衆を恭敬し供養して、經法を聽受し、道化を宣布す。南西北方、四維上下も亦復是の如し。

爾時、世尊頌を説いて曰はく、

【東方諸佛の國等】
以下頌もて別して釋尊を稱讚す。初十五頌は勝聖共生に就て。
【無量覺】 阿彌陀佛のこと。

【深法門】 涅槃なり。

【頂より入る】 得佛の授記に際しては光頂より入るなり。

東方の諸佛の國、其數恆沙の如し
彼土の菩薩衆、往いて無量覺に覲えたてまつる
南西北四維、上下も亦復然なり
彼土の菩薩衆、往いて無量覺に覲えたてまつる
一切の諸の菩薩、各天の妙華と
寶香と無價の衣とを齎て、無量覺を供養す
威然として天樂を奏し、和雅の音を暢發し
最勝尊を歌敷して、無量覺を供養す
神通と慧とを究達して、深法門に遊入す
功德藏を具足して、妙智等倫無し
慧日世間を照して、生死の雲を消除したまふ
恭敬して遠ること三匝して、無上尊を稽首したてまつる
彼嚴淨の土を見るに、微妙にして思議し難し
因つて無上心を發す、願くは我國も亦然ならんと
時に應じて無量尊、容を動かして欣笑を發し
口より無數の光を出して、徧く十方の國を照したまふ
光を廻らして身を圍繞すること、三匝して頂より入る

一切の天人衆、踊躍して皆歡喜す

大士觀世音、服を整へて稽首して問ひたてまつる

佛に白さく何に緣つてか笑みたまふ、唯然り願くは意を説きたまへ

梵聲は雷震の猶く、八音妙響を暢べたまふ

當に菩薩に記を授くべし、今説かん仁諦に聽け

十方より來れる正士、我悉く彼願を知れり

嚴淨の土を志求す、決と受けて當に作佛すべし

一切の法は猶し、夢と幻と響との如しと覺了して

諸の妙願を満足して、必ず是の如き刹を成ぜん

法は電と影との如しと知つて、菩薩の道を究竟す

諸の功德の本を具するをもつて、決と受けて當に作佛すべし

諸法の性は、一切空無我なりと通達して

専ら淨佛の土を求む、必ず是の如き刹を成ぜん

諸佛菩薩に告げて、安養の佛に觀えしむ

法を聞いて樂受して行じて、疾く清淨の處を得よ

彼嚴淨の國に至らば、便ち速かに神通を得ん

必ず無量尊に於て、記を受けて等覺を成すべし

【十方より來れる等】以下來聖の受記を明す。

【決】受記の決定なり。

【夢と等】無實なれば如夢、而も有の故に如幻なり。

【諸佛菩薩に等】以下十五頌は諸佛の勸證なり。

【名を聞いて等】
第四十七得不退轉
の顯成。

【聖心】彌陀果上
の智慧をいふ。
【生れてより盲ひ
等】聖心の究め難
きを喻ふ。

其佛の本願の力、名を聞いて往生せんと欲すれば
皆彼國に到つて、自ら不退轉に至る

菩薩至願を興すらく、願くは己國も異なること無からんと
普く一切を度し、名顯れて十方に達せんと念す

億の如來に奉事するに、飛化して諸刹に徧し
恭敬し歡喜し去つて、還つて安養國に到る

若し人善本無ければ、此經を聞くことを得ず
清淨にして戒を有てる者の、乃ち正法を聞くことを獲

曾て更に世尊を見たてまつるもの、則ち能く此事を信す
謙敬して聞いて奉行し、踊躍して大いに歡喜す

憍慢と弊と懈怠とは、以て此法を信じ難し
宿世に諸佛を見たてまつるもの、樂つて是の如きの教を聽く

聲聞 或は菩薩、能く聖心を究むること莫し
譬へば生れてより盲ひたるもの、行つて人を引導せんと欲するが如し

如來の智慧海は、深廣にして涯底無し
二乗の測る所に非ず、唯佛のみ獨明了なり

假使一切の人、具足して皆道を得

【本生】 人法は畢竟空なり。

【信慧】 聞きて疑はざるは信、對境に向つて正邪等の判別を下すは慧。

【六】 寔貶得失もて凡に勸む。

【彼國の菩薩等】

第二十二必至補處の顯成。

【其れ衆生等】 第二十一。具足諸相の顯成。

【智慧成滿等】 第三十智辯無窮の顯成。

【要妙を究暢等】

第二十五說一切智の顯成。

【一忍】

音響忍に柔順忍。

淨慧あつて本空を知り、億劫に佛智を思はんに力を窮め講説を極めて、壽を盡すとも猶知らじ。佛慧は邊際無し、是の如く清淨なることを致す。壽命甚大得難く、佛世亦値ひ難し。人信慧有ること難し、若し聞かば精進に求めよ。法を聞いて能く忘れず、見ては敬ひ得ては大いに慶ぶべし。則ち我善き親友なり、是故に當に意を發すべし。説ひ世界に滿たらん火をも、必ず過つて要す法を聞け。會す當に佛道を成じて、廣く生死の流を濟ふべし。佛、阿難に告げたまはく、『彼國の菩薩皆當に一生補處を究竟すべし。其本願有つて衆生の爲の故に、弘誓の功德を以て自ら莊嚴して普く一切衆生を度脱せんと欲せんをば除く。阿難、彼佛國の中の諸の聲聞衆は、身光一尋なり。菩薩の光明は百由旬を照す。二菩薩有り、最尊第一なり、威神の光明徧く三千大千世界を照す。一、阿難、佛に白さく、『彼二菩薩、其號云何ぞ。』佛の言はく、『一をば觀世音と名け、二をば大勢至と名く。是二菩薩此國土に於て、菩薩の行を修し、命終轉化して彼佛國に生ず。阿難、其れ衆生有つて彼國に生ずる者は、皆悉く三十二相を具足す、智慧成滿して深く諸法を入り、要妙を究暢し、神通無礙にして諸根明利なり。其鈍根の者は二忍を成就し、其利根の者は不可計の無生法

【彼菩薩等】第二不更惡趣の願成。

【七】佛を供養する意の如きを明す第二十三供養諸佛の願成なり。

【十方無量の等】第九神境智通の願成。

【心の所念等】第二十四俱具如意の願成。

【八】聞法得道を明す。
【班宣】あまねく説くなり。

【開避】あけてわたす。
【無怡】やはらぎよろこぶこと。

忍を得。又彼菩薩乃至成佛まで惡趣に更らず、神通自在にして、常に宿命を識る。他方の五濁惡世に生じて、示現して彼に同ずること、我國の如くならんをば除く。

佛、阿難に告げたまはく、「彼國の菩薩、佛の威神を承けて、一食の頃に十方無量の世界に往詣して、諸佛世尊を恭敬し供養す。心の所念に隨つて、華香伎樂、繪蓋幢幡、無數無量の供養の具、自然に化生して念に應じて即ち至る。珍妙殊特にして世の所有に非ず。輒ち以て諸佛菩薩、聲聞大衆に奉散す。虛空の中に在つて化して華蓋と成る、光色昱爍として、香氣普く薰ず。其華周圍四百里なる者あり。是の如く轉倍して、乃ち三千大千世界を覆ふ。其前後に隨つて次で以て化没す。其諸の菩薩僉然として欣悅す。虛空の中に於て共に天樂を奏し、微妙の音を以て佛徳を歌歎し、經法を聽受して、歡喜すること無量なり。佛を供養し已つて、未だ食せざるの前に忽然として輕舉して其本國に還る。」
佛、阿難に告げたまはく、「無量壽佛諸の聲聞菩薩、大衆の爲に法を班宣したまふ時、都て悉く七寶の講堂に集會して、廣く道教を宣べ、妙法を演暢して、歡喜し心解し得道せずといふこと莫し。即時に四方より自然に風起つて、普く寶樹を吹いて、五音の聲を出し、無量の妙華を雨らして、風に隨つて周徧す。自然の供養、是の如く絶えず、一切の諸天皆天上百千の華香、萬種の伎樂を齎て、其佛及び諸の菩薩、聲聞大衆を供養し、普く華香を散じ、諸の音樂を奏し、前後に來往して更相開避す、斯時に當つて無怡快樂勝げて言ふべからず。」

【九】心行究竟、我所の心無く等

我所とは我に對屬し我によりて執著せらるる事物、離見の故に我所心なく、離愛の故に染著の心なし、第十

逆得漏盡の顯成、【遮蓋】遮は親、莫は財なり、離蓋を離れて清淨なり、【厭念の心無し】善を求めて息まざるが故に

【等心】行として修むるなきなり、【淨心】無下足の故、【寂心】無退屈の故

【定心】諸の散亂を離るるが故、【愛法等】開慧愛樂の故に愛法、思慧味著の故に樂法、修慧調神の故に喜法なり

【諸の煩惱を滅し等】離念の故に煩惱を滅し、業盡の故に離念の心を離

佛、阿羅に語けたまはく、彼佛國に生ずる諸の菩薩等、講說すべき所あらば常に正法を宣ぶ、智慧に隨順して違ふこと無く、失ること無し、其國土の有ゆる萬物に於て我所の心無く染著の心無し、去來進止情に係る所無し、意に隨つて自在にして適莫する所無し、彼も無く我も無く、競ふこと無く訟ふこと無し、諸の衆生に於て大慈悲饒益の心を得たり、柔輒に調伏して忿恨の心無し、離蓋清淨にして厭念の心無し、等心勝心、深心定心、愛法樂法、喜法の心のみあり、諸の煩惱を滅して惡趣の心を離れ、一切菩薩の所行を究竟せり、無量の功德を具足し成就す、深禪定と諸の通と明と慧とを得て、志を七覺に遊ばしめ、心を佛法に修す、肉眼清徹にして分子ならずといふこと塵く、天眼通達して無量無限なり、法眼觀察して諸道を究竟す、慧眼眞を見て能く彼岸に度る、佛眼具足して法性を覺了す、無礙智を以て人の爲に演說す、等しく三界は空なり無所有なりと觀じて、佛法を志求し、諸の辯才を具して、衆生の煩惱の患を除滅す、如來より生じて法の如如を解し、善く智滅音聲の方便を知つて、世語を欣ばず、正論に樂在す、諸の善本を修して、志佛道を崇む、一切の法は皆悉く寂滅なりと知つて、生身と煩惱と、二餘俱に盡せり、甚深の法を聞いて心に疑懼せず、常に能く修行す、其大悲は深遠微妙にして、覆藏せずといふこと塵し、一乘を究竟して彼岸に至る、疑澗を決斷して慧心に由つて出づ、佛の教法に於て該羅して外無し、智慧は大海の如く、三昧は山王の如し、慧光明淨にして日月に超踰せり、清白の法具足し、圓滿すること猶し雪山の如し、諸の功德を照すこと、等一にして淨き

る。

【深禪定等】禪と

は四禪、定は四空

通は六通、明は三

明、慧は三慧なり

【七寶】擇法、精

進、喜、輕安、定、

捨、念。

【肉眼】……彼岸に

度る】總じて四眼

は佛の得にして觀

境同盡の故に具足

といふ

【佛眼】別して一

切種智を體とし法

として照らさざる

なき故具足す。

【無礙辨を以て等

四無礙辨を以て説

法するなり。

【等しく三界は等】

諸法緣生の故に欲

等の三界は一界と

して空ならざるな

し、これを等觀と

いふ。

【佛法を志求す】

菩提行を欣ぶなり

【善法より生じ】

菩薩の解行を獲る

は佛日よりす。

が故に。猶し大地の如し、淨穢好惡異心無きが故に。猶し淨水の如し、塵勞諸の垢染を

洗除するが故に。猶し火王の如し、一切の煩惱の薪を燒滅するが故に。猶し大風の如し、

諸の世を行くに障礙無きが故に。猶し虚空の如し、一切の有に於て所著無きが故に。

猶し蓮華の如し、諸の世間に於て汚染無きが故に。猶し大乘の如し、群萌を運載して生死

を出するが故に。猶し重雲の如し、大法雷を震つて未覺を覺するが故に。猶し大雨の如し、

甘露の法を雨らして衆生を潤すが故に。金剛山の如し、衆魔外道も動ずること能はざるが

故に。梵天王の如し、諸の善法に於て最上首なるが故に。尼拘類樹の如し、普く一切を覆

ふが故に。優曇蓋華の如し、希有にして遇ひ難きが故に。金翅鳥の如し、外道を威伏する

が故に。衆の遊禽の如し、藏積する所無きが故に。猶し牛王の如し、能く勝もの無きが故

に。猶し象王の如し、善く調伏するが故に。師子王の如し、畏るる所無きが故に。曠きこ

と虚空の如し、大慈等しきが故に、嫉心を摧滅して、勝れたるを忌まざるが故に、専ら法

を樂求して心に厭足無し、常に廣説を欲して志疲倦無し。法鼓を撃き、法幢を建て、慧

目を耀かし、癡闇を除き、六和敬を修す。常に法施を行じ、志勇精進にして心退弱せず、

世の燈明と爲つて最勝の福田なり。常に導師と爲つて等しくして憎愛無し。唯正道を樂つ

て餘の欣成無し、諸の欲刺を抜いて以て群生を安んず。功慧殊勝にして、尊敬せられすと

いふこと莫し。三垢の障を滅して諸の神通に遊ぶ。因力、緣力、意力、願力、方便の力、

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施戒忍辱、精進禪定、智慧の力、正念、正觀諸

有なりと如實に知
見せる理智を如如
といふ。

【習滅】 習善滅惡
【音聲の方便】 眞
に衆相を絶するも
四諦を説くは唯教
施設の故にいふ。

【世語を欣ばす等】
聖教に由つて善解
をうるが故に。

【生身等】 生身は
苦、煩惱は惑、二
餘とはこの二の餘
残をいふ。

【慧心に由つて等】
眞解發中の故。之
に達して餘なけれ
ば能く佛教を該ぬ
るなり。

【諸の功德を等以
下】 喻に寄せて徳
を顯はすなり。

【異心無き】 平等
心。

【塵勞】 思惑煩惱
【梵天王】 娑婆の
主。

【六和敬】 同戒、
同見、同行、身慈、
語慈、意慈の六和
敬。

【世の燈明等】 能

の通明の力、如法に諸の衆生を調伏する力、是の如き等の力一切具足せり。身色相好功徳辯才、具足し莊嚴して與に等しき者無し。無量の諸佛を恭敬し、供養して、常に諸佛の爲に共に稱讃せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟し、空無相無願三昧と、不生不滅と諸の三昧門を修して、聲聞緣覺の地を遠離せり。阿難、彼諸の菩薩は是の如きの無量の功徳を成就せり。我唯汝が爲に略して之を説くのみ、若し廣く説かば百千萬劫にも窮盡すること能はじ。

佛、彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく、

「無量壽國の聲聞菩薩の功徳智慧、稱説すべからず。又其國土微妙安樂にして清淨なること此の若し。何ぞ力めて善を爲さざる、道を怠れば自然なり、著にして上下無し、洞達して邊際無し、宜しく各勤精進して努力て自ら之を求むべし。必ず超絶し去つて、安養國に往生することを得れば、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉ぢ、道に昇ること窮極無し、往き易うして人無し、其國逆遠せず、自然の牽く所なり、何ぞ世事を棄てて勤行して道徳を求めざる。極長生を獲て壽樂極有ること無かるべし。然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍ふ、此劇惡極苦の中に於て、勤身營務して以て自ら給濟す、尊と無く卑と無く、貧と無く富と無く、少長男女共に錢財を憂ふること有無同く然り、憂思適に等し、屏營として愁苦して念を累ね慮りを積む、心の爲に走使せられて安き時有ること無し。田有れば田を憂へ、宅有れば宅を憂へ、牛馬六畜、奴婢錢財、衣食什物復共に之を憂ふ、思ひを重ね息を累ねて憂念愁怖す。横に非常の水火

く物解を生ずるが故に。
 【最勝の福田】人の善を生ずるが故に。
 【導師】慧を以て開化するが故に。
 【欣戚】すききらひ。
 【欲刺】五欲の人を惱ますこと針刺の如きをいふ。
 【群生を等】化して過を離れしむるが故に。
 【身色】第三の顯成。
 【相好功德】第二十一の顯成。
 【辯才具足等】第二十九、三十の顯成。
 【二〇】勸進往生を明す。
 【道】出離の道。
 【著にして等】唯能く道を念じ徳を行ずれば著にして貴賤の別なく皆往生をうるが故なり。
 【五惡趣を徼り】若し淨土に生ぜば五道頓に捨する故に横截といふ。

盜賊、怨家債主の爲に焚漂し劫奪せられて、消散し磨滅す。憂毒怙怙として解くる時、有ること無し、憤りを心中に結んで憂惱を離れず、心堅く心固りして適に縱捨すること無し、或は摧碎に坐つて身亡び、命終ぬれば之を棄捐して去る、誰の隨ふ者無し、尊貴豪富も亦斯患有り、憂苦萬端にして、勤苦すること此の如し、衆の寒熱を結んで、痛と共に居す。貧窮下劣は困乏にして常に無し、田無ければ亦憂へて田有らんことを欲し、宅無ければ亦憂へて宅有らんことを欲す、牛馬六畜、奴婢錢財、衣食什物無ければ亦憂へて之有らんことを欲す。適一有れば復一を少き、是有れば是を少く、齊等有らんことを思ふ、適欲して具に有れば便ち復糜散す。是の如く憂苦して、常に復求索すべし。時に得ること能はず、思想して益無し、身心俱に勞して坐起安からず、憂念相隨つて勤苦すること此の如し、亦衆の寒熱を結んで痛と共に居す。或時は之に坐つて身を終へ命を天らす、背て善を爲し道を行ひ徳に進まず、壽終り身死して、當に獨り遠く去るべし、趣向する所有れども、善惡の道能く知るもの莫し。世間の人民、父子兄弟、夫婦家室、中外の親屬當に相敬愛して相憎嫉すること無く、有無相通じて貪惜を得ること無く、言色常に和して相違戻すること莫かるべし。或時は心諍うて悲怒する所有り、今世の恨の意微しく相憎嫉すれば、後世に轉劇しうして大怨と成るに至る。所以は何ん。世間の事更に相患害す、即時に急に相破すべからずと雖も、然も毒を含み怒りを畜へ、憤りを精神に結んで、自然に剋讖して相離るることを得ず、皆當に對生して更ひに相報復すべし。人世間愛欲の中に在つて、

【住き易く等】修

因即住の故に易往

修因往生者妙故に

無人なり。修因し

て生を求むれば終

に違逆せざれば逆

違せず、功用を假

らずして自然に招

致すれば自然の等

といふなり。

【極長生】出離道

徳よりえし結果。

【一あれば等】田

あるも宅を少くの

類、田あるも足ら

ざるは有是少是な

り

【精神】種子識。

【宿豫嚴に等】宿

世に善惡の業を宿

修せしに由り、苦

樂の報を嚴然とし

て待つなり。

【竊竊等】中有の

時を竊竊、生有の

時を冥冥といふ。

【此れに坐る等】

正信なきを以て専

ら邪見に執すれば

即ち失ふなり。

【轉相ひ承愛等】

世出善惡の因果皆

知る能はざるなり

獨り生じ獨り死し獨り來る、行を當うて苦樂の地に至り趣く、身自之を當く、代る者有る

こと無し、善惡變化して殃福處を異にし、宿豫嚴かに待つ、當に獨り趣入すべし。遠く他

所に到りぬれば能く見るもの莫し、善惡自然にして行を追うて生ずる所なり、竊竊冥冥と

して、別離すること久長なり、道路同じからざれば會見期無し、甚た難く甚だ難し、復相

値ふことを得んや。何ぞ衆事を棄てて、各強健の時に曼んで努めて善を勤修し、精進に度

世を願ぜざる。極長生を得べし、如何が道を求めざる、安んぞ待つべき所ぞ、何の樂みを

か欲するや。是の如き世人善を作して善を得、道を爲して道を得ることを信ぜず、人死し

て更に生じ、惠施して福を得ることを信ぜず、善惡の事都て之を信ぜず、之を然らずと謂

うて終に是すること有ること無し。但此に坐るが故に且自ら之を見る、更ひに相瞻視して

先後同く然り、轉相承愛するに父教令を餘す、先人祖父素より善を爲さず、道徳を識ら

ず、身愚に神闇く、心塞り意閉ちて、死生の趣善惡の道自ら見ること能はず、語る者有

ること無し、吉凶禍福競うて各作れども、一として怪しむこと無し。生死の常の道、轉

相嗣立す、或は父子を哭し、或は子女を哭す、兄弟夫婦更に相哭泣す、顛倒上下無常の根

本なり。皆當に過ぎ去るべし、常に保つべからず、教語開導すれども之を信する者は少し、

是を以て生死の流轉休止有ること無し。此の如きの人瞶冥抵突して經法を信ぜず、心に遠

慮無うして各の快意せんと欲す、愛欲に癡惑せられて道徳に達らず、瞋怒に迷没して財

色を貪狼す、之に坐つて道を得ず、當に惡趣の苦に更りて、生死窮り已むこと無かるべし。

【顛倒上下等】五道相錯して或は善趣に昇り或は惡趣に墮すなり。

【自然の非惡等】作惡の人宿罪の力を自然に招集し、非法惡緣隨つて之に與するなり。
【恚に所爲を等】作惡自在にして懼るなきなり。
【二】人に修捨を勸む。
【世間の事】三毒のこと。
【道を得ず】世人この三毒の事の故に眞に歸することをえず道を去ること遠きなり。

哀なるかな、甚だ傷むべし。或時は室家父子、兄弟夫婦一は死し一は生じて更ひに相哀慙し、恩愛思慕して憂念結縛し、心意痛苦して迭に相顧戀す、目を窺め歳を卒へて、解け已むこと有ること無し。道徳を教誨すれども心聞明せず、恩好を思想して情欲を離れず、昏瞶閉塞して愚惑に覆はる。深く思ひ熟計つて、心自端正にして專精に道を行じ、世事を決斷すること能はず、便旋して竟りに至る。年壽終り盡くれども道を得ること能はず、奈何ともすべきこと無し、總猥慣擾して皆愛欲を貪る。道に惑へる者は衆く、之を悟る者は寡し。世間忽忽として悻頼すべきこと無し、尊卑上下、貧富貴賤勤苦忽務して、各殺毒を懷く。惡氣窳冥にして妄りに事を興さんとす、天地に違逆し、人心に従はず、自然の非惡先隨つて之に與す、恚に所爲を聽して、其罪の極りを待つ。其壽未だ盡きざるに、便頓之を奪ひて惡道に下し入れて、累世に勤苦せしむ、其中に展轉して數千億劫出期有ること無し、痛み言ふべからず、甚だ哀慙すべし。

佛、彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく、「我今汝に語る。世間の事、入是を用ての故に、坐りて道を得ず。當に熟思ひ計つて、衆惡を遠離し、其善き者を探んで勤めて之を行すべし。愛欲榮華常に保つべからず、皆當に別離すべし。樂しむべき者無し、佛の在世に曼んで當に勤精進すべし。其れ至心有つて安樂國に生ぜんと願せん者は、智慧明達に功德殊勝なることを得べし。心の所欲に隨つて經戒に虧負して、人の後に在ることを得ること勿れ。儼し疑意有つて經を解せずんば具に佛に問ふべし、當に爲に之を説くべし。」彌勒菩薩

【貫心に之を思ふ】 通心に之を思ふに世人實に三毒の事に隨つて道をえざること佛の所説の如し。

【觸動の類】 衆生の類。

【八方上下等】 横に十方に達する故に八方上下、豎に三世に通ずるが故に去來今なり。

【謙苦】 へりくだつてする苦行。

【闍入泥洹】 化物獲成なり。

【威制消化】 威徳もて剛強の衆生を制御し聖化に歸從せしむるをいふ。

【重ねて修捨を勸む】 重ねて修捨を勸む。

【天下久々にして等】 彌勒成佛の時を標す。

【諸の疑網等】 煩悩を離れしめ、惡業を離れしむるなり。

【三界に遊歩し】 天上人間唯佛獨尊の故。

【貫心に之を思ふ】 通心に之を思ふに世人實に三毒の事に隨つて道をえざること佛の所説の如し。

長跪して白して言さく、「佛よ威神尊重にして所説快善なり、佛の經語を聽きたてまつつて、貫心に之を思ふに、世人實に剛なり、佛の言ふ所の如し。今佛慈悲をもて大道を顯示したまふに、耳目開明にして長く度脱を得たり、佛の所説を聞ききたてまつつて歡喜せずといふこと莫し、諸天人民觸動の類も皆慈恩を蒙りて憂苦を解脫す。佛語の教誡甚だ深く甚だ善し、智慧明見にして、八方上下去來今の事實暢したまはずといふこと莫し。今我衆等度脱を得ることを蒙る所以は、皆佛の前世に道を求めたまひし時、謙苦せしが致す所なり。恩徳普く覆ひて福祿巍巍たり、光明徹照して空に達すること極り無し、泥洹に闍入し教授典攬し、威制をもて消化して十方を感動せしめたまふこと無窮無極なり。佛は法王爲るをもて尊きこと衆聖に超えたまへり。普く一切天人の師と爲つて、心の所願に隨つて皆道を得せしめたまふ。今佛に値ひたてまつることを得、復無量壽佛の名を聞ききたてまつつて、歡喜せずといふこと靡く、心開明することを得たり。」

佛、彌勒菩薩に告げたまはく、「汝が言是なり、若し佛を恭敬すること有る者は實に大善なり。天下久々にして、乃ち復佛有す。今我此世に於て作佛して、經法を演說し道教を宣布して、諸の疑網を斷ち、愛欲の本を拔き衆惡の源を杜ぐ、三界に遊歩して拘礙する所無し、典攬の智慧は衆道の要なり、綱維を執持して昭然分明なり、五趣を開示し木度の者を度し、生死泥洹の道を決正す。彌勒當に知るべし、汝無數劫より來菩薩の行を修して、衆生を度せんと欲すること其れ已に久遠なり、汝に従つて道を得、泥洹に至るもの數を

【典攪の智健】よく經典を簡が、衆義を要攪するなり
【綱維】猶綱紀の屬、網戒御衆の故に執持といふ。
【照然分明】顯正以て邪を簡ぶ故。
【五趣を開示等】廣く群品を化して苦海を越えしむなり。
【我れ汝を助けて等】久遠の因によりて值佛聞法するは慶喜すべし。
【惡露】老病者の出す不淨物。
【邊地】佛智を疑ふもの生ずるところ。

【三】以下五惡段三毒所起の五惡を捨てしむることを明す。

【五痛】現に王法に轉せられ牢獄等に入り身厄難に遭

稱るべからず。汝及び十方の諸天人民、一切の四衆、永劫より已來五道に展轉して憂畏勤苦すること共に言ふべからず、乃至今世まで生死絶えず、例と相値りて經法を聽受し、又復無量壽佛を聞くことを得たり。快いかな、甚だ善し。吾汝を助けて喜ばしむ。汝、今亦自ら生死老病の痛苦を厭ふべし、惡露不淨にして樂しむべき者無し、宜く自ら決斷すべし。身を端し行ひを正しくして益、諸善を作し、己れを修め體を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信にして表裏相應すべし。人能く自ら度して轉、相拯濟し、精明に求願して善本を積累せば、一世の勤苦は須臾の間なりと雖も、後には無量壽佛の國に生じて快樂極無し、長く道徳と合明し、永く生死の根本を抜き、復貪患愚癡苦惱の患へ無からん。壽は一劫百劫、千萬億劫ならんと欲せば、自在に意に隨ひて皆之を得べし。無爲自然にして泥洹の道に次げり。汝等宜く各の精進して心の所願を求むべし。疑惑し中悔して、自ら過咎を爲すことを得ること無かれ。彼邊地の七寶の宮殿に生ずれば五百歳の中に諸の厄を受く。彌勒、佛に白して言さく、『佛の重誨を受けたり、專精に修學して教への如く奉行して敢て疑ふこと有らじ。』

佛、彌勒に告げたまはく、『汝等能く此世に於て、端心正意にして衆惡を作さざるを遮だ至徳と爲す、十方世界最も倫匹無し。所以は何ん、諸佛國土の天人の類は自然に善を作して大いに惡を爲さず、開化すべきこと易し。今我此世間に於て作佛して、五惡五痛五燒の中に處すること最も劇苦なりと爲す。群生を教化して五惡を捨てしめ、五痛を去らしめ、

ふ等。これ過去世の果報。

【五燒】來世に受くる三途の果報。

【五善】五惡を防ぐの戒。

【四】第一惡。殺生を釋す。

【三】「起」せむし。

【不逮】事に觸れ人後にあり。

五燒を離れしめ、其意を消化して五善を持ちして、其福德度世長壽泥洹の道を獲しむ。佛の言はく、「何等か五惡何等か五痛何等か五燒なる。何等か五惡を消化し五善を持ちて、其福

徳度世長壽泥洹の道を獲せしむ。」

佛の言はく、「其一惡とは、諸天人民蠕動の類、衆惡を爲さんと欲す、皆然らずといふ

こと莫し。強き者は弱きを伏し、轉相剋賊し、殘害殺戮して迭ひに相吞噬す、善を修する

ことを知らず、惡逆無道なり、後に殃罰を受けて、自然に趣向す、神明記識して犯せる者

を赦さず。故に貧窮下賤、乞匄孤獨、聾盲瘖瘂、愚癡弊惡なるもの有り、疋狂不逮の屬有

るに至る。又尊貴豪富、高才明達なるもの有り、皆宿世の慈善修善、積徳の致す所に由

る。世に當の道の王法の牢獄有れども、肯て畏れ愼まず、惡を爲し罪に入りて、其殃罰を

受く、解脫を求め望めども、免れ出づることを得難し。世間に此を、目前に見る事有り。

壽終りて後世に尤だ深く尤だ劇し。其幽冥に入りて生を轉じて身を受く、譬へば王法の痛

苦極刑の如し。故に自然の三塗、無量之苦惱有り、其身を轉賢し形を改め道を易ふ、受く

る所の壽命、或は長く、或は短し、魂神精識自然に之に趣く、當に獨り値ひ向ひ相從ひて

共に生ずべし、更相に報復して絶え已むこと有ること無し、殃惡未盡きざれば相離るること

とを得ず、其中に展轉して出期有ること無し。解脫を得がたし、痛み言ふべからず。天地

の間に自然に是有り、即時に卒暴に應至せずとも善惡の道會す當に之に歸すべし。是を一

大惡一痛一燒と爲す。勤苦することは是の如し、譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能

【一五】第二惡、盜を釋す。
 【義理無く等】更に相に盜竊する故に義理なし。
 【心口各異にして】心に欲あるも口に足るといふの類。
 【踐度能行等】君意を伺ひ便候己に厚くせんとす。

く中に於て、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、獨り諸善を作して衆惡を爲さざれば、身獨り度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲。是を一大善と爲す。」
 佛の言はく、『其二惡とは、世間の人民、父子兄弟、室家夫婦都て義理無く法度に順ぜず。奢姪嬌縱にして各快意せんと欲す、心に任せて自ら恣にし、更相に欺惑し、心口各異にして言念實無し、佞諂不忠にして言を巧みにして諛媚媚び、賢を嫉み善を誇りて怨枉に陥し入る。主上明ならずして臣下を任用す、臣下自在にして機偽多端なり、踐度能行して其形勢を知る。位に在りて正しからざれば、其が爲に欺かる、妄に忠良を損じて天心に當らず、臣は其君を欺き、子は其父を欺く、兄弟夫婦、中外の知識更相に欺誑す。各貪欲嗔悲愚癡を懷きて、自ら己れを厚くせんと欲して多く有らんことを欲食す。尊卑上下心俱に同じく然なり。家を破り身を亡ぼし前後を顧みず、親屬内外之に坐りて滅ぶ。或時は室家の知識、郷黨市里の愚民野人、轉共に事に従ふ、更相に利害して忿り成り怨結ぶ。富有なれども慳惜して背て施與せず、寶を愛し重きを食りて心勞し身苦む。是の如くして竟に至りて恃怙する所無し、獨り來り獨り去りて、一も隨ふ者無し、善惡禍福命を追うて生ずる所なり。或は樂處に在り或は苦處に入る、然して後に乃ち悔ゆとも當に復何ぞ及ぶべき。世間の人民心愚に智少くして善を見ては憎謗して慕ひ及ばんことを思はず。但惡を爲さんと欲して妄に非法を作し、常に盜心を懷きて、他の利を恚望す、消散し糜盡して復求索す。邪心正しからずして人の色有らんことを懼る、豫め思ひ計らず事至りて乃

【三】第三惡、邪好を釋す。

【細色】好色なり
【防味】邪視なり

【惡心外に在り等】
單外のみを懷ひ、
負しくして産業な
きなり。
【恐熱迫脅】
恐熱もて身を逼迫
するなり。

ち悔ゆ。今世に現に王法の牢獄有り、罪に隨ひて越向して其殃罰を受く、其前世に道徳を
信せず善本を修せざるに因りて、今復惡を爲す、天神剋識して其名籍を別つ、壽終り神
逝きて惡道に下し入る。故に自然の塗無量の苦惱有り、其中に展轉して世世累劫に中期
有ること無し、解脫を得難し、痛み言ふべからず。是を二大惡二痛一燒と爲す。勤苦する
ことは是の如し、譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て、一心に意を制し、
身を端し行ひを正しくして、獨り諸善を作して業惡を爲さざれば、身獨り度脫して其福徳、
度世上天、泥洹の道を獲。是を二大善と爲す。』

佛の三惡といふ、一其三惡とは、世間の人民相因りて寄生して共に天地の間に居す、處年壽
命能く幾何なること無し。上に賢明長者、尊貴豪富有り、下に貧窮賤、疴劣愚夫有り、
中に不善の人有り。常に邪惡を懷けり、但姪姪を念じて煩ひ胷中に滿つ、愛欲交亂して坐
起安からず、貪意守惜して但唐らに得んことを欲す、細色を防味して邪態外に逸なり、
自妻をば厭憎して私に妄りに入出し、家財を費損して事非法を爲す。交聚會を結んで師を
興して相伐つ、攻劫殺戮して強奪不道なり、惡心外に在りて、自ら業を修せず、盜竊して
趣かに得れば繋繫事を成す、恐熱迫脅せしめて妻子に歸給す、恚心快意して身を極めて樂
を作す、或は親屬に於て尊卑を避けざるをもて、家室中外患へて之を苦しむ、亦復王法の
禁令を畏れず。是の如きの惡は人鬼に著され、日月照見し神明記識す。故に自然の三塗無
量の苦惱有り、其中に展轉して世世累劫に中期有ること無し、解脫を得難し、痛み言ふべ

【一七】第四惡、妄
語を釋す。
【傍に於て】 夫婦
のみの意。

【優憊】 倜傲。

からず。是を三大惡三脩三燒と爲す。勤苦することは是の如し、譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て、一心に意を制し、身を端し行ひを止しくして、獨り諸善を作して衆惡を爲さざれば、身獨り度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲。是を三大善と爲す。」

佛の言はく、『其四惡とは、世間の人民善を修めんことを念はず、轉相教令して共に衆惡を爲すに、兩舌惡口、妄言綺語す。讒賊鬪亂して善人を憎嫉し賢明を敗壞し、傍に於て快喜して、二親に孝せず、師長を輕慢し、朋友に信無くして誠實を得難し。尊貴自大にして己れ道有りと謂ひて横に威勢を行じて人を侵易す、自ら知ること能はず、惡を爲して耻づること無し、自ら強健なるを以て人の敬難を欲す。天地神明日月を畏れず、背て善を作さず、降化すべきこと難し、自ら用て優憊して常に爾るべしと謂へり、憂懼する所無くして常に倜傲を懷けり。是の如き衆惡天神記識す。其前世に頗る福德を作すに頼りて、小善扶掖し營護して之を助く。今世に惡を爲して福德盡滅す、詔の善鬼神各共に之を離れて、身獨り空しく立ちて復依る所無し。壽命終盡して諸惡の歸する所なり、自然に迫促して共に趣きて之に頗る。又其名藉神明に記在せり、殊咎牽引して當に往きて趣向すべし、罪報自然にして捨離する從無し、但前行に得りて火錢に入る、身心摧碎して精神痛苦す、斯時に當りて悔ゆとも復何ぞ及ばん。天道自然にして蹉跌することを得ず、故に自然の三塗無量の苦惱有り、其中に展轉して世世累劫に出期有ること無し、解脫を得難し、

痛み言ふべからず。是を四大惡四痛四燒と爲す。勤苦すること是の如し、譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人よく中に於て、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、獨り諸善を作して衆惡を爲さざれば、身獨り度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲。是を四大善と爲す。

【六】第五惡、飲

酒を障す。

【徒倚】猶徘徊なり。

【華轡】猶苛斂なり。

【魯扈】魯鈍にして

て穢念なり。

【職當】自認するなり。

佛の言はく、「其五惡とは、世間の人民徒倚懈惰して、背て善を作し身を治め業を修せず。家室眷屬飢寒困苦し、父母教誨すれば目を瞋らして怒りて膺ふ、言令不和にして違戻反逆す。譬へば怨家の如し、子無からんには如かじ。取與節無くして衆共に患へ厭ふ、恩に負き義に違ひて報償の心有ること無し、貧窮困乏にして復得ること能はず、辜轡縱奪にして放恣に遊散す、數唐らに得るに串ひて用て自ら賑給す。酒に耽り美を嗜んで飲食度無し、肆心に蕩逸し魯扈抵突して人情を識らず、強ひて抑制せんことを欲す、人の善有るを見ては憎嫉して之を惡む、義無く禮無くして顧難する所無し、自ら用て職當して諫曉すべからず。六親眷屬の所資の有無憂念すること能はず、父母の恩を惟はず、師友の義を存ぜず、心常に惡を念じ、口常に惡を言ひ、身常に惡を行じて曾て一善も無し。先聖諸佛の經法を信ぜず、道を行ひて度世を得べきことを信ぜず、死して後神明更に生ずることを信ぜず、善を作して善を得惡を爲して惡を得ることを信ぜず、眞人を殺し衆僧を闘亂せんと欲し、父母兄弟眷屬を害せんと欲す。六親憎惡して其れをして死せしめんことを願ふ。是の如きの世人心意俱に然なり、愚癡矇昧にして自ら智慧を以てして、生の從來する所、死の

【浩浩】大水の貌
冥味の貌

【凡】上の五惡を
捨つべきを再説す
【但衆惡を等】五
惡なり、入惡趣と
は五燒、被殊病と
は五痛なり。

趣向する所を知らず、不仁不順にして天地に惡逆す、而も其中に於て僥倖して、長生を求めんと欲すれども會ず當に死に歸すべし。慈心をもて教誨して其をして善を念ぜしめ、生死善惡の趣、自然に是有ることを開示すれども肯て之を信ぜず。苦心に與に語れども其人に益無し、心中閉塞して意開解せず、大命將に終らんとして、悔懼交至る、豫め善を修せず、窮りに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆとも將何ぞ及ばんや。天地の間に五道分明なり、恢廓窈窕浩浩茫茫たり、善惡報應して禍福相承く、身白ら之を當く誰も代る者無し、數の自然なるをもて其所行に應ず、殃咎命を追うて縱捨することを得ること無し。善人は善を行じて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ひて苦より苦に入り冥より冥に入る、誰か能く知る者あらん、獨り佛のみ知りたまふのみ。教語開示するに信用する者は少く、生死休まず惡道絶えず、是の如き世人具に盡すべきこと難し。故に自然の三塗無量の苦惱有り、其中に展轉して世世累劫に同期有ること無し、解脱を得難し、痛み言ふべからず。是を五大惡五痛五燒と爲す。勤苦することは是の如し、譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て、一心に意を制し、身を端し念ひを正しくし、言行相副ひ所作至誠にして、所語、語の如く心口轉せず、獨り諸善を作して衆惡を爲さざれば、身獨り度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲。是を五大善と爲す。』

【九】彌勒に告げたまはく、一吾、汝等に語る、是世の五惡勤苦すること此の若し。五痛五燒展轉して相生す、但衆惡を作して善本を修せず、皆悉く自然に諸の惡趣に入る。或

【天道施張して等】業果の理更に作者なき故に、又造悪は必ず彰はるる故に自然に糺擧すといふ。

【綱紀羅網等】身法綱に當り、貴賤となく法に従ふなり。

【教誡松松】孤獨無依なり。

【三】佛之を哀みて五善を修すべきを明す。

【汝等是に於て等】以下廣植徳木を明す。

は其今世に先づ殃病を被りて、死を求むるに得ず、生を求むるに得ず、罪惡の招く所示にして衆之を見る、身死すれば行ひに隨つて三惡道に入る、苦毒無量にして自ら相焦然せらる。其久しくして後に至りて共に怨結を作す、小微より起りて遂に大惡と成る、皆財色を貪著して施惠すること能はざるに由りてなり。癡欲に迫められ心の思想に隨つて煩惱結縛して解け已むこと有ること無し。己を厚うし利を誇ひて省録する所無し、富貴榮華、時に當りて快意して忍辱すること能はず、務めて善を修せず。威勢幾も無ければ隨つて以て磨滅す、身勞苦を坐けて久しうして後大いに劇し、天道施張して自然に糺擧するに、綱紀羅網上下相應す、冥贊忙忙として當に其中に入るべし。古今是有り、痛ましきかな傷むべし。

佛、彌勒に語けたまはく、「世間是の如し、佛、昔之を哀む、威神力を以て衆惡を摧滅して悉く善に就かしむ、所思を棄捐して經戒を奉持し、道法を受行して違失する所無く、終に度世泥洹の道を得しむ。佛の言はく、「汝今諸天人民及び後世の人、佛の經語を得て當に熟之を思うて能く其中に於て心を端し行ひを正しうすべし。至上善を爲して其下を率化せよ、轉相勸令して各自ら端しく守るべし。聖を尊び善を敬ひ仁慈あつて博く愛せよ、佛語の教誨敢て虧負すること無かれ、當に度世を求めて生死衆惡の本を拔斷すべし。當に三塗無量の畏畏苦痛の道を離るべし。汝等是に於て廣く徳木を植ゑよ、恩を布き施惠して道禁を犯すこと勿く、忍辱と精進と一心と智慧とをもつてすべし、轉相教化して徳を爲し善を立てよ。正心正意にして齋戒清淨なること一日一夜すれば、無量壽國に在つて

【二】一夜等】此土の修行は成ずべきこと難きが故にその一日は四方國の百年に勝れるなり。

【佛の遊履等】以下天下和順の文、此經護國として重んぜらるる點。

【三】修捨總結、以善攻惡を説く。

善を爲すこと百歳するに勝れたり。所以は何ん。彼佛の國土は無爲自然にして、皆衆善を積みて毛髮の惡無し。此に於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸佛の國土に於て善を爲すこと千歳するに勝れたり。所以は何ん。他方の佛國は善を爲す者は多く惡を爲す者は少し、福德自然にして造惡無きの地なり、唯此間のみ惡多くして自然なること有ること無く、勤苦求欲して轉相欺治す、心勞し形苦しみて苦を飲み毒を食ふ、是の如く忽務して未だ嘗て寧息せず。吾汝等天人の類を哀んで、苦心に誨諭して教へて善を修せしめ、器に隨つて開導して經法を授與するに承用せずといふこと莫し、意の所願に在つて皆得道せしむ。佛の遊履する所の國邑丘聚化を蒙らずといふこと靡し。天下和順し日月清明なり、風雨時を以てして災厲起らず、國豊に民安くして兵戈用ひること無し、徳を崇め仁を興して務めて禮讓を修す。佛の言はく、『我、汝等諸天人を哀惑すること、父母の子を念ふよりも甚し、今我此世間に於て作佛して、五惡を降化し、五痛を消除し、五燒を絶滅し、善を以て惡を攻め生死の苦を抜き、五徳を獲て、無爲の安きに昇らしむ。吾世を去りて後經道漸く滅し、人民評僞にして復衆惡を爲し、五燒五痛還りて前の法の如くならん、久しくして後轉劇し、悉く説くべからず、我但、汝が爲に略して之を言ふのみ。』佛彌勒に語げたまはく、『汝等各善く之を思ひ、轉相教誡して佛の經法の如くせよ、犯すことを得ること無かれ。是に於て彌勒菩薩、合掌して白して言さく、『佛の所説甚だ苦なり、世人實に爾なり、如來普慈をもて哀惑して悉く度脱せしめたまふ、佛の重誨を受け

【三】 正宗第七段
智慧を明す、今恭敬禮佛。

【混漑浩汗】 ひろくただよへるかぎりなき大水。

【三】 胎生化生を明す。

て敢て違失せじ。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝起ちて更に衣服を整へ、合掌し恭敬して無量壽佛を禮したてまつるべし、十方國土の諸佛如来常に共に彼佛の無著無礙を稱揚し讚歎したまふ。』是に於て、阿難起ちて衣服を整へ、正身西面して恭敬し合掌して、五體を地に投じて無量壽佛を禮したてまつる。白して言さく、『世尊、願くは彼佛の安樂國土、及び諸の菩薩聲聞大衆を見たてまつらん。』是語を説き已るに、即時に無量壽佛、大光明を放つて普く一切の諸佛世界を照したまふ。金剛圍山、須彌山王、大小の諸山一切の所有皆同じく一色なり。譬へば劫水の世界に彌滿して、其中の萬物沈没して現ぜず、混漑浩汗として唯大水のみを見るが如し。彼佛の光明も亦復是の如し。聲聞菩薩、一切の光明皆悉く隱蔽して、唯佛光の明曜顯赫なるを見たてまつる。兩時に阿難、即ち無量壽佛を見たてまつるに、威徳巍巍たること須彌山王の高く一切の諸の世界の上に出づるが如し、相好光明照曜せずといふこと摩訶。此會の四衆一時に悉く見たてまつる、彼より此土を見ることも亦復是の如し。

爾時佛、阿難及び慈氏菩薩に告げたまはく、『汝彼國を見るに地より已上淨居天に至るまで其中の有ゆる微妙嚴淨自然の物、悉く見たりと爲んやいなや。』阿難對へて曰さく、『唯然り、已に見たてまつる。』汝寧ろ復無量壽佛の大音一切世界に宣布して、衆生を化したまふを聞きたてまつるやいなや。』阿難對へて曰さく、『唯然り、已に聞きたてまつる。』彼國

【百由旬等】下輩
疑佛所生の宮殿、
五百由旬とは中輩
疑智所止の宮殿な
り。
【三四】信疑の得失
を述ぶ。

【三五】信者化生、
疑者胎生を明す。

の人民、百千由旬の七寶の宮殿に乗じて、障礙有ること無く遍く十方に至りて諸佛を供養す、汝復見たりやいなや。對へて曰さく、『已に見たてまつる。』彼國の人民胎生の者有り、汝復見たりやいなや。對へて曰さく、『已に見たてまつる。其胎生の者の處する所の宮殿、或は百由旬、或は五百由旬、各其中に於て諸の快樂を受くること、切利天上の如くにして亦皆自然なり。』

爾時、慈氏菩薩、佛に白して言さく、『世尊何の因何の縁有りてか彼國の人民胎生化する。』佛慈氏に告げたまはく、『若し衆生有つて疑惑の心を以て諸の功德を修して彼國に生ぜんと願するに、佛智、不思議智、不可稱智、大乘、廣智、無等無倫最上勝智を了せず、此諸の智に於て疑惑して信ぜず。然れども猶罪福を信するをもて善本を修習して其國に生ぜんと願す、此諸の衆生彼宮殿に生じて壽五百歳までに常に佛を見たてまつらず、經法を聞きたてまつらず、菩薩聲聞聖衆を見たてまつらず、是故に彼國土に於て之を胎生と謂ふ。若し衆生有つて明かに佛智乃至勝智を信じて、諸の功德を作して信心廻向すれば、此諸の衆生七寶の華の中に於て自然に化生して、跏趺して坐す、須臾の頃に身相光明、智慧功德諸の菩薩の如く具足し成就す。』
復次に慈氏、他方佛國の諸の大菩薩發心して無量壽佛を見たてまつり、及び諸の菩薩聲聞の衆を恭敬し供養せんと欲すれば、彼菩薩等命終して無量壽國に生ずることを得て、七寶の華の中に於て自然に化生す。彌勒當に知るべし、彼化生の者は智慧勝れたるが故に。

其胎生の者は皆智慧無きをもて五百歳の中に於て常に佛を見たてまつらず、經法を聞かず、菩薩諸の眷屬衆を見ず、佛を供養するに由無し、菩薩の法式を知らず、功德を修習することを得ず、當に知るべし、此人は宿世の時、智慧有ること無くして疑惑せしが致す所なり。

佛、彌勒に告げたまはく、「譬へば轉輪聖王の別に七寶の宮室有りて、種種に莊嚴し牀帳を張設し、諸の綵幡を懸けたらんに、若し諸の小王子有つて罪を王に得れば、輒ち彼宮中に内れて繋ぐに金鎖を以てす、飲食衣服、莊嚴華香妓樂を供給すること轉輪王の如くにして、乏少する所無きが如き、意に於て云何ぞ、此諸の王子、寧ろ彼處を樂はるやいなや、對へて曰さく、「不なり、但種種に方便して諸の大力を求めて自ら免れ出でんことを欲せん、佛、彌勒に告げたまはく、「此諸の衆生も亦復是の如し、佛智を疑惑せしを以ての故に、彼宮殿に生じて測罰乃至一念の惡事有ること無く、但五百歳の中に於て三寶を見たてまつらず、供養して諸の善本を修することを得ず、此を以て苦と爲す、餘樂有りとも猶彼處を樂はず。若し此衆生、其本罪を盡りて、深く自ら悔責して、彼處を離れんことを求むれば、即ち意の如く無量壽佛の所に往詣して恭敬し供養することを得、亦復く無量無數の諸餘の佛の所に至つて諸の功德を修することを得、彌勒當に知るべし、其れ菩薩有つて疑惑を生ずる者は大利を失せりと爲す、是故に應當に明かに諸佛の無上智慧を信すべし。」

【二六】 喻に寄せて胎生の過を説く。

【七】菩薩の往生を擧げて凡次を勸む

(二十七) 彌勒菩薩、佛に白して言さく、「世尊此世界に於て幾所の不退の菩薩有つてか彼佛國に生ずるや。」佛、彌勒に告げたまはく、「此世界に六十七億の不退の菩薩有つて彼國に往生す。一一の菩薩已に曾て無數の諸佛を供養すること、次ぎて彌勒の如き者なり。諸の小行の菩薩及び少功德を修習する者稱げて計ふべからず、皆當に往生すべし。」佛、彌勒に告げたまはく、「但我刹の諸の菩薩等のみ、彼國に往生するにあらず、他方の佛土も亦復是の如し。其第一の佛を名けて遠照と曰ふ、彼に百八十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第二の佛を名けて寶藏と曰ふ、彼に九十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第三の佛を名けて無量音と曰ふ、彼に二百二十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第四の佛を名けて甘露味と曰ふ、彼に二百五十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第五の佛を名けて龍勝と曰ふ、彼に十四億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第六の佛を名けて勝力と曰ふ、彼に萬四千の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第七の佛を名けて師子と曰ふ、彼に五百億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第八の佛を名けて離垢光と曰ふ、彼に八十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第九の佛を名けて德首と曰ふ、彼に六十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第十の佛を名けて妙徳山と曰ふ、彼に六十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第十一の佛を名けて人王と曰ふ、彼に十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第十二の佛を名けて無上華と曰ふ、彼に無數不可稱計の諸の菩薩衆有り、皆不退轉にして智慧勇猛なり、已に曾て無量の諸佛を供養して、七日の中に於て即ち能く百千億劫に大士の

【六】 以下流通分

【經道滅盡】末法
萬年の後無上正法
方に永く滅没す。

修する所の堅固の法を攝取せり、斯等の菩薩皆當に往生すべし。其第十三の佛を名けて無畏と曰ふ、彼に七百九十億の大菩薩衆有り、諸の小菩薩及び比丘等稱げて計ふべからず、皆當に往生すべし。佛、彌勒に語けたまはく、但此十四佛國の中の諸の菩薩等のみ當に往生すべきにあらず、十方世界の無量の佛國より其往生する者も亦復是の如く甚だ多くして無數なり。我但十方諸佛の名號及び菩薩比丘の彼國に生ずる者を説くこと晝夜一劫すとも尙未だ竟はること能はじ、我れ今汝が爲に略して之を説くのみ。」

(二八)佛、彌勒に語けたまはく、『其れ彼佛の名號を聞くことを得ること有つて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、當に知るべし、此人は大利を得たりと爲す、則ち是れ無上の功德を具足す。是故に彌勒、設ひ大火三千大千世界に充滿すること有りともし、要す當に之を過ぎて是經法を聞いて、歡喜信樂し、受持し讀誦し、説の如く修行すべし。所以は何ん、多く菩薩有つて、此經を聞かんと欲すれども而も得ること能はず、若し衆生有つて此經を聞かん者は無上道に於て終に退轉せじ、是故に當に專心に信受し、持誦し説行すべし。』佛の言はく、吾今諸の衆生の爲に此經法を説き、無量諸佛、及び其國土の一切の所有を見せしむ。當に爲すべき所の者をば、皆之を求むべし。我滅度の後を以て、復疑惑を生ずることを得ること無かれ。當來の世經道滅盡せんに、我慈悲を以て哀愍して、特り此經を留めて止住すること百歲ならん。其れ衆生有つて斯經に値ふ者は意の所願に隨つて皆得度すべし。』佛、彌勒に語けたまはく、『如來の興世には値ひ難く見難し、諸佛の經道は得難く聞き難し、普

【難が中の難】他力易行の法門の信じ難きを云ふなり

【二九】聽者の得益【清淨法眼】平等の慧眼に法界の差別を觀るなり。即ち預流果。【漏盡意解】障盡き此方の穢惡にして厭ふべきをききて聲聞の果をうるなり。

薩の勝法諸波羅蜜聞くことを得ること亦難し、善知識に遇うて法を聞いて能く行すること此亦難しと爲す、若し斯經を聞いて信樂し受持すること難が中の難なり、此難に過ぎたるは無し。是故に我法は是の如く作し、是の如く説き、是の如く教ふ。應當に信願して如法に修行すべし。

爾時、世尊此經法を説きたまふに、無量の衆生皆無上正覺の心を發せり、萬二千那由他の人清淨法眼を得たり、二十二億の諸天人阿那含果を得たり、八十萬の比丘漏盡意解し、四十億の菩薩不退轉を得たり、弘誓の功徳を以て自ら莊嚴し、將來の世に於て當に正覺を成ずべし。爾時、三千大千世界六種に震動す、大光普く十方の國土を照し、百千の音樂自然にして作し、無量の妙華紛紛として降る。佛經を説きたまふこと已つて、彌勒菩薩及び十方來の諸の菩薩衆、長老阿難、諸の大聲聞、一切の大衆、佛の所説を聞きたてまつつて、歡喜せずといふこと靡かりき。

佛說無量壽經 畢

佛說觀無量壽經

經 典 部	第 二 卷
-------------	-------------

佛說觀無量壽經

宋元嘉中靈良耶舍譯

【一】第一大段序
 分、初に證信序
 【二】以下
 發起序、細分して
 七となす、第一化
 前序。
 【二】以下發起序
 第二、禁父緣。
 【阿闍世】未生怨
 折指と譯す、影堅
 王の長子。
 【調達】天授と譯
 す、佛の從弟。
 【頻婆娑羅】阿闍
 世の父。
 【大夫人】正后の
 こと。
 【韋提希】阿闍世
 の母、影堅王の正
 妃。
 【酥蜜】牛羊の乳
 酪を精製せるもの
 【妙】乾飯の粉末
 【漿】藥水。
 【三】發起序第三
 禁母緣。

是の如きを我聞きき。一時佛王舍城の耆闍崛山の中に在して、大比丘衆千二百五十人と
 俱なりき。菩薩三萬二千あり、文殊師利法王子を上首と爲す。

爾時、王舍大城に一の太子有り、阿闍世と名く、調達、惡友の教へに隨順して、父王、頻
 婆娑羅を收執し、幽閉して七重の室内に置けり、諸の群臣を制して、一も往くことを得ざ
 らしむ。國の大夫人を韋提希と名く、大王を恭敬して、澡浴清淨にして、酥蜜を以て麩

に和して用て其身に塗り、諸の瓔珞の中に蒲桃の漿を盛れて、密かに以て王に上る。爾
 時大王麩を食し、漿を飲み、水を求めて口を漱ぐ、口を漱ぎ畢已て、合掌恭敬して、耆闍

崛山に向つて、遙に世尊を禮して、是言を作さく、「大目犍連は是れ吾親友なり、願くは慈
 悲を興して、我に八戒を授けしめたまへ。」時に目犍連、鷹隼の飛ぶが如くにして、疾く王

の所に至る。口日是の如く、王に八戒を授く。世尊亦尊者富樓那を遣はして、王の爲に法
 を説かしむ。是の如き時の間に三七日を經たり。王麩室を食し、法を聞くことを得るが故

に顔色和悦せり。

時に阿闍世、守門の者に問はく、「父王今猶存在せりや。」時に守門の面白して言さく、

【著婆】阿闍世の直見、名醫なり。【毗陀】四吠陀のこし。

【刹利】印度四姓の第一、王及び武士の階級。【旃陀羅】卑賤種なり。

【四】發起序第四厭苦緣。

「大王、國の大夫人は身に麩蜜を塗り、瓔珞に髮を盛れて、持て王に上り、沙門日蓮及び富樓那は空より來つて、王の爲に說法す、禁制すべからず。時に阿闍世此語を聞き已つて、其母を怒つてけはく、『我母は是れ賊なり、賊と伴爲ればなり。沙門は惡人なり、幻惑呪術をもつて、此惡王をして多日に死せざらしむ。』即ち利劍を執つて、其母を害せんと欲す。時に一の臣有り、名けて月光と曰ふ、聰明多智なり、及び著婆と與に、王の爲に禮を作して白して言さく、『大王、臣、毗陀論經の説を聞くに、劫初より已來諸の惡王有り、國位を食るが故に、其父を殺害すること一萬八千なり、未だ曾て無道にして母を害すること有ることを聞かず、王、今此殺逆の事を爲さば、刹利種を汚さん、臣聞くに忍びず、是れ旃陀羅なり、宜しく此に住ましむべからず。』時に二大臣此語を説き竟つて、手を以て劍を按へて卻行して退く。時に阿闍世、驚怖惶懼して、著婆に告げて言はく、『汝我爲にせずや。』著婆白して言さく、『大王、愼んで母を害すること莫れ。』王此語を聞いて、懺悔して救はんことを求む。即便ち劍を捨てて止めて母を害せず、内官に勅語し、深宮に閉置して、復出さしめず。

時に韋提希、幽閉せられ已つて、愁憂憔悴して遙に耆闍崛山に向つて、佛の爲に禮を作して是言を作さく、『如來世尊在昔の時は恆に阿難を遣はして來して我を慰問したまひき、我今愁憂す、世尊は威重くして見たてまつることを得るに由無し、願くは日蓮、尊者阿難をして我與に相見せしめたまへ。』是語を作し已つて、悲泣して涙を雨し、遙に佛に向つ

【護世の諸天】四天王及び色界等諸天のこと。

【五】發起序第五欣淨緣、初に夫人所求の淨土を通請す。

て禮したてまつる。未だ頭を擧げざる頃に、爾時、世尊者闍維山に在して、韋提希の心所念をしり、即ち大目犍連及び阿難に勅して空より來らしめ、佛は普闍維山より没して王宮に於て出でたまふ。時に韋提希禮し已つて頭を擧ぐるに、世尊釋迦牟尼佛の身は紫金色にして百寶の蓮華に坐し、目連は左に侍し、阿難は右に在り、釋梵護世の諸天は虚空の中に在つて、普く天華を雨らして持用て供養するを見る。時に韋提希、佛世尊を見たてまつつて、自ら瓔珞を絶ち舉身地に投じ、號泣して佛に向つて白して言さく、「世尊我れ宿何の罪有つて此惡子を生める、世尊、復何等の因緣有つて提婆達多と共に眷屬と爲りたまふ。」

唯願くは世尊我爲に廣く憂惱無き處を説きたまへ、我當に往生すべし。闍浮提の濁惡世を樂はず。此濁惡の處には地獄、餓鬼、畜生盈滿して不善聚多し。願くは我未來に惡聲を聞かず、惡人を見ざらん。今世尊に向つて五體を地に投じて、哀を求めて懺悔す。唯願くは佛日我をして清淨業の處を觀せしめたまへ。爾時、世尊眉間の光を放ちたまふ。其光金色にして、徧く十方無量の世界を照し、佛頂に還り住りて、化して金臺と爲る、須彌山の如し。十方諸佛の淨妙の國土皆中に於て現す、或は國土有り七寶をもて合成せり、復國土有り純は是れ蓮華なり、復國土有り自在天宮の如し、復國土有り玻璃鏡の如し、十方の國土皆中に於て現す。是の如き等の無量の諸佛國土の嚴顯にして觀すべき有つて、韋提希をして見しめたまふ。時に韋提希、佛に白して言さく、「世尊是諸の佛土復清淨に

【我今等】別して所求即ち彌陀の淨土を選ぶ。

【唯願くば等】正しく別行思惟正受を請求す。

【思惟】前方便もて彼土の依正二報等を想念するなり。

【正受】心あつて勝境に合する定をいふ。

【いふ】發起序第六散義顯行緣、初に佛光の父王を益するを明す。

【爾時世尊等】夫人の別請に應じて佛の訃説するを明す、中に世戒行の三福を説く。

【七】發起序第七定善示觀緣。

【清淨業】專心に念佛して西方に想を注げば念念に罪障除くことを得。

して皆光明有りと雖も、我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生ぜんことを願ふ、唯願くは世尊我に思惟を教へたまへ、我に正受を教へたまへ。」

爾時、世尊即便微笑したまふに、五色の光有つて、佛口より出づ、一一の光頻婆娑羅の頂を照す。爾時、大王幽閉に在りと雖も、心眼障無し、遂に世尊を見たてまつり、頭面に禮を作すに、自然に増進して阿那含を成す。

爾時、世尊、韋提希に告げたまはく、「汝今知るやいなや、阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に念を繫けて諦かに彼國を觀すべし、淨業成ぜん者なり。我今汝が爲に廣く衆の譬へを説かん、亦未來世の一切凡夫の淨業を修せんと欲する者をして、西方極樂國土に生ずることを得しめん。彼國に生ぜんと欲せん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯ぜず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく、「汝今知るやいなや、此三種の業は過去未來現在三世諸佛の淨業の正因なり。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽き諦かに聽け、善く之を思念せよ、如來今未來世の一切衆生の煩惱の賊に害せらるる者の爲に清淨業を説かん。善い哉韋提希、快く此事を問へり。阿難汝當に受持して廣く多衆の爲に佛語を宣説すべし。如來今韋提希及び未來世の一切衆生をして西方極樂世界を觀せしめん、佛力を以ての故に當に彼清淨

業を修せんと欲する者をして、西方極樂國土に生ずることを得しめん。彼國に生ぜんと欲せん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯ぜず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく、「汝今知るやいなや、此三種の業は過去未來現在三世諸佛の淨業の正因なり。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽き諦かに聽け、善く之を思念せよ、如來今未來世の一切衆生の煩惱の賊に害せらるる者の爲に清淨業を説かん。善い哉韋提希、快く此事を問へり。阿難汝當に受持して廣く多衆の爲に佛語を宣説すべし。如來今韋提希及び未來世の一切衆生をして西方極樂世界を觀せしめん、佛力を以ての故に當に彼清淨

業を修せんと欲する者をして、西方極樂國土に生ずることを得しめん。彼國に生ぜんと欲せん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯ぜず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく、「汝今知るやいなや、此三種の業は過去未來現在三世諸佛の淨業の正因なり。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽き諦かに聽け、善く之を思念せよ、如來今未來世の一切衆生の煩惱の賊に害せらるる者の爲に清淨業を説かん。善い哉韋提希、快く此事を問へり。阿難汝當に受持して廣く多衆の爲に佛語を宣説すべし。如來今韋提希及び未來世の一切衆生をして西方極樂世界を觀せしめん、佛力を以ての故に當に彼清淨

業を修せんと欲する者をして、西方極樂國土に生ずることを得しめん。彼國に生ぜんと欲せん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯ぜず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく、「汝今知るやいなや、此三種の業は過去未來現在三世諸佛の淨業の正因なり。」

【無生法忍】善導の釋意は極樂に住生することの定りたるを疑はざるの義。

【八】以下第二段、正宗分、内を十六に分ち初三は散善とす。初に日想觀。

【日を観ず】是れ假觀にして直接極樂のことならざるが、今識境住心、識知業障、識知極樂超日のためなりと。

【九】第二水想觀【瑠璃の想】水と氷と瑠璃との三は轉觀にして能平映徹を觀ずるなり。

國土を見ることを得ること、明鏡を執つて自ら面像を見るが如くなるべし。彼國土の極妙の樂事を見て、心歡喜するが故に、時に應じて即ち無生法忍を得ん。佛、韋提希に告げたまはく、『汝は是れ凡夫にして心相羸劣なり、未だ天眼を得ざれば遠く觀ること能はず、諸佛如來に異の方便有り、汝をして見ることを得しめん。』時に韋提希佛に白して言さく、『世尊我如きは今佛力を以ての故に彼國土を見たてまつる、若し佛滅後の諸の衆生等は濁惡不善にして五苦に逼られん。云何が當に阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべきや。』

佛、韋提希に告げたまはく、『汝及び衆生當に心を專にして、念を一處に繫けて西方を想ふべし。云何が想を作さん。凡そ想を作すとは一切衆生生盲に非ざるよりは、日有る徒皆日の沒するを見よ。當に想念を起して正坐して西に向ひ、諦かに日を觀ずべし。心をして堅住し想を專にして移さざらしめて、日の沒せんと欲して狀態鼓の如くなるを見よ、既に日を見已りなば、目を閉ぢ目を開かんに皆明了ならしめよ。是を日想と爲し、名けて初觀と曰ふ。』

次に水想を作せ、水の激清なるを見て亦明了にして分散の意無からしめよ。既に水を見已りなば當に冰想を起すべし。氷の映徹せるを見て瑠璃の想ひを作せ。此想成じ已りなば、瑠璃地の内外映徹せるを見よ。下に金剛の七寶の金幢有つて瑠璃地を擎ぐ、其幢八方にして八楞具足せり、一一の方面は百寶の所成なり。一一の寶珠に千の光明有り、一一の光明に八萬四千の色有つて瑠璃地に映ず、億千の口の如くにして具に見るべから

【八種】 四方四維
【苦空無常無我】
身受心法の四念處
に常樂我淨の四倒
なき四眞を説くな
り。

【一〇】 第三地想觀

【正觀】 心境相應
の觀想

【界觀】 觀想の時
日を觀て日を見さ
る等の餘の雜境を
おこし、心境相應
せざるなり。

【二】 第四寶樹觀

【行樹】 林樹行
整直にして雜亂な
きをいふ。

す。瑠璃地の上には黄金の繩を以て雜廁間錯せり、七寶を以て界ひて分齊分明なり。一一の寶の中に五百色の光有り、其光華の如く、又星月に似たり、虛空に懸處して光明臺と成る、樓閣千萬あり、百寶をもて合成せり、臺の兩邊に於て各百億の華幢、無量の樂器有り、以て莊嚴と爲す。八種の清風光明より出で、此樂器を鼓らして、苦空無常無我の音を演說せしむ。是を水想と爲し、第二の觀と名く。

此想、成ずる時、一一に之を觀じて極めて了了ならしめよ、目を閉ぢ目を聞くにも散失せしめされ、唯睡時を除きて恆に此事を憶へ。此の如く想するを名けて、粗極樂國の地を見りと爲す。若し三昧を得れば彼國地を見ること了了分明なり。具に説くべからず。是を地想と爲し、第三の觀と名く。佛、阿耨に告げたまはく、『汝佛語を持して、未來世の一切大衆の苦を脱せんと欲する者の爲に、是觀地の法を説け。若し是地を觀する者は八十億劫生死の罪を除き、身を他世に捨てて必ず淨國に生ず、心に疑ひ無きことを得よ。是觀を作すをば名けて正觀と爲し、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す。』

佛、阿耨及び韋提希に告げたまはく、『地想成じ已りたまは、次に寶樹を觀せよ。寶樹を觀ずとは一一に之を觀じて七重行樹の想ひを作せ。一一の樹の高さ八千由旬なり、其諸の寶樹、七寶の華葉具足せずといふこと無し、一一の華葉異の寶色を作す、瑠璃色の中より金色の光を出し、砒磞色の中より紅色の光を出し、砒磞色の中より砒磞の光を出し、砒磞色の中より綠眞珠の光を出し、珊瑚琥珀一切の衆寶、以て映飾と爲り。妙眞珠の網樹の上

【旋火輪】火輪車の
のこと、圓轉の相
に喩ふ。

【二】第五寶池觀
【水】此土の水に
非ず、彼土寶池の
水。

に彌覆せり、一一の樹の上に七重の網有り、一一の網の間に五百億の妙華宮殿有り、梵王宮の如し。諸の天童子自然に中に在り、一一の童子五百億の釋迦毘楞伽摩尼寶を以て瓔珞と爲り、其摩尼の光百山匂を照す、猶し百億の日月を和合せるが如し、具に名くべからず、衆寶間錯して色中の上れたる者は、此諸の寶樹、行行相當り、葉葉相次げり、衆葉の間に於て諸の妙華を生ず、華の上に自然に七寶の果有り、一一の樹葉、縱廣正等に於て二十五山匂なり。其葉千色にして百種の畫有り、天の瓔珞の如し。衆の妙華有り、閻浮檀金の色を作せり、旋火輪の如く葉の間に宛轉す。涌生せる諸果帝釋の餅の如し、大光明有り化して幢旛無量の寶蓋と成る。是寶蓋の中に三千大千世界の一切の佛事を映現す。十方の佛國亦中に於て現す。此樹を見已りなば亦常に次第に一一に之を觀すべし。樹莖葉葉華果を觀見して皆分明ならしめよ。是を樹想と爲し、第四の觀と名く。

次に當に水を想ふべし。水を想ふとは極樂國土に八池水有り、一一の池水七寶の所成なり。其寶、柔軟にして如意珠王より生ず、分れて十四支と爲る、一一の支七寶の色を作す、黄金を渠と爲す、渠の下には皆雜色の金剛を以て底沙と爲す、一一の水の中に六十億の七寶の蓮華有り、一一の蓮華團圓正等にして十二山匂なり。其摩尼の水、華の間に流れ注ぎて樹を尋ねて上下す、其聲微妙にして苦空無常無我諸波羅蜜を演說す、復諸佛の相好を讚歎するもの有り。如意珠王より金色微妙の光明を涌出す、其光化して百寶色の鳥と爲る、和鳴哀雅にして常に念佛念法念僧を讚す。是を八功德水の想と爲し、第五の觀と名く。

【二三】 第六寶樓觀

【總觀】 依報觀の
總結の義。

【二四】 第七華座觀

【無量壽佛……住
立】 衆提先に依報
を以て發請の端とし、
今の三聖共臨は正報
を以て發請の由となす
なり。

衆寶國土の一一の界の上に五百億の寶樓閣有り、其樓閣の中に無量の諸天有つて天の伎樂を爲す。又樂器有り虚空に懸處せり、天の寶幢の如く鼓せざるに自ら鳴る。此衆の音の中に、皆念佛念法念比丘僧を誦く。此想成じ已るを名けて、粗極樂世界の寶樹寶地寶池を見ると爲す。是を總觀の想と爲し、第六の觀と名く。若し此を見る者は、無量億劫の極重の惡業を除きて、命終の後必ず彼國に生ず。是觀を作すをば名けて正觀と爲し、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽き、諦かに聽け、善く之を思念せよ。佛當に汝が爲に苦惱を除く法を分別し解説すべし、汝等憶持して廣く大衆の爲に分別し解説せよ。」是語を説きたまふ時、無量壽佛空中に住立したまふ、觀世音、大勢至是二大士左右に侍立したまふ。光明熾盛なり、具に見るべからず、百千の闍浮檀金の色も比へとすることを得ず。時に韋提希、無量壽佛を見たまつり已つて、足を接して禮を作し、佛に白して言さく、「世尊、我今佛力に因るが故に、無量壽佛及び二菩薩を見たまつることを得たり。未來の衆生當に云何が無量壽佛及び二菩薩を觀たてまつるべきや。」佛、韋提希に告げたまはく、「彼佛を觀んと欲せば當に想念を起すべし。七寶の地の上に於て蓮華の想を作せ、其蓮華の一一の葉をして百寶の色を作さしめよ。八萬四千の脈有り、猶し天の畫の如し、脈に八萬四千の光有り、了了分明にして皆見ることを得しめよ。華葉の小なる、縱廣二百五十山旬なり、是の如き蓮華に八萬四千の葉有り、一一の葉の間に各百億の摩尼珠

【佛事】 八相示現
作佛等の事なり。

【願力の所成】 第
三十二圖土嚴飾の
願所成なり。

【五】 第八像想觀
【心想の中に等】
衆生佛を見んと願
せば、佛は無礙智
を以て之を知り、
想念或は夢定中に
彼想中に入りて現
ざるをいふ。
【佛を作る】 是心
を離れて外に更に
異佛なきなり。

王有つて、以て映飾と爲り。一一の摩尼より千の光明を放つ、其光蓋の如くにして七寶合成せり、徧く地上に覆へり、釋伽毘楞伽寶を以て其臺と爲す。此蓮華臺は八萬の金剛、鬘叔迦寶、梵摩尼寶、妙眞珠網を以て交飾と爲り、其臺の上に於て自然に四柱の寶幢有り、一一の寶幢、百千萬億の須彌山の如し。幢上の寶幢は夜摩天宮の如し、五百億の微妙の寶珠有つて以て映飾と爲り。一一の寶珠に八萬四千の光有り、一一の光、八萬四千の異種の金色を作す、一一の金色、其寶土に徧し、處處に變化して各異相を作す。或は金剛臺となり、或は眞珠網と作り、或は雜華雲と作りて、十方の面に於て意に隨つて變現して、佛事を施作す。是を華座の想と爲し、第七の觀と名く。佛、阿難に告げたまはく、「此の如き妙華は、是れ本法藏比丘の願力の所成なり。若し彼佛を念はんと欲せば、當に先づ此華座の想を作すべし。此想を作す時、雜觀することを得ざれ。皆應に一一に之を觀すべし、一一の葉、一一の珠、一一の光、一一の臺、一一の幢皆分明ならしむること、鏡中に於て自ら面像を見るが如くせよ。此想成する者は五萬劫の生死の罪を滅除して、必定して當に極樂世界に生ずべし。是觀を作すをば名けて正觀と爲し、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「此事を見已りなば、次に當に佛を想ふべし。所以は何ん。諸佛如來は是れ法界身なり、一切衆生の心想の中に入りたまふ。是故に汝等心に佛を想ふ時、是心即ち是れ三十二相八十隨形好なり、是心佛を作る、是心是れ佛なり。」

【念佛三昧】ここに第九佛身觀成就をいふ。
【二六】第九佛身觀

諸佛正徧知海は心想より生ず、是故に當に一心に念を繫けて、諦かに彼佛多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を觀すべし。彼佛を想はん者は先づ當に像を想ふべし。目を閉ぢ目を開くにも一つの寶像の闍浮檀金の色の如くにして、彼華の上に坐したまふを見よ。像の坐したまふを見じりなば、心眼開くことを得て、了了分明に極樂國の七寶の莊嚴、寶地寶池、寶樹行列し、諸天の寶帳其上に彌覆し、衆寶の羅網虛空の中に滿つるを見る。此の如き事を見ば、極めて明了ならしむること掌中を觀るがごとくせよ。此事を見じりなば、復當に更に一の大蓮華を作して、佛の左邊に在くべし、前の蓮華の如く等しくして異なること有ること無し。復一つの大蓮華を作して佛の右邊に在け。一の觀世音菩薩の像の左の華座に坐するを想へ。亦金光を放つこと前の如くにして異なること無し。一の大勢至菩薩の像の右の華座に坐するを想へ。此想成する時、佛菩薩の像、皆光明を放つ。其光金色にして、諸の寶樹を照す。一一の樹下に復三蓮華有り、諸の蓮華の上に各一佛二菩薩の像有りて、彼國に徧滿す。此想成する時、行者當に水流光明及び諸の寶樹、鳥鵲鸞鶴、皆妙法を説くを聞くべし、出定入定に恆に妙法を聞かん。行者の所聞出定の時憶持して捨てず、修多羅と合せしめよ、若し合せざるをば名けて妄想と爲す、若し合すること有るをば名けて正想をもて極樂世界を見ると爲す。是を像想と爲し、第八の觀と名く。是觀を作す者は無量億劫の生死の罪を除く、現身の中に於て念佛三昧を得ん。

佛、阿難及び耆提希に告げたまはく、「此想成じりなば、次に當に更に無量壽佛の身相

彌陀の眞身を觀ず
たりる。

【念佛の衆生等】
佛光普く照して唯
念佛者を攝するを
明す。

光明を觀すべし。阿難當に知るべし。無量壽佛の身は百千萬億の夜摩天の闍浮檀金の色の如し。佛身の高さ六十萬億那由他恆河沙由旬なり。眉間の白毫は右に旋つて宛轉せり、五須彌山の如し。佛眼は四大海水の如し、青白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出すること須彌山の如し。彼佛の圓光は百億三千大千世界の如し、圓光の中に於て百萬億那由他恆河沙の化佛有り、一一の化佛に亦衆多無數の化菩薩有つて、以て侍者と爲り、無量壽佛に八萬四千の相有り、一一の相に各八萬四千の隨形好有り、一一の好に復八萬四千の光明有り、一一の光明普く十方世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。其光明相好及び化佛具に説くべからず。但當に憶想して心眼をして見せしむべし。此事を見る者は、即ち十方一切の諸佛を見たまつる、諸佛を見たまつるを以ての故に、念佛三昧と名く。此觀を作すをば、一切の佛身を觀すと名く。佛身を觀るを以ての故に亦佛心を見る、佛心とは大慈悲是れなり、無縁の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。此觀を作す者は身を他世に捨てて諸佛の前に生じて無生忍を得ん。是故に智者當に心を繫けて諦かに無量壽佛を觀すべし。無量壽佛を觀ぜん者は一の相好より入れ。但眉間の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ、眉間の白毫を見たまつる者は八萬四千の相好自然に當に現すべし。無量壽佛を見たまつる者は即ち十方無量の諸佛を見たまつる、無量の諸佛を見ることを得るが故に、諸佛現前に授記したまふ。是を徧く一切の色身を觀する想と爲し、第九の觀と名く。此觀を作すをば名けて正觀と爲し、若し他觀するをば名けて邪

【二七】 第十、觀音

觀と爲す。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「無量壽佛を見たてまつることを了了分明にし已りな

ば、次に復當に觀世音菩薩を觀すべし。此菩薩の身の長八十萬億那由他由旬なり、身は紫

金色なり、頂に肉髻有り、頂に圓光有り、面各百千由旬なり。其圓光の中に五百の化

佛有り、釋迦牟尼佛の如し、一一の化佛に五百の化菩薩有り、無量の諸天を以て侍者と爲

り、擧身の光中に五道の衆生の一切の色相皆中に於て現す。頂上には毘楞伽摩尼寶を以て

天冠と爲り、其天冠の中に一の立てる化佛有り、高さ二十五由旬なり。觀世音菩薩の面は

閻浮檀金の色の如し。眉間の毫相に七寶の色を備へたり、八萬四千種の光明を流出す。

一一の光明に無量無數百千の化佛有り、一一の化佛無數の化菩薩を以て侍者と爲り、變

現自在にして十方世界に滿つ、譬へば紅蓮華の色の如し。八十億の光明有り、以て瓔珞

と爲り、其瓔珞の中に普く一切の諸の莊嚴の事を現す。手掌には五百億の雜蓮華の色を

作せり。手の十指の端、一一の指端に八萬四千の畫有り、猶し印文の如し、一一の畫に八

萬四千の色有り、一一の色に八萬四千の光有り、其光柔軟にして、普く一切を照す、此寶

手を以て衆生を接ひし。足を擧ぐる時足下に千輻輪の相有り、自然に化して五百億の光明

臺と成る、足を下すとき金剛摩尼の華有り、一切に布散して彌滿せずといふこと莫し。其

餘の身相衆好具足せり。佛の如くにして異なること無し。唯頂上の肉髻と及び無見頂相

とのみ世尊に及ばず。是を觀世音菩薩の眞實の色身を觀する想と爲し、第十の觀と名く。

【譬へば等】 化佛侍者の多きを喻ふ

【足を下す時等】

足下に踏む蓮花は金剛摩尼二寶の所成なり。

【眞實の色身】 卽ち應身なり。

【諸禍に遇はず等】
これ現難を除く。

【八】 第十一勢至

【有縁の衆生】此
觀を修する者即ち
有縁の人なり。

佛、阿難に告げたまはく、「若し觀世音菩薩を觀んと欲する者有らば、當に是觀を作すべし。是觀を作す者は諸禍に遇はず、業障を淨除し、無數劫の生死の罪を除く。此の如き菩薩は唯其名を聞くすら無量の福を獲、何に況んや、諦かに觀ぜんをや。若し觀世音菩薩を觀ぜんと欲する者有らば、先づ頂上の肉髻を觀じ、次に天冠を觀ぜよ、其餘の衆相亦次第に之を觀じて、亦明了なること掌中を觀るがごとくならしめよ。是觀を作すをば名けて正觀と爲し、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す。」

次に復當に大勢至菩薩を觀すべし。此菩薩の身量大小亦觀世音の如し。圓光は面各百二十五由旬なり、二百五十由旬を照す。擧身の光明十方の國を照すに、紫金の色を作せり。有縁の衆生は皆悉く見ることを得。但此菩薩の一毛孔の光を見れば、即ち十方無量の諸佛の淨妙の光明を見たてまつる。是故に此菩薩を號して無邊光と名く。智慧の光を以て普く一切を照す、三塗を離れしむるに無上力を得たり、是故に此菩薩を號して大勢至と名く。此菩薩の天冠に五百の寶華有り、一一の寶華に五百の寶臺有り、一一の臺の中に十方諸佛の淨妙の國土の廣長の相、皆中に於て現す。頂上の肉髻は盞頭摩華の如し、肉髻の上に於て一の寶餅有り、諸の光明を盛れて普く佛事を現す。餘の諸の身相は觀世音の如く、等しくして異なること有ること無し。此菩薩行く時、十方の世界一切震動す、地の動ずる處に當りて五百億の寶華有り、一一の寶華莊嚴高顯なること極樂世界の如し。此菩薩坐する時七寶の國土一時に動搖す、下方の金光佛刹より、乃し上方の光明王佛刹

【苦】三界の苦に非ず、淨土の苦なり、これ下位を遊めて上位に昇らしめ、下證を轉じて上證をえしむるに名く。

【胞胎】三界四生の生死なり。

【九】第十二善觀想。先に自身を、後に極樂の依正を具觀す、是れ往生のためなり。

【三】第十三雜想。是れ唯正報の大小不同を觀するなり。
【至心】淨土に生ぜんと専ら求むる心。

に至るまで、其中間に於て無量阿僧祇の分身の無量壽佛、分身の觀世音大勢至、皆悉く雲の如く極樂國土に集り、空中に徧ち塞りて蓮華座に坐し、妙法を演說して苦の衆生を度したまふ。此觀を作すをば名けて正觀と爲し、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す。大勢至菩薩を見る、是を大勢至の色身を觀する想と爲し、第十一の觀と名く。此菩薩を觀する者は無量劫阿僧祇の生死の罪を除く、是觀を作す者は胞胎に處せず、常に諸佛淨妙の國土に遊ぶ。此觀成就じ畢るを名けて、具足して觀世音大勢至を觀すと爲す。

此事を見る時當に自心を起すべし。西方極樂世界に生じて、蓮華の中に於て結跏趺坐し蓮華合する想を作し、蓮華開くる想を作せ。蓮華開く時、五百色の光有つて來つて身を照すと想へ、眼目閉くと想へ、佛菩薩の虚空の中に滿ちたまへるを見るとき、水鳥樹林及與諸佛の出す所の音聲皆妙法を演ぶ、十二部經と合す、出定の時憶持して失せざれ。此事を見已るを無量壽佛の極樂世界を見ると名く、是を普觀想と爲し、第十二の觀と名く。無量壽佛、化身無數にして觀世音大勢至と與に、常に此行人の所に來至したまふ。

佛阿彌及諸聖者に告げたまはく、若し至心有つて西方に生ぜんと欲せば、先づ當に一の丈六の像の池水の上に在すを觀すべし、先の所説の如き無量壽佛は身量無邊なり、是れ凡夫心力の及ぶ所に非ず。然るに彼如來宿願力の故に、憶想すること有れば必ず成就することを得。但佛像を想ふすら無量の福を得、何に況んや佛の具足せる身相を觀するをや。阿彌陀佛の神通如意にして十方の國に於て變現したまふこと自在なり、或は大身を現すれ

【名第十三觀】上

來定善十三觀を終る、是れ韋提の終る、我思惟正受の致請に答ふるなり。

【三】上品上生、

以下三輩散善の義を説き、散機を攝せんために三福九品を説くなり、各一品に出入あるも、十

一門義ありとし、今初に總明告命。

【上品上生者】次

に辨定其位。

【若し衆生】第三

に總舉有緣之類。

【何等をか三】第

四に辨定三心以爲

正因。

ば虚空の中に満ち、或は小身を現すれば丈六八尺なり、現する所の形皆眞金色なり。圓光の化佛及び寶蓮華は上に説く所の如し。觀世音菩薩及び大勢至、一切の處に於て身同じ。衆生但首相を觀て是れ觀世音と知り、是れ大勢至と知る。此二菩薩阿彌陀佛を助けて普く一切を化す。是を雜想の觀と爲し、第十三の觀と名く。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、『上品上生の者とは、若し衆生有つて彼國に生

ぜんと願ぜば、三種の心を發すべし、即便ち往生す。何等をか三と爲す。一には至誠心、

二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具する者は必ず彼國に生ず。復三種の衆生有

り、當に往生を得べし。何等をか三と爲す。一には慈心にして殺さず、諸の戒行を具す。

二には大乘の方等經典を讀誦す。三には六念を修行す。廻向發願して彼國に生ぜん願

す。此功德を具して一日乃至七日すれば即ち往生を得。彼國に生ずる時、此人精進勇猛

なるが故に、阿彌陀如來、觀世音、大勢至、無數の化佛、百千の比丘、聲聞大衆、無數の

諸天、七寶の宮殿と與なり。觀世音菩薩は金剛臺を執り、大勢至菩薩と與に行者の前に至

り、阿彌陀佛は大光明を放つて行者の身を照し、諸の菩薩と與に、手を授けて迎接した

まふ。觀世音大勢至無數の菩薩と與に行者を讚歎して、其心を勸進す、行者見已りて歡喜

踊躍し、自ら其身を見れば、金剛臺に乗じて佛後に隨從す。彈指の頃の如きに彼國に往生

す。彼國に生じ已りて佛の色身の衆相具足したまへるを見たてまつり、諸の菩薩の色相具

足せるを見る。光明寶林妙法を演説す、聞き已つて即ち無生法忍を悟る。須臾の間を経

【三】上品中生、大乘次善の凡夫。

【宿を経て等】淨土には晝夜なれば華の開合を以て晝夜とす。今は此土の一夜を宿とし華合すとす。

【三】上品下生、大乘下善の凡夫。

て諸佛に歷事して十方界に遍じ、諸佛の前に於て次第に授記せられ、還つて本國に到つて無量百千の陀羅尼門を得。是を上品上生の者と名く。

上品中生の者とは、必ずしも方等經典を受持し讀誦せざれども、善く義趣を解して第一義に於て心驚動せず、深く因果を信じて大乘を誘せず。此功德を以て廻向して極樂國

に生ぜん」と願求す。此行を行する者命終らんと欲する時、阿彌陀佛、觀世音大勢至無量の

大眾と與に、眷屬に圍繞せられて、紫金臺を持して行者の前に至りたまひ、讚じて言はく、「法子汝大乘を行じて第一義を解す、是故に我今來つて汝を迎接す」と。千の化佛と與に一

時に手を授けたまふ。行者自ら見れば紫金臺に坐せり、合掌叉手して諸佛を讚歎したてまつる。一念の頃の如きに即ち彼國の七寶池の中に生ず。此紫金臺は大寶華の如し、宿を

經て則ち開く、行者の身紫摩金色と作る。足下に亦七寶の蓮華有り。佛及び菩薩俱時に光明を放ちて行者の身を照したまふ。目即ち開明なり、前の宿習に因つて普く衆聲を聞くに

純ら甚深の第一義諦を説く。即ち金臺より下りて佛を禮し、合掌して世尊を讚歎したてまつる。七日を経て時に應じて即ち阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得。時に應じて即ち

能く飛行して、遍く十方に至つて諸佛に歷事し、諸佛の所に於て諸の三昧を修す。一小劫を経て無生忍を得、現前に授記せらる。是を上品中生の者と名く。

上品下生とは、亦因果を信じて大乘を誘せず、但無上道心を發す。此功德を以て廻向して、極樂國に生ぜん」と願求す。行者命終らんと欲する時、阿彌陀佛及び觀世音大勢至

三四 次に上品上生、小乘根性の善凡夫なり。

諸の眷屬と與に、金蓮華を持して五百の化佛を化作して、來つて此人を迎へたまふ。五百の化佛一時に手を授けて讚じて言はく、「法子汝今清淨にして無上道心を發す、我來つて汝を迎ふ」と。此事を見る時、即ち自ら身を見れば金蓮華に坐す、坐し已れば華合し、世尊の後に隨つて即ち七寶池の中に往生することを得、一日一夜にして蓮華乃ち開く。七日の中に乃ち佛を見たてまつることを得。佛身を見ると雖も、諸の相好に於て心明了ならず、三七日の後に於て乃ち了了として見たてまつる。衆の音聲の皆妙法を演ぶるを聞く、十方に遊歴して諸佛を供養し、諸佛の前に於て甚深の法を聞く、三小劫を経て百法門門を得て歡喜地に住す。是を上品下生の者と名く、是を上輩生想と名け、第十四の觀と名く。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「上品上生の者とは、若し衆生有つて五戒を受持し、八戒齋を持し、諸戒を修行して五逆を造らさず、衆の過患無からん。此善根を以て廻向して西方極樂世界に生ぜん」と願求す。命終の時に臨んで、阿彌陀佛諸の比丘と與に、眷屬に圍繞せられて、金色の光を放ちて、其人の所に至つて、苦空無常無我を演説し、出家の衆苦を離るることを得ることを讚歎したまふ。行者見已りて心大いに歡喜す。自ら己身を見れば蓮華臺に坐す、長跪合掌して佛の爲に禮を作す、未だ頭を擧げざる頃に、即ち極樂世界に往生することを得。蓮華尋ち開く。華の開く時に當つて衆の音聲の四諦を讚歎するを聞く、時に應じて即ち阿羅漢道を得、三明六通有つて八解脱を具す。是を上品上生の者と名く。」

【三五】 中品中生、小乘下善の凡夫人

【三世諸佛の教】 三世の諸佛並に斷惡修善の持戒を勸む、故に今の持戒即ち是れ隨順なり

【二六】 中品下生、世善上福の凡夫。

【四十八願】 無量壽經の同文參照。

【二七】 下品上生、造十惡輕罪の凡夫

中品中生の者とは、若し衆生有つて若は一日一夜八戒齋を受持し、若は一日一夜沙彌戒を持し、若は一日一夜具足戒を持し、威儀缺くること無く、此功德を以て廻向して極樂國に生ぜんと願求す。戒香薰修するをもて此の如きの行者命終らんと欲する時、阿彌陀佛諸の眷屬と與に金色の光を放ち、七寶の蓮華を持して行者の前に至りたまふを見る。行者自ら聞けば空中に聲有つて讚じて言はく、「善男子、汝が如き善人、三世諸佛の教に隨順するが故に、我來つて汝を迎ふ」と。行者自ら見れば蓮華の上に坐す、蓮華則ち合す、西方極樂世界に生じて寶池の中に在り、七日を経て蓮華則ち乃く。華既に敷き已れば目を開き合掌して世尊を讚歎し、法を聞いて歡喜して須陀洹を得、半劫を経て阿羅漢を成す。是を中品中生の者と名く。

中品下生の者とは、若し善男子善女人有つて父母に孝養し、世の仁慈を行げんに、此人命終らんと欲する時、善知識の其が爲に廣く阿彌陀佛の國土の樂事を説き、亦法藏比丘の四十八願を説くに遇へり、此事を聞き已つて即ち命終す。譬へば壯士の臂を屈伸する頃のごとく、即ち西方極樂世界に生ず。生じて七日を経て、觀世音及び大勢至に遇ひ、法を聞いて歡喜す。一小劫を経て阿羅漢を成す。是を中品下生の者と名く、是を中輩生想と名け、第十五の觀と名く。

佛、阿難及び章提希に告げたまはく、「下品上生の者とは、或は衆生有つて衆の惡業を作る、方等經典を誹謗せずと雖も、此の如きの愚人多く衆惡を造つて慚愧有ること無し。

【南無阿彌陀佛】
稱名念佛の明文なり。

【佛名法名を聞き
等】善導の釋にい
ふ、重擧行者之益
非但念佛獨得往生
法僧通念、亦得去
也と。
【三八】下品中生、
破戒次罪の凡人

命終らんと欲する時、善知識爲に大乘十二部經の首題の名字を讀するに遇へり。是の如き諸經の名を聞くを以ての故に、千劫の極重の惡業を除却す。智者復教へて合掌叉手して南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に五十億劫生死の罪を除く。爾時、彼佛即ち化佛、化觀世音、化大勢至を遣はして、行者の前に至らしめて讀じて言はく、「善男子、汝佛名を稱するが故に諸罪消滅せり、我來つて汝を迎ふ」と。是語を作し已りたまふに、行者即ち化佛の光明の其室に徧滿せるを見る。見已つて歡喜して、即便命終す、寶蓮華に乗じて化佛の後に隨つて寶池の中に生ず。七七日を經て蓮華乃ち敷く。華の敷く時に當つて大悲觀世音菩薩及び大勢至、大光明を放ちて其人の前に住して、爲に甚深の十二部經を説きたまふ。聞き已つて信解して無上道心を發し、十小劫を經て百法明門を具して、初地に入ることを得。是を下品上生の者と名く、佛名法名を聞き、及び僧名を聞くことを得、三寶の名を聞いて即ち往生を得。』

佛、阿難及び菩提希に告げたまはく、『下品中生の者とは、或は衆生有つて五戒八戒及び具足戒を毀犯す。此の如きの愚人僧祇物を偷み、現前僧物を盜み、不淨說法して慚愧有ること無く、諸の惡業を以て自ら莊嚴す。此の如き罪人惡業を以ての故に當に地獄に墮すべし。命終らんと欲する時地獄の衆火一時に俱に至る、善知識の大慈悲を以て爲に阿彌陀佛の十力威徳を説き、廣く彼佛の光明神力を説き、亦戒定慧解脱解脱知見を讀するに遇へり。此人聞き已つて八十億劫の生死の罪を除く。地獄の猛火化して清涼の風と爲つて諸の

【三九】下品下生、具造五逆重罪の凡夫。

天華を吹く。華の上に皆化佛菩薩有つて此人を迎接したまふ。一念の頃の如きに即ち往生を得。七寶池の中に蓮華の内に於て六劫を経て蓮華乃ち敷く。華の敷く時に當つて觀世音大勢至、梵音聲を以て彼人を安慰して、爲に大乘甚深の經典を説く。此法を聞き已つて、時に應じて即ち無上道心を發す。是を下品中生の者と名く。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「下品下生の者とは、或は衆生有つて不善の業たる五逆十惡を作つて諸の不善を具す。此の如き愚人惡業を以ての故に、當に惡道に墮して多劫を経歴して苦を受くること窮り無かるべし。是の如き愚人命終の時に臨んで、善知識の種種に安慰して、爲に妙法を説きて教へて念佛せしむるに遇へり。此人苦に逼められて念佛するに違あらず、善友告げて言はく、「汝もし念すること能はずんば、當に無量壽佛と稱すべし」と。是の如く至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に、念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除く。命終の時金蓮華の猶し日輪の如く、其人の前に住するを見る。一念の頃の如きに即ち極樂世界に往生することを得。蓮華の中に於て十二大劫を滿じて、蓮華當に開く。觀世音大勢至、大悲の音聲を以て其が爲に、廣く諸法實相除滅罪の法を説く。聞き已つて歡喜して、時に應じて即ち菩提の心を發す。是を下品下生の者と名く。是を下輩生想と名け、第十六の觀と名く。」

【三〇】第三大段、得益分。

是語を説きたまふ時、韋提希五百の侍女と與に佛の所説を聞き、時に應じて即ち極樂世

【三二】第四大段、
流通分、初に王宮
會流通。

【若し念佛せん者
等】以下念佛三昧
の功能超絶して實
に雜善の比に非る
を顯す。
【三三】以下付屬念
佛。上來定放兩門
の益を説くも、今
獨り念佛の付屬あ
るは、佛の本願に
望むるに、意、一
向專稱彌陀佛名に
あるを以てなり。
【三四】次に耆闍會
初に序分。

界の廣長の相を見、佛身及び二菩薩を見ることを得て、心に歡喜を生じて未曾有なりと
歎じて、廓然として大悟して無生忍を得。五百の侍女阿耨多羅三藐三菩提心を發して、彼
國に生ぜんと願す。『世尊悉く皆當に往生すべし、彼國に生じ已りなば諸佛現前三昧を得
ん』と記したまふ。無量の諸天は無上道心を發す。

爾時、阿難即ち座より起つて、前んで佛に白して言さく、『世尊當に何んが此經を名くべ
き。此法の要をば當に云何が受持すべきか。』佛、阿難に告げたまはく、『此經を觀極樂國土
無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩と名け、亦淨除業障生諸佛前と名くべし。汝當に受持し
て忘失せしむること無かるべし。此三昧を行ぜん者は、現身に無量壽佛及び二大士を見る
ことを得ん。若し善男子善女人、但佛の名二菩薩の名を聞くすら、無量劫の生死の罪を除
く、何に況んや憶念せんをや。若し念佛せん者は當に知るべし、此人は是れ人中の分陀利
華なり、觀世音菩薩、大勢至菩薩其勝友と爲る、當に道場に坐すべきをもつて、諸佛の家
に生ずべし。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝能く是語を持せよ、是語を持せよとは即ち是れ無量壽佛の
名を持せよとなり。』佛、此語を説きたまふ時、尊者目捷連、阿難及び韋提希等、佛の所説
を聞きたてまつつて皆大いに歡喜す。

爾時、世尊足虚空を歩みて耆闍崛山に還たまふ。爾時、阿難廣大衆の爲に上の如きの
事を説く。無量の諸天及び龍夜叉、佛の所説を聞きたてまつつて、皆大いに歡喜して佛を

禮したてまつつて退きぬ。

佛ぶつ說せつ觀くわん無む量りやう壽じゆ經きやう終

佛說阿彌陀經

第二卷	經典部
-----	-----

依報莊嚴を明す、
第一に寶行樹。
【四】次に寶池樓閣蓮華。

【五】三に天樂、金地、雨華、供佛經行(行道のこと)

【六】四に化鳥演法、風樹作樂。
【五根】進、信、念、定、慧、五力とは五根を惡むを排斥する意。
【佛を念じ等】化鳥妙法を傳へ人の勝心を發し、三寶の芳名を念じ百生の障累を消す。

を以て地に布けり。四邊に階道有り、金銀琉璃玻瓈をもつて合成せり。上に樓閣有り、亦金銀琉璃、玻璃碑磧、赤珠碼碯を以て而も之を嚴飾せり。池の中に蓮華あり、大いさ車輪の如し、青色には青光あり、黄色には黃光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり。舍利弗、極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

又舍利弗、彼佛の國土には常に天樂を作す。黃金を地と爲り。晝夜六時に曼陀羅華を雨らす。其國の衆生常に清旦を以て、各衣被を以て、諸の妙華を盛て、他方十萬億の佛を供養す。即ち食時を以て還つて本國に到つて飯食し經行す。舍利弗、極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

復次に舍利弗、彼國には常に種種奇妙なる雜色の鳥有り、白鶻孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥なり。是諸の鳥、晝夜六時に和雅の音を出す、其音五根五力、七菩提分、八聖道分是の如き等の法を演暢す。其土の衆生是音を聞き已つて、皆悉く佛を念じ法を念じ佛を念す。舍利弗、汝此鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふこと勿れ。所以は何ん。彼佛の國土には三惡趣無し。舍利弗、其佛の國土には尙し三惡道の名も無し、何に況んや實有らんや。是衆の鳥は皆是れ阿彌陀佛の法音をして、宣流せしめんと欲して變化して作す所なり。舍利弗彼佛の國土には微風吹いて、諸の寶行樹及び寶羅網を動して、微妙の音を出せり。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如し。是音を聞く者は皆自然に念佛念法念僧の心を生ず。舍利弗、其佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

【七】以下正報に就いて莊嚴を明す初に化主の功德。

【彼佛の光明等】彌陀を無量光、即ち光明に約して名を得。

【彼佛の壽命等】彌陀を無量壽、即ち壽命に約して名を得。

【八】別して菩薩の所得を明す、阿鞞跋致。不退轉と譯す。

【九】以下衆生を勸めて念佛往生せしむるを明す。

【少善根】雜善を簡び念佛の行を明す。

【一〇】念佛行を修すべきを勸む。是利釋尊の選擇念佛。

【二】以下六方段東方世界。

舍利弗、汝が意に於て何ん、彼佛を何が故ぞ阿彌陀と號けたてまつる。舍利弗、彼佛の光明無量にして、十方の國を照すに障礙する所無し。是故に號けて阿彌陀と爲す。又舍利弗、彼佛の壽命及び其人、無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名く。舍利弗、阿彌陀佛成佛より已來今に於て十劫なり。又舍利弗、彼佛に無量無邊の聲聞弟子有り、皆阿羅漢なり、是れ算數の能く知る所に非ず。諸の菩薩衆も亦復是の如し。舍利弗、彼佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

又舍利弗、極樂國土には衆生生ずる者は皆是れ阿鞞跋致なり。其中に多く一生補處有り。其數甚だ多し、是れ算數の能く知る所に非ず、但無量無邊阿僧祇劫を以て説くべし。

舍利弗、衆生聞かん者は應當に發願して彼國に生ぜんと願すべし。所以は何ん。是の如きの諸の上善人と俱に一處に會することを得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁を以ては彼國に生ずることを得べからず。

舍利弗、若し善男子善女人有つて、阿彌陀佛を説くを聞いて名號を執持すること、若し一日、若は二日、若は三日、若は四日、若は五日、若は六日、若は七日一心不亂なれば、其人命終の時に臨んで、阿彌陀佛諸の聖衆と與に現に其前に在す。是人終る時心顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得。舍利弗、我是利を見るが故に、此言を説く。若し衆生有つて是説を聞かん者は應當に發願して彼國土に生ずべし。

舍利弗、我今、阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如く、東方に亦阿閼鞞佛、須彌相

説く。若し衆生有つて是説を聞かん者は應當に發願して彼國土に生ずべし。

【廣長の舌相】 不
慮妄の相。

佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛有す。是の如き等の恆河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆うて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【三】 南方世界。

舍利弗、南方世界に日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛有す。是の如き等の恆河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆うて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【三】 西方世界。

舍利弗、西方世界に無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛有す。是の如き等の恆河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆うて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【三】 北方世界。

舍利弗、北方世界に焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛有す。是の如き等の恆河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆うて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【五】 下方世界。

舍利弗、下方世界に師子佛、名聞佛、名光佛、達摩佛、法幢佛、持法佛有す。是の如き等の恆河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆うて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【一六】 上方世界。

（一六）しやりほつ、上方世界に梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛有す。是の如き等の恆河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆うて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【一七】 經名に約して三世の利益を顯す。

（一七）しやりほつ、汝が意に於て云何。何が故ぞ名けて一切諸佛所護念經と爲る。舍利弗、若し善男子善女人有つて、是諸佛所説の名、及び經の名を聞かん者は、是諸の善男子善女人皆一切諸佛の爲に共に護念せられて、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得。是故に舍利弗、汝等皆當に我語及び諸佛の所説を信受すべし。舍利弗、若し人有つて已に發願し、今發願し、當に發願して、阿彌陀佛國に生ぜんと欲せん者は、是諸人等、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得て、彼國土に於て若し已に生じ、若し今生じ、若し當に生ぜん。是故に舍利弗、諸の善男子善女人、若し信すること有らん者は、應當に發願して彼國土に生ずべし。

【一八】 諸佛釋尊を讚歎す。

（一八）しやりほつ、我今諸佛の不可思議功德を稱讚するが如く、彼諸佛等も亦我不可思議功德を稱説して、是言を作したまはく、釋迦牟尼佛、能く甚難希有の事を爲して、能く娑婆國土の五濁惡世の劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命燭の中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に是一切世間難信の法を説く。舍利弗、當に知るべし、我五濁惡世に於て此難事を行して阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に此難信の法を説く。是を甚難

【佛此經】以下第
三大段流通分を明
す。

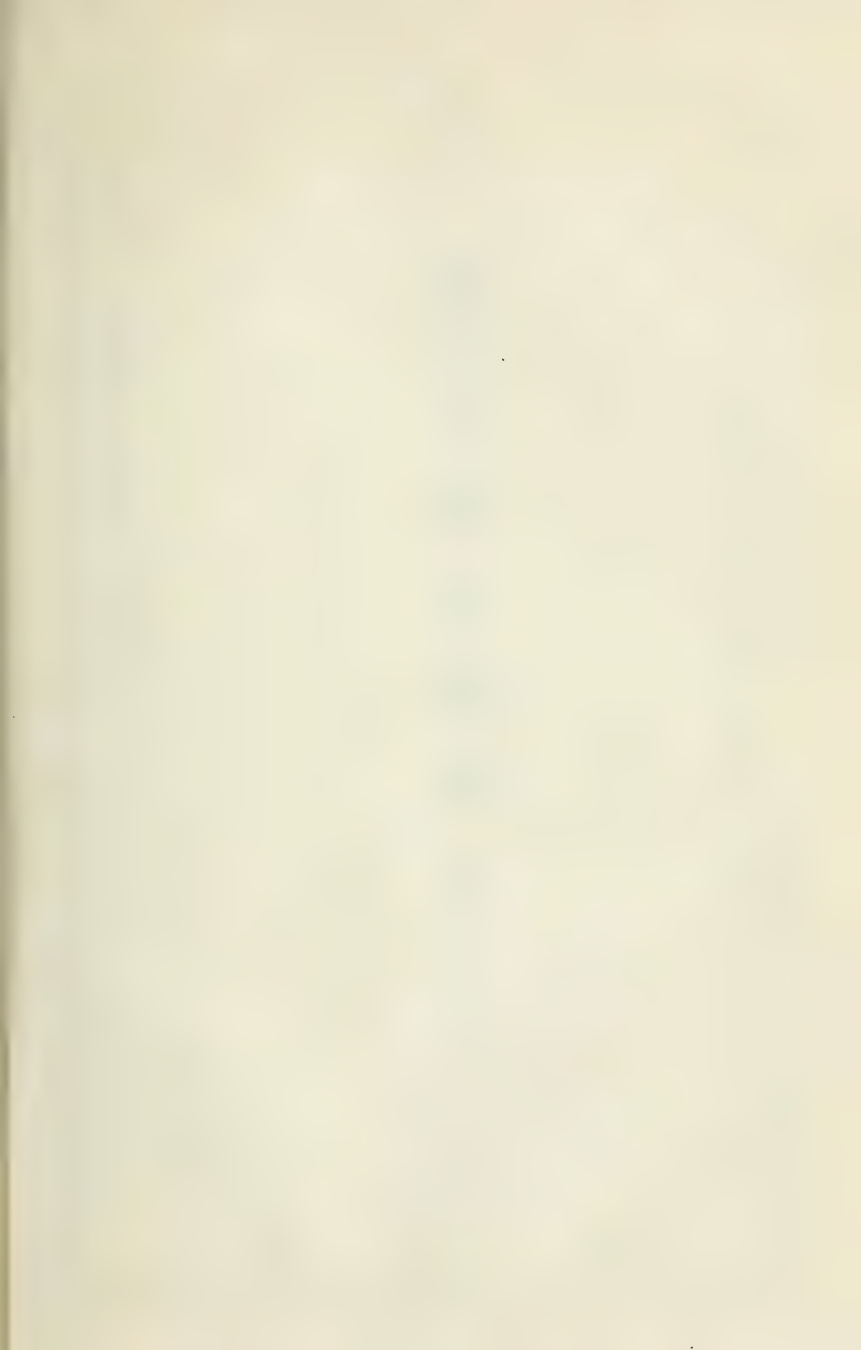
と爲す。佛、此經を説き終りたまふに、舍利弗及び諸の比丘、一切世間天人阿修羅等、佛の所説を聞き奉つて、歡喜し信受して禮を作して去りきぬ。

佛說阿彌陀經畢

佛說無量壽經

(眞宗所用)

經典部
第二卷



【一】序分の中第一に證信序、初に六事成就を説く。六事とは信、聞、時、主處、衆、【王舍城】中印度摩迦陀國の都城。

【著圍崑山】靈鷲山、鷲峯等と譯す。

【優樓頻伽迦葉】以下之三迦葉は兄弟にして、事火外道なりしが後佛に歸依す。

【摩訶迦葉】佛十大弟子の一、頭陀【舍利弗】佛十大弟子の一、智慧第一。

【大目犍連】佛十大弟子の一、神通第一。衆菩薩能く星宿を知ること衆僧中第一。

【滿願子】佛十大弟子の一、說法第一。

【羅云】羅睺羅のこと、佛の長子、密行第一。

【阿難】佛十大弟

佛說無量壽經 卷上

曹魏天竺三藏康僧鑑譯す

我聞く、是の如し。一時、佛、王舍城耆闍崛山の中に住して、大比丘衆、萬二千人と俱なりき。一切大聖、神通已に達せり。其名を尊者了本際、尊者正願、尊者正語、尊者大號、尊者仁賢、尊者離垢、尊者名聞、尊者善實、尊者具足、尊者牛王、尊者優樓頻伽迦葉、尊者伽耶迦葉、尊者那提迦葉、尊者摩訶迦葉、尊者舍利弗、尊者大目犍連、尊者劫賓那、尊者大住、尊者大淨志、尊者摩訶周那、尊者滿願子、尊者離障、尊者流灌、尊者堅伏、尊者而王、尊者異乘、尊者仁性、尊者嘉樂、尊者善來、尊者羅云、尊者阿難と曰ふ、皆斯の如き等、上首たる者なり。

(二)また、

又大乘の衆菩薩と俱なりき。普賢菩薩、妙德菩薩、慈氏菩薩等の此賢劫中の一切の菩薩、又賢護等の十六正士、善思議菩薩、信慧菩薩、空無菩薩、神通華菩薩、光英菩薩、慧上菩薩、智幢菩薩、寂根菩薩、願慧菩薩、香象菩薩、寶英菩薩、中住菩薩、制行菩薩、解脫菩薩なり。皆普賢大士の徳に遵ひ、諸の菩薩の無量の行願を具し、一切功德の法に安住せり。十方に遊歩して權方便を行じ、佛の法藏に入りて彼岸を究竟し、無量の世界に於て等覺を成ずることを現じ、兜率天に處して正法を弘宣し、彼天宮を捨て、神を母胎に降し、

【一】子の一。多聞第一。

【二】次に菩薩の德を明す。

【慈氏】彌勒菩薩のこと。

【賢劫】現在世のこと、この劫中に千佛出世すといふ。

【普賢・德】普賢の十大願行。

【行願】六度四攝等の行、四弘誓願十大願等の願。

【兜率天に處し等】以下滅度を示現しまで謂ゆる八相成道を明す。

【六種常動】動、涌、震、擊、吼、爆の六相。

【釋梵】帝釋と梵天。

【算計等】謂ゆる六藝。

【道術】内外諸道の金流。

【金流】尼連禪河のこと。

【吉祥】吉祥草。梵音クシャ(クニ)の今成道せんとする時その草を奉りたる童子を指す。

【功祚】祚は位。

右脇より生じて行くこと七歩を現す。光明顯耀にして普く十方を照し、無量の佛土、六種に震動す。聲を擧げて自ら稱すらく、「吾當に世に於て無上尊と爲るべし」と。釋梵奉侍し、天人歸仰す。算計、文藝、射御を示現し、道術を博綜し、群籍を貫練す。後園に遊んで武を講じ藝を試む、宮中色味の間に處することを現じ、老病、死を見て世の非常を悟り、國と財と位とを棄て山に入りて道を學ぶ。服乘の白馬、寶冠、瓔珞、之を遺して還さしめ、珍妙衣を捨てて法服を著し、鬚髮を髡除し、樹下に端坐す。勤苦六年、行、所應の如く、五濁刹に現じて群生に隨順し、塵垢有るを示して金流に沐浴す。天、樹枝を按じて攀ぢて池を出づることを得しむ。靈禽翼從して道場に往詣し、吉祥、感徴して功祚を表章す。哀んで施草を受け、佛樹の下に敷き跏趺して坐す。大光明を奮ひ魔をして之を知らしむ。魔は官屬を率ゐて來り逼試す、制するに智力を以てし皆降伏せしむ。微妙法を得て最正覺を成す。釋梵祈勸して轉法輪を請す。佛の遊歩を以てし、佛吼をもて吼す。法鼓を打ち、法囊を吹き、法劍を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を曜かし、法雨を湖ぎ、法施を演べ、常に法音を以て諸の世間を覺らしむ。光明は普く無量の佛土を照し、一切世界六種に震動す。總て魔界を攝して魔の宮殿を動す、衆魔怖怖して歸伏せざるは莫し、邪網を搦裂し諸見を消滅し、諸の塵勞を散じ、諸の欲壘を壞す。法城を嚴護し、法門を開闢す。垢汚を洗濯し、清白を顯明す。佛法を光融し、正化を宣流す。國に入りて分衛し、諸の豐膳を獲、功德を貯へ、福田を示す。法を宣べんと欲して欣笑を現す、諸の法藥

佛果を云ふ。【佛樹】 菩提樹のこと。【諸見】 邪見身見等の見惑。【摩勞】 心を勞する摩、煩惱のこと。【欲蟻】 欲深きを蟻に喩ふ。【分衛】 ビンダパーテイカ (Pindapattika) 托鉢のこと。【福田】 三寶をいふ。【三苦】 苦苦、壞苦、行苦。【道意】 菩提心のこと。

をもて三苦を救療す。道意無量の功德を顯現し、菩薩に記を授け、等正覺を成ぜしむ。滅度を示現しては、拯濟すること極り無し。諸漏を消除し、衆の徳本を植ゑ、功德を具足すること微妙にして量り難し。諸佛の國に遊び普く道教を現す。其修行する所、清淨無穢なり。譬へば幻師の衆の異像を現じ、男と爲し女と爲し、變ぜざる所無く、本覺明了にして意の所爲に在るが如し。此諸の菩薩も亦復是の如し。一切の法を學んで貫綜縷練し、所住、安諦にして化を致さざること靡く、無數の佛土皆悉く普く現す。未だ曾て慢恣せず、衆生を愍傷す。是の如きの法、一切具足せり。菩薩の經典、要妙を究暢し、名稱普く至りて十方を導御す。無量の諸佛、咸共に護念したまふ。佛の所住は皆已に住するを得、大聖の所立は皆已に立す。如來の導化は各能く宣布し、諸の菩薩の爲に大師と作り、甚深の禪慧を以て衆人を開導す。諸法性に通じ、衆生の相に達す、諸國を明了し、諸佛を供養す。其身を化現すること猶ほ電光の如し。善く無畏の網を學し幻化の法を曉了す。魔網を壞裂し、諸の纏縛を解く。聲聞、緣覺の地を超越し、空、無相、無願三昧を得たり。善く方便を立て三乘を顯示し、此中下に於て減度を現す。亦所作無く亦所有無し、不起不滅にして平等法を得たり。無量の總持、百千の三昧を具足し成就す。諸根智慧、廣普寂定にして、深く菩薩の法藏に入り、佛華嚴三昧を得て一切の經典を宣暢し演説す。深定門に住し、悉く現在無量の諸佛を觀る。一念の頃に周遍せざること無し。諸の劇難と諸の閑と不閑とを濟ひ、眞實の際を分別し顯示するに、諸の如來の辯才の智を得、衆の言音に入

るを無類といふ。
 【中下】 中は緣覺下は聲聞。
 【諸根】 總じては一切善法、別しては信等の五根。
 【佛華嚴三昧】 法界難心の三昧。
 【刺】 刺し、難處。地獄、餓鬼、畜生の三惡道。
 【人天等の佛道修行の閑ある處】 閑さへなき處。
 【眞實の際】 眞實のきはまり。眞如の理。
 【度世】 涅槃のこゝと。
 【庶類】 衆生。
 【不請の友】 大悲深きが故に請を待たず。
 【三】 序文の中、第二に發起序。初に阿難佛の容の異常なる所以を問ふ。
 【徧袒右肩】 右肩儀を脱ぐ。印度の禮儀。

りて一切を閑化す。世間諸の所有の法に超過し、心常に度世の道に歸住す。一切の萬物に於て隨意自在なり。諸庶類の爲に不請の友と作り、群生を荷負して之を重擔と爲す。如來甚深の法藏を受持し、佛種性を護りて常に絶えざらしむ。大悲を興し、衆生を愍み、慈辯を演べ、法眼を授く、三趣を杜ぎ、善門を開き、不請の法を以て諸黎庶に施すこと、純孝の子の父母を愛敬するが如し。諸の衆生に於て視ること自己の若くす。一切の善木、皆彼岸に度し、悉く諸佛の無量功德を獲、智慧聖明にして不可思議なり。是の如き等の菩薩大士、稱計すべからず、一時に來會せり。

爾時、世尊は諸根悅豫し、姿色清淨にして光顔巍巍たり。尊者阿難、佛の聖旨を承け、即ち座より起ち、徧袒右肩し、長跪合掌して佛に白して言さく、『今日、世尊、諸根悅豫し、姿色清淨にして光顔巍巍たること明淨鏡の影表裏に暢るが如く、威容顯曜にして、超絶無量なり、未だ曾て殊妙なること今の如くなるを瞻觀せず。唯然り、大聖、我心に念言すらく、『今日世尊、奇特法に住し、今日世尊、佛所住に住し、今日世眼、道師行に住し、今日世英、最勝道に住し、今日天尊、如來德を行じたまへり』去、來、現の佛は佛佛相念す。

今の佛も諸佛を念じたまふこと無きを得んや。何が故に威神光光たること乃ち爾るや。』と。

是に於て世尊、阿難に告げて曰はく、『云何ぞ阿難、諸天汝を教へて來り佛に問はしむるや、自ら慧見を以て、威顔を問へるや。』阿難、佛に白さく、『諸天、來りて我に教ふる者有ること無し、自ら所見を以て斯義を問ひたてまつるのみ。』佛、言はく、『善い哉、阿難、所問

【長跪】 兩膝を地につけ兩股を空に身を立て兩足地を指す敬禮なり。
 【世雄】 佛のこと。世中の最猛なり。
 【世眼】 佛のこと。世人の眼を開く。
 【世英】 佛のこと。佛智世に於て英勝。
 【天尊】 佛のこと。五天の上尊。
 【四】 次に阿難の問に對して、佛本意を明す。
 【無蓋の大悲】 蓋は覆蓋、覆ふことはさざる廣大の慈悲。
 【群萌】 衆生。
 【眞實の利】 念佛のこと。
 【靈瑞華】 優曇華のこと。
 【一食】 一食。一度の食事。
 【五】 以下正宗分。正宗分を第一、彌陀成佛の因果、第二、衆生往生の因果、第三、釋尊の勸誡の三に大別す。第一、彌陀成佛の因果を

甚だ快し、深き智慧、眞妙の辯才を發し、衆生を愍念して斯慧義を問へり、如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀す。世に出興する所以は道教を光闡し、群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり。無量億劫にも値ひ難く見難きこと、猶し靈瑞華の時時に乃ち出づるがごとし。今問へる所は、饒益する所多く、一切の諸天人民を開化す。阿難、當に知るべし、如來の正覺は、其智量り難く、導御する所多し、慧見無礙にして能く遏絶する無し。一食の力を以て能く壽命を住むること億百千劫無數無量にして復此に過ぎたり。諸根悅豫し、以て毀損せず、姿色不變にして光顏異ること無し。所以は何ん。如來は定慧究暢して極り無く、一切の法に於て自在を得たり。阿難、諦聽せよ、今汝が爲に説かん。』
 對へて曰はく、『唯然り、願樂して聞かんと欲す。』
 佛、阿難に告げたまはく、『乃往過去、久遠無量、不可思議、無央數劫に錠光如來、世に興出して、無量の衆生を教化し度脱し、皆得道せしめ、乃ち減度を取りたまひき。次に如來有り、名けて光遠と曰ふ。次を月光と名け、次を梅檀香と名け、次を善山王と名け、次を須彌天冠と名け、次を須彌等曜と名け、次を月色と名け、次を正念と名け、次を難垢と名け、次を無著と名け、次を龍天と名け、次を夜光と名け、次を安明頂と名け、次を不動地と名け、次を琉璃妙華と名け、次を琉璃金色と名け、次を金藏と名け、次を錠光と名け、次を篠根と名け、次を地動と名け、次を月像と名け、次を日音と名け、次を解脫華と名け、次を莊嚴光明と名け、次を海覺神通と名け、次を水光と名け、次を大香と名け、

明す中、初に因位に於ける法藏の發願を示す。

【鈍光云云】以下過去の諸佛を擧げて法藏が發願の縁を明す。

【如來云云】以下佛の十號。

【時に國王云云】以下法藏の發心總願を明し、世自在王佛との關係を敘す。

【光顯：震動す】世自在王佛の徳を讚嘆す。

次を離塵垢と名け、次を捨厭意と名け、次を寶篋と名け、次を妙頂と名け、次を勇立と名け、次を功德持慧と名け、次を蔽日月光と名け、次を日月瑠璃光と名け、次を無上瑠璃光と名け、次を最上首と名け、次を菩提華と名け、次を月明と名け、次を日光と名け、次を華色王と名け、次を水月光と名け、次を除癡瞋と名け、次を度蓋行と名け、次を淨信と名け、次を善宿と名け、次を威神と名け、次を法慧と名け、次を鸞音と名け、次を師子音と名け、次を龍音と名け、次を處世と名く。此の如き諸佛皆悉く已に過ぎたまへり。

爾時、次に佛有しき。世自在王如來、應供、等正覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名く。時に國王有り。佛の説法を聞きて心に悅豫を懷き、尋ち無上、正眞道意を發し、國を棄て、王を捐て、行きて沙門と作る。號して法藏と曰ふ。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如來の所に詣りて佛足を稽首し、右繞三匝し、長跪合掌して、頌を以て讚じて曰はく、

光顯巍巍として、威神極り無し
 是の如き發明、與に等しき者無し
 日月、摩尼、珠光の發耀も
 皆悉く隱蔽せられ、猶し聚墨の若し
 如來の容顏は、超世無倫なり
 正覺の大音、十方に響流す

【戒聞等】 戒定慧は多聞に依りて生じ精進によつて成る。

【人雄師子】 ともに佛のこと。

【願くは…安穩ならん】 法藏自らの願を述ぶ。

戒、聞、精進、三昧、智慧

威徳侶無く、殊勝希有なり

深く諦かに善く、諸佛の法海を念じ

深を窮め奥を盡し、其涯底を究む

無明、欲、怒、世尊には永く無し

人雄師子、神徳無量なり

功勳廣大にして、智慧深妙なり

光明 威相、大千を震動す

願くは我佛と作り、聖法王に齊しく

生死を過度して、解脱せざる磨けん

布施、調意、戒、忍、精進

是の如き三昧、智慧を上と爲す

吾誓ひて佛を得んに、普く此願を行じて

一切の恐懼に、爲に大安を作さん

假使佛有りて、百千億萬

無量の大聖、數恆沙の如くならんに

一切、斯等の諸佛を供養せんよりも

【泥洹】ニルヴァ
ナ(Nirvana)圓寂
と譯す、涅槃のこ
と。

【幸くは悔ゆる
なけん】諸佛の證
誠を請ふ一段。

如かず道を求めて、堅正にして却かざらんには

譬へば恆沙の如き、諸佛世界

復不可計、無數の刹土

光明 悉く照し、此諸國に徧からん

是の如く精進にして、威神量り難からん

我をして作佛せしめば、國土は第一にして

其衆は奇妙にして、道場は超絶し

國は泥洹の如く、等雙無けん

我當に哀愍して、一切を度脱すべし

十方より來生せんに、心悅清淨にして

已に我國に到らば、快樂安穩ならん

幸くは佛信明したまへ、是れ我真證なり

彼に發願して、所欲を力精せん

十方の世尊、智慧無礙なり

常に此尊をして、我心行を知らしめん

假令身を、諸の苦毒の中に止かんとも

我行は精進にして、忍んで終に悔ゆる不けん

【佛阿難に云云】
以下法藏の選擇を
明す。

【世饒王佛】世自
在王佛のこと。

佛、阿難に告げたまはく、『法藏比丘、此頌を説き已りて、佛に白して言はく、「唯然り、世尊、我無上正覺の心を發せり。願くは佛、我爲に廣く經法を宣へたまへ。我當に修行して佛國の清淨莊嚴、無量の妙土を攝取すべし。我をして世に於て速に正覺を成じ、諸の生死勤苦の本を抜かしめたまへ。』佛、阿難に語りたまはく、『時に世饒王佛、法藏比丘に告げたまはく、「修行する所の如き、莊嚴佛土は、汝自ら當に知るべし。』比丘、佛に白さく、「斯義弘深にして我境界に非ず。唯願くは世尊、廣く爲に諸佛如來の淨土の行を敷演したまへ。我此を聞き已りて當に説の如く修行し、所願を成滿すべし。』爾時、世自在王佛、其高明の志願深廣なるを知り、即ち法藏比丘の爲に經を説きて言はく、「譬へば大海の、一人升量せんに、劫數を経歴せば、尙底を窮めて其妙寶を得べきが如し。人至心精進に道を求めて止まざること有らば、會ず當に剋果すべし、何れの願か得られざらん」と。是に於て世自在王佛、即ち爲に廣く二百一十億の諸佛刹土、天人の善惡、國土の麤妙を説き、其心願に應じて悉く現じて之を與ふ。時に彼比丘、佛の所説を聞き、嚴淨の國土を皆悉く觀見し、無上殊勝の願を超發せり。其心寂靜にして、志所著無し、一切世間能く及ぶ者無し、五劫を具足して、莊嚴佛國、清淨の行を思惟し攝取せり。』阿難、佛に白さく、『彼佛國土の壽量幾何ぞや。』佛、言はく、『其佛の壽命は四十二劫なり。時に法藏比丘、二百一十億の諸佛妙土の清淨の行を攝取し、是の如く修し已りて、彼佛所に詣りて稽首禮足し、繞佛三匝し合掌して住り、佛に白して言さく、「世尊、我已に莊嚴佛土清淨の行

を攝取せり」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝今説くべし。宜しく知るべし是れ時なりし一切の大衆を發起悦可せしめん。菩薩聞きじらば此法を修行し、縁りて無量の願を満足すること致さん」と。比丘、佛に白さく、「唯聽察を垂れたまへ。我所願の如く、當に具に之を説くべし。」

【設ひ我佛を云云】

以下法藏の別願たる四十八願を明す

【一】 無三惡趣の願。

【二】 不更惡趣の願。

【三】 悉皆金色の願。

【四】 無有好醜の願。

【五】 宿命通の願

【六】 天眼通の願

【七】 天耳通の願

【八】 他心通の願

【九】 神足通の願

【一】 設ひ我佛を得んに、國に地獄、餓鬼、畜生有らば、正覺を取らじ。

【二】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、壽終の後、復三惡道に更らば、正覺を取らじ。

【三】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、悉く眞金色ならずば、正覺を取らじ。

【四】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、形色不同にして好醜有らば、正覺を取らじ。

【五】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、宿命を識らず、下百千億那由他諸劫の事を知らざるに至らば、正覺を取らじ。

【六】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、天眼を得ず、下百千億那由他諸佛の國を見ざるに至らば、正覺を取らじ。

【七】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、天耳を得ず、下百千億那由他諸佛の所説を聞きて、悉く受持せざるに至らば、正覺を取らじ。

【八】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、見他心智を得ず、下百千億那由他諸佛國中の衆生の心念を知らざるに至らば、正覺を取らじ。

【九】 設ひ我佛を得んに、國中の人天、神足を得ず、一念の頃に於て、下百千億那由他

〔一〇〕 遍盡通の願

〔一〇〕

〔一一〕 必至滅度の願

〔一一〕

〔一二〕 光明無量の願

〔一二〕

〔一三〕 壽命無量の願

〔一三〕

〔一四〕 聲聞無數の願

〔一四〕

〔一五〕 眷屬長壽の願

〔一五〕

〔一六〕 無諸不善の願

〔一六〕

〔一七〕 諸佛稱揚の願。名譽成就の願なり。

〔一七〕

〔一八〕 至心信樂の願

〔一八〕

諸佛の國を超過すること能はざるに至らば、正覺を取らじ。

〔一〇〕 設ひ我佛を得んに、國中の人天、若し想念を起し、身を貪計せば、正覺を取らじ。

〔一一〕 設ひ我佛を得んに、國中の人天、定聚に仕し、必ず滅度に至らずば、正覺を取らじ。

〔一二〕 設ひ我佛を得んに、光明能く限量有りて、下百千億那由他諸佛の國を照さざるに至らば、正覺を取らじ。

〔一三〕 設ひ我佛を得んに、壽命能く限量有りて、下百千億那由他劫に至らば、正覺を取らじ。

〔一四〕 設ひ我佛を得んに、國中の聲聞、能く計量有りて、下三千大千世界の聲聞、緣覺、百千劫に於て悉く共に計校し、其數を知るに至らば、正覺を取らじ。

〔一五〕 設ひ我佛を得んに、國中の人天、壽命能く限量無からん、其本願有りて、修短自在ならんを除かん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

〔一六〕 設ひ我佛を得んに、國中の人天、乃ち不善の名有るを聞くに至らば、正覺を取らじ。

〔一七〕 設ひ我佛を得んに、十方世界の無量諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずば、正覺を取らじ。

〔一八〕 設ひ我佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生ぜんと欲し、乃至十

願。四十八願中の
王本願にして念佛
して眞實報土に往
生するを誓ふ。

【至心、信樂、欲生】
之を三信と云ひ、
眞宗安心の根本義
とす。至心とは眞
實の心、信樂は疑
なく信じて歡喜愛
樂の心、欲生は淨
土往生を願ひ希む
心。此三は他力廻
向のもつにして三
は即ち行者歸命の
一心なり。

【乃至十念】 乃至
は一多包攝の語、
十念は十聲の念佛
故に乃至十念とは
生涯の念佛より一
聲の念佛までを兼
攝の語なり。

【乃至十念】 乃至
は一多包攝の語、
十念は十聲の念佛
故に乃至十念とは
生涯の念佛より一
聲の念佛までを兼
攝の語なり。

【乃至十念】 乃至
は一多包攝の語、
十念は十聲の念佛
故に乃至十念とは
生涯の念佛より一
聲の念佛までを兼
攝の語なり。

【乃至十念】 乃至
は一多包攝の語、
十念は十聲の念佛
故に乃至十念とは
生涯の念佛より一
聲の念佛までを兼
攝の語なり。

【乃至十念】 乃至
は一多包攝の語、
十念は十聲の念佛
故に乃至十念とは
生涯の念佛より一
聲の念佛までを兼
攝の語なり。

【至心、信樂、欲生】
之を三信と云ひ、
眞宗安心の根本義
とす。至心とは眞
實の心、信樂は疑
なく信じて歡喜愛
樂の心、欲生は淨
土往生を願ひ希む
心。此三は他力廻
向のもつにして三
は即ち行者歸命の
一心なり。

【至心、信樂、欲生】
之を三信と云ひ、
眞宗安心の根本義
とす。至心とは眞
實の心、信樂は疑
なく信じて歡喜愛
樂の心、欲生は淨
土往生を願ひ希む
心。此三は他力廻
向のもつにして三
は即ち行者歸命の
一心なり。

(一九)

念せん、若し生れずば、正覺を取らじ。唯五道と正法を講誦せんとをば除かん。
設ひ我佛を得んに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修し、至心に發願
して、我國に生せんと欲し、壽終の時に臨みて、假令大衆と與に圍繞して、其人
の前に現ぜずば、正覺を取らじ。

(二〇)

設ひ我佛を得んに、十方の衆生、我名號を聞き、念を我國に係けて、諸の徳本を
植ゑ、至心に廻向して我國に生せんと欲せん、果遂せずば、正覺を取らじ。
設ひ我佛を得んに、國中の人天、悉く三十二大人相を成滿せずば、正覺を取ら
じ。

(二一)

設ひ我佛を得んに、他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生せば、究竟して必ず一
生補處に至らん。其本願自在の所化、衆生の爲の故に、弘誓の鎧を被り徳本を積
累し一切を度脱し、諸佛の國に遊びて菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、
恆沙無量の衆生を聞化して、無上正眞の道を立せしめんをば除かん。常倫諸地の
行を超出して、現前に普賢の徳を修習せん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

(二二)

設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養せんに、一食の頃
に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ること能はずば、正覺を取らじ。
設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、諸佛の前に在りて其徳本を現げんに、諸の欲
求する所の供養の具、若し意の如くならずば、正覺を取らじ。

(二三)

設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養せんに、一食の頃
に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ること能はずば、正覺を取らじ。
設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、諸佛の前に在りて其徳本を現げんに、諸の欲
求する所の供養の具、若し意の如くならずば、正覺を取らじ。

(二四)

設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養せんに、一食の頃
に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ること能はずば、正覺を取らじ。
設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、諸佛の前に在りて其徳本を現げんに、諸の欲
求する所の供養の具、若し意の如くならずば、正覺を取らじ。

願。植諸德本の願にして、自力念佛者の化土往生を誓ふ。
 【至心、廻向、欲生】至心は自力の眞實心、廻向は稱名の功德を淨土に廻向する心、欲生は自力の願生心。
 (一三) 具足諸相の願。
 (一四) 還相廻向の願。
 (一五) 供養諸佛の願。
 (一六) 供具如意の願。
 (一七) 說法如佛の願。
 (一八) 那羅延身の願。
 【那羅延】梵音ナ
 ーラヤナ (Narayana) 天の力士。
 (一九) 所須嚴淨の願。
 (二〇) 見道場樹の願。
 (二一) 得辯才智の願。
 (二二) 智辯無窮の願。

(一五) 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、一切智を演説する能はずば、正覺を取らじ。
 (一六) 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、金剛那羅延身を得ずば、正覺を取らじ。
 (一七) 設ひ我佛を得んに、國中の人天、一切萬物嚴淨光麗にして形色殊特に、窮微極妙にして能く稱量すること無けん。其諸の衆生乃至天眼を逮得すとも、能く明了に其名數を辨すること有らば、正覺を取らじ。
 (一八) 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩乃至少功德の者も、其道場樹の無量の光色、高さ四百萬里なるを見見すること能はずば、正覺を取らじ。
 (一九) 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、若し經法を受讀し諷誦持説して、而も辯才智慧を得ずば、正覺を取らじ。
 (二〇) 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、智慧辯才智若し限量すべくば、正覺を取らじ。
 (二一) 設ひ我佛を得んに、國土清淨にして、皆悉く十方一切無量無數不可思議の諸佛世界を照見すること、猶し明鏡に其面像を覩るが如くならん。若し爾らずば、正覺を取らじ。
 (二二) 設ひ我佛を得んに、地より已上、虛空に至るまで、宮殿樓觀、池流、華樹、國中所有の一切萬物、皆無量雜寶、百千種香を以て而も共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の人天に超え、其香普く十方世界に熏じ、菩薩聞く者は皆佛行を修せん。若し是の如くならずば、正覺を取らじ。

【三二】 國土清淨の願。

【三三】 萬物嚴飾の願。

【三四】 觸光柔軟の願。

【三五】 聞名得忍の願。

【無生法忍】 不生滅の眞如法性を忍知して決定安住する位。

【三六】 女人成佛の願。

【三七】 常修梵行の願。

【三九】 清淨なる修行の願。

【四〇】 人天致敬の願。

【四一】 衣服隨念の願。

【四二】 法量の袈裟の願。

【四三】 愛樂無染の願。

【三三】

設ひ我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我光明を蒙りて

其身に觸れば、身心柔軟にして人天を超過せん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

【三四】

設ひ我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我名字を聞きて菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずば、正覺を取らじ。

【三五】

設ひ我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界に其れ女人有りて、我名字を聞き、歡喜信樂して、菩提心を發し、女身を厭惡せん。壽終の後、復女像と爲らば、正覺を取らじ。

【三六】

設ひ我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸菩薩衆、我名字を聞かば、壽終の後、常に梵行を修して佛道を成ずるに至らん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

【三七】

設ひ我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人、我名字を聞きて五體投地し、稽首作禮し、歡喜信樂して菩薩の行を修せんに、諸天人敬を致さざる莫けん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

【三八】

設ひ我佛を得んに、國中の人天、衣服を得んと欲せば、念に隨ひて即ち至るは、佛の讚じたまふ所、應法妙服自然に身に在るが如し。若し裁縫擣染浣濯するごとと有らば、正覺を取らじ。

【三九】

設ひ我佛を得んに、國中の人天、受くる所の快樂は、漏盡比丘の如くならずば、

【四〇】

設ひ我佛を得んに、

【四一】

設ひ我佛を得んに、

【四二】

設ひ我佛を得んに、

【四三】

設ひ我佛を得んに、

【四四】

設ひ我佛を得んに、

【四五】

設ひ我佛を得んに、

【四六】

設ひ我佛を得んに、

【四七】

設ひ我佛を得んに、

【四八】

設ひ我佛を得んに、

【四九】

設ひ我佛を得んに、

願。〔四〕 見諸佛土の

願。〔四〕 具足諸根の

願。〔四〕 住定供佛の

願。〔四〕 生尊貴家の

願。〔四〕 具足徳本の
願。〔四〕 住定見佛の

願。〔四〕 普等三昧 普等
は梵語のサマヌタ
一ヌカタ (Samant
samudrata) にて普偏
平等の意、三昧は
定なり。〔四〕 隨意聞法の

正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、隨意に十方無量嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に應じて願の如く、寶樹の中に於て皆悉く照見せんこと、猶し明鏡に其面像を觀るが如くならん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞かば、佛を得るに至るまで諸根闕陋して具足せずば、正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞かば、皆悉く清淨解脱三昧を速得し、是三昧に住して、一發意の頃に、無量不可思議の諸佛世尊を供養し、而も定意を失せざらん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞かば、壽終の後、尊貴の家に生ぜん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞かば、歡喜踊躍して菩薩行を修し徳本を具足せん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞かば、皆悉く普等三昧を速得せん。是三昧に住して成佛するに至るまで、常に無量不可思議の一切諸佛を見たてまつらん。若し爾らずば、正覺を取らじ。

〔四〕 設ひ我佛を得んに、國中の菩薩、其志願に隨ひて聞かんと欲する所の法、自然に

【四七】 聞名不退の願。

【四八】 得三法忍の願。

【三法忍】 音響忍、柔順忍、無生法忍

【我超世】 以下の偈は法藏四十八願を述べ終り更にその四十八願の重大意義を闡明せんが爲に重ねて誓ふ。【大施主】 財施法施無畏施窮りなきもの。

【三垢】 貪瞋癡のこと。

【四七】

聞くことを得ん。若し爾らせば、正覺を取らじ。
設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞きて、即ち不退轉に至ることを得ずば、正覺を取らじ。

【四八】

設ひ我佛を得んに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞きて、即ち第一、第二、第三法忍に至ることを得ず。諸佛の法に於て即ち不退轉を得ること能はずば、正覺を取らじ。』

佛、阿難に告げたまはく、『爾時、法藏比丘、此願を説き已りて、頌を説きて曰はく、

我超世の願を建つ、必ず無上道に至らん

斯願満足せずば、誓つて正覺を成ぜじ

我無量劫に於て、大施主と爲りて

普く諸の貧苦を濟はずば、誓つて正覺を成ぜじ

我佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超えん

究竟して聞ゆる所靡くば、誓つて正覺を成ぜじ

離欲と深正念と、淨慧とをもて梵行を修し

無上道を志求して、諸天人の師と爲らん

神力大光を演じて、普く無際を照し

三垢冥を消除して、廣く衆の厄難を濟はん

【智慧】 人法二空の智慧。

【諸の惡道】 總じて六道のこと。

【功祚】 功德の位のこと。

【天光】 梵天等の光。

【三界の雄】 佛のこと。

【最勝尊】 佛のこと。

【普地】 三千世界ののこと。

【一六】 次に法藏の修行を敘す。初に勝行を明す。

彼智慧眼を開き、此昏盲闇を滅せん

諸の惡道を閉塞し、善趣門に通達せん

功祚成じ満足して、威曜十方に朗かならん

日月重暉を載めて、天光も隠れて現ぜざらん

衆の爲に法藏を開き、廣く功德の寶を施し

常に大衆の中に於て、説法師子吼せん

一切の佛を供養して、衆の徳本を具足し

願慧悉く成滿して、三界の雄と爲るを得ん

佛の無礙智の、通達して照さざる靡きが如く

願くは我功慧力、此最勝尊に等しからん

斯願若し剋果せば、大千應に感動すべし

虚空の諸の天人當に、當に珍妙華を雨らすべし

佛、阿難に告げたまはく、「法藏比丘、此頌を説き已るに、時に應じて普地六種に震動す。

天より妙華を雨らし、以て其上に散じ、自然の音樂ありて空中に讚じて言はく、「決定し

て必ず無上正覺を成ぜん」と。是に於て法藏比丘、是の如きの大願を具足し修滿して誠諦不

虚なり。世間に超出して深く寂滅を樂へり。阿難、時に彼比丘、其佛の所の諸天魔梵龍神

八部、大衆の中に於て、斯弘誓を發し、此願を建て已りて、一向專志に妙土を莊嚴す。所修の

【建立常然】 國土常住をいふ。

【欲覺瞋覺云云】 以下意業に關する修行。

【忍力】 安受苦忍、耐怨害忍、法思惟忍。

【染志癡】 三毒のこと。

【三寶を恭敬し云云】 以下身業に關する修行。

【法は化の如し】 一切諸法は因縁和合の所成にして實體なく幻化の如し。

【龜言の自害云云】 以下口業に關する修行。

【無央數劫】 無量の長時間を云ふ。

【其生處に云云】 以下勝果を明す。

【轉輪聖帝】 須彌四洲を統領する王輪衛を轉じて一切を感伏す。

【六欲天】 四王、忉利、夜摩、兜率、化樂、他化自在天。

【四事】 飲食、衣服、臥具、湯藥。

佛國は、恢廓廣大にして超勝獨妙なり。建立常然にして無衰無變なり。不可思議兆載永劫に於て菩薩の無量の德行を積植し、欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、色、聲、香、味、觸、法に著せず、忍力成就して衆苦を計せず、少欲知足にして染、患、癡無く、三昧常寂にして智慧無礙なり、虛偽詭曲の心有ること無し。和顏愛語して意に先ちて承問す。勇猛精進にして志願倦むこと無く、専ら清白の法を求めて以て群生を惠利す。三寶を恭敬し、師長に奉事す。大莊嚴を以て衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空、無相、無願の法に住して作無く起無し、法は化の如しと觀す。龜言の自害、害彼、彼此俱害なるを遠離し、善語の自利、利人、人我兼利なるを修習す。國を棄て王を捐て、財色を絶去し、自ら六波羅蜜を行じ、人を教へて行ぜしむ。無央數劫に功を積み徳を累ぬ。其生處に隨ひて意の所欲に在り、無量の寶藏自然に發應し、無數の衆生を教化し安立して無上正眞の道に住せしむ。或は長者、居士、豪姓尊貴と爲り、或は利利、國君、轉輪聖帝と爲り、或は六欲天主乃至梵王と爲り、常に四事を以て一切諸佛を供養し恭敬す。是の如きの功德稱說すべからず。口氣香潔にして優奢羅華の如し。身の諸の毛吼、栴檀香を出す。其香普く無量世界に薰ず。容色端正にして相好殊妙なり。其手常に無盡の寶、衣服、飲食、珍妙の華香、繪蓋、幢旛、莊嚴の具を出す。是の如き等の事、諸の天人に超え、一切法に於て自在を得たり。

阿難、佛に白さく、一法藏菩薩は已に成佛して滅度を取りたまふとや爲さん、未だ成佛し

【優蓋羅】 青蓮華の因に依りて得る處の果を蔽す。第一に法藏の成佛と淨土の相を略説す。

【滅度】 涅槃のこと。

【第六天】 欲界天の最勝、即ち他化自在天に比するなり。

【金剛鐵圍】 須彌山を環る八山の中最も外に位する山。

【諸難の趣】 八難。

【四王天】 六欲天の第一、持國、增長、廣目、多聞の四天。

【初利天】 三十三天のこと。

【焰天】 夜摩天のこと。

【色究竟天】 色界十八天の最後。

【八】 第二に法藏の成佛と淨土の相を廣説す。初に光明無量を明す。

たまはずとや爲さん、今現に在すとや爲さん。佛、阿難に告げたまはく、『法藏菩薩は今已に成佛して現に西方に在す、此を去ること十萬億利なり。其佛の世界を名けて安樂と曰ふ。』阿難又問ひたてまつらく、『其佛成道より已來、幾の時を遷たまふとや爲さん。』佛言はく、『成佛より已來、凡そ十劫を歴たり。其佛の國土は自然の七寶、金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、磤磤、碼磤を合成して地と爲せり。恢廓曠蕩にして眼極すべからず、悉く相雜廁し轉相入間せり。光赫焜耀にして微妙奇麗なり。清淨莊嚴、十方に超踰せり、一切世界衆寶中の精なり。其寶は猶し六天寶の如し。又其國土には須彌山及び金剛鐵圍、一切の諸山無く、亦大海、小海、谿渠、井谷無し。佛神力の故に見んと欲すれば則ち現す。亦地獄、餓鬼、畜生、諸難の趣無く、亦四時春、秋、冬、夏無し。不寒不熱にして常和調適なり。爾時、阿難、佛に白して言さく、『世尊、若し彼國土に須彌山無くば、其四天王及び初利天、何に依りてか住する。』佛、阿難に語りたまはく、『第三欲天乃至色究竟天、皆何に依りて住する。』阿難、佛に白さく、『行業果報不可思議なり。佛、阿難に語りたまはく、『行業果報不可思議ならば諸佛世界も亦不可思議なり。其諸の衆生、功德善力をもて行業の地に住す。故に能く爾るのみ。』と。阿難、佛に白さく、『我此法を疑はず。但將來の衆生の爲に、其疑惑を除かんと欲するが故に、斯義を問ひたてまつる。』と。

佛、阿難に告げたまはく、『無量壽佛の威神光明は最尊第一にして諸佛の光明の及ぶ能はざる所なり。或は佛光有り、百佛世界を照す。或は千佛世界なり。要を取りて之を言

【山句】 距離の單位。

【無量光佛】 以下十一光を擧げて佛德を顯す。初の無量光は佛光數量なし。

【無邊光】 横に邊際なし。

【無礙光】 内外障に礙へず。

【無對光】 相對すべき光明なし。

【熾王光】 煩惱を燒滅す。

【清淨光】 衆生の貪欲を除く。

【歡喜光】 衆生の煩惱を除く。

【智慧光】 衆生無明の癡暗を除く。

【不斷光】 光明三世に互り常恆に照益して斷絶せず。

【難思光】 一切因位の人の思量し能はず。

【無稱光】 言説にて稱説すること能はず。
【超日月光】 照用

ふに、乃ち東方恆沙の佛刹を照す。南西北方、四維、上下も亦復是の如し。或は佛光、七尺を照す有り、或は一由旬、二三四五由旬を照す。是の如く轉倍して乃至一佛刹土を照す。

是故に無量壽佛をば、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、熾王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。其れ衆生有りて、斯光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦

の處に在りて、此光明を見たてまつれば、皆休息を得、復苦惱無し。壽終の後、皆解脱を蒙る。無量壽佛の光明は顯赫にして、十方諸佛の國土を照耀したまひ、聞えざること

莫し。但我今其光明を稱するのみにあらず。一切諸佛、聲聞、緣覺、諸菩薩衆、咸く共に嘆譽したまふこと亦復是の如し。若し衆生有りて、其光明の威神功德を聞きて、日夜稱説

し、至心不斷ならば、意の所願に隨ひて其國に生ることを得、諸の菩薩、聲聞、大衆の爲に、共に歎譽し其功德を稱せられん。其れ然して後、佛道を得るの時に至りて、普く十方諸佛菩薩の爲に、其光明を歎げられんこと亦今の如くならん。一佛言はく、「我無量壽佛

の光明威神、巍巍殊妙なるを説かんに、晝夜一劫すとも、尙未だ盡すこと能はず。」

佛、阿難に語りたまはく、「無量壽佛の壽命は長久にして稱計すべからず、汝寧ぞ知らんや。假使十方世界の無量の衆生、皆人身を得、悉く聲聞、緣覺を成就せしめ、都て

共に集會し、禪思一心に其智力を竭し、百千萬劫に於て悉く共に推算して其壽命長遠の數を計るとも、窮盡して其限極を知ることを能はざらん。聲聞、菩薩、天人の衆の壽命の長

日月の比にあらざる
【無量壽佛は長久云云】 壽命無量を明す。

【彼佛初會云云】 聖衆無量を明す。

【初會】 爛陀成道の最初の説法。

【巧曆】 數學に長ずる曆師。

【又其國土には云云】 寶樹の莊嚴を明す。
【金樹等】 純樹を明す。
【或は二寶等】 雜樹を明す。

短も亦復是の如く、算數譬喩の能く知る所に非ざるなり。又聲聞菩薩は其數量り難く、稱説すべからず、神智洞達し威力自在なり。能く掌中に於て、一切世界を持せり。

佛、阿難に語りたまはく、『彼佛初會の聲聞衆の數は稱計すべからず。菩薩も亦然り。今の大目犍連の如きもの、百千萬億無量無數ありて阿僧祇那由他劫に於て乃至滅度まで悉く共に計校すとも多少の數を究了すること能はず。譬へば大海の深廣無量なるに、假令入有りて其一毛を析きて以て百分と爲し、一分の毛を以て一滴を沾取せんが如し。意に於て云何。其滴る所の者は、彼大海に於て何か多しと爲る所ぞ。阿難、佛に曰さく、『彼滴る所の水、大海に比せんに、多少の量は巧曆、算數、言辭、譬類の能く知る所に非ざるなり。』』佛、阿難に語りたまはく、『目連等の如き、百千萬億那由他劫に於て彼初會の聲聞、菩薩を計らんに、知る所の數は猶し一滴の如し、其知らざる所は大海水の如し。』

又其國土には、七寶の諸樹、世界に周滿せり。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、碼磧樹、碼磧樹なり。或は二寶、三寶乃至七寶轉共に合成せる有り。或は金樹の銀葉華果なる有り。或は銀樹の金葉華果なる有り。或は瑠璃樹あり、玻璃を葉と爲す、華果亦然り。或は珊瑚樹あり、碼磧を葉と爲す、華果亦然り。或は碼磧樹あり、衆寶を葉と爲す、華果亦然り。或は寶樹有り、紫金を本と爲し、白銀を莖と爲し、瑠璃を枝と爲し、水精を條と爲し、珊瑚を葉と爲し、碼磧を華と爲し、碼磧を實と爲す。或は寶樹有り、白銀を本と爲し、瑠璃を莖と爲し、珊瑚を枝と爲し、水精を條と爲し、碼磧を實と爲す。

【音響忍】 佛菩薩の德音を聞きて信解し、修習し安住する位。

【柔順忍】 寂靜の理に隨順して諸法の平等を觀じ、忍可して違背することなき位。

【威神力の故に】 以下六故を擧ぐる中、前の一故は如来十力等の現在の力、後の五故は因位の顯充分なる故とす。

【又講堂云云】 宮殿と寶池の相を明す。

【交露】 珠玑交結せる帳。

に遺はず。目に其色を觀、耳に其音を聞き、鼻に其香を知り、舌に其味を嘗め、身に其光を觸れ、心に法を以て緣するもの、一切皆甚深法忍を得て、不退轉に住す。佛道を成ずるに至るまで、六根清徹にして諸の惱患無し。阿難、若し彼國の人天、此樹を見る者は三法忍を得。一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり。此れ皆無量壽佛の威神力の故に、本願力の故に、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故なり。佛、阿難に告げたまはく、「世間の帝王、百千の音樂有り、轉輪聖王より乃至第六天上まで伎樂の音聲、展轉相勝ること千億萬倍なり。第六天上の萬種の樂音も、無量壽國の諸の七寶樹の一種の音聲に如かさること、千億倍なり。亦自然萬種の伎樂有り。又其樂聲、法音に非ざる無く、清揚哀亮にして微妙和雅なり。十方世界の音聲の中、最も第一と爲す。又講堂、精舍、宮殿、樓觀、皆七寶莊嚴、自然に化成せり。復眞珠、明月、摩尼、衆寶を以て、以て交露と爲し其上に覆蓋せり、内外、左右に諸の浴池有り、或は十由旬、或は二十、三十、乃至百千由旬なり。縱廣、深淺、各指一等なり。八功德水、湛然として盈滿せり。清淨香潔にして味甘露の如し。黄金の池には底に白銀の沙あり。白銀の池には底に黄金の沙あり。水精の池には底に瑠璃の沙あり。瑠璃の池には底に水精の沙あり。珊瑚の池には底に琥珀の沙あり。琥珀の池には底に珊瑚の沙あり。磤磤の池には底に碼碯の沙あり。碼碯の池には底に磤磤の沙あり。白玉の池には底に紫金の沙あり。紫金の池には底に白玉の沙あり。或は二寶、三寶乃至七寶、轉共に合成せり。其池の岸の上に梅檀樹有り。華葉垂布し

【蓋曇摩】赤蓮華
 【拘陀頭】黃蓮華
 【分陀利】白蓮華

【心垢】煩惱。
 【微瀾】小波。

【佛聲】佛德讚歎
 【法聲】佛法真理

【僧聲】大衆和合
 【波羅蜜】六度十

【十力】是處非處
 力、業智力、定力、

根力、欲力、性力、
 至處道力、宿命力、

天眼力、漏盡力、
 【無畏】四無所畏

不共法は身不失等
 十八の佛獨特の力

【通慧】六通定慧
 【阿難】彼佛の國土

云云以下淨土の
 聖衆の徳、妙勝な
 るを明す。

香氣普く薫ぜり。天の優蓋羅華、蓋曇摩華、拘陀頭華、分陀利華、雜色光茂にして水上に彌覆せり。彼諸菩薩及び聲聲衆若し寶池に入りて意に水をして足を没せしめんと欲すれば水即ち足を没す。膝に至らしめんと欲すれば即ち膝に至る。腰に至らしめんと欲すれば水即ち腰に至る。頸に至らしめんと欲すれば水即ち頸に至る。身に灌がしめんと欲すれば自然に身に灌ぐ。還復せしめんと欲すれば水輒ち還復す。調和冷煖にして自然に意に隨ふ。神を聞き、體を悦ばしめ、心垢を蕩除す。清明激潔して、淨きこと形無きが若し、寶沙映徹して、深として照さざる無し、微瀾廻流して、轉相灌注す。安詳にして徐に逝き、遲からず疾からず。波無量の自然の妙聲を揚ぐ、其所應に隨ひて聞かざる者莫し。或は佛聲を聞き、或は法聲を聞き、或は僧聲を聞く。或は寂靜聲、空無我聲、大慈悲聲、波羅蜜聲、或は十力、無畏、不共法聲、諸通慧聲、無所作聲、不起滅聲、無生忍聲、乃至、甘露、灌頂、衆の妙法聲、是の如き等の聲其所聞に稱ひ、歡喜無量なり。清淨、離欲、寂滅、眞實の義に隨順し、三寶力、無所畏、不共の法に隨順し、通慧の菩薩、聲聞、所行の道に隨順す。三途苦難の名有ること無く、但自然快樂の音のみ有り。是故に其國を名けて安樂と曰ふ。

阿難、彼佛の國土は、諸の往生せる者、是の如き清淨色身、諸の妙音聲、神通功德を具足す。處する所の宮殿、衣服、飲食、衆の妙華香、莊嚴の具、猶し第六天の自然の物のごとし。若し食せんと欲する時は、七寶の盃器、自然に前に在り。金、銀、瑠璃、磚磑、碼碯、珊瑚、琥珀、明月眞珠、是の如き諸蓋、意に隨ひて至る。百味の飲食、自然に盈滿せり。

【餘方に因順等】
本業に隨つて、人
天といふあり、居
處天地に依るを例
して人といひ天と
云ふ。

【自然虚無の身】
胎生等に非るを示
す。

【無極】 佛果のこ
と。

【底極下】 最極
【人理】 人間の分
【其諸の聲聞】 不
可計倍なり【淨土
聖衆の徳の中】 正
報の妙勝を明す。

此食有りこのじきありと雖いへど、實じつに食じきする者もの無し。但色ただいしよを見、香かを聞かきて、意こころに以て食じきと爲なれば、自じ然ねんに飽足ほうそくす。身心しんしん柔軟じゆうなんにして味著みちやくする所ところ無し。事こと已はりぬれば化けし去さる、時とき至いたれば復現またげんす。彼かの佛ぶつの國土こくどは、清淨じやうじやう安穩あんゑんにして微妙みゆうめう快樂らくたつなり。無爲むゐ泥洹たいゑんの道みちに次つぎし。其諸そのしよの聲聞しやうもん、菩薩ぼさつ、天人てんじん、智慧ちゐ高明かうめいにして神通洞達じんづうどうだつせり。咸同みなおなじく一類いちるゐにして形異かたちい狀無じやうなし。但餘方ただりほうに因順いんじゆんするが故ゆゑに天人てんじんの名な有り。顏貌げんぼう端正てんせいにして超世希有しやうせきゆうなり。容色ようしき微妙みゆうめうにして天てんに非あらず人にんに非あらず。皆自然虚無みなじぜんこむの身み、無極むごくの體たいを受けたり。」

佛ぶつ、阿難あなんに告つげたまはく、『譬たとへば世間せけんの貧窮びんきゆう、乞人こつじんの帝王たいわうの邊はたりに在あらんが如ごとし、形貌けいぼう、容狀ようじやう 寧なぞ類るゐすべけんや。』と。阿難あなん、佛ぶつに白まをさく、『假令たとひ此人帝王ここのちのたいわうの邊はたりに在あらん、羸陋醜るゐる惡あくにして以て喻たとへ爲なる無なきこと、百千萬億ひやくせきまんごふ不可計倍ふかかけばいなり。然しかる所以ゆゑは、貧窮びんきゆう、乞人こつじんは底極たいごく下げにして衣えは形かたちを蔽かくさず、食じきは趣ちゆうかに命いのちを支さふ、飢寒困苦けいさんくふして人理にんり殆たんど盡つくきなんとす。皆前みなまへ世ぜに徳木とくぼくを植うゑず、財たからを積つみて施ほどこさず、富有ふうゆうにして益慳ますくしみ、但唐得たうたうとくを欲ほつし、貪求こんぐして厭あくこと無なく、背あへて善ぜんを修しゆせず、犯惡山積はんあくさんせきするに坐ましてなり。是かくの如ごとくして壽終じゆじゆうり財さい寶消散ほうしゆさんす。身みを苦くるしめ聚積しゆせきして之これが爲ために憂惱うゐなうすれども已おほれに於おいて益無やくなく、徒いたづらに他たの有うと爲なる。善ぜんとして怙たのむべき無なく、徳とくとして恃たむべき無なし。是故こゝれゆゑに死しして惡趣あくじゆに墮おし、此長苦こゝれぢやうくを受うく。罪畢つみをけり出でづることを得うれども、生しやうじて下賤げせんと爲なり、愚鄙ぐひ斷極だんごくにして人類にんるゐに示同しじゆうす。世間帝王せけんたいわうの人にん中に獨尊どくそんなる所以ゆゑは、皆宿世みなしゆくせの積徳しやくとくに由よりて致いたす所ところなり。慈惠じゑにして博ひろく施せし、仁愛にんあいにして兼かね濟すくひ、信しんを履ふみ善ぜんを修しゆし、違諍ゐじやうする所ところ無し。是こゝを以て壽終じゆうじゆうり、福應ふくおんじ

【無量壽佛國：安立せしむ】淨土聖衆の徳の中、依報の妙勝を明す。

て善道ぜんどうを昇のぼることを得、天上てんじやうに上あがり生なじて、茲こゝ福樂ふくらくを享たむ。積善じくぜんの餘慶よせきに今いま人と爲なることを得、適あたに王家わがけに生なれて自然じねんに尊貴そんきなり。儀容ぎよう端正てんせいにして衆しゆに敬事けいじせられ、妙衣めうい、珍饈ちんせう、心に隨したがひて服御ふくごす。宿福しゆくふくの追おふ所ところ、故ゆゑに能よく此これを致たす。

佛ぶつ、阿難あなんに告つげたまはく、『汝なんぢが言ことば是こゝなり。假たと如ば、帝王ていおう、人中にんぢゆうの尊貴そんきにして形色しきじやう端正てんせいなりと雖いも、之これを轉輪てんりん聖王せいおうに比ひせんに、甚ただ鄙陋ひんろう爲なること、猶なほし彼乞人かのうじんの帝王ていおうの邊へだちに在あるがごとし。轉輪てんりん聖王せいおうは威相ゐさう殊妙しゆめうにして天下てんげ第一だいいちなるも、之これを忒利たうり天王てんおうに比ひせんに、又また復また醜みにく惡あくにして相喻さうよふることを得えざること萬億まんおく倍ばいなり。假たと令たう天帝てんたいを第六だいろく天王てんおうに比ひせんに、百千億ひやくせんおく倍ばい相類さうるいせざるなり。設たとひ第六だいろく天王てんおうを無量壽佛國むりやうじゆふくの菩薩ぼさつ、聲聞せいもんに比ひせんに、光顏くわうげん、容色ようしき相及さうじやく速すみばざることを百千萬億ひやくせんまんおく不可計ふかかけ倍ばいなり。』

佛ぶつ、阿難あなんに告つげたまはく、『無量壽佛國むりやうじゆふくは、其諸そのしよの天人てんじんに衣服いふく、飲食おんじき、華香けちかう、瓔珞やうらく、紺蓋こんがい、幢どう、旛はた、微妙めうめうの音聲おんせいあり。所居しよきよの舍宅しゃたく、宮殿きゆうてん、樓閣ろうかく、其形色そのしきじやうに稱なづひ、高下かうげ、大小だいせうなり。或あるは一寶いちぼう、二寶にぼう、乃至乃至海量はうりやう衆寶しゆぼう、意こころの所欲しよじやくに隨したがひ念ねんに應おこじて即すなはち至いたる。又また衆寶しゆぼう妙衣めういを以もつて徧まく其地そのちに布しけり。一切いっせつの天人てんじん、之これを踐ふみて行ゆく。無量むりやうの寶網ぼうもう、佛土ぶつどに彌覆みふせり。皆みな金縷きんる、眞珠しんしゆ、百千ひやくせん雜寶ざうぼう、奇妙きめう珍異ちんいなるを以もつて莊嚴じやうげん校飾けうじきせり。四面しめんに周匝しゆうさつして垂たるるに寶鈴ぼうりやうを以もつてす。光色くわうしき晃わう耀りやうにして盡つくく嚴麗げんれいを極きむ。自然じねんの徳風とくふう徐じゆに起おこり微こしく動うく。其風調和そのふうてうわにして寒さむからず

暑あつからず、溫涼おんりやう柔軟りよくわんにして遲おそからず疾はやからず。諸しよの羅網らもう及び衆しゆの寶樹ぼうじゆを吹ふきて無量むりやう微妙めうめうの法音ほふおんを演發えんぱつし、萬種まんしゆ溫雅おんやくの徳香とくかうを流布りゆうふす。其そのれ聞きくこと有ある者は摩勞まらう、垢習かうじゆ、自然じねんに起おこ

【滅盡三昧】 心想すべて滅盡して寂靜となる定。

【六邊】 此土に準ずれば晨朝、日中日没、初夜、中夜、後夜の六時なり。
【暎等】 暎は盛明、暎は華光の盛、煥爛は炳明。
【三十一、六、佛】 華より現るる化佛の故に依報に屬す。
【正道】 無上正眞の菩提道。

らず。風其身に觸るるに皆快樂を得ること、譬へば比丘の滅盡三昧を得るが如し。
又風吹きて華を散し、佛土に徧滿す。色の次第に隨ひて、而も雜亂せず。柔軟光澤にして馨香芬烈なり。足其上を履むに陷下すること四寸、足を擧げ已るに隨ひて、還復して故の如し。華用ひ已訖れば、地輒ち開裂し、次を以て化沒す。清淨にして遺る無し。其時節に隨ひて、風吹きて華を散す。是の如く六邊なり。又衆寶蓮華、世界に周滿せり。一の寶華、百千億の葉あり。其華の光明、無量種の色あり、青色には青光、白色には白光、玄黄、朱紫、光色も亦然り、暎暎煥爛にして日月よりも明曜なり。一の華の中より三十六百千億の光を出す。一一の光の中より三十六百千億の佛を出す。身色紫金にして相好殊特なり。一一の諸佛、又百千の光明を放ち、普く十方の爲に微妙の法を説きたまふ。是の如きの諸佛、各各無量の衆生を佛の正道に安立せしむ。」

佛說無量壽經 卷上

佛說無量壽經 卷下

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

【一】衆生往生の因果を明す。第一に往因の中、初に往生者の資格を示す。
 【正定聚云云】正定聚は、往生決定より退かぬもの。行者は第十八願念佛に於ての一念に現世に於ての位は正しく第十一必至滅度の成就を明す。
 【邪聚】邪定聚の略、念佛以外の諸善を修して淨土往生を願する者をいふ。第十九願要門の人。
 【不定聚】彌陀の名號を信じつ、その信じ方の自力心なる故に不定なり。第二十願自力念佛の人を指す。
 【二】往生の正因を衆生往生の正因を明す。
 【十方……讚嘆したまふ】第十一願諸佛稱揚の願成就

佛、阿難に告げたまはく、「其れ衆生有りて彼國に生ずる者は皆悉く正定の聚に住す。所以は何ん。彼佛國の中には、諸の邪聚及び不定聚無ければなり。十方恆沙の諸佛如來は皆共に無量壽佛の威神功德不可思議なるを讚歎したまふ。諸有の衆生、其名號を聞きて、信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得、不退轉に住せん。唯五逆と正法を誹謗せんとをば除く。」
 佛、阿難に告げたまはく、「十方世界の諸天人、其れ至心に彼國に生ぜんと願する有らんに、凡そ三輩有り。其上輩とは家を捨てて欲を棄てて沙門と作り、菩提心を發し、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して、彼國に生ぜんと願せん。此等の衆生は壽終の時に臨みて、無量壽佛の諸の大衆と與に、其人の前に現ぜん。即ち彼佛に隨ひて其國に往生し、便ち七寶華の中に於て自然に化生し、不退轉に住し、智慧勇猛にして神通自在ならん。是故に阿難、其れ衆生有りて、今世に於て無量壽佛を見んと欲せば、應に無上菩提の心を起し、功德を修行し、彼國に生ぜんと願すべし。」
 佛、阿難に語りたまはく、「其中輩とは、十方世界の諸天人、其れ至心に彼國に生ぜん

なり。

【諸有……餘く】

第十八願成就にして、正しく念佛往生の業因を明す。

【其名號を聞き】

諸佛の稱揚讃嘆する彌陀の名號のいはれを聞いて疑はざること。

【乃至一念】乃至

は一多包容の語にして下の一念は攝め見るべし一念はひとおもひ即ちひとおもひの信心の意。

【至心に廻向】至

心は眞實にして彌陀の心、廻向は名號を衆生に與ふるごと。

【即ち往生】倍の

一念に同時に往生すべき利益を得ること。

【三】往因の中、

諸行往生に就いて三輩の不同を明す即ち第十九願成就なり。

【乃至十念】口に

稱する十聲の念佛

と願する有らんに、行じて沙門と作り、大いに功德を修すること能はずと雖も、當に無上

菩提の心を發し、一向に専ら無量壽佛を念すべし。多少に善を修し、齋戒を奉持し、塔像

を起立し、沙門に飯食せしめて、纏を懸け、燈を然し、散華、燒香し、此を以て廻向して彼

國に生ぜん願せん。其人臨終に無量壽佛、其身を化現し、光明相好具に眞佛の如く、

諸の大衆と與に、其人の前に現ぜん。即ち化佛に隨ひて其國に往生し、不退轉に住し、

功德、智慧、次で上輩の者の如くならん。』

佛、阿難に告げたまはく、『其下輩とは、十方世界の諸天人、其れ至心に彼國に生ぜん

と欲する有らんに、假使諸の功德を作すこと能はずとも、當に無上菩提の心を發し、一

向專意に乃至十念、無量壽佛を念じ、其國に生ぜん願すべし。若し深法を聞きて歡喜信

樂し、疑惑を生ぜず、乃至一念、彼佛を念じ、至誠心を以て其國に生ぜん願せば、此人

臨終に、夢のごとく彼佛を見たてまつり、亦往生を得。功德、智慧次で中輩の者の如くな

らん。』

佛、阿難に告げたまはく、『無量壽佛の威神極り無し。十方世界無量無邊不可思議の諸

佛如來、稱數せざるは莫し。彼東方恆沙の佛國に於て、無量無數の諸の菩薩衆、皆悉く

無量壽佛の所に往詣し、恭敬供養し、諸の菩薩、聲聞、大衆に及さん。經法を聽受し、道化

を宣布す。南、西、北方、四維、上下も亦復是の如し。爾時、卍尊、而も頌を説きて曰はく、

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

東方諸佛國、其數恆沙の如し

【深法】 阿彌陀佛の名號。

【乃至一念】 口に稱する南無阿彌陀佛。

【四】 往因の中、諸佛の稱讃と菩薩の往觀を明す。

【東方諸佛國等】 以下別して諸佛の稱讃と菩薩の往觀を頌讚す。

【無量覺】 阿彌陀佛のこと。

【往觀】 他力往生と解すべし。

【無價衣】 價をつけること能はざる程の貴き衣。

【三匝】 匝は周なり、みめぐり。

【頂より入る】 得佛を記する時光頂より入る。

彼土の菩薩衆、無量覺に往觀したてまつる

南、西、北、四維、上、下も亦復然り

彼土の菩薩衆、無量覺に往觀したてまつる

一切の諸の菩薩、各天の妙華

寶香、無價衣を齎し、無量覺を供養したてまつる

咸然として天樂を奏し、和雅の音を暢發し

最勝尊を歌歎し、無量覺を供養したてまつる

神通慧を究達し、深法門に遊入し

功德藏を具足し、妙智等倫無し

慧日世間を照し、生死の雲を消除す

恭敬し繞ること三匝して、無上尊を稽首したてまつる

彼嚴淨の土の、微妙難思議なるを見て

因りて無上心を發し、我國も亦然らんと願す

時に應じて無量尊、容を動し欣笑を發し

口より無數の光を出して、徧く十方國を照す

光を廻して身を圍繞し、三匝して頂より入る

一切の天人衆、踊躍して皆歡喜す

【受決】 成佛の記を受けること。

【其佛の本願力】 致らん。他力の信仰を示したる重要な交なり。不退轉は此土不退の意に解す。

大士觀世音、服を整へ稽首して問ひ

佛に白さく何に緣りて笑みたまふや、唯然り願くは意を説きたまへと

梵聲猶し雷震のごとし、八音妙響を暢ぶ

當に菩薩記を授くべし、今説かん仁諦かに授け

十方より來れる正士、吾悉く彼願を知れり

嚴淨の土を志求し、受決して當に作佛すべし

一切法は、猶し夢、幻、響のごとしと覺了するも

諸の妙願を満足して、必ず是の如き利を成ぜん

法は電影の如しと知るも、菩薩の道を究竟し

諸の功德本を具し、受決して當に作佛すべし

諸法性は、一切空、無我なりと通達するも

専ら淨佛土を求め、必ず是の如き利を成ぜん

諸佛、菩薩に告げて、安養佛に觀えしむ

法を聞き樂びて受行し、疾く清淨處を得よ

彼嚴淨國に至らば、便ち速かに神通を得

必ず無量尊に於て、受記せられ等覺を成ぜん

其佛の本願力、名を聞きて往生せんと欲へば

【聖心】大聖の心
即ち佛心。

皆悉く彼國に到り、自ら不退轉に致らん
 菩薩至願を興し、己が國も異ること無けん
 普く一切を度せんと念じ、名顯れて十方に達せん
 億の如來に奉事し、飛化して諸刹に徧し
 恭敬歡喜して去り、還りて安養國に到る
 若し人善本無くんば、此經を聞くことを得ず
 清淨有戒の者、乃ち正法を聞くことを獲
 會更て世尊を見しもの、則ち能く此事を信ず
 謙敬にして聞きて奉行し、踊躍して大いに歡喜す
 憍慢、弊、懈怠なるは、以て此法を信じ難し
 宿世に諸佛を見しもの、是の如き教を樂聽せん
 聲聞、或は菩薩、能く聖心を究むる莫し
 譬へば生れてより盲たるもの、行きて人を開導せんと欲するが如し
 如來の智慧海は、深廣にして涯底無し
 二乘の測る所に非ず、唯佛のみ獨明了せり
 假使一切の人、具足して皆道を得
 淨慧本空を知り、億劫に佛智を思ひ

【五】衆生往生の因果を明す中、第二に果徳。初に自在化の徳を擧ぐ。

【二忍】音響、柔順の二忍。

力を窮め講説を極め、壽を盡すとも猶知らん
佛慧の無邊際なる、是の如く清淨に致る
壽命甚だ得難く、佛世にも亦値ひ難し

人信慧有ること難し、若し聞かば精進に求めよ
法を聞き能く忘れず、見て敬ひ得て大いに慶ばば
則ち我善親友なり、是故に當に意を發すべし

設世界に滿てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば
會ず當に佛道を成じ、廣く生死の流を濟ふべし

(五) 佛、阿難に告げたまはく、『彼國の菩薩、皆當に一生補處を究竟すべし。其本願、衆生の爲の故に、弘誓の功徳を以て自ら莊嚴し、普く一切衆生を度脱せんと欲せんをば除く。阿難、彼佛國の中の諸の聲聞衆は身光一尋なり。菩薩の光明は百由旬を照す。二菩薩有り、最尊第一なり。威神の光明、普く三千大千世界を照す。阿難、佛に白さく、『彼二菩薩、其號云何。』佛の言はく、『一を觀世音と名け、二を大勢至と名く。是二菩薩は此國土に於て菩薩の行を修し、命終轉化して、彼佛國に生ぜり。阿難、其れ衆生有りて、彼國に生ずる者は、皆悉く三十二相を具足す。智慧成滿し、深く諸法に入りて、要妙を究暢し、神通無礙にして、諸根明利なり。其鈍根の者は二忍を成就し、其利根の者は、不可計の無生法忍を得。又彼菩薩は、乃至成佛まで、惡趣に更らず、神通自在にして、常に宿

【六】果徳を明す
中、供佛如意の徳を擧ぐ。

【輕擧】神通變化
輕く速疾なり。
【七】果徳を明す
中、開法と供養の徳を明す。

【開避】道をあけ
ゆつりあふ。
【漂怡】和悦なり
【八】果徳を明す
中、行徳圓滿の徳を擧ぐ。

命を識る。他方五濁惡世に生じ、示現して彼に同じ、我國の如くならんをば除く。

佛、阿難に告げたまはく、『彼國の菩薩、佛の威神を承けて、一食の頃に十方無量の世界に往詣し、諸佛世尊を恭敬し供養す。心の所念に隨ひ、華香、伎樂、繪蓋、幢旛、無數無量の供養の具、自然に化生し、念に應じて即ち至る。珍妙殊特にして世の所有に非ず。輒ち以て諸佛、菩薩、聲聞、大衆に奉散す。虚空の中に在りて化し、華蓋を成ず。光色曼樂にして香氣普く熏す。其華の周圍四百里なる者あり。是の如く轉倍して、乃ち三千大千世界を覆ふものあり。其前後に隨ひ、次を以て化没す。其諸の菩薩、僉然として欣悅し、虚空の中に於て共に天樂を奏し、微妙音を以て佛徳を歌歎し、經法を聽受して歡喜無量なり。佛を供養し已りて、未だ食せざるの前に、忽然として輕擧し、其本國に還る。』

佛、阿難に語りたまはく、『無量壽佛、諸の聲聞、菩薩、大衆の爲に法を班宣したまふ時は、都て悉く七寶の講堂に集會す。廣く道教を宣べ、妙法を演暢したまふに、歡喜し心解し得道せざるは莫し。即時に四方より自然の風起りて、普く寶樹を吹くに、五つの音聲を出し、無量の妙華を雨らして、風に隨ひ周徧す。自然の供養、是の如く絶えず。一切の諸天、皆天上の百千の華香、萬種の伎樂を齎して、其佛及び諸の菩薩、聲聞、大衆に供養す。普く華香を散じ、諸の音樂を奏し、前後來往して更相に開避す。斯時に當りて漂怡快樂勝げて言ふべからず。』

佛、阿難に語りたまはく、『彼佛國に生ずる諸の菩薩等は、講説すべき所に常に正法

【我所の心】 我ものと思ふところ。
 【適莫】 道は親、莫は疎。
 【離蓋】 五蓋煩惱を離るること。
 【等心】 衆生を平等に救済する心。
 【通等】 通は六通、明は三明、慧は三慧。
 【七覺】 擇法、捨進、喜、輕安、捨定、念。
 【無礙智】 法義辯の四無礙。
 【如より來生】 眞如より來生す。即ち如來の語源なり。
 【法の如如】 如は眞如、證悟の上より見れば一切法凡て眞如なり。
 【習滅】 習善滅惡は生死の苦果。煩惱はその因果。此の二果を二餘といふ。
 【一乘】 本願一佛乘。
 【異心無き等】 平等心なり。

を宣べ、智慧に隨順して違無く失無し。其國土所有の萬物に於て、我所の心無く、染著の心無し。去來進止情係る所無く、隨意自在にして適莫する所無し。彼無く我無く競無く訟無し。諸の衆生に於て大慈悲饒益の心、柔軟調伏、無忿恨の心、離蓋清淨無厭念の心、等心、勝心、深心、定心、愛法、樂法、喜法の心、諸の煩惱を滅して惡趣を離るる心を得たり。一切菩薩の所行を究竟し、無量の功德を具足成就せり。深禪定、諸通明慧を得、志を七覺に遊ばしめ、心に佛法を修す。肉眼は清徹にして分了ならざる塵し。天眼は通達して無量無限なり。法眼は觀察して諸道を究竟す。慧眼は眞を見て能く彼岸に度す。佛眼は具足して法性を覺了す。無礙智を以て人の爲に演說す。「三界は空、無所有なり」と等觀して佛法を志求し、諸の辯才を具し、衆生の煩惱の患を除滅す。如より來生して法の如如を解し、善く習滅の音聲、方便を知りて世語を欣ばず、樂ひて正論に在り。諸の善本を修し、佛道を志崇す。「一切の法は皆悉く寂滅なり」と知り、生身、煩惱二餘俱に盡たり。甚深の法を聞きて心疑懼せず、常に能く修行す。其大悲は深遠微妙にして覆載せざる塵く、一乘を究竟して彼岸に至る、疑網を決斷し、慧、心に由りて出づ。佛の教法に於て該羅して外無し。智慧は大海の如く、三昧は山王の如し。慧光、明淨にして日月に超踰せり。清白の法具足し圓滿す。猶し雪山の如し。諸の功德を照し等一にして淨きが故に、猶し大地の如し。淨穢好惡、異心無きが故に、猶し淨水の如し。塵勞、諸の垢染を洗除するが故に、猶し火王の如し。一切煩惱の薪を燒滅するが故に、猶し大風の如し。諸の世界に行じて障礙無きが故

【六和敬】 同戒和敬、同見和敬、同行和敬、身慈和敬、語慈和敬、意慈和敬。

【欣戚】 喜と憂。

【欲刺】 五欲の人を惱すこと、針刺の如きをいふ。

【因力】 宿世の善根。

【緣力】 親近知識。

【意力】 如理作意。

【願力】 求菩提心。

【方便力】 佛果を得る手段としての修行。

【多聞力】 所聞妙解。

【正觀】 離癡見性。

【通明】 六通三明。

に、猶し虚空の如し。一切の有に於て所著無きが故に、猶し蓮華の如し。諸の世間に於て汚染無きが故に、猶し大乘の如し。群萌を運載して生死を出でしむるが故に、猶し重雲の如し。大法雷を震ひ未覺を覺するが故に、猶し大雨の如し。甘露の法を雨らし、衆生を潤すが故に、金剛山の如し。衆魔、外道動すこと能はざるが故に、梵天王の如し。諸の善法に於て最上首なるが故に、尼拘類樹の如し。普く一切を覆ふが故に、優曇鉢華の如し。希有にして遇ひ難きが故に、金翅鳥の如し。外道を威伏するが故に、象の遊禽の如し。藏積する所無きが故に、猶し牛王の如し。能く勝つもの無きが故に、猶し象王の如し。善く調伏するが故に、獅子王の如し。畏るる所無きが故に、曠きこと虚空の如し。大慈等しきが故に、嫉心を摧滅せり。勝れるを忌まざるが故に、専ら法を樂求して心厭足無く、常に廣説を欲して、志疲倦すること無し。法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜かし、癡闇を除く。六和敬を修し、常に法施を行す。志勇精進にして心退弱せず。世の燈明と爲り、最勝の福田なり。常に導師と爲りて等しく憎愛無く、唯正道を樂ひ、餘の欣戚無し。諸の欲刺を抜き、以て群生を安んず。功慧殊勝にして尊敬せざる莫し。三垢の障を滅し、諸の神通に遊ぶ。因力、緣力、意力、願力、方便の力、常力、善力、定力、慧力、多聞の力、施、戒、忍辱、精進、禪定、智慧の力、正念、正觀、諸通明の力、如法調伏諸衆生力、是の如き等の力、一切具足せり。身色、相好、功德、辯才、具足莊嚴して與に等しき者無し。無量の諸佛を恭敬供養し、常に諸佛の爲に共に稱歎せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟し、空、無相、無願三昧、不生、不滅、

【九】釋尊の勸誡を明す中、第一に誠惡。初に諸惡の誠を擧ぐ。【力めて……念じ】彌陀佛の力めて善をなしたまひし、本願大道の他力自然なるを信ず。【上下無く】上は菩薩下は凡夫、この區別なし。【横に】他力によりて迷を離るるを云ふ。自力修行によりて悟るるを豎と云ふに對す。【自然の牽く所】阿彌陀佛の力に引かるる所。

諸の三昧門を修す。聲聞、緣覺の地を遠離せり。阿難、彼諸の菩薩は是の如き無量の功德を成就せり。我は但汝が爲に之を略説するのみ。若し廣説せば百千萬劫にも窮盡すること能はじ。」

佛、彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく、『無量壽國の聲聞、菩薩、功德、智慧稱説すべからず。又其國土は、微妙安樂にして清淨なること此の若し。何ぞ力めて善を爲し、道の自然なるを念じ、上下無く洞達無邊際なるを著さざる。宜しく各勤めて精進し、努力して自ら之を求むべし。必ず超絶し去いて、安養國に往生することを得ば、横に五惡趣を截ち惡趣自然に閉づ。道に昇ること窮極無し。往き易くして人無し。其國逆違せず、自然の牽く所なり。何ぞ世事を棄て、勤行して道徳を求めざる。極長生を獲て壽樂極り有ること無かるべし。然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍ふ。此劇惡極苦の中に於て勤身營務し以て自ら給濟す。尊と無く卑と無く、貧と無く富と無く、少長男女共に錢財を憂ふ。有無同然にして憂思適に等し。屏營として愁苦し累念積慮し、心の爲に走使せられ、安き時有ること無し。田有れば田を憂へ宅有れば宅を憂ふ。牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食、什物、復共に之を憂ふ。重思累息し憂念愁怖す。横に非常の水火、盜賊、怨家、債主の爲に焚漂劫奪せられ、消散磨滅すれば、憂毒忪忪として解くる時有ること無し。憤を心中に結び、憂惱を離れず、心堅く意固くして適に縱捨すること無し。或は摧碎に坐して、身亡び命終りぬれば、之を棄捐して去る、誰しも隨ふ者莫し。尊貴、豪富も亦斯患有り、憂懼萬端にして

勤苦此の若し。衆の寒熱を結び、痛と共に居す。貧窮下劣は困乏して常に無なり。田無ければ亦憂ひて田有らんことを欲し、宅無ければ亦憂ひて宅有らんことを欲す。牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食、什物無ければ、又憂ひて之有らんことを欲す。適一有れば復一を少く、是有れば是を少く。有ること齊等ならんを思ふ。適に具に有らんと欲すれば便ち復離散す。是の如く憂苦して當に復求索すとも、時に得ること能はず、思想益無く身心俱に勞して坐起安からず、憂念相隨ふ、勤苦斯の如し。亦衆の寒熱を結び痛と共に居す。或時は之に坐して身を終へ命を夭す。肯へて善を爲し道を行じ徳に進まず、壽終り身死して、當に獨遠く去るべし。趣向する所有れども、善惡の道能く知る者莫し。世間の人民、父子、兄弟、夫婦、家室、中外の親屬、當に相敬愛して相憎嫉すること無く、有無相通じて貪惜を得ること無く、言色常に和して相違戾すること莫かるべし。或時は心靜ひ悲怒する所有り。今世の恨意微に相憎嫉すれば、後世に轉劇しくして大怨を成すに至る。所以は何ん。世間の事更相に患害す。即時に應に急に相破すべからずと雖も、然も毒を含み怒を蓄へ、憤を精神に結び、自然に剋識して相離るることを得ず。皆當に對生し更相に報復すべし。人世間愛欲の中に在りて獨生じ獨死し獨來る。行くに當りて苦樂の地に至趣す。身自ら之に當る。代る者有ること無し。善惡變化し殃福處を異にす。宿豫嚴待して當に獨趣入すべし。遠く他所に到れば能く見る者莫し。善惡自然に行を追ひて生ずる所、窳窳冥冥として別離久長なり。道路同じからずして會ひ見ること期無し、甚だ難く甚だ難し。復相値

【之を見】 道を信
ぜずして却て邪見
の謬執を抱くなり

ふことを得んや。何ぞ衆事を棄て、各强健の時に憂びて努力して善を勤修し、精進に度世を願ぜざる。極長生を得べし、如何ぞ道を求めざる。安ぞ待つべき所ある。何の樂を欲するや。是の如きの世人、善を作して善を得、道を得、道を得ることを信ぜず。人死して更めて生じ、惠施して福を得ることを信ぜず。善惡の事都て之を信ぜず、之を然らずと謂へり。終に是とする有ること無し。但此に坐するが故に、且自ら之を見、更相に瞻視して先後同然なり。父の餘せる教令を轉相承受す。先人、祖父素より善を爲さず道徳を識らず、身愚に神闇く心塞がり意閉づ。死生の趣、善惡の道自ら見ること能はず、語る者有ること無し。吉凶、禍福競ひて各之を作す、一りも怪しむもの無し。生死の常道、轉相嗣立す。或は父子を哭し或は父子を哭す。兄弟、夫婦更相に哭泣す。顛倒上下無常根本なり。皆當に過去すべし、常に保つべからず。教語開導すれども之を信する者は少し。是を以て生死流轉休止有ること無し。此の如きの人、朦冥抵突にして經法を信ぜず、心に遠慮無く、各快意を欲す。愛欲に癡惑し道徳に達せず、瞋怒に迷没し財色を貪狼す。之に坐して道を得ずば、當に惡趣の苦に更り、生死窮已無かるべし。哀れなる哉、甚だ傷むべし。或時は室家、父子、兄弟、夫婦、一は死し一は生る。更相に哀愍し恩愛思慕す、憂念結縛し、心意痛著して迭相に顧戀す。日を窮め歳を卒へて解け已むこと有ること無し。道徳を教語すれども心開明ならず、恩好を思想して情欲を離れず、昏朦閉塞して愚惑に覆はれ、深思熟計し、心自ら端正に、專精に道を行じて世事を決斷すること能はず、便旋として竟に至

【一〇】誠惡を明す
中、彌勒の領解を
擧ぐ。

る。年壽終盡すれども得道すること能はず。奈何ともすべきこと無し。總猥憤擾にして皆愛欲を貪る。道に惑へる者は衆く之を悟る者は寡し。世間恩恵として憍頼すべきこと無し。尊卑、上下、貧富、貴賤、恩務に勤苦し、各殺毒を懷く、惡氣竄冥として爲に安に事を興す。天地に違逆し人心に従はず、自然の非惡、先づ隨つて之に與し、恣に所爲を聽して其罪極るを待ち、其壽未だ盡きざるに便ち頓に之を奪ひ、惡道に下入し累世に勤苦す。其中に展轉して數千億劫出づる期有ること無し。痛言ふべからず、甚だ哀愍すべし。』

佛、彌勒菩薩、諸天人等に告げたまはく、『我今汝に世間の事を語る。人是用ての故に坐して得道せず。當に熟思計し衆惡を遠離し、其善なる者を選び、勤めて之を行すべし。愛欲榮華常に保つべからず。皆當に別離すべし。樂しむべき者無し。佛の在世に曼びて當に勤めて精進すべし。其れ至心に安樂國に生れんと願すること有らん者は、智慧明達にして功德殊勝なることを得べし。心の所欲に隨ひて經戒を虧負し、人の後に在ることを得る勿れ。儼し疑意有りて經を解せざる者は具に佛に問ふべし。當に爲に之を説くべし。』彌勒菩薩、長跪して白して言さく、『佛は威神尊重にして、所説快善なり。佛の經語を聽き心に貫して之を思ふに、世人實に兩り、佛の所言の如し。今佛、慈愍して大道を顯示したまふ。耳日開明して長く度脫を得。佛の所説を聞き歡喜せざる莫し。諸天、人民、蠕動の類皆慈恩を蒙り憂苦を解脱す。佛語の教誡は甚だ深く甚だ善なり。智慧明かに見て八方、上下、去來今の事究暢せざるは莫し。今我衆等、度脫を得ることを蒙る所以は、皆佛の前世道を

【典攬】經典を解釋して衆義を攬知す。

【二】誠惡を明す中、釋尊の重誨を擧ぐ。

【惡露】老病者の出す穢物。

求むるの時、謙苦せしが致す所なり。恩德普く覆ひ、福祿巍巍たり、光明徹照し、空に達すること無極なり。泥洹に閑入し典攬を教授す。威制消化し、十方を感動すること無窮無極なり。佛は法王と爲り、尊きこと衆聖に超ゆ。普く一切天人の師と爲り、心の所願に隨ひ皆得道せしむ。今佛に値ひ、復無量壽佛の聲を聞くことを得て歡喜せざる靡く、心開明を得たり。」

佛、彌勒菩薩に告げたまはく、『汝が言是なり。若し佛を恭敬すること有る者は實に大善爲り。天下久くにして乃ち復佛有り。今我、此世に於て作佛し、經法を演説し、道教を宣布し、諸の疑網を斷ち、愛欲の本を抜き、衆惡の源を杜づ。三界に遊歩して拘礙する所無し。典攬智慧衆道の要、綱維を執持して昭然分明に、五趣を開示し、未度の者を度し、生死泥洹の道を決正す。彌勒、當に知るべし、汝無數劫より來、菩薩の行を修し、衆生を度せんと欲すること其れ已に久遠なり。汝に従ひ得道し、泥洹に至るもの、稱數すべからず。汝及び十方の諸天、人民、一切四衆、永劫已來五道に展轉し、憂畏勤苦せしこと具に言ふべからず。乃至今世まで生死絶えず。佛と相値うて經法を聽受し、又復無量壽佛を聞くことを得たり。快なる哉、甚だ善し。吾爾を助けて喜ばしむ。汝今亦自ら生、死、老、病、痛苦を厭ふべし。惡露不淨にして樂しむべき者無し。宜しく自ら決斷し、身を端し行を正し、益諸善を作し、己を修め體を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信に、表裏相應すべし。人能く自ら度し、轉相拯濟し精明に求願し、善本を積累せよ。一世に勤苦すと雖も須

【邊地】 佛智を疑ふ者の生ずるところ。

【三】 藏惡を明す中、五善五惡の勸諭を擧ぐ。

【五痛】 惡業により現世に罪厄を受くこれ果報。
【五燒】 惡業により來世に惡趣に墮すこれ果報。
【五善】 五惡に反する五正行。

【不逮】 ことにふれ人後にあり。

與の間なり。後に無量壽佛國に生れ快樂無極なり。長く道德と合明し、水く生死の根本を抜き、復食悲愚癡、苦惱の患無く、壽一劫、百劫、千萬億劫ならんと欲するとも、自在隨意に皆之を得べし。無爲自然にして泥洹の道に次し。汝等宜しく各精進に心の所願を求むべし。疑惑中悔して自ら過咎を爲し、彼邊地七寶の宮殿に生じ、五百歳の中、諸の厄を受くることを得ること無かれ。彌勒、佛に白して言さく、「佛の重誨を受けて專精に修學し、教の如く奉行し、敢て疑ふこと有らざらん。」と。

佛、彌勒に告げたまはく、「汝等能く此世に於て、端心正意にして衆惡を作さざれば世た至徳と爲す。十方世界に最も倫匹無し。所以は何ん。諸佛國土は天人の類、自然に善を作し、大いに惡を爲さざれば、易く開化すべし。今我此世間に於て作佛し、五惡、五痛、五燒の中に處す、最も劇苦爲り。群生を教化し、五惡を捨てしめ、五痛を去らしめ、五燒を離れしめ、其意を降化して、五善を持ち、其福德、度世長壽、泥洹の道を獲しめん。佛、言はく、「何等か五惡、何等か五痛、何等か五燒、何等か五善を消化して、五善を保ち、其福德、度世長壽、泥洹の道を獲しむる。」

佛、言はく、「其一惡とは、諸天人民、蠕動の類、衆惡を爲さんと欲す、皆然らざる莫し。強き者は弱きを伏し、轉相剽賊し、殘害殺戮し、迭相に吞噬す。善を修むることを知らず、惡逆無道にして後に殊罰を受け、自然に趣向す。神明記識して犯す者は赦されず。故に貧窮、下賤、乞匄、孤獨、聾盲、瘡痂、愚癡、弊惡有り、疴狂不逮の屬有るに至る。又尊貴、豪富、

高才、明達なる有り、皆宿世に慈孝にして善を修し、徳を積めるの致す所に由る。世に常道、王法の牢獄有れども肯て畏愼せず、悪を爲し罪に入り、其殃罰を受く。解脱を求望すれども、免出を得難し。世間に此目前の兇事有り。壽終りて後世に尤も深く尤も劇しくして、其幽冥に入り、轉生して身を受く、譬へば王法の痛苦極刑の如し。故に自然の三塗無量の苦惱有り。其身を轉質し形を改め道を易へ、受くる所の壽命、或は長く或は短し、魂神、精識自然に之に越く。當に獨り值向し相從ひ共に生じ、更相に報復して絶已有ること無かるべし。殃惡未だ盡きざれば相離るることを得ず。其中に展轉して出期有ること無く、解脱を得難し、痛言ふべからず。天地の間自然に是有り、即時卒暴に善惡の道に至るべからずと雖も、會ず當に之に歸すべし。是を一大惡、一痛、一燒と爲す、勤苦是の如し。譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て一心に意を制し、端身正行にして獨り諸善を作し、衆惡を爲さずんば身獨り度脱して、其福徳、度世上天、泥洹の道を獲ん。是を一の大善と爲すなり。』

佛、言はく、『其二惡とは、世間の人民、父子、兄弟、室家、夫婦都て義理無く、法度に順ぜず、奢侈、橋縦にして各快意せんと欲し、心に任せて自ら恣にし、更相に欺惑し、心口各異り、言念實無く佞諂不忠にして巧言諛媚し、賢を嫉み善を誘り、冤枉に陥入す。主上不明にして臣下を任用す。臣下自在にして機偽多端なり。度を踐み能く行ひ、其形勢を知らず。位に在りて正しからざれば、其が爲に欺かれ、妄に忠良を損じ、天心に當らず。臣

【度を踐み能く行ひ】君情を伺ひ便す。已に厚くせんとす。

は其君を欺き、子は其父を欺く。兄弟夫婦、中外、知識更相に欺誑す。各貪欲瞋恚、愚癡を懷き、自ら己を厚くせんと欲し、欲貪して多く有す。尊卑、上下心俱に同然なり。家を破り身を亡し、前後を顧みず、親屬、内外之に坐して滅す。或時は室家知識、鄉黨市里、愚民、野人轉共に従事し、更相に利害して忿成し怨結す。富有なれども慳惜して肯て施與せず、愛寶貪重して、心勞し身苦しむ。是の如くして竟り至り、恃怙する所無く、獨り來り獨り去り、一として隨ふ者無し。善惡、禍福命を追うて生ずる所なり。或は樂處に在り、或は苦毒に入る。然る後乃ち悔ゆるとも當に復何ぞ及ぶべき。世間の人民心愚に智少し。善を見ては憎謗して慕及せんことを思はず。但惡を爲さんと欲し妄に非法を作す。常に盜心を懷き他利を怖望す。消散糜盡すれば復求索す。邪心不正にして人の色すること有らんことを懼る。豫め思計せず事至りて乃ち悔ゆ。今世に現に王法の牢獄有り、罪に隨ひて趣向し其殃罪を受く。其前世に道德を信ぜず、善本を修せざるに因りて今復惡を爲せば、天神剋識して其名籍を別つ。壽終り神逝きて惡道に下入す。故に自然の三塗無量の苦惱有り。其中に展轉して世世累劫に出期有ること無く、解脫を得難し。痛言ふべからず。是を二大惡、一痛、二燒と爲す、勤苦是の如し。譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て一心に意を制し、端身正行にして獨り諸善を作し、衆惡を爲さずんば、身獨度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲ん。是を二の大善と爲すなり。』

佛、言はく、『其三惡とは、世間人民相因りて寄生し、共に天地の間に居す、處年壽命能

【昞昧】 傍視。

【傍に於て等】 夫
婦のみ傍室に快喜
放逸なるなり。

く幾何も無し。上に賢明、長者、尊貴、豪富有り。下に貧窮、厮賤、厖劣、愚夫有り。中に不善の人有り。常に邪惡を懷き、但姪姪を念じ、煩胸中に滿ち、愛欲交亂して、坐起安かならず。貪心守惜し、但唐得を欲す。細色を呵昧し、邪態外に逸なり。自妻を厭憎し、私に妄に入出す。家財を費損し、事非法を爲し、交結聚會し、師を興して相伐ち、攻劫、殺戮し、強奪不道なり。惡心外に在つて自ら業を修せず。盜竊して趣に得れば、欲繫に事を成す。恐熱迫憎して妻子に歸給す。心を恚にし、意を快し、身を極めて樂を作す。或は親屬に於て尊卑を避けず、家室、中外患ひて之に苦しむ。亦復王法の禁令を畏れず。是の如きの惡、人鬼に著され、日月照見し、神明記識す。故に自然の三途無量の苦惱有り。其中に展轉し、世世累劫に同期有ること無く、解脱を得難し、痛言ふべからず。是を三大惡、三痛、三燒と爲す。勤苦是の如し。譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て一心に意を制し、端正正行にして、獨諸善を作し、衆惡を爲さずんば、身獨度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲ん。是を三の大善と爲すなり。』

佛、言はく、『其四惡とは、世間の人民善を修むることを念はず。轉相教令して共に衆惡を爲す。兩舌、惡口、妄言、綺語、讒賊、鬪亂し、善人を憎嫉し、賢明を敗壞し、傍に於て快喜して二親に孝せず、師長を輕慢し、朋友に信無く、誠實を得難し。尊貴自大にして己道有りて謂ひ、横に威勢を行じて人を侵易す。自ら知ることを能はず、惡を爲して恥づること無し。自ら強健を以て人の敬難せんことを欲す。天地、神明、日月を畏れず、背て善を作

さず、降化すべきこと難し。自ら用ひて僣僣して常に爾るべしと謂ひ、憂懼する所無し、常に憍慢を懷けり。是の如き衆惡天神記識す。其前世に頗る福德を作せるに頼りて小善扶接し營護して之を助く。今世に惡を爲して福德盡く滅し、諸の善鬼神各共に之を離る、身獨空立して復依る所無し。壽命終盡し、諸惡の歸する所自然に迫促し、共に趣きて之に頗る。又其名籍神明に記在せり。殃咎牽引し、當に往きて趣向すべし。罪報自然にして從りて捨離すること無く、但前行を得て火鑊に入り身心摧碎し、精神痛苦す。斯時に當りて悔ゆとも復何ぞ及ばん。天道自然にして蹉跎を得ず。故に自然の三途、無量の苦惱有り。其中に展轉し世世累劫に刑期有ること無く、解脫を得難し、痛言ふべからず。是を四火惡、四痛、四燒と爲す。勤苦是の如し。譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て一心に意を制し、端身正行にして獨證善を作し、衆惡を爲さずんば、身獨安脫して其福德、度世上天、泥洹の道を獲ん。是を四の大善と爲すなり。」

【徙倚】 徘徊。

【辜較】 苛斂。

【魯鈍】 魯鈍にし

佛、言はく、「其五惡とは、世間の人民徙倚懈怠にして、背て善を作し、身を治め、業を修せず。家室、眷屬、飢寒、困苦す。父母教誨すれば目を瞋し怒り響ふ、言令和ならず、違戾反逆なり。譬へば怨家の如し、子無きに如かず。取與節無く、衆共に患厭す。恩に負き義に違し、報償の心有ること無し。貧窮困乏して復得ること能はず、辜較縱奪し放恣遊散す。唐得を串敷し、用て自ら賑給す。酒に耽り美を嗜み飲食度無し。肆心蕩逸し、魯鈍抵突にして人情を識らず、強ひて抑制せんと欲す。人の善有るを見ては憎嫉して之を惡み、無義

【職當】 自高これ
を學る。

無禮にして顧難する所無し。自ら用て職當して諫曉すべからず。六親眷族所資の有無、憂念すること能はず、父母の恩を惟はず、師友の義を存せず。心常に惡を念じ、口常に惡を言ひ、身常に惡を行じ、會て一善も無し。先聖諸佛の經法を信ぜず、道を行じて度世を得べきことを信ぜず、死後神明更生するを信ぜず、善を作せば善を得、惡を爲せば惡を得るを信ぜず。眞人を殺し衆僧を鬪亂せんと欲し、父母、兄弟眷族を害せんと欲す。六親憎惡して其をして死せしめんと願ふ。是の如き世人心意俱に然り。愚癡蒙昧にして自ら以て智慧ありとす。生の從來する所、死の趣向する所を知らず。不仁、不順にして天地に惡逆す。而も其中に於て僥倖を憐望し、長生を欲求すれども、會ず當に死に歸すべし。慈心教誨し、其をして善を念ぜしめ、生死、善惡の趣、自然に是れ有るを開示すれども、而も背て之を信ぜず。苦心に與に語るも其人を益すること無し。心中閉塞し意開解せず。大命將に終らんとす、悔懼交至る。豫め善を修せず、窮るに臨みて方に悔ゆ、之を後に悔ゆとも將何ぞ及ばんや。天地の間に五道分明なり。恢廓窳窳、浩浩茫茫として善惡報應し禍福相承く。身自ら之に當る、誰も代る者無し。數の自然にして其所行に應ず。殃咎命を追ひて縱捨を得ること無し。善人は善を行じて樂より樂に入り明より明に入る。惡人は惡を行じて苦より苦に入り、冥より冥に入る。誰か能く知る者ぞ、獨佛知るのみ。教語開示すれども信用する者は少し。生死休まず惡道絶えず。是の如き世人具に盡すべきこと難し。故に自然の三途、無量の苦惱有り。其中に展轉し、世世累劫に出期有ること無く、解脱を

得難し、痛言ふべからず。是を五大惡、五痛、五燒と爲す。勤苦是の如し。譬へば大火の人身を焚燒するが如し。人能く中に於て一心に意を制し、端身正念にして言行相副ひ、所作至誠にして所語、語の如く、心口轉ぜず、獨諸善を作し、衆惡を爲さずんば、身獨度脱して其福德、度世上天、泥洹の道を獲ん。是を五大善と爲すなり。

佛、彌勒に告げたまはく、「吾汝等に語ぐ、是世の五惡、勤苦此の如し。五痛、五燒展轉相生す。但衆惡を作し、善本を修せざれば皆悉く自然に諸の惡趣に入る。或は其今世に先づ殃病を被り、死を求むるも得ず、生を求むるも得ず、罪惡の招く所、衆に示して之を見しむ。身死し、行に隨ひて三惡道に入り、苦毒無量にして自ら相燦然す。其久後に至りて共に怨結を作し、小微より起りて遂に大惡と成る。皆財色に貪著し施惠する能はざるに由る。癡欲に迫られ、心の思想に隨ひて煩惱結縛し、解已有ること無し。己を厚くし利を許ひ、省録する所無し、富貴榮華、時に當りて快意し、忍辱する能はず。務めて善を修せず威勢幾くも無く、隨ひて以て磨滅す。身勞苦に坐し、久しくして後大いに劇し。天道施張し自然に糺擧し、綱紀、羅網上下相應す。勞瘁愴怛として當に其中に入るべし。古今に是有り、痛しき哉、傷むべし。佛、彌勒に語りたまはく、「世間是の如し。佛皆之を哀み、威神力を以て衆惡を摧滅し、悉く善に就かしむ。所思を棄捐し經戒を奉持し、道法を受行して違失する所無くば、終に度世泥洹の道を得ん。佛、言はく、「汝今の諸天人民及び後世の人、佛の經語を得、當に之を熟思し、能く其中に於て端心正行すべし。主上善を爲して

【施張】正直。
【勞瘁愴怛】孤獨無依。

其下を率化し、轉相勸令して、各自ら端守し、聖を尊び善を敬ひ、仁慈博愛にして佛
 語の教誨、敢て虧負すること無く、當に度世を求め、生死衆惡の本を抜斷すべし。當に三
 塗無量の憂畏苦痛の道を離るべし。汝等是に於て廣く德木を植ゑ、恩を布き施惠して、道禁
 を犯すこと勿れ。忍辱、精進、一心、智慧、轉相教化し、徳を爲し善を立て、正心正意にし
 て齋戒清淨なること一日一夜すれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歳するに勝る。
 所以は何ん。彼佛の國土は無爲自然にして皆衆善を積み、毛髮の惡も無ければなり。此に
 於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸佛國土に於て善を爲すこと千歳するに勝れ
 り。所以は何ん。他方佛國は善を爲す者は多く惡を爲す者は少し。福德自然にして造惡無
 きの地なり。唯此間のみ惡多く自然なる有ること無し。勸苦求欲し、轉相欺誑す。心勞し
 形困しみ、苦を飲み毒を食ふ。是の如く息務して未だ嘗て寧息せず。吾汝等天人の類を哀
 み、苦心に誨諭し、教へて善を修せしむ。器に隨ひて開導し經法を授與するに、承用せざ
 る莫し。意の所願に在りて皆得道せしむ。佛の遊履する所、國邑、丘聚化を蒙らざるは靡
 し。天下和順に、日月清明にして、風雨時を以てし、災厲起らず、國豊に民安く、兵戈用
 ふる無く、徳を崇び仁を興し、務めて禮讓を修す。佛、言はく、「我、汝等諸天人を哀憫
 すること、父母の子を念ふよりも甚だし。今我、此世間に於て作佛し、五惡を降化し、五
 痛を消除し、五燒を絶滅し、善を以て惡を攻め、生死の苦を抜き、五徳を獲、無爲の安き
 に昇らしむ。吾世を去りて後、經道漸滅し、人民詐僞にして復衆惡を爲し、五痛、五燒還り

【二三】釋尊の勸誡を明す中、第二誠疑。初に彌陀の光照を被す。

【漫漶汚汗】ひろくただよへる漫漶たる水。

【二四】誠疑を明す中、淨土に胎生と化生の別あるを示す。

て前の法の如くならん。久しくして後轉劇し。悉く説くべからず。我但汝が爲に略して之を言ふのみ。佛、彌勒に語げたまはく、『汝等各普く之を思ひ、轉相教誡し、佛の經法の如く、犯すを得ること無かれ。』是に於て彌勒菩薩、合掌して白して言さく、『佛の所説は甚だ苦なり。世人實に雨り。如來普慈哀愍し、悉く度脱せしむ。佛の重誨を受け、敢て違失せざらん。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝起ちて、衣服を更整理し、合掌恭敬して無量壽佛を禮すべし。十方國土の諸佛如來は、常に共に彼佛の無著無礙なるを稱揚讚歎したまふ。』是に於て阿難起ちて、衣服を整へ、正身西面し、恭敬合掌、五禮投地して、無量壽佛を禮し、白しに言さく、『世尊、願くは彼佛の安樂國土及び諸の菩薩、聲聞大衆を見ん。』と。是語を説き已るに即時に無量壽佛、大光明を放ちて普く一切諸佛の世界を照したまふ。金剛圍山須彌山王、大小の諸山、一切所有、皆同じく一色なり。譬へば劫水の世界に彌滿せるに、其中の萬物沈没して現れず、漫漶汚汗として唯大水のみを見るが如く、彼佛の光明も亦復是の如し。聲聞、菩薩の一切の光明皆悉く隱蔽せられ、唯佛光の明曜顯赫なるを見るのみ。爾時、阿難、即ち無量壽佛を見たまつるに、威德巍巍として須彌山王の高く一切諸の世界の上に出づるが如し。相好光明照曜せざるは靡し。此會の四衆一時に悉く見たり。彼に此土を見るも亦復是の如し。

爾時、佛、阿難及び慈氏菩薩に告げたまはく、『汝彼國を見るに、地より已上淨居天に至

【二五】 誠疑を明す中、信疑の得失を擧ぐ。

【佛智…無等無倫最上勝智】 佛の五智。

るまで、其中の有ゆる微妙、嚴淨自然の物、悉く見ると爲さんや不や。阿難對へて曰はく、『唯然り已に見る。』汝寧ろ復無量壽佛の大音もて一切世界に宣布し、衆生を化したまふを聞くや不や。阿難對へて曰はく、『唯然り已に聞けり。』彼國の人民、百千由旬の七寶の宮殿に乗じ、障礙有ること無く、徧く十方に至り諸佛を供養す、汝復見るや不や。對へて曰はく、『已に見る。』彼國の人民、胎生の者有り、汝復見るや不や。對へて曰はく、『已に見る。』其胎生の者、處する所の宮殿、或は百由旬、或は五百由旬、各其中に於て諸の快樂を受くること切利天上の如し、亦皆自然なり。』

爾時、慈氏菩薩、佛に白して言さく、『世尊、何の因、何の緣ぞ、彼國の人民胎生、化生せる。佛、慈氏に告げたまはく、『若し衆生有りて、疑惑の心を以て諸の功德を修し彼國に生ぜんと願じ、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了せず。此諸衆生、彼宮殿に生じ、壽五百歲、常に佛を見ず、善本を修習し、其國に生れんと願ぜん。此諸衆生、彼宮殿に於て之を胎生と謂ふ。若し衆生有りて明かに佛智乃至勝智を信じ、諸の是故に彼國土に於て之を胎生と謂ふ。若し衆生有りて明かに佛智乃至勝智を信じ、諸の功德を作し、信心廻向すれば、此諸の衆生、七寶華中に於て自然に化生し、跏趺して坐し、須臾の頃に身相光明、智慧功德諸の菩薩の如く具足し成就す。』

復次に慈氏、他方佛國の諸大菩薩、發心して無量壽佛を見たてまつり、恭敬供養して諸の菩薩、聲聞の衆に及さんと欲せん。彼菩薩等、命終りて無量壽國に生ずることを得、

【六】 誠疑を明す
中、胎宮の喩を擧ぐ。

七寶華の中に於て自然に化生せん。彌勒、當に知るべし、彼化生の者は、智慧勝るるが故に、其胎生の者は皆智慧無く、五百歳の中に於て、常に佛を見ず、經法を聞かず、菩薩、諸の聲聞衆を見ず、佛を供養するに由無く、菩薩の法式を知らず、功德を修習することを得ず。當に知るべし、此人は宿世の時、智慧有ること無し。疑惑の致す所なり。」

佛、彌勒に告げたまはく、「譬へば轉輪聖王の別に七寶の宮室有りて種種に莊嚴し、床帳を張設し、諸の綵旛を懸け、若し諸の小王子、罪を王に得ること有らば、輒ち彼宮中に内れて繋ぐに金鎖を以てし、飲食、衣服、床褥、華香、妓樂を供給すること、轉輪王の如く乏少する所無けんが如し。意に於て云何。此諸の王子、寧ろ彼處を樂はんや不や。」對へて曰はく、「不なり、但種種に方便し、諸の大力を求め、自ら免出するを欲せん。」佛、彌勒に告げたまはく、「此諸の衆生も亦復是の如し。佛智を疑惑するを以ての故に、彼宮殿に生ず。刑罰乃至一念の惡事すら有ること無く、但五百歳の中に於て三寶を見ず。供養し諸の善本を修することを得ず。此を以て苦と爲す。餘の樂有りと雖も、猶彼處を樂はず。若し此衆生、其本罪を識り、深く自ら悔責し、彼處を離れんことを求むれば、即ち意の如く無量壽佛の所に往詣し、恭敬供養することを得、亦徧く無量無數の諸餘の佛の所に至り、諸の功德を修することを得ん。彌勒、當に知るべし、其れ菩薩有りて疑惑を生ずる者は大利を失ふと爲す。是故に應當に明かに諸佛の無上智慧を信ずべし。」

【七】 誠疑を明す
中、淨土に十方より來生する菩薩を

せんや。佛、彌勒に告げたまはく、『此世界に於て六十七億の不退の菩薩有りて、彼國に往生せん。一一の菩薩、已に曾て無數の諸佛を供養し、次で彌勒の如き者なり。諸の小行の菩薩、及び少功徳を修習する者は稱計すべからず、皆當に往生すべし。佛、彌勒に告げたまはく、『但我刹の諸の菩薩等彼國に往生するのみならず、他方佛土も亦復是の如し。其第一佛を名けて遠照と曰ふ。彼に百八十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第二佛を名けて寶藏と曰ふ。彼に九十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第三佛を名けて無量普と曰ふ。彼に二百二十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第四佛を名けて甘露味と曰ふ。彼に二百五十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第五佛を名けて龍勝と曰ふ。彼に十四億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第六佛を名けて勝力と曰ふ。彼に萬四千の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第七佛を名けて師子と曰ふ。彼に五百億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第八佛を名けて離垢光と曰ふ。彼に八十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第九佛を名けて德首と曰ふ。彼に六十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第十佛を名けて妙徳山と曰ふ。彼に六十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第十一佛を名けて人王と曰ふ。彼に十億の菩薩有り、皆當に往生すべし。其第十二佛を名けて無上華と曰ふ。彼に無數不可稱計の諸の菩薩衆有り、皆不退轉にして智慧勇猛なり。已に曾て無量の諸佛を供養し、七日の中に於て即ち能く百千億劫大士の所修の堅固の法を攝取す。斯等の菩薩皆當に往生すべし。其第十三佛を名けて無畏と曰ふ。彼に七百九十億の大菩薩衆有り、諸の小

【二八】以下流通分
第一に彌勒付屬を
明す

【經道滅盡】末法
萬年の後諸の遺法
悉く滅すと云ふ。

菩薩及び比丘等稱計すべからず、皆當に往生すべし。佛、彌勒に語けたまはく、『但此十四
佛國の中の諸の菩薩等、當に往生すべきのみならざるなり。十方世界無量の佛國あり。
其往生者も亦復是の如く甚だ多くして無數なり。我但十方諸佛の名號及び菩薩、比丘の彼
國に生ずる者のみを説かんに、晝夜一劫すとも、尙未だ竟ること能はじ。我今汝が爲に略
して之を説くのみ。』

佛、彌勒に語けたまはく、『其れ彼佛の名號を聞くことを得る有りて、歡喜踊躍し、乃至
一念せん。當に知るべし、此人は大利を得と爲す。則ち是れ無上の功德を具足するなり。
是故に彌勒説ひ大火の三千大千世界に充滿する有りとも、要す當に此を過ぎて是經法を聞
き、歡喜信樂し、受持、讀誦し、説の如く修行すべし。所以は何ん。多く菩薩有りて、此經
を聞かんと欲す。而も得ること能はず。若し衆生有りて此經を聞く者は、無上道に於て終
に退轉せじ。是故に應當に專心に信受し、持誦説行すべし。佛、言はく、『吾今諸の衆生
の爲に、此經法を説き、無量壽佛及び其國土の一切の所有を見しめん。當に爲すべき所の
者は皆之を求むべし。我滅度の後を以て復疑惑を生ずるを得ること無かれ。當來の世に經
道滅盡せん。我慈悲を以て哀愍し、特に此經を留めて止住すること百歲せん。其れ衆生有
りて斯經に値ふ者は、意の所願に隨ひて皆得度すべし。佛、彌勒に語けたまはく、『如來の
興世は値ひ難く見難し。諸佛の經道も得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜も聞くを得
ること亦難し。善知識に遇ひ法を聞きて能く行すること、此れ亦難しと爲す。若し斯經を

【難中の難】他力易行の法門は信じ難きをいふ。

【二九】第二に得益の不同を明す。

【清淨法眼】初果の聖者、二乗の人は初めて見道に入りて、無漏清淨の法眼もて、四諦の理を觀するが故にこの名あり。

【阿那含果】アーナーハミーン (Anāgamin) 不還果なり。欲界修惑の九品を斷盡したる聖者。

聞きて信樂、受持せんは、難中の難、此難に過ぐるもの無し。是故に我法は是の如く作し、是の如く説き、是の如く教ふ。應當に信順し如法に修行すべし。』

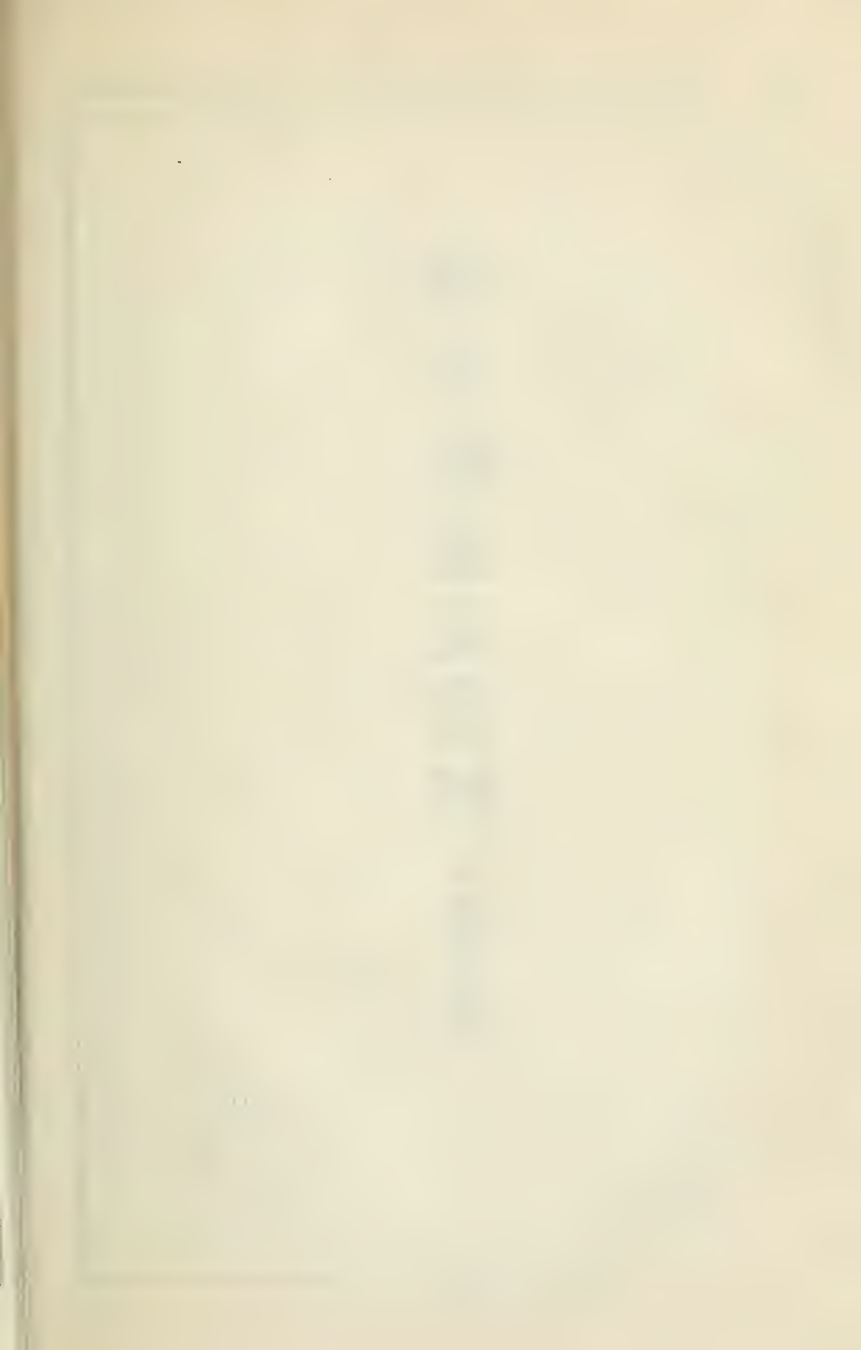
爾時、世尊、此經法を説きたまふに、無量の衆生、皆無上正覺の心を發し、萬二千那由他の人、清淨法眼を得、二十二億の諸天人民、阿那含果を得、八十萬の比丘漏盡意解し、四十億の菩薩、不退轉を得、弘誓の功德を以て自ら莊嚴す。將來の世に於て、當に正覺を成すべし。爾時、三千大千世界六種に震動し、大光普く十方國土を照し、百千の音樂自然に作り、無量の妙華紛紛として降る。佛、經を説き已りたまふに、彌勒菩薩及び十方より來れる諸菩薩衆、長老阿難、諸の大聲聞、一切の大衆、佛の所説を聞きて歡喜せざるは磨し。

佛說無量壽經卷下

佛說觀無量壽經

(真宗所用)

經典部
第二卷



佛說觀無量壽經

宋元嘉中盪良耶舍譯

【一】一經の構成は序分、正宗分、得益分、流通分、者闍分の五篇より成る。以下序分の中、第一に證信序【二】序分の中、第二に發起序。此中、第七節に分る之を發起序の七縁と名く。初に化前序【法王子】如來の跡を補ふ意。【一】二に禁父縁。【調達】佛の從弟【調達】佛の從弟【大夫人】正后のこと。

【解蜜】牛羊の乳酪を精製せるもの【妙】乾飯の粉末【藥水】佛十大弟子の一、說法第一【四】三に禁母縁

是の如く我聞く。一時、佛、王舍城耆闍崛山中に在し、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。菩薩三萬二千あり。文殊師利法王子を上首と爲せり。

爾時、王舍大城に一りの太子有り、阿闍世と名く。調達惡友の教に隨順し、父の王頻婆娑羅を收執し、幽閉して七重の室の内に置き、諸の群臣を制して一りも往くことを得ざらしむ。國の大夫人を韋提希と名く。大王を恭敬し、澡浴清淨にし、酥蜜を以て麩に和し用て其身に塗り、諸の瓔珞の中に蒲桃の漿を盛り、密に以て王に上る。爾時、大王麩を食し漿を飲み、水を求めて口を漱ぐ、口を漱ぎ畢已りて合掌恭敬し、耆闍崛山に向ひ遙に世尊を禮して是言を作す、「大目犍連は是れ吾親友なり、願くは慈悲を興して我に八戒を授けたまへ。」と。時に目犍連、鷹隼の飛ぶが如く疾く王の所に至る。日日はの如く王に八戒を授く。世尊も亦尊者富樓那を遣し、王の爲に說法せしむ。是の如き時の間三七日を經たり。王、麩蜜を食し聞法を得るが故に顔色和悅せり。

時に阿闍世、守門者に問はく、「父の王、今猶存在するや。」と。時に守門人白して言さく、「大王、國の大夫人身に麩蜜を塗り瓔珞に漿を盛り持用て王に上る。沙門目連及び富

【耆婆】阿闍世の庶兄、名醫。

【毗陀】(Vidya) エーダのこと。

【五】 四に厭苦縁

【耆闍崛山より没し】釋尊はこの時華嚴を説く、この法華の會座を没して王宮に臨む。これを法華經と觀經を同時と云ふ。

樓那、空よりして來り、王の爲に説法す。禁制すべからざるなり。時に阿闍世、此語を聞き已りて其母を怒りて曰はく、「我母は是れ賊なり。賊と作爲ればなり。沙門は惡人なり。幻惑、呪術をもて此惡王をして多日死せざらしむ。」と。即ち利劍を執り、其母を害せんと欲す。時に一臣有り、名けて月光と曰ふ。聰明多智なり。及び耆婆と王の爲に作禮し白して言さく、「大王、臣『毗陀論經』に説けるを聞く。劫初より已來諸の惡王有り。國位を貪するが故に其父を殺害せること一萬八千なり。未だ嘗て無道に母を害すること有るを聞かず。王今此殺逆の事を爲さば利利種を汚さん。臣聞くに忍びず。是れ梅陀羅なり。宜しく此に住すべからず。」時に二大臣此語を説き竟りて、手を以て劍を按じ却行して退く。時に阿闍世、驚怖惶懼し、耆婆に告げて言はく、「汝我爲にせざるや。」と。耆婆白して言さく、「大王、慎みて母を害する莫れ。」と。王此語を聞き懺悔求救し、即便劍を捨てて止りて母を害せず。内官に勅語し、深宮に閉置して復出さしめず。

時に韋提希、幽閉せられ已りて愁憂憔悴し、遙に耆闍崛山に向ひ佛の爲に作禮して是言を作さく、「如來世尊、在昔の時、恆に阿難を遣し來りて我を慰問したまひき。我今愁憂せり。世尊は威重にして見ることを得るに由無し。願くは日蓮と尊者阿難とを遣し我と相見えしめたまへ。」と。是語を作し已りて悲泣雨淚し遙に佛に向ひて禮す。未だ頭を擧げざる頃に、爾時、世尊耆闍崛山に在し、韋提希の心の所念を知り、即ち大日變蓮及び阿難に勅し、空よりして來らしめ、佛も耆闍崛山より没し、王宮に於て出でたまふ。時に韋提希禮

【釋梵】 帝釋と梵天。

【護世の諸天】 四天王及色界等の諸天。

【六】 五に欣淨緣

【五體】 兩手、兩膝、頭の稱。

【自在天宮】 他化自在天の宮殿。

【思惟】 定善觀の前方便行にて彼土の依正二報等を想念するなり。
【正受】 定善觀を

し已りて頭を擧ぐるに、世尊釋迦牟尼佛を見たてまつる。身は紫金色にして百寶の蓮華に坐したまへり。目連左に侍し阿難右に在り、釋梵護世の諸天虛空の中に在りて、善く天華を雨らし持用て供養す。時に韋提希、佛世尊を見たてまつり、自ら瓔珞を絶ち、擧身投地し、號泣して佛に向ひ白して言さく、「世尊、我宿何の罪ありて、此惡子を生ぜざるや。世尊、復何等の因緣有りてか提婆達多と共に眷屬爲る。」

唯願くは世尊、我爲に廣く憂惱無き處を説きたまへ。我當に往生すべし。閻浮提濁惡世をば樂はざるなり。此濁惡處は地獄、餓鬼、畜生盈滿し、不善の業多し。願くは我未來惡聲を聞かず惡人を見ざらん。今世尊に向ひて五體投地し求哀懺悔す。唯願くは佛口我を教へて清淨業處を觀ぜしめたまへ。」と。爾時、世尊、眉間の光を放ちたまふ。其光金色にして徧く十方無量の世界を照し、還りて佛頂に住し、化して金臺と爲り、須彌山の如し。十方諸佛の淨妙の國土、皆中に於て現す。或は國土有り七寶合成せり。復國土有り純らはれ蓮華なり。復國土有り自在天宮の如し。復國土有り玻璃鏡の如し。十方の國土、皆中に於て現す。是の如き等の無量の諸佛の國土有り、嚴顯にして觀るべく、韋提希をして見しむ。時に韋提希、佛に白して言さく、「世尊、是諸佛の土、復清淨にして皆光明有り」と雖も、我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生ぜんことを樂ふ。唯願くは世尊、我に思惟を教へ、我に正受を教へたまへ。」と。

爾時、世尊、即便微笑したまふに、五色の光有りて佛の口より出づ。一一の光、頻婆娑

指す。觀心と觀境と一に合する定。觀覺は之を淨土眞實の信、即ち他力の一心とす。

【七】 六に散善顯行經。

【阿那含】 還果。

小乘第三果。

【遠からず】 極樂

は西方十萬億土なるも善導は今分齊不遠、去時一念即到、定境相應行人自然常見の三義を以て遠からずと釋す。又阿彌陀佛の行者に添ひ護持するが故に不遠とも解すべし。

【二には等】 これ

世福。

【二には等】 これ

戒福。

【棄戒】 五戒、八

戒等一切の戒。

【三には等】 これ

行福。

【八】 七に定善示

【無生法忍】 善導

の釋意は極樂に往

生することの定り

羅の頂を照す。爾時、大王、幽閉に在りと雖も、心眼障無く、遂に世尊を見たてまつり頭面に作禮し、自然に増進して阿那含を成ぜり。

爾時、世尊、韋提希に告げたまはく、「汝今知るや否や。阿彌陀佛は、此を去ること遠からず。汝當に繫念して諦かに彼國の淨業成者を觀すべし。我今汝が爲に廣く衆賢を説き、亦未來世の一切凡夫、淨業を修せんと欲する者をして西方極樂國土に生ずることを得しめん。彼國に生ぜんと欲する者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には菩提心を發し、因果を深信し、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく、「汝今知るや否や。此三種の業は過去、未來、現在、三世諸佛の淨業の正因なり。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。如來、今者未來世の一切衆生の煩惱の賊の害する所と爲る者の爲に清淨の業を説かん。善い哉、韋提希、快く此事を問へり。阿難、汝當に受持して廣く多衆の爲に佛語を宣説すべし。如來、今者韋提希及び未來世の一切衆生を教へて西方極樂世界を觀せしめん。佛力を以ての故に、當に彼清淨の國土を見ること、明鏡を執りて自ら面像を見るが如くなるを得べし。彼國土の極妙樂事を見ば、心歡喜するが故に、時に應じて即ち無生法忍を得ん。」佛、韋提希に告げたまはく、「汝は是れ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば

（八の云）

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。如來、今者未來世の一切衆生の煩惱の賊の害する所と爲る者の爲に清淨の業を説かん。善い哉、韋提希、快く此事を問へり。阿難、汝當に受持して廣く多衆の爲に佛語を宣説すべし。如來、今者韋提希及び未來世の一切衆生を教へて西方極樂世界を觀せしめん。佛力を以ての故に、當に彼清淨の國土を見ること、明鏡を執りて自ら面像を見るが如くなるを得べし。彼國土の極妙樂事を見ば、心歡喜するが故に、時に應じて即ち無生法忍を得ん。」佛、韋提希に告げたまはく、「汝は是れ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば

（八の云）

たるを疑はざるの義。
【汝は是れ凡夫なり】親鸞は草提希阿闍世等を本地は大菩薩なるも凡夫相を現じて凡夫が彌陀の本願によりて救はるることを示せるものとす。
【九】以下正宗分にして第一に定善三觀を明す。之に日三觀あり。初に日想觀。

【一〇】 二に水想觀

【楞】 角の義。

【八種】 四方四維

遠く觀ること能はず。諸佛如來、異の方便有り、汝をして見ることを得しむ。』時に韋提希、佛に白して言さく、『世尊、我が如きは今者佛力を以ての故に、彼國土を見たてまつる。若し佛滅後の諸の衆生等は濁惡不善にして、五苦に逼られん。云何にしてか當に阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべき。』

佛、韋提希に告げたまはく、『汝及び衆生、應當に專心に念を一處に繫け四方を想ふべし。云何が想を作さん。凡そ想を作すとは、一切衆生、生盲に非ざるよりは有日の徒、皆日没を見る。當に想念を起し正坐西向し諦かに目を觀すべし。心堅住にして專想不移ならしめ、日没せんと欲して狀懸鼓の如くなるを見よ。既に日を見已らば、目を閉ぢ目を開くは、皆明了ならしめよ。是を日想と爲し、名けて初觀と曰ふ。

次に水想を作せ。水の激清なるを見、亦明了にして分散の意無からしめよ。既に水を見已らば當に沙想を起すべし。沙の映徹せるを見て琉璃想を作せ。此想成じ已らば琉璃地の内外映徹せるを見ん。下に金剛七寶の金幢有り琉璃地を擎げたり。其幢八方にして八楞具足す。一一の方面百寶の所成なり。一一の寶珠に千の光明有り、一一の光明八萬四千の色あり。琉璃地に映じて億千の日の如く具に見るべからず。琉璃地の上には、黄金の繩を以て雜廁間錯し、七寶を以て界ひ、分齊分明なり。一一の寶中に五百色の光有り、其光華の如く又星月に似たり。虚空に懸處して光明臺と成る、樓閣千萬にして百寶合成なり。臺の兩邊に於て各百億の華幢有り。無量の樂器、以て莊嚴と爲り。八種の清風、

【二】 三に地想觀

光明より出でて、此樂器を鼓するに苦、空、無常、無我の音を演說す。是を水想と爲し、第二觀と名く。

此想成ずる時、一一に之を觀じて極めて了了ならしめ、閉目、閉口に散失せしめざれ。

唯睡を除きて恆に此事を憶へ。此の如く想する者を、名けて粗極樂國地を見ると爲す。

若し三昧を得ば彼國地を見ることが了了分明にして具に説くべからず。是を地想と爲し、第三觀と名く。『佛、阿難に告げたまはく、『汝佛語を持ち、未來世の一切大衆の、苦を脱せん

と欲せん者の爲に、是觀地の法を説け。若し是地を觀する者は八十億劫生死の罪を除き、

身を捨てて他世に必ず淨國に生ぜん。心に疑無きを得よ。是觀を作すをば、名けて正觀

と爲し、若し他觀する者をば名けて邪觀と爲す。』

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、『地想成じ已らば次に寶樹を觀ぜよ。寶樹を觀すと

は一一に之を觀じ、七重行樹の想を作せ。一一の樹の高さ八千由旬なり。其の寶樹七

寶華葉具足せざる無し。一一の華葉、異寶の色を作す。琉璃色の中より金色の光を出し、

玻瓈色の中より紅色の光を出し、碼碯色の中より磔磔の光を出し、磔磔の中より綠真珠

の光を出し、珊瑚、琥珀、一切衆寶、以て映飾と爲る。妙真珠網、樹上に彌覆せり。一一

の樹上に七重の網有り、一一の網の間に五百億の妙華宮殿有り、梵王宮の如し。諸天童子

自然に中に在り。一一の童子は五百億の釋迦毘楞伽摩尼寶を以て瓔珞と爲す。其摩尼の光

百由旬を照す、猶し百億の日月を和合せるが如し、具に名くべからず。衆寶間錯して色中

【正觀】 心境相應の觀想。

【邪觀】 心境相應せざる觀想。

【三】 四に寶樹觀

【山句】 ヨーシヤナ (Yonina) 印度の里數。

【釋迦毘楞伽摩尼】 シヤクラーピラグナヤニラトナ (の)

rabhiṅgamantira

能勝と譯す、能く種種に變現する如意珠の義。

【旋火輪】火輪車のこと、圓轉の相に喩ふ。

【三】五に寶池觀

【水】此土の水に非ず、彼土寶池の水。

【如意珠】摩尼(二珠のこと)。

【鳥】化鳥なり。

【四】六に寶樓觀

の上なる者なり。此諸の寶樹、行行相當り葉葉相次げり。衆葉の間に於て諸の妙華を生じ、華上に自然に七寶の果有り。一一の樹葉、縱廣正等にして二十五由旬なり。其葉千色にして百種の畫有り、天の瓔珞の如し。衆の妙華有り、閻浮檀金色を作せり、旋火輪の如く葉間に婉轉せり。涌生せる諸果、帝釋の餅の如く、大光明有り、幢旛無量の寶蓋を化成せり。是寶蓋の中に三千大千世界の一切の佛事を映現す。十方佛國も亦中に於て現す。此樹を見已らば、亦當に次第に一一に之を觀すべし。樹莖、枝葉、華果を觀見して皆分明ならしめよ。是を樹想と爲し、第四觀と名く。

次に當に水を想すべし。水を想すとは、極樂國土に八池水有り、一一の池水七寶の所成なり。其寶柔軟にして如意珠王より生じ、分れて十四支と爲る。一一の支七寶色を作し、黄金を渠と爲す。渠の下に皆雜色の金剛を以て、以て底沙と爲す。一一の水中に六十億の七寶の蓮華有り、一一の蓮華、團圓正等にして十二由旬なり。其摩尼水、華間に流注し樹を尋ねて上下す。其聲微妙にして苦、空、無常、無我、諸波羅密を演說す。復諸佛の相好を讚映する者有り、如意珠王より金色微妙の光明を涌出す。其光化して百寶色の鳥と爲り、和鳴哀雅にして常に念佛、念法、念僧を讚す。是を八功德水の想と爲し、第五觀と名く。

衆寶國土の一一の界上に五百億の寶樓閣有り。其樓閣の中に無量の諸天有りて天の伎樂を作し。又樂器有りて虛空に懸處せり。天の寶幢の如く鼓せざるに自ら鳴る。此衆音の中に皆念佛、念法、念比丘僧を説く。此想成じ已るを、名けて粗極樂世界の寶樹、寶地、寶池

【總觀】 依報觀の
總結の義。

【二五】 七に華座觀

【除苦惱法】 經の
顯文より云へば華
座の觀法を指し、
佛の密意より云へ
ば念佛の要法を指
す。

を見るを爲す。是を總觀想と爲し、第六觀と名く。若し此を見る者は無量億劫の極重惡業を除き、命終の後必ず彼國に生ず。是觀を作すをば、名けて正觀と爲す。若し他觀するをば、名けて邪觀と爲す。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。佛、當に汝が爲に除苦惱法を分別解説すべし。汝等憶持して廣く大衆の爲に分別解説せよ。是語を解きたまふ時、無量壽佛空中に化立し、觀世音、大勢至、是二大士左右に侍立せり。光明熾盛にして具に見るべからず、百千の闍浮檀金色も比と爲すことを得ず。時に韋提希、無量壽佛を見たてまつり已りて、接足作禮し、佛に白して言さく、『世尊、我今佛力に因るが故に、無量壽佛及び二菩薩を見たてまつることを得たり。未來の衆生は當に云何にしてか無量壽佛及び二菩薩を觀たてまつるべき。』

佛、韋提希に告げたまはく、『彼佛を觀ぜんと欲はん者は、當に想念を起すべし。七寶の地上に於て蓮華の想を爲し、其蓮華の一一の葉をして百寶の色を作さしめよ。八萬四千の脈有り、猶し天畫の如し。脈に八萬四千の光有り、了了分明に皆見ることを得しめよ。華葉の小なる者も、縱廣二百五十由旬なり。是の如き蓮華に八萬四千の葉有り、一一の葉の間に各百億の摩尼珠王有り、以て映飾と爲る。一一の摩尼、千の光明を放つ、其光蓋の如く七寶合成し徧く地上に覆へり。釋迦毘楞伽寶、以て其臺と爲る。此蓮華臺は八萬の金剛、甄叔迦寶、梵摩尼寶、妙眞珠網、以て交飾と爲す。其臺上に於て自然にして四柱の寶

【甄叔迦】 キムシ
トカ(Kimsuka)赤

色と譯す。

【梵摩尼】ブラフマン(Brahman)淨如意と譯す

【佛事】八相示現作佛等の事

【六】八に像觀。諸佛は即ち阿彌陀佛の意。【法界身】法界とは所化の境界即ち衆生界、身とは能化の身即ち諸佛身なり。【心想中等】衆生佛を見んと願せば佛は無礙智を以て之を知り、想念或は夢定中にかの

幢有り、一一の寶幢百千萬億の須彌山の如し。幢上の寶幔は夜摩天宮の如く、五百億の微妙の寶珠有りて以て映飾と爲る。一一の寶珠に八萬四千の光有り、一一の光八萬四千の異種の金色を作す。一一の金色、其寶土に徧し、處處に變化して各異相を作す。或は金剛臺と爲り、或は眞珠網と作り、或は雜華雲と作り、十方面に於て隨意に變現し佛事を施す。是を華座想と爲し、第七觀と名く。佛、阿難に告げたまはく、「此の如き妙華は是れ本法藏比丘の願力の所成なり。若し彼佛を念ぜんと欲はん者は、當に先づ此華座想を作すべし。此想を作す時雜觀することを得ざれ、皆應に一一に之を觀すべし。一一の葉、一一の珠、一一の光、一一の臺、一一の幢皆分明にして、鏡中に於て自ら面像を見るが如くならしめよ。此想成せば五萬劫生死の罪を滅除し、必定して當に極樂世界に生ずべし。是觀を作すをば、名けて正觀と爲し、若し他觀するをば、名けて邪觀と爲す。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「此事を見已らば次に當に佛を想すべし。所以は何ん。諸佛如來は是れ法界身なり、一切衆生の心想中に入りたまふ。是故に汝等、心に佛を想する時は、是心即ち是れ三十二相、八十隨形好なり。此心作佛す。是心是れ佛なり。諸佛正徧知海は心想より生ず。是故に應當に一心繫念し、彼佛、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀を諦觀すべし。彼佛を想せん者は、先づ當に像を想すべし。閉目開目に、一寶像の閻浮檀金色の如くにして、彼華上に坐せるを見よ。像の坐せるを見已らば心眼開くことを得、了了分明に極樂國の七寶莊嚴、寶地、寶池、寶樹行列し、諸天寶幔其上に彌覆し、衆寶羅網

想中に入りて現ずるをいふ。親鸞はこれを如来の悲心が衆生の心に入り満ちて信を開く處と明し、他方信仰の極致とす。

【作佛す】心に能く佛を想へば、心に依りて佛身現ず即ち心に佛を作るなり、この時には佛と心と一となり心を離れて心なし佛を離れて心なしこれは心是佛なり

【正偏知海】海の如く廣き圓滿無礙智を得たる諸佛も但能く衆生の心想によりて生ずるなり

【像を想す】金色等身の佛座像を想ふ。これ方便觀。【此事を見已らば】次に觀音勢至の二菩薩觀の【塵想】後の眞身觀に比して塵想といふ。

【那由陀】九に眞身觀 ナユタ

虚空の中に満てるを見ん。此の如き事を見れば、極めて明了にして、掌中を觀るが如くならしめよ。此事を見已らば、復當に更に一の大蓮華、佛の左邊に在るを作すべし。前の蓮華の如く等しくして異有ること無く、復一の大蓮華、佛の右邊に在るを作し、一の觀世音菩薩の像、左の華座に坐すと想へ。亦金光を放つこと前の如く異無く、一の大勢至菩薩の像、右の華座に坐すと想へ。此想成する時、佛菩薩の像、皆光明を放ち、其光金色にして諸の寶樹を照す。一一の樹下に復三蓮華有り、諸の蓮華の上に各一佛、二菩薩の像有り、彼國に徧滿す。此想成する時、行者當に水流、光明及び諸の寶樹、鳧鴨、鷺鷥、皆妙法を説くを聞くべし。出定、入定恆に妙法を聞かん。行者の聞く所出定の時も、憶持して捨てざれ、修多羅と合せしめよ。若し合せずんば名けて妄想と爲す。若し合すること有らば、名けて善想到極樂世界を見ると爲す。是を像想と爲し、第八觀と名く。是觀を作す者は、無量億劫生死の罪を除き、現身の中に於て念佛三昧を得ん。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、此想成じ已らば、次に當に更に無量壽佛の身相光明を觀すべし。阿難、當に知るべし、無量壽佛の身は百千萬億の夜摩天の閻浮檀金色の如し。佛身の高さ六十萬億那由他恆河沙由旬なり。眉間の白毫は右に旋りて婉轉せり、五須彌山の如し。佛眼は四大海水の如く青白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出す、須彌山の如し。彼佛の圓光は百億の三千大千世界の如し。圓光の中に於て百萬億那由他恆河沙の化佛有り。一一の化佛、亦衆多無數の化菩薩有りて以て侍者と爲る。無量壽佛に八萬

(Nanuta) 千萬億と譯す。

【白毫】三十二相玉の如き毫。

【四大海】須彌山の四方を圍る大海。

【念佛三昧】念佛衆生の念佛は稱名。

【一切佛身】所觀は彌陀一佛のみ、別に一切佛を所觀とするに非ず。

【無縁の慈】一切平等の眞如の理を悟り所對の相を分別せずして行ふ慈悲。

【八】十に觀音觀

四千の相有り、一一の相に各八萬四千の隨形好有り、一一の好に復八萬四千の光明有り、一一の光明徧く十方世界を照し、念佛の衆生をば攝取して捨てたまはず。其光明相好及與化佛具に説くべからず。但當に憶想して心眼をして見しむべし。此事を見る者は、即ち十方一切の諸佛を見る。諸佛を見るを以ての故に、念佛三昧と名く。是觀を作すをば、一切佛身を觀すと名く。佛身を觀するを以ての故に、亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝す。此觀を作す者は、身を捨て他世に諸佛の前に生じ、無生忍を得ん。是故に智者、應當に繫心して、無量壽佛を諦觀すべし。無量壽佛を觀ぜん者は、一の相好より入れ。但眉間の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見ば、八萬四千の相好自然に當に現すべし。無量壽佛を見る者は即ち十方無量の諸佛を見る。無量の諸佛を見ることを得るが故に諸佛現前に授記す。是を徧觀一切色身想と爲し、第九觀と名く。此觀を作すをば、名けて正觀と爲し、若し他觀するをば、名けて邪觀と爲す。

(二八) 佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「無量壽佛を見ること了了分明にし已れば、次に復當に觀世音菩薩を觀すべし。此菩薩は身長八十萬億那由他由旬なり。身は紫金色にして頂に肉髻有り、頂に圓光有り、面各百千由旬なり。其圓光の中に五百の化佛有り、釋迦牟尼佛の如し。一一の化佛に五百の化菩薩有り、無量の諸天以て侍者と爲す。擧身の光中に五道の衆生一切の色相、皆中に於て現す。頂上には毘楞伽、摩尼寶、以て天冠と爲

【七寶の色】 白毫相に七寶の光澤あるなり。

【善へば等】 化佛侍者の多きを喻ふ

【千輪輪相】 三十二相の一。

【無見頂相】 佛の頂の高くして見る能はざるをいふ、八十種好の一。【眞實色身】 應身

【二九】 十一に勢至觀。

る。其天冠の中に一の立化佛有り、高さ二十五由旬なり。觀世音菩薩の面は閻浮檀金色の如し。眉間の毫相、七寶の色を備へたり。八萬四千種の光明を流出す。一一の光明に無量無數百千の化佛有り、一一の化佛無數の化菩薩ありて以て侍者と爲る。變現自在にして十方世界に滿つ。譬へば紅蓮華の色の如し。八十億の光明有りて以て瓔珞と爲る。其瓔珞の中に普く一切の諸の莊嚴の事を現す。手掌に五百億の雜蓮華の色を作す。手に十指端あり、一一の指端に八萬四千の畫有り、猶し印文の如し。一一の畫に八萬四千の色有り、一一の色に八萬四千の光有り、其光柔軟にして普く一切を照し、此寶手を以て衆生を接引す。足を擧ぐる時足下に千輪輪相有り、自然に五百億の光明臺を化成せり。足を下す時は金剛摩尼華有りて、一切に布散し彌滿せざること莫し。其餘の身相衆好具足して佛の如く異無し。唯頂上の肉髻及び無見頂相は世尊に及ばず。是を觀觀世音菩薩眞實色身想と爲し、第十觀と名く。佛、阿難に告げたまはく、「若し觀世音菩薩を觀せんと欲すること有らん者は、當に是觀を作すべし。是觀を作す者は、諸禍に遇はず、業障を淨除し無數劫生死の罪を除かん。此の如き菩薩は但其名を聞くだに無量の福を獲、何に況んや諦觀せんをや。若し觀世音菩薩を觀せんと欲すること有らん者は、先づ頂上の肉髻を觀じ、次に天冠を觀じ、其餘の衆相、亦次第に之を觀じて、亦明了なること、掌中を觀るが如くならしめよ。是觀を作すをば、名けて正觀と爲し、若し他觀するをば、名けて邪觀と爲す。

次に復應に大勢至菩薩を觀すべし。此菩薩の身量、大小は亦觀世音の如し。圓光の面

【但此菩薩等】至の光明の徳の勝れたるを説く。【智慧光】無漏を體と爲すが故に名【無上力】十方三惡の苦を除息するが故にいふ、十力なり。

【胞胎】三界四生の生死なり、娑婆の苦を脱して佛淨土の寶蓮上に生ずるといふ。胞胎に處せずといふ。十二に普觀

各百二十五由旬なり、二百五十由旬を照す。擧身の光明十方國を照し紫金色を作す。有縁の衆生皆悉く見ることを得。但此菩薩の一毛孔の光を見れば、即ち十方無量諸佛の淨妙光明を見る。是故に此菩薩を號して無邊光と名く。智慧光を以て普く一切を照し三途を離れしむるに無上力を得。是故に此菩薩を號して大勢至と名く。此菩薩の天冠に五百の寶華有り、一一の寶華に五百の寶臺有り、一一の臺中に十方諸佛の淨妙國土、廣長の相、皆中に於て現す。頂上の肉髻は蓋頭摩華の如し。肉髻の上に於て一の寶餅有り、諸の光明を盛り、普く佛事を現す。餘の諸の身相、觀世音の如く等しくして異なること無し。此菩薩行きたまふ時は十方世界一切震動す。地の動する處に當りて五百億の寶華有り、一一の寶華、莊嚴高顯にして極樂世界の如し。此菩薩坐する時は七寶國土一時に動搖す。下方の金光佛刹より乃至上方の光明王佛刹まで、其中間に於て無量塵數の分身の無量諸佛、分身の觀世音、大勢至皆悉く極樂國土に雲集し、空中に側塞して蓮華座に坐し、妙法を演説し苦の衆生を度す。此觀を作すをば、名けて正觀と爲し、若し他觀するをば、名けて邪觀と爲す。大勢至菩薩を見る、是を觀大勢至色身相と爲し、第十一觀と名く。此菩薩を觀する者は無數劫阿僧祇の生死の罪を除く。是觀を作す者は胞胎に處せず、常に諸佛の淨妙の國土に遊ぶ。此觀成じ已るを、名けて具足して觀世音、大勢至を觀すと爲す。此事を見る時、當に自心を起すべし。西方極樂世界に生じ、蓮華の中に於て結跏趺坐し、蓮華合する想を作し、蓮華開く想をば作せ。蓮華開く時、五百色の光有り、來りて身を照

【自心】 觀に入つて自ら往生想をなすなり。

【三】 十三に雜想觀。

【先の所説】 第九眞身觀を指す。
【宿願力】 往昔の願の力。

【大身】 六十萬億身。

【小身】 丈六八尺の身。

【現する：圓光等】 前の佛身觀の如し。

【首の相】 觀音の冠には立化佛あり勢至の鬘には寶瓶あり。

【三】 正宗分の中に第二に散善觀を明す。この觀をなす機に三輩九品の別あり。初に上品上生。

【至誠心】 眞實心

すの想、眼目閉くの想をせよ。佛、菩薩虛空中に滿つるを見、水鳥、樹林及與諸佛の出す所の音聲皆妙法を演ぶ。十二部經と合せしめ、出定の時も憶持して失せざれ。此事を見已るを無量壽佛の極樂世界を見ると名く。是を普觀想と爲し、第十二觀と名く。無量壽佛の化身無數にして觀世音、大勢至と與に常に此行人の所に來至す。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「若し至心に西方に生ぜんと欲せん者は、先づ當に一の丈六の像、池水の上に在るを觀すべし。先の所説の如き無量壽佛は身量無邊なり。是れ凡夫心力の及ぶ所に非ず。然るに彼如來宿願力の故に、憶想すること有る者は必ず成就するを得しむ。但佛像を想するだに無量の福を得。何に況んや佛の具足の身相を觀ぜんをや。阿彌陀佛は神通如意にして十方國に於て變現自在なり。或は大身を現じて虚空の中に滿ち、或は小身を現じて丈六八尺なり。現する所の形皆眞金色なり、圓光の化佛及び寶蓮華は上の所説の如し。觀世音菩薩及び大勢至、一切處に於て身同じ。衆生は但首の相を觀て是れ觀世音と知り、是れ大勢至と知る。此二菩薩、阿彌陀佛を助けて普く一切を化す。是を雜想觀と爲し、第十三觀と名く。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「上品上生とは、若し衆生有りて、彼國に生れんと願ぜん者は、三種の心を發して即便往生す。何等をか三と爲す。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具する者は、必ず彼國に生ず。復三種の衆生有り、當に往生を得べし。何等をか三と爲す。一には慈心にして殺さず、諸の戒行を具ふ。二

なり。顯義にては行者自力の眞實心なれども、隱義より云へば、正しく如來の眞實心を衆生に與へ給ふものにして、他力の眞實心なり。

【深心】深く信ずる心。經の顯義よりすれば自力の心を意味するも、隱義よりせば他力の深心なり。この時は三信中の信樂と機同なり。之に機との深信と法の深信の二の内容を有する自己の罪惡を認知する處に初めて佛の本願を信ずることを得るなり。

【廻向發願心】之に自力と他力の二種あり。自力の廻向發願心とは、自己の修行に依りて積みたる善根を振り向けて淨土往生を願求すること。他力の廻向發願心とは、阿彌陀佛の眞實心中より振り

には大乘方等經典を讀誦す。三には六念を修行し、廻向發願して彼國に生れんと願す。此功德を具すること一日乃至七日にして即ち往生を得。彼國に生ずる時、此人精進勇猛なるが故に阿彌陀如來、觀世音、大勢至、無數の化佛、百千の比丘、聲聞大衆、無數の諸天、七寶の宮殿と與に、觀世音菩薩は金剛臺を執り、大勢至菩薩と與に行者の前に至る。阿彌陀佛大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩と與に授手迎接したまふ。觀世音、大勢至、無數の菩薩と與に行者を讚歎し、其心を勸進す。行者見已りて歡喜踊躍し、自ら其身を見れば金剛臺に乗ぜり。佛後に隨從して彈指の如き頃に彼國に往生す。彼國に生じ已りて佛の色身衆相具足せるを見、諸の菩薩の色相具足せるを見る。光明の寶林妙法を演説す。聞き已りて即ち無生法忍を悟り、須臾の間を経て、諸佛に應事し十方界に徧し、諸佛の前に於て次第に授記せられ、本國に還到して無量百千の陀羅尼門を得。是を上品上生の者と名く。

上品中生とは、必ずしも方等經典を受持し、讀誦せざれども、善く義趣を解し、第一義に於て心驚動せず、深く因果を信じ、大乘を講せず。此功德を以て廻向して、極樂國に生ぜんと願求す。此行を行する者、命終らんと欲する時、阿彌陀佛、觀世音、大勢至、無量の大衆眷屬の與に圍繞せられ、紫金臺を持し行者の前に至り、讚じて言はく、「法子、汝大乘を行じ第一義を解す、是故に我今來りて汝を迎接す」と。千の化佛と與に一時に授手す。行者自ら見れば紫金臺に坐せり。合掌叉手して諸佛を讚歎す。一念の如き頃に即ち

向け給ふ善根を貰ひ受け往生決定の思をなすこと。この他力の廻向心は即ち金剛不壞の信心なり。

【大乘方等經典】普通平等の眞理を説きたる大乘經典

【八念】念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天。

【妙法】大乘の法

【三】二に上品中生。

【法子】法に従つて化生するが故に名く。

【紫磨金】閻浮檀金のこと。

【三】三に上品下生。

【百法明門】環珞經所説十信各各十ありて百法明門と

彼國の七寶池の中に生ず。此紫金臺大寶華の如し、宿を経て則ち開く。行者の身は紫磨金色と作り、足下に亦七寶の蓮華有り。佛及び菩薩俱時に光明を放ち、行者の身を照すに日即ち開明なり。前の宿習に因りて、普く衆聲を聞くに純ら甚深の第一義諦を説く。即ち金臺より下り、禮佛合掌し世尊を讚歎す。七日を経て時に應じて即ち阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得。時に應じて即ち能く飛行し、徧く十方に至り諸佛に歷事す。諸佛の所に於て諸の三昧を修す。一小劫を経て無生忍を得、現前に授記せらる。是を上品中生の者と名く。

上品下生とは、亦因果を信じ、大乘を謗せず、但無上道心を發す。此功德を以て廻向して極樂國に生ぜんと願求す。行者の命の終らんと欲する時、阿彌陀佛及び觀世音、大勢至諸の眷屬と與に金蓮華を持し、五百の化佛を化作し此人を來迎す。五百の化佛、一時に授手し讚じて言はく、「法子、汝今清淨にして無上道心を發せり。我來りて汝を迎ふ」と。此事を見る時、即ち自ら身を見れば金蓮華に坐せり。坐し已りて華合し、世尊の後に隨ひて即ち七寶池の中に往生することを得。一日一夜にして蓮華乃ち開け、七日の中に乃ち佛を見たてまつることを得。佛身を見ると雖も、衆の相好に於て心明了ならず。三七日の後に於て乃ち了了に見る。衆の音聲を聞くに皆妙法を演ぶ。十方に遊歴して諸佛を供養し、諸佛の前に於て甚深の法を聞き、三小劫を経て百法明門を得、歡喜地に住す。是を上品下生の者と名く。是を上輩生想と名け、第十四觀と名く。」

す、華嚴には初地所成とす。【歡喜地】十地の初地。【五】四に中品上生。

【諸戒】五戒乃至具足戒。【苦空…演說し等】苦等を説き出家を讚するは聞者皆小乘根性なるが故に

【三明】宿住智證明、天眼智證明、漏盡智證明。

【八解脱】内有色外觀色、不淨相、空處、識處、無所有處、非非想處、滅盡。

【六】四に中品中生。【一日一夜】齋日に在家が一日一夜を期して出家の戒を持つなり。

【沙彌戒】十戒（八戒に離金寶物戒、離非食時戒）なり。

【具足戒】大僧大尼所受の戒、即ち

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、中品上生とは、若し衆生有りて五戒を受持し、八戒齋を持ち、諸戒を修行し、五逆を造らず、衆の過患無からん。此善根を以て廻向して、西方極樂世界に生ぜんと願求す。命終の時に臨んで、阿彌陀佛、諸の比丘眷屬の與に圍繞せられ、金色の光を放ち其人の所に至り、苦、空、無常、無我を演說し、出家して衆苦を離るるを得ることを讚歎したまふ。行者見已りて心大いに歡喜す。自ら己身を見れば蓮華臺に坐せり。長跪合掌し佛の爲に作禮す。未だ頭を擧げざる頃に即ち極樂世界に往生することを得、蓮華臺も開く。華の敷く時に當りて衆の音聲を聞くに四諦を讚歎す。時に應じて即ち阿羅漢道を得、三明六通ありて八解脱を具す。是を中品上生の者と名く。中品中生とは、若し衆生有りて、若くは一日一夜八戒齋を受持し、若くは一日一夜沙彌戒を持ち、若くは一日一夜具足戒を持ち、威儀缺くること無し。此功德を以て廻向して極樂國に生ぜんと願求す。戒香薰修せる、此の如きの行者は命終らんと欲する時、阿彌陀佛、諸の眷屬と與に金色の光を放ち、七寶の蓮華を持し、行者の前に至りたまふを見る。行者自ら聞くに、空中に聲有りて、讚じて言はく、「善男子、汝が如きは善人なり、三世諸佛の教に隨順するが故に、我來りて汝を迎ふ」と。行者自ら見れば蓮華の上に坐せり。蓮華即ち合し、西方極樂世界に生じて寶池の中に在り、七日を経て蓮華乃ち敷く。華既に敷け已りて目を開き、合掌して世尊を讚歎したてまつる。聞法歡喜して須陀洹を得、半劫を經已りて阿羅漢を成ず。是を中品中生の者と名く。

二百五十戒。

【須陀洹】 スロー

ターバンナ (Siddhi Janna) 預流と譯す

小乗の初果。

【二七】 六に中品下

生。

【法藏比丘】 彌陀

の因名、法藏は梵

に、ダルマーカラ

(Dharmakara) と

いふ。

【四十八願】 無量

壽經の同文參照。

【八】 七に下品上

生。

【衆の惡業を作】

極重に非ず、謗法

せず尙正信あるも

中品下生とは、若し善男子、善女人有りて父母に孝養し、世の仁慈を行ぜん。此人命終らんと欲する時、善知識の我が爲に廣く阿彌陀佛國土の樂事を説き、亦法藏比丘の四十八願を説くに遇はん。此事を聞き已りて尋即命終す。譬へば壯士の臂を屈伸する如き頃に即ち西方極樂世界に生ず。生じて七日を経て觀世音及び大勢至に遇ひ聞法歡喜す。一小劫を経て阿羅漢を成ず。是を中品下生の者と名く。是を中輩生想と名け、第十五觀と名く。『

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、『下品上生とは、或は衆生有りて衆の惡業を作らん。方等經典を講誦せずと雖も、此の如き愚人多く衆惡を造り慚愧有ること無からん。命終らんと欲する時、善知識の爲に大乘十二部經の首題の名字を讀するに遇はん。是の如

き諸經の名を聞くを以ての故に、千劫の極重惡業を除却す。智者復教へて合掌叉手し、南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱ふるが故に、五十億劫の生死の罪を除く。爾時、彼佛、即ち化佛、化觀世音、化大勢至を遣し、行者の前に至り讚じて言はく、『善男子、汝佛名を稱

するが故に、諸罪消滅す、我來りて汝を迎ふ』と。是語を作し已りて行者即ち化佛の光明の其室に徧滿せるを見る。見已りて歡喜し即便命終す。寶蓮華に乗じ、化佛の後に隨ひて寶池の中に生ず。七七日を経て蓮華乃ち敷く。華の敷く時に當りて大悲觀世音菩薩及び

大勢至大光明を放ちて其人の前に住し、爲に甚深の十二部經を説く。聞き已りて信解して無上道心を發す。十小劫を経て百法明門を具し初地に入ることを得。是を下品上生

の者と名く。佛名、法名を聞き、及び偈名を聞くことを得、三寶の名を聞きて即ち往生

【佛名法名を聞き

等】 善導の釋にい

【首題の名字】 南

無大方廣佛華嚴經

等をいふ。

ふ。重擧行者之益
非但念佛獨得往生
法僧通念、亦得去
也。

【三九】 八に下品中
生。

【僧祇】 大衆と譯
す。僧祇物とは僧
衆に屬するものの
意。

【不淨說法】 佛法
に假托して利養を
希求するなり。

【語の惡業】 莊嚴
惡跡盈滿の故に莊
嚴といふなり。

【地獄の衆火】 鐵
湯鑪炭鑪銅鐵丸等
をいふ。

【十力】 是處非處
力、業智力、定力
根力、欲力、性力

至處道力、宿命力
天眼力、漏盡力。

【十力威德等】 善
導の散善義によれ

ば十力威德と光明
神力と五分法身の

三を一括して彌陀
の名號と註解せり

これ下品中生は聞
名往生なることを
顯すなり。

を得。」

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「下品中生とは、或は衆生有りて五戒、八戒及び具

足戒を毀犯せん。此の如き愚人、僧祇の物を偷み、現前の僧物を盜み、不淨說法して慚愧

有ること無く、諸の惡業を以て自ら莊嚴せん。此の如き罪人、惡業を以ての故に地に

獄に墮すべし。命終らんと欲する時、地獄の衆火一時に俱に至らん。善知識の、大慈悲を

以て爲に阿彌陀佛の十力威德を説き、廣く彼佛の光明神力を説き、亦戒、定、慧、解脱、解

脫知見を讚するに遇はん。此人聞き已りて八十億劫の生死の罪を除く。地獄の猛火、化し

て清涼の風と爲り、諸の天華を吹く。華上に皆化佛菩薩有りて此人を迎接す。一念の

如き頃に、即ち七寶池の中の蓮華の内に往生することを得。六劫を経て蓮華乃ち敷く。華

の敷く時に當りて觀世音、大勢至梵音聲を以て彼人を安慰し、爲に大乘甚深の經典を説

かん。此法を聞き已りて時に應じて即ち無上道心を發さん。是を下品中生の者と名く。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、「下品下生とは、或は衆生有りて不善業、五逆、十惡

を作り、諸の不善を具せん。此の如き愚人、惡業を以ての故に惡道に墮し、多劫を

經歴して苦を受くること無窮なるべし。此の如き愚人、命終の時に臨み、善知識の種種

に迫あらず。善友告げて言はく、「汝若し念すること能はずんば應に無量壽佛を稱すべし」と。

是の如く至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せん。佛名

【梵音聲】 佛の音

【三〇】 九に下品下

【念佛するに違あらず】 この念佛は名號の功德を念佛すること。病苦に逼らるるが故に念佛するの違なきなり

【十念】 十聲の念佛なり。

【諸法實相、除滅罪】 罪は縁より生じて自性あることなし、諸法皆附の故に實相といふ。

【三一】 以下得益分 牽提希、侍女、諸天等の見佛の利益を明す。

【佛身及び二菩薩】 第七觀の初に見奉りし住立空中の三尊なり。即ち得益分は第七華座觀の得忍の有様を別示したるものなり。

【悉く、皆當に等】 五百侍女尊記を蒙むる。

【三二】 以下、流通分。一經中最も重

を稱するが故に、念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除き、命終の時、金蓮華の猶し日輪の如き其人の前に住するを見る。一念の如き頃に即ち極樂世界に往生することを得、蓮華の中に於て十二大劫を満ちて蓮華方に開く。觀世音、大勢至大悲の音聲を以て其が爲に廣く諸法實相、除滅罪の法を説かん。聞き已りて歡喜し、時に應じて即ち菩提の心を發さん。是を下品下生の者と名く。是を下輩生想と名け、第十六觀と名く。

是語を説きたまふ時、韋提希五百の侍女と與に佛の所説を聞き、時に應じて即ち極樂世界の廣長の相を見たてまつる。佛身及び二菩薩を見ることを得て、心歡喜を生じ未曾有と歡じ、廓然として大悟し無生忍を得たり。五百の侍女は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彼國に生れんと願す。世尊悉く記したまはく、「皆當に往生すべし、彼國に生じ已りて諸佛現前三昧を得ん」と。無量の諸天、無上道心を發せり。

爾時、阿難、即ち座より起ち前んで佛に白して言さく、「世尊、當に何んが此經を名くべき、此法の要、當に云何が受持すべき。」佛、阿難に告げたまはく、「此經をば觀極樂國土、無量壽佛、觀世音菩薩、大勢至菩薩と名け、亦淨除業障生諸佛前と名く。汝當に受持し忘失せしむること無かるべし。此三昧を行する者は、現身に無量壽佛及び二大士を見ることを得。若し善男子、善女人、但佛の名、二菩薩の名を聞くだに無量劫の生死の罪を除く。何に況んや憶念せんをや。若し念佛する者は、當に知るべし、此人は是れ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、其勝友と爲りたまふ。當に道場に坐し、諸佛の家に

要なる段にして、定散二善の益より念佛の益の勝れたることを斷定し、無量壽佛の名を阿難に付囑す。

【觀極樂】無かるべし

【觀經の利益】開經の利益

【此三昧】見ることを得

【觀佛三昧の利益】

【但佛の名…除く】聞名の利益

【何に…憶念せんをや】念佛三昧の利益

【最後に念佛三昧の利益を擧げたるは上來正宗分に説かれたる定散二善も佛の本願の眞意よりすれば、廢捨すべきものにして、ただ念佛のみを取り立つべきものなる爲なり。

【汝好く…持てとなり】釋尊が觀經説法の本意たる無量壽佛の名即ち念佛を阿難に付囑す

【此三昧等】總じ

生ずべし。佛、阿難に告げたまはく、「汝好く是語を持て、是語を持てとは、即ち是れ無量壽佛の名を持てとなり。」佛、此語を説きたまふ時、尊者目犍連、阿難及び韋提希等、佛の所説を聞きて皆大いに歡喜す。

爾時、世尊、足虚空を歩し、耆闍崛山に還りたまふ。爾時、阿難、廣く大衆の爲に如上の事を説くに、無量の諸天及び龍、夜叉、佛の所説を聞きて、皆大いに歡喜し、佛を禮して退きぬ。

佛説觀無量壽經

佛説觀無量壽經

ては定散二善を指
し別しては定善の
觀佛三昧を指す。
【言】以て下者闍分
王舍城内に於ける
說法を阿難者闍崛
山に歸りて復演す

佛說阿彌陀經

(真宗所用)

經典部
第二卷

新編 三國志 卷之十一

十一

佛說阿彌陀經

姚秦三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【一】一經は序分の三篇より成る。初に序分。
 【舍衛國】拘薩羅國の都城。
 【摩訶迦旃延】佛弟子中、誦誦第一。
 【摩訶俱絺羅】佛弟子中、問答第一。
 【離陀】佛弟子中、諸根を調伏すること第一。
 【憍梵波提】解律第一。
 【賓頭盧頗羅隍】十八羅漢の一。
 【摩訶劫賓那】星宿を知ること衆僧中第一。
 【阿耨樓駄】佛弟子中、天眼第一。
 【二】以下正宗分第一に極樂の依報正報を讚す。初に略證。

是の如く我聞く。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。皆是れ大阿羅漢にして衆に知識せらる。長老舍利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉、摩訶旃延、摩訶俱絺羅、離婆多、周利槃陀伽、難陀、阿難陀、羅睺羅、憍梵波提、賓頭盧頗羅隍、迦留陀夷、摩訶劫賓那、薄拘羅、阿菟樓駄、是の如き等の諸の大弟子、竝に諸の菩薩摩訶薩、文殊師利法王子、阿逸多菩薩、乾陀訶提菩薩、常精進菩薩、是の如き等の諸の大菩薩、及び釋提桓因等の無量の諸天衆と俱なりき。

爾時、佛、長老舍利弗に告げたまはく、『是より西方、十萬億の佛土を過ぎて世界有り、名けて極樂と曰ふ。其土に佛有す、阿彌陀と號す。今現在說法したまふ。舍利弗、彼土を何が故に名けて極樂と爲すや、其國の衆生、衆の苦有ること無く但諸の樂のみを受く、故に極樂と名く。』

又舍利弗、極樂國土には七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹あり。皆是れ四寶にして周匝圍繞せり。是故に彼國を名けて極樂と曰ふ。
 又舍利弗、極樂國土には七寶の池有り。八功德水其中に充滿せり。池底には純ら金沙を

【三】次に廣語。此段依報を讚す。

以て地に布けり。四邊の階道、金、銀、琉璃、玻瓈、合成せり。上に樓閣有り、亦金、銀、琉璃、玻瓈、碎塵、赤珠、碼碯を以て而も之を嚴飾せり。池中の蓮華、大いさ車輪の如し。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光あり、微妙香潔なり。舍利弗、極樂國土には、是の如き功德莊嚴を成就せり。

【衣被】華を盛る器。【經行】行道。

又舍利弗、彼佛の國土には、常に天樂を作す。黄金を地と爲し、晝夜六時に曼陀羅華を雨らす。其國の衆生、常に清旦を以て、各衣被を以て、衆の妙華を盛り、他方十萬億の佛を供養し、即ち食時を以て本國に還到し、飯食經行す。舍利弗、極樂國土には是の如き功德莊嚴を成就せり。

【七菩提分】念、擇、法、精進、喜、輕安、捨。【八聖道分】正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定。

復次に舍利弗、彼國には常に種種奇妙なる雜色の鳥有り。白鶺鴒、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、其命の鳥なり。是諸衆の鳥晝夜六時に和雅の音を出す。其音五根、五力、七菩提分、八聖道分、是の如き等の法を演暢す。其土の衆生、此音を聞き已りて、皆悉く佛を念じ、法を念じ、僧を念す。舍利弗、汝此鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふこと勿れ。所以は何ん。彼佛の國土には三惡趣無し。舍利弗、其佛の國土には尙三惡道の名だに無し、何に況んや實有らんや。是諸衆の鳥は皆是れ阿彌陀佛の法音を宣流せしめんと欲したまふ變化の所作なり。舍利弗、彼佛の國土には微風吹動し、諸の寶行樹及び寶羅網微妙の音を出す。譬へば百千種の樂、同時に俱に作るが如し。是音を聞く者は皆自然に念佛、念法、念僧の心を生ず。舍利弗、其佛の國土には是の如き功德莊嚴を成就せり。

【四】此段廣讚中正報を讚す。

【阿鞞跋致】不退轉と譯す。佛となるに定りたる位。之に極樂往生して初めて不退位に入ると、此土にて此位に住するとの二解あり。親鸞は後者に解す。

【五】正宗分中、第二に念佛往生を勸む。初に略勤して極樂往生を發心せしむ。

【六】次に念佛往生を廣勸し、因を讚じて信を勸む。

【善男子善女人】一生造惡の凡夫なれども多善根の念佛を持するが故に【聞】聞即信。

舍利弗、汝が意に於て云何。彼佛を何が故に阿彌陀と號するや。舍利弗、彼佛の光明は無量にして十方の國を照すに障礙する所無し。是故に號して阿彌陀と爲す。又舍利弗、彼佛の壽命及び其人も無量無邊阿僧祇劫なり。故に阿彌陀と名く。舍利弗、阿彌陀佛は成佛したまひてより已來、今に於て十劫なり。又舍利弗、彼佛に無量無邊の聲聞弟子有り、皆阿羅漢なり。是れ算數の能く知る所に非ず。諸の菩薩衆も、亦復是の如し。舍利弗、彼佛の國土には、是の如き功德莊嚴を成就せり。

又舍利弗、極樂國土には衆生の生ずる者は皆是れ阿鞞跋致なり。其中に多く一生補處有り。其數甚だ多し、是れ算數の能く之を知る所に非ず、但無量無邊阿僧祇劫を以てのみ説くべし。舍利弗、衆生聞かん者は應當に發願し、彼國に生ぜんと願すべし、所以は何ん。是の如き諸の上善人と俱に一處に會することを得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁を以て彼國に生ずることを得べからず。

舍利弗、若し善男子、善女人有りて、阿彌陀佛を説くを聞きて、名號を執持すること、若くは一日、若くは二日、若くは三日、若くは四日、若くは五日、若くは六日、若くは七日、一心不亂ならん、其人命終る時に臨んで、阿彌陀佛諸の聖衆と與に、其前に現在したまふ。是人終る時、心顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得、舍利弗、我是利を見るが故に此言を説く。若し衆生有りて是説を聞かん者は、應當に發願して彼國土に生ずべし。

【名號を執持】名號を稱へ信ずること。

【若くは一日等】必ずしも日を限らず、親鸞は信後の報謝念佛となし命終まで繼續すとなす。

【一心不亂】眞實信心を一心と云ひ不散不失を不亂と云ふ。

【命終る時に臨んで等】通義にては臨終來迎。眞宗にては彌陀の光明に攝護せらるる事。此上入正定聚なるを以て臨終來迎を待たざるが故に。

【心顛倒せず】通義にては來迎に依つて臨終に正念に住することは。眞宗にては、他力信心の行人は信の一念に不退位に住するが故に心顛倒せず。

【七】釋尊自ら念佛往生を證明して信を勸む。

【八】諸佛、念佛

(八)より、舍利弗、我今阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如く、東方にも亦阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛、是の如き等の恆河沙數の諸佛有して、各其國に於て、廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ひ、誠實の言を説きたまはく、「汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と。

舍利弗、南方世界に、日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛、是の如き等の恆河沙數の諸佛有して、各其國に於て、廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ひ、誠實の言を説きたまはく、「汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と。

(二)より、舍利弗、西方世界に、無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛、是の如き等の恆河沙數の諸佛有して、各其國に於て、廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ひ、誠實の言を説きたまはく、「汝等衆生、當に此稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と。

(二)より、舍利弗、北方世界に、焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛、是の如き等の恆河沙數の諸佛有して、各其國に於て、廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ひ、誠實の言を説きたまはく、「汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と。

(二)より、舍利弗、下方世界に、師子佛、名聞佛、名光佛、達摩佛、法幢佛、持法佛、是の如き

往生を證明して勸信す。謂ゆる六方段なり、初に東方、次に南方、次に西方、次に北方、次に上方、次に下方。

【四】念佛往生廣勸中、第二に益を示して信を勸む。初に釋尊の勸信。

【語佛所說の名】阿彌陀佛の名號を指す。
【已に發願し等】至心信樂を含める欲生我國なり。

【五】次に諸佛の勸信を明す。

等の恆河沙數の諸佛有して、各其國に於て、廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ひ、誠實の言を説きたまはく、「汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と。

舍利弗、上方世界に、梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、沙羅樹王佛、寶華德佛、見一切儀佛、如須彌山佛、是の如き等の恆河沙數の諸佛有して、各其國に於て、廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆ひ、誠實の言を説きたまはく、「汝等衆生、當に是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と。

舍利弗、汝が意に於て云何、何が故ぞ、名けて一切諸佛所護念經と爲す。舍利弗、若し善男子、善女人有りて、是諸佛所說の名及び經の名を聞かん者は、是諸の善男子、善女人、皆一切諸佛の爲に共に護念せられ、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得ん。是故に舍利弗、汝等皆當に我語及び諸佛の所說を信受すべし、舍利弗、若し人有りて已に發願し、今發願し、當に發願して阿彌陀佛國に生れんと欲する者は、是諸の人等、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得、彼國土に於て若くは已に生じ、若くは今生じ、若くは當に生ぜん。是故に舍利弗、諸の善男子、善女人、若し信すること有らん者は、應當に發願して彼國土に生すべし。

舍利弗、我今諸佛の不可思議功德を稱讚するが如く、彼諸佛等も亦我不可思議功德を稱説して、是言を作さく、「釋迦牟尼佛能く甚難希有の事を爲し、能く婆婆國土の五濁惡世、

佛說阿彌陀經

【二六】 結して信を勸む。

【難信の法】 他力念佛の法門は入り易けれども信じ難きが故に。

【二七】 流通分。

劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得、諸の衆生の爲に、是一切世間難信の法を説くと。舍利弗、當に知るべし、我五濁惡世に於て此難事を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に、此難信の法を説く、是を甚難と爲す。佛此經を説き已りたまふに、舍利弗及び諸の比丘、一切世間の天人阿修羅等、佛の所説を聞き、歡喜信受し、作禮して去りぬ。

佛說阿彌陀經

佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經

經 典 部	第 二 卷
-------------	-------------



佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經

宋居士沮渠京聲譯

【一】教起因緣分初に證信序。

【舍衛國】 シユラ一ツステイ(の) (Yasti) 聞者城と譯す。拘薩羅國の都城。

【祇樹給孤獨園】

ツエータツナ、アナータピンダ、アナーラーヤ(Jelavana-Anāthapindava-Arama) 舍衛城の南、凡そ一里の處、祇園精舎の在る處。

【爾時世尊】 以下發起序。

【須達】 スダツタ(Sudatta)。アナータピンダダ(Anāthapindada)の(こ)舍衛城の富豪にして深く佛に歸依して祇陀太子と共に祇

佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經

是の如きを我聞けり。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在せり。爾時、世尊初夜分に於て身を擧げ光を放ちたまふに、其光金色にして祇園を遶りて周遍すること七匝、須達の舎を照して又金色を作せり。金色の光有ること猶し段雲の如し。舍衛國に遍く處處に皆金色の蓮花を雨らせり。其光明の中に無量百千の諸の大化佛有り、皆是言を唱ふるく、今此中に於て千の菩薩有り、最初に成佛せるを拘留孫と名け、最後に成佛せるを樓至と名く。是語を説き已りて、尊者阿若橋陳如是即ち禪より起つて、其眷屬二百五十人と俱なり。尊者摩訶迦葉は其眷屬二百五十人と俱なり、尊者大目犍連は其眷屬二百五十人と俱なり、尊者舍利弗は、其眷屬二百五十人と俱なり、摩訶波闍波提比丘尼は、其眷屬千比丘尼と俱なり、須達長者は三千の優婆塞と俱なり。毘舍佉母は二千の優婆夷と俱なり。復菩薩摩訶薩有り、跋陀婆羅と名く。其眷屬十六菩薩と俱なり、文殊師利法王子は、其眷屬五百菩薩と俱なり。天、龍、夜叉、乾闥婆等一切の大衆は、佛の光明を觀たてまつりて皆悉く雲集せり。爾時、世尊、廣長の舌相を出して千の光明を放ちたまふに、一一の光明に各千色有り、一一の色中に無量の化佛有り、是諸の化佛異口同音に、皆清淨諸大

陀闍を佛に獻じ、祇園精舎を建立せり。

【七匪】七非を破して七覺分を得しむる故なり。

【化佛】彌勒上生の事を顯し非眞を誘引せん爲の故に拘留孫ククラク、クワンダ(Krutane chanda)所應斷已斷と譯す、賢劫千佛の第一、過去七佛の第四。

【樓至】ルチカ(Lutika)愛樂佛、啼哭佛といふ、賢劫千佛の最後佛なり。

【阿若湍陳如】アーシュニヤータ、カワンデイニヤ(Ajitakandiny)五比丘の一。

【摩訶迦葉】マハーカーシヤバ(Mahakasyapa)大光と譯す、佛十大弟子の一、頭陀行第一。

【大目犍連】マハーマウドカリヤ

菩薩の甚深不可思議の諸の陀羅尼法を説く。謂ゆる阿難陀目佉陀羅尼、空慧陀羅尼、無礙性陀羅尼、大解脫相無相陀羅尼なり。爾時、世尊、一音聲を以て、百億の陀羅尼門を説きて、此陀羅尼を説き已りたまへり。爾時、會中に一の菩薩有り、名けて彌勒と曰ふ。佛の所説を聞き、時に應じて即ち百萬億陀羅尼門を得、即ち座より起ちて衣服を整へ、又手合掌して佛前に住立す。

爾時、優婆波離亦座より起ち、頭面に禮を作して佛に白して言さく、『世尊、世尊は往昔毘尼中及び諸の經藏に於て、阿逸多の次いで當に作佛すべきを説きたまふ。此阿逸多は凡夫の身を具し、未だ諸漏を斷ぜず。此人命終して當に何處に生ずべきや。其人今や復出家すと雖も、禪定を修せず、煩惱を斷ぜざるに、佛は此人の成佛疑無しと記したまふ。此人命終して何の國土に生ずるや。』

佛、優婆波離に告げたまはく、『諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ、如來應正遍知は、今此衆に於て、彌勒菩薩摩訶薩の阿釋多羅三藐三菩提の記を説かんとす。此人今より十二年の後に命終し、必ず兜率陀天上に往生することを得。爾時、兜率陀天上に、五百萬億の天子有り、一一の天子皆甚深檀波羅蜜を修し、一生補處の菩薩を供養せんが爲の故に、天福力を以て宮殿を造作し、各身の梅檀摩尼寶冠を脱し、長跪合掌して是願を發して言はく、『我今此無價寶珠及以天冠を持す。大心の衆生を供養せんが爲の故なり。此人來世久しからずして當に阿釋多羅三藐三菩提を成ずべし。我彼佛の莊嚴國界に於て受記を得は、』

ヤナ (Mahā-maṇu
Gaṭṭayana) 大胡
豆と譯す、佛十大
弟子の一、神通第
一。

【舍利弗】 シヤ
リブトラ (Śaripū
ṭa) と譯す、佛十
大弟子の一、智慧

第一。

【摩訶波闍波提】
マハテー、フラジヤ
マハティー (Mahā
Prajāpatī) 大生主
と譯す、釋尊の姨
母。

【優婆塞】 ウパ
サカ (Uṣāsaka) 近
事男と譯す、四衆
の一。

【毘舍佉母】 ビシ
ヤーカー (Pisākinī)
鹿子母と譯す。

【跋陀婆羅】 バド
ラバラー (Bhadrap
ālā) 賢護と譯す、
賢劫千佛の一。

【文殊師利】 マン
ジュシュリ (Ma
ñjuśrī) 妙吉祥と
譯す。

【天龍等】 八部衆
なり。

我寶冠をして供具を化成せしめん。是の如く諸の天子等各長跪して、弘誓の願を發すこと亦復是の如し。時に諸の天子是願を作し已るに、是諸の寶冠は五百萬億の寶宮を化作せり。一一の寶宮に七重の垣有り、一一の垣は七寶の所成なり。一一の寶より五百億の光明を出し、一一の光明中に五百億の蓮華有り、一一の蓮華は五百億の七寶の行樹を化作せり。一一の樹葉に五百億の寶色有り。一一の寶色に五百億の閻浮檀金の光有り、一一の閻浮檀金の光の中に、五百億の諸天寶女を出せり。一一の寶女は樹下に住立し、百億の寶、無數の瓔珞を執り、妙音樂を出せり。時に樂音中に不退轉地法輪の行を演說せり、其樹に果を生ぜるに頗黎色の如し、一切の衆の色は頗黎色の中に入る。是諸の光明は右に旋りて婉轉し衆音を流出し、衆音は大慈大悲の法を演說せり、一一の垣は高さ六十二由旬、厚さは十四由旬なり、五百億の龍王は此垣を圍遶せり、一一の龍王は五百億の七寶の行樹を雨らし、垣の上を莊嚴せり。自然に風あり、此樹を吹動するに、樹相張觸し苦空無常無我的諸波羅蜜を演說す。

爾時、此宮に一の大神有り、牢度跋提と名く。即ち座より起ちて遍十方佛を禮し、弘誓の願を起せり。『若し我福德、應に彌勒菩薩の爲に善法堂を造るべくんば、我額上に自然に珠を出さしむべし。』と。既に發願し已れば額上に自然に五百億の寶珠を出せり。琉璃頗梨一切の衆色具足せざること無く、紫金摩尼の表裏映徹せるが如し。此摩尼の光空中に廻旋し、化して四十九重の微妙の寶宮と爲り、一一の欄楯は梵摩尼寶の共に合成せる所なり。

【乾達婆】 ガンダ
ルブ (Gandharva)
食香と譯す、八部
衆の一。

【陀羅尼】 ダーラ
ニー (Dharani) 總
持と譯す、種種の
善法を集め持ちて
故ぜざらしむるこ
と。

【阿難陀目佉陀羅
尼】 法義二總持に
名く。對教持義を
以ての故に。

【空慧】 忍總持に
名く。忍無生理を
以ての故。

【大解脫】 呪總持
に名く。解脫障縛
無災患の故に。

【無礙性】 是の如
き四種總持は深妙
にして二乘新學等
の所知所得に非ざ
るが故に名く。

【二】 以下第二聖
教所説分。今初に
廣く外果の殊勝を
辨ず。

【優波離】 ウバ
リ (Upari) 近取と
譯す、佛十大弟子
の一、持戒第一。

諸の欄楯の間に自然に九億の天子と、五百億の天女を化生し、一一の天子の手中には無量億萬の七寶の蓮華を化生せり。一一の蓮華の上には無量億の光有り、其光明中に諸の樂器を具せり。是の如きの天樂は鼓せざるに自ら鳴り、此聲出づる時、諸女自然に諸の樂器を執り、競起して歌舞す。詠歌する所の音は十善四弘誓願を演説し、諸天の聞く者は皆無上道心を發せり。時に諸の園中に八色の瑠璃渠有り、一一の渠に五百億の寶珠ありて、用て合成せり。一一の渠中に八味の水有り、八色具足せり。其水上湧して梁棟の間に遊び、四門外に於て四花を化生せり。水の華中より出づること寶花の流るるが如く、一一の華の上に二十四の天女有り、身色微妙なること諸の菩薩の莊嚴せる身相の如し。手中に自然に五百億の寶器を化し、一一の器中に天の諸の甘露自然に盈滿せり。左肩に無量の瓔珞を荷佩し、右肩に復無量の樂器を負ふ。雲の空に住するが如く水に従つて出で、菩薩の六波羅蜜を讚歎す。若し兜率天に往生することあらば、自然に此天女の侍御を得ん。亦七寶の大師子座有り。高さ四山旬なり。閻浮檀金無量の衆寶を以て莊嚴と爲せり。座の四角の頭に四蓮華を生ず。一一の蓮華は百億の所成なり。一一の寶は百億の光明を出す、其光微妙にして化して五百億の衆寶雜花莊嚴の寶帳と爲る。時に十方面の百千の梵王は、おのく一梵天の妙寶を持ち、以て寶鈴と爲し、寶帳の上に懸く。時に小梵王、天の衆寶を持ち、各一梵天の妙寶を持ち、以て寶鈴と爲し、寶帳の上に懸く。時に小梵王、天の衆寶を持し、以て羅網と爲し帳上に彌覆せり。爾時、百千無數の天子天女眷屬は、各寶華を持して以て座上に布くに、是諸の蓮花は自然に皆五百億の寶女を出し、手に白拂を執り帳内

【毘尼】(Vinaya) 三藏中律藏のこと。
 【阿逸多】(Ajita) 無能勝と譯す、彌勒の字。
 【如來應正遍知】如來はタターガタ(Tathagata)の譯。應は應供即ちアルハン(Arhan)の譯。正遍知はサミヤクサムブダ(Samyak-sambudha)の譯。共に如來の十號の一なり。
 【菩薩摩訶薩】(Bodhisattva-mahāsattva) 覺有情と譯す。
 【阿耨多羅三藐三菩提】アマツタラサミヤクサムボーデー(Anuttara-samyak-sambuddhi) 無上正遍知と譯す佛の覺智を云ふ。
 【兜率陀天】ツシタ(Tusita) 妙足と譯す。欲界六天の第四。

に侍立す。時に持宮の四角に四の寶柱有り、一一の寶柱に百千の樓閣有り、梵摩尼珠を以て絞絡と爲す。時に諸閣の間に百千の天女有り、色妙無比にして手に樂器を執り、其樂音中に苦空無常無我の諸波羅蜜を演說す。是の如く天宮に百億萬無量の寶色有り、一一の諸女も亦同じき寶色なり。爾時、十方無量の諸天命終して、皆兜率天宮に往生せんと願す、時に兜率天宮に五大神有り。

第一の大神を名けて寶幢と曰ふ、身より七寶を雨らし宮の牆内に散す。一一の寶珠は無量の樂器を化成し、宮中に懸處して鼓せざるに自ら鳴る。無量の音有りて衆生の意に適應り。第二の大神を名けて花徳と曰ふ。身より衆花を雨らし宮牆彌覆し花蓋を化成す。一一の花蓋は百千の幢幡を以て導引と爲せり。第三の大神を名けて香音と曰ふ。身の毛孔の中より微妙海此岸の梅檀香を雨出す。其香雲の如く百寶の色を作し宮を遶ること七匝せり。第四の大神は名けて喜樂と曰ふ、如意珠を雨らし、一一の寶珠は自然に幢幡の上に在任し、無量の歸佛、歸法、歸比丘僧を顯說し、及び五戒無量の善法、諸波羅蜜を説き、菩提の意旨を饒益し勸助せり。第五の大神は名けて正音聲と曰ふ、身の諸の毛孔より衆水を流出す、一一の水上に五百億の花有り、一一の華の上に二十五の玉女有り、一一の玉女は身の諸の毛孔より、一切の音聲を出し、天の魔后の所有の音樂に勝れたり。

佛、優波離に告げたまはく、『此を兜率陀天の十善報應勝妙福處と名く。若し我世に住すること一小劫中に一生補處菩薩の報應及び十善の果報を廣說せんも窮盡すること能はじ。』

【檀波羅蜜】(Dānapāramitā) ダー

【一生補處】一生を過ぐれば佛處を補ふべき等覺の位

【摩尼】マニ(Ma) 妙意珠のこと

【閻浮檀金】ジャムブウナダ(Jambumūla) 帶紫色の金

【山旬】ヨージヤナ(Yojana) 夜叉神なり、惡主と此に云ふ。

【四十九重】彌勒が四十九及前九地を超度して十地にあるを指す。

【梵摩尼】淨摩尼珠の意

【十善】不殺生、不偷盜、不邪淫、不安語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪、不瞋、不癡。

【四弘誓願】凡ての菩薩が興す誓願

今汝等が爲に略して解説せん。佛、優波離に告げたまはく、
「若し比丘及び一切の大衆有りて、生死を厭はず天に生ぜんと樂ふ者、無上菩提心を愛敬する者、彌勒の爲に弟子と作らんと欲せん者、當に是觀を作すべし。是觀を作すには應に五戒八齋具足戒を持し、身心精進に斷結を求めず、十善法を修し一一に兜率天上の上妙の快樂を思惟すべし。是觀を作す者を名けて正觀と爲し、若し他觀せん者は名けて邪觀と爲す。」

爾時、優波離、即ち座より起ち、衣服を整へ頭面に禮を作し、佛に白して言さく、
「世尊、兜率陀天上に乃ち是の如きの極妙の樂事有り、今此大士は何時閻浮提に於て没して彼天に生ずるや。」佛、優波離に告げたまはく、
「彌勒は先に波羅那國劫波利村波婆利大婆羅門の家に於て生じ、却後十二年二月十五日、本生處に還つて結跏趺坐し滅定に入るが如く、身は紫金色に光明は鬘飾として百千口の如く、上は兜率陀天に至る。其身の舍利は鑄金像の如く、動かす撞がず、身の圓光の中に首楞嚴三昧般若波羅蜜有り、字義炳然たり、時に諸

上人天は尋いで即ち爲に衆寶の妙塔を起し、舍利を供養す。時に兜率陀天七寶臺内摩尼殿上師子床座に忽然として化生し、蓮華の上に於て結跏趺坐す。身は閻浮檀金色の如く、長さ十六由旬、三十二相八十種好皆悉く具足せり。頂上の肉髻髮は紺瑠璃色にして、釋迦毘楞伽摩尼、百千萬億の甄叔迦寶を以て天冠を嚴にす。其天寶冠に百萬億の色有り、

一一の色中に無量百千の化佛有り、諸の化菩薩を以て侍者と爲す。復他方の諸大菩薩有り、十八變を作し、隨意自在に天冠中に住せり。彌勒の眉間に白毫の相光有り、衆光を流

衆生無邊誓願度、煩惱無邊誓願斷、法門無盡誓願知、無上菩提誓願證、これなり。

【八味】甘、辛、鹹、苦、酸、淡、澁、不了の八味。

【八色】赤黄青白紅紫碧綠。

【四花】青黄赤白なり。

【六波羅蜜】布施持戒、精進、禪定、智慧、忍辱の六度のこと。

【七寶】金、銀、瑠璃、頗梨、砗磲、赤珠、瑪瑙。

【五戒】不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒。

【十善報應等】十善業の能く異熟、等流、増上、土用離業の五果を得るをいふ。

【八齋】五戒に不塗飾鬘舞歌觀聽、不坐高廣床、不食非時食の三を加へ

しもの。

出して百寶の色を作す。三十二相の一一の相中に五百億の寶色有り。一一の好に亦五百億の寶色有り、一一の相好は艶に八萬四千の光明雲を出し、諸の天子と各花座に坐し、晝夜六時に常に不退轉地法輪の行を説く。一時中を経て五百億の天子を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしむ。是の如く兜率陀天に處し晝夜に恆に此法を説き、諸の天子を度し、閻浮提の歳數五十六億萬歳に、爾乃ち閻浮提に下生せん。彌勒下生經説の如し。

佛、優波離に告げたまはく、「是を彌勒菩薩閻浮提に於て没し、兜率陀天に生ずる因縁と名く。佛滅度の後、我諸の弟子、若し精勤して諸の功德を修め、威儀缺けず、塔を掃き地を塗り、衆の名香妙花を以て供養して諸の三昧を行じ、深く正受に入つて經典を讀誦する有らば、是の如き等の人は應當に至心なるべく、結を斷ぜずと雖も、六道を得るが如し。應當に念を繋けて佛形像を念じ、彌勒の名を稱すべし。是の如き等の輩、若し一念の頃に八戒齋を受け、諸の淨業を修し、弘誓の願を發せば、命終の後、譬へば壯士の臂を屈申する頃の如きに、即ち兜率陀天に往生することを得、蓮華の上に於て結加趺坐し、百千の天子は天の伎樂を作し、天の曼陀羅花摩訶曼陀羅華を持して、以て其上に散じ、讚じて曰はく、「善哉善哉善男子。汝閻浮提に於て廣く福業を修し此處に來生せり。此處を兜率陀天と名く。今此天主を名けて彌勒と曰ふ、汝當に歸依すべし」と聲に應じて即ち禮し、禮し已りて眉間の白毫相光を諦觀せんに、即ち八十億劫生死の罪を超越するこ

【具足戒】 出家五衆の戒。

【三】 次に内果の莊嚴を辨ず。

【彌提提】 シヤムフドギーバ (Yamudhiva) 隸洲と譯す。此世界の事。

【波羅那】 グーラーナシー (Gauranasi) 江蘇城と譯す。今のベナレスの地也の波。

【波婆利】 大説と譯す。佛または聖者の遺骨をいふ。

【動かす搖がす】 佛の法身は本來無生滅身なることを表す。

【舍利】 シヤリーラ (Saria) 身骨と譯す。佛または聖者の遺骨をいふ。

【首楞嚴】 此に健行といひ、唯佛及び第十地菩薩の所得の三昧なり、三昧とはサマーディ (Samadhi) 等持と譯す。

【般若波羅蜜】 パラジユニヤーパー

とを得ん。是時菩薩は其宿縁に隨つて爲に妙法を説き、其をして堅固に無上道心を退轉せざらしむ。是の如き等の衆生若し諸業を淨め六事法を行せば、必定して疑無く、當に兜率天上に生ずるを得て彌勒に値遇し、亦彌勒に隨つて閻浮提に下り、第一に法を聞き、未來世に於て賢劫の一切の諸佛に値遇し、星宿劫に於て亦諸佛世尊に値遇することを得、諸佛の前に於て菩提の記を受くべし。

佛、優波離に告げたまはく、『佛滅度の後、比丘比丘尼優婆塞優婆夷、天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等、是諸の大衆、若し彌勒菩薩摩訶薩の名を聞くことを得る者有らば、聞き已つて歡喜し、恭敬し禮拜せば、此人命終して彈指の頃の如きに即ち往生を得ること、前の如く異なること無けん。但是彌勒の名を聞くことを得ば、命終して亦黑闇處、邊地、邪見、諸惡、律義に墮せず、恆に正見の眷屬に生じ、三寶を訪らざるを成就せん。』

佛、優波離に告げたまはく、『若し善男子善女人ありて、諸の禁戒を犯し、衆の惡業を造るも、是菩薩の大悲の名字を聞き、五體を地に投じ、誠心に懺悔せば、是諸の惡業は速に清淨を得、未來世中の諸の衆生等、是菩薩の大悲の名稱を聞き、形像を造立し、香花衣服綰蓋幢幡もて禮拜繫念せば、此人命終らんと欲する時、彌勒菩薩は眉間の白毫大人相光を放ち、諸の天子と曼陀羅花を雨らし、來つて此人を迎へん。此人須臾にして即ち往生を得、彌勒に值遇し頭面に禮敬し、未だ頭を擧げざる頃に、便ち法を聞く

ラミター (Pāṇini's grammar) 智度のこ

【三十二相】 色身

佛に具足する三十

二の相好。

【八十隨形好】 三

十二相に隨伴せる

八十種の好。

【釋迦毘楞迦摩尼】

シヤクラービラン

ガ、マニ、ラトナ

(Sakrebhāṅga-

amrta) 能種種現

如意珠と譯す。

【寶叔伽】 キムシ

ユカ (Kinsika) 赤

色と譯す。寶珠の

名。

【十八變】 振動、

巖然、流布、示現

轉變、往來、卷、

舒、衆像、同類、

隱、顯、所作自在

制伏神通、施辨、

施念、施樂、放光

【六時】 晨朝、日

中、日沒、初夜、

中夜、後夜。

【八通】 天眼、天

耳、神足、漏盡、

ことを得、即ち無上道に於て不退轉を得、未來世に於て恆河沙等の諸佛如來に値ふことを得ん。

佛、優波離に告げたまはく、『汝今諦に聽け。是彌勒菩薩は未來世に於て當に衆生の爲に大歸依處と作るべし。若し彌勒菩薩に歸依する者有らば、當に知るべし、是人は無上道に於て不退轉を得、彌勒菩薩、多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を成ぜん時、此の如きの行人は佛の光明を見即ち授記を得ん。』

佛、優波離に告げたまはく、『佛滅度の後、四部の弟子天龍鬼神、若し兜率陀天に生ぜんと欲せん者有らば、當に是觀を作し念を繋けて思惟すべし。兜率陀天を念し佛の梵戒を持し、一日より七日に至り、十善行十善道を思念せよ。此功德を以て廻向して彌勒の前に生ぜん」と願せん者は、當に是觀を作すべし。是觀を作すとは、若し一の天人を見、一の蓮花を見、若し一念の頃も彌勒の名を稱せば、此人千二百劫生死の罪を除却せん。但彌勒の名のみを聞いて合掌恭敬せば、此人五十劫生死の罪を除却せん、若し彌勒を敬禮する者有らば、百億劫生死の罪を除却せん。設し天に生ぜずんば、未來世中龍花菩提樹下に亦值遇を得て、無上心を發さん。

是語を説きたまふ時、無量の大衆即ち坐より起つて、佛足を頂禮し、彌勒の足を禮し、佛及び彌勒菩薩を遶ること百千匝、未だ道を得ざる者は、各誓願を發すべく、『我等天人八部、今佛前に於て誠實の誓願を發し、未來世に於て彌勒に值遇し、此身を捨て已つて皆兜

【曼陀羅】 マンダ
ラ(Mandara) 適意
華、白華等と譯す
【摩訶曼陀羅】 マ
ハーマンダラ(Maha
mandara) 大白
華と譯す。

【白毫相】 三十二
相の一、佛の兩眉
の間に白玉の毫あ
りて右旋宛轉する
をいふ。

【賢劫】 現在劫、
此間に千佛出世す
といふ。

【星宿劫】 未來劫
のこと此間に日光
佛より須彌相佛に
至る千佛出世す。

【黒闇處】 三陰の
こと。邊地とは八
難、邪見とは五見
惡律儀とは不律儀
のことなり。

【龍華樹】 彌勒の
菩提樹なり。彌勒
出世の時にこの樹
下に成道すといふ
【四】 歡喜奉行分

率陀天に上生することを得ん。」と。世尊記して曰はく、「汝等及び未來世に福を修し戒を
持せんもの、皆當に彌勒菩薩の前に往生し、彌勒菩薩の攝受する所たるべし。」佛、優波離
に告げたまはく、「是觀を作す者を名けて正觀と爲し、若し他觀せんをば名けて邪觀と爲
す。」

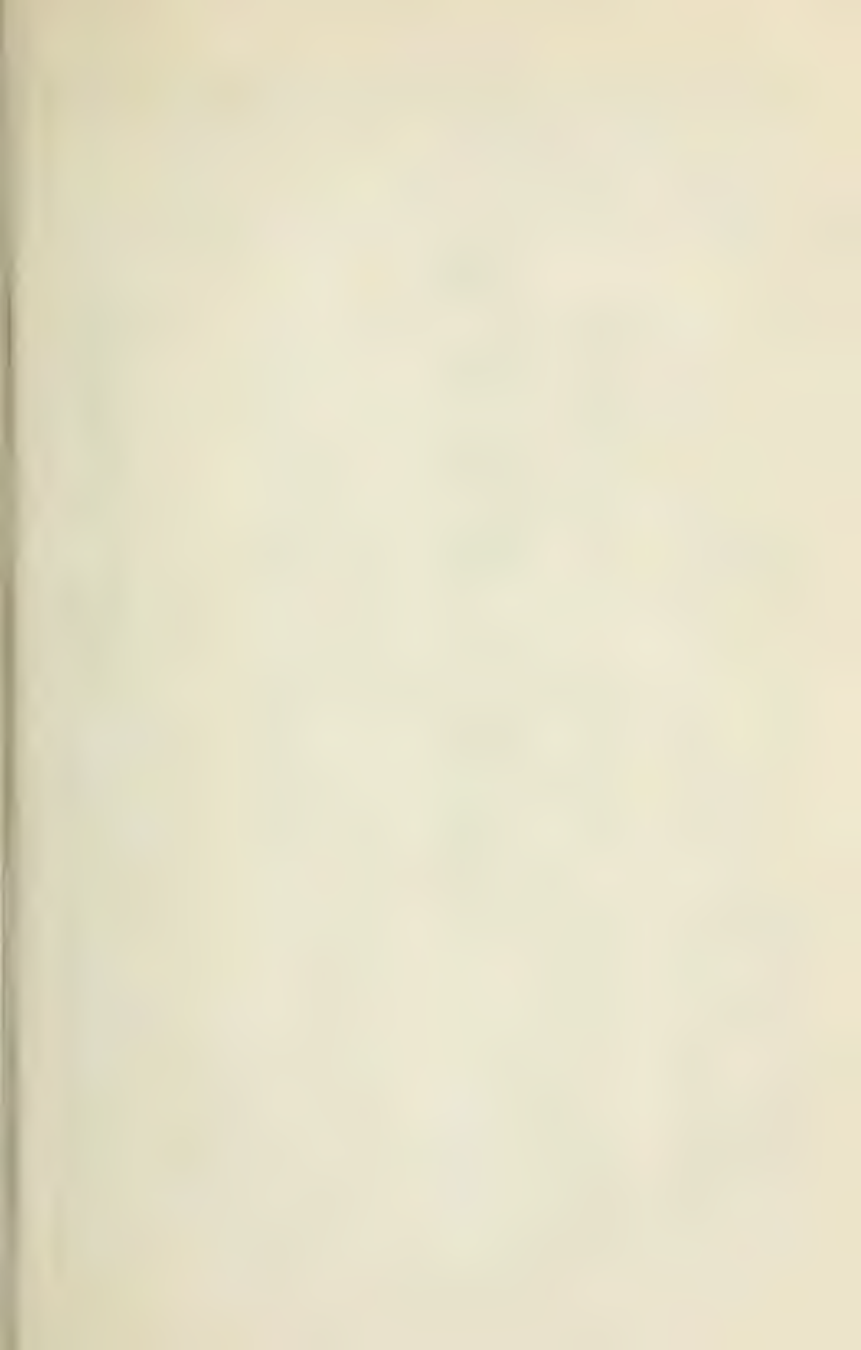
爾時、尊者阿難即ち坐より起ち、叉手長跪して佛に白して言さく、「世尊、善哉世尊。快
く彌勒所有の功德と説き、亦未來世修福の衆生の所得の果報を説きたまへり。我今隨喜せ
ん、唯然り世尊、此法の要云何が受持せん。當に何に此經を名くべき。」佛、阿難に告げた
まはく、「汝佛語を持し慎んで忘失すること勿れ、未來世の爲に、生天の路を開き菩提の相
を示し、佛種を斷ずること莫れ、此經をば彌勒菩薩般若涅槃と名け、亦觀彌勒菩薩生兜率陀
天と名く、善提心を勸發し、是の如く受持せよ。」

佛、是語を説きたまふ時、他方來會の十萬の菩薩、首楞嚴三昧を得、八萬億の諸天、善
提心を發し、皆彌勒に隨從して下生せんことを願ぜり。佛、是語を説きたまふ時、四部の
弟子天龍八部、佛の所説を聞いて皆大歡喜し佛を禮して退きぬ。

佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經 終

佛說彌勒下生經

第二卷	經典部
-----	-----



佛說彌勒下生經

西晉月氏三藏竺法護譯

【一】第一に證信傳經分、本經の序分なり。

【二】第二に問答廣説分、本經の正宗分なり。

【翅頭】鷄頭末のこと。此に慧轉といふ。

聞けること是の如し。一時佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘衆五百人と俱なりき。

爾時、阿難、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、佛に白して言さく、『如來の玄鑿なる、事として察せざる無く、當來過去現在の三世、皆悉く明了なれば、過去諸佛の姓字名號、弟子菩薩が翼從の多少皆悉く之を知りたまふ。一劫百劫若は無數劫、皆悉く觀察したまふも亦復是の如し、國王大臣人民の姓字則ち能く分別したまふ、今現在せるが如き國界の若干も亦復明了なり。將來久遠に彌勒出現し、至眞等正覺せん。其變を聞かんと欲す。弟子翼從し佛境豐樂なる、幾時か經ると爲す。』佛阿難に告げたまはく、『汝還つて坐に就き、我說く所の彌勒出現、國土豐樂、弟子の多少を聽き、善く之を思念し、心懷に執在せしめよ。』
是時阿難、佛より教を受け、即ち還りて坐に就く。爾時世尊、阿難に告げて曰はく、『將來久遠に此國界に於て、當に城郭有るべし、名けて翅頭といふ、東西十二山旬、南北七山旬、土地豐熟、人民熾盛に、街巷行を成ぜり、爾時城中に龍王有り、名けて水光といふ。』

【羅刹】 ラークシヤサ (Raksasa) 可畏と譯す、惡鬼の名。

【百八患】 苦樂捨六境中に通じて十八、十八通じて染淨に通じて三十六、三十六世を還る故に百八なり。
【優單越】 ウツタラクル (Uttarakuru) 勝生と譯す、北俱盧洲と普通にいふ。

夜は香澤を雨らし、晝は即ち清和す、是時翅頭城中に羅刹鬼有り、名けて葉華と曰ふ、所行法に順ひ聖教に違せず。毎に人民の寢寐の後に向ひ、穢惡諸の不淨なる者を除去し、常に香汁を以て其地に灑ぐ。極めて香淨たり、阿難當に知るべし。爾時に閻浮地は、東西南北千萬由旬、諸の白河石壁皆自ら消滅し、四大海水各一萬を減ず。時に閻浮地は極めて平整なること、鏡の清明なるが如し。閻浮地の内を擧げて、穀食豐賤に、人民熾盛に諸の珍寶多し、諸の村落相近く、鷄鳴相接せり、是時繁華果樹は枯竭し、穢惡も亦自ら消滅せり。其餘の甘美なる果樹香氣の殊好なる者皆地に生ぜり。爾時、時氣和適し、四時、節に順ふ。人身の中に百八の患有ること無し。貪欲瞋恚愚癡大いに慳慳ならず、人心均平にして皆同一の意なり。相見て歡悦し善言相向ひ、言辭一類にして差別有ること無し。彼優單越の人の如くにして異り有ること無し。是時、閻浮地内の人民大小皆同じく一向し、若干の差別も無きなり。彼時男女の類、意に大小便を欲せば、時に地自然に開け、事訖つての後地便も還合す。爾時、閻浮地内に自然に粳米を生じ亦皮裏無く、極めて香美を爲し、食するも患苦無し。謂ゆる金銀珍寶車渠馬瑙琉璃珠琥珀、各散じて地に在るも人の省録する無し。是時人民手に此寶を執り、自ら相謂つて言はく、『昔は人此寶に由るが故に更に相傷害し、繫閉せられて獄に在り、無數の苦惱を受けたり。今や此寶の如きは瓦石と同じく流るるも人の守護する無し。』

爾時、法王出現す。名けて瓔珞と曰ふ。正法もて治化し、七寶成就せり。謂ゆる七寶とは、

【乾陀越】他持といふ、北天竺にあり伊羅鉢とは樹名【彌梯羅】等共といふ、南天竺にあり、綱羅とは黃頭といふ、龍の名。【須頼吒】黒色といふ、東天竺にあり。【波羅那】紅纒といふ、西天竺にあり。

【修梵摩】善淨といふ。

【梵摩越】淨主といふ。

【八十四態】女人が内心の諷媚相なり。

輪寶象寶馬寶珠寶玉女寶典兵寶守藏の寶なり。是を七寶と謂ふ。此閻浮地内を鎮むるに、刀杖を以てせざるも自然に靡伏せり。今の如く阿難四珍の藏あり、乾陀越國に伊羅鉢寶藏あり、諸の珍琦異の物多し。稱計すべからず。第二に彌梯羅國には綱羅大藏あり、亦珍寶多し。第三に須頼吒大國に大寶藏有り、亦珍寶多し。第四に波羅捺婁佉に大寶藏有り、諸の珍寶あつて稱計すべからず。此四の大藏は自然に應現し、諸の守藏人各來つて王に白さく、「唯願くは此寶藏の物を以て貧窮に惠施したまへ。」

爾時曠佉大王、此寶を得已りて亦復之を省録せず、意に財寶の想無し。時に閻浮地内に自然に樹上に衣を生ず、極細柔軟にして人の取つて之を著くるに、今の優單越の人の自然に樹上に衣を生ずるが如くして異り有ること無し。爾時、彼王に大臣有り、名けて修梵摩と曰ふ。是れ王と少小同好にして王甚だ愛敬す、又且顏貌端正にして、長からず短からず、肥えず瘦せず、白からず黒からず、老いす少からず。是時修梵摩に妻有り、梵摩越と名く、玉女中の最にして、極めて殊妙たり。天帝妃の如く、口に優鉢蓮華香を作り、身に栴檀香を作る。諸の婦人の八十四態永く復有ること無し。亦疾病亂想の念無し。爾時、彌勒菩薩、兜率天に於て父母の老いす少からざるを觀察し、便ち祀を降し、下つて應に右脇より生ぜんこと、我今日右脇より生ずるが如く異ること無し。彌勒菩薩も亦復是の如し。兜率の諸天各唱令すらく、「彌勒菩薩已に神を下して生ぜり」と。是時、修梵摩即ち子に與へて字を立て、名けて彌勒と曰ふ。彌勒菩薩に三十二相八十種好

【四天王等】以下他化自在天までを六欲天といふ。

【三】以下彌勒の三會を明す。

【生天の論】一に十善をいひ、一には前の施戒をいふ總じて生天の論といふなり。

【欲不淨想・妙】五欲不淨想を修ずるを上界に生ずるの要となすの意。

有り、其身を莊嚴し、身は黄金色なり。爾時、人壽極めて長く諸患有ること無し。皆壽八萬四千歳なり。女人は年五百歳にして然る後出嫡す。爾時、彌勒家に在り、未だ幾時も經ずして、便ち當に出家して道を學ぶべし。爾時、翅頭城を去ること遠からずして道樹有り、名けて龍花と曰ふ。高き一由旬、廣さ五百歩なり、時に彌勒菩薩、彼樹下に坐して無上道果を成ぜんとし、其夜半に當つて彌勒出家し、即ち其夜に於て無上道を成ぜり。時に三千大千刹土六返震動す、地神各相告げて曰はく、「今時彌勒已に成佛せり」と。

轉至して四天王宮に聞ゆ、彌勒已に佛道を成ぜりと。轉轉して聞え、三十三天、梵天、兜率天、化自在天、他化自在天に徹し、聲聞展轉して梵天に至る、彌勒已に佛道を成せりと。

爾時に魔王を大將と名く。法を以て治化し、如來の名音響の聲を聞いて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、七日七夜眠らず寐ねず。是時魔王、欲界無數の天人を將ゐて彌勒佛の所に至り、恭敬禮拜せり。彌勒聖尊、諸の天人と、漸漸に微妙の論を說法せり。謂ゆ

る論とは施論、戒論、生天の論なり。欲不淨想の出要を妙と爲す。爾時彌勒、諸の人民の已に心歡喜を發せるを見、諸佛世尊の常に說法したまひし所の苦習盡道盡を、諸天人民に與へ廣く其義を分別せり。爾時に座上八萬四千の天子は、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾時大將魔王、彼界の人民の類に告げて曰はく、「汝等速に出家せよ、然る所以は彌勒今日已に彼岸に度し、亦當に汝等を度し彼岸に至らしむべし」と。爾時、翅頭城中に長

【苦習盡道】 苦集滅道の四諦をいふ。
【塵垢】 見所斷煩惱纏を塵といひ、彼煩惱の隨眠を垢となす。
【法眼淨】 四諦中の忍智。

【初善等】 始め聽聞の時歡心を生ずる故に初善、修行時に難艱無故に中善、終に究竟果に至る故に後善なり。
【三結使】 身見、戒取、疑。
【苦際を盡す】 七生邊際を得るを表す。

【須陀洹】 スロータバナナ (Srotapanna) 預流と譯す。三界の見惑を斷じ初めて聖流に入りし位。
【刹利】 クシヤトリア (Kshatriya) 田主といふ、武士階級なり。

者有り、名けて義財と曰ふ。魔王教令を聞き、又佛の音響を聞き、八萬四千衆を將ゐて彌勒佛所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて坐せり。

爾時、彌勒漸く與に微妙の論を説法せり。謂ゆる論とは施論、戒論、生天の論なり、欲不淨想の正要を妙と爲す。爾時彌勒、諸の人民の心開意解せるを見、諸佛世尊が常に説法したまひし所の如き、苦習盡道を諸の人民に與へ、廣く義を分別せり。爾時、座上の八萬

四千人は、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。是時善財、八萬四千人と等しく即ち前み佛に白して出家を求索し、善く梵行を修し、盡く阿羅漢道を成ぜり。爾時、彌勒は初會に八

萬四千人の阿羅漢を得たり。是時瓌佞王は、彌勒の已に佛道を成ぜるを聞き、便ち往いて佛所に至り、法を聞くを得んと欲す、時に彌勒菩薩、王の與に説法し、初善く中善く竟も善

く、義理深遠なり。爾時、大王復異時に於て太子を立てて王と爲し、剃頭師に珍寶を賜り、復雜寶を以てし、諸の梵志と八萬四千衆を將ゐて、往いて佛所に至り、沙門たらんを求

め、盡く道果を成じて阿羅漢を得たり。是時、修梵摩大長者は、彌勒の已に佛道を成ぜるを聞き、八萬四千の梵志の衆を將ゐて、往いて佛所に到り、沙門たらんを求めて阿羅漢

を得たり。唯修梵摩一人あつて三結使を斷じて必ず苦際を盡せり。是時、佛母梵摩越は復八萬四千の姪女の衆を將ゐて、往いて佛所に到り、沙門たらんことを求む。爾時、諸の女人

盡く阿羅漢を得たり、唯梵摩越一人のみは三結使を斷じて須陀洹を成ぜり。爾時、諸の刹利刹利は、彌勒如來世間に出現して等正覺を成ぜりと聞き、數千萬の衆往いて佛所に至り、

【次を越えて等】

二あり、初に頓、
即ち初果にして中
二果を越えて羅漢
を得るあり、次に
漸凡夫の中二果を
うるをいふ。

【奉法人】

阿難、
佛を助けて一切法
相の若しは相、若
し性の眞實義を宣
ぶる故に名く、

【一切世間を等】

既に佛事を作し衆
生を教ふる故に世
間に順はざるなり
【三乘】聲聞乘、
緣覺乘、菩薩乘を
いふ。

【十二頭陀】

頭陀とは煩惱の塵を抖
擻する比丘行のこ
と。住阿蘭若處、
常行乞食、次第乞
食一食、節量食、
過中不飲漿、著弊
衲衣、但三衣、塚
間座、樹下座、露
地座、但坐不臥の
稱。

【大迦葉比丘等】

頭面に足を禮し、一面に在りて坐せり。各各心を生じ沙門たらんを求めて出家學道せり。或は次を越えて證を取る有り、或は證を取らざる者有り、爾時阿難、其次を越して證を取らざる者は、是れ奉法人、一切世間を厭患して不可樂想を修するなり。爾時、彌勒當に三乘の教を説くこと我が今日の如くなるべし。弟子の中大迦葉とは十二頭陀を行じ、過去諸佛の所に善く梵行を修せり。此人當に彌勒を佐けて人民を勸化すべし。

爾時迦葉は如來を去ること遠からずして結加趺坐し、正身正意、念を繫けて前に在り。

爾時世尊、迦葉に告げて曰はく、「吾今年已に衰耗し八十餘に向へり。然るに今如來に四大聲聞有り、堪任して遊化し、智慧無盡に衆德具足せり。云何が四と爲す、謂ゆる大迦葉比

丘、屠鉢數比丘、賓頭盧比丘、羅云比丘なり。汝等四大聲聞、般涅槃せざるべし。吾法の

沒盡を須ちて、然る後、乃ち當に般涅槃すべし。大迦葉、亦應に般涅槃すべからず。要す

彌勒の世間に出現せんを須つべし。然る所以の者は、彌勒所化の弟子は、盡く是れ釋迦

文の弟子なり、我遺化に由て有漏を盡すを得ん。摩竭國界毘提村中、大迦葉は彼山中に於

て住せよ。又彌勒如來、無數千人衆を將ゐて、前後に圍繞せられ往いて此山中に至り、遂

に佛恩を蒙らん。諸の鬼神當に與に門を開き、迦葉の禪窟を見るを得しむべし。是時彌

勒、右手を申べて迦葉を指示し、諸の人民に告げん、「過去久遠の釋迦文佛の弟子、名け

て迦葉と曰ふ、今日現在し、頭陀苦行最も第一たり」と。

是時諸人は是事を見已つて、未曾有と歎じ、無數百千の衆生、諸の塵垢盡きて法眼淨を

文佛の所に於て、五戒三自歸法を受持し、我所に來至せるあり。或は釋迦文佛の所に於て
 寺廟を起請して我所に來至せるあり。或は釋迦文佛の所に於て故寺を補治して、我所に來
 至せるあり。或は釋迦文佛の所に於て、八關齋法を受けて我所に來至せるあり。或は釋迦
 文佛の所に於て、香華もて供養して此に來至せる者あり。或は復彼に於て法を聞き、悲泣
 して涙を墮し、我所に來至せるあり。或は復釋迦文佛の所に於て、專意もて法を聽受して
 我所に來至せるあり。或は復形壽を盡して善く梵行を修し、我所に來至せるあり。或は復
 書寫讀誦して、我所に來至せるあり。或は復承事供養して我所に來至せる者あり。是時彌
 勒、便ち此偈を説く。

戒聞の徳、禪及び思惟業を増益し

善く梵行を修して、我所に來至せる有り

施を勧めて歡心を發し、心の原本を修行し

意に若干の想無くして、皆我所に來至す

或は平等心を發し、諸佛に承事し

聖衆に飯飴して、皆我所に來至せり

或は契經を誦し、善習して人の與に説き

法本に熾然なれば、今我所に來至せり

釋種は善き能化、諸の舍利を供養し

【心の原本】 三善根のこと。
【意に若干の想無し】 散亂心無きを顯す。

【契經等】 契經とは修多羅、善習とは毘尼、法本とは阿毘曇藏なり。

承事しやうじし法ほふもて供養くやうせば、今我所いまがしよに來至らゐしせり

若もし經きやうを書寫しよじやし、素上そじやうに班宣はんせんある有り

其それ經きやうを供養くやうする有あらば、皆我所みながしよに來至らゐしせん

繪綵えさい及び諸物しよぶつもて、神寺じんじを供養くやうし

自みづから南無佛なむぶつと稱しょうせば、皆我所みながしよに來至らゐしせん

現在げんざいに、諸佛しよぶつの過去かこせる者ものを供養くやうしたてまつり

禪定ぜんぢやう正ましく平等びやうどうに、亦增減またぞうげんじ有ること無し

是故このゆゑに佛法ぶつぽふに於おて、聖衆しやうじゆに承事しやうじし

專心せんしんに三寶さんぽうに事つかふれば、必ず無爲處かならぬむゐぢよに至いたらん

阿難あなん當まに知るべし、彌勒みろく如來にょらいは彼の衆中しゆぢゆうに在あり、當まに此偈このげを説とくべし。爾時そのとき、彼衆中かのしゆぢゆうの

諸天人民しよてんにんみん、此十想このじしうさうを思惟しゆゐし、十一孩人じふいちごにん、諸の塵垢ちんく盡つき、法眼淨ほふげんじやうを得えたり。彌勒みろく如來にょらい千歲せんざいの中なか、

衆僧しゆしやうに瑕穢けあ有ること無く、爾時そのとき、恆つねに一偈いちげを以もつて、以もつて禁戒こんがいと爲なさん。

口意くゝいに惡あくを行ぎやうぜず、身亦しんまた犯なす所無し

當まに此三行このさんぎやうを除のぞけば、速すみやかに生死しやうじの關くわんを脱だつすべし

千歲せんざいを過すぎて後のち、當まに戒かいを犯なすの人ひと有ありて、遂つひに復戒またかいを立たつべし。彌勒みろく如來にょらいは當まに壽八

萬四千歲まんしよせんざい、般涅槃はんねはんの後遺法のちのゐほふほふ當まに八萬四千歲はちまんしよせんざいに在あるべし。然しかる所以ゆゑの者ものは、爾時そのとき、衆生しゆじやう皆是みな

れ利根りこんなればなり。其それ善男子ぜんなんし善女人ぜんにんな有ありて、彌勒佛みろくぶつ及び三會さんゑの聲聞衆しやうもんしゆぢゆう及び翅頭城じゆぢやうを見み、

【五】聞說喜奉行
分。流通分なり。

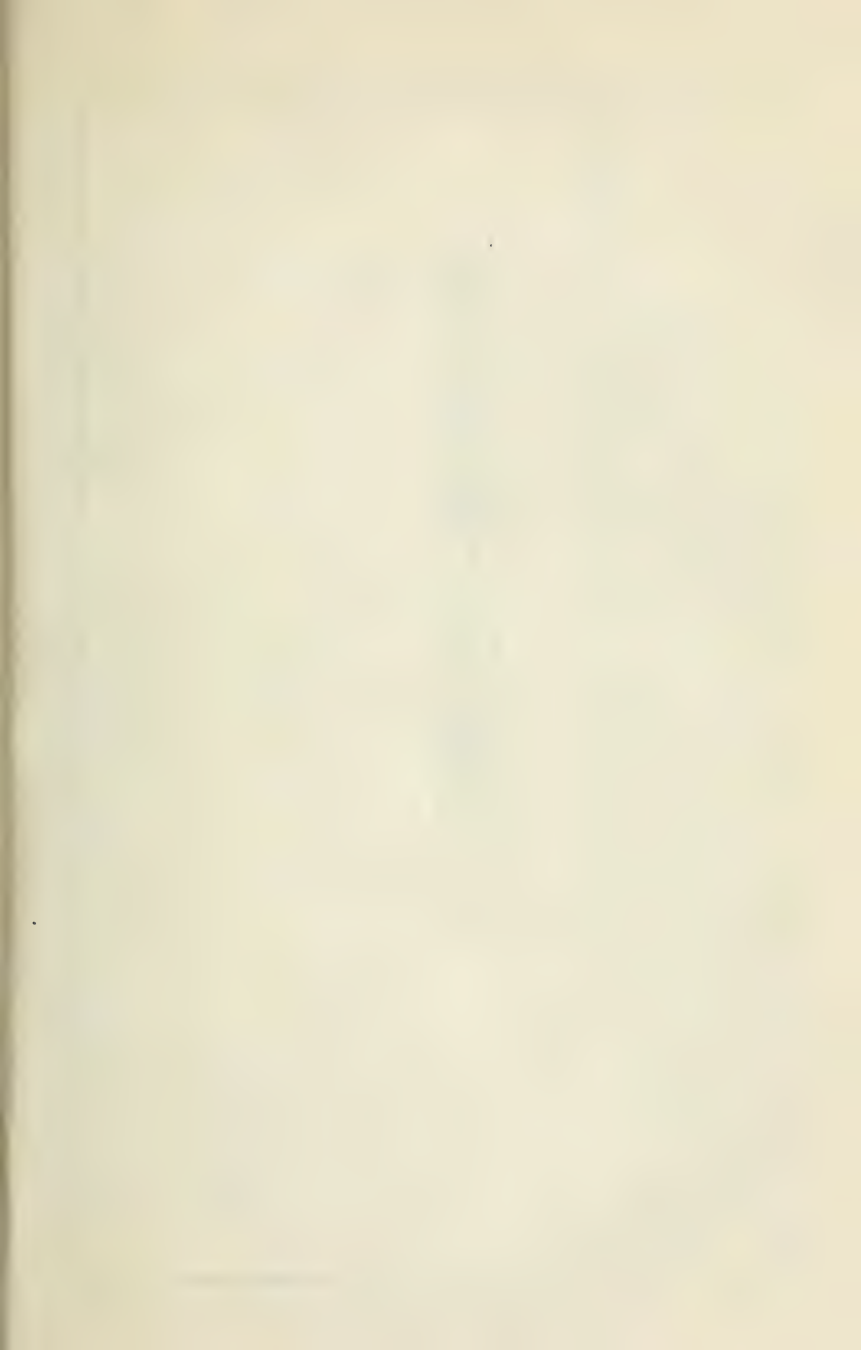
及おびま懷ま法ご王わう并びにし四だい大だい藏ざうのちんぼう珍ちん寶ぼうをみ見みるを得えんと欲ぼつせん者、じねん自然の粳ぎやう米まいをじき食じする者、ならび并に自然の衣え裳やうをつ著つけ、しん身ん壞わいし命終じゆしててんじやう天上に生しやうぜんと欲ぼつせん者は、たうじんなんし彼たう善ぜん男なん子し善ぜん女に人にん、まさ當まさに勤めてて精しやう進じんをかへ、けいたい懈け怠たいをしやう生しやうずることな無なかるべし。亦また當まさに諸のほつ法ほつ師しをく養やうし承事じし、みやうけちやう名みやう花け搗ちやう香かう種しゆん種くのく供く養やうもて、しつ失しつ有あらしむることな無なかるべし。是かくのごと如ごとく阿難あ、まさ當まさに是學がくをな作なすべし。

爾（五）時のとき、あ阿あ難なん及おび諸のだい大だい會かい、ほしや佛ほしやのしよ所しよ說せつをきいてくわん歡くわん喜ん奉ぶ行ぎやうしき。

佛說彌勒下生經

佛說彌勒大成佛經

經典部	第二卷
-----	-----



佛說彌勒大成佛經

姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】 鶩子發請分
【摩伽陀】 マガダ (Magadha)
【舍利弗】 シヤー
リブトラ (Śāriputra)
鶩鷺子と譯す。

是の如く我聞けり。一時佛、摩伽陀國波沙山なり。過去諸佛常降魔處に住したまふ。夏安居中に舍利弗と山頂を經行して偈を説いて言はく、

一心に善く諦に聽け、光明大三昧
無比功德人、正爾しく當に出世すべし
彼人妙法を説き、悉く皆充足を得んこと

渴せるが甘露を飲めるが如く、疾く解脫道に至らん

時に四部衆道路を平治し、灑掃し香を燒き皆悉く來集し、諸の供具を持して如來及び比丘僧を供養し、如來を諦觀すること、喩へば孝子の慈父を視るが如し、渴して飲を思ふが如し。法父を愛念することも亦復是の如し。各各同心に、法王に正法輪を轉ぜんことを請

はんと欲し、諸根動ぜず心心相次ぎ流注して佛に向へり、是時、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、龍鬼神、乾闥婆阿修羅、迦樓羅緊那羅、摩睺羅伽人非人等、各坐より起つて右に世尊を遶り、

五體を地に投じ佛に向つて泣淚せり。爾時大智舍利弗は、衣服を齊整し、偏に右肩を袒ぬ

ぎ、法王の心を知れば善能く隨順して、佛法王の正法輪を轉ずるを學べり。是れ佛の輔臣、

【持法の大將】内に神謀を懐き、外に威力を揚げて、煩惱怨等を降伏するに名く。

【八正路】正見、正思、正語、正業、正精進、正念、正命、正定。
【三界】欲界、色界、無色界。

【十力】處非處智力、業異熟智力、乃至漏盡智力をいふ。
【三有】三界のこと。
【三達智】三明のこと。宿命明、漏盡明、天眼明なり。
【四魔】蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔。

持法の大將なり。衆生を憐愍するの故に、苦縛を脱せしめんと欲し、佛に白して言さく、『世尊、如來向に山頂に於て上の偈を説き、第一智人を讚歎したまふは、前後の經中の未だ説かざる所なり。此諸の大衆は心に皆渴仰せば涙盛雨の如し。如來が未來佛の甘露道を開き、彌勒の名字、功德、神力、國土の莊嚴を説きたまふを聞かんと欲す。何の善根、何の戒、何の施、何の定、何の慧、何等の智力を以てか、彌勒を見ることを得、何の心中に於てか八正路を修するや。舍利弗が此問を發する時、百千の天子無數の梵王、合掌恭敬し、異口同音に共に是問を發し、佛に白して言さく、『世尊、願くば我等をして未來世に於て、人中の最大果報、三界の眼日光明を見、彌勒をして、普く衆生の爲に大慈悲を説くを得しめたまへ。』並に八部衆も亦皆此の如く、恭敬叉手して如來を勸請せり。

爾時梵王、諸の梵衆と、異口同音に合掌讚歎して、頌を説いて曰はく、
南無滿月、十力を具足し
大精進、將は、勇猛無畏にして
一切智人は、三有を超出し
三達智を成じ、四魔を降伏し
身は法器と爲り、心は虚空の如し
靜然として動かす、有非有に於て
無非無に於て、空法を達解し

【二】 如來酬答分

【菴摩勒果】 アー
ムラ (Amra) 胡桃
の如き果。

【過去七佛】 毘婆
尸、尸棄、毗舍浮
拘留孫、俱那含、
迦葉、釋迦をいふ。

【尸羅波羅蜜】 シ
イラハ、ハラミター
(Sīlāparāmitā) 戒
度。

【四大海】 須彌を
廻る四方の大海。

【優曇鉢】 ウツド
ムバラ (Udumbara)
瑞應華と譯す。

世の讚歎するところたり、我等同心にして

一時に歸依せん、願くは法輪を轉ぜんことを

爾時世尊、舍利弗に告げたまはく、『當に汝等が爲に廣く分別して説くべし。諦に聽き

諦に聽け、善く之を思念せよ。汝等今や妙善心を以て、如來の無上道業摩訶般若を問は

んと欲す。如來の明見は掌中の菴摩果を觀るが如し。舍利弗に告げたまはく、『若し過去

七佛の所に於て、佛名を聞くことを得て禮拜供養せば、是因縁を以て業障を淨除し、復彌

勒大慈の根本を聞かば清淨心を得ん。汝等今當に一心に合掌して未來の大慈悲者に歸依

すべし。我當に汝が爲に廣く分別して説くべし。彌勒佛國は淨命に従ひ、諸の評僞無し、

檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、般若波羅蜜に、不受不著を得、微妙の十願を以て大莊嚴せり。一

切の衆生は柔軟心を起すことを得、彌勒大慈の所攝をも見ることがを得、彼國土に生じて諸

根を調伏し、佛化に隨順せん。舍利弗、四大海の水面各減少せること三千由旬、時に闇

浮提の地は縱廣正等にして十千由旬なり。其地の平淨なること琉璃鏡の如く、大適意

華、悅可意華、極大香華、優曇鉢花、大金葉華、七寶葉華、白銀葉華あり。華鬚柔軟にし

て狀天繪の如し、吉祥菓を生じ、香味具足して軟きこと天綿の如く、叢林の樹華は甘果

實妙にして極大茂盛し、帝釋の歡喜の園に過ぎたり。其樹高顯にして高さ三十里なり。城

邑は次比し、鷄飛相及ぶ。皆今佛の大善根を種る、慈心を行ぜし報に由り、俱に彼國に生

ぜり。智慧威德五欲の衆具、快樂安隱にして、亦寒熱風火等の病無く、九惱の苦無く、壽

命具足すること八萬四千歳、中天有ること無し。人身悉く長さ一十六丈、日日常に極妙の安樂を受く。深禪定に遊び、以て樂器を爲せり。唯三病有り、一には飲食、二には便利、三には衰老なり。女人年五百歳にして爾乃行いて嫁す。一大城有り、翹頭末と名く。縱廣一千二百山旬、高さ七山旬七寶もて莊嚴せり。自然に化生せる七寶の樓閣は、端嚴殊妙にして莊校清淨なり。窓牖の間に於て諸の寶女を列せり。手中に皆眞珠の羅網を執り、雜寶もて莊校し以て其上を覆へり。密に寶鈴を懸くるも聲は天樂の如し。七寶の行樹あり、樹を間んで渠泉あり、皆七寶より成る。異色の水を流し更に相映發し、交横に徐逝し相妨礙せず。具岸の兩邊には純ら金沙を布けり。街巷道陌廣さ十二里、悉く皆清淨にして猶し天園の如く掃灑清淨なり。大龍王有り、多羅尸棄と名く、福德威力皆悉く具足せり。其池城に近く龍王の宮殿あり、七寶樓の如く外に顯現せり。常に夜半に於て人像を化作し、吉祥の鞭を以て香色水を盛り、塵土を灑灑せば、其地潤澤なること譬へば油塗の如し。行人往來するに塵塗有ること無し。是時の世人は福德の致す所なり。巷陌の處處に明珠の柱有り、光は日に喻ふべく四方各八十山旬を照し、純ら黄金色なり。其光は照耀し晝夜に異なること無く、燈燭の明も猶し聚墨の若し。香風時に來つて明珠の柱を吹き寶瓔珞を雨らし、衆人の皆用て服する者、自然に三禪樂の如し。處處に皆金銀珍寶摩尼珠等有り、積みて用て山を成ぜり。寶山は光を放ち普く城内を照し、人民の遇ふ者皆悉く歡喜して菩提心を發す。大夜叉神有り、跋陀婆羅睺塞迦と言ふ。と名く。晝夜に翹頭末城及び諸の人

【鉢頭摩】バドマ
 (Padma) 紅蓮華
 【拘頭】クムダ
 (Kumuda) 地喜花
 と譯す、白蓮華のこと。
 【分陀利華】ブン
 ダリカ (Pundarikā) 白蓮華と譯す
 【曼殊沙華】マン
 シューシヤカ (Maṅśukā) 如意華と譯す。
 【摩訶曼殊沙華】マ
 ハー、マンジュ
 シヤカ (Mahā-maṅśukā)

民を擁護し、灑掃清淨ならしめ、設し便利有らば、地裂けて之を受け、受け已つて還合し、赤蓮華を生じて以て穢氣を蔽ふ。時に世の人民、若年も衰老も、自然に行いて山林樹下に詣り、安樂淡泊に念佛して盡を取り、命終して多く大梵天上及び諸佛の前に生ず。其土は安隱にして怨賊劫竊の患有ること無く、城邑聚落到に門を閉づる者無く、亦衰惱水火刀兵、及び諸の飢饉毒害の難無く、人常に慈心もて恭敬和順し諸根を調伏し、子の父を愛するが如し、母の子を愛するが如し。語言謙遜なる、皆彌勒が慈心の訓導に由れり。不殺戒を持して肉を噉はざるが故に、此因縁を以て彼國に生ぜん者は、諸根恬靜に、面貌端正に、威相具足せること天童子の如し。復八萬四千の衆寶の小城有り、以て眷屬と爲す。翅頭末城は最も其中に處せり。男女大小遠若は近なりと雖も、佛神力の故に、兩ながら相見ることを得て障礙する所無し。夜光摩尼如意珠華は遍く世界に滿ちて、七寶花を雨らし、鉢頭摩華、拘頭華、分陀利華、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、其地に彌布し、或は復風吹かば空中に廻旋す。時に彼國界の城邑聚落、園林浴池泉河流沼、自然にして八功德水有り、命命の鳥鵝鴨鴛鴦孔雀鸚鵡、翡翠舍利、美音鳩鵬、羅耆婆闍婆快見鳥等、妙音聲を出し、復異類妙音の鳥有り、稱數すべからず。林池に遊集せり。金色無垢淨光、明華、無憂淨慧日光、明華、鮮白七日香華、瞻蔔六色香華、百千萬種の水陸生華あつて、青色には青光あり、黄色には黃光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、香淨無比にして、晝夜に常に生じ、終に萎時無し。如意果樹有り、香美無比にして

國界に充滿せり。香樹の金光は寶山の間に生じて國界に充滿し、適意の香を出して普く一切を熏ぜり。爾時閻浮提中に常に好香有り、譬へば香山の若し、流水美好にして、味甘くして患を除き、雨澤時に隨へり。天園には香美の稻種を成熟し、天神力の故に一種もて七たび穫る。功を用ふること甚だ少く收むる所甚だ多し。穀稼は滋茂して草穢有ること無く、衆生の福德は本事の果報なり。口に入るれば銷化し、百味具足し香美無比にして氣力充實す。

【轉輪聖王】 チャクラワルテイ、チャクラヤ (Chakravarti) 四天下を統治する王の意。
【四種の兵】 象兵馬兵、車兵、歩兵これを輪王の四兵といふ。

其國に爾時に轉輪聖王有り、名けて穰佉と曰ふ。四種の兵有り、威武を以てせずして四天下を治め、三十二天人相好を具せり。王に千子有り、勇猛端正にして怨敵自ら伏す。王に七寶有り、一に金輪寶、千輻轂輞皆悉く具足せり。二に白象寶、白きこと雪山の如く七軛地を拄ふ。嚴顯觀るべく猶し山王の如し。三に紺馬寶、朱鬣髮尾足下より華を生じ、七寶の蹄甲あり。四に神珠寶、明顯觀るべく二肘より長く、光明は寶を雨らし、衆生の願に適ふ。五に玉女寶、顔色美妙、柔軟にして骨無し。六に主藏臣、口中より寶を吐き足より寶を雨らし、兩手より寶を出す。七に主兵臣、身を動かす時四兵雲の如く空より出づべし。千子七寶國界人民、一切相視て惡意を懷かず、母の子を愛するが如し。時に王の千子各珍寶を取り、正殿の前に於て七寶の臺を作る。三十重高さ十三由旬あり。千頭千輪にして遊行自在なり。四大寶藏有り、一一の大藏に、各四億の小藏有りて圍遶せり。伊鉢多大藏は、乾陀羅國に在り。般軸迦大藏は、彌緹羅國に在り。賓伽羅大藏は、須羅吒國に

【梵摩跋提】

此に

在り、穢法大藏は、婆羅捺國古仙山處に在り、此四大藏は、自然に開發して大光明を顯せり。縱廣正等にして一千由旬なり。中に珍寶を滿てり。各四億の小藏有りて之に附せり。四大龍有り、各自ら此四大藏及び諸の小藏を守護せり。自然に踊出し形は蓮華の如く、無央數の人皆共に往觀す。是時衆寶に守護者無きも、衆人之を見て心に貪著せず、之を地に棄つること猶し瓦石草木土塊の如し。時人見る者心に厭離を生じ、各各相謂つて是言を作さく、『佛の所説の如くんば往昔の衆生は此寶の爲の故に共に相殘害し、更に相偷劫し欺誑し妄語し、生死の苦縁を展轉増上して大地獄に墮せしむ。』と。

翅頭末城には衆寶の羅網其上に彌覆し、寶鈴もて莊嚴し微風吹動するに、其音和雅にして鐘磬を扣くが如く、歸依佛歸依法歸依僧を演說せり。時に城中に一大婆羅門主有り、修梵摩と名け、婆羅門女を梵摩跋提と名く。心性和弱なり。彌勒、生を托して以て父母と爲す。胞胎に處すと雖も、天宮に遊ぶが如く、大光明を放つて塵垢も障へず、身は紫金色にして三十二大丈夫相を具し、寶蓮華に坐し、衆生之を視るに厭足有ること無し。光明晃耀として勝視すべからず。諸天世人の未だ會て觀ざる所なり。身力無量にして一一の節力普く一切の大力龍象に勝る。不可思議の毛孔の光明は、照耀無量にして障礙有ること無し。日月星宿水火珠光、皆悉く現げざること猶し埃塵の如し。身は釋迦牟尼佛より長く八十肘丈なり。脇の廣さは二十五肘丈。面の長さ十一肘半丈。鼻高く修直にして面門に當る。身相具足し端正無比にして相好を成就せり。一一の相に八萬四千の好あり、

【三惡趣】地獄、餓鬼、畜生。
【五欲】色、聲、香、味、觸の五境をいふ。

【波羅門】ブラフマナ (Brahmana) 淨行と譯す。僧侶の階級なり。

以て自ら莊嚴せること鑄金像の如し。一一の好中より光明を流出し千由旬を照し、肉眼清徹に青白分明なり。常光身を遊り面は百由旬なり。日月星宿眞珠摩尼、七寶の行樹皆悉く明耀に佛光を現ぜり。其餘の衆光復用を爲さず。佛身高顯なること黄金山の如く、見る者自然に三惡趣を脱せり。爾時彌勒、諦に世間の五欲の過患を觀するに、衆生は苦を受け長流に沈没し、大生死に在り、甚だ憐愍すべし。自らは是の如きの正念を以て苦空無常を觀察し、家に在ることを樂しめず、家の迫近を厭ふこと猶し牢獄の如し。時に穠佉王、諸の大臣國土人民と共に、七寶の臺を持し、千寶帳及び千寶軒、千億の寶鈴、千億の寶幡、寶器千口、寶鬘千口有り、彌勒に奉上するに、彌勒受け已りて、諸の波羅門に施す、波羅門受け已りて即便毀壞して各共に之を分てり、諸の婆羅門は彌勒の能く大施を作せるを觀見して大奇特の心を生ぜり。彌勒菩薩此寶臺の須臾にして無常なるを見、有爲の法は皆悉く磨滅するを知り、無常想を修し、過去佛の清涼甘露無常の偈を讀すらく、
諸行は無常なり、是れ生滅の法なり
生滅滅し已りて、寂滅なるを樂と爲す
此偈を説き已りて、出家學道し、金剛莊嚴道場龍花菩提樹下に坐せるに、枝は寶龍の如く百寶の華を吐き、一一の花葉は七寶の色を作し、色色果を異にし衆生の意に適し、天上人間に比有ること無きを爲せり。樹の高さ五十由旬、枝葉四布して大光明を放つ。爾時彌勒八萬四千の婆羅門と俱に道場に詣る。彌勒即ち自ら剃髮し出家學道し、早起して出

家するに、即ち是日の初夜に於て四種魔を降し、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、即ち偈を説いて言はく、

久しく衆生の苦を念じ、抜かんと欲せるも脱するに由無し

今や菩提を證し、霍然として礙ふる所無し

亦衆生の空に達し、本性相如實たり

永く更に憂苦無く、慈悲も亦縁無し

本汝等を救はんが爲に、國城及び頭目

妻子と手足と、人に施して數有ること無し

今始めて解脱、無上の大寂滅を復たり

當に汝等が爲に説いて、廣く甘露道を聞くべし

是の如きの大果報は、皆施戒慧

六種の大忍より生じ、亦大慈悲

無染の功德より得たり

此偈を説き已り黙して住せり。時に諸天龍鬼神王、其身を現ぜずして、天花を雨らして

佛を供養し、三千大千世界は六變に震動し、佛身よりは光を出して、無量を照し、應に度

すべき者は皆佛を見るを得たり。爾時、釋提桓因護世の天王、大梵天王、無數の天子、花林園に於て頭面に足を禮し、合

【釋提桓因】 シヤクラ、デーヴァーム、インドラ (Śakra devānam-Indra) 能天主と譯す
【花林園】 彌勒成道の後説法をするといふ僧園。

掌して法輪を轉ぜんことを勸請せり。時に彌勒佛默然として請を受け、梵王に告げて言はく、「我長夜に於て大苦惱を受けしも、六度を修行し、始めて今日に於て法海滿てり。法輪を建て、法鼓を撃ち、法蟲を吹き、法雨を雨らして、正しく爾り。當に汝等が爲に說法すべし。諸佛の轉ずる所の八聖道輪は、諸天世人に能く轉ずる者無し。其義平等にして直に無上無爲寂滅に至る。諸の衆生の爲に長夜の苦を斷ず。此法甚深にして得難く、入り難く、信じ難く、解し難し。一切の世間能く知る者無く、能く見る者無く、心垢を洗除せば萬の梵行を得ん。」

是語を説く時、復他方に無數百千萬億の天子天女、大梵天王有り。天の宮殿に乘じ、天花香を持して如來に奉獻し、遮ること百千匝し、五體を地に投じ合掌して勸請す。諸天の伎樂は鼓せざるに自ら鳴る。時に梵王、異口同聲に偈を説いて言はく、

無量無數歳、空しく過ぎて佛有ること無し

衆生は惡道に墮し、世間の眼目は滅せり

三惡道増廣し、諸天の路永く絶ゆ

今日佛世に興り、三惡道殄滅し

天人衆を増長せり。願くは甘露の門を開いて

衆心をして著無く、疾疾涅槃を得しめたまへ

今や佛無上大法王に、值ふことを得たり

【三毒】貪欲、瞋
恚、愚癡。
【四惡道】地獄、
餓鬼、畜生、修羅

【無想天】色界十
八天の第十三、こ
の天に生ずれば一
期の間に心想起ら
ずといふ。

梵天の宮殿は盛に、身光亦明顯なり
普く十方衆の爲に、大導師を勸請す

唯願くば甘露を開いて、無上の法輪を轉じたまへ

此偈を説き已りて頭面に禮を作し、復更に合掌し慇懃に三たび請ふらく、『唯願くば世尊、其深微妙の法輪を轉じ、爲に衆生の苦惱根栽を抜き、三毒を遠離し、四惡道不善の業を破したまへ。』

爾時世尊、諸の梵王の爲に、即便微笑して五色の光を出し、默然として之を許したまふ。時に諸の天子無數の大衆は、佛の許可を聞いて歡喜すること無量、體に遍く踊躍せり。譬へば孝子の新に慈父を喪ひ忽然として還活くるが如し。大衆の歡喜するも亦復是の如し。時に諸の天衆、世尊を右遶して無數匝を經、敬愛して厭ふ無く却つて一面に住せり。

爾時に大衆皆是念を作さく、『復千億歲五欲の樂を受くと雖も、三惡道の苦を免るを得ることを得ず、妻子、財産も救ふ能はざる所なり。世間の無常命は久しく保ち難し。我等今や佛法中に於て、梵行を淨修せん。』是念を作し已りて復更に念言すらく、『設し五欲を受けて無數劫を經、無想天壽の無量億歲、諸の姝女と共に相娛樂して細滑觸を受くるが如きも、會ず磨滅に歸し、三惡道に墮し、無量の苦を受けん。樂しむ所幾も無く、猶し幻化の如し。蓋言ふに足らず。地獄に入るの時大火洞然たり。百億萬劫に無量の苦を受け、脱

せんと求むるも得^え叵^{がた}し。此^{かく}の如^{ごと}き長^{ちやう}夜^やの苦^く厄^{やく}は拔^ぬき難^{がた}し、今^{こん}日^{にち}佛^にに遇^あふ、宜^{よろ}しく勤^{つと}めて精^{しやう}進^{しん}すべし。

時に穰^{さう}佉^こ王^{わう}高^{かう}聲^{しやう}に唱^なへて言^いはく、

設^あし復^{また}天^{てん}樂^{らく}に生^なぜんも、會^あず亦^{また}磨^ま滅^{めつ}に歸^きし

久^{ひさ}しからずして地^ち獄^{ごく}に墮^だせんこと、猶^{なほ}し猛^{みやう}火^{くわ}聚^{くわ}の如^{ごと}し

我等^{われら}宜^{よろ}しく時^{とき}に速^{すみ}に、出^{しゅつ}家^けして佛^{ぶつ}道^{だう}を學^{まな}すべし

是^{この}語^ごを説^とき已^はるに、時^{とき}に穰^{さう}佉^こ王^{わう}、八^{はち}萬^{まん}四^し千^{せん}の大臣^{だいじん}と、恭^く敬^{きやう}圍^わ遼^{りやう}し、及^おび四^し天^{てん}王^{わう}は轉^{てん}輪^{りん}王^{わう}

を送^{おく}つて、花^け林^{りん}園^{えん}龍^{りゆう}花^け樹^{じゆ}下^げに至^{いた}り、彌^み勒^{らく}佛^{ぶつ}に詣^まつて出^{しゅつ}家^けを求^{もと}索^{さく}し、佛^{ぶつ}の爲^{ため}に禮^{らい}を作^なし、未^ま

だ頭^{かうべ}を擧^あげざる頃^{とき}に、鬚^{しゆ}髮^{はつ}自^おら落^おち袈^け裟^さ身^みに著^つき使^すち沙^{しゃ}門^{もん}を成^{じやう}せり。

時^{とき}に彌^み勒^{らく}佛^{ぶつ}、穰^{さう}佉^こ王^{わう}と共^{とも}に、八^{はち}萬^{まん}四^し千^{せん}の大^{だい}臣^{じん}、諸^{しよ}比^ひ丘^{きう}等^{とう}と恭^く敬^{きやう}圍^わ遼^{りやう}し、並^{なら}びに無^む數^{すう}の天^{てん}

龍^{りゆう}八^{はち}部^ぶと、翅^{しゆう}頭^{とう}末^{まつ}大^{だい}城^{じやう}に入^いる。足^{あし}門^{もん}闍^{せつ}を躡^のめば婆^は婆^は世^せ界^{かい}は六^{ろく}種^{しゆ}に震^{しん}動^{どう}し、閻^{えん}浮^ぶ提^{だい}の地^ち化^けして

金^{こん}色^{じき}と爲^なる。翅^{しゆう}頭^{とう}末^{まつ}大^{だい}城^{じやう}の中^{ちゆう}央^{やう}は其^{その}地^ち金^{こん}剛^{かう}にして、過^{くわ}去^こ諸^{しよ}佛^{ぶつ}が坐^ざせし所^{ところ}の金^{こん}剛^{かう}寶^{ぼう}座^ざ有^ありて

自^じ然^{ぜん}に踊^う出^{しゅつ}せり。衆^{しゆ}寶^{ぼう}の行^{ぎやう}樹^{じゆ}あり。天^{てん}は空^{くう}中^{ちゆう}より大^{だい}寶^{ぼう}華^けを雨^あらし、龍^{りゆう}王^{わう}は衆^{しゆ}の伎^ぎ樂^{らく}を作^な

して、口^く中^{ちゆう}より華^けを吐^はき、毛^{もう}孔^{かう}より華^けを雨^あらし、用^{もち}て佛^{ぶつ}を供^{くわ}養^{やう}したてまつり、佛^{ぶつ}は此^{この}座^ざに

於^おて正^{しやう}法^{ぽう}輪^{りん}を轉^{てん}じたまふ。是^これ苦^くなるを苦^く聖^{せい}諦^{たい}と謂^いひ、是^これ集^{じふ}なるを集^{じふ}聖^{せい}諦^{たい}と謂^いひ、是^これ

滅^{めつ}なるを滅^{めつ}聖^{せい}諦^{たい}と謂^いひ、是^これ道^{だう}なるを道^{だう}聖^{せい}諦^{たい}と謂^いひ、並^{なら}びに爲^{ため}に三^{さん}十^{じふ}七^{しち}助^{じゆ}苦^く提^{だい}法^{ぽう}を演^{えん}説^{せつ}し、

亦^{また}爲^{ため}に十^{じふ}二^に因^{いん}緣^{えん}を宣^{せん}説^{せつ}し、無^む明^{めい}は行^{ぎやう}を緣^{えん}じ、行^{ぎやう}は識^{しき}を緣^{えん}じ、識^{しき}は名^{みやう}色^{しき}を緣^{えん}じ、名^{みやう}色^{しき}は六^{ろく}入^{にふ}

【三十七品】 四念
處、四正勤、四如
意足、五根、五力
七覺分、八聖道分

【四天王】 東方持
國天、南方增上天
西方廣目天、北方
多聞天。
【袈裟】 カチャ
ヤ(Katya)染色
衣と譯す、出家の
正衣。
【沙門】 シユラマ
ナ(Sramana)勤息
と譯す、出家して
佛道を修むる人を
いふ。

【阿鼻地獄】アビ
 ーチ(Avici) 無間
 地獄のこと。
 【阿迦膩吒天】ア
 カニシユタ(Arhat
 i)の最上、色究竟天
 のこと。
 【三十三天】トラ
 ーヤストリンシヤ
 ーフ(Trastvins
 iva) 忉利天のこと
 【夜摩天】ヤマ
 (Yama) 善時と譯
 す、六欲天第三。
 【化樂天】六欲天
 の第五、この天の
 有情は、自ら五欲
 を變化して娛樂す
 るに名く。
 【他化自在天】六
 欲天の最高、他人
 の變化する樂事な
 かりて己が樂とな
 す故に此名あり。
 【大梵天】マハー
 ブラフマン(Maha
 Brahman) 色界十
 八天の一、初禪天
 主大梵天の住所。

を縁じ、六入は觸を縁じ、觸は受を縁じ、受は愛を縁じ、愛は取を縁じ、取は有を縁じ、有は生を縁じ、生は老死憂悲苦惱等を縁すと、爾時大地は六種に震動し、此の如きの音聲は三千大千世界に聞え、復是數を過ぐることに無量無邊、下は阿鼻地獄に至り、上は阿迦膩吒天に至る。時に四天王各各無數の鬼神を將領し、高聲に唱へて言はく、『佛日出づるの時、法雨の露を降らせば、世間の眼目今や始めて開けり。普く大地の一切八部の佛に於て縁有るをして皆開知するを得しめん。』と。

三十三天。夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、乃至大梵天、各各己が統領せる所の處に於て高聲に唱へて言はく、『佛日世に出て甘露を降注せり。世間の眼目今や始めて開けり、有縁の者をして皆悉く開知せしめん。』と。

時に諸の龍王八部、山神樹神藥草神水神風神火神地神城池神屋宅神等、踊躍歡喜して高聲に唱へて言はく、『復八萬四千の諸婆羅門有り、聰明大智なり、佛法の中に於て亦大王に隨つて出家學道せん。復長者有り、須達那と名く、今の須達長者是なり。亦八萬四千人と俱に共に出家せん。復梨師達多、富蘭那兄弟あり、亦八萬四千人と俱に共に出家せん。復二大臣有り、一を梵檀末利と名け、二を須曼那と名く、王の愛重する所なり、亦八萬四千人と俱に、佛法中に於て出家學道せん。轉輪王の寶如を舍彌婆帝と名く、今の毘舍佉の母是れなり。亦八萬四千の婁女と俱に共に出家せん。穠佉太子を天金色と名く。今の提婆婆那長者の子是なり。亦八萬四千人と俱に共に出家せん。彌勒佛の親族婆羅門子を須摩提

【五陰】色、受、想、行、識の五陰

【釋迦牟尼】シヤ一キヤムニ(Shakya Muni) 能仁寂默と譯す。

【五濁】劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

【修多羅】スートラ(Sutra) 契經と譯す。

【毘尼】平ナヤ(Naya) 離行と譯す。律のこと。

【阿毘曇】アビダルマ(Abhidharma) 無比法と譯す、論のこと。

と名く、利根智慧なり。今の壽多羅善賢比丘尼の子是れなり。亦六萬人と俱に、佛法中に於て俱に共に出家せん。穠法王の千子唯一人を留めて用て王位を嗣がしめ、餘の九百九十人、亦八萬四千人と、佛法中に於て俱に共に出家せん。是の如き等の無量億の衆は、世の苦惱五陰の熾然なるを見、皆彌勒佛法中に於て俱に共に出家せん。一

爾時彌勒佛、大慈心を以て諸の大衆に告げて言はく、「汝等今や生天の樂を以ての故にせず、亦復今世の樂の爲の故にせず、我所に來至せるは但涅槃常樂の因縁の爲なり。是諸人等皆佛法中に於て諸の善根を種ゑるは、釋迦牟尼佛五濁世に出でたまひ、種種に呵責して汝が爲に説法したまへばなり。汝を奈何がして殖來の縁もて今我を見るを得しむる無けん。我今是諸人等を攝受するに、或は修多羅毘尼阿毘曇を讀誦し分別し決定するを以てし、他の爲に演説して義味を讚歎し、嫉妬を生ぜず、他人に致へて受持を得しめ、諸の功德を修して我所に來生するあり、或は衣食を以て人に施し持戒智慧あり、此功德を修して我所に來生するあり、或は妓樂幡蓋華香燈明を以て佛を供養し、此功德を修して我所に修行するを以てし、此功德を行じて我所に來生するあり、或は苦惱の衆生の爲に深く慈悲を生じ、身を以て代り受け其をして樂を得しめ、此功德を修して我所に來生するあり、或は持戒忍辱修淨慈心を以てし、此功德を以て我所に來生するあり、或は僧祇四方無礙齋講設會を造り、飯食を供養し、此功德を修して我所に來生するあり、或は持戒多聞、修行禪

【八難】在三塗難、在長壽天難、在北俱盧洲難、盲聾瘡、瘡の難、世智辯聰の難、生佛前後の難。

定無漏智慧を以てし、此功德を以て我所に來生するあり、或は塔を起し舍利を供養し、佛の法身を念じ、此功德を以て我所に來生するあり。或は厄困貧窮孤獨なる有り、他に繫屬して王法を加へられ、刑戮に當るに臨んで、八難業を作し大苦惱を受く、彼等を拔濟して解脱を得しむ、此功德を修して我所に來生するあり。或は恩愛別離朋黨諍訟あつて大苦惱を極むる有り、方便力を以て和合を得しめ、此功德を修して我所に來生するあり。』
是語を説き已りて、釋迦牟尼佛を稱讚したまはく、『善い哉善い哉、能く五濁惡世に於て、是の如き等の百千萬億の諸の惡業生を教化し、善本を修せしめ我所に來生せしめたまへり。』

時に彌勒佛、是の如く三たび釋迦牟尼佛を稱讚し、偈を説いて言はく、

忍辱勇猛の大導師は、能く五濁不善の世に於て

惡業生を教化し成熟し、彼修行もて佛を見るを得しめ

衆生を荷負して大苦を受け、今や常樂無爲の處に入り

彼弟子をして我所に來らしめたまふ、我今汝の爲に四諦を説き

亦三十七菩提、莊嚴涅槃十二緣を説く

汝等宜しく當に無爲を觀じて、空寂本無處に入るべし

此偈を説き已りて、復更に彼時の衆生の苦惡世に於て能く難事を爲せるを讚歎したまふ。『貪欲瞋恚愚癡迷惑短命の人中に、能く持戒を修し諸の功德を作せるは、甚だ希有たり。』

【辟支佛】ブラト
エーカブツダ (Eka
atyakabuddha) 緣
覺のこと。

【四姓】婆羅門、
刹利、毘舍、首陀
羅。

を具し、三十六萬の天子、二十萬の天女は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、天龍八部中に、須陀洹を得し者、辟支佛道の因縁を種るし者、無上道心を發せし者有り、數世た衆多にして稱計すべからず。

爾時彌勒佛、九十六億の大比丘衆、并に穰佉王の八萬四千の大比丘と眷屬圍遶せられ、月天子に諸星宿の從ふが如く、翅頭末城を出で、花林園の重閣講堂に還りたまふ。時に閻浮提の城邑聚落小王長者、及び諸の四姓皆悉く龍花樹下花林園中に來集せり。爾時世尊、重ねて四諦十二因縁を説きたまふに、九十四億人阿羅漢を得、他方の諸天及び八部衆六十四億の恆河沙人、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、不退轉に住せり。第三會には九十二億人阿羅漢を得、三十四億の天龍八部三菩提心を發せり。時に彌勒佛四聖諦深妙の法輪を説き、天人を度し已りて、諸の聲聞弟子天龍八部一切の大衆を將ゐて、城に入り乞食するに、無量の淨居天衆恭敬して佛に従つて翅頭末城に入る。城に入る時に當りて、佛十八種の神足を現じ、身下より水を出し、摩尼珠の如く、化して光臺を成じ十方界を照し、身上より火を出し、須彌山の如く紫金の光を流し、大を現じて空に滿て化して琉璃を成す。大は復小を現じ芥子許の如し、泯然として現せず。十方に於て踊り、十方に於て没し、一切人をして皆佛身の如く、種種神力もて無量に變現せしめ、有縁者をして皆解脱を得しめたまふ。釋提桓因の三十二の輔臣は欲界諸天、梵天王と、色界諸天、并に天子天女と與に天璣路及以天衣を脱して、佛の上に散す。時に諸天衣化して花蓋を成じ、諸天の妓樂鼓せ

ざるに白ら鳴り、佛徳を歌詠し密に天花を雨らし、梅檀雜香もて佛を供養し、街巷道陌には諸の幢幡を堅て、諸の名香を燒くに其煙雲の若し。世尊城に入るの時、大梵天王釋提桓因は、合掌恭敬し偈を以て佛を讚じたてまつる。

正遍知者兩足尊は、天人世間に與等無し

十力世尊甚だ希有にして、無上最勝の良福田なり

其を供養せば天上に生じ、未來に解脫して涅槃に住せん

無上大精進に稽首したてまつる。慈心大導師に稽首したてまつる

東方天王提頭頼吒、南方天王毘樓勒叉、西方天王毘留博叉、北方天王毘沙門王、其眷屬と恭敬合掌し、清淨心を以て世尊を讚歎したてまつる。

三界に比有ること無く、大悲は自ら莊嚴せり

第一義を體解し、衆生の性と

及與諸の法相とを見ず、同じく空寂の性に入る

善住して所有無く、大精進を行ずと雖も

無爲にして足跡無し。我今稽首して

慈心の大導師を禮したてまつる。衆生は佛を見ざれば

長夜に生死を受け、三惡道に墜墮し

及び女人身と作る。今日佛世に興り

【東方天王等】謂ゆる四天王、前出

苦を抜いて安樂を施せば、三惡道已に少く

女人に詔曲無く、皆當に止息を得て

大涅槃を具足すべし。大悲は苦者を濟ひ、

樂を施さんが故に出世したまふ。本菩薩たりし時

常に一切の樂を施し、殺さず他を惱さず

忍心は大地の如し。我今稽首して

忍辱の大導師を禮したてまつる。我今稽首して

慈悲の大丈夫を稽首したてまつる。自ら生死の苦を免れ

能く衆生の厄を抜く、火の蓮花を生ぜるが如く

世間に比有ること無し

爾時、世尊、次第に食を乞ひ、諸の比丘を將ゐて還つて本處に至り、深禪定に入りたまひ、

七日七夜寂然として動かす、彌勒佛の弟子は色天色の如く、普く皆端正にして生老病死を

厭ひ、多聞廣學にして法藏を守護し、禪定を行じ、諸欲を離るるを得たること、鳥の糞を

出づるが如し。

爾時、釋提桓因、欲界の諸天子と、歡喜踊躍して復偈を説いて言はく、

世間の歸する所の大導師は、慧眼妙淨にして十方を見

智力の功德は諸天に勝り、名義目足り衆生を福す

【耆闍崛山】ゲリ
ドラクータ (Tirtha
ニヤニヤ) 鷲峯と譯す
【狼跡山】 雞足山
の異名、摩訶迦葉
人定の山なり。

願くば我等群萌類の爲に、諸弟子を將ゐて彼山に詣り

無惱釋迦師を供養せば、頭陀第一の大弟子たらん

我等應に過佛の、著くる所の袈裟を見るを得遺法を聞き

前身の濁惡劫の、不善惡業を懺悔して清淨を得べし

爾時、彌勒佛、娑婆世界前身の剛強の衆生及び諸の大弟子と、俱に耆闍崛山に往いて山

下に到り已り、安詳として徐歩し狼跡山に登る。山頂に到り已つて足の大指を擧げ山根を

躡むに、是時大地十八相に動く。既に山頂に至つて彌勒手の兩向を以て山を擘くこと、轉

輪王の金城門を開くが如し。爾時梵王、天の香油を持し、摩訶迦葉の頂に灌ぐに、油は

身を灌ぎ已つて大髀椎を撃ち、大法蠶を吹く、摩訶迦葉即ち滅盡定より覺め、衣服を齊整

し偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け長跪合掌し、釋迦牟尼佛の偈迦梨を持て、彌勒に授與

して、是言を作さく、『大師釋迦牟尼多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀は、涅槃に臨みたまふの

時、此法衣を以て我に付囑して、世尊に奉らしむ。』と。

時に諸の大衆各佛に白して言さく、『云何が今日此山頂上に人頭蟲有りて、短小醜

陋にして沙門の服を著けて、能く世尊を禮拜恭敬するや。』時に彌勒佛、諸の大弟子に『此

人を輕んずること莫れ。』と詞したまひ、偈を説いて言はく、

孔雀に好色有るも、鷹鶴鶴に食はれ
白象に無量力あるも、師子の子小なりと雖も

撮つて食ふこと塵土の如し。大龍身無量なるも
金翅鳥に縛せられ、人身長大に

肥白端正の好ありと雖も、七寶の瓶に糞を盛る

汚穢堪ふべからず、此人短小と雖も

智慧練金の如く、煩惱の習久しく盡き

生死の苦餘すところ無し、法を護るの故に此に住し

常に頭陀事を行じ、天人中の最勝なり

若は行にも與等無し、牟尼兩足尊は

遣して我所に來至せしめたまふ、汝等當に一心に

合掌して恭敬禮すべし

是偈を説き已りて諸比丘に告げたまはく、『釋迦牟尼世尊は、五濁惡世に於て衆生を教化

したまふも、千二百五十の弟子中、頭陀第一身體金色に、金色の姉を捨てて出家學道し、

晝夜精進して頭然を救ふが如し。貧苦下賤の衆生を慈愍し、恆に福もて之を度し法の爲に

世に住す。摩訶迦葉とは此人是なり。』此語を説き已りたまふに、一切の大衆悉く爲に禮

を作せり。

爾時彌勒、釋迦牟尼佛の僧伽梨を持し、右手を覆ふに遍からず、纔に兩指を掩ふ、復左

手を覆ふに亦兩指を掩ふのみ。諸人怪しみ歎ずらく、『先佛の卑小なるは、皆衆生が貪濁憍

慢の致す所に由るのみ。』と。摩訶迦葉に告げて言はく、『汝神足を現じて并に過去佛所有の經法を説くべし。』と。

【葶藶子】 いぬなづな。

【十二部經】 長行、重頌、授記、孤起、無問自說、因緣、譬喻、本事、本生、方廣、未曾有、論議。

【般涅槃】 パリニルツーナ (Parinirvana) 闍波と譯す。

爾時摩訶迦葉、身を虚空に踊らし十八變を作す。或は大身を現じて虚空中に満ち、大は復小を現ずること葶藶子の如し。小は復大を現ず、身上より水を出し、身下より火を出し、地を履むこと水の如く、水を履むこと地の如く、空中に坐臥するも身陷墜せず。東に踊り西に没し、西に踊つて東に没す。南に踊つて北に没し、北に踊つて南に没し、邊に踊つて中に没し、中に踊つて邊に没し、上に踊り下に没し、下に踊つて上に没し、虚空の中に於て琉璃窟を化作し、佛の神力を承け梵音聲を以て、釋迦牟尼佛の十二部經を説く。大衆聞き已りて未曾有なりと怪しみ、八十億の人、遠塵離垢し、諸法の中に於て諸法を受けず阿羅漢を得たり。無數の天人は菩提心を發し、佛を遶ること三師して還つて空より下り、佛の爲に禮を作し、有爲法は皆悉く無常なるを説き、佛を辭して退き、耆闍崛山の木所住處に還り、身上より火を出して般涅槃に入る。身舍利を收めて山頂に塔を起つ。彌勒佛歎じて言はく、『大迦葉比丘は是れ釋迦牟尼佛が大衆の中に於て、常に讚歎したまひし所、頭陀第一にして禪定解脱三昧に通達す。是人大神力有りと雖も而も高心無く、能く衆生をして大歡喜を得しめ、常に下賤貧苦の衆生を愍む。一彌勒佛大迦葉の骨身を歎じて言はく、『善哉、大神德釋師子大弟子大迦葉は、彼惡世に於て能く其心を修せり。』と。

爾時摩訶迦葉の骨身、即ち偈を説いて言はく、

【閑維】 ジャーベ
ータ (Jherita) 燃
燒と譯す、死骸を
火葬すること。

【三】 大衆歡喜奉
行分。

頭陀は是れ寶藏、持戒は甘露たり
能く頭陀を行ずる者は、必ず不死地に至り
持戒は生天、及び涅槃の樂を得ん
此偈を説き已りて、琉璃水の如く還つて塔中に入る。爾時説法の處、廣さ八十由旬長さ
百由旬なり。其中の人衆若は坐若は立、若は近若は遠、各佛の其前に在り、獨り爲に説
法したまふを見る。

彌勒佛、世に住したまふこと六萬億歲、衆生を憐愍するの故に法眼を得しめたまふ。滅度
の後、諸天世人佛身を閑維す、時に轉輪王舍利を收取し、四天下に於て各八萬四千の塔
を起つ、正法世に住すること六萬歲、像法二萬歲なり。汝等宜しく勤めて精進を加へ、清
淨心を發し、諸の善業を起すべし。世間の燈明彌勒佛身を見ることを得んこと必ず疑無き
なり。

佛、語を説き已りたまふに、尊者舍利弗、尊者阿難、即ち座より起ちて佛の爲に禮を作し、
胡跪合掌して佛に白して言さく、「世尊、當に何んが斯經を名け、云何が之を奉持すべき。」
佛、阿難に告げたまはく、「汝好く憶持して、善く天人の爲に分別し演説し、最後斷法人を
作す莫れ。此法の要は、一切衆生斷五逆種淨除業障報障、煩惱障、修習慈心與彌勒共行と名
く。是の如く受持せよ。亦一切衆生得聞彌勒佛名必免五濁世不墮惡道經と名く。是の如く
受持せよ。亦破惡口業心如蓮花定見彌勒佛經と名く。是の如く受持せよ。亦慈心不殺不食

肉經と名く。是の如く受持せよ。亦釋迦牟尼佛以衣爲信經と名く。是の如く受持せよ。亦若く有聞佛名決定得免八難經と名く。是の如く受持せよ。亦彌勒成佛經と名く。是の如く受持せよ。一

【三種菩提】三菩提即ち正等覺のこと。

佛、舍利弗に告げたまはく、「佛滅度後の比丘比丘尼優婆塞優婆夷、天龍八部鬼神等、此經を聞くを得、受持讀誦禮拜供養し、法師を恭敬せば、一切の業障、報障、煩惱障を破し、彌勒及び賢劫の千佛を見るを得、三種菩提は願に隨つて成就し、女人身を受けず、正見に出家して大解脱を得ん。」

是語を説き已りたまふに、時に諸の大衆、佛の所説を聞き、皆大いに歡喜し佛を禮して退きぬ。

佛說彌勒大成佛經 終

勝鬘師子吼一乘大方便方廣經

經 典 部	第 二 卷
-------------	-------------

勝鬘師子吼一乘大方廣經

宋中印度三藏求那跋陀羅譯

如來眞實義功德章第一

【如來眞實義功德章】本經の序説、先づ如來の徳を歎じその攝護を請ふ【一】序分。【舍衛】 憍薩羅國の都城。【祇樹給孤獨園】 舍衛城の南凡そ一里の處。【波斯匿】 プラセーナジット (Pense naiti) 和悦勝軍等と翻ず、舍衛國の王。【勝鬘】 梵にシムリーマーラー (Srimara) といふ、波斯匿王の女にして阿踰闍王友稱の妃なり。

(二)かく、**是の如く我聞けり。**一時、佛舍衛國の祇樹給孤獨園に住したまふ。時に波斯匿王、及び末利夫人、法を信すること未だ久しからず、共に相謂ひて言はく、『勝鬘夫人は是れ我女、聰慧利根通敏にして悟り易し、若し佛を見たてまつらば、必ず速に法を解して、心疑無きことを得ん、宜しく時に信を遣はして其道意を發すべし。』夫人白して言さく、『今正に是れ時なり。』と。王及び夫人、勝鬘に書を與へ、略して如來の無量の功徳を讃じ、即ち内人の旃提羅と名くるを遣はす。使人書を奉じて阿踰闍國に至り、其宮内に入り、敬みて勝鬘に授けたてまつる。勝鬘、書を得て歡喜し、頂受し、讀誦し、受持し、希有の心を生じて旃提羅に向ひて、偈を説いて言はく、

我聞く佛の音聲は、世に未曾有なる所なりと
言ふ所眞實ならば、應當に供養を修すべし
仰いで惟みれば佛世尊は、普く世間の爲に出でたまふ

【二】以下正宗分正しく如來眞實第一義功德を歎ず。【如來の妙色身等】是れ應身を歎ずるなり。【如來の色等】この一句は報身を歎ず。【智慧も亦等】この一句は智慧身を歎ず。【一切の法等】この一句は如如身を歎ずるなり。【心の過惡等】次に解脫を歎ず、心の過惡とは意地の煩惱なり、身の四種とは身に生老病死の四種の縛あるをいふ、降伏とはこれ等諸患を悉く

亦應に哀愍を垂れて、必ず我をして見ることを得しめたまふべし

即ち此念を生ずる時、佛空中に於て現じて

普く淨光明を放ち、無比身を顯示したまふ

勝鬘及び眷屬、頭面もて足を接して禮し

咸く清淨の心を以て、佛の實の功德を歎じたてまつる

如來の妙色身は、世間に與に等しきもの無し

無比にして不思議なり、是故に今敬禮したてまつる

如來の色は無盡なり、智慧も亦復然なり

一切の法は常住なり、此故に我歸依したてまつる

心の過惡と、及び身の四種とを降伏して

已に難伏地に到る、是故に法王を禮したてまつる

一切の爾焰の、智慧身自在にして

一切の法を攝持したまふを知る、是故に今敬禮したてまつる

過稱量を敬禮し、無譬類を敬禮し

無邊法を敬禮し、難思議を敬禮したてまつる

哀愍して我を覆護し、法種をして増長せしめ

此世及び後生、願くば佛常に攝受したまへ

【斷盡するなり。】

【難伏地】佛果。

【一切の爾焰の等】

次に般若を歎ず、

爾焰は智母と譯す

有空の二慧の依て

生ずる本の慧一切

の爾焰とは一切智

を歎ず、智慧身自

在とは無礙智を歎

じ、諸法の中に方

便を假らずして任

運に能く知るを以

て自在なり一切の

法等は清淨智を歎

性も本来心にある

が故に稱持といふ

【哀愍して】以下

如来の擁護を請ふ

【三】佛攝受を許

し爲に授記するを

明す。

【十受章】修菩薩

行としての持戒に

就て、勝鬘の三聚

淨戒を堅持すべき

を佛に誓ふを明す

我久しく汝を安立す、前世已に閉覺せり

今復汝を攝受す、未來の生も亦然なり

我已に功德を作しき、現在及び餘世

是の如きの衆の善本有り、唯願くは攝受見れんことを

爾時、勝鬘及び諸の眷屬、頭面をもて、佛を禮したてまつる。佛、衆中に於て、即ち

爲に受記したまはく、『汝、如来の眞實の功德を歎ず、此善根を以て、當に無量阿僧祇劫に

於て、天人の中に、自在王と爲り、一切の生處に常に我を見ることを得て、現前に讚歎

せんこと、今の如く異なること無かるべし。當に復、無量阿僧祇劫の佛を供養し、二萬

阿僧祇劫を過ぐべし、當に作佛することを得て、普光如来應正遍知と號す。彼佛の國土に

は、諸の惡趣、老病衰憊、不適應の苦しみ無く、亦不善惡業道の名も無し。彼國の衆生

は、色力、壽命、五欲の衆具、皆悉く快樂にして、他化自在の諸天に勝り、彼諸の衆

生は、純一大乘にして、有ゆる善根を修習する衆生、皆彼に集まるべし。勝鬘夫人、受

記を得る時、無量の衆生、諸天、及び人、彼國に生れんと願ふ。世尊悉く皆當に往生す

べきを記すと。

十受章第二

爾時、勝鬘、受記を聞き已りて、恭敬して立ち十大受を受く。『世尊、我今日より乃し善

【十大受】此中前五は攝律儀戒、中四は攝衆生戒、後一は攝善法戒なり

【諸の尊長・慢心】以下慢、慧、疑、憍の四惡を防ぐんため、四戒を説く

【自ら己れが爲等】以下四戒は順次に財を以て、四攝法を以て衆生を攝し衆生現世の苦果を拔き、衆生の苦因を斷ずるなり

【不愛染心】四攝もて衆生を攝するに多く愛心を起す故今能攝所攝皆空なることを知らしむるなり

【無厭足心】今時より後際まで四攝を行じて厭足なし【無罣礙心】四攝を行ずる時に怨親平等なり

【力・勢力と道力】彼彼の處所作惡一に非ざる故に

【轉法輪】知苦斷集證滅修道なり

提に至るまで、所受の戒に於て犯心を起さず。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、諸の尊長に於て慢心を起さず。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、諸の衆生に於て悲心不起さず。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、他の身色及び外の衆具に於て疾心不起さず。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、内外の法に於て慳心を起さず。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、自ら己れが爲に財物を受畜せず、凡て所受有れば、悉く貧苦の衆生を成熟せしむることをせん。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、自ら己れが爲に四攝法を行ぜず、一切衆生の爲の故に、不愛染心、無厭足心、無罣礙心を以て衆生を攝受せん。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、若し孤獨、幽繫、疾病、種種の厄難、困苦の衆生を見ては、終に暫くも捨てず、必ず安穩ならしめんと欲し、義を以て饒益し、衆苦を脱せしめ、然る後に乃ち捨てせん。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、若し捕と養と衆の惡律儀と及び諸の犯戒とを見ては、終に棄捨てずして、我、力を得ん時、彼彼の處に於て、此衆生を見ては、應に折伏すべきものは之を折伏し、攝受すべき者は之を攝受せん。何を以ての故に。折伏攝受を以ての故に、法をして久住せしむればなり。法の久住とは、天人充滿し、惡道減少して、能く如來所轉の法輪に於て、而も隨轉することを得て、是利を見るが故に、救攝して捨てず。世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、正法を攝受して終に忘失せず。何を以ての故に。法を忘失するものは則ち大乘を忘る、大乘を忘るる者は、則ち波羅蜜を忘る、波羅蜜を忘るる者は、則ち大乘を欲せず、若し菩薩、

又佛已に前人を轉化すれば、前人これに依つて修行して四諦を證知するを隨轉といふ。【法を忘失す等】乘は實相の理に由つて成ずるに、既に實相を忘失すれば、則ち大乘を忘失するなり。【決定せざるもの】大乘に於て信なし既に大乘に於て信なければ則ち實相正法の理に於て欲樂心なきなり。【所樂に隨ひて等】既に實相の理に於て欲樂心なれば則ち虛妄の所樂に隨つて三有に入る永く超凡の理なし。【三願章】佛前に求正法智、説智護法の三願を立つるを明す。【此實願以下】第一に求正法智願、正法智とは眞如を證得する智慧。【我れ正法智以下】第二説智願。如實

大乘を決定せざる者は、則ち正法を攝受することを得ること能はず、所樂に隨ひて入らんと欲するに、永く凡夫地を越ゆるに堪忍せず。我、是の如きの無量の太過を見、又未來に正法を攝受する菩薩摩訶薩の無量の福利を見むが故に、此大受を受く。法主世尊、現に我爲に證したまへ。唯佛世尊は、現前に證知したまふとも而も諸の衆生は、善根微薄にして、或は疑網を起さん。十大受は極めて度し難きを以ての故に、彼或は長夜に非義をもて饒益して安樂を得ず、彼を安んぜんが爲の故に、今佛前に於て誠實の誓を説く、我此十大受を受けて説の如く行ぜば、此誓を以ての故に、大衆の中に於て當に天花を雨らし、天の妙音を出すべし。是語を説く時、虚空の中に於て、衆の天花を雨らし、妙聲を出して言はく、『是の如く是の如し、汝が所説の如き、眞實にして異なること無し。』

彼妙花を見、及び音聲を聞いて、一切の衆會疑惑悉く除いて、喜踊すること無量なり。而して發願して言はく、『恆に勝鬘と與に、常に共に俱に會して其所行を同さうせん。世尊悉く一切の大衆、其所願の如しと記したまふ。』

三願章第三

爾時勝鬘、復、佛前に於て三大願を發して是言を作さく、『此實願を以て、無量無邊の衆生を安隱にせん。此善根を以て、一切生に於て正法智を得ん、是を第一の大願と名く。我、正法智を得已りて、無厭心を以て衆生の爲に説かん。是を第二の大願と名く。我攝受正法

の悟を得、還來して如實に衆生のために説くに乘り。【我れ攝受正法以下】第三護法願。【攝受章】攝受正法に就ての細説の。大願大義を明す。【調伏の大願等】實相の理を證すれば煩惱清淨にして虛妄を離るをいふ【一切皆等】七地以前は隨事立願なるも今八地に入れば、一心の現前に出て前願を具得するを得るなり。【眞に大願】若し正法を悟解すれば證理虚しからず【智慧方便】實權の二智、又實智證理を甚深、方便巧説を微妙となす。【如來の智徳等】攝受正法の智徳無邊なるに、如來この正法を證したまへば内智外辯も亦邊際なきなり。【劫の初めて等】

に於て身命財を捨し、正法を護持せん、是を第三の大願と名く。爾時世尊、即ち勝鬘に記したまはく、『三大誓願は一切の色の悉く空界に入るが如く、是の如きの菩薩恆沙の諸願は、皆悉く此三大願の中に入る、此三願は眞實にして廣大なり。』

攝受章第四

爾時勝鬘、佛に白して言さく、『我今當に復佛の威神を承けて、調伏の大願の眞實にして異なること無きを説かん。佛、勝鬘に告げたまはく、『恣に汝に説くことを聽す。』勝鬘、佛に白さく、『菩薩の有ゆる恆沙の諸願は、一切皆一大願中に入る、謂ゆる攝受正法なり。攝受正法は眞に大願と爲す。佛、勝鬘を讀じたまはく、『善い哉善い哉、智慧方便、甚深にして微妙なり。汝已に長夜に諸の善本を殖う、來世の衆生、久しく善根を種ゑたる者は、乃ち能く汝が所説を解らん。汝が所説の攝受正法は、皆是過去、未來、現在の諸佛の、已に説き、今説き、當に説くべきなり。我、今無上菩提を得て、亦常に此攝受正法を説く。是の如く、我、攝受正法の有ゆる功徳は邊際を得ずと説く、如來の智慧辯才も亦邊際無し。何を以ての故に。是攝受正法は、大功徳有り、大利益有ればなり。』

勝鬘、佛に白さく、『我、當に佛の神力を承けて、更に復攝受正法廣大の義を演説すべし。』佛の言はく、『便ち説け。』勝鬘、佛に白さく、『攝受正法廣大の義とは、即ち是れ無量なり、一切の佛法を得て、八萬四千の法門を攝するなり。譬へば、劫の初めて成ずる時、

攝受正法の廣大を譬ふ。

【四百億の種種の類洲】三千界中に百億の四天下あり地形各異る故種種といふ。

【大海等】大海は菩薩、諸山は緣覺草木は聲聞、衆生は凡夫に喩ふ。

【彼大地に踰えたり】地は能持、無心の負擔にして劫壞すれば能はざるも、菩薩は大悲の故に有心の能負又一切時に於て常に能く荷負す。

【法母】菩薩は能く四乘善根を生ず【無價等】無價は菩薩に、上價は緣覺に、中價は聲聞に、下價は緣覺に喩ふ。

普く大雲を興して、衆色の雨、及び種種の寶を雨らすが如し。是の如く攝受正法も、無量の福報及び無量の善根の雨を雨らす。世尊、又劫の初めて成ずる時、大水の聚まること有りて、三千大千世界藏と、及び四百億の種種の類洲とを生ずるが如し。是の如く攝受正法も、大乘の無量界藏と、一切菩薩の神通の力と、一切世間の安隱快樂と、一切世間の如意自在と、及び出世間の安樂とを生ず。劫成にも、乃至天人にも、本より未だ得ざる所、皆中に於て出づ。又大地の四つの重擔を持するが如し、何等をか四と爲す、一には大海、二には諸山、三には草木、四には衆生なり。是の如く、攝受正法の善男子善女人は、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能なること、彼大地に踰えたり。何等をか四と爲す、謂く、善知識を離れたる無聞非法の衆生には、人天の善根を以て之を成熟し、聲聞を求むる者には、聲聞乘を授け、緣覺を求むる者には、緣覺乘を授け、大乘を求むる者には、授くるに大乘を以てす、是を攝受正法の善男子善女人は、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能なりと名く。世尊、是の如く攝受正法の善男子善女人は、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能にして、普く衆生の爲に不請の友と作り、大悲もて衆生を安慰し、哀愍し、世の法母と爲る。又大地に四種の寶藏有るが如し、何等をか四と爲す、一には無價、二には上價、三には中價、四には下價なり、是を大地の四種の寶藏と名く。是の如く攝受正法の善男子善女人も、大地を建立して、衆生の四種の最上大寶を得。何等をか四と爲す、攝受正法の善男子善女人は、無聞非法の衆生には、人天の功德善

【攝受の正法と等】

攝受せらるる正法と正法を攝受するとなり、位に約せば地前は未だ理を證せざる故境智二なるも、地上は理と相應し縁觀俱寂心法一體なり。

【異の正法無く】

攝受即正法を明す即ち智境不二なり【異の攝受正法無し】正法の智に異ならざるを明す。

【攝受…波羅蜜】

即是故に無異、心を離れて一切行なく、一切行は六波羅蜜に具せらるる故、波羅蜜即ち正法なり。

【大欲心】

諸善法は皆修せんとし、諸衆生は皆度せんと欲するなり。【不外向心】心外境を緣ぜざるなり【第一正念】生空法空を得、常に空理に自らを安んずるなり。

根を以て之を授與し、聲聞を求むる者には聲聞乘を授け、緣覺を求むる者には緣覺乘を授け、大乘を求むる者には、授くるに大乘を以てす。是の如く、大寶を得る衆生とは、皆攝受正法の善男子善女人は、此奇特希有の功徳を得るに由る。世尊、大寶藏とは即ち是れ攝受正法なり。世尊攝受の正法と攝受正法とは、異の正法無く、異の攝受正法無し、正法とは即ち是れ攝受正法なり。世尊、異の波羅蜜無く、異の攝受正法無し、攝受正法は即ち是れ波羅蜜なり。何を何ての故に。攝受正法の善男子善女人は、應に施を以て成熟すべき者には、施を以て成熟し、乃至身の支節を捨し、將に彼意を護して之を成熟せんとす、彼成熟する所の衆生、正法を建立す、是を檀波羅蜜と名く。應に戒を以て成熟すべき者には、六根を守護し、身口意業を淨め、乃至四威儀を正しくするを以て、將に彼意を護して之を成熟せんとす、彼成熟する所の衆生、正法を建立す、是を尸波羅蜜と名く。應に忍を以て成熟すべき者には、若し彼衆生、罵詈し、毀辱し、誹謗し、恐怖せんに、無恚心と、饒益心と、第一忍力と、乃至顔色無變とを以て、將に彼意を護して之を成熟せんとす、彼成熟する所の衆生、正法を建立す、是を羼提波羅蜜と名く。應に精進を以て成熟すべき者には、彼衆生に於て憍心を起さず、大欲心を生ぜん、第一精進乃至若し四威儀もて、將に彼意を護して之を成熟せんとす、彼成熟する所の衆生、正法を建立す。是を毘梨耶波羅蜜と名く。應に禪を以て成熟すべき者には、彼衆生に於て、不亂心、不外向心、第一正念、乃至久時所作、久時所説を以て、終に忘失せず、將に彼意を護

【一切の論】内論等の五明、工巧とは五明の第一門の別出。
 【明處】上の五は明智の生ずる處に名く乃至種種の等は始め内論より終り工巧論に至る意。
 【攝受正法】捨す攝受の菩薩佛果の常身命財を得ん爲に無常の身命財を捨するを身。
 【生死と後際と等】生死と涅槃と理に於て等しきなり。
 【不壞常住】無常の身を捨せば破壞すべからず、故に常住なり。
 【不可思議功德】道は三乘十地の出づるが故に人の能く思議するなし。
 【如來の法身】功徳法を以て身を成ずる功徳身なり。
 【無邊と等】生死の命は分限あるも常命これに異るを無邊といひ、無邊

して、之を成熟せんとす、彼成熟する所の衆生、正法を建立す、是を禪波羅蜜と名く。應に智慧を以て成熟すべき者には、彼諸の衆生、一切義を問はば、無畏心を以て、爲に一切の論と、一切の工巧とを演説して、明處と乃至種種の工巧の諸事とを究竟して、將に彼意を護して之を成熟せんとす、彼成熟する所の衆生、正法を建立す、是を般若波羅蜜と名く。是故に世尊、異の波羅蜜無く、異の攝受正法無し、攝受正法は即ち是れ波羅蜜なり。」

『世尊、我、今佛の威神を承けて更に大義を説かん。』佛の言はく、『便ち説け。』勝鬘、佛に白さく、『攝受の正法と攝受正法とは、異の攝受の正法無し。異の攝受正法無しとは、攝受正法の善男子善女人は、即ち是れ攝受正法なり。何を以ての故に。若し攝受正法の善男子善女人は、攝受正法の爲に三種の分を捨す。何等をか三と爲す、謂く、身と命と財となり。善男子善女人、身を捨するとは、生死と後際と等しく老病死を離れて、不壞常住と、無有變易と不可思議功德と、如來の法身とを得るなり。命を捨するとは、生死と後際と、等しく畢竟して死を離れて、無邊と、常住と、不可思議功德とを得て、一切甚深の佛法に通達するなり。財を捨するとは、生死と後際と、等しく一切衆生に共せざる、無盡、無減、畢竟常住不可思議の具足功德を得ると、一切衆生の殊勝の供養を得るとなり。世尊、是の如く三分を捨する善男子善女人は、正法を攝受して、常に一切諸佛の爲に記せられ、一切衆生の瞻仰する所なり。』

の故に常住なり。
【畢竟常住】十力
四無畏等を常財と
いふ。

【一切衆生の殊勝
等】天人奉養等の
他供財を明す。

【法明に入る】攝
受法の故に諸菩薩
衆中に入るをい
ふ。

【二】攝受正法の
隨喜讚歎を用す。

【餘の一の善法】
攝受正法の外の餘
の凡夫二乗有所得
の善。

世尊、又善男子善女人の正法を攝受する者は、法の滅せんと欲する時、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、朋黨諍訟し、破壞離散せんに、不詔曲、不欺誑、不幻偽を以て、正法を愛樂し、正法を攝受して法朋の中に入れん。法朋に入る者は、必ず諸佛の授記する所と爲らん。世尊、我、攝受正法の、是の如きの大力有るを見る、佛は實眼、實智たり、法の根本たり、通達法爲り、正法の依爲り、亦悉く知見したまふ。
爾時世尊、勝鬘所説の攝受正法の大精進力に於て、隨喜の心を起したまふ。『如の如し勝鬘、汝の所説の如し、攝受正法の大精進力は、大力士の、少しく身分に觸るるも大苦痛を生ずるが如し。是の如く勝鬘、少しき攝受正法は、魔をして苦惱せしむ。我餘の一の善法も、魔をして憂苦せしむること、少しき攝受正法の如くなるを見ず。又牛王の形色無比にして、一切の牛に勝るるが如し。是の如く、大乘の少しき攝受正法は、一切の、二乗の善根に勝れたり、廣大なるを以ての故に。又須彌山王の端嚴殊特にして、衆山に勝るるが如し、是の如く大乘に身命財を捨して以て心を攝取し、正法を攝受するは、身命財を捨せずして、初めて大乘に住する、一切の善根に勝れたり、何に況んや二乗をや、廣大なるを以ての故に。是故に勝鬘、當に攝受正法を以て衆生に開示し、衆生を教化し、衆生を建立すべし。是の如く勝鬘、攝受正法は、是の如きの大利、是の如きの大福、是の如きの大果あり。勝鬘、我阿僧祇阿僧祇劫に於て、攝受正法の功德義利を説くとも邊際を得ず。是故に攝受正法には無量無邊の功德有り。』

一乘章第五

【一乘章】攝受正法の大乗にして畢竟二乗を超越し、又一乗の故に遂に二乗の會通し、如来究竟法身の開顯なることを明す。

【攝受正法】摩訶衍證悟離邪を攝受正法と名くるにこの正法は即ち諸佛大人の所乗、故に大乘と體一なり大乘人に住して等大乘人の大乘法に住して大乘法を了悟するなり。

【二乗の外に別の小乘なきなり】

【正法住と正法滅】時により人によりて聖教に住滅あり

【大乘の爲の故に等】この六處は一般に小乗に就いていふも、意は大乗にあるなり。ここに會小入大を明す即ち大乘の法を離れて小乘法なく、大乘菩薩を離れて

佛、勝鬘に告げたまはく、「汝今、更に、一切諸佛所説の攝受正法を説け。」勝鬘、佛に白さく、「善い哉世尊、唯然り。」教を受けて、即ち佛に白して言さく、「世尊、攝受正法とは、是れ摩訶衍なり。何を以ての故に。摩訶衍とは、一切の聲聞、緣覺、世間、世出間の善法を出生す。世尊、阿耨大池の八大河を出すが如く、是の如く、摩訶衍は、一切の聲聞、緣覺、世間、世出間の善法を生ず。世尊、又一切の種子は、皆地に依りて生長することを得るが如く、是の如く一切の聲聞、緣覺、世間、世出間の善法は、大乘に依りて增長することを得。是故に世尊、大乘に住して、大乘を攝受するは、即ち是れ一乘に住して、二乗と一切の世間、世出間の善法とを、攝受するなり。世尊の六處を説きたまふが如し。何等をか六と爲す。謂く、正法住と、正法滅と、波羅提木叉と、比尼と、出家と、受具足となり。大乘の爲の故に、此六處を説く。何を以ての故に。正法住とは、大乘の爲の故に説く、大乘住すれば、即ち正法住するなり。正法滅とは、大乘の爲の故に説く、大乘滅すれば、即ち正法滅するなり。波羅提木叉と比尼と、此二法は、義は一にして名は異なり、比尼とは即ち大乘の學なり。何を以ての故に。佛に依りて出家して具足を受くるを以てなり。是故に、大乘の威儀戒は是比尼なり。是れ出家なり、是れ受具足なりと説く、是故に、阿羅漢は出家と受具足と無し。何を以ての故に。阿羅漢は、如來に依りて出家して具足を

【別に小乘羅漢なし】
【是故に阿羅漢等】
大乘の威儀戒是れ
毘尼、是れ出家受
具足の故。

【佛に歸依す等】
以下二乗の果に就
て大乘に會す、二
乗の果は其徳未だ
圓かならざるを以
て歸依あり、煩惱
未だ斷ぜざる故に
恐怖あるなり。

【一切無行】 羅漢
に三界内治道の智
あるも三界外治道
の智なきを無行と
いふ、故に分段生
死なきも未だ變易
生死盡きず、即ち
生死の苦あるを怖
畏す。

【有餘の生法盡き
ず】我生已盡なる
も智究竟せざる故
に變易生死猶存す
【有餘の梵行等】
分盡くするも變易
盡きず因果雜る故
に純ならず。

【一切の功徳等】
以下無量、不可思
議、第一清淨の四

議、第一清淨の四

受くるが故に。阿羅漢は佛に歸依す、阿羅漢は恐怖すること有り。何を以ての故に。阿羅漢は、一切に於て行無く、怖畏の想に住すること、人の劍を執りて、來りて己を害せんと欲するが如し。是故に、阿羅漢には究竟の樂無し。何を以ての故に。世尊は依にして不求依なり、衆生、依無ければ彼彼に恐怖す、恐怖を以ての故に則ち歸依を求むるが如し。阿羅漢の如きは怖畏有り、怖畏を以ての故に如來に依る。世尊、阿羅漢と辟支佛とは怖畏有り、是故に、阿羅漢と辟支佛とは、有餘の生法盡きず、故に生有り、有餘の梵行成ぜざるが故に純ならず、事、究竟せざるが故に當に所作有るべし、彼を度せざるが故に當に所斷有るべし、斷ぜざるを以ての故に、涅槃界を去ること遠し。何を以ての故に。唯、如來應正等覺のみ有りて般涅槃を得たまふ、一切の功徳を成就するが故に。阿羅漢と辟支佛とは一切の功徳を成就せず、涅槃を得ると言ふものは、是佛の方便なり。唯、如來のみ有りて般涅槃を得たまふ、不可思議の功徳を成就するが故に。阿羅漢と辟支佛とは思議の功徳を成就す、涅槃を成就す、涅槃を得ると言ふものは、是佛の方便なり。唯、如來のみ有りて般涅槃を得たまふ、不可思議の功徳を成就するが故に。阿羅漢と辟支佛とは思議の功徳を成就す、涅槃を得ると言ふとは、是れ佛の方便なり。唯、如來のみ有りて般涅槃を得たまふ、一切の斷ずべき所の過は、皆悉く斷滅して、第一清淨を成就す。阿羅漢と辟支佛とは、餘過有り、第一清淨に非ず、涅槃を得ると言ふとは、是れ佛の方便なり。唯如來のみ有りて般涅槃を得たまふ、一切衆生の瞻仰する所と爲りて、阿羅漢、辟支佛、菩薩の境界を出過す。是

功徳成就を擧ぐ。
 【蘇息處】 灰身滅智永寂の處。
 【分段の死】 身に大小、壽に長短あるを分段といふ。
 【乃至無上菩提等】 生死の分齊は佛時に至つて盡く。
 【我生已盡】 不受後有これ阿羅漢の四智なり。
 【有餘の果證】 分段盡くる所に名く【七種の學人】 三果四向をいふ。即ち預流、一來、不還の向果と阿羅漢向となり。
 【阿羅漢】 所斷煩惱是れ分段因を斷ずるのみにして未だ變易因は斷ぜざるなり。
 【利那心と等】 利那は心王、心王一念境を緣ずれば、煩惱の法數は心に隨つて生じて相應せざるが故に利那相應といふ、是れ心所なり。
 【心不相應は等】

故に、阿羅漢と辟支佛とは、涅槃界を去ること遠し、阿羅漢、辟支佛の、觀察し、解脱し、四智究竟して、蘇息處を得ると言ふは、亦是れ如來の方便、有餘不了義の説なり。何を以ての故に。二種の死有り、何等をか二と爲す、謂く、分段の死と、不思議變易の死となり。分段の死とは、謂く、虚偽の衆生なり。不思議變易の死とは、謂く、阿羅漢、辟支佛、大力の菩薩の意生身と、乃至無上菩提を究竟するとなり。二種の死の中、分段の死を以ての故に、阿羅漢と辟支佛の智を、我生已盡と説きたまふ。有餘の果證を得るが故に、梵行已立と説きたまふ、凡夫人天の辨ずる能はざる所、七種の學人は、先より未だ作さざる所、虚有を受くること能はざるが故に、不受後有と説きたまふ。一切の煩惱を盡すに非ず、亦一切の受生を盡すに非ず、故に不受後有と説きたまふ。何を以ての故に。煩惱有り、是れ阿羅漢、辟支佛の斷ずる能はざる所なり。煩惱に二種有り。何等をか二と爲す。謂く、住地の煩惱と、及び起煩惱となり。住地に四種有り、何等をか四と爲す。謂く、見一處住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地なり。此四種の住地は、一切の起煩惱を生ず、起とは、利那心と利那相應となり。世尊、心不相應は、無始の無明住地なり。世尊此四住地の力は、一切の上の煩惱の依種たるも、無明住地に比するに、算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。世尊、是の如く、無明住地の力は、有愛と數との四住地に於て、無明住地は、其力最も大なり。譬へば惡魔波旬の、他化自在天に於て、色力、壽命、眷屬、衆具の自在殊勝な

無明住地とは妄想の心體を指し、別に心外に法あつて心と相應するにあらざるを不相應とも初に、而も無明最も初にあるを以て無始なり。

【四住地の力】四住能く現起を生ずる故に力と説く。

【有愛と數との】有愛は第四住地、前三は皆有愛の品數なるをいふ。

【無明住地を縁とし】妄識心眞法を覆ふ故に修起後治するを縁、三乘聖人は無漏の解あつて能く變易を感ずるを因といふ。

【彼三種の意生身等】是れ三界外の三乘、又意生身は無漏業の因、無明の縁によりて受くるところの身の故に無漏業の生、三地三種身に對して縁となるを縁となし、有餘の道と名く、一切の功徳には非ず、有餘の解脱と名く、一切の功徳を離れたる解脱には非ず、有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道と名く、是を少分の涅槃を得ると名く。少分の涅槃を得たるとは、涅槃界に

るが如く、是の如く無明住地の力は、有愛と數との四住地に於て、其力、最勝なり。恆沙に等しき數の上の煩惱の依たり、亦四種の煩惱をして久しく住せしむ。阿羅漢、辟支佛智の斷ずる能はざる所にして、唯如來の菩提智のみ能く斷ずる所なり、是の如く世尊、無明住地は最も大力と爲す。世尊、又取を縁とし、有漏の業を因として、三有を生ずるが如く、是の如く無明住地を縁とし、無漏の業を因として、阿羅漢と、辟支佛と、大力の菩薩との三種の意生身を生ず。此三地と、彼三種の意生身の生と、及び無漏業の生とは、無明住地に依りて、縁有り、縁無きに非ず。是故に、三種の意生と及び無漏の業とは、無明住地を縁とするなり。世尊、是の如く、有愛住地と數との四住地は、無明住地の業と同じからず、無明住地は、異にして四住地を離れたり。佛地の所斷なり。佛菩提智の所斷なり、何を以ての故に。阿羅漢、辟支佛は、四種の住地を斷ず、無漏盡きされば自在力を得ず、亦證を作さざれば、無漏盡きざるは、即ち是れ無明住地なり。世尊、阿羅漢と、辟支佛と、最後の身の菩薩とは、無明住地の爲に覆障せらるるが故に、彼の法に於て不知不覺なり。知見せざるを以ての故に、應に斷すべき所の者を斷せず、究竟せず。斷せざるを以ての故に、有餘の解脱と名く、一切過を離れたる解脱には非ず。有餘清淨と名く、一切清淨には非ず、有餘の功徳を成就すと名く、一切の功徳には非ず、有餘の解脱と、有餘の清淨と、有餘の功徳とを成就するを以ての故に、有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道と名く、是を少分の涅槃を得ると名く。少分の涅槃を得たるとは、涅槃界に

となるを縁となることなきにあらざる【有餘過の分段】四住の因、分段の果を離るるをいふ【一切過を離れたる等】無明の因變易の果を離れざるなり。

【有餘の苦等】有量を知つて無量を知らざるをいふ。

【分段の涅槃】但分段の因果を減する故少分といふ。

【若し一切の苦等】以下佛の四智を得るを明す。

【無常壞の等】分段世間を無常壞、變易世間を無常病と名く。

【無覆護の世間】分段の世間、佛を離れて更に餘人の覆護すべきものなきが故、變易世間を無依といふ。如來此等の世間にあつて護となり、依となるなり。

【上の煩惱】諸徳の上を覆ふ故、心

向ふと名く。若し一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修すれば、無常壞の世間と、無常病の世間とに於て、常住の涅槃を得、無覆護の世間と、無依の世間とに於て、護と爲り、依と爲る。何を以ての故に。法に優劣無きが故に涅槃を得、智慧等しきが故に涅槃を得、解脱等しきが故に涅槃を得、清淨等しきが故に涅槃を得。是故に涅槃は一味なり、等味なり、謂く、解脱味なり。世尊、若し無明住地を斷ぜず、究竟せざるとは、一味、等味、謂く、明解脱味を得ず。何を以ての故に。無明住地を斷ぜず、究竟せざるとは、恆沙等に過ぎたる所應斷の法を斷ぜず、究竟せす。恆沙等に過ぎたる所應斷の法を斷ぜざるが故に、恆沙等に過ぎたる法の、應に得べきを得ず、應に證すべきを證せず。是故に、無明住地、積聚して、一切の修道斷の煩惱、上の煩惱を生ず。彼、心上の煩惱、止上の煩惱、觀上の煩惱、禪上の煩惱、正受上の煩惱、方便上の煩惱、智上の煩惱、果上の煩惱、得上の煩惱、力上の煩惱、無畏上の煩惱を生ず。是の如く、恆沙等に過ぎたる上の煩惱は、如來菩提智の所斷なり、一切皆無明住地に依りて建立する所、一切の煩惱の起るとは、皆無明住地を因とし、無明住地を縁とす。世尊、此起煩惱に於て、利那心と利那と相應す。世尊、心の不相應なるは無始の無明住地なり。世尊、若し復恆沙に過ぎたる、如來菩提智の所應斷の法は、一切皆是れ無明住地に持せられ、建立する所なり。譬へば、一切の種子は皆地に依りて生じ、建立し、增長す、若し地、壞すれば、彼も亦隨ひて壞するが如く、是の如く、恆沙等に過ぎたる如來菩提智の所應斷の法は、一

上は菩提心を覆ふなり、止は定、觀は慧の根本、禪は八禪、正受は禪盡、方便と智は慧の果、功用の慧を方便、實慧を智とす、果は涅槃、得は菩提、力と無畏は菩提の別義なり。

【了義により等】

如來は四智究竟窮極し、下即ち二乘に望みて説くなり

【更に所作無く等】

諸佛は種智圓備し一切智滿す。

【不受後有智もて】

如來は上の無礙智を得たる時に名けて不受後有といふ故に無礙智もて説くを不受後有智といふなり。

【生死の畏を度して等】

分段生死の怖畏を度して有爲無爲の解脱樂を順次に得るなり。

【彼先きの所得等】

二乘自ら四智究竟涅槃滿足せりと謂ひて法に愚なる

一切皆無明住地に依りて生じ、建立し、增長す。若し無明住地斷ずれば、恆沙等に過ぎたる、如來菩提智の所應斷の法も、皆亦隨ひて斷ず。是の如く一切の煩惱、上の煩惱を斷ずれば、恆沙等に過ぎたる如來所得の一切の諸法、通達無礙なり。一切智見は一切の過惡を離れ、一切の功德を得、法王、法主にして自在を得、一切法自在の地に登り、如來應等正覺は正師子吼す。我生已に盡き、梵行已に立し、所作已に辨じ、後有を受けず、是故に世尊、師子吼を以て、了義に依り、一向に記説したまふ。

世尊、不受後有智に二種有り、謂く、如來は、無上の調御を以て、四魔を降伏し、一切世間を出でて、一切衆生の瞻仰する所となりたまふ。不思議の法身を得て、一切爾炎地に於て、無礙法自在にして、上に於て更に所作無く、所得無き地を得、十力勇猛にして、第一無上無畏の地に昇り、一切爾炎と無礙智とをもて觀じて他に由らず、不受後有智をもて師子吼したまふ。世尊、阿羅漢、辟支佛、生死の畏を度して次第に解脱の樂を得んに、是念を作さく、「我は生死の恐怖を離れて生死の苦を受けず」と。世尊、阿羅漢、辟支佛の觀察する時、不受後有を得て、第一蘇息處の涅槃地を觀ず。世尊、彼先の所得の地にして、法に愚ならず、他に由らずして、亦自ら有餘の地を得て、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと知る。何を以ての故に。聲聞緣覺乘は皆大乘に入る、大乘とは即ち是れ佛乘なり、是故に三乘は即ち是れ一乘なり。一乘を得とは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり、阿耨多羅三藐三菩提とは、即ち是れ涅槃界なり、涅槃界とは即ち是れ如來の法身なり、究竟の法身を

時、善友に一乗の
説を聞きて法に愚
ならざるを得、自
ら究竟大乘法なら
ざるを知り、不究
竟を捨すとなり。
【一乗を得るもの
は等】一乗即菩提
即涅槃即法身の三
法同體を明して二
乗の三法異體に對
す。

【異の如來なく等】
如來即法身、法身
即如來なり。

【未度の世間】分
段世間、無依の世
間とは變易世間の
こと。

【後際と等しく等】
未來際を盡くして
物の歸依となる。

【無盡の歸依】應
身による、衆生無
盡の故に佛出世し
て無盡の歸依とな
る、常住の歸依と
は法身による、法
身常住の故に是真
歸たるなり。

【異の二】法僧に
歸依する即ち佛に
歸依するなり、三

得るとは、則ち究竟の一乗なり。異の如來無く、異の法身無し、如來は即ち是れ法身なり、究竟法身を得るとは、則ち究竟一乗なり、究竟とは即ち是れ無邊不斷なり。

世尊、如來は限齊の時有ること無くして住す、如來應等正覺は、後際と等しく住す。如來は限齊無ければ、大悲も亦限齊無くして世間を安慰す。無限の大悲、無限に世間を安慰す。是説を作すを、是を善く如來を説くと名く。若し復説いて、無盡の法なり、常住の法なり、一切世間の所歸依なりと言はば、亦善く如來を説くと名く。是故に、未度の世間、無依の世間に於て、後際と等しく無盡の歸依を作さん。常住の歸依とは、謂く、如來の應等正覺なり。法とは即ち是れ一乗の道を説くなり、僧とは是れ三乘衆なり。此二の歸依は究竟の歸依に非ず、少分の歸依と名く。何を以ての故に。一乘道の法のみ能く究竟法身を得ると説いて、上に於て更に一乗の法を説く身無ければなり。三乗の衆とは、恐怖有りて如來に歸依し、出でんと求めて修學して、阿耨多羅三藐三菩提に向す、是故に二依は究竟の依に非ず、是れ有限依なり。若し衆生有りて如來に調伏せられ、如來に歸依し、法の津澤を得て信樂の心を生じ、法僧に歸依する、是二の歸依は、此二の歸依に非ず、是れ如來に歸依するなり、第一義に歸依するは、是れ如來に歸依するなり、此二の歸依と、第一義とは、是れ究竟して如來に歸依するなり。何を以ての故に。異の如來無く、異の二無し、如來に歸依するは、即ち三の歸依なり。何を以ての故に。一乗の道を説きたまへばなり。如來四無所畏成就師子吼の説なり。若し如來、彼所欲に隨ひて、方便もて説きたまへるこ

の歸依とは三寶に歸依すること

【無邊聖諦章】一乘と二乗を對説し

二乗の四諦は眞ならず、眞の聖諦は一切の煩惱を斷ずるところ、この聖諦を無邊の聖諦といふなり

【一智を以て等】二乗人は單に有作智もて有作諦を觀じて四住地の惑を斷ずるをいふ

【四法の義】四諦の義

【無二の聖諦智を以て等】二乗はただ一の有作智を得て四住地を斷ずるのみ、第二の無作智は得ざるが故に無明を斷ぜず

【煩惱藏】一切の煩惱を攝して皆内にあらしむるをいふ

【無明蔽蔽の世間】衆生無明に覆覆せらるること鳥の殻中に在るが如し

とは、即ち是れ大乘なり、三乗有ること無し、三乗とは一乘に入るなり、一乘とは即ち是れ第一義乘なり。

無邊聖諦章第六

世尊、聲聞緣覺の初觀の聖諦は、一智を以て諸の住地を斷ず、一智と、四斷智と、功德作證とを以て、亦善く此四法の義を知る。世尊、出世間の上上智有ること無し、四智の漸至と、及び四緣の漸至となり、無漸至の法は、是れ出世間の上上智なり。世尊、金剛喻とは、是れ第一義智なり。世尊、聲聞緣覺の無明住地を斷ぜざる初めの聖諦智は、是れ第一義智に非ず。世尊、無二の聖諦智を以て諸の住地を斷ず。世尊、如來應等正覺は、一切の聲聞緣覺の境界に非ず、不思議空智もて一切の煩惱藏を斷ず。世尊、若し一切の煩惱藏を壞するは究竟の智なり。是を第一義智と名く。初めの聖諦智は究竟智に非ず、阿耨多羅三藐三菩提に向する智なり。

世尊、聖の義とは、一切の聲聞緣覺に非ず、聲聞緣覺は有量の功德を成就し、聲聞緣覺は少分の功德を成就するが故に、之を名けて聖と爲す。聖諦とは聲聞緣覺の諦に非ず、亦聲聞緣覺の功德にも非ず。世尊、此諦は、如來應等正覺、初め始めて覺知し、然る後に、無明蔽蔽の世間の爲に開現し、演説したまふ、是故に聖諦と名く。

【如來藏章】無邊の聖諦とは衆生本具の如來藏に異ることなきを明す。

【如來藏處に聖諦等】如來藏は不染集諦、非淨にして淨なるを滅道諦。

【法身章】如來藏の煩惱に覆藏せらるるを開顯すればこれ如來の法身なり、如來藏、法身等しく實相眞如法畢竟隱顯に約して不同をいふのみと説く。

【是の如きの四の等】以下無作の四諦は如來の聖諦にして唯如來のみ説くを明す。
【下中上の法は等】二乗は別に隨つて漸く四諦を觀するを下中上といひ、漸觀を以ての故に

如來藏章第七

聖諦とは甚深の義を説く、微細にして知り難し、思量の境界に非ず、是れ智者の所知なり、一切世間の信する能はざる所なり、何を以ての故に、此甚深如來の藏を説く、如來藏とは、是れ如來の境界なり、一切の聲聞緣覺の所知に非ず、如來藏處に聖諦の義を説く、如來藏處、甚深なるが故に、聖諦も亦甚深なりと説く、微細にして知り難し、思量の境界に非ず、是れ智者の所知にして、一切世間の信する能はざる所なり。

法身章第八

若し無量の煩惱藏所纏の如來藏に於て疑惑せざる者は、無量の煩惱藏を出づる法身に於て亦疑惑無し。如來藏と、如來の法身との不思議の佛の境界を説き、及び方便の説とに於て、心に決定を得たる者、此は則ち二の聖諦の義を説くことを信解す。是の如く知り難く解し難きは、謂く、二の聖諦の義を説けばなり。何等をか二の聖諦の義を説くと爲すや。謂く、作の聖諦の義を説き、無作の聖諦の義を説く。作の聖諦の義を説くとは、是れ有量の四聖諦を説くなり。何を以ての故に。他に因りて、能く一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修するには非ず。是故に世尊、有爲の生死と無爲の生死と有り、涅槃も亦是の如し、有餘と及び無餘となり。無作の聖諦の義を説くとは、無量の

除苦斷集證修滅道
を究竟する能はざる
に故に涅槃を得る
にあらずといふ。

【一切の煩惱等】

五住根本の惑を一
切の煩惱、五住所
起の惑を上る煩惱
この二煩惱は通じ
て分段變易の因を
攝す。

【意生身の陰】初

地以上の變易身、
ここに擧ぐるは但
二乘に對して説く
のみ。

【一切の煩惱藏を

等】本隱の時は惑
あるも染する能は
ず、顯現の時は惑
の染とすべきなき
をいふ。

【空義隱覆眞實章】

二乘は眞の空智を
得ず、二乘の空智
は如來藏を見る能
はざるを明す。

【如來藏智を知る】

如來は藏を知るの
智あり、是れ離絕
取相の故に空智と
名く。

【若は離等】 妄法

四聖諦の義を説くなり。何を以ての故に。能く自力を以て一切の受苦を知り、一切の受集を斷じ、一切の受滅を證し、一切の受滅の道を修す。是の如きの八聖諦をもて、如來四聖諦を説きたまふ。是の如きの四の無作の聖諦の義は、唯如來應等正覺のみ、事實竟したまへり。阿羅漢、辟支佛は、事實竟するに非ず。何を以ての故に。下中上の法は、涅槃を得るには非ざればなり。何を以ての故に。如來應等正覺は、無作の四聖諦の義に於て事實竟したまふ。一切の如來應等正覺は、一切未來の苦を知り、一切の煩惱、上の煩惱に攝受せらるる一切の集を斷じ、一切の意生身の除を滅し、一切の苦滅を作證したまふを以てなり。世尊、壞法に非ざるが故に、名けて苦滅と爲す。言ふ所の苦滅とは、無始、無作、無起と名く。無盡なり、離盡なれば常住なり、自性清淨にして、一切の煩惱藏を離れたり。世尊、恆沙に過ぎたる不離不脫、不異不思議の佛成就するを、如來の法身と説く。世尊、是の如きの如來法身は、煩惱藏を離れざるを如來藏と名く。

空義隱覆眞實章第九

世尊、如來藏智は、是れ如來空智なり。世尊、如來藏とは、一切の阿羅漢、辟支佛、大力の菩薩の、本見ざる所、本得ざる所なり。

世尊、二種の如來藏空智有り、世尊、空如來藏は、若は離、若は脫、若は異、一切煩惱藏なり。世尊、不空如來藏は、恆沙に過ぐる、不離不脫、不異不思議の佛法なり。世尊、

別越して其體不一の故に離、對治すべき因縁の脱し易の故に異。【一諦章】四聖諦中滅諦のみ第一義諦なるを明す。

【二は是れ無常】謂く苦集道、この三は相各異故、因縁生故、本無今有、四義の故に無常なり、滅諦はこれに反す。

【一依章】前三諦の非依なるを對して滅諦は是れ金剛心にして外の衆苦盡くるところ、即ち眞依なることを明す。

【顛倒眞實章】一切の凡夫の二見は顛倒、二乗は苦無常に執して常樂の減理を見ざる故亦顛倒、但一の滅諦理はこの凡聖の境界を出づるを眞實となすを明す。【凡夫の識は以下】

此に空智にて、諸大聲聞、能く如來を信ず、一切の阿羅漢、辟支佛の空智は、四不顛倒の境界に於て轉ず。是故に、一切の阿羅漢、辟支佛は、本見ざる所、本得ざる所なり。一切の苦滅は、唯佛のみ得證したまふ、一切の煩惱藏を壞し、一切の滅苦の道を修したまふ。

一 諦章第十

世尊、此四聖諦は、三は是れ無常、一は是れ常なり。何を以ての故に。三諦は有爲の相に入る、有爲の相に入る者は是れ無常なり、無常なる者は是れ虚妄の法なり。虚妄の法は諦に非ず、常に非ず、依に非ず。是故に、苦諦、集諦、道諦は第一義諦に非ず、常に非ず、依に非ず。

一 依章第十一

一の苦滅諦は有爲の相を離る、有爲の相を離るる者は是れ常なり、常なる者は虚妄の法に非ず、虚妄の法に非ざる者は是れ諦なり。是れ常なり、是れ依なり。是故に、滅諦は是れ第一義なり。

顛倒眞實章第十二

不思議とは是れ滅諦、一切衆生の心識の所縁に過ぎたり、亦一切の阿羅漢、辟支佛の智

【凡夫二乗の本性寂滅諦を見ざるを明す。】

【諸行は無常なり等】これ生死法に依て斷見を越すなり。諸行とは五陰集起に當り。

【涅槃法に依て常見を起すなり。涅槃は常といふも因縁常にして性常に非ざるを性常と執する故、今邊見といふなり。】

【身の諸根に於て等】以下色心に就て邊見を起すなり。

【現法の見】眼耳鼻等の諸根に於て現に盡滅あるを見るなり。又未來世に更に報あつて起るを相續といふ。

【一切の阿羅漢等】以下二乗の眞實を見ざるをいふ。淨智とは凡夫二見及び顛倒の垢に對していふ。

【三乗の初業等】前一乘章にいふ如

【三乗の初業等】前一乘章にいふ如

慧の境界にも非ず。譬へば生盲の衆色を見ず、七日の嬰兒の日輪を見ざるが如し。苦滅諦なるものも亦復是の如し、一切凡夫心識の所縁に非ず、亦二乗の智慧の境界にも非ず、凡夫の識は二見顛倒なり。一切阿羅漢、辟支佛智は、則ち是れ清淨なり。邊見とは、凡夫五受陰に於て、我見妄想計著して二見を生ず、是を邊見と名く。謂ゆる常見、斷見なり。諸行は無常なりと見るは、是れ斷見にして正見に非ず。涅槃は常なりと見るは、是れ常見にして正見に非ず、妄想見の故に。是の如きの見を作す。身の諸根に於て分別思惟して、現法の壞するを見、相續有るに於ては見ずして斷見を起す、妄想の見なるが故に。心の相續に於て、愚闇にして解せず、刹那の間の意識の境界を知らずして常見を起す、妄想の見なるが故に、此妄想の見は、彼義に於て、若は過ぎ、若は及ばずして異想の分別を作す、若は斷、若は常なり。顛倒の衆生、五受陰に於て、無常に常想あり、苦に樂想有り、無我に我想あり、不淨に淨想あり。一切の阿羅漢、辟支佛の淨智とは、一切智の境界及び如來の法身に於て本見ざる所なり。或は衆生有り、佛語を信するが故に、常想、樂想、我想、淨想を起す。顛倒の見には非ず、是を正見と名く。何を以ての故に。如來の法身は是れ常波羅蜜、樂波羅蜜、我波羅蜜、淨波羅蜜なり。佛の法身に於て、是見を作す者は、是れ正見と名く。正見の者は是れ佛の眞子なり、佛口より生じ、正法より生じ、法化より生じて法の餘財を得。世尊、淨智とは、一切阿羅漢、辟支佛の智波羅蜜なり、此淨智とは、淨智と曰ふと雖も、彼滅諦に於ては、尙境界に非ず、況んや四依智をや。何を以ての故に。三

く、一乘の外に三乘無きも法に思な
らざれば一乘を現
覺現得するにあら
す、當覺當得の意
の故に現在にあり
ては淨智も其境界
にあらずとなり。

【一依とは等】
滅諦は是れ眞依
にして小乗有作の
四依に三依にすぎ、大乘
無作の三依にすぎ、大乗
これをまた出世間
の上上といふ。

【自性清淨】前
章を受けて獨り世
田世の善法如來藏
に依るのみならず
生死亦如來藏にあ
りと説き、更に如
來藏は煩惱に纏繞
せらるるを、其纏
體は本來自性清淨
なることを明す。

【生死とは此二法
等】以下生死と如
來藏との不二を辨
ず。
【如來藏に生あり
等】顛倒の故に生
死あり、如來藏の非
體に生死あるに非

乗の初業は、法に愚ならず、彼義に於て當覺當得なり。彼が爲の故に、世尊四依を説きた
まふ。世尊、此四依とは是れ世間の法なり。世尊、一依とは、一切の依の止なり、出世間
上上なり、第一義依は謂ゆる滅諦なり。

自性清淨 章第十二

世尊、生死とは、如來藏に依る、如來藏を以ての故に、本際不可知と説く。世尊、如來
藏有るが故に生死を説く。是を善説と名く。世尊、生死、生死とは諸受根の没して、次第
に根の起ることを受けず、是を生起と名く。世尊、生死とは、此二法は是れ如來藏なり、
世間言説の故に、死有り生有り、死とは謂く根の壞するなり、生とは新に諸根の起るなり、
如來藏に生有り、死有るには非ず、如來藏とは有爲の相を離る、如來藏は常住にして不變
なり。是故に如來藏は是れ依たり、是れ持たり、是れ建立たり。世尊、不離、不斷、不脱、
不異、不思議の佛法なり。世尊、斷と脱と異との外の、有爲法の依持建立たる者は是れ如來
藏なり。世尊、若し如來藏無くんば、苦を厭ひ、涅槃を樂求することを得ず、何を以ての
故に。此六識及び心法の智に於て、此七法は刹那も住せず、衆苦を種るす、苦を厭ひ、涅
槃を樂求することを得ず。世尊、如來藏とは、前際無し、起らず、滅せざるの法、諸の
苦を種る、苦を厭ひ、涅槃を樂求することを得。世尊、如來藏とは、我に非ず、衆生に非
ず、命に非ず、人に非ず、如來藏とは、身見に墮する衆生と、顛倒の衆生と、空亂意の衆

【如來藏は是れ依故に】體無爲常住の

【斷と脱と等】生死は斷等の法なる

【心法の智】六識の上に起る厭欣等の心所をいふ

【身見に墮する衆生等】これ凡夫外道五陰身に我ありと見る、顛倒衆生とは二乘人、法身の常樂等に於て無常等の四顛倒を起す、空亂意の衆生とは初學の大衆人多く空觀を修して眞解を妨亂するなり

【刹那の善心等】善心中に三毒なければ染の義なく、不善心とは即ち三毒の故能染にして所染の義なきなり

【煩惱は心に觸れず等】有煩惱の時

生とは其境界に非ず。

世尊、如來藏とは、是れ法界藏なり、法身藏なり、出世間上上藏なり、自性清淨藏なり。此性清淨の如來藏、而も客塵煩惱と、上煩惱とに染せらる、不思議の如來の境界なり。何を以ての故に。刹那の善心は煩惱の所染に非ず、刹那の不善心も亦煩惱の所染に非ず、煩惱は心に觸れず、心は煩惱に觸れず、云何が觸れざる。法而も能く心を染することを得んや、世尊、然も煩惱有り、煩惱の心を染すること有り、自性清淨心にして、染有るものは、了知すべきこと難し、唯佛世尊のみ、實眼と實智とをもて、法の根本と爲り、

通達の法と爲り、正法の依と爲り、實の如く知見したまふ。勝鬘夫人、是難解の法を説きて、佛に問ひたてまつる時、佛即ち隨喜したまひ、是の如く是の如し、自性清淨の心にして、而も染汚有ることは、了知すべきこと難し。二法有りて了知すべきこと難し。謂く、自性清淨心は了知すべきこと難し、彼心、煩惱の爲に染せらるること、亦了知すること難し。此の如きの二法、汝及び大法を成就せる菩薩摩訶薩、乃ち能く聽受す、諸餘の聲聞は唯佛語を信ず。

眞子章第十四

若し我弟子、隨信増上の者、明信に依り、已りて法智に隨順するものは、而も究竟を得たり。法智に隨順すとは、根と意解と境界とを、觀察し、施設し、業報を觀察し、阿羅漢

には善心なく、煩惱即不善心なれば一體の法に相觸なし。【勝鬘夫人等】以下如來の逮成を明す。

【自性清淨心は等言亡慮絶の故に了知し難し。】

【大法成就の菩薩種性以上の菩薩諸餘の聲聞とは種性以前十信の菩薩】

【眞子章】佛子に三忍ありとし信忍順忍、無生忍を明す。

【隨信等】隨信は十信位、信増上は十解の菩薩、是を信忍とし、隨順法智とは是れ解行地所成の益にして順忍、得究竟は初地以上にして無生忍に配すと。

【業報】因果、阿羅漢の眠は無明住地、心自在は智慧、聖自在通は神通力なり。

【自の毀傷を離れ】

の眠を觀察し、心自在の樂、禪定の樂を觀察し、阿羅漢と辟支佛と大力の菩薩との聖自在通とを觀察するなり。此五種の巧便の觀、成就して、我滅後の未來世の中に於て、我弟子の、隨信、増上のもの、明信に依りて法智に隨順するものは、自性清淨心、彼煩惱の爲に染汚せられて、而も究竟することを得ん。是究竟は、大乘の道に入るの因なり。如來を信する者は、是大利益有りて、深義を誇ぜず。爾時、勝鬘、佛に白して言さく、『更に餘の大利益有り、我當に佛の威神を承けて、復斯義を説かん。』

佛の言はく、『更に説け。』勝鬘、佛に白して言さく、『三種の善男子善女人、甚深の義に於て自の毀傷を離れ、大功徳を生じ、大乘の道に入る。何等をか三と爲す。謂く、若くは善男子善女人、自ら甚深の法智を成就すると、若くは善男子善女人、隨順の法智を成就すると、若くは善男子善女人、諸の深法に於て、自ら了知せずして、仰いで世尊を惟ひたてまつり、我境界に非ず、唯佛の所知なりといふ。是を善男子善女人、仰いで如來を惟ひたてまつると名く。此諸の善男子善女人を除き已りぬ。』

勝鬘章第十五

諸の餘の衆生は、諸の甚深法に於て、妄説に堅著し、正法に違背し、諸の外道の腐敗の種子を習ふ者は、當に王力及び天龍鬼神の力を以て之を調伏すべし。爾時、勝鬘、

是れ信忍、前説の隨信、信増上にあたり、大功德を生じとは順忍にして前の隨順法智にと大乘の道に入るとは無生忍にして今の甚深の法智、七地以上とす。

【勝鬘章】勝鬘の非法降伏を明すの【請の外道の腐敗の種子】外道中に於て諸の過失を起し損正増邪の故に紹繼するに堪へざるをいふ。

【爾時世尊等】以下第三大段、流通下なり。

諸の眷屬と佛足を頂禮したてまつる。佛の言はく、『善い哉善い哉、勝鬘、甚深の法に於て方便守護して、非法を降伏すること善く其宜しきを得たり。汝已に百千億の佛に親近して能く此義を説けり。』

爾時、世尊、勝光明を放ちて普く大衆を照し、身、虚空に昇ること高さ七多羅樹、足虚空を歩みて舍衛國に還りたまふ、時に勝鬘夫人、諸の眷屬と合掌して佛に向ひたてまつり、觀るに厭足無く目暫くも捨てず、眼の境を過ぎ已りて、踊躍し、歡喜し、各各如來の功德を稱歎したてまつり、具足して佛を念じたまつり、還りて城中に入り、友稱王に向ひて大乘を稱歎す。城中の女人七歳已上は、化するに大乘を以てし、友稱大王も、亦大乘を以て、諸の男子七歳已上のものを化し、國を擧げて人民皆大乘に向ひき。

爾時、世尊祇洹林に入り、長老阿難に告げ、及び天帝釋を念じたまふ。時に應じて帝釋、諸の眷屬と、忽然として至りて佛前に住す。爾時、世尊、天帝釋及び長老阿難に向ひて、廣く此經を説きたまふ。説き已りて帝釋に告げて言はく、『汝、當に此經を受持し、讀誦すべし。橋戸迦、善男子善女人ありて、恆沙劫に於て菩提行を修し、六波羅蜜を行ぜん、若し復善男子善女人ありて、聽受し、讀誦し、乃至經卷を執持せんに、福彼より多からん、何に況んや廣く人の爲に説くをや。是故に橋戸迦、當に此經を讀誦して、三十三天の爲に分別し廣説すべし。』復阿難に告げたまはく、『汝も亦受持し、讀誦して、四衆の爲に廣く説け。』時に天帝釋、佛に白して言さく、『世尊、當に何んが此經を名け、云何が奉持したてま

つるべき。佛、帝釋に告げたまはく、「此經は、無量無邊の功徳を成就せり、一切の聲聞緣
 覺は、究竟し、觀察し、知見すること能はず。橋尸迦、當に知るべし、此經は、甚深微妙
 にして大功徳聚なり。今當に汝が爲に、略して其名を説かん。諦に聽け、諦に聽け、
 善く之を思念せよ。時に天帝釋及び長老阿難、佛に白して言さく、「善い哉世尊、唯然り、
 教を受けん。佛、言はく、「此經をば數如來眞實第一義功徳といふ、是の如く受持せよ。不
 思議大受といふ、是の如く受持せよ。一切願攝大願といふ、是の如く受持せよ。説不思
 議攝受正法といふ、是の如く受持せよ。説入一乘といふ、是の如く受持せよ。説無邊聖諦
 といふ、是の如く受持せよ。説如來藏といふ、是の如く受持せよ。説法身といふ、是の如
 く受持せよ。説空義隱覆眞實といふ、是の如く受持せよ。説一諦といふ、是の如く受持せ
 よ。説常住安隱一依といふ、是の如く受持せよ。説顛倒眞實といふ、是の如く受持せよ。
 説自性清淨心隱覆といふ、是の如く受持せよ。説如來眞子といふ、是の如く受持せよ。
 説勝鬘夫人師子吼といふ、是の如く受持せよ。復次に橋尸迦、此經の所説、斷一切疑決定
 了義に於いて一乘道といふ。橋尸迦、今此説勝鬘夫人師子吼經を以て汝に付囑す、乃至法の住に
 は、受持し、讀誦し、廣く分別して説け。帝釋、佛に白して言さく、「善い哉世尊、頂受尊
 敬せん。時に天帝釋、長老阿難、及び諸の大會の天人、阿修羅、乾闥婆等、佛の所説を
 聞いて歡喜奉行しき。

勝鬘師子吼一乘大方廣經

終

百
喻
經

第二卷	經典部
-----	-----

百喻經 卷第一

尊者僧伽斯那撰
蕭齊天竺三藏求那毘地譯

愚人食鹽喻、愚人集牛乳喻、以梨打破頭喻、婦詐語稱死喻、渴見水喻、子死欲停置家中喻、認人爲兄喻、山羌偷官庫喻、歎父德行喻、三重樓喻、婆羅門殺子喻、煮黑石蜜漿喻、說人喜瞋喻、殺商主祀天喻、醫與王女藥令卒長大喻、灌甘蔗喻、債牛錢喻、就樓磨刀喻、乘船失釘喻、人說王縱暴喻、婦女欲更求子喻

愚人鹽を食するの喻

昔愚人有り、他家に至る。主人食を與へしに淡にして味無きを嫌ふ。主人聞き已りて、更に爲に鹽を益す。既に鹽を得て美なり。便ち自ら念言すらく、「美なる所以の者は、鹽有るに縁つての故なり。少しく有るすら尙爾り、況んや復多きをや。」と。愚人無智なれば便ち空しく、鹽を食ふ。食し已るに口爽に、返つて其患を爲せり。譬へば彼外道、飲食を節して以て道を得べしと聞き、即便斷食し、或は七日或は十五日を經、徒に自ら困餓し、道に益無きがごとく、彼愚人は、鹽の美を以ての故に、而も空しく之を食し、口をして爽

ならしむるを致すが如し。此も亦復爾り。

(二二) 愚人牛乳を集むるの喻

昔愚人有り、將に賓客に會せんとし、牛乳を集めて以て供設に擬せんと欲して、是念を作さく、「我今若し豫め日口中於て、牛乳を致取せば、牛乳漸く多く卒に安處無く、或は復酢敗せん。如かず、即ち牛腹に就いて之を盛り、會時に待臨して、當に頓に致取すべし。」是念を作し已つて便ち犍牛の母子を捉へ、各異處に繋げり。却後一月、爾乃ち會を設けて賓客を迎置し、方に牛を牽いて來り乳を致取せんと欲するに、此牛の乳即ち乾いて有ること無し。時に衆賓或は頷り或は笑ふを爲す。愚人も亦爾り、布施を修せんと欲して、方に言はく、「我大有の時を待ちて、然る後頓に施さん。」と。未だ聚むるに及ばざる頃、或は縣官水火盜賊に侵奪せられ、或は卒に命終して時施に及ばず。彼も亦是の如し。

(二三) 梨を以て頭を打ち破るの喻

昔愚人有り、頭上に毛無し。時に一人有り、梨を以て頭を打つ。乃至二三悉く皆傷破せり。時に此愚人、黙然として忍受して避するを知らず。傍人見已りて之に語つて言はく、「何んが避去せず、乃ち往いて打を受け頭破らしむるを致すや。」愚人答へて言はく、「彼の人の如きは、懦弱にして力を恃み、癡にして智慧無し、我頭上に髮毛有ること無きを見て、

謂つて是れ石と爲し、梨を以て、我を打ち、頭破るること乃ち爾り。』傍人語つて言はく、『汝自ら愚癡なり、云何が彼を名けて以て癡と爲すや、汝若し癡ならざれば、他に打たれ、乃至頭破るるも逃避するを知らずや。』
比丘も亦爾り、信戒聞慧を具修すること能はず、但威儀のみを整へて以て利養を招く、彼愚人の他に頭を打たれて避去を知らず、乃至傷破して反つて他を癡と謂ふが如し。此比丘も亦復是の如し。

(四) 婦詐つて死を稱するの喩

昔愚人有り。其婦端正なれば情に甚だ愛重せり。婦に直信無く後中間に於て、他と共に交往せり。邪姪心盛なれば傍夫を逐うて己が婿を捨離せんと欲す。是に於て密に一老母に語つて言はく、『我去るの後、汝、一死婦女の屍を齎しく屋中に安置し、我夫に語つて言ふべし。云はく「我已に死せり」と。老母後に於て其夫主不在の時を伺うて、一死屍を以て其家中に置き、其夫の還るに及んで老母語つて言はく、『汝が婦已に死せり。』と。夫即ち往いて視、是己が婦なりと信じて哀哭懊惱し、大いに薪油を積んで焼いて其骨を取り、囊を以て之を盛り、晝夜に懷挾せり。婦、後時に於て心に傍夫を厭ひ、便ち家に還歸し其夫に語つて言はく、『我は是れ汝が妻なり。』と。夫之に答へて言はく、『我婦久しく死せり、汝は是阿誰なるや、妄に我婦と言へる。』乃至二三するも猶故に信ぜず。

彼外道の他の邪説を聞いて心に惑著を生じて、謂く、眞實と爲し永く改むべからず、正教を聞くと雖も、信じて受持せざるが如し。

(五) 渴して水を見るの喩

過去に人有り、癡にして智慧無し。極渴して水を須む。熱時の焰を見て謂つて是水と爲し、即便逐走して辛頭河に至る。既に河所に至つて對視して飲まず。傍人語つて言はく、「汝渴を患へて水を逐ふ。今水所に至つて何が故に飲まざる。」愚人答へて言はく、「君飲み盡すべくんば、我當に之を飲むべきも、此水極めて多くして俱に盡すべからず、是故に飲まざるなり。」爾時、衆人此語を聞いて、皆大いに嗤笑せり。

譬へば外道の其理を僻取し、已は佛戒を具持する能はざるを以て、遂に便ち受けず、將來に得道分無く、生死に流轉せしむるを致すが如し。若し彼愚人、水を見て飲まざれば、時に笑はるるも亦復是の如し。

(六) 子死して家中と停置せんと欲するの喩

昔愚人有り、七子を養育せるに一子先づ死せり。時に此愚人子既に死せると見て、便ち其家中に停置せんと欲し、自ら棄て去らんと欲す。傍人見已つて之に語つて言はく、「生死は道異れば當に速に莊嚴し、遠處に致して之を殯葬すべし。云何が留むるを得て、自ら

【辛頭】 シンツ
(Sinhph) 險河と譯す。今のインダス河のこと。

棄て去らんと欲するや。爾時、愚人此語を聞き已つて即ち自ら思念すらく、「若し留むるを得ず、要す當に葬るべくんば、更に一子を殺すべし、兩頭を停擔して乃ち勝致すべし。」是に於て便ち更に其一子を殺して、而も之を擔負して遠く林野に擧る。時人之を見て深く嗤笑を生じ、未曾有なりと怪めり。譬へば比丘の私に一戒を犯すが如し。情に改悔を憚れば默然として覆藏して自ら清淨と説けり。或は知る者有り、即ち之に語つて言はく、「出家の人は禁戒を守持すること、明珠を護るが如し。缺落せしめず、汝今云何が所受を違犯するも、懺悔せざらんと欲するや。」犯戒者言はく、「苟も懺を須むば更に就いて之を犯し然る後當に出すべし。」遂に便ち破戒して多く不善を作して、爾乃ち頓に出すが如し。彼愚人の一子既に死して又一子を殺すが如し。今此比丘も亦復是の如し。

(七八) 人を認めて見と爲すの喩

昔一人有り、形容端正にして智慧具足せり。復多く錢財あり、舉世の人間稱歎せざる無し。時に愚人有り、其此の如きを見て便ち言はく、「我兄なり」と。爾る所以の者は彼に錢財有れば須むて則ち之を用ゐんとし、是故に兄と爲す。其還債を見ては言はく「我兄に非ず」と。傍人語つて言はく、「汝は是れ愚人なり。云何が財を須ふるに他を名けて兄と爲し、其債時に及んで復兄に非ずと言ふや。」愚人答へて言はく、「我彼錢財を得んと欲するを以て、之を認めて見と爲すも、實は是れ兄に非ざるなり。若し其債時には則ち兄に非ずと稱す

るなり。一人此語を聞いて之を笑はざる無し。猶し彼外道の、佛の善語を聞いて、貪竊して用いて己が有と爲し、乃至傍人に教へて修行せしめ、背て修行せざるがごとし。是言を作さく、『利養の爲の故に彼佛語を取つて衆生を化道するも、實事無し。云何が修行せんや。』猶し向の愚人、財を得んが爲の故に是れ我兄と言ひ、其債時に及んで復兄に非すと云ふがごとし。此も亦是の如し。

山羌官庫を偷むの喻

過去の世に一の山羌有り。王の庫物を偷みて遠く逃走せり。爾時、國王、人を遣し門に出でて推尋して捕へ得、將ゐて王邊に至る。王即ち其所得の衣處を責む。山羌答へて言はく、『我衣は乃ち是れ祖父の物、王に衣を著せらるるも實は山羌に非ず。本所有の故に之を著くるを知らず。應に手に在るべき者は脚上に著け、應に腰に在るべき者は返つて頭上に著く。』王賊を見已つて諸臣等を集め、共に此事を詳にして之に語つて言はく、『若し是れ汝の祖父已來の所有の衣なれば、應當に著を解すべし。云何が顛倒して上を用て下と爲す。不解を以ての故に、定んで知る、汝の衣は必ず是れ偷み得しもの、汝が舊物に非ず。』借りて以て譬と爲す。王とは佛の如く、寶藏は法の如し。愚癡の羌者は猶し外道の如く、竊に佛法を聽いて己が法中に著け、以て自有と爲し、然も解せざるが故に佛法を布置し、上下を迷亂し。法相を知らず。彼山羌の王の寶衣を得て次第を識らず、顛倒して著くるが

如きも、亦復是の如し。

父の徳行を歎するの喩

昔時人有り、衆人の中に於て、己が父の徳を歎じて是言を作さく、「我父は慈仁なれば不害不盗、直に實語を作し、兼ねて布施を行す。」と。時に愚人有り、其が此語を聞いて便ち是念言を作さく、「我父の徳行は復汝の父に過ぎたり。」と。諸人問うて言はく、「何の徳行ありや、請ふ此事を道へ。」愚人答へて言はく、「我父小來姪欲を斷絶し、初より染汚無し。」衆人語つて言はく、「若し姪欲を斷ぜば云何が汝を生ぜん。」深く時人に怪笑せらる。猶し世間無智の流の、人の徳を讃げんと欲するも其實を識らず、反つて毀誉を致すが如し。彼愚者の如きは、意に好く父を歎じて言は過失を成する、此亦是の如し。

三重樓の喩

往昔の世に富愚人有り、癡にして所知無し。餘の富家に到つて三重樓を見る。高廣嚴麗にして軒敞踈朗なり。心に渴仰を生じて即ち是念を作さく、「我に財錢あり、彼に滅せず、云何が頃來にして是の如きの樓を造作らざる。」即ち木匠を喚んで問言して曰はく、「彼家の端正舎を作るを解せずや。」木匠答へて言はく、「是我作る所なり。即便語つて言はく、「今我爲に樓を造ること彼の如くすべし。」是時木匠即便地を經し、疊疊して樓を作る。愚人

【四輩の弟子】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を云ふ

【三寶】佛寶、法寶、僧寶なり

【道果】佛道の果さとりのこと

【下三果】聲聞四果の中、預流、不還、一來の三果をいふ

【阿羅漢果】三界見思の惑を斷じ、盡智、無生智を得て無學位に住し世間の供養を受くるに耐へたる聖者

【婆羅門】ブラフマナ (Brahmana)

淨行を譯す。印度四姓の最上位、即ち僧侶の階級なり

其壘壁して舍を作るを見、猶疑惑を懷いて了知すること能はず、之に問うて言はく、「何等をか作らんと欲する。」木匠答へて言はく、「三重の屋を作る。」愚人復言はく、「我下二重の屋を欲せず、先づ我爲に最上の屋を作るべし。」木匠答へて言はく、「是事有ること無し、何んが最下重の屋を作らずして。而も彼第二の屋を造ることを得ること有らん。第二を作らずして云何が第三重屋を造ることを得んや。」愚人固く言はく、「我今下二重の屋を用ゐず、必ず我爲に最上の者を作るべし。」時人聞く已つて便ち怪笑を生じ、咸く此言を作さく、「何んが下第一屋を造らずして上者を得ること有らんや。」と。

譬へば世尊の四輩の弟子の如し。精勤して三寶を修敬すること能はず、懶惰懈怠して道果を求めんと欲して、是言を作さく、「我今餘の下三果を用ゐず、唯彼阿羅漢果を得んことを求むるのみ。」と。亦時人に嗤笑せらるること、彼愚者の如く等しくして異り有ること無けん。

婆羅門殺子の喩

昔婆羅門有り、自ら多和と謂へり。諸星術、種種の技藝に於て明達せざる無く、己を恃むこと此の如し。其徳を顯さんととして遂に他國に至り、兒を抱いて哭せり。人有つて婆羅門に問うて言はく、「汝何が故に哭するや。」婆羅門言はく、「今此小兒七日にして當に死すべし。其天傷を愍み是を以て哭するのみ。」時に人語つて言はく、「人命は知り難く、計算喜錯せん。設し七日の頭或は能く死なざらん。何んが豫め哭するを爲せる。」婆羅門言は

く、『日月は闇かるべく星宿は落つべくも、私の記する所は終に違失する無けん。』名利の爲の故に七日の頭に至つて、自ら其子を殺して以て己が説を證せり。時に諸の世人却後七日其兒の死を聞き、咸く皆歎言すらく、『眞に是れ智者なり、所言錯らず。』と。心に信服を生じ、悉く來つて敬を致せり。猶し佛の四輩の弟子の如く、利養の爲の故に自ら道を得たりと稱し、愚人法有り、善男子を殺し、詐つて慈徳を現じ、故に將來に苦を受くること窮り無からしむ。婆羅門の己が言を驗さんが爲に子を殺して世を惑はすが如し。

〔二二〕黒石蜜漿を煮るの喻

昔愚人有り、黒石蜜を煮る。一富人有り、來つて其家に至る。時に此愚人便ち是念を作さく、『我今當に黒石蜜漿を取つて此富人に與ふべし。』即ち少水を著けて用て火中に置き、即ち火上に於て扇を以て之を扇ぎ、望んで冷かならしむるを得んとす。傍人語つて言はく、『下火を止めざれば、之を扇いで止まざるも云何が冷なるを得ん。』と。兩時人衆悉く皆嗤笑せり。

其れ猶し外道の煩惱熾然の火を滅せずして少しく苦行を作し、棘刺の上に臥し、五熱もて身を炙り清涼寂靜の道を望むも、終に是處無く、徒に智者に怪笑せらるるを爲すがごとし。苦を現在に受け、殃は來劫に流る。

【五熱】外道の苦行、五體を火にて熱すること。

（二三）人の曠るを喜ぶを説く喻

過去に人有り。多人衆と共に屋中に坐し、一外人の德行極好を歎ぜり。唯二過有り、一には曠を喜び、二には作事倉卒なり。爾時、此人過ぎて門外に在り、是語を作すを聞いて便ち曠志を生じ、即ち其屋に入り、彼己の愚悪を道へるの人を搦へ、手を以て打撲す。傍人間うて言はく、「何が故に打つや。」其人答へて言はく、「我曾て何時喜曠し倉卒せしや。而も此人や道ふ、「我順つて曠志を喜び、作事倉卒なれば、是故に之を打つ」と。傍人語つて言はく、「汝今喜曠倉卒の相、即時に現驗せり、云何が之を諱むや。」

人過惡を説いて怨責を起し、深く衆人の爲に其愚惑を怪しまる。譬へば世間の飲酒の夫の如し。耽荒沈酒して諸の放逸を作し、人に呵責せられて返つて尤疾を生じ、苦んで引證作用し、自ら明白ならしむ。此の若きの愚人は己が過を聞くを諱んで、他に道説せらるれば返つて之を打撲せんと欲す。

（二四）商主を殺して天を祀るの喻

昔賈客有り、大海に入らんと欲す、大海に入るの法は、要す導師を須つて然る後去るべし、即ち共に求覓して一導師を得たり。既に之を得已つて相將ゐて發引して曠野の中に至る。一天祠有り、當に人を須て祀り然る後過ぐるを得べし。是に於て衆賈共に思量して言へらく、「我等の伴黨は盡く是れ親親なり、如何が殺すべき、唯此導師を用て、天を祀る

【三塗】地獄、餓鬼、畜生の三惡道に同じ。

に中てん。「即ち導師を殺して以て用て祭祀す。天を祀り已竟つて道路を迷失し、所趣を知らずして窮困して死盡せり。

一切世人も亦復是の如し。法海に入つて其珍寶を取らんと欲し、當に善法行を修し以て導師と爲すべし、善行を毀破せば、生死の曠路に永く出期無く、三塗に經歷して苦を受くること長遠なり。彼商賈の、將に大海に入らんとして其導者を殺し、津濟を迷失し終に困死を致すが如し。

(二五) 醫王女に藥を與へて卒に長大ならしむるの喩

昔國王有り、一女を産生せり。醫を喚んで語つて言はく、「我爲に藥を與へ、立つて長大ならしめよ。」醫師答へて言はく、「我良藥を與へて能く即ち大ならしめん。但今卒に無ければ方に求索すべし。此藥を得るの頃王要す看る莫れ。藥を與へ已るを待つて、然る後王に示さん。是に於て即便遠方より藥を取り十二年を経たり。藥を得來り還つて女に與へ服せしめ、將て王に示す。王見て歡喜し即ち自ら念言すらく、「實に是れ良醫なり。我女に藥を與へ、能く卒に長ぜしむ。」便ち左右に勅して賜るに珍寶を以てせり。時に諸人等王の無智を笑ふ。曉きし生來年月を籌量せず、其長大を見て是れ藥の力なりと謂ふ。世人も亦爾り、善知識に詣つて之に啓して言はく、「我道を求めんと欲す、願くは教授せられ、我をして立つて善知識たるを得しめたまへ。」師方便を以ての故に教へて坐禪し、十

【十二緣起】三界の迷の因果を十二

に分ち衆生輪廻の
さまを示したるも
の、無明、行、識
名色、六入、觸、
受、愛、取、有、
生、老死。

二緣起を觀ぜしめ、漸く衆德を積んで阿羅漢を得たれば、倍踊躍歡喜して是言を作さく、
『快い哉大師、速に能く我をして最妙法を證せしむ。』

(二) 甘蔗を灌ぐの喩

昔二人有り、共に甘蔗を種えて誓言を作さく、『好き者を種うれば賞し、其不好なる者は
當に重く之を罰すべし。』時に二人中、一が念言すらく、『甘蔗は極めて甜し、若し壓して汁
を取り還甘蔗樹に灌がば、甘美必ず甚しく、彼に勝るを得ん。』と。即ち甘蔗を壓して汁
を取り、用て漚いで滋味を冀望せるに、返つて種子を敗り、所有の甘蔗一切都て失へり。
世人も亦爾り。善福を求めんと欲し己が豪貴を恃み、専ら形勢を挾んで下民を迫脅し、
財物を陵奪し、用て福を作して本善果を期し、將來反つて其患殃を獲るを知らず。甘蔗を
壓して、彼此都て失ふが如し。

(三) 半錢を債する喩

昔商人有り、他に半錢を貸し、久しく償ふを得ず。即便往いて債するに前に大河有り、
他の兩錢を雇うて然る後渡るを得たり。彼に到つて往いて債するも竟に見るを得ず。來還
して河を渡るに復兩錢を雇ふ。半錢の債を爲して四錢を失ふ。兼ねて道路疲勞困乏有り、
所債甚少きも所失極めて多し。果に衆人の怪笑せらるるを被る。

世人も亦爾り。要す名利を少くし大行を毀つを致す。苟も己身を容れて禮儀を顧みざれば、現に惡名を受け、後苦報を得ん。

(二八) 樓に就いて刀を磨くの喩

昔一人有り、貧窮困苦なるも王の爲に事を作す。日月經ること久しく身體羸瘦せり。王見て憐愍し一死駝を賜ふ。貧人得已つて即便皮を剝ぐ。刀の鈍きを嫌つての故に、石を求めて磨かんと欲す。乃ち樓上に於て一磨石を得、刀を磨いて利ならしめ來下して剝ぐ。是の如く數數往來して刀を磨く。後轉勞苦し憚れて數上る能はず、駝を樓上に懸け石に就いて刀を磨く、深く衆人の嗤笑する所たり、

猶し愚人の禁戒を毀破し、多く錢財を取つて以用て福を修し、生天を得んと望むが如し。陀を上樓に懸けて刀を磨くも、功を用ゆること甚だ多くして所得甚だ少きが如し。

(二九) 乗船して盃を失ふの喩

昔人有り、船に乗じて海を渡る、一銀盃を失つて水中に墮せり。即便思念すらく、『我今水に畫いて記と作し、之を捨てて去り、後當に之を取るべし。行いて二月を經、師子諸國に到つて一河水を見、便ち其中に入つて木失ひし盃を覓む、諸人問うて言はく、『何の所作をか欲するや。』答へて言はく、『我先に盃を失ふ、今覓取せんと欲す。』問うて言はく、『何處

【師子】 印度のセ
イロン島のこと。

に於て失ひしや。答へて言はく、「初海に入つて失ふ。」又復問うて言はく、「失ひて幾時を經しや。」言はく、「失うてより來二月なり。」問うて言はく、「失うてより來二月なるに、云何が此に覺むるや。」答へて言はく、「我盃を失ひし時、水に畫いて記と作せり、本畫く所の水と此と異なること無し、是故に之を覺む。」又復問うて言はく、「水別ならずと雖も、汝昔失ひし時は乃ち彼に在り、今此に在つて覺むるも何に由つてか得べき。」爾時、衆人大笑せざる無し。亦外道の正行を修せず、相似善中に穢に苦困を計し、以て解脱を求むるが如し。猶し愚人の盃と彼に失ひて、而も此に於て覺むるが如し。

(二〇) 人王の縱暴を説くの喩

昔一人有り。王の罪過を説いて是言を作さく、「王甚だ暴虐にして治政に理無し。」王是語を聞いて即ち大いに曠悲し、竟に誰が此語を作せしやを究悉せず、傍の佞人を信じて一賢臣を捉へ、仰いで脊を削ぎ百兩の肉を取らしむ。人有り證明すらく、此に是語無しと。王心に便ち悔い千兩の肉を索めて用て脊を補ふを爲す。夜中に呻喚し甚だ苦惱なり。王其聲を聞いて問うて言はく、「何を以て苦惱するや。」汝が百兩の肉を取れば十倍して汝に與ふ、意に足らざるか。何が故に苦惱するや。」傍人答へて言はく、「大王、子の頭を截つが如く、千頭を得と雖も子の死を免れず、十倍の肉を得と雖も苦痛を免れず。」愚人も亦爾り、後世を畏れず、現樂に貪濁し、衆生を苦切す。百姓を調發して多く財

物を得、滅罪を得て福報を得んと望む。譬へば彼王の人の脊を割き、人の肉を取り餘肉を以て補ふが如し。痛まざらしめんことを望むも是處有ること無し。

(二) 婦女の更に子を求めんと欲するの喻

往昔世時に婦女人有り、始めて一子有り。更に子を求めんと欲して餘の婦女に問はく、「誰か能く我をして重ねて子有らしむること有るや。」一老母有り、此婦に語つて言はく、「我能く爾をして子を求めて得べからしめん、當に天を祀るべし。老母に問うて言はく、「祀るに何物を須ふるや。」老母語つて言はく、「汝の子を殺し血を取つて天を祀らば、必ず多子を得ん。」時に此婦女、便ち彼語に隨つて其子を殺さんと欲す。傍に智人有り、嗤笑し罵詈すらく、「愚癡無智は乃至此の如し。未生子は竟に得べからざるに而も現子を殺す。」愚人も亦爾り。未生樂の爲に自ら火坑に投じ、種種に身を害して生天を得と爲す。

百喻經 卷第一

【王舍城】 ラーシ
ヤグリハ (Lāhā) 中天竺摩訶陀國の都城
【鵲封竹園】 竹林精舎のこと。
【八部】 天龍八部のこと、天、龍、

聞けることは是の如し。一時佛、王舍城に在し、鵲封竹園に在したまふ。諸の大比丘、菩薩摩訶薩、及び諸の八部三萬六千人と俱なり。是時、會中に異學の梵志五百人有つて俱なりき。座より起つて、佛に白して言さく、「吾聞く、佛道は洪深にして能く及ぶ者無し、故に來歸して問ふ、唯願くば之を説きたまへ。」佛の言はく、「甚だ善し。問うて曰はく、「天

夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽のこと。

【梵志】 プラフマチャーリン (Prahmacarin) 淨裔と譯す婆羅門生活四期中、師に就て修學する間をいふ。

【泥洹】 ニルヴァナ (Nirvana) 滅と譯す、解脱をうること。今は三界の煩惱を斷盡して有餘身を亡し灰身滅智したるをいふ。

【五戒】 不殺生戒、不邪淫戒、不妄語戒、不偷盜戒、不飲酒戒。
【須陀洹果】 三界の見惑を斷じて初めて聖流に入りし位、即ち修道に入りし位。

下は有と爲すや、無と爲すや。答へて言はく、「亦有亦無なり。」「梵志曰はく、「如し今有ならば云何が無と言ふや。如し今無ならば云何が有と言ふや。」「答へて曰はく、「生は言はく有、死は言はく無なり。故に亦有亦無と説くなり。」「問うて曰はく、「人は何より生ずるや。」「答へて曰はく、「人は穀より生ず。」「問うて曰はく、「五穀は何より生ずるや。」「答へて曰はく、「五穀は四大火風より生ず。」「問うて曰はく、「四大火風は何により生ずるや。」「答へて曰はく、「四大火風は空より生ず。」「問うて曰はく、「空は何より生ずるや。」「答へて曰はく、「無所有より生ず。」「問うて曰はく、「無所有は何より生ずるや。」「答へて曰はく、「自然より生ず。」「問うて曰はく、「自然は何より生ずるや。」「答へて曰はく、「泥洹より生ず。」「問うて曰はく、「泥洹は何によつて生ずるや。」「佛の言はく、「汝今問ふ事、何を以て爾く深きや。泥洹とは是れ不生不死の法なり。」「問うて曰はく、「佛泥洹未だしや。」「答へて言はく、「我未だ泥洹せず。」「若し未だ泥洹せざるに、云何が泥洹の常樂を知るを得るや。」「佛の言はく、「我今汝に問はん。天下の衆生は苦と爲すや、樂と爲すや。」「答へて言はく、「衆生は甚だ苦なり。」「佛の言はく、「云何が苦と名く。」「答へて曰はく、「我衆生死する時、苦痛忍び難きを見る。故に知りぬ、死は苦なりと。」「佛の言はく、「汝今死せずして亦死の苦を知る。我十方諸佛の不生不死を見るが故に、泥洹の常樂なるを知るなり。」「五百の梵志心開意解し、求めて五戒を受け、須陀洹果を悟り、復坐すること故の如し、佛の言はく、「汝等善く聽け、今汝が爲に廣く衆喻を説かん。』」

百 喻 經 卷第一

尊者僧伽斯那撰 蕭齊天竺三藏求那毘地譯

入海取沈水喻、賊盜錦繡川裏氈褐喻、種熬胡麻子喻、水火喻、人劾王眼瞞喻、治鞭瘡喻、爲婦買鼻喻、貧人燒糶褐衣喻、牧羊人喻、雇借瓦師喻、估客偷金喻、斫樹取果喻、送美水喻、寶篋鏡喻、破五通仙眼喻、殺群牛喻、飲木箭水喻、見他人塗舍喻、治禿喻、毘舍闍鬼喻。

海に入つて沈水を取るの喩
昔長者子有り、海に入つて沈水を取り積んで年載有り、方に一車を得て持ち來つて家に歸り、市に詣つて之を賣るも、其貴きを以ての故に卒に買者無し、多日を経歴するも售るを得ること能はず。心に疲倦を生じて以て苦惱と爲す。人の炭を賣るを見るに、時に速に售るを得たれば、便ち念言を生ずらく、「之を焼いて炭を作り、速に售るを得べきには如かず。」と。即ち焼いて炭と爲し市に詣つて之を賣るに、半草炭の價直をも得ず。世間の愚人も亦復是の如し、無量の方便もて勤行精進し、仰いで佛果を求め、其得難き

を以て便ち退心を生ぜば、發心し聲聞果を求め速に生死を斷じ、阿羅漢と作るには如かず。

(三) 賊錦繡を偷んで用て麤褐を裹むの喩

昔賤人有り、富家舎に入り、偷んで錦繡を得、即ち持用て故弊の麤褐、種種の財物を裹み、智人に笑はるるを爲す。

世間の愚人も亦復是の如し、既に信心有つて佛法中に入り、善法及び諸の功德を修行し、貪利を以ての故に、清淨戒及び諸の功德を破し、世に笑はるるを爲すも亦復是の如し。

(四) 熬たる胡麻子を種うるの喩

昔愚人有り、生にて胡麻子を食ひ以て不美と爲し、熬て之を食ひて美と爲し、便ち念言を生ずらく、「熬て之を種えて後美を得るには如かず」と。便ち熬て種うるに永く生理無し。

世人も亦爾り。菩薩が曠劫の修行は因つて難行苦行なるを以て、以て不樂と爲し、便ち念言を作さく、「阿羅漢と作りて速に生死を斷じ、其功の甚だ易きには如かず」と。後佛果を求めんと欲するも終に得べからず、彼焦種に復生理無きが如く、世間の愚人も亦復是の如し。

(五) 水火の喩

昔一人有り、事に火を用ゐる及以冷水を須ふ、即便宿火に漂灌せんを以て水を盛り、火上

【五欲】色聲香味觸の五境をいふ。

に置く。後火を取らんと欲するに火都て滅し、冷水を取らんと欲するに水復熱せり。水及以冷水の二事俱に失せり、世間の人も亦復是の如し。佛法中に入つて出家して道を求め、既に出家を得て還復其妻子眷屬を念す。世間の事、五欲の樂、是に由つての故に、其功德の火、持戒の水を失ふ。念欲の人も亦復是の如し。

人王の眼の瞶へるに效ふの喩

昔一人有り、王意を得んと欲し、餘人に問うて言はく、「云何が之を得ん。」と。人有り、語つて言はく、「若し王意を得んと欲せば、王の形相に汝當に之を效ふべし。」此人即便後に王所に至り、王の眼の瞶へるを見て便ち王瞶に效ふ。王之に問うて曰はく、「汝病めるを爲すや。風に著せりと爲すや。何を以て眼瞶へる。」其人王に答ふらく、「我眼を病ます、亦風に著せず、王意を得んと欲し、王の眼の瞶へるを見るの故に之に效ふなり。」王是語を聞いて即ち大いに瞋恚し、即便人をして種種に加害せしめ、擯けて國より出さしむ。世人も亦爾り。佛法王に於て親近を得、其善法を求めて以て自ら増長せんと欲し、既に親近を得たるも、如來法王が衆生の爲の故に種種方便もて其闕短を現するを解せず、或は其法を聞き、字句の不正有るを見、便ち譏毀を生じて其不是に效ふ。是に由つての故に、佛法中に於て永く其善を失ひ三惡に墮す。彼王に效ふが如きも亦復是の如し。

鞭もて瘡を治するの喻

昔一人有り。王の爲に鞭れ、既に鞭を被り已つて馬尿を以て之を拵で速に差えしめんと欲す。愚人有り、之を見て心に歡喜を生じ、便ち是言を作さく、『我決して是治瘡の法を得たり。』と。即便家に歸りて其兒に語つて言はく、『汝我背を鞭て、我妙法を得たり。今之を試みんと欲す。』兒爲に背に鞭つに、馬尿を以て之を拵で以て善巧と爲す。

世人も亦爾り。有人が不淨觀を修して即ち五陰の身瘡を除去するを得たりと言ふを聞き、便ち是言を作さく、『我女色及以五欲を觀んと欲す。』と。未た不淨を見ざるに、返つて女色の惑亂する所と爲り、生死に流轉して地獄に墮す。世間の愚人も亦復是の如し。

婦の爲に鼻を買ふるの喻

昔一人有り、其婦端正なるも唯其鼻のみ醜く。其人外に出でて他の婦女の面貌端正にして其鼻甚だ好きを見、便ち念言を作さく、『我今寧ろ其鼻を截取して我婦の面上に著くべし。亦好からずや。』即ち他の婦の鼻を截ち、持ち來つて家に歸り急に其婦を喚ぶ、『汝速に出で來れ、汝に好き鼻を與へん。』其婦出で來つて即ち其鼻を割き、尋いで他の鼻を以て婦の面上に著く。既に相著かざれば復其鼻を失ひ、唐に其婦をして大苦痛を受けしむ。世間の愚人も亦復是の如し。他の宿舊の沙門婆羅門に大名徳有つて世人に恭敬せられ大利養を得と聞き、便ち是念言を作さく、『我今彼と便ち異らずと爲す。』と。虚しく自ら假稱

【沙門】 シユラマ
ナ(Sramana)勤息
と譯す、出家して

【五陰】 色、受、
想、行、識。

佛道を修さむる人の意。

して妄に有徳と言ふは、既に其利を失ひ、復其行を傷くること、他の鼻を截つて徒に自ら傷損するが如し。世間の愚人も亦復是の如し。

貧人麤褐衣を焼くの喩

昔一人有り、貧窮困乏なり。他の與に客作せんとして麤褐衣を得て、之を被著せり。人有り、之を見て之に語つて言はく、「汝が種姓は端正にして貴人の子なり。云何が此麤弊衣褐を著せる、我今汝に教ふ、當に汝をして上妙の衣服を得しむべし。當に我語に隨ふべし、終に汝を欺かず。」貧人歡喜して其言に敬從す。其人即便前に在りて火を然し、貧人に語つて言はく、「今此麤褐衣を脱し火中に著すべし。此燒處に於て、當に汝をして上妙の欵服を得せしむべし。」貧人即便脱して火中に著す。既に燒けるの後、此火處に於て欵服を求覓せるも都て所得無し。

世間の人も亦復是の如し。過去身より諸の善法を修して此人身を得たれば、應當に保護進徳修業すべきに、乃ち外道邪惡妖女に欺誑せらる。汝今當に我語を信じて諸の苦行を修すべし。巖に投じ、火に赴いて是身を捨て已らば、當に梵天に生じ長く快樂を受くべし。」と。便ち其語を用ゐて即ち身命を捨て、身死するの後、地獄に墮し備に諸苦を受く。既に人身を失へば空しく所獲無し。彼貧人の如きも亦復是の如し。

【梵天】ブラーフマン(Brahman)、色界十八天の一、初禪天の第三。

(三〇) 牧羊人の喩

昔一人有り、牧羊に巧なれば其羊滋多し。乃ち千萬有るも極大の饜食なれば背て外用せず。時に一人有り、巧詐を善くす。便ち方便を作し往いて親友を共にせんとし、之に語つて言はく、「我今、汝と共に極めて親愛を成ぜり。便ち一體たり、更に異り有ること無し。我彼家に一の好女有るを知る、當に汝が爲に求めて用て婦と爲すべし。」牧羊の人之を聞いて歡喜し、便ち大いに羊及び諸の財物を與ふ。其人復言はく、「汝が婦今日已に一子を生ぜり。」牧羊の人未だ婦を見ざるも、其已に生ぜるを聞いて心大いに歡喜し、重ねて彼物と與ふ。其人後に復之に語つて言はく、「汝が兒生じ已つて今死せり。」と。牧羊の人此人の語を聞いて、便ち大いに啼泣して噬歎已ます。

世間の人も亦復是の如し。既に多聞を修するも其名利の爲に其法を秘惜し、背て人の爲に教化演說せず、此漏身に誑惑せられて妄に世樂を期し、己が妻息の如く其が爲に欺かれ、善法を喪失し、後身命并に及び財物を失ひ、便ち大いに悲泣して其憂苦を生ず。彼牧羊の人の如きも亦復是の如し。

(三一) 瓦師を雇借するの喩

昔婆羅門師有り、大會を作さんと欲して弟子に語つて言はく、「我瓦器を須て、以て會用に供せん。汝我爲に瓦師を雇借するに市に詣つて之を覓むべし。時に彼弟子瓦師の家に往

時に一人有り、驢に瓦器を負はせ市に至つて賣らんと欲す。須臾の間に驢盡く之を破せり。還つて家中に來り啼哭懊惱す。弟子見已つて之に問うて言はく、「何を以て悲數懊惱することは是の如きや。」其人答へて言はく、「我方便を爲して勤苦すること積年、始めて器を成ずることを得たり、市に詣つて賣らんと欲するに、此弊惡の驢は、須臾の頃に盡く我器を破せり。是故に懊惱す。」爾時弟子、是を見聞し已つて歡喜して言はく、「此驢は乃ち是れ佳物なり、久時の所作も須臾にして能く破す。我今當に此驢を買ふべし。」瓦師歡喜して即便賣與せば、乘じ來つて家に歸れり。師之に問うて言はく、「汝何を以て瓦師を得て將來せず、是驢を以て爲すや。」弟子答へて言はく、「此驢は瓦師に勝れたり。瓦師が久時に所作せる瓦器を少時に能く破せり。時に師語つて言はく、「汝は大愚癡なり、智慧有ること無し。此驢今や適能く破すべきも、假使百年するも一を成ずること能はじ。」世間の人も亦復是の如し。千百年人の供養を受くと雖も都て報償無く、常に覆害を爲して、終に益を爲さず。背恩の人も亦復是の如し。

(三三) 估客金を偷むの喩

昔二估客有り、共に行いて商賣す。一に眞金を賣り、其第二は兜羅綿を賣る。他の眞金を買ふ者の焼いて之を試むる有り。第二の估客即便他の被燒の金を偷み、兜羅綿を用て裹む。時に金熱するが故に綿を焼いて都盡せり。情事既に露れ二事俱に失へり。彼外道の佛法を偷

(T. 214) 草木の花
架なり。

取して己が法中に著け、妄に己が有と稱するも、是れ佛法に非ざれば、是に由つての故に外典を燒滅し、世に行はれざるが如し。彼金を偷んで事情都て現するが如きも亦復是の如し。

(T. 214) 樹を斫つて果を取るの喻

昔國王有り、一好樹有り。高廣極大にして當に勝果の香うて甜美なるを生ずべし。時に一人有つて王所に來至す、王之に語つて言はく、「此樹上に將に美果を生ぜん」とす。汝能く食ふや不や。即ち王に答へて言はく、「此樹高廣なれば之を食せんと欲すと雖も、何に由つてか能く得ん。」と。即便樹を斷じて其果を得んと望む。既に所獲無ければ徒に自ら勞苦せり。後還堅てんと欲するも、樹已に枯死して都て生理無し。

世間の人も亦復是の如し。如來法王に持戒の樹有り。能く勝果を生ず。心に願樂を生じ、果を得て食せんと欲せば應當に持戒すべし。諸の功德を修するも、方便を解せざれば、返つて其禁を毀つこと彼樹を伐るが如し。復還活かさんと欲するも都て得べからず。破戒の人も亦復是の如し。

(T. 214) 美水を送るの喻

昔一聚落有り、王城を去ること五由旬なり。村中に好美水有り、王、村人に勅して、常に口口に其美水を送らしむ。村人疲苦して悉く移避して此村を遠ざかり去らんと欲す。

【由旬】 ヨーヅヤ
ナ・(Yojana) 印度
里數の名。

【五道】地獄、餓鬼、畜生、人、天

時に彼村主、諸人に語つて言はく、「汝等去ること莫れ。我當に汝が爲に王に白して五山句を改め三山句と作し、汝をして近く往來して疲れざらしむべし。」即ち往いて王に白す。王、爲に之を改めて三山句と作す。衆人聞き已つて便ち大いに歡喜す。人有り語つて言はく、「此故より是木は五山句なり、更に異り有ること無けん。此語を聞くと雖も、王の語を信するが故に、終に背て捨せず。」

世間の人も亦復是の如し。正法を修行して五道を度し、涅槃城に向ふも心に厭倦を生じ便ち捨離せんと欲し、頓に生死に駕し復進むこと能はず。如來法王に大方便有り、一乘法に於て分別して三と説く、小乘の人之を聞いて歡喜して以て易行と爲し、善を修し徳を進め生死を度せんことを求む。後、人の三乘有ること無く、故是れ一道を説くを聞くも、佛語を信するを以て終に背て捨せず、彼村人の如きも亦復是の如し。

(三五) 寶篋の鏡の喩

昔一人有り、貧窮困乏にして多く人に債を負ひ、以て償ふべき無し。即便逃避して空曠處に至りしに、篋に滿中せる珍寶に値ふ。一明鏡有り珍寶の上に著く。以て之を蓋覆せり。貧人見已りて心に大いに歡喜し、即便之を發けるに鏡中に人を見、便ち驚怖を生じ又手して語つて言はく、「我空篋に都て所有無しと謂ひしに、知らざりき、君の有つて此篋中に在らんとは。瞋ること莫れ。」

【三乘】 聲聞乘、菩薩乘、緣覺乘、

【五通】 天眼通、宿命通、他心通、神足通、

【頭陀】 ダータ、(Dhuta) 陶汰と譯す、煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。

凡夫の人も亦復是の如し。無量の煩惱に窮困せられて、而も生死の魔王債主に纏着せらるるを爲し、生死を避けて佛法中に入り、善法を修行して諸の功德を作さんと欲するは、寶篋に値ふが如く、身見の鏡に惑亂せられて妄に有我を見、即便封著して是れ眞實なりと謂ふ。是に於て墮落して諸の功德禪定道品無漏の諸善を失ひ、三乗の道果一切都て失ふ。彼愚人の寶篋を棄てて我見に著する如き者も亦復是の如し。

五通仙眼を破するの喩

昔一人有り、山に入つて道を學して五通仙を得たり。天眼徹視して能く地中に伏藏せる一切の珍寶を見る。國王之を聞いて心に大いに歡喜し、便ち臣に語つて言はく、「云何が此人常に我國に在つて餘處に去らざらしむるを得、我藏中に多くの珍寶を得しめん。」一愚臣有り、輒便往いて至り、仙人の雙眼を挑りて持ち來り王に白さく、「臣以て眼を挑り、更に去るを得ず、常に是國に住ましむ。」と。王、臣に語つて言はく、「仙人の住を得んと食る所以の者は、能く地中の一切の伏藏を見ればなり。汝今眼を毀たば何んが復任ふる所ぞ。」世間の人も亦復是の如し。他の頭陀の苦行山林、曠野塚間樹下に、四意止及び不淨觀を修するを見、便ち強ひて將來し、其家中に於て種種に供養し、他の善法を毀ち道果をして成ぜざらしめ、其道眼を失ひ已つて其利を失ひ、空しく所獲無し。彼愚臣の唐に他の目を毀つが如きなり。

(三) 群牛を殺すの喩

昔一人有り。二百五十頭の牛有り。常に水草を驅逐して隨時に餵食せり。時に一虎有り、一牛を瞰食せり。爾時、牛主即ち念言を作さく、「已に一牛を失へば俱に全足ならず、是牛を用ふるを爲さん。」即便驅けて深坑の高岸に至り、坑底を掘著して盡く皆之を殺せり。凡夫愚人も亦復是の如し。如來具足の戒を受持し、若し一戒を犯すに、慚愧を生じ清淨懺悔せず、便ち念言を作さく、「我已に一戒を破して既に具足せず、何んが持するを用ふるを爲さんや。」と。一切都て破して一も在る者無し。彼愚人の盡く群牛を殺して一も在るもの無きが如し。

(三) 木笛の水を飲むの喩

昔一人有り、行來して渴乏し、木笛中に清淨の流水有るを見、就いて之を飲む。水を飲み已りて足れば即便手を舉げて木笛に語つて言はく、「我已に飲み已れば、水復來る無かれ。」と。是語を作すと雖も、水の流ること故の如し。便ち瞋恚して言はく、「我已に飲み已り、汝に語るに來る莫れと。何を以ての故に來るや。」人有り、之を見て言はく、「汝は大愚癡なり、智慧有ること無し、汝何を以て去らざる。語つて來る莫れと言はば、即ち掩却して餘處に牽いて去るを爲せ。」と。

【六情】眼、耳、鼻、舌、身、意。

世間の人も亦復是の如し。生死渴愛の爲に、五欲の鹹水を飲み、既に五欲に疲厭せらる。彼飲んで足るが如し。便ち是言を作さく、「汝、色馨香味、復更に來つて我をして見しむる莫れ。」と。然るに此五欲相續して斷ぜず、既に之を見已りて、便ち復瞋恚し、「汝に語るに、速に滅して復更に生ずる莫れと。何を以ての故に來つて我をして見しむるや。」時に智人有りて、之に語つて言はく、「汝離るるを得んと欲せば、當に汝が六情を攝して其心意を閉づべし、妄想生ぜずんば便ち解脱を得ん。何ぞ必しも見ずして、生ぜざらしめんと欲する。彼飲水の愚人の如きも、等しくして異り有ること無し。

他人の塗舎を見るの喻

昔一人有り。他舎に往至し、他の屋舎の楹壁塗治せるを見るに、其地平正にして清淨甚好なり。便ち之に問うて言はく、「何を用て和塗して是の如き好を得たる。」主人答へて言はく、「稻穀麩を用て水に浸して熟せしめ、泥に和して壁を塗る故に、是の如きを得。」と。愚人即便念言を作さく、「若し純ら稻麩を以て合稻して、用て之を作すには如かず。壁は白淨なるべく泥始めて平好ならん。」と。便ち稻穀を用て泥に和し、用て其壁を塗り平正を得んことを望めるに、返つて更に高下にして、壁都て劈裂し、虚しく稻穀を棄てて都て利益無し。惠施して功德を得べきには如かず。

凡夫の人も亦復是の如し。聖人の説法に諸善を修行して此身を捨て已つて生天及以解脱

を得べきを聞き、便ち自ら身を殺して生天及び解脱を得んことを望み、徒に自ら虚しく喪ひ、空しく所獲無きこと、彼愚人の如し。

(四〇) 禿を治するの喩

昔一人有り、頭上に毛無し。冬は則ち大い寒く、夏は則ち熱を患ふ。兼ねて蚊虻の咬食する所たり。晝夜に惱を受けて甚だ以て苦と爲す。一醫師有り、諸の方術多し。時に彼禿人往いて其所に至り、其醫に語つて言はく、『唯願くば大師、我爲に之を治せよ。』時に彼醫師も亦復頭禿けたり。即便帽を脱して之に示して語つて言はく、『我も亦之を患ひ、以て痛苦と爲す。若し我治能く差ゆるを得しむれば、先づ自ら治して以て其患を除かん。』

世間の人も亦復是の如し。生老病死に侵惱せられ、長生不死の處を求めんと欲し、沙門婆羅門等世の良醫の善く衆の患を療す有るを聞いて、便ち其所に往いて之に語つて言はく、『唯願くば我爲に此無常生死の患を除き、常に安樂に處して長く存して變ぜざらしめよ。』時に婆羅門等即便報じて言はく、『我も亦此無常生死を患へて、種種に長存の處を求覓するも終に得ること能はず。今我若し能く汝をして得しめば、我も亦應に先づ自ら得汝も亦得しむべし。』

彼禿を患ふるの人の、徒に自ら疲勞して差ゆるを得ること能はざるが如し。

【毘舍闍鬼】

【毘舍闍鬼】(ビンヤーチヤー) (毘舍闍) 持國天所領の鬼の名稱。顯鬼と譯す。

昔二の毘舍闍鬼有り、共に一篋、一杖、一屐を有す。二鬼共に諍ひて各各得んと欲す。二鬼紛紜すること竟日なるも平かならしむること能はず。時に一人有り、來つて之を見已つて之に問うて言はく、「此篋杖屐に何の奇異か有る。汝等共に諍ひ、瞋忿して乃ち爾る。」二鬼答へて言はく、「我此篋は、能く一切の衣服飲食床褥臥具資生の物を出し、盡く申より出づ。此杖を執る者には、怨敵歸伏して敢て與に諍ふ無く、此屐を著くる者は能く人をして飛行するに罣礙無からしむ。」此人聞き已つて即ち鬼に語つて言はく、「汝等小しく遠ざかれ。我當に爾が爲に平等に之を分つべし。」鬼其語を聞いて諍いで即ち遠く避く。此人即時に篋を抱き杖を捉り屐を躡みて飛ぶ。二鬼愕然たるも竟に所得無し。人、鬼に語つて言はく、「爾等諍ふ所、我已に去るを得たり。爾等をして更に所諍無からしむ。」と。

毘舍闍とは衆魔及以外道に喩ふ。布施は篋の如し。人天五道資用の具、皆中より出づ。禪定は杖の如し。魔怨煩惱の賊を消伏す。持戒は屐の如し。必ず人天に昇る。諸魔外道篋を諍ふとは、有漏中に於て強ひて果報を求め、空しくして所得無きを喩ふ。若し能く善行及び布施持戒禪定を修行せば、便ち苦を離るることを得て道果を獲得せん。

百喻經 卷第三

尊者僧伽斯那撰
蕭齊天竺三藏求那毘地譯

估客駝死喻、磨大石喻、欲食半餅喻、奴守門喻、偷齎牛喻、貧人能作鴛鴦鳴喻、野干爲折樹枝所打喻、小兒爭分別毛喻、醫治春僂喻、五人買婢共使作喻、伎兒作樂喻、師患脚付二弟子喻、蛇頭尾共爭在前喻、願爲王剃髮喻、索無物喻、躡長者口喻、二子分財喻、觀作瓶喻、見水底金影喻、梵天弟子造物因喻、病人食雉肉喻、伎兒着戲羅刹服共相驚怖喻人謂故屋中有惡鬼喻、五百歡喜丸喻。

(四) 估客の駝、死するの喻

譬へば估客の遊行して商賣するが如し。會路中に於て駝卒に死す。駝上に載する所多く珍寶有り。細軟の上氈、種種の雜物あり。駝既に死し、已れば、即ち其皮を剥ぐ。商主捨行するに、坐に二弟子ありて、之に語つて言はく、「好く駝皮を見て濕爛せしむる莫れ。」其後天雨るに、二人頑癡にして、盡く好氈を以て此皮を覆ふ、上氈盡く爛壞し、皮氈の價、理自ら懸殊たり。愚癡を以ての故に氈を以て皮を覆ふ。

世間の人も亦復是の如し。其不殺とは白麩に喩へ、其陀皮とは即ち財貨に喩へ、大雨濕欄とは放逸にして善行を敗壞するに喩ふ、不殺戒とは即ち佛法身の最上妙因なり。然も修する能はず、但財貨を以て、諸の塔廟を造り衆僧と供養し、根を捨てて末をとり、其本を求めず、五道に漂浪して能く自ら出づること莫し。是故に行者、應當に精進して不殺戒を持すべし。

（四三）大石を磨くの喩

譬へば人有るが如し。一大石を磨き勤めて功力を加ふ。日月を経歴して小麩牛を作る。用功既に重きも期する所甚だ輕し。世間の人も亦復是の如し。大石を磨くとは學問に精勤勞苦するに喩へ、小牛を作るとは、名聞互に相是非するに喩ふ。夫れ學を爲す者は研思精微、博通多識にして、宜しく應に履行して遠く勝果を求むべし。方に名譽憍慢貢高を求めば、過患を増長せん。

（四四）牛餅を食せんと欲するの喩

譬へば人有るが如し。其が飢うるに因つての故に七枚の煎餅を食し、六枚半を食し已りて便ち飽満を得たり。其人悲悔して手を以て自ら打つて、是言を作さく、「我今飽足せるは此半餅に由る。然も前の六餅は唐に自ら捐棄せり。設し半餅の能く充足するを知らば應

【三界】欲界、色界、無色界。

【六塵】色、聲、香、味、觸、法。

に先づ之を食すべし。

世間の人も亦復是の如し。本より以來、常に樂有ること無し。然も其癡倒して横に樂想を生ずること、彼癡人の半番の餅に於て飽想を生ずるが如し。世人は無知なれば富貴を以て樂と爲す。夫れ富貴なるは求むる時甚だ苦なり。既に獲得し已れば守護するも亦苦なり。後還之を失へば憂念する復苦なり。三時中に於て都て樂有ること無し。猶し衣食の如く遮ふが故に樂と名け、辛苦の中に於て横に樂想を生ず。諸佛説いて言はく、『三界は安きこと無し。皆是れ大苦なり。凡夫倒惑して、横に樂想を生ず。』と。

(日五) 奴、門を守るの喻

譬へば人有るが如し。將に遠行せんと欲し、其奴に勅して言はく、『爾好く門を守り并に驢索を看よ。』其主行いて後、時に隣里家に樂と作す者有り。此奴、聽かんと欲するも自ら安きこと能はず、尋いで索を以て門に繋け驢上に置き、負うて戲處に至つて其作樂を聽けり、奴去るの後、舍中の財物を賊盡く持去れり。大家行還して其奴に問うて言はく、『財寶所在するや。』と。驢便ち答へて言はく、『大家先に門驢及び索を付せり。是より以外は奴の知る所に非ず。』大家復言はく、『爾を留めて門を守らしむるは、正しく財物の爲なり。財物既に失はば門を用ふることを爲さんや。』

生死の愚人の愛奴僕たる亦復是の如し。如來教誡して常に根門を護り、六塵に著して無

明の驢を守り。愛索を看ること莫らしむ。而も諸比丘は佛教を奉ぜず。利養を貪求して詐りて清白を現じ、靜處にして坐す。心意流馳して五欲に貪著し、色聲香味に惑亂せられ、無明は心を覆ひ愛索は纏縛し、正念覺意の道品の財寶は悉く皆散失す。

犛牛を偷むの喻

譬へば一村共に犛牛を偷んで、共に之を食するが如し。其牛を失へる者跡を逐うて村に至り、此村人を喚んで其由状を問ひ、之に語つて言はく、『爾此村に在りや不や。偷める者對へて曰はく、『我實に村無し。』又問はく、『爾が村中に池有り、此池邊に在つて共に牛を食するや不や。』答へて言はく、『池無し。』又問はく、『池の傍に樹有りや不や。』對へて言はく、『樹無し。』又問はく、『牛を偷むの時、爾の村に東在りや不や。』對へて曰はく、『東無し。』又問はく、『當に爾らば牛を偷める日中時に非ざるや。』對へて曰はく、『中無し。』又問はく、『縦し村無く及以樹無かるべくんば、何んが天下に東無く時無きこと有らんや。』爾の妄語を知れり。都て信すべからず。爾牛を偷んで食せりや不や。』對へて言はく、『實に食せり。』

破戒の人も亦復是の如し。罪過を覆藏して背て發露せず、死して地獄に入る。諸天神、天眼を以て觀れば覆藏することを得ざることを、彼牛を食して欺拒するを得ざるが如し。

【優鉢羅華】ウツ
バラ(Utthari)青蓮
華のこと。

【閻羅王】ヤミラ
ーシヤ(Yamaraj)
地獄の主。

(四七)びんじんをなうつ みやうな
貧人鴛鴦の鳴を作すの喩

昔外國の節法慶の日に、一切の婦女盡く優鉢羅華を持して鬢飾と爲す。一貧人有り、其婦語つて言はく、『爾若し能く優鉢羅華を得來り用て我に與へたば、爾が爲に妻と作らん、若し得ること能はざれば我爾を捨てて去らん。』其夫先來、常に善能く鴛鴦の鳴を作す。即ち王の池に入りて鴛鴦の鳴を作して優鉢羅華を偷まんとす。時に守池者而も是問を作さく、『池中にある者は誰ぞ。』と。而るに此貧人口を失して答へて言はく、『我は是れ鴛鴦なり。』と。守者捉へ得て將ゐて王所に詣らんとして中道に於て、復更に和聲して鴛鴦の鳴を作せり。守池者言はく、『爾先に作さずして今作すとも何の益かあらん。』と。世間の愚人も亦復是の如し。終身殘害して衆の惡業を作し、心行を習つて調善せしめず、命終の時に臨んで方に言はく、『今我修善を得んと欲す。』と。獄卒將ゐ去つて閻羅王に付し、善を修せんと欲すと雖も亦及ぶ所無きのみ。彼愚人の王所に到らんと欲して鴛鴦の鳴を作すが如し。

(四八)やかんをなうつ
野干樹枝を折つて打たるるの喩

譬へば野干の樹下に在るに、風吹いて枝折れ其脊上に墮するが如し。即使目を閉ぢて樹を看んと欲せず、捨棄して走り露地に到る。乃至日暮るるも亦肯て來らず。遙に風吹いて大樹の枝柯動搖上下せるを見て、便ち言つて我を喚ぶとて、尋いで樹下に來る。愚癡の

弟子も亦復是の如し。已に出家を得て師長に近くを得たるも、小呵責を以て即便逃走す。復後時に於て悪知識に遇ひ惱亂して已まず。方に去る所に還る。是の如きの去來を是を愚惑と爲す。

(四九) 小兒争つて毛を分別するの喩

譬へば昔日二小兒有り、河に入つて遊戯するが如し。此水底に於て一把の毛を得たり。一小兒言はく、『此は是れ仙の鬚なり。』と。一小兒言はく、『是は是れ羆の毛なり。』と。

爾時、河邊に一仙人有り、此二小兒、之を諍つて已まず。彼仙所に詣つて其所疑を決せんとす。而るに彼仙人尋いで即ち米及び胡麻子を取り、口中に含嚼し吐いて掌中に著け、小兒に語つて言はく、『我掌中の者は孔雀の尿に似たり。』と。而も此仙人、他門に答へず、人皆之を知る。

世間の愚人も亦復是の如し。説法の時、諸法を戲論するも正理に答へず、彼仙人の所問に答へず、一切人の嗤笑する所と爲るが如し。浮漫の虚説も亦復是の如し。

(五〇) 醫、脊癭を治するの喩

譬へば人有るが如し、卒に脊癭を患ひ醫に請うて之を療す。醫、酥を以て塗り、上下に板を著け、力を用て痛壓せるに、覺えず雙目一時に俛出せり。

世間の愚人も亦復是の如し。修福の爲の故に治生估販し、諸の非法を作す。其事成すと雖も利害を補はず、將來の世、地獄に入ること。雙日の出づるに喩ふ。

(五)五人婢を買ひ共に使作するの喩

五人婢を買ひ共に使作するの喩、
譬へば五人の共に一婢を買ふが如し、其中の一人此婢に語つて言はく、「我與に衣を洗へ。」次に一人有り、復語らく、「衣を洗へ。」と。婢次に語つて言はく、「先づ我が與に洗はん。」と。後者悲つて曰はく、「我前人と共に、同じく汝を買へるに、云何が獨り爾るや。」即ち鞭十下す。是の如く五人各打つこと十下なり。

五陰も亦爾り、煩惱の因縁合して此身を成す。而も此五陰は恆に生老病死無量の苦惱を以て衆生を榜笞す。

(五)伎兒樂を作すの喩

伎兒樂を作すの喩、
譬へば伎兒の如し。王前に樂を作す、王、千錢を許せば後王に従つて索むるも、王之を與へず、王、之に語つて言はく、「汝向に樂を作して空しく我を樂しましむるのみ。我汝に錢を與ふるも、亦汝を樂しましむるのみ。」

世間の果報も亦復是の如し。人中天上に少樂を受くと雖も、亦實有ること無し。無常なれば敗滅して久しく住するを得ざること、彼空しき樂の如し。

(五三三) 師、脚を患ひて二弟子に付するの喩

譬へば一師に二弟子有るが如し。其師、脚を患ふ二弟子を遣して人に一脚を當らしめ隨時に按摩せしむ。其二弟子常に相憎嫉す。一弟子行すれば其一弟子は其が按摩すべき所の脚を捉へて石を以て打折す。彼既に來り已つて其が是の如きを忿り、復其人の按摩する所の脚を捉へて尋いで復打折す。佛法の學徒も亦得是の如し。方等の學者は小乘を非斥し、小乘の學者は復方等を非す。故に大聖の法典をして二途兼ねて亡はしむ。

(五四) 蛇の頭尾共に前に在りと争ふの喩

譬へば蛇有るが如し。尾、頭に語つて言はく、「我應に前に在るべし。」頭、尾に語つて言はく、「我恆に前に在り、何を以て卒に爾るや。」頭果して前に在れば其尾樹に纏うて去ることを得ること能はず。尾を放つて前に在るに即ち火坑に墮して燒爛して死せり。

師徒弟子も亦復是の如し。言はく、「師、耆老なれば每恆に前に在るも、我諸の年少も應に導首と爲るべし。」と。是の如きの年少の戒律に閑はず、多く所犯有り、因つて即ち相求めて地獄に入る。

(五五) 願つて王の爲に剃鬚するの喩

昔王有り、一親信有り、軍陣中に於て没命して王を救ひ安全を得しめたり、王大いに歡喜して其が所願を與へんとして、卽便問うて言はく、「汝何をか求むる所ぞ、汝が所欲を恣にせよ。」臣、便ち答へて言はく、「王髮を剃る時、願くば我剃るを聽したまへ。」王言はく、「此事若し汝が意に適せば、汝の所願を聽さん。」

此の如きの愚人は世人の笑ふ所。半國の治、大臣輔相悉く皆得べきに乃ち賤業を求む。愚人も亦爾り。諸佛は無量劫に於て難行苦行して自ら成佛を致せり。若し佛に遇ふを得、及び遺法に値ひ、人身を得ること難きは、譬へば盲龜の浮木孔に値ふが如し。此二値ひ難きに今已に遭遇せり。然るに其意劣り、小戒を奉持し、便ち以て足れりと爲し、涅槃勝妙の法を求めざるなり。心に進んで求むる無く、自ら邪業を行じ、便ち以て足れりと爲す。

(五) 無物を索むるの喻

昔二人有り、道中共に行く。一人有つて胡麻車を將ゐて險路中に在り、前むを得ること能はざるを見る。時に將車者彼二人に語らく、「我を佐けて車を推し、此險路を出でしめよ。」二人答へて言はく、「我に何物をか與ふる。」將車者言はく、「無物を汝に與へん。」時に此二人卽ち佐けて車を推して平地に至る。將車人に語つて言はく、「我に物を與へ來れ。」答へて言はく、「無物なり。」又復語つて言はく、「我に無物を與へよ。」二人の中其一人は笑を合んで言はく、「彼肯て與へじ、何ぞ愁ふるを爲すに足らんや。」其人答へて言はく、「我に無物

【無相無願無作】
謂ゆる三三昧なり

を與ふと、必ず應に無物有るべし。其一人言はく、『無物と言ふは二字共に合して是れ假名たり。』

世俗の凡夫若し無物ならば便ち無所有處を生ず。第二人の言ふ無物とは即ち是れ無相無願無作なり。

（五七）長者の口を踏むの喻

昔大富長者有り、左右の人其意を取らんと欲し皆恭敬を盡せり。長者唾する時、左右の

侍人脚を以て踏却す、一人の愚者有り、踏を得るに及ばずして、是言を作さく、『若し地に

唾せば諸人踏却す。唾せんと欲する時、我當に先づ踏むべし。』是に於て長者正しく咳唾せ

んと欲す、時に此愚人、即便脚を擧げて長者の口を踏むに、唇破れ齒折れたり。長者愚

人に語つて言はく、『汝何を以ての故に我唇口を踏めるや。』愚人答へて言はく、『若し長者

の唾、口より出でて地に落ちなば、左右の詔者已に踏去し得て、我踏まんと欲すと雖も、

毎常に及ばず。是を以ての故に、唾口より出でんと欲するを脚を擧げて先づ踏み、汝が意

を得んと望むなり。』

凡そ物は時を須つ。時未だ到るに及ばざるに、強ひて功力を設けなば返つて苦惱を得ん。

是を以ての故に、世人當に時と非時とを知るべし。

【摩羅】 マラ (Ma
ラ)。
【刹利】 クシヤト
リヤ (Kshatriya) 土
田主と譯す。印度
四姓の一にて武士
階級

(五八)にせいで、
二子財を分つる諭

昔摩羅國に刹利有り、病を得て極めて重し、必ず定んで死するを知る。二子に誠勸すらく、『我死するの後善く財物を分けよ。』と。二子に隨つて其死後に於て分けて二分と作す。兄言はく、『弟の分平ならず。』と。爾時一愚老人有り、言はく、『汝をして物を分つを教へ、平等を得しめん。現に所有の物破して二分と作す。云何が之を破す。有ゆる衣裳中より割つて二分と作し、槃瓶も亦復中より破して二分と作し、所有の瓮瓿も亦破して二分と作し、錢も亦破して二分と作す。是の如く一切所有の財物盡く皆之を破して二分と作せ。』と。

是の如く物を分たば人に嗤笑せられん。諸の外道の如く偏に分別論を修す。論門に四種有り、決定答論門有り。譬へば人一切有にして皆死するが如き、此は是れ決定答論門なり。死者必ず生有り、是れ應に分別答なるべし。愛盡くれば生無く、愛有れば必ず生有り、是を分別答論門と名く、有が人を最勝と爲さずやと問はば、應に反つて言ふべし。『汝三惡道を問ふや、諸天を問ふと爲すや。若し三惡道を問はば、人實に最勝爲り。若し諸天を問はば、人必ず如かずと爲す。』
是の如き等の義は反問答論門と名く。若は十四難を問ひ、若は世界及び衆生の有邊無邊、有終始無終始、是の如き等の義を問ふを置答論門と名く。諸の外道愚癡なるに自ら以て智慧と爲し、四種の論を破して一分別論を作る。諭へば愚人の錢物を分くるに、錢を破し

て兩段と爲すが如し。

(五九) 瓶を作るを觀るの喩

譬へば二人陶師所に至るが如し。其輪を踏んで瓦瓶を作るに看て厭足無し。一人捨去つて大會に往至して極めて美饈を得、又珍寶を獲たり。一人瓶を觀て是言を作さく、『我看訖るを待たん。』是の如く漸冉して乃ち日没に至るも瓶を觀るを已まざれば衣食を失へり。愚人も亦爾り。家務を修理して非常を覺らず。

今日此事を營み、明日彼業を造る

諸佛大龍出でて、雷音世間に遍く

法雨に障礙無きも、事を縁するの故に聞かず

死の卒に至るを知らず、此諸佛の會を失ふ

法珍寶を得ず、常に惡道の窮まれるに處す

背棄して正法を放ち、彼緣事瓶を觀じて

終に常に竟已無し、是故に法利を失ひ

永く解脱の時無し

(六〇) 水底に金影を見るの喩

昔癡人有り、大池所に往いて水底に影を見るに眞金像有り。謂く、金有りと呼んで、即ち水中に入り、撓泥して求覓するも疲極して得ず。還つて出で復坐せるに須臾にして水清く、又金色を現す。復更に入裏し撓泥して更に求覓するも亦復得ず。其是の如きの父、子を見めて來つて子を見るを得たり。而して子に問うて言はく、「汝何の所作をしてか疲困是の如きや。」子父に白して白さく、「水底に眞金有り、我時に水に投じて泥を撓して取らんと欲するも疲極して得ず。」父水底に眞金の影を見て此金の樹上に在るを知る。之を知る所以は影水底に現すればなり。其父言つて曰はく、「必ず飛鳥金を銜えて樹上に著せしならん。」と。即ち父の語に隨つて樹に上つて求め得たり。

凡夫愚癡の人、無智なるも亦是の如し
 無我陰中に於て、横に有我の想を生ず
 彼金影を見るが如く、勤苦して求覓するも徒に勞して所得無し

(六) 梵天の弟子は造物の因なる喩

婆羅門衆、皆言はく、「大梵天王は是れ世間の父、能く萬物を造る。造萬物主には弟子有り。言はく、我も亦能く萬物を造らんと欲す。」と。實に是れ愚癡なるに、自ら有智と謂へり。梵天に語つて言はく、「我萬物を造らんと欲す。」梵天王語つて言はく、「此意を作すこと莫れ。」

汝造ること能はず。」と、天語を用ひずして便ち物を造らんと欲す。梵天、其弟子が所造の物を見、即ち之に語つて言はく、「汝頭を作ること太だ大なるに、項を作ること極めて小、手を作ることに太だ大なるに、臂を作ることに極めて小、脚を作ることに極めて小なるに、踵を作ることに極めて大なり。作ること毘舍闍鬼に如似たり。」と。

此義を以て當に知るべし、各各自業の所造にして梵天の能造に非ざることを。諸佛の説法は二邊に著せず、亦斷に著せず、常に著せず、八正道の説法に如似たり。諸の外道、是斷を見、常と見、事已れば便ち執著を生ず。世間を欺誑し、法形像を作り、所説するも、實に是れ非法なり。

【八正道】 正見、正思、正業、正命、正精進、正定、正語、正念。

病人雑肉を食するの喩

昔一人有り、病患委に篤し。良醫之を占つて云はく、「恆に一種の雑肉を食すべくんば病癒ゆることを得べし。」と。而れば此病者、市に一雑を得、之を食し已り盡して更に復食せず、醫、後時に於て見て便ち之に問はく、「汝の病癒えしや不や。」病者答へて言はく、「醫、先に我に教へて恆に雑肉を食せしむ。是故に今や一雑を食し已り、盡して更に敢て食せず。」醫、復語つて言はく、「若し前の雑、已盡しなば何んが更に食せざる。汝今云何が正に一雑を食するのみにて、病癒ゆるを得んと望むや。」一切の外道も亦復是の如し。佛菩薩無上の良醫の説言を聞いて、當に心識を解すべし。

外道等常見を執し、便ち謂く、過去未來現在、唯是れ一識にして遷謝有ること無しと、猶し一雉を食するがごとし。是故に其愚惑煩惱の病を療すこと能はず。大智諸佛は諸の外道に、其常見を除き、一切の諸法は念念の生滅なり、何んが一識の常恆不變なる有らんと教ふ。彼世醫の更に雉を食して病愈ゆるを得んと教ふるが如し。佛も亦是の如し。諸の衆生を教へて諸法を解するを得しむ。壞の故に不常なり、續の故に不斷なり、即ち常見の病を剷除するを得。

伎兒戲に羅刹服を著け、共に相驚怖するの喩

昔乾陀衛國に諸の伎兒有り、時飢儉なるに因つて食を他土に逐ひ、婆羅新山を経たり。而るに此山中、素惡鬼食人羅刹饑し。時に諸の伎兒、會して山中に宿す。山中風寒ければ火を然して臥せり。伎兒の中に寒を思ふる者有り。彼戲に木羅刹の服を着、火に向つて坐せり、時に行伴中の睡より寤むる者、卒に火邊に一羅刹有るを見る。竟に諦觀せずして之を捨てて走る。遂に相驚動して一切の伴侶悉く皆逃奔せり。時に彼伴中羅刹の衣を着くる者も亦復尋いで逐ひ、奔馳して絶走す。諸の同行者、其が後に在るを見て害を加へんと欲せんを謂ひ、倍增して惶怖し山河を越度し、溝壑に投起し、身體傷破し疲極委頓せり。乃至天明けて方に鬼に非ざるを知る。一切の凡夫も亦復是の如し。煩惱に處して善法に飢儉して、遠く常樂我淨無上の法食を求めんと欲して、便ち五陰の中に於て横に我

【乾陀衛】 ガンダ
ーラ (Gandhara)
持地等と譯す、北
印度境の國名。
【羅刹】 ラークシ
ヤサ (Rakshasa) 可
畏、食人鬼と譯す、
惡鬼の通名。

を計す。我見を以ての故に、生死に流馳し、煩惱に逐はれて自在を得ず。三塗惡趣の溝壑に墜墮す。天明に至るとは、生死の夜盡き智慧の明曉くるに喩ふ。方に五陰に眞我有ること無きを知るなり。

(六四) 人故屋中に惡鬼有りと言ふの喩

昔故屋有り、人、此室に常に惡鬼有りと謂ふ。皆悉く怖畏して敢て寢息せず。時に一人有り。自ら大膽なりと謂ふ、而も是言を作さく、「我此室中に入つて寄臥し一宿せんと欲す。」と。即ち入つて宿止す。後に一人有り、自ら膽勇、前人に勝ると謂へり。復傍人の此室中に恆に惡鬼有りと言ふを聞いて、即ち中に入らんと欲して門を排して前まんとす。時に先に入りし者、其が是れ鬼なりと謂ひ、即ち復門を推し遮へて前むを聽さず。後に在つて來る者、復鬼有りと謂ひ、二人鬪諍して遂に天明に至る。既に相親已つて方に鬼に非ざるを知る。

一切の世人も亦復是の如し。因緣暫く會するも宰主有ること無し。一一推析せば誰か是れ我なる者ぞ。然も諸の衆生横に是非を計し、強ひて諍訟を生ずること、彼二人の如く等しくして差別無し。

(六五) 五百歡喜丸の喩

昔一婦有り、荒姪度無し。欲情既に盛んなれば其夫を嫉悪し、毎に方策を思ひ、規つて残害せんと欲す。種種に計を設くるも其便を得ず。會其夫の聘せられて隣國に使用するに値ふ。婦密に計を爲して毒藥丸を造り、用て夫を害せんと欲す。詐つて夫に語つて言はく、「爾今遠く使するに乏短有らんことを慮り、今我五百の歡喜丸を造作せり。用て資糧と爲さんとす。以て爾に送る。爾若し國を出でて他境界に至り、飢困せるの時乃ち取つて食ふべし。」夫其言を用他界に至り已つて未だ之を食するに及ばず、夜闇中に於て林間に止宿し、惡獸を畏懼すれば樹に上つて之を避く。其歡喜丸は忘れて樹下に置けり。即ち其夜を以て五百の偷賊の、彼國王の五百匹の馬并に及び寶物を盜むに値へり。來つて樹下に止る。其逃突なるに由つて盡く皆飢渴せり。樹下に於て歡喜丸を見、諸賊取り已つて各一丸を食ふ。藥の毒氣盛なれば、五百の群賊一時に俱に死せり。時に樹上の人、天明に至り已つて、此群賊の死して樹下に在るを見、詐つて弓箭を以て死屍を斫射し、其鞍馬并に及び財寶を收め、驅つて彼國に向ふ。時に彼國王多く人衆を將る、迹を案じて來り逐ふ。會中路に於て彼王に値ふ。彼王、問うて言はく、「爾は是れ何人、何處に馬を得しや。其人答へて言はく、「我は是れ某國の人、而も道路に於て此群賊に値ひ、共に相斫射し、五百の群賊今皆一處に死して樹下に在り。是に由つての故に我此馬及び珍寶を得、來つて王國に投ず、若し信ぜられずば、遣して賊の瘡痕殺害の處所を往看すべし。」

王時に即ち親信を遣し、往看せるに果して其言の如し。王時に欣然として未曾有たりと

數す。既に國に還り已つて、厚く爵賞を加ふ、大いに珍寶を賜ひ、封するに聚落を以てせり。彼王の舊臣、咸く嫉妬を生じて王に白して言さく、「彼は是れ遠人、未だ服信すべからず、如何が卒爾に寵遇過厚にして、爵賞舊臣に踰越せる。」遠人聞き已つて是言を作さく、「誰か勇健有る、能く我と共に試みん。請ふ平原に於て其技能を投べん。」舊人愕然として敢て敵する者無し。後時、彼國の大曠野中に惡師子有り、道を蔽ち人を殺し、王路を斷絶す。時に彼舊臣、群に共に之を議すらく、「彼遠人は自ら勇健にして能く敵する者無しと謂ふ。今復若し能く彼師子を殺さば、國の爲に害を除き眞に奇特と爲す。」と。是議を作し已つて便ち王に白す。王是を聞き已つて、刀杖を給賜し尋いで即ち之を遣す。爾時、遠人既に勅を受け已つて、其意を堅強にして師子所に向へり。師子之を見て奮激嗚吼し、騰躍して前む。遠人驚怖して即便樹に上る。師子口を張り頭を仰いで樹に向ふ。其人怖急して捉ふる所の刀を失するに、師子の口に値ひ、師子尋いで死せり。爾時、遠人歡喜踴躍し、來つて王に白すに、王倍寵遇せり。時に彼國人卒爾に敬服し、咸く皆讚歎せり。

其婦人の歡喜丸とは不淨施に喩へ、王使を遣すとは善知識に喩へ、他國に至るとは諸天に喩へ、群賊を殺すとは須陀洹を得、強ひて五欲并に諸の煩惱を斷つに喩へ、彼國王に遇ふとは賢聖に遭値するに喩へ、國の舊人等嫉妬を生ずとは、諸の外道有智者の能く煩惱及び五欲を斷ずるを見て、便ち誹謗を生じて此事無しと言ふに喩へ、遠人激勸して舊臣の能く我と共に敵と爲る者無しと言ふは、外道に於て敢て抗衡する無きを喩へ、師子を

殺すとは、魔を破し既に煩惱を斷じ、又惡魔を伏して便ち無着道果の封賞を得たるに喩へ、
毎常に怖怯すとは。能く弱を以て疆を制するに喩ふ、其所時に於て淨心無しと雖も、然も
彼其施もて善知識に遇ひ、便ち勝資を獲たり、不淨の施すら猶尙此の如し。況んや復善心
もて歡喜して布施せんをや。是故に應當に福田所に於て勤心修施すべし。

百喻經 卷第三

百喻經 卷第四

尊者僧伽斯那撰 蕭齊天竺三藏求那毘地譯

口誦乘船法而不解用喻、夫婦食餅共爲要喻、共相怨害喻、効其祖先急速食喻、嘗菴婆羅果喻、爲二婦故喪其兩目喻、唵米決口喻、詐言馬死喻、出家凡夫貪利養喻、駝瓮俱失喻、田夫思王女喻、搆驢乳喻、與兒期早行喻、爲王負机喻、倒灌喻、爲熊所齧喻、比種田喻、獼猴喻、月蝕打狗喻、婦女患眼痛喻、父取兒耳瑣喻、劫盜分財喻、獼猴把豆喻、得金鼠狼喻、地得金錢喻、貧兒欲與富等財物喻、小兒得歡喜丸喻、老母捉熊喻、摩尼水竈喻、二鴿喻、詐稱眼盲喻、爲惡賊所劫失蠶喻、小兒得大龜喻。

口に乗船の法を誦して解用せざるの喻

昔大長者子有り、諸の商人と共に海に入つて寶を探る。此長者子善く入海捉船の方法を誦せり。若し海水激湍河流磯激の處に入らば、當に是の如く捉へ、是の如く正し、是の如く住すべし。衆人に語つて言はく、『入海の方法我悉く之を知れり。』衆人聞き已つて深く其語を信ぜり。既に海中に至つて未だ幾時も經ざるに、船師病に遇ひ、忽然として便ち

【安般】 アナーバ
ーナ (Anāpāna) 數
息觀と譯す、出息
入息を數へて心を
鎮むる法。

死せり。時に長者子即代處し、洞漚駛流の中に至つて唱へて言はく、「當に是の如く捉へ、是の如く正すべし。」と。船は盤廻旋轉し、前進して寶所に至ること能はず、擧船の商人水に没して死せり。凡夫の人も亦復是の如し。少しく禪法安般數息及び不淨の法を習ひ其文を誦すと雖も其義を解せず、種種の方法も實に所曉無く自ら善解せりと言ひ、妄に禪法を授け、前人をして迷亂失心せしめ、法相倒錯し、終年累歲空しく所獲無し。彼愚人の他をして海に没せしむるが如し。

夫婦餅を食して共に要を爲すの喻、
昔夫婦有り、三番の餅有り。夫婦共分して各一餅を食す。餘の一番在り、共に要言を

作さく、「若し語る者有らば要す餅を與へじ。」と。既に要を作し已つて、一餅の爲の故に各敢て語らず。須臾にして賊有り、家に入つて偷盜し、其財物を取る。一切の所有盡舉く賊の手にあり。夫婦二人、先の要を以ての故に眼に看るも語らず。賊不語を見て、即ち其夫の前に其婦を侵略す。其夫眼見するも亦復語らず。婦便ち賊と喚んで其夫に語つて言はく、「云何が癡人なる、一餅の爲の故に賊を見るも喚ばざるや。其夫、手を拍つて笑つて言はく、「咄婢、我定んで餅を得たり、復爾に與へず。」と。世人之を聞いて嗤笑せざる無し。
凡夫の人も亦復是の如し。小名利の爲の故に詐つて靜默を現じ、虛假煩惱種種の惡賊に侵略せられ、其善法を喪ひ三塗に墜墮し、都て怖畏して出世道を求めず、方に五欲に於て

耽着嬉戲し、大苦に遭ふと雖も、以て患を爲さず。彼悪人の如く等しくして異り有ること無し。

(六八)とも 共に相怨害するの喩

昔一人有り、他と共に相瞋り愁憂して樂しまず。人有り、問うて言はく、「汝今何が故に愁悴することは是の如きや。即ち之に答へて言はく、「人有り、我を毀るも力報する能はず、何の方もてか之に報するを得べきやを知らず、是を以て愁ふるのみ。」人有り、語つて言はく、「唯毘陀羅呪有り、以て彼を害すべし。但一患有り、未だ彼を害するに及ばざるに返つて自ら害するのみ。」其人聞き已つて便ち大いに歡喜し、「願くば但我に教へよ、當に自ら害すべし」と雖も、要す彼を傷くるを望まん。」と。

世間の人も亦復是の如し、瞋患の爲の故に毘陀羅呪を求めんと欲し、用て彼を惱して竟に他を害せず。先づ瞋患の爲に反つて自ら惱害し、地獄餓鬼畜生に墮す。彼悪人の如く、等しくして差別無し。

【毘陀羅呪】西土の呪法、死屍を起たしめ去つて人を殺さしむるの呪法

(六九)とも 其祖先に效うて急速に食するの喩

昔一人有り、北天竺より南天竺に至る。住止既に久しければ、即ち其女を聘し、共に夫婦たり。時に婦、夫の爲に飲食を造設せり。夫急吞を得て、其熱を避けず。婦、時に之を

【菴婆羅果】アー
ムラ(Yuju) 胡桃
の如く酸甜き果實

怪しんで其夫に語つて言はく、『此中に賊劫奪の人無きに、何の急事有つてか忽忽にして乃ち爾して、宗徐として食せざるや。』夫、婦に答へて言はく、『好密事有り、汝に語るを得ず。』婦、其言を聞いて異法有りと謂ひ、慇懃に之を問ふ。良久しくして乃ち答ふらく、『我祖父已來の法として常に速に食ふ。我今之に效ふ。是故に疾きのみ。』と。

世間の凡夫も亦復是の如し。正理に達せず、善惡を知らず、諸の邪行を作して以て恥と爲さず、而して我祖父已來是の如きの法を作すと云ふ。死に至つて受行するも終に捨離せず。彼愚人の其速食を習ひ、以て好法と爲すが如し。

(七〇)菴婆羅果を嘗むるの喩

昔一長者有り、人を遣し錢を持して他の園中に至り、菴婆羅果を買はしめて之を食せんと欲す。之に勅して言はく、『好く甜美なる者を汝當に買來るべし。』即便錢を持して往いて其果を買ふ。果主言はく、『我此樹果は悉く皆美好、一として惡しき者無し、汝一果を嘗めて以て之を知るに足らん。』果を買ふ者言はく、『我今當に一一之を嘗むべし、然る後當に取るべし。但一のみを嘗めて何を以てか知るべき。』尋いで即ち果を取り一一皆嘗め持ち來つて家に歸る。長者見已るに惡しくして食せず、便ち一切都て棄つ。世間の人も亦復是の如し。持戒施は大富樂を得、身常に安隱にして諸の患有ること無きを聞くも肯て信ぜず。便ち是言を作さく、『布施して福を得ば、我白ら時を得、然る後信すべし。』と。日に現

世の貴賤貧窮皆是れ先業所獲の果報なるを觀るも、一を推して以て因果を求むるを知らず、方に不信を懷き、己自ら經を須ち、一旦命終すれば財物喪失すること、彼果を嘗めて一切觀て棄つるが如し。

(七) 二婦の爲の故に其兩目を喪ふの喻

昔一人有り、二婦を聘取せり、若し其一に近づけば一の瞋る所と爲りて裁斷する能はず、便ち二婦の中間に在つて正身もて仰臥せり。天の大雨に値ひ屋舍霖漏し、水土俱に下つて其眼中に墮す。先に要有るを以て敢て起きて避けず。遂に二目俱に其明を失はしむ。世間の凡夫も亦復是の如し。邪友に親近し非法を習行し、結業を造作して三惡道に墮し、長く生死に處して智慧の眼を失ふ。彼愚夫の其二婦の爲の故に、二眼俱に失ふが如し。

(八) 米を喰み口を決するの喻

昔一人有り、婦の家舍に至り、其擣米を見、便ち其所に往いて米を偷みて之を喰む。婦來りて婦を見、其と共に語らんと欲するも、満口中米なれば都て和すべからず。其婦に羞づるが故に、背て之を棄てず、是を以て語らず。婦怪みて語らず、手を以て摸す、看して其口腫を謂ひ、其父に語つて言はく、『我夫始めて來つて卒に口腫を得、都て語ること能はず。』と。其父即便醫を喚んで之を治せしむ。時に醫言つて曰はく、『此病は最も重し、刀を

以て之を決し、差すを得べきのみ。即便刀を以て其口を破決せるに、米中より出でて其事彰露る。

世間の人も亦復是の如し、諸の悪行を爲して淨戒を犯し、其過を覆藏して背て發露せず、地獄餓鬼畜生に墮す。彼愚人小羞を以ての故に、背て米を吐かず、刀を以て口を決するに、乃ち其過顯るるが如し。

(七三) 詐つて馬死せりと云ふの喻

昔一人有り、一黒馬に騎し陣に入りて賊を撃つ。其怖るるを以ての故に戰鬪する能はず。便ち血を以て其面目に汚塗し、詐つて死相を現じて死人中に臥せり。其所乗の馬は他の爲に奪はる。軍衆既に去つて、便ち家に還らんと欲す。即ち他人の白馬の尾を截つて來る。既に舍に到り已れば、人有り、問うて言はく、『汝が乘る所の馬今所在を爲すに、何を以てか乗せざる。』答へて言はく、『我馬已に死し、遂に尾を持つて來る。』傍人語つて言はく、『汝が馬は本黒馬なり。何を以て白きや。』默然として對無ければ、人の笑ふ所と爲る。

世間の人も亦復是の如し。自ら善好く修行し、慈心もて酒肉を食はずと云ふも、然も衆生を殺害して諸の楚毒を加へ、妄に自ら善と稱するも、惡として遣らざる無し。彼愚人の詐つて馬死せりと云ふが如し。

出家の凡夫利養を貪るの喻(七四)いあつてばアホリヤウ

昔國王有り、教法を設け、諸有の婆羅門等の、我國内に在る者は、制抑して不洗淨者を洗淨せしめ、驅令し策もて種種に苦役せしむ。婆羅門有り、空しく澡灌を捉へ、詐つて洗淨せりと言ふ。人其が爲に水を著け、即便瀉棄せり。便ち是言を作さく、「我洗淨せざるに王自ら之を洗へり。」と。王の意の爲の故に用て王役を避け、妄に洗淨と言ふも實は之を洗はず。

出家凡夫も亦復是の如し。剃頭染衣なるも内實は毀禁し、詐つて持戒を現じ、利養を望求し、復王役を避け、外沙門に似て内實は虚欺なり。空瓶を捉へ但外相のみ有るが如し。

駝鬘俱に失ふの喻七五(ア)とも、(イ)とも、

昔一人有り、先に鬘中に穀を盛れるに、駝駝、頭を鬘中に入れて穀を食せば又出づることを得ず。既に出づることを得ざれば以て憂惱を爲す。一老人有り、來つて之に語つて言はく、「汝愁ふること莫れ、我汝に出づるを教へん。汝我語を用ふれば、必ず速に出ず」とを得ん。汝常に頭を斬れば、自ら之を出すことを得べし。即ち其語を用ゐて刀を以て頭を斬る。既に復駝を殺して復鬘を破せり。此の如きの癡人は世間に笑はる。

凡夫愚人も亦復是の如し。心に菩提を怖ひ、三乗を志求し、宜しく禁戒を持して諸惡を防護すべし。然るに五欲の爲に淨戒を毀破し、既に禁を犯し已つて三乗を捨離し、縦心極

意し悪として造らざる無く、乘及び淨戒二俱に捐捨す。彼愚人の駝糞俱に失ふが如し。

(七六)でんぼうによ おも 田夫王女を思ふの喩 たとへ

昔田夫有り、城邑に遊行す。國の王女の顔貌端正にして希有なる所を見、晝夜に想念

して情に已む能はず。與に交通せんと思ふも由つて遂ぐべき無し。顔色瘀黄にして即ち重

病を成ぜり。諸の親見する所、便ち其人に問はく、「何が故に是の如きや。」と。親里に答へ

て言はく、「我昨王女を見たり。顔貌端正なれば與に交通せんと思ふも得る能はざるが故

に、是を以て病むのみ。我若し得ざれば必ず死すこと疑無けん。諸親語つて言はく、「我

當に汝が爲に好方便を爲し、汝をして之を得しむべし。愁を得ること勿れ。」後日、之を見

て便ち之に語つて言はく、「我等、汝が爲に便ち是を爲すことを得たり。唯王女欲せざる

のみ。「田夫之を聞いて欣然として笑つて謂く、「必ず得ん。」と呼ぶ。

世間の愚人も亦復是の如し。時節春秋冬夏を別たす、便ち冬時に於て土中に擲種し、果

實を得んと望み、徒に其功を喪ひ空しく所獲無く、芽莖枝葉一切都て失ふ。世間の愚人、

少福を修習して謂く、具足せりと。便ち謂く、菩提已に證得すべしと。彼田夫の王女を愉

望するが如し。

(七七一)でんぼうによ おも 驢乳を搗ふるの喩 たとへ

昔邊國の人驢を識らず。他の説言に驢乳甚だ美なりと聞けるも、都て識る者無し。爾時、諸人一父驢を得、其乳を搗へんと欲し、諍ひて共に之を捉ふ。其中に頭を捉ふる者有り、耳を捉ふる者有り、尾を捉ふる者有り、脚を捉ふる者有り、復器を捉ふる者有り。各先に得て前に於て之を飲まんと欲す。中に驢根を捉へて謂く、是乳なりと呼び、即便之を搗へ其乳を得んと望むも、衆人疲厭して都て所得無し。徒に自ら勞苦して空くし所獲無し。一切世人の嗤笑する所と爲る。

外道凡夫も亦復是の如し。道に於て不應求處を説くを聞き、妄に想念を生じ、種種の邪見を起し、裸形自餓し巖に投じ火に赴く、是邪見を以て惡道に墮す。彼愚人の妄に乳を求むるが如し。

(七八) 兒と早行を期するの喻

昔一人有り、夜、兒に語つて言はく、『明、當に汝と共に彼聚落に至つて、取索する所有るべし。』兒、語を聞き已つて明旦に至り、竟に父に問はず、獨り彼に往詣せり。既に彼に至り已つて身體疲極し、空しく所獲無く、又食するを得ず、飢渴して死なんと欲す。尋で復廻り來り、來つて其父に見ゆ。父子の來れるを見、深く之を責めて言はく、『汝大愚癡、智慧有ること無し。何んが我を待たずして空しく自ら往來し、徒に其苦を受くるや。』と。一切世人の嗤笑する所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。設し出家を得て即ち鬚髪を剃り三法衣を服するも、明師を求めて道法を諮受せず。諸の禪定道品功德を失ひ、沙門の妙果一切都て失ふ。彼愚人の虚しく往返を作して徒に自ら疲勞するが如く、形、沙門に似るも實に所得無きなり。

(七九) 王の爲に机を負ふの喻

昔一王有り、無憂園中に入つて歡娛受樂せんと欲し、一臣に勅して言はく、「汝一机を捉り持ちて彼園に至れ、我用て坐息せん。」時に彼使人羞ぢて肯て捉へずして、王に白して言さく、「我捉ふること能はず、我願くば之を擔はん。」時に王便ち三十六机を以て其背上に置き、驅して之を擔はしめて園中に至る。是の如きの愚人は世の爲に笑はるる所なり。凡夫人も亦復是の如し、若し女人の一髮、地に在るを見ては、自ら言はく、「持戒せば肯て之を捉へず。」と。後煩惱に惑はされて三十六物の髮毛爪齒屎尿不淨も以て醜と爲さず、三十六物を一時に都て捉ふるも慚愧を生ぜず、死に至るも捨せず、彼愚人の机を擔負するが如し。

(八〇) 倒灌の喩

昔一人有り、下部の病を患ふ。醫の言はく、「當に倒灌すべし、乃ち差ゆべきのみ。」と。便ち灌具を集めて以て之を灌せんと欲す。醫未だ至らざる頃に、便ち取つて之を服せるに、

腹脹れて死なんと欲し自ら勝ふること能はず、醫既に來至して其所以を怪しみ、即便之に問ふ、「何が故に是の如きや。」と。即ち醫に答へて言はく、「向時の灌藥を我取つて之を服せり。是故に死なんと欲す。」醫是語を聞いて、深く之を責めて言はく、「汝は大愚人なり、方便を解せず。」と。即便餘藥を以て之に服せしめ、方に吐下して爾も乃ち差ゆるを得たり。此の如きの愚人は世の爲に笑はるる所なり。

凡夫の人も亦復是の如し。神觀種種の方法を修學せんと欲し、應に不淨を效ふべきに反つて數息を效ひ、應に數息すべきは效うて六界を觀じ、顛倒上下して根本有ること無し。徒に身命を喪ひ共に困めらる。良師に諮らず禪法を顛倒すること、彼愚人の不淨を飲服するが如し。

熊に嚙まるるの喻

昔父子有り、伴として共に行く。其子林に入り熊に嚙まる。爪身體を壞し、困急して林を出で、還つて伴邊に至る。父其子を見るに身體傷壞せば、怪んで之に問うて言はく、「汝今何が故に此瘡害を被れる。」子、父に報じて言はく、「一種物有り、身毛耽絁し來つて我を毀害せり。」と。父弓箭を執り、往いて林間に到る。一仙人の毛髮深長なるを見、便ち之を射んと欲す、傍人語つて言はく、「何が故に之を射るや。此人害無し、當に治むるに過有るべし。」と。

【六界】地水火風
空識の六六のこと

世間の愚人も亦復是の如し。彼法服を著すと雖も、無道行者に罵辱せられて、濫に良善有徳の人を害す。喩へば彼父の熊が其子を傷くるに、狂げて神仙に加ふるが如し。

(八二) 種田を比するの喩

昔野人有り、田里に來至して、好麥の苗の生長鬱茂せるを見て、麥主に問うて言はく、「云何が能く是麥をして茂好せしむるや。其主答へて言はく、「其地を平治して、兼ねて糞水を加ふる故に、是の如きを得たり。」彼人即便法に依つて之を用ふ。即ち水糞を以て其田に調和し地に下種するに、其自脚の地を踏んで堅からしめ、其麥の生ぜざるを畏る、「我當に一床上に坐し、人に之を輿はしめ、上に於て種を散すべし、爾らば乃ち好きのみ。」と。即ち四人をして人に一脚を擎げしめ、田に至つて種を散するに、地堅きこと逾甚しく、人の嗤笑する所爲なり。己が二足を恐れて更に八足を増す。

凡夫の人も亦復是の如し。既に戒田を修し善芽將に生ぜんとし、應當に師諍受行教誡し、法芽をして生ぜしむべきに、返つて違犯して多く諸惡を作し、便ち戒芽をして生ぜざらしむ。喩へば彼人の其二足を畏れて、倒に其八を加ふるが如し。

(八三) 獼猴の喩

昔一獼猴有り、大人に打たれて奈何ともすること能はず、反つて小兒を怨めり。凡夫愚

人も亦復是の如し。先に瞋る所の人、代謝して停まらずば、滅して過去に在り。乃ち相續後生の法に於て是を前者と謂ふ、妄に瞋忿を生ずれば毒患彌深し。彼癡猴の大に打たれて、反つて小兒を嗔るが如し。

(八四) 狗を打つのは、

昔阿修羅王、日月の明淨なるを見て、手を以て之を障ふ。無智の常人は狗に罪咎無きに横に惡を加ふ。凡夫も亦爾り。貪瞋愚癡は、横に其身を苦しめ、棘刺の上に臥し五熱もて身を炙く。彼月蝕の枉横に狗を打つが如し。

(八五) 婦女眼痛を患ふるの喩、

昔一女人有り、極めて眼痛を患ふ。知識女人有り、問うて言はく、「汝が眼痛めるや。」答へて言はく、「眼痛めり。」彼女復言はく、「眼有れば必ず痛む。我痛まずと雖も、並に眼を挑らんと欲するも其後痛を恐る。」傍人語つて言はく、「眼若し在らば或は痛み、痛まず、眼若し無くば終身長く痛まん。」

凡愚の人も亦復是の如し。聞く、富貴とは衰患の本と。畏れて布施せず、後報を得るを恐る。財物は殷溢して重ねて苦惱を受く。人有り語つて言はく、「汝若し施さば或は苦あり、或は樂あり、若し施さずんば貧窮大苦ならん。」と。彼女人の近痛を忍ばず、便ち眼を去

【阿修羅】アスラ
(Asura) 非天と譯す、六道の一。

らんと欲して乃ち長痛を爲すが如し。

父兒の耳璫を取るの喩

(八七) 昔父子二人有り、事を縁じて共に行く、路に賊卒に起り來つて之を剝がんと欲す。其兒、耳中に眞金の璫有り。其父賊の卒に發すると見、耳璫を失はんことを畏れて、即便手を以て之を挽く。耳時に決せざれば耳璫の爲の故に便ち兒頭を斬る。須臾の間に賊便ち棄去せり。還兒頭を以て肩上に著くるも、平復すべからず。是の如きの愚人世間に笑はるるを爲す。

【中陰】 滅後未だ次生を受けざる間中有ともいふ。

【心數法】 心王の所有にして貪瞋等の別作用を有する心法。心所法に同じ。

【欽婆羅】 カムバラ (Kambala) 毛糸の雑織りもの

凡夫の人も亦復是の如し。名利の爲の故に戲論を造作し、言はく、二世有り二世無し。中陰有り中陰無し心數法無しと。種種に妄想するも法實を得ず。他人如法輪を以て其所論を破し、便ち言はく、『我論中に都て是説無し。』と。是の如きの愚人は小名利の爲に、便ち故に妄語して沙門の道果を喪ひ、身壞命終して三惡道に墮す。彼愚人の少利の爲の故に、其兒の頭を斬るが如し。

(八七) 劫盜して財を分つる喩

昔群賊有り、共に劫盜を行す。多く財物を取り、即ち共に之を分つて等しく以て分を爲せり。唯鹿野の欽婆羅の色不純好なる有り、以て下分と爲し、最劣者に與ふ。下劣者は之

を得て悲恨し、謂つて大失と呼ぶ。城に至つて之を賣るに、諸の貴長者多く其價を興へ、一人の所得衆伴に倍せり。方に乃ち歡喜し踊悦すること無量なり。猶し世人の布施の有報無報を知らず、而も少施を行じて天上に生ずるを得、無量の樂を受け、方に更に悔恨して廣施せざるを悔むが如し。欽婆羅、後に大價を得、乃ち歡喜を生ずるが如し。施も亦是の如し。少しく作して多く得、爾れば乃ち自ら慶び、恨むも益爲せざるなり。

(八八) 彌猴豆を把ふるの喻

昔一彌猴有り、一把の豆を持して、誤つて一豆を落して地に在り、便ち手中の豆を捨てて、其一を覓めんと欲す。未だ一豆を得ざるに、先に捨つる所の者雞鴨食盡せり。凡夫出家も亦復是の如し。初に一戒を毀ちて悔ゆる能はず、不悔を以ての故に、放逸滋蔓し一切捨て捨つ。彼彌猴の其一豆を失ひ一切捨て失ふが如し。

(八九) 金鼠、狼を得るの喻

昔一人有り、路に在つて行く。道中に一金鼠狼を得たり。心に喜踊を生じ、持て懷中に置く。道を涉つて進み水に至つて渡らんと欲し、衣を脱して地に置く、尋時に金鼠變じて毒蛇と爲る。此人深く思うて寧ろ毒蛇の爲に螫殺さるるも當に懷去すべしと。心至なれば冥感じ、還化して金と爲せり。傍邊の愚人其毒蛇の變じて眞實と成ぜるを見て、謂ひて恆

に兩りと爲し、復毒蛇を取つて懷裏に内著せるに、即ち毒蛇の蜚螫する所と爲り、身を喪ひ命を殞せり。世間の愚人も亦復是の如し。善く利を獲るを見て内に眞心無し。但利養の爲に法に來附せり。命終の後惡處に墮すること、毒蛇を捉へて螫されて死するが如し。

(九〇) 地に金錢を得るの喩

昔貧人有り、路に在つて行く。道中に偶一囊の金錢を得たり。心大いに喜躍し即便之を數へ、數未だ周ねからざるに金主忽に至り、盡く還錢を奪へり、其人當時悔いて疾去せず、懊惱の情甚だ極苦を爲せり。

佛法に遇ふ者も亦復是の如し。三寶福田に値遇を得と雖も、勤方便して善業を修行せず、忽爾に命終して三惡道に墮す。彼愚人の還、其主の爲に錢を奪はれ去るが如し。偈の所説の如し。

今日此事を營み、明日彼事を造り

樂著して苦を觀ぜず、死の賊に至るを覺らず

忽忽として衆務を營む、凡人兩せざる無し

彼錢を數ふる者の如く、其事も亦是の如し

(九一) 貧兒、富と財物の等しからんと欲するの喩

昔一貧人有り、少しく財物有り、大富者を見て意に共に等しからんことを欲するも、等しきこと能はざるが故に、少財有りと雖も、水中に乗てんと欲せり、傍人語つて言はく、「此物虧しと雖も、君が性命數日を延ばすを得べし。何が故に捨棄して水中に擲著するや。」と。

世間の愚人も、亦復是の如し。出家を得と雖も、利養を得ること少ければ、心に希望有り、常に不足を懷く。高德者と等しきことを得ること能はず。其利養を獲るに他の宿舊有徳の人を見るに、素より多聞有れば多衆の供養有り、意に之と等しからんを欲するも、等しきこと能はざるが故に、心に憂苦を懷き、便ち道を罷めんと欲す。彼愚人の富者と等しからんと欲して、自ら己が財を棄つるが如し。

（九二）小兒歡喜丸を得るの喻

昔一乳母有り、兒を抱いて道を渉る、行道して疲極せば眠睡して覺めず。時に一人有り、歡喜丸を持つて小兒に授與せり。小兒得已つて其美味を食り、食物を顧みず。此人即時に其鉛鏤瓔珞衣物を解き、都て盡く持ち去れり。

比丘も亦爾り。衆務慣閑の處に樂在し、少利養を食り、煩惱の賤の爲に、其功德寶瓔珞を奪はる。彼小兒の少味を食るの故に、一切の所有を賊盡く持ち去るが如し。

（九四）老母熊を捉ふるの喩

昔一老母有り、樹に在りて臥せり。熊來り縛せんと欲す。爾時、老母樹を繞つて走避す。熊就いで後逐し、一手もて樹を抱き老母を捉へんと欲す。老母急を得ば即時に合樹と熊の兩手を捺ふ。熊動くことを得ず。更に異人有り、來つて其所に至る。老母語つて言はく、『汝、我と共に捉へて殺さば其肉を分けん。』時に彼人は老母の語を信じて、即時に共に捉ふ。之を捉へ已るに老母即便熊を捨てて走る。其人後に熊の爲に困しめらる。是の如きの愚人は世の笑ふ所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。諸の異論を作して既に善好ならず。文辭繁重にして多く諸病有り。竟に成ぜずして訖り、便ち捨てて終に亡ぶ。後人之を捉へ、爲に解釋せんと欲し、其意に達せず、反つて其が爲に困しめらる。彼愚人の他に代つて熊を捉へ、反つて自ら害せらるるが如し。

（九四）摩尼水寶の喩

昔一人有り、他婦と通じ、交通未だ竟らざるに夫外より來る。即便之を覺つて門外に住し、其出時を伺うて便ち殺害せんと欲す。婦、人に語つて言はく、『我夫已に覺れり、更に出處無し。唯摩尼有り、以て出づるを得べし。』摩尼とは齋に云ふ水寶孔なり。其人をして水寶より出でしめんと欲す。其人錯解して摩尼珠と謂ひ、所在を、求覓するも處を知らず。即ち是言を作

さく、『摩尼珠を見れば、我終に去らじ。』と。須臾の間に其が爲に殺さる。凡夫の人も亦復是の如し。人有り、語つて言はく、『生死の中、無常苦空無我にして、斷常の二邊を離れ、中道に處し、此中に於て過ぎなば解脱を得べし。』凡夫錯解して、便ち世界の有邊無邊、及以衆生の有我無我を求め、竟に中道の理を觀すること能はず。忽然として命終し無常の殺害する所と爲り、三惡道に墮す。彼愚人の摩尼を推求して、他の害する所と爲るが如し。

一 鴿の喙

昔雌雄二鴿有り、共に同じく一巢せり。秋に果熟するの時、果を取つて巢に滿つ。其後時に於て果乾て減少し、唯半巢に在るのみ。雌、雌に瞋つて言はく、『果を取るに勤苦せるも汝獨り之を食し、唯半在有るのみ。』雌答へて言はく、『我獨り食せず、果自ら減少せるなり。』と。雄鴿信ぜず、瞋悲して言はく、『汝獨り食するに非ざれば、何に由つて減少せるや。』と。即便 鶩を以て雌鴿を啄みて殺せり。未だ幾日も經ざるに天大雨を降らせるに、果濕潤を得て還復故の如し。雄鴿見已りて方に悔恨を生じ、『彼實に食せざるに、我妄に他を殺せり。』と。即ち悲鳴し命じて雌鴿を喚ぶ、『汝何處に去れるや。』と。

凡夫の人も亦復是の如し。顛倒、懷に在り、妄に欲樂を取つて無常を觀せず、重禁を犯して之を後に悔ゆとも、竟に何の及ぶ所ぞ。後唯悲歎すること彼愚鴿の如し。

(九) 詐つて眼盲と稱するの噺

昔工匠師有り、王の爲に務を作して其苦に堪へず、詐つて眼盲と言ひ、便ち苦を免るることを得たり。餘の作師有り、之を聞いて便ち自ら其目を壞し、以て苦役を避けんと欲せり。人有り、語つて言はく、『汝何を以て自ら毀つや。徒に其苦を受けん』と。是の如きの愚人は世人の笑ふ所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。少名譽、及以利益の爲に、便ち故に妄語して淨戒を毀壞し、身死し命終して、三惡道に墮す。彼愚人の少利の爲の故に、自ら其目を壞するが如し。

(九) 惡賊に劫められて髻を失ふの噺

昔二人有り、伴と爲りて共に曠野を行く。一人一領の髻を被、中路に賊の爲に剝がる。一人は逃避し、走つて草中に入る。其髻を失へる者、先に髻頭に於て一金錢を裹む。即ち賊に語つて言はく、『此衣適一枚の金錢に直すべし。我今求むるに一枚の金錢を以て、而も用て之を贖はん。』賊言はく、『金錢今何處に在りや。』即便髻頭より解取して、之を示して賊に語つて言はく、『此は是れ眞金なり。若し我語を信ぜずば、今此草中に好金師有り、往いて之に問ふべし。』賊既に之を見、復其衣を取る。是の如きの愚人は髻と金錢と一切都て失ふ。自ら其利を失ひ、復彼をして失はしむ。

凡夫の人も亦復是の如し、道品を修行し、諸の功德を作し、煩惱の賊の劫掠する所と爲り、其善法を失ひ、諸の功德を失ふ。但自ら其利を失ふのみならず。復餘人として其道業を失はしむ。身壞し命終して三惡道に墮す、彼愚人の彼此俱に失ふが如し。

小兒大龜を得るの喻

昔一小兒有り、陸地に遊戯して一大龜を得たり。意に之を殺さんと欲するも方便を知らず、人に問うて言はく、『云何が殺すを得る。』人有り、語つて言はく、『汝但水中に擲置せば、即時に殺すべし。』爾時、小兒其語を信ずるが故に、即ち水中に擲つ、龜水を得已つて即便走り去る。

【六根】眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根。
【波旬】パービヤン (Pāpāyana) 殺者と譯す、魔王の名。

凡夫の人も、亦復是の如し。六根を守護し、諸の功德を修せんと欲するも、方便を解せず、人に問うて言はく、『何の因縁を作してか解脱を得ん。』と。邪見外道天魔波旬、及び悪知識之に語つて言はく、『汝但意に六塵を極め、情に五欲を恣にせよ。我語の如くば必ず解脱を得ん。』

是の如きの愚人は諦かに思惟せず。便ち其語を用て身壞し命終して三惡道に墮す。彼小兒の龜を水中に擲つが如し。

此論は我所造なり、喜笑語を合和し多く正實説を損し、觀義に應と不應とあり

【阿伽陀】アガダ
(Agala) 無病と
譯す、藥の名。

苦毒藥を、石密に和合するが如し
藥爲に病を破壊す。此論も亦是の如し
正法中の戲笑は、譬へば彼狂藥の如し
佛の正法は寂定として、明に世間を照し
吐下藥を服し、酥を以て體中を潤すが如し
今此義を以て、寂定を顯發す
阿伽陀藥の如く、樹葉もて而も之を裹む
藥を取つて毒を塗り竟れば、樹葉還之を棄つ
戲笑は葉裏の如し、實義其中に在り
智者は正義を取り、戲笑は便ち應に棄つべし
尊者偈伽斯那癡の花蔓を造作し竟りぬ。

百喻經 卷第四
百喻經 卷第四

雜
譬
喻
經

第二卷	經典部
-----	-----

雜譬喻經

比丘道略集

雀離寺師將沙彌下喻 聖王生九百九十九子喻 兄弟二人共爲沙門喻 伎兒作種種伎喻
 比丘被擯喻 目連與弟子下耆闍崛山喻 喜根喻 木師畫師喻 大迦葉婦因緣喻 兒好禪
 弟好多聞喻 羅云珠喻 龍昇天喻 於僧淨地大行喻 與貴人謁唾喻 佛與弟子入舍衛乞
 食喻 醫師治王病喻 惡雨喻 阿修羅因緣喻 王子入山喻 鹿林喻 戶利求多喻 從婆
 羅門乞食喻 田舍人喻 呪龍喻 石當道喻 蛇頭尾共諍喻 捕鳥師喻 五百力士爲沙門
 喻 三堅要喻 賣酪自存喻 五百賈客入海求寶喻 劫盡燒因緣喻 貴人爲比丘尼因緣喻
 草木皆可爲藥喻 屠兒喻 王好布施喻 龍藏水喻 聖王得輪因緣喻 梵王長壽喻

【一】雀離寺の師沙彌を將みて下るの喻。【釋漢道】阿羅漢道の略なり。三界の見思の煩惱を斷盡し、盡智無生智を得て無學位に住し、世間の供養を受くるに堪へたる聖者の位をいふ。

昔雀離寺に一りの長老比丘有りて羅漢道を得たり。一沙彌を將みて時に復來下して城に入り遊觀するに、衣鉢大いに重く、沙彌をして擔ひて其後に隨從せしむ。沙彌道中に便ち是念を作さく、「一人、世間に生れて、苦を受けざること無し。此苦を免れんと欲せば當に何等の道をか與にすべき。」と。是思惟を作さく、「佛常に讚歎して菩薩を勝れたりと爲したまふ。我今當に菩薩の心を發すべし。」と。適是念を作さく、「其師は即ち他心通を知

【沙彌】男子の出家して十戒を受けしもの通稱なり

【九百九十九子】轉輪聖王、九百九十九子を生むの驗。轉輪聖王とは須彌四洲を統領する王、輪寶を轉じて一切を威服するが故に轉輪王といふ。

るを以て其念ずる所を照したまふ。』と。沙彌に語りて言はく、『衣鉢を持し來れ。』沙彌、衣鉢を持して其師に授與す。師、沙彌に語るらく、『前に在りて行け。』と。沙彌、適前に在りて行き復是念を作さく、『菩薩の道は甚だ大いに勤苦なり。頭を求めて頭を興へ、眼を求めて眼を興ふ。此事極めて難くして我辦する所に非ず。如かじ、早く羅漢を取りて疾に離苦を得んには。』と。師復其念ずる所を知りて沙彌に語りて言はく、『汝衣鉢を擔ひて還りて我後に從へ。』是の如くすること三反なり。沙彌怪み愕くも、何の意なるやを知らず。前の所止の處に至りて、手を又へて師に白して其意を請問す。其師答へて曰はく、『汝、菩薩道に於て三たび進むが故に、我亦三たび反りて汝が前に在るを推す。汝が心三たび退くが故に、汝が後に在るを推す。爾る所以のものは、菩薩心を發すの其功德は勝れて、三千世界に滿ち、羅漢を成就するが故なり。』

昔轉輪聖王有り。先に九百九十九子を生めるに、皆悉く大端正殊好を成じ、聰明點慧にして兼ねて身力有り。或は二十八相を具する者有り。或は三十相を具する者あり。或は三十一相を具する者あり。最後の一子始めて母胎に入り、惡露不淨の間に處る。時に八部大力鬼神有りて、鼓樂絃歌して其母を侍衛し、王亦左右に宣勅して供養を具へしめ、種種の嚴飾、常に參拜せり。時に人あり、王に白して曰はく、『王の先の諸子は今皆大になり、智慧聰徹にして身相殊妙なるに、王の心平然として未だ當て欣慶せず。今此一子始

【二乘】 聲聞乘と縁覺乘なり。

【三】 迦葉佛の時に兄弟二人共に沙門と爲るの喩。迦葉佛とは過去七佛の中の一佛なり。

めて母胎に處るや、何の奇特有りてか供給すること常に異なる。」と。時に王答へて曰はく、『吾天子等、才美にして人に過ぐと雖も、未だ大位に登るに堪任する者有らず。吾最後の子、若し生れて長大せば、必ず當に大位を嗣ぐに堪任すべきなり。』時に聖王は喩へば佛の如きなり。諸の天子は喩へば下二乗の如きあり。末後の處子は喩へば菩薩のごときなり。言は、菩薩は塵垢に雜はると雖も、但能く大意を發す者なれば、必ず諸佛の念する所と爲り、天龍鬼神皆興りて之を敬愛するなりと。

昔迦葉佛の時に兄弟二人有り、出家して俱に沙門と爲る。兄は持戒坐禪を好み、一心に道を求めて布施を好まず。弟は布施を好み福を修して喜んで戒を破る。釋迦文、出世したまふや、其兄は佛に値ひて、出家修道して即ち羅漢を得たり。而も獨り薄福にして常に衣食の充たざるを患ふ。諸伴等と遊行乞食するに常に獨り飽かずして還りぬ。其弟は象の中に生じ、象の多力にして能く怨敵を却くるが爲に國王の愛する所と爲り、金銀珍寶瓔珞を好むを以て、其身、數百戸の邑に封ぜられ、此象に供給すること其須むる所に隨へり。時に兄の比丘は世の大儉に値ひて、遊行乞食すること七日なるも得ず。末後に少かの麤食を得て殆く命を存つことを得たり。先に此象が是れ前世の兄弟なることを知りて、便ち往いて象の前に詣り、手もて象の耳を捉へて之に語りて言はく、『我と汝と俱に罪有るなり。』と。象便ち比丘の語を思惟して、即ち自ら宿命を識ることを得、前世の因縁を見たり。

象便ち愁憂して復飲食せず。象の子怖懼して便ち往いて王に白して言さく、「象復飲食せざること何の意なるやを知らず。」と。王象の子に問ふ、「先に人有りて此象を犯すや不や。」と。象の子王に答へて言さく、「他の異人無し。唯一沙門の、來りて象の邊に至り、須臾して便ち去りしを見たるのみ。王即ち人をして四に出でて此沙門を覓めしむるに、人有り、林樹の間に得たり。便ち此沙門を攝へ、將ゐて王の前に詣る。王沙門に問うて言はく、「我象の邊に至りて何の道説する所かありし。」沙門、王に答へて言さく、「多く説く所無し。我道に象に語りて言はく、「我と汝と俱に罪有るのみ」と。時に沙門便ち王に向ひて具に前世の因縁の事を説く。王意に便ち悟りて、即ち此沙門を放ちて所止に還らしめたり。

【四】伎兒、種種の伎を作すの喩。

昔伎兒有りて、種種の伎樂を作せり。一りの富める長者に従ひて牛を乞ふ。長者了に與ふるの心無し。故に之に語りて言はく、「汝能く是の如く勤作して伎樂し、晝夜息まずして一歳を滿さば、我當に汝に牛を與ふべし。」と。伎兒答へて言はく、「能くせん。」復語るらく、「主人能く聽くや不や。」と。長者亦言はく、「能くせん。」是に於て伎兒是を聞いて歡喜し、一心に樂を作すこと三日三夜にして、未だ嘗て休懈せず。長者、聽き已らんことを厭ひ、即ち子弟に勅して牛を牽かして之を與へぬ。此は、道を行じ福を作す者、劫數を以て遠しと爲さず、精勤彌篤うして報至ること彌疾かに、必ずしも皆爾數の劫を経ざるに喩ふるなり。

【五】比丘擯せらるるの喻。

【檀越】施主の意なり。布施を行ふ人を指す。

【毘沙門天王】一名多聞天王とも稱し護法の天神と施福の神性とを兼ね

昔一比丘の擯せられたる有りき。懊惱悲歎し、涕哭して行くに、道に一鬼に逢へり。此鬼も法を犯して、亦毘沙門天王の爲に擯せられたるなり。時に鬼、比丘に問うて言はく、
「汝何事有りてか涕哭して行く。」と。比丘答へて曰はく、「我僭事を犯して衆僧に擯せられ、一切檀越の供養盡く失ひ、又惡き名聲、遠近に流布す。是故に愁歎し涕泣するのみ」と。鬼、比丘に語りて言はく、「我は能く汝をして惡名聲を滅し大いに供養を得しめん。汝便ち我左肩の上に立つべし。我當に汝を擔うて虚空の中に行くべし。人は俱汝を見て我身を見ざらん。汝若し大いに供養を得ば、當に先づ我に與ふべし。」と。彼鬼、即時に此比丘を擔ひ、先に擯せられし聚落の上の虚空中に行く。時に聚落の人、見て皆驚怪し、其道を得て轉ぜりと謂ひ、相謂つて言はく、「衆僧無狀にして得道の人を扛擯す。」と。時に聚落の人、皆此寺に語りて衆僧を呵責し、即ち此比丘を迎へて寺内に仕せしむ。遂に大いに供養を得たり。此比丘、隨所に衣食諸物を得、輒ち先づ鬼に與へて本要に違はず。此鬼、異日復此比丘を擔うて空中に遊行せしに、正しく毘沙門天王の官屬に値ふ。鬼、司官を見て甚だ大いに驚怖し、比丘を捐棄し、力を絶ちて走る。此比丘遂に地に墮して死し、身首碎爛す。此は、行者の、宜しく應に自ら向ふ所を修すべく、應に豪勢に恃託すべからず、一旦傾覆すれば彼と異なること無きを喻ふるなり。

【六】日蓮と弟子の者、岡嶺山を下るの喻。

昔日蓮と諸の弟子と、俱に岩間嶺山より下りて王舍城に到りて乞食す。日蓮、道中に於て仰いで虚空を視て、靦然として笑ふ。其弟子問ふ、「何の因縁ありてか笑ふや。」と。目連答へて曰はく、「卿知らんと欲せば、須らく還りて佛の所に到りて更に問ふべきなり。」是に於て乞食し訖りて、還りて佛の所に到り、其弟子更に日蓮の向に笑ひし所の意を問ふ。日蓮答へて曰はく、「我上の虚空の中を見るに、一の餓鬼有り。身極めて長大にして、其狀醜悪なり。七枚の熱鐵丸有りて、口中より入りて直下に過ぎ去り、既に下過し已れば還口より入る。舉體に火然えて、苦痛婉轉し、絶倒して復起き、起きて復還倒る。是故に笑へるのみ。我獨り見たるのみに非ず、佛も亦見たまへり。」と。弟子問うて言はく、「何の因縁を以てか苦を受くること、是の如くなる。」日蓮答へて曰はく、「汝自らはを以て佛世尊に問へ。」と。其弟子即時に佛に白して其因縁を問ふ。時に佛答へて言はく、「此餓鬼は前世に曾て沙彌たりき。時世極めて儉にして、豆を以て食と爲せり。沙彌は衆僧の爲に食を行す。其師の前に至りて、偏に七枚豆を多くす。是罪を以ての故に、餓鬼の身を受けて苦毒することは、是の如し。」佛言はく、「我も亦常に説かざる所以を見るに、恐らくは人の不信にして、極大罪を得んことを。」と。此は、佛の般若を説きたまふを信ぜずして、誹謗すれば、其罪五逆より重く、地獄の極苦を受くるに喩ふるなり。

【五逆】五逆罪のこと。

【七】喜根の喻。摩訶衍具には

在昔、過世無量摩數の劫に、時に菩薩有りて名けて喜根と曰ふ。大衆の中に於て摩訶衍

摩訶衍那と云ひ大乘と譯す。菩薩の大機が佛果の大涅槃を得る法門なり【十二頭陀】住阿蘭若處、常行乞食、次第乞食、一食、節量食、過中不飲漿、著弊衲衣、樹下坐、塚間坐、但坐不臥なり【姪忍癡】貪瞋癡なり【泥裂】地獄のこと。

【八】木師と畫師との喩。印度の舊稱なり。【木女】木製の女の人形なり。

を講ず。文殊師利、時に凡人たり。出家修道して專精に苦行し、十二頭陀を行じて、福一切を度す。法を講ずるに遇値ひ、因りて過りて聽くに、喜根菩薩、實相の法を説いて言はく、「姪忍癡は道と異らず。亦即ち是道も亦是れ涅槃なり。」と。文殊、爾時、聞いて信ぜずして即便捨て去り、喜根の弟子の家に到りて、爲に惡露不淨の法を説く。喜根の弟子、即時に難じて曰はく、「無所有は法の眞なり。諸法皆空なれば、云何が當に淨と不淨と有るべき。」頭陀比丘、默然として對ふること無し。瞋を含みて、心内遂に憤結を成す。時に喜根の弟子、七十偈を説きて實相の法を讚す。頭陀比丘一偈を聞けば瞋患生ずること一増す。七十偈を竟りて、瞋患七十増す。偈を説くこと適竟るや地即ち劈裂す。無擇泥梨、是に於て悉く現す。頭陀比丘即ち其中に墮し、過無量劫の罪畢く乃ち出で、然る後に乃ち妙法を信ぜざるは、其罪重きを知りぬ。後に比丘となりて學問に專精し、大智慧解空第一を得たり。此喩は、佛の般若を説きたまへるを信ぜずして誹謗すれば、今は損有りと雖も後に大益あるを明すなり。

昔北天竺に一木師有りて大巧なり。一木女を作るに、端正無双にして衣帶嚴飾せるところと世の女と異なること無し。亦來り亦去り、亦能く酒を行す。看客唯語ること能はざるのみ。時に南天竺に一畫師有りて亦善く畫を能くす。木師之を聞いて好飲食を作して即ち畫師を請す。畫師既に至るや、便ち木女をして酒を行じ食を擧げて旦より夜に至らしむ。畫

師知らずして謂へらく、「是れ眞の女ならん。」と。欲心極めて盛にして之を念うて忘れず。時に日暮れたるを以て、木師入りて宿し、亦畫師を留めて住せしめ、此木女を以て其側に立侍せしむ。便ち客に語りて言はく、「故らに此女を留む、共に宿すべきなり。」と。主人已に入り、木女立ちて燈邊に在り。客即ち之を呼べども女來らず。客謂へらく、「此女羞づるが故に來らず。」と。便ち前んで手を以て之を牽き、乃ち是れ木なることを知りて便ち自ら慚愧す。心に念ひ口に言はく、「主人我を誑せり、我當に之に報ゆべし。」と。是に於て畫師復方便を作し、即ち壁上に畫きて己が像を作り、著する所の被服を身と異らざらしめ、繩を以て頸を繋ぎて狀絞死せるが似くす。蠅鳥を畫作し、其口喙を著く。作り已りて戸を閉ぢて自ら床下に入る。天明に主人出でて戸の未だ開かざるを見、即ち中に向つて觀るに、唯壁上に絞死せる客の像を見るのみ。主人大いに怖れ、便ち實に死せりと謂ひ、即ち戸を破りて入り、刀を以て繩を斷つ。是に於て畫師床下より出で、木師大いに羞づ。畫師即ち言はく、「汝能く我を誑し、我能く汝を誑す。」と。客主、情畢りて相負かざるなり。二人相謂へらく、「世人の相誑惑するは、孰れか此に異らん。」と。時に彼二人、信に誑惑を知り、各親愛する所を捨てて出家修道せり。

【九】大迦葉の婦の因縁の喻。印度國

迦葉の父は、名を尼具律陀といひ、摩竭國の人なり。婆羅門種より出づ。宿命福徳にして世に生ずるや大富なり。其珍奇寶物、彼國に於て第一とす。國王の財富に比するに、

姓の一にして大梵天に奉事して淨行を修する一族なり

【帝釋】初利天の主にして須彌山の頂喜見城に居し他の三十二天を統御す。

【天眼】五眼の一にして能細遠近の一切の諸色、又は衆生の未來に於ける生死の相を見る通力なり。

【梵天王】色界の初禪天中の大梵天の王にして一名尸棄とも云ふ。

【聖教】聖人の所説なり。

千分に一を少くのみ。夫婦孤獨にして兒息に乏無し。近在の舍側に大樹神有り。時に彼夫婦、兒有らんことを欲するが爲の故に、彼樹神に求む。三生祭祠して歳歳絶たず。故其求むる所、永く本末無し。其人遂に忿りて、便ち急に之に期を與へ、樹神に告げて曰はく、「我更に心を盡し、七日事を相ん。若し復び驗無くば、當に汝を擄伐し、都道の頭に棄てて火を以て之を焼くべし。」と。樹神、其言を聞いて甚だ大いに驚怖するも、何れの方に子息を得しめんかを知らず。即便上りて息意天王に告げ、具に事情を以て天王に向つて説く。息意天王即ち樹神を將ゐて天帝釋に詣り、其告ぐる所を以て天帝釋に白す。釋便ち天眼を以て欲界の中を觀るに、未だ彼子たるに堪任する者有らず。帝釋便ち梵天王に告げ、具に事情を以て梵王に向つて説く。梵王即ち天眼を以て其界を觀視するに、一梵天の當に壽終るべきに臨むを見る。便ち之に告げて曰はく、「汝、閻浮提に下生し、摩竭國尼俱律陀婆羅門の爲に、子と作るべし。」と。梵天對へて曰はく、「婆羅門は諸の邪見多し。我若し下生せば其爲に子と作ること能はざらん。」と。梵王答へて曰はく、「婆羅門は宿時の大徳なり。欲界の衆生には爲に子と作るに堪任する者有ること無し。汝若し往いて生ぜば、吾當に天帝釋に勅し、汝を擁護して中道に邪見に墮らしめざるべし。」と。梵天曰はく、「諾。聖教に違かざらん。」と。時に天帝釋即ち欲界に還り、具に此意を以て樹神に告勅す。樹神歡喜して還りて長者に告ぐらく、「憂ふる勿れ、懼るる勿れ、瞋恨せらるる勿れ。却後七日にして必ず子有らしめん。」と。其言ふ所の如く七日已に滿せしに、其婦人便ち娠る有るを

【聖道】 聖者の道
即ち三乘所行の道
なり。

覺ゆ。十月を満じ已りて其子乃ち生る。軀身金色にして光明有り。相師占つて曰はく、
 「此兒宿福にして大威徳有り。志力清遠にして世務を食らす。若し後に出家せば必ず聖道
 に登らん。」と。父母之を聞いて復大いに愁憂す。兒の長大して吾を棄てて出家せんことを
 恐る。何の方便を以てか當に之を制止すべきと。復自ら思惟すらく、「欲界に重んずる所は
 遂に美色に在り。當に爲に端正の好女を擇び取りて以て之を繫ぐべきのみ。」と。年十五に
 至りて爲に婦を娶らんと欲す。迦葉之を聞いて甚だ大いに愁憂し、父母に語りて曰はく、
 「我志は清淨を樂ふ、婦を須ひざるなり。」と。迦葉辭すること三びに至る。父母答ふ
 ること初の如し。時に迦葉、父母に語りて曰はく、「我は凡女人の婦と爲るを用ひざるな
 り。若し能く紫金色の女の端正無比なるを得ば、爾らば乃ち之を取らんのみ。」と。然る所
 以は、必ず此事をして辨ずべからざらしめんと欲するが故なり。是に於て其父母、諸の
 婆羅門を召き、國中を循行せしむ。其をして、女子の身體金色具足して女相端正殊妙な
 る有らば、乃ち之を取らしむ。是に於て諸の婆羅門、權策を設けて、金女神を鑄作し、
 顏貌をして端正に、光色をして微妙ならしめ、天像を昇きて行き、國より國に至りて高聲
 に大いに唱ふらく、「諸有の女人にして金女神を見て禮拜供養するを得る者は、後に出嫁す
 る時、當に好聲を得べし。體黄金色にして、顏貌殊妙に、智慧比無からん。」乘落國邑の諸
 有の女人、此唱を聞く者は心を虚しうして皆出でて奉迎し禮拜し供養せざる莫し。唯一女
 有り、軀體金色にして端正殊好なり。獨り閑室に處りて肯て出でて迎へず。諸女諫めて曰

【經行】一定の地を巡り歩くこと。坐禪して睡眠を催すときに之を防がぬが爲にす。

はく、「其れ金女身を見る者有らば、皆願の如くなるを得んと。汝何を以てか獨り出でて迎へざる。」と。答へて曰はく、「吾は閑淨を志す、餘願を好まざるなり。諸女復曰はく、「願ふ所無しと雖も、暫く共に一たび觀ば當に復何をか損すべき。」爾時、諸女遂に此女と共に出でて金女神の前に到る。此女既に到るや、光色明淨なり。金女神の光を映奪し、金復現ぜず。是に於て諸の婆羅門見已りて、還りて長者に報じ、具足して廣く説く。是に於て長者即ち媒人を遣し、其女の家に到りて、長者の意を宣ぶ。其女の父母も先づ亦迦葉の名を聞き、敬んで往意を承けて遂に相然可す。彼女之を聞いて甚だ大いに愁憤すれども、父母に逼られて事已むを獲ず。遂に便ち長者の家に適く。既に到りて迦葉と相見ゆるや、二人相對して各凝潔を志し、夫婦と爲ると雖も了に恩情無し。其婦遂に迦葉と誓を結ぶらく、「我と君と、等に各異房に處りて要す相觸れざらん。」と。爾時、夫婦各一房に處る。其父、迦葉の出づる時を伺ひ、密に人を遣りて一房を壊去せしめ、唯婦と共に一室を同じうせしむ。共に室を同じうすと雖も、復床を異にす。其父尋いで復人を遣して一床を持ち去らしむ。是に於て、夫婦共に床を同じうすと雖も、其婦更に夫と誓ふらく、「我若し眠れる時には君當に經行すべし、君眠れる時には我當に經行すべし。」と。時に其婦臥して一臂地に垂れたるに、大毒蛇有りて來りて之を嚼まんと思す。迦葉見已りて慈悲の心有り、衣を持ちて手を裏みて床上に擧著す。尋いで時に驚き覺め、便ち大瞋怒もて迦葉に語りて言はく、「我先に要せしこと有るに、如何が相犯すや。」迦葉報へて言はく、「汝が臂

地に落ちて毒蛇噛まんと欲す。是故に相救ふたり、故に驚るるに非ざるなり」と。毒蛇は故く邊に在りて住せり。指さして之を示すに其婦乃ち悟りぬ。是に於て夫婦自ら相與に議るらく、「我等何んが出家し修道せざらんや」と。時に夫婦二人遂に父母を辭し、俱に共に家を出でて山澤に行道す。時に婆羅門の五百の弟子を將ゐて亦此山に住せる有り。迦葉夫婦を見て便ち毀謗を生じて言はく、「出家の法は宜しく各貞潔なるべし。何んが夫婦の共に相隨ふの理有らんや」と。時に迦葉便ち其婦を捨て、五百兩の金を以て袈衣を買織して、別に一林に處る。其婦即ち婆羅門に依止して弟子と爲らんことを求む。婆羅門の五百の弟子、此女人の形色端正なるを見て口口に姪を行す。此女人自在なることを得ず、遂に堪ふること能はずして便ち其師に告ぐ。師便ち之が爲に戒めて弟子を約し、其欲する所を節せしむ。迦葉は、後、佛の世に出でたまふに値ひ、法を聞き化を受けて即ち羅漢を得たり。其本の妻の梵志の邊に在りと聞き、便ち將ゐ來りて佛に詣る。佛爲に法を説きたまひ、羅漢を得たり。頭髮自ら落ちて法服身に在り。比丘尼と成りて遊行教化し、正に波斯匿王の大會に値ひぬ。諸の比丘尼便ち王宮の裏に入ることを得、諸の夫人を教化して皆一日の齋を持せしむ。王暮に宮に還りて諸の夫人を命するに、皆齋持して、肯て來る者無しと云ふ。王便ち大いに瞋怒して使人に語りて言はく、「誰か諸の夫人をして齋せしめたる」と。使人答へて言はく、「某甲比丘尼なり」と。王便ち呼び來らしめ、九十日を令し、諸の夫人に代りて姪欲を受けしむ。此れ皆是れ昔の因縁誓願の追還する所なり

【齋】 潔齋なり。身口意三業をつしむこと。

【一】兄は禪を好み、弟は多聞を好むの喻。

【三藏】經律論に精通したる人の稱なり。

【定】禪定なり。六度の一、靜慮波羅蜜なり。
【善知識】正法を説きて、人をして佛道に入らしめ、留脱を得しむる人をいふ。

り。故に使ひ羅漢を得と雖も、相免るること能はず。

昔兄、弟二人有りて出家し學道せり。兄は常に念じて禪を行じ、精專に道を修し、羅漢果を得て六通清徹なり。其弟は常に念じて廣く學び多く聞き、名聲を賣るを好みて己れ自ら榮あらんことを欲す。其兄常に弟に曉諭して言はく、「人身は得ること難く、佛世には値ふこと難し。既に人身を得たり、宜しく曼に時爲すべけんや。」と。弟兄に語りて言はく、「須らく廣く學び三藏を具足し人師たるに堪任するを得て、爾して乃ち禪を行すべし。」と。兄、復弟の爲に廣く非常の義を宣べ、出づる息反らざるに便ち後世に屬すといふ。弟故に其本意を執して背て教に隨はず。未だ久しからざるの間に、弟篤き疾を得たり。良醫數十なれども救を加ふること能はず。醫、其必ず死せんことを知り、小小に捨て去りぬ。弟便ち恐怖して自ら當に死すべきを知り、其兄に語りて言はく、「在昔、愚短にして兄の教を用ひず。今將に命終せん」とす、知りぬ何れの道にか適かん。」と。涕淚交流れ、兄に向つて過を悔ゆ。未だ久しからざるの間に其人命終せり。兄即ち定に入りて其趣く所を觀るに、長者の胎に處れるを見ぬ。彼長者の家は寺廟に接近せり。兄便ち數此家に詣りて善知識と作らんことを求む。其弟を度せんと欲するが故なり。長者の兒始めて年三歳なるとき、便ち布施を恃して爲に弟子と作れり。四歳に至るや、乳母抱いて師の住する所の寺に詣る。寺は山上に在りて、石を累ねて道と作す。乳母兒を抱くこと堅か

らずして、手を失して地に落ちぬ。頭石上に側ち、腦出でて死せり。兒、臨終の時便ち惡念を生じ、其抱くこと堅からずして、以て此禍を致せるを恨む。因りて瞋恚を起して、命終するや徑に大地獄の中に墮せり。兒復定に入りて之を觀て地獄に生じたるを見、是に於て慨歎すらく、「此れ必ず了らん。地獄の苦は切にして度すべきこと難し。諸佛すら尙奈何ともすること能はず、何に況んや我をや。」と。此は、人、名聲もて、禪を修すること能はざれば後に惡道に墮し、父兄の親と雖も救ふこと能はざるを喻ふるなり。

【二】羅云珠の喩
 【辟支佛】辟支佛陀の略にして緣覺又は獨覺と譯す。
 【三寶衣】三衣即ち袈裟のことなり

羅云珠は舍利弗の弟子なり。本會て辟支佛の食を奪ふ。是罪を以ての故に餓鬼の中に生じ、無量劫に苦を受け、餓鬼の身を畢りて人中に生じ、五百世に飢餓の罪を受く。最後の身を以て佛の在世に値ひ、出家學道して三寶衣を服し、遊行乞食するも肯て施す者無し。或は五日、或は七日なるも得ず。日連之を懇れんで乞食して持し與ふるに、適鉢中に墮つるや大鳥と爲りて搏ちて去る。舍利弗乞食して之を施すに、適鉢中に入るや變じて泥土と成る。大迦葉乞食して之を施すに、適持して口に向へば口即ち時に合して入る處有ること無し。佛食を以て施すに、大悲力を以ての故に、即ち口に入ることを得て氣味殊特なり。復種種の方便を以て兼ねて說法を爲す。時に羅云珠、上妙の法を聞いて悲喜交集ひ、一心に思惟して眞道に應ずることを得たり。

【二三】 龍の天に昇る喩。

【二三】 僧の淨地大行に於けるの喩。

【二四】 貴人に與るに唾を躡むの喩。

龍の昇天する有りて、大雨を降せり。雨天宮に落ちて即ち七寶を成じ、兩人中に落ちて皆潤澤を爲し、餓鬼の身上に落ちて變じて大火と成りて舉身燒然す。俱に是れ一雨にして墮つる所變異するなり。此一事は衆形を明にして定質無し、罪福の感ずる所に隨ふなり。

外國に住處有り、衆中に一道人有りて衆僧の淨地大行に當る。更に一道人有りて、性嗔患多し。便ち舌を以て之を舐めて用て衆人に示す。人の罪を彰さんと欲すと雖も、自ら其口を惡むを知らず。此れ人の好んで他の惡を言ふを明す。其喩是の如し。唯人の罪を彰すを知りて、自ら其行を毀つを知らざるなり。

外國の小人、貴人に事へて其意を得んと欲し、貴人の地に唾するを見れば、競ひ來りて足を以て之を躡去す。一人大いに健勦ならざる有り。之を躡まんと欲すと雖も、初より得ること能はず。後に貴人の唾せんと欲するを見れば、始め口を聚むる時便ち足を以て其口を躡む。貴人問うて言はく、『汝反せんと欲するや。何が故に吾口を躡む。』と。小人答へて言はく、『我が是れ好意なり。反ぜんと欲せざるなり。』貴人問うて曰はく、『汝若し反ぜずんば、何を以て是に至らん。』小人答へて言はく、『貴人唾する時、我常に唾を躡まんと欲すれども、唾纒に口を出づれば衆人恆に奪ふ。我前に始よりして得ること能はず。是故に口中に就いて之を躡むなり。』と。此は、論議の時、要す須らく義口より出でて然る後に難す

【二五】佛、弟子とともに入衛に入りて乞食するの喩。

べきを喩ふるなり。義口に在りて理未だ宣明せざるに便ち難を興す者の若きは、口中に就いて之を踏むが若きに喩ふるなり。

昔、佛と諸の弟子と、舍衛城に入りて乞食せんと欲せしに、道の邊に一坑有りて、擧城の汚露、諸の不淨物悉く其中に在るを見たり。一老母猪の、諸の腕子を將めて、共に不淨坑の中に臥せるを見る。時に佛微笑して四十齒を現じ并に四牙を出したまふ。四牙の中より大光明を放ち、遍く三千を照し、周く十方に及ぶ。其光明還りて佛身を繞ること三匝し、胸の上より入る。諸佛の法もて地獄の事を説きたまふや、光足下より入る。畜生の事を説かんと欲したまへば、光膊より入る。餓鬼の事を説かんと欲したまへば、光辭より入る。人事を説かんと欲したまへば、光臍より入る。諸天の事を説かんと欲したまへば、光胸より入る。聲聞の事を説かんと欲したまへば、光口より入る。緣覺の事を説かんと欲したまへば、光眉間相より入る。諸佛菩薩の事を説かんと欲したまへば、光頂より入る。阿難、光の胸より入るを見て、佛の諸天の事を説かんと欲したまふを知り、即時に長跪して佛に白して其意を問はんことを請ふ。佛語りたまはく、「阿難、過去無數劫に一長者有り。兒息に乏無く、唯一女有るのみ。端正殊妙にして聰明辯慧なり。其女の父母甚だ之を愛重せり。女年既に大となるや、便ち一偈を説いて父母に問うて言さく、「一切は駛くして水のごとく流る。世間苦樂の事、本何れの處よりか出で、何れの時か當に休息すべ

【六】醫師、王の病を治するの驗。

き」と。父母之を聞いて其奇雅なるを慶ぶも、何の言を以て此偈に答ふべきやを知らず。其女、此義を解かんと欲すれども、而も答を蒙らず。便ち大いに愁憂して復飲食せず。父母、女の愁憂するを見て便ち大いに恐懐し、即時に爲に大會を設け、諸の婆羅門及び多智の長老を請す。衆人雲のごとく集り、供設既に畢る。衆會の中に於て一の小床を施し、女其上に坐す。還前偈を説いて以て衆人に問ふ。衆人、默然として能く答ふる者無し。長者即ち七寶もて盛滿せる一盤を以て宣令して曰はく、「其れ能く答ふる者有らば、此を以て之に與へん。」と。時に一婆羅門有り。形體端正にして智慧尠少なり。其珍寶を食らんとして便ち言はく、「我能く答へん」と。其女、之を聞いて即ち偈を説きて以て婆羅門に問ふに、亦此偈の義の歸する所を解せず。直に言はく、「此事都て有る所無きなり」と。女即ち思惟すらく、「即ち有る所無きの定を得たり」と。便ち自ら唱言すらく、「此れ眞の大師なり、我を益すること少なからず」と。女後に命終して有る所無きの處に上生し、四十劫を過ぎて彼天壽を盡して來りて此間に生ず。爾時の長者女は、此老母猪の身是れなり。天福已に盡きて宿命の罪至り、此世に於て猪形を受けたるなり。此女母猪を説きて問へる時、若し明師に遇はば即ち道を得べし。此女、禪定を行すと雖も、智慧有ること無し。定報既に終りて還りて惡道に墮せしなり。」と。

昔、一の大國王有り、身に重病を得て十二年差えず、一切の大醫も能く治する者無し。

時に邊方の小國、大王に統屬す。一醫師有りて善能く病を治す。王即ち召し來りて己が病を治せしむるに、未だ久しからざるの間に、即ち除降を蒙りぬ。王便ち念じて此師の恩を報ぜんと欲し、屢使者を遣はして彼國に宣令すらく、「此師、王の病を治めて差えたり。應に大功有るべし、宜しく應に賞賜すべし。象馬、車乘、牛、羊、田宅、青衣、直人、嚴師の具、皆之を給與せん。」と。彼小國王、宣を奉じ命を上へ、爲に舍宅高堂重閣を設け、共師姑、衣裳、飲食、珠環、嚴具を給し、及び象馬牛羊の一切をして備に足らしむ。師の、王の邊に在るや、語ること有る者無し。師便ち思惟すらく、「我、王の病を治めて大いに功夫有り、未だ王の當に我に報すべきや不やを知らず。」と。復數日を経て王轉平復し、其師辭せんことを請うて、本國に還らんと欲す。王便ち之を聽いて一羸馬を給す。乘具も亦弊れたり。師大いに歎恨すらく、「我、王の病を治して大いに功夫有り。而るに王は恩分を知らず、料理を相せず、我をして空しく去らしむ。」と。道に循うて愁歎し以て永恨を爲せり。適本國に至るに群象有るを見る。象子に問うて曰はく、「此れ誰が家の象ぞ。象子答へて曰はく、「此は是れ某甲師の象なり。」と。復象子に問うて曰はく、「某甲師は何によりてか此象を得たる。」象子答へて曰はく、「某甲師は大王の病を治して、差えたるの功報いて得る所なり。」と。小しく復前行するに群馬有るを見る。馬子に問うて曰はく、「此れ誰が家の馬ぞ。」馬子答へて曰はく、「某甲師の馬なり。」と。小しく復前行するに群牛羊有るを見る。群牛羊子に問うて曰はく、「此れ誰が家の牛羊ぞ。」羊子答へて曰はく、「某甲師の牛羊なり。」

【七】 惡雨の喩。

と。小しく復前行するに、其本舎の高堂重閣殊に本宅に異なるを見る。門人に問うて曰はく、『此は是れ誰が舎ぞ。』門人答へて曰はく、『此は是れ某甲師の舎なり。』と。便ち其閣内に入るに、其婦の形色豊悦にして、身に寶衣を服するを見る。怪しんで問うて曰はく、『此れ誰が夫人ぞ。』と。直人答へて言はく、『此は是れ某甲師の夫人なり。』と。象馬に従ひ見て舎内に入るに及ぶに、皆是れ王の病を治むるの功報いられて得る所なるを知る。便ち自ら追恨すらく、『本、王の病を治するの功夫少かりき。』と。喩へば福德なり。福德の留ること難きは王の病の如きなり。醫師は喩へば福を修するの人なり。王の病を治するは、喩へば行人の能く福事を修するが如きなり。王の病差ゆるは、福德の已に成じたるが如きなり。王の宣令して象馬室宅を賞賜するは、言はば福此に積みて報彼に成るなり。夫れ速ならんと望む者は、常に應に遅かるべきを患ふ。人の少しく信じて時に福を作すこと有りて、便ち朝夕に報あらんことを望むが如きなり。老病死至れば便ち謂へらく、自然に善報無きなり。天の中陰を得れば、善應に具に至るべし、彼醫師の象馬を見るが如きなり。此中陰に乗ずれば、既に天宮に到る。彼生陰を受け、目に天堂の種種の嚴飾を見て、乃ち往昔の多く作さざりしを追恨するなり。彼醫師の既に賞賜を見て、其治病の功夫の少かりしを恨むが如きなり。

外國に、時に惡雨有り、若し江湖河井城池の水中に墮ち、人此水を食すれば、人をして

狂醉せしめ、七日にして乃ち解く。時に國王有りて、智多く相を善くす。惡雨の雲起れば王以て之を知る。便ち一井を蓋ひて雨をして入らしめず。時に百官群臣、惡雨の水を食し、擧朝皆狂し、衣を脱して赤裸となり、泥土もて頭を塗りて王廳の上に坐す。唯王のみ一人、獨り狂せざるなり。常に著する所の衣、天冠、瓔珞を服して木床に坐す。一切の群臣、自ら狂せることを知らず、反つて謂へらく、「王は大狂たり、何が故に著する所獨り爾るや。」と。衆人皆相謂つて言はく、「此れ小事に非ず、思うて共に宜しく之くべし。」と。王、諸臣の反を欲せんことを恐れ、便ち自ら怖慄して諸臣に語つて言はく、「我に良業有り、能く此病を愈す。諸人小く停りて我服藥するを待て。須臾にして當に出づべし。」と。王は便ち宮に入りて著する所の服を脱ぎ、泥を以て面に塗り、須臾にして還出づ。一切の群臣、見て皆大いに喜び、法應に爾るべしと謂へり。自ら狂ぜしを知らず。七日の後、群臣醒めて悟り、大いに自ら慚愧し、各衣冠を著けて來りて朝會す。王故に前の如く赤裸にして坐せり。諸臣皆驚怪して問うて言さく、「王常に多智なるに、何が故に是の如くなること。王、臣に答へて言はく、「我心、常に定りて變易すること無きなり。汝が狂せるを以ての故に、反つて我を狂せりと謂へり。故を以て若く實心を是非するなり。」と。如來も亦是の如し。衆生の、無明の水を服して一切常に狂せるを以て、若し大聖の常に諸法の不生不滅、一相無相を説きたまふを聞けば、必ず大聖は狂言を爲したまふと謂へり。是故に如來は衆生に隨順し、現に諸法は是れ善なり是れ惡なり、是れ有爲なり、是れ無爲なり

【無明】すべて事に關き精神作用をいふ。癡煩惱のこと。

と説きたまふなり。

【八】阿修羅因縁の喻。阿素洛、阿須羅等とも書き常に帝釋と戦闘をなす神なり。

【須彌】須彌山の頂闍浮提の上のあり欲界六天中の第二の天なり。

【九】王子、山に入るの喻。

阿修羅は前世の時、曾て貧人たりき。居は河邊に近く、常に河を渡りて薪を擔ふ。時に河水深く流れ、復駛疾なり。此人數數水の爲に漂はさる。既に所持を失ひ、身も没溺す。流に隨ひて宛轉すること急なるも、而も出づることを得たり。時に辟支佛有り、沙門の形と爲りて舍に詣りて乞食す。貧人歡喜して即ち施す。飯食訖已りて澡水を行じ畢り、鉢を置き虚中に飛行して去る。貧人之を見て因りて以て發願すらく、「願くば我後生は身形長大にして、一切の深水、膝を過ぐる者無からんことを。」と。是因縁を以て極大身を得、四海の水も膝を過ぐるに能はず、大海の中に立つも身は須彌を過ぎ、手は山頂に據り、下に初利天を觀る。泥んや佛の無央數劫に積みたまひし大誓願にして、法身、虚に滿つること何んが怪むに足らんや。

昔、一國王子有り、年始めて七歳にして便ち深山に入りて仙道を學ばんことを求め、未だ曾て朝廷百官の任を知らず。後に國王壽終して便ち國王たるに堪任する者無し。群臣共に議すらく、「山中の仙人は本是れ王子なり。道徳を兼修せり。此を以て王と爲さば萬國頼有らん。」と。率土の臣民皆出でて山に詣り、此仙を拜して以て國王と爲し、乗するに王輿を以てして迎へて本國に還る。食官に宣勅すらく、「妙饌盛味もて以て大王に饗せよ。」

【厨士】 料理人。

【阿毘曇】 阿毘達磨の舊稱にして、論部の稱なり。

【二〇】 鹿林の諭。

と。王、食味の口に可きを以ての故に、其餘の諸物も事、厨士より之を索む。群臣具に皆笑ふが故に、王に謂つて曰はく、「百官の任する、各主する所有り。厨官は自ら食をつかさどり、衣官は自ら衣を主する。兵事寶藏各司する所有り。食の美なるを以ての故に、備るを一人に責むべからざるなり。」と。此諭は、衆經に、各自ら明す所有れば、備るを一經に責むべからざるを明すなり。彼、自ら諸法の實相を明し、阿毘曇、諸法の有を明すが若き、各各相無相を相異勸して説くなり。

鹿林に昔五百の群鹿有り。此林の中に在りて鹿王有り。一は是れ菩薩にして一は是れ眞の鹿王なり。時に國王有り、城を出でて獵す。此群鹿を見て兵を引きて之を圍む。彼二鹿王共に方計を設け、俱に人王に詣りて長跪して人王に白して言さく、「今王界に在りて分受屠割す。若し王一時に、併せて諸の鹿を殺さば、噉ふことに盡さずして或は臭爛せん。意ふに、日に二鹿を送りて以て王の食に供へんと欲す。餘は次第に當に日日奉送して敢て闕くること有らざるべし。願くば王、聽しめされて少しく命を延ぶることを得しめたまへ。此れ豈大王の恩を是非するならんや。」と。是に於て人王聽して自す所の如くし、圍を閉いて之を放ちぬ。此より以後、彼二鹿王は、自ら相料簡して遂に次第を爲し、日に二鹿を送りて王の厨下に詣る。更に數日にして後、一の妊身鹿有り、應に死に就くべきに次す。彼鹿、王の所に詣りて産の竟るを待たんことを求む。彼王報へて言はく、「餘の鹿次第して未

だ至らず。誰か汝に代ふる者ぞ。」と。彼鹿便ち菩薩王の所に詣りて菩薩に白して言さく、「我王不仁にして理を以て恕せず。今來りて歸命す、願くば爲に之を理せよ。」と。菩薩鹿王其此の如くなるを感み、遂に便ち自ら人王の厨下に詣る。厨士、王に白して言はく、「鹿王自ら來りて厨に詣り、彼妊身の鹿に代へんことを求む。」と。王乃ち之を希有なりと怪み、厨士に語りて言はく、「彼鹿王を將る來れ。」と。是に於て鹿王、人王の所に詣り、遂に王に向ひて廣く其意を説く。是に於て人王、信心遂に生ず、禽獸すら猶尙徳を修む。何に況んや人をや。」と。一國の中に令して永く射獵せざらしむ。此を以て林野を長く群鹿に施す。是より以來、遂に鹿林を以て名と爲せり。

【三】 尸利求多の
喻。

【六師】 外道の六
師にして、富闍那
末加梨拘梨子。
刪闍夜毘羅底子。
阿者多翅舍欽婆羅
迦羅鳩駄迦旃延。
尼健陀若提子なり
【瞿曇】 釋尊のこ
と。

昔一居士有り、其婦妊身せり。佛を請じて舍に到らしめ供養を畢りて、如來をして其妻の後に子を生むを占はしめんと欲す。男女を知らんと欲すればなり。佛言はく、「後に當に男を生むべし。端正殊好ならん。長大に至るに及んで、當に人中に於て天上の樂を受くべし。後當に羅漢道を得べし。」と。居士之を聞くも心に疑ひて信ぜず。後に復六師を請じて供養し畢りて、復之をして占はしむ。居士、六師に語りて言はく、「前に瞿曇沙門をして之を占はしめたるに、「後に當に男を生むべし」と言へり。知らず實に男なりや否や。」と。六師言はく、「當に女を生むべし。」と。彼六師等は佛法を憎疾し、苟くも相反かんと欲すればなり。還りて自ら思惟すらく、「若し彼男を生まば、彼居士便ち當に我を棄てて瞿曇に奉

事すべし。』と。便ち詭語を作さく、『居士、君の婦は當に男を生むべし。男を生むの後は方
 に大凶禍ありて、家室親屬、七世絶滅せん。不吉を以ての故に我前に詭りて是れ女ならん
 と言ひぬ。』と。居士之を聞いて心用て惶怖し如く所を知らず。彼六師等便ち居士に語らく、
 『吉利を得んと欲せば、惟當に之を除去すべきのみ。』と。六師便ち居士の爲に腹を按む。
 腹を按みて之を落さしめんと欲するなり。腹を按みて止まざりしかば、居士の婦遂に命終
 しぬ。而も兒は死せざりき、宿命福徳の故なり。居士便ち其婦を棄てて死人の處に寄き、
 大いに薪を積み之を焼く。火焰既に盛なるとき、佛便ち諸の弟子を將りて就往いて之
 を觀す。居士の婦の身破壞せるに、便ち其兒の蓮花の上在りて坐せるを見る。端正殊好に
 して顔貌雪の如し。佛著域に命じたまはく、『此兒を取り來れ。』と。耆域即ち取り來りて、
 出して本の居士に還す。居士遂に便ち之を長育せり。年十六歳に至るや美きこと人に過
 きたり。便ち廣く多美の飲食を設けて彼六師を請す。六師既に坐し、未だ久しからざるの
 間に便ち失笑す。其人問ふ、『何が故に笑ふや。』と。六師便ち答ふ、『吾は、五萬里に山有
 り、山下に水有りて、一獼猴の水に落ちたる有るを見る。是故に笑ふのみ。』と。此兒、其
 虚妄なるを知り、便ち鉢中に種種の好羹を盛り、飯を以て上に覆ひ、人をして擎げて之を
 與へしむ。餘人には、鉢中、下に飯を著き上に羹を著く。諸人皆食するに唯六師のみ獨り
 瞋りて食せず。主人問ふ、『何が故に食せざる。』と。六師答へて言はく、『羹無し、云何が
 食せん。』主人言はく、『君が眼は乃ち五萬里に獼猴の水に落つるを見て、何ぞ飯下の羹を見

【戸利求多】王舍城の長者なり。

【三】婆羅門に従ひ乞食するの喩。

【三】田舎人の喩

【馬屎】馬糞の事

ざるや。」と。是に於て六師大いに瞋り、竟に食せずして還り、徑に戸利求多に向ひて廣く説く。其人の姉、求多に與へて婦と作せり。戸利求多之を聞いて亦瞋り、六師に告げて言はく、「瞿曇は是れ彼の師にして、我は大師なり。請來して之を毀辱し、是を以て火坑毒飯を作りしなり。」と。此喩は極めて廣し。一一出すこと能はず、故に略して其要を擧ぐるなり。

昔一道士有り、婆羅門の家に造りて乞食す。婆羅門、婦をして食を擧げて之に食せしむ。婦前に在りて立つ。其姉端正なり。道士之を觀て心に便ち變を生じ、婆羅門に語りて言はく、「欲味過患出。」と。婆羅門解らず、便ち問うて言はく、「何等か欲味過患出なる。」と。道士便ち其婦を抱き、咽共鳴鳴し已りて、婆羅門に語りて言はく、「此は是れ欲味なり。」と。婆羅門大いに瞋りて杖を以て此道人を打つこと一下せり。道人復語らく、「此れ過なり、是れ患なり。」復重ねて打たんと欲す。道人走りて門外に到り、復頭を廻して婆羅門に語らく、「此は是れ出なり。」と。人の玄を解り、義を味ふこと能はず、要す事を指すを須ちて然る後に之を悟るに喩ふるなり。

昔田舎人有り、暫く都下に至り、鞭たれしもの熱き馬屎を持ちて背に塗るを見て、問うて言はく、「何が故に是の如くなる。」と。其人答ふらく、「瘡をして愈え易くして癩と作らざらしむるなり。」と。田舎人密に心中に著す。後家に歸りて其家人に語りて言はく、

『我都下に至りて大いに智慧を得たり。』後家人問うて言はく、『何等の智慧をか得たる。』と。便ち奴を呼びて言はく、『鞭を持ち來りて痛く我に二百の鞭を與へよ。』と。奴、大家を畏れて敢て命に違はず、即ち痛く二百の鞭を與へて血を流し背に被らしむ。奴に語りて言はく、『熱き馬屎を取り來りて我爲に之を塗れ。愈え易くして癩と作らざらしむべし。』と。家人に語りて言はく、『汝之を知るや否や。此は是れ智慧なり。』と。此は、下戒道人の本明師に遇ひて戒を受け、即ち他の受戒を見るを得て便ち本の戒を捐棄し、更に白衣を作りて以て法身を壞するに喩へて、二百の鞭を受けて血を流し背に蒙り、方に更に受くるを求めて馬屎を塗るが如きに喩ふるなり。

【四】咒龍の喩。
 【軍遲】(Vandika) 軍持、彈餅等とも書き千手觀音の四十手の中軍持手に持てる瓶なり。
 【欲界】三界の一にして、淫欲と食欲との二欲を有する有情の住所なり。
 【色界】三界の上にして、欲界の二欲を離れたる有情の住所なり。

外國に咒龍師有り。軍遲に水を盛り、龍池の邊に詣りて一心に咒を誦す。此龍、即時に便ち大火の池底より起り地を擧げて皆然ゆるを見る。龍、火を見て怖れて頭を出して山を望むに、復大火の諸の山澤を焼くを見る。仰いで山頂を視るに空に住處無し。一切皆熱にして身を逃るるに地無し。唯軍遲の中の水のみ以て難を避けて便ち其火を滅すべきを見る。身微小の形と作りて軍遲の中に入りぬ。彼龍池は欲界に喩ふるなり。望む所の山澤は色界に喩ふるなり。山頂を視るは無色界に喩ふるなり。咒龍師は菩薩に喩ふるなり。軍遲の水は涅槃に喩ふるなり。彼咒術は方便に喩ふるなり。大火の然ゆるは現無常に喩ふるなり。龍の大身は憍慢に喩ふるなり。小形と作るは謙卑に喩ふるなり。言は、菩薩、欲色

【無色界】三界の一にして色界の上
に在りて無物質の
世界にして禪定の
住所なり。

【三】一に石道に
當るの喩。二に蛇
の頭尾共に諍ふの
喩。

【閻浮提】須彌山
の南方に當れる大
洲の名なり。即ち
吾人の住する世界
なり。

【泥洹】涅槃に同
じ。解脱には閻波
等と譯す。

を劫燒すること洞然たるを示現し、無常の大火もて衆生を恐怖せしめ、然る後に乃ち悉く涅槃に入らしむるなり。

昔者外國に久遠より來、曾て一石有りて人路の側に當る。時に車馬の爲に踐踏せられ
て小小損減す。彼世に人有りて、其道を妨げんことを嫌ひ、務めて之を除かんと欲し、時
に即ち打壞するに、毒蛇の石中より出でて風を得て轉じて大となる有るを見る。須臾の間
にして身閻浮提に滿てり。閻浮提の中の衆生人物、一日の中に悉く皆噉ひ盡して然る後
に乃ち死せり。此は是れ惡報、尙速疾なることは是の如し。況んや之れ菩薩は本凡人たり。
功を積み徳を累ねて動じて塵數の劫を経、發意に適從して便ち佛道を成じ、法を説きて人
を度し、泥洹を取る、此の利の疾なること豈怪むに足らんや。

昔一蛇有り、頭尾自ら相與に諍ふ。頭、尾に語りて曰はく、『我應に大と爲すべし。』尾、
頭に語りて曰はく、『我亦應に大なるべし。』頭曰はく、『我に耳有りて能く聽き、口有りて
能く視、口有りて能く食ふ。行く時は最も前に在り。是故に大と爲すべし。汝に此術無け
れば、應に大と爲すべからず。』と。尾曰はく、『我、汝をして去らしむ。故に去るを得たる
のみ。若し我身を以て木を遮ること三匝せん。』三日にして已まざりしかば、頭遂に去りて
食を求むることを得ず、飢餓して死するに垂たり。頭、尾に語りて曰はく、『汝、之を放
つべし。汝を聽して大と爲さん。』尾其言を聞いて即時に之を放つ。復尾に語りて曰はく、

「汝既に大たり、汝の前に在りて行くを聽さん。」と。尾前に在りて行くに未だ數歩を経ざるに火坑に墮ちて死せり。此は僧の中に、或は聰明大徳の上座有りて能く法律を斷じ、下に小なる者有りて背て順從ならず、上座の力制すること能はずして、便ち之に語りて、「欲すること爾が意に隨へ。」と言ひて、事濟を成さず俱に非法に墮するを喻へて、彼蛇の火坑に墮つるが若きに喩ふるなり。

【六】 捕鳥師の喩

【結使】 結も使も共に煩惱なり。煩惱は心身を繫縛し、苦果を結成し、衆生に隨逐し又驅使すればかく云ふなり。

昔、捕鳥師有りて羅網を澤上に張り、鳥の食する所の物を以て其中に著く。衆鳥命偪、競ひ來りて之を食す。鳥師其網を引くに、衆鳥盡く網中に墮ちぬ。時に一鳥有り、大にして多力なり。身もて此網を擧げて衆鳥と俱に飛びて去る。鳥師影を視て隨つて之を逐ふに、人有り鳥師に謂ひて曰はく、「鳥は虚空に飛べるに汝は歩きて逐ふ。何ぞ其れ愚なるや。」鳥師答へて曰はく、「是の如く告げず。彼鳥日暮れば要す栖宿を求めん。進趣同じからざれども是の如くんば當に墮つべし。」と。其人、故に逐うて止まず。日轉じて暮るるを以て、仰いで衆鳥の翻飛争競するを觀るに、或は東に趣かんと欲し、或は西に趣かんと欲し、或は長林に望み、或は淵に赴かんと欲す。是の如くして已まざるに須臾にして便ち墮らむ。鳥師遂に得て、次いで之を殺せり。捕鳥師は波旬の如きなり。羅網を張る者は結使の如きなり。網を負うて飛ぶは、人の未だ結使を離れず出要を求めんと欲するが如きなり。日暮れて止るは、人懈怠の心生じて復進まざるが如きなり。栖を求めて同ぜざるとは、六十

【六十二見】之は各の經論の解釋不同なれども、今は大品般若經師母品の説によれば斷常有無の邊見なり。【三七】五百の力士沙門と爲るの喩。

二見を起して恆に相反するが如きなり。鳥の地に墮つるは、人の邪報を受けて地獄に落つるが如きなり。此は結使塵垢は是れ魔の羅網なることを明す。

昔、佛在世の時、五百の力士有りて俱に沙門と爲り、共に一處に在りて坐禪し誦經せり。不善の賊有りて盡く諸の沙門の衣鉢を奪ひて蕩盡す。唯泥洹の僧の在る有り。是賊去りて後、諸の沙門、泥洹僧を輕著し、俱に佛の所に詣りて具に此意を白す。佛、諸の沙門に語りて言はく、「汝何んが大いに喚ばざる。」諸の沙門答へて言さく、「佛未だ聽したまはず、是故に敢て喚ばず。」佛、諸の比丘に語りたまはく、「汝若し敢て喚ばずんば、賊當に日に汝が衣を剝ぐべし。誰か當に能く常に給すべき者ならんや。今日より後、汝が賊の來るを見し時大いに喚ぶを聽す。杖を捉り石を搏して恐怖して去らしめよ。但し誠に之を傷害するに至ること莫からんのみ。人の重んずる所の者は、身なり命なり財なり。此三事は皆惜むに足らざれども輕んずべからざるなり。惜むに足らざるは、其非常に敗壞して堅固有ること無きに、愚は惑うて之を惜みて以て我物と爲し、貪愛惛惛して不善の因縁を起し、後に惡道に墮するを以ての故に、惜むに足らざるなり。輕んずべからざるは、身有るを以ての故に、遇賢聖に値ひて擎跪し曲拳し承迎し禮拜して、後に金剛寶身を得て毀壞すべからざるが故に、輕んずべからずと曰ふなり。命の惜むに足らざるは、人命の爲の故に、殺生し強盜し姪嫉し、口に四過を犯し、心に貪恚邪見を生じ、後に地獄に墮するが故

【財は是れ五家の分】世の財は王と賊と火と水と惡子の五家の共有物にして獨用すること能はざると云ふ智度論等の説を引けるなり。

【金輪聖王】金剛王、金輪聖王などとも云ひ、金輪寶を有する聖王なり

【六】 三堅要の喩

に、惜むに足らずと曰ふなり。而も亦輕んずべからざるは、命有るを以ての故に、聖賢に値遇して、法言を聞くを得て義を精しうし神に入り壽を盡して修行し、後に寶命を得て無量無窮なるが故に、亦輕んずべからずと曰ふなり。財の惜むに足らざるは、財は是れ五家の分にして、盜賊、水、火、縣官、惡子の五家忽に至れば一旦にして便ち盡くるが故に、惜むに足らずと曰ふなり。輕んずべからざるは、良福田に遇へば持用て布施し、種種に供養して遺惜する所無く、後に寶財四大藏を得て、窮を周ひ乏を濟ひ、求むれば盡くる無きを得るが故に、輕んずべからずと曰ふなり。夫れ福德を修するには、皆當に心を擬して佛道を成ぜんことを求むべし。應に但人天の果報を索むるのみなるべからざるなり。所以は何ん。譬へば穀を種うるに、但其實のみを求め、實未だ熟せずと雖も、莖節枝葉自然に已に得るが如し。布施もて福を作すも亦復是の如し。發意擬儀して但佛泥洹の道を成せんことを求むるに、道未だ成せずと雖も、人天の中の樂、金輪聖王、帝釋梵王自然に並び至ること、亦穀を種うるに、期せずして莖節枝葉自然に得るが如きなり。所以に、應に但人天果報の樂をのみ求むべからざるものなり。

昔者、天竺に一住處有りて十萬の沙門有りき。五萬餘人は已に阿羅漢を得、六通清徹にして諸漏已に盡きたり。餘に五萬人有りて、或は下三道を得たる者有り、或は未だ得ざる者あり。一長者有りて、人天中の福樂を求めて自ら恣にせんと欲し、來りて塔廟に詣り、

【深水】 手を洒ふこと。

飯食を旅設し衆僧に供養す。時に一上座の六神通大阿羅漢を得たる有り、其人極めて老い、鬚は白く齒は落ちて形體枯朽せり。十萬人の中に於て最も上首と爲す。此長者の爲に咒願し畢る。飲食已に竟りて深水を行じ訖り、便ち長者に語りて言はく、「檀越、今の施は方に大罪を得たり。」と。時會中に於て未だ道を得ざる者皆謂く、「上座老いたるが故に此狂言を出すのみ。」と。上座答へて曰はく、「其事實なるのみ。狂言に非ざるなり。」衆人問うて言はく、「此人福を種ゑたるに云何が罪を得たる。」と。上座答へて曰はく、「汝等共一を識りて未だ其二を識らず。此人福を種ゑて復人天中の樂を受く。樂を受くるの中に於て大いに憍慢を生じ、自ら謂うて解脱を求むるに足らずと爲し、佛を覩て奉せず、經を見て讀まず、沙門を見て虔敬の心無し。放逸自ら恣にし食福既に盡きぬ。當に惡道に墮ちて無量阿僧祇劫に罪畢りて乃ち出づべし。大罪を種うるを得る所以の者は、世俗の大報を受くるに因りての故なり。若し心を聖道に擬して此福を爲す者は、後に報を受くるの時終に此報無きなり。」

【三九】 酪を賣りて自存するの喻。

昔天竺國に二りの貧人有り。生計を營むこと儉にして常に酪を賣りて自ら存つ。二人各頭に酪瓶を戴きて、市に詣りて賣らんと欲す。時に天雨に値ひて道路泥滑なり。一人、智有り、自ら思惟して言はく、「今日泥雨にして道路行き難し。我或は傾倒せば瓶破れて失盡さん。今並に酥を出さん。若し我倒るるに當らば失ふ所幾くも無からん。」と。一人は少智にして全く持ちて市に詣る。中路泥滑にして二人俱に倒れぬ。一人は愁憂し涕泣し、

宛轉して地に臥せり。一人は都て愁色無く亦懊恨せず。人有りて問うて言はく、「汝等二人、酪の瓶俱に破る。失ふ所亦等しきこと彼此異なること無し。何が故に一人は獨り愁へて涕泣し懊恨し、一人は靜然として都て恨色無きや。」と。一人答へて曰はく、「我持する所の酪は都て未だ酥を出さず。今日瓶破れて失ふ所蕩盡せり。是を以て懊惱して自ら勝ふることは是す。」一人答へて曰はく、「我持する所の酪は先に已に酥を出せり。今瓶壞ると雖も失ふ所幾くも無し。是を以て坦然として恨むる所無きなり。」と。瓶は身に輸ふるなり。酥は財物に輸ふるなり。人有り、慳貪にして財物を吝惜し、現利を貪求して非常を念はず、身瓶頗に壞して財物失盡すこと、輸へば、彼人の酥酪を忘失し、懊惱追恨して悔むも及ぶ所無きが若し。人有り、深く後世の果報を信じ、有ゆる財物は並に用ひて惠施すれば、身瓶壞すと雖も喪失すること幾くも無きこと、亦彼人の酪瓶壞ると雖も失ふ所甚だ少く、其心坦然として追恨する所無きが如し。

【三〇】 五百の賈客海に入りて寶を求むるの喻。
 【摩竭魚】 正しくは摩遮羅魚と云ひ鯨魚と釋す。

昔 五百の賈客有り、船に乗りて海に入り、珍寶を求めんと欲せしに、摩竭魚の頭を出し口を張りて衆生を食はんと欲するに値へり。時日風少くして船去ること箭の如し。薩薄主、衆人に語りて言はく、「船去ること大だ疾し、帆を捨てて下沈すべし。」と。帆ち言ふ所の如く帆を捨てて下沈すれども、船去ること轉 駛にして止るべからず。薩薄主、樓上の人に問うて曰はく、「汝何等をか見る。」我、上に兩日有りて出づるを見るに、下に白山有

り、中に黒山有り。」と。薩薄主驚いて言はく、「此は是れ大魚なり、當に奈がすべきや。我、汝等と今困厄に遭へり。此魚の腹に入らば復活くるの理無し。汝等、各事ふる所に隨ひて一心に之を求めよ。」と。是に於て衆人各奉ずる所に隨ひ、一心に歸命して此危を脱せんことを求む。求むる所、愈篤くして船の去ること、愈疾に、須臾も止らず。當に魚口に入るべし。是に於て薩薄主、諸人に告げて言はく、「我に大神有り、號名けて佛と爲す。汝等、各木奉ずる所を捨てて一心に之を稱せよ。」と。時に五百人俱に大聲を發して南無佛と稱す。魚、佛の名を聞いて自ら思惟して言はく、「今日世間に乃ち復佛有り。我當に何んが衆生を傷害するに忍ぶべけんや。」と。適思惟し已りて即便口を開ぐに、水皆倒に流れ轉じて魚口に遠ざかり、五百の賈人一時に脱することを得たり。此魚の前身は曾て道人たり。罪を以ての故に此魚身を得たり。既に佛の名聲を聞き尋いで宿命を憶ふ。是故に思惟して善心即ち生ず。此は、五百の賈人の、但一心に佛を念じ、暫く名號を稱し、即ち彌天の難を解脱することを得たるを明す。況んや復念佛三昧を受持すれば、重き罪は薄からしめ、薄き者は滅せしむ。此の如きの應は未だ多と爲すに足らず。

劫盡く焼くる時は一切皆空なり。衆生福德の因縁力の故に十方より風至り、風風相次いで能く大水を持す。水上に一千頭の人有りて、二千の手足あり、名けて達細と爲す。是人の臍中に千葉の金色の蓮華を生じ、其光大に明かにして萬日の俱に照すが如し。華中に

【三二】一に劫盡く焼く因縁の喩。二に貴人比丘尼と爲る因縁の喩。

【結加趺坐】 跏趺坐を左右の跏趺上に結加して坐する佛陀の坐法なり。

【六波羅蜜】 菩薩の六行を波羅蜜と云ひ、此に左の六種あれば六波羅蜜と云ふなり。

檀波羅蜜、二、尸羅波羅蜜、三、羼提波羅蜜、四、毘梨耶波羅蜜、五、般若波羅蜜、六、般若波羅蜜。

【阿耨多羅三藐三菩提】 佛智の名にして眞正に知る一切の眞理を知る無上の智慧なり。

【結戒】 戒律を結成して護持すること。

【三】 草木皆藥と爲すべきの喻。

人有りて結加趺坐せり。此人復無量の光明有り。名けて梵天王と爲す。心に八子を生じ、八子は天地人民を生ず。是梵天王は諸の姪嬪に於て已に盡して餘すこと無し。是を以ての故に言はく、「若し人有りて修禪淨行して姪欲を斷除せば、名けて梵道を行すと爲す。佛の轉法輪を或は梵輪と名く。是梵天王、蓮花の上に坐す。是故に諸佛は世俗に隨ふが故に、寶蓮花の上に於て結加趺坐して六波羅蜜を説く。此法を聞く者は必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。」

昔一りの貴女人有り。面首端正にして儀容挺特なり。出家し修學して應眞道を得たり。城外の林樹の間に於て獨り行す。道に一人に逢ふ。此比丘尼を見るに顔貌端正なれば意甚だ愛着せり。前に當りて立ち、之を要して口宣し誓言すらく、「若し我に従はずんば汝が去るを聽さず。」と。比丘尼便ち爲に惡露不淨の法を説く、「頭眼手足、何の食るべきか有らん。」と。彼士夫便ち比丘尼に語りて言はく、「我は汝が眼の好きを愛す。」と。時に彼比丘尼、右手もて其一眼を挑りて彼男子に示すに、血面に流れたり。彼男子是を見て欲意即ち息みぬ。比丘尼手に一眼を捉り、還りて佛の所に到り、以て眼を本處に復す。佛に向つて具に説き、是に因りて結戒して是より以來、比丘尼の城外に住し及び聚落の外に獨り行くを聽さざりき。

天下の草木は皆藥と爲すべきも、直不善なるは、別者なるが故に知らざるのみ。昔聖醫

王有り、名けて耆域と曰ふ。能く藥草を和合して童子の形を作るに、見る者歡喜して衆病皆愈ゆ。或は一草を以て衆病を治し、或は衆草を以て衆病を治す。天下の草、任げて用ひざる者有ること無く、天下の病、能く治めざる者有ること無し。耆域命終して天下の藥草一時に涕哭し、俱に聲を發して言はく、『我皆用ひて病を治すべし。唯耆域有りて能く我を明かにするのみ。耆域死せる後は、復人の能く我を明かにする者有ること無し。後世の人或は能く錯り用ひ、或は増し或は減じて病をして愈えざらしめ、擧世の人をして皆我を神ならずと謂はしむ。此を思惟するを以ての故に涕哭するのみ。』と。唯一の訶梨勒有りて別に一面に在りて獨り涕哭せず。自ら言はく、『我は衆病を皆能く治せん。我を服する者は病皆當に差ゆべし。我を服せざる者は自ら差えざるのみ。人を須たずして明なるが故に涕せざるのみ。』と。耆域は喩へば佛の如きなり。衆の藥草は諸法の如きなり。訶梨勒は非常の如きなり。言は、佛在世の時は善く法の能を用ふ、即ち姪怒癡を以て藥と爲して人の病を差ししなり。諸餘の善法に及びては、宜しきに隨つて用ひて常軌無きのみ。喩へば病者の良醫のごときのみ。佛、世を去りたまひて後、少しく能有りて善く諸法を用ひ、時に應じて變ずる者有り。非常に觀る者は治むる所多きなり。亦能く姪を治め亦能く恚を治め亦能く癡を治め、善く用ふる者は則ち病を去り、善く用ひざる者は傷ふ所無し。是故に喩へば訶梨勒の如きなり。其餘の諸法は用ひ易からざるなり。之を用ふる者は宜しく必ず其師を得べし。善く用ふる者は則ち病損じ、善く用ひざる者は則ち病を増すなり。

【三】屠兒の喩。
阿闍世佛在世の頃の摩竭陀國、王舍城の治者なり

【六天】欲界の六天にして、一切に四王天、二に忉利天、三に夜摩天、四に兜率天、五に樂變天、六に他化自在天なり。

(三)昔屠兒有り、阿闍世王の所に詣りて一願を乞はんことを求む。王曰はく、『汝何の願をか求むる。』答へて曰はく、『王の節會の際、宜しく須らく屠殺すべし。願くば王、我に賜はらんことを。當に盡く之を爲すべし。』と。王曰はく、『屠殺の事は人の樂はざる所なり。汝何が故に之を爲さんことを願樂するや。』答へて曰はく、『我昔貧人たり、屠羊の肆に因りて以て自ら生活しぬ。是に由りての故に四天王の上に生ずることを得たり。彼天壽を盡して來りて人中に生じ、續いて復羊を屠り、命終の後に第二天の上に生ず、是の如くするごとと六返して羊を屠る。是事に因りての故に遍く六天の中に生じて福を受くること無量なり。是を以ての故に今王に従つて乞ふ。』と。王曰はく、『設し汝の語の如くんば何を以てか之を知る。』答へて曰はく、『我宿命を識る。』と。王聞いて信ぜずして、謂へらく、『是れ妄語ならん。此の如き下賤の人、何んが能く宿命を識らんや。』と。後に便ち佛に問ふ。佛答へて曰はく、『實に言ふ所の如し、妄語には非ざるなり。此人先世に曾て辟支佛に値ふ。佛を見て歡喜して至心に諦觀し、仰いで其首を視、俯して其足を察して、善心即ち生ず。是功徳に緣りての故に、一一に六天の上に生ずることを得たり。下りて人間に生じ、自ら宿命を識れり。福徳熟し得たるを以ての故に、六反天人の中に生じ、罪未だ熟せざるが故に、未だ便ち受けざるなり。此身を畢らば方に當に地獄に墮して羊を屠るの罪を受くべく、地獄畢りて當に羊の中に生れて一一に之を償ふべきなり。此人は宿命を識ること淺く、唯

【三四】王の布施を好むの喻。

六天の中の事を見るのみにて、過去の第七身に及ばざるが故に、便ち謂へらく、『羊を屠るは即ち是れ天に生ずるの囚なり。』と。是の如きは但是れ宿命を識るのみにて、通ずるに非ず、明なるに非ざるなり。

昔一國王有りて深く罪福を識り、果報有ることを信じ、常に布施を好みて人の意に逆かず、名四遠に流れて聞知せざるもの無し。時に鄰境、兵を起して以て其國を襲ふ。王自ら思惟すらく、『若し我出でて戦はば必ず傷害せん。寧ろ自ら身を喪うて、百姓を托げざらん。』と。彼軍已に至りて城の東門より入る。王便ち西門より出でて、單獨の一身もて逃れて林野に奔りぬ。時に一婆羅門有りて遠方より來り、路林間に由りて此王に遇値ひ、即時に二人對して相問訊す。王、婆羅門に問ふ、『汝は何より來りて何所へか往かんと欲する。』と。婆羅門曰はく、『我、某甲國王は、志、布施を好みて人の意に逆かずと聞きぬ。故に遠より來りて求むる所有らんと欲す。』と。王即ち答へて曰はく、『君が言ふ所の者は我身是れなり。』と。婆羅門之を聞いて驚怪し、即ち王に問うて曰はく、『王今此の如くなるは其故何んぞや。』と。時に王具に事情を以て婆羅門に向つて説く。婆羅門之を聞いて地に蹴れて絶死すること良久し。王即ち扶け起し、水を以て之に灑ぎ、然る後に乃ち蘇りぬ。王之に問うて曰はく、『何が故に是の若くなる。』と。婆羅門曰はく、『我昔より貧窮にして財に乏無し。故に遠より來りて財寶を乞はんと欲せしに、如何が今日王に値ふこと此の如くな

る。故に懊惱して自ら堪勝へず。』と。王即ち婆羅門を慰め諭すらく、「汝愁憂すること莫れ。我當に汝をして大いに財寶を得しむべし。彼異王は我國を得と雖も、未だ我身を獲ず。宣令遣齋して贍養甚だ重し。汝便ち我身を縛し、送りて王の門に詣るべし。彼王歡喜して必ず重く汝を賞せん。』と。是に於て婆羅門即ち其言の如くし、草の索繩を以て其兩手を縛し、送りて王の門に詣る。門人之を見て速に入りて王に白す。王聞いて驚喜し、即ち前門の士に命令し、即ち攝へし所の王の身及び婆羅門を將ゐて王の坐前に詣らしむ。王、婆羅門に問ふ、「汝何の術有りてか能く此人を致しし。』婆羅門答ふ、「我に他の術無し、此人本王爲りし時、志布施を好めり。故に遠より來りて乞ふ所有らんと欲し、林樹の間に於て遇値ひて相見る。彼、我に問うて言はく、「何の至る所をか欲する」と。時に我答へて言はく、「某甲國王の所に至らんと欲す」と。彼、我に答へて言はく、「某國王は我身なり」と。我是語を聞かや即時に絶死して了に自ら覺えず。彼、我を扶け起して水を以て之に灑ぎ、復我に問うて言はく、「汝何が故に此に至れる」と。我答へて言はく、「宿世に施さず、世に生れて貧窮なり。故に遠より來りて財寶を乞はんと欲するに、本願遂げざるが故に自ら懊惱するのみ」と。彼、我を勞りて言はく、「勸念を生ずること莫れ。吾當に身を以て汝が須むる所を給すべし」と。便ち我に語りて言はく、「汝、繩を持ちて我兩臂を縛し、送りて王の門に詣るべし。彼王自ら當に汝に賞賜すべきなり」と。時に王は婆羅門の語を聞きて即便涙出でて、席を避けて下坐して木の王に語りて言はく、「汝は眞に人王なり、我は賊爲り。』

と。是に於て其所領を攝めて本國に還歸し、前王は位に復して令行すること故の如し。此は、菩薩は本凡人爲り、行ずる所、至徳なれば其事是の如く、若し經卷を書持すること有りて至心なることは是の如くなれば、天及び悪人も終に便を得ざることを明すなり。

二種の賊有り、一は手力の賊にして、二は方便の賊なり。手力の賊は手もて自ら壁を鑿ち、或は師子頭と作り或は蓮花形と作り、舍に入りて物を取るも、盡くは持ち去らず、要す少多を留めて、主人をして生活するを得しめんと欲し、人をして「此は是れ好賊なり」と稱せしめんと欲す。還自ら服を變じて諸人と俱に、物を失ひし家に至りて看る。時に彼衆人、賊の壁を鑿ちし處を見て、皆言はく、「此は是れ巧賊なり。」と。時に一りの方便の賊有り、微梵志服にて亦其中に在りて便ち是言を作さく、「是れ巧賊に非ず。力を用ふること多くして物を得ること少し。云何が巧と爲んや。要す力を用ひずして物を得ること多くば、爾らば乃ち巧と爲さん。」と。時に手力の賊密に心中に著し、衆人の去るを待ちて隨つて之に問ふ、「云何が方便の賊爲らん。」と。答へて言はく、「汝知らんと欲せば但我に隨つて行け。一月餘日にして當に汝をして見しむべし。」と。是に於て方便の賊便ち方便もて微梵志服にて一大富長者の家に造り、長者に告げて言はく、「我少物を須む。能く我に與へば亦佳ならずや。」と。時に長者、「一衣直を索むるならんと謂ひて、便即答へて言はく、「當に相給與すべし。」と。未だ得ざるの間續いて後に重ねて往いて言はく、「君が前に我に許せし者は、意ふに定めて得べきや不や。」と。長者答へて言はく、「當に必ず得しむべし。」と。是の

如くして至ること三びし已りて、便ち文書を作りて官に詣り、之に言ひて言はく、『某甲長者、我に負ふこと十萬兩金なるに我に還さんことを欲せず。』と。賊便ち長者の怨家を取りて以て時人と爲す。時に官、其時人并に長者の身を録し、時人に問うて言はく、『實に爾るや不や。』と。時人答へて言はく、『實に爾るなり。』と。官遂に長者をして金を輸して此梵志に與へしめぬ。方便の賊は手力を用ひずして大いに物を得たるなり。隨喜も亦爾るなり。

【五】 龍の水を藏するの喻。

龍の、能く一滴水を以て、一國に雨らす者有り、或は二、或は三、乃至一閻浮提に雨らす者なり。龍心に自ら念言すらく、『我此一滴水を藏し、常に在りて乾かざらしめんと欲す。何れの處にか得べきや。』と。是思惟を作すも餘處に得ず。唯當に大海の中に安著すれば乃ち乾かざるべきのみ。此は少しく施して大報を得ること。窮無き者は、唯當に佛道の中に安著すべきことを喻ふるなり。此は、水滴と龍智と合するが故に、憑る所、處を得て乾かず、布施と般若と合するが故に、置く所、處を得て竭きざることを明すなり。

轉輪聖王、金輪を致す所以は、帝釋常て四天王に勅すらく、『二月六日、天下を按行して人の善惡を伺へ。』と。四天王及び太子の使者、大國有りて十善四等を以て天下を治め、

【六】 聖王の輪を得る因縁の喻。
 【轉輪王】 (Sakya varu-ñja) 身に三十二相を具し位に即く時は天より輪寶を感得し之にて

人物を憂勤するの心、喻へば慈父のごときを見たり。是事を以て天帝釋に白すに、帝釋之を聞いて其能く爾るを慶び、便ち毘首羯磨に勅して其金輪を賜ふ。毘首羯磨即ち金輪を出

四方を降伏したれば轉輪王と名くと云ふ。

【四天王】帝釋の外將にして持國、多聞、增長、廣日の四天の王なり。

【毘首羯磨】帝釋の臣にして建築工業を司る神なり。

【飛行夜叉】空中を飛行する夜叉神なり。

【三七】梵王の長壽の喩。

し、持して毘沙門天王に付す。毘沙門天王は持して飛行夜叉に付す。飛行夜叉は持し來りて大國王に與ふ。毘沙門天王、此夜叉に勅すらく、『汝常に王の爲に此金輪を持し、王の頂上に當ること其壽命を畢るまでし、中ごろ捨つることを得され。』と。是夜叉常に爲に之を持し、進止來去、聖王の意に隨ひ、其壽命を盡して、然る後に毘沙門天王に還付し、毘沙門天王は毘首羯磨に付し、毘首羯磨は還内して寶藏の中に著く。

昔、大梵天王有り、名けて婆伽と曰ふ。宿命ありて長壽の因縁を種多たるが故に、其壽は七十二梵天人の壽を経終れるも、其壽故くにして盡きず。是壽に因りての故に便ち邪見を生じ、自ら謂ひて常と爲せり。復是念を作さく、『我自任を得たり。今より以後は、人の能く妄りに我を見る者を得ること無けん。若し我來ることを聽さば則ち見え、聽さざれば則ち止まん。』と。佛、神心道眼を以て其心を照察し。舍利弗日連等の四大弟子と俱に、虚を陵ぎて往いて其頂上に坐したまふ。舍利弗は右に在り、目連は左に在り、大迦葉は前に在り、大迦梅延は後に在り。梵王に告げて曰はく、『汝自ら以て常に自在を得たる者と爲せり。吾今何んが汝が頂の上に坐することを得たる。』と。又問うて言はく、『汝は何等の事を見てか自ら以て常に自在を得たりと爲せるや。』梵王答へて言さく、『我梵天の中に、次第に七十二人壽の盡くる有りしに、我故くして盡きず。復三大福德の天人壽終する有るも我故くにして盡きず。是因を以ての故に、自ら謂ひて常と爲せり。』と。佛、

【五通仙】五神通即ち、一に天眼通二に天耳通、三に他心通、四に宿命通、五に如意通を得たる仙人なり。

【阿那含】不還又は來來と譯して欲界の煩惱を斷じ盡したる聖者を云ふ

梵王に語りたまはく、『我は是れ一切智人なり。汝が始めて生ぜし時を見、亦汝が死する時を見る。一切諸法に及ぶまで錯謬有ること無し。汝、癡惑にして自ら以て常と爲すこと莫れ。』と。此梵天王も亦宿命を知り、成佛に臨まんこと定めて知られんや不やを欲し、便ち佛に語りて言さく、『佛、我本何の因縁もてか壽命を口ばすを得しかを知りたまへるや。』佛、梵王に語りたまはく、『汝本曾て五通仙と作り、衆人の船に乗りて海に入る有るを見る。暴風切に起りて波口滔天す。仙通力を以て衆人を救接して持ちて岸上に入り、此諸人をして死の厄を免るることを得しめたり。一の因縁なり。又汝曾て大國の臣爲り。一聚落有りて王法を犯す。時に王大いに怒りて盡く此聚落を誅せんと欲す、汝、時に之を懇みて家の財産を竭し、爲に道を地に作りて全濟するを得しめたり。二の因縁なり。是二因縁を以ての故に此長壽を得たり。却後復三十六劫を経て汝が壽當に盡くべし。』と。梵天王、佛の語を聞き已りて、信心即ち生じて一心に思惟して即ち阿那含道を得たり。此梵王、此因縁を以ての故に、尙壽命を得ること是の如し。況んや佛は無量阿僧祇劫に於て、大誓願を積みて衆生を慈悲し、頭を求むるには頭を與へ、眼を求むるには眼を與へ、一切の求むる所は盡く能く周給したまへば、身虚空に充ちたまふも未だ大と爲すに足らず、塵數劫の壽も未だ多しと爲すに足らざるものなり。

佛說雜譬喻經 終

生

經

第二卷	經典部
-----	-----

生しやう

經きやう

卷第一まきのだいいち

西晋二藏竺法護譯せいしんさんざうぢくほふびやく

佛說那賴經第一ぶつせつならいきやうだいいち

開けることは是の如し。一時佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十人たひびくしゆせんにひやくごと俱ともなり。

【舍衛】シユラプステイ(Savatthi)の譯す。拘薩羅國の都城。【祇樹給孤獨園】ジエータワナ、アーラーマ(Jeta-vana-Anāthapindita-Araama)祇園精舎の在る所。【族姓子】クラ、ブトラ(Kula-putra)印度に四姓ある中の隨一。【沙門】シユラマナ(Sramana)出家せる男のこと。

爾時、族姓子有あり、家を捨てて妻子を捐なす、諸の眷屬を捨てて、行じて沙門と作る。其婦端正にして殊好しゆかうなり。夫の、家を捨てて沙門と作りしを見て、便ち復行またゆいて嫁せり。族姓子之を聞いて、心に欲こころ念ねんを生じ、婦と相娛樂あひごらくせし時、夫婦の禮もて戲笑放逸けせふほういつせしを、心に常に此を想おもひて須臾しゆゑんも去らず。婦を念ねんずれば前に在り、面類形貌めんるいぎやうぼう、坐起舉動ざきぎどう、愁憂憤惱しゆうゑんひんぬし、復慕樂ふくぼらくして梵行ぼんぎやうを淨修じやうしゆせず。便ち其家に歸かへれり。諸の比丘聞もんいて便ち往ゆいて佛に啓かす。世尊、時に應おつじて人を遣やり比丘を呼び來きたらしむ。輒すなはち即教すなはちを受けて比丘至いたり、皆佛の爲に禮らいを作なし、却かへりて一面に坐ざせり。佛、即ち比丘の爲に色欲しきよくの念ねんを斷たき、癡愛ちあいの失しつを除のぞき、爲に塵勞ちんらうの穢けれ、樂らく少すく憂うれ多く、多おほく壞こして少すく成じやうじ、節限せつげん有あること無なきを説ときたまふに、唯佛ただぼつ及び諸弟子しよだうしの明智みやちの人のみ有りて是これを分別ぶんべつせるのみ。

『愛欲の罪を生ずる稱限すべからず。色欲を超越し衆想を休息し、閑居して諦を講ぜよ。』
時に族姓子、尋時に賢聖の法を證明せり。時に諸比丘、未曾有なることを得、各共に議して言はく、『且く當に此を觀るべし。』是に於て族姓子、家牢獄、銀鉛扭械を棄つるも、妻子を想著して自ら繫縛し、梵行を樂します、時に於て世尊、如來の章句、諸通慧句、有日章句、化人賢聖を開示したまふ。

時に諸比丘、世尊に白して曰さく、『我等是族姓子を觀察するに、家居を棄捐し信じて沙門と爲れるも、還妻子の形類舉動家事を念ぜり。世尊爲に愛欲の瑕、法律の徳、生死の難、無爲の安きを説き、聖證、無著の界に至らしめたまふも、自らは如來至眞等正覺に非ず、執れか能く爾るや。』佛、諸の比丘に告げたまはく、『此比丘は、但今世のみならず、心常に慾に在り、情色に迷惑して自ら制する能はず、志縛せられて慾に在り、能く制する者無し、獨り佛のみ勸化して、其所感愛欲の著を除くのみ。乃往過去久遠世時に、一國王有り、方迹と名く、中宮嫖女稱けて數ふべからず。顏貌端正にして色像及び難きを、他人と争ふ、姪蕩女と與にし、慈哀を離れ、或は婢使と與にし、或は童子と與にし、或は鬪諍す。各各鬪諍して肯て共に和せず、適鬪諍し已れば便ち宮を出でて去りぬ。王方迹、之を聞いて悲り、諸臣吏をして諸嫖女を求めしむるに所趣を知らず、愁憂して樂します、涕泣悲哀して、諸婦女の戲笑娛樂し、夫婦の義の本現前せし時、諸に伎樂を作せしを念じ、擧動坐起の法を念じ、反つて益用て愁ひ自ら解する能はず。時に於て一仙人有り、五神通を興

【五神通】 足地を履ず、人の心命を知り、眼を千里の外に回らし、名を呼べば直に至り、石壁も礙なきをいふ。

し、神足もて飛行し、威神極り無し、名けて那賴、晋に無樂と曰ふ。方迹王が愛欲の爲に惑うて自ら解する能はざるを見て、爲に慈愛を興し、愛欲の患を蠲除せんと欲し、空中に飛在して神足を現じ、忽然として來下して王殿の上に住せり。時に王即ち見、尋いで起つて迎逆し、之に讓つて床に在らしむ。則便坐に就き、王に問うて曰はく、「大王何が故に意、愛欲に在りて、勞思多念に、情色を思想して自ら諫むる能はざるや」と。「頓首す、實に然り、宮中の姝女、共に尊卑上下の叙を争ひ相和する能はず、各馳捨して去りぬ。是を以て憂感して自ら解すること能はず」と。是に於て仙人爲に愛欲の難、離欲の徳を説く、「世人の求欲は厭足を知らず、假使一人一切の欲を得るも、厭く無く、足る無けん」と。偈を以て頌して曰はく、

一切世間の欲は、一人として厭かざるに非ず
所有の危害有り、云何が自ら己を喪はん
一切の諸衆の流は、悉く皆海に歸し
以て満足を爲さず、所愛も厭爾せざれば
假使梵爲るを得て、尊豪を致さんも及び難し
所欲復彼に超えんも、以て厭足と爲さずば
假使閻浮提の、樹木諸草葉を
之を焼くも以て厭かさらん、欲の足らざること是の如し

設し八輩の男子、端正なる顔貌、妹しくも

一切加ふるに欲を以てし、威力端正にして好きも

設し爲に言はば悪みを増し、毀して丈夫たらんと欲し

輕きを以て輕しと爲さず、未だ厭かざるを用て厭くと爲す

大王當に知るべし。設し愛欲の事を習へば

恩愛轉増長し、譬へば醜水を飲むが如くならん

時に於て彼仙人、王方迹の爲に講じ

爲に辛苦の偈を説き、意をして開解を得しむ

時に於て仙人、方迹王の爲に、是法教を以て開化す。時に王即ち開解し、慕樂する所無

く、出家して道を爲し四梵行を修し、愛欲を斷除し衆行を具足し、壽終の後梵天に生ぜり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾時の方迹王を知らんと欲せば、則ち此比丘是なり。

那賴仙人とは則ち我身是なり。爾時、相遭ひしに、今亦相遇ふ』と。

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説分衛比丘經第一

【分衛】ビンダパ
ータ(Pindapata)
托鉢のこと。

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十人と俱なり。一比丘有り、普く分衛を行じ一に次第して、婬蕩家舎に入る。時に婬女、

比丘の入つて其家舎に至れるを見、歡喜踊躍し、即ち座より起ち尋いで奉迎し、足下を稽首し、請入して座に就かしむ。又問はく、「比丘、仁何れより來れるや。」比丘答へて曰はく、「吾主は分衛す、故に來つて乞食す。」

時に於て女人、即ち爲に餽饌衆味を施設し、之を盛つて鉢に滿てて之に奉上す。比丘即ち受けて自ら退いて去る。彼時に比丘、是美食甘美の豐足を得て、心中に歡喜し自ら勝ふる能はず、數數姪蕩女の舎に往詣せるに、時に女、心と念計して、此比丘の守法に及び難しとし、頻に爲に甘脆肥美の食を興設して之に授與せり。往返息まざるに學問未だ明かならず、所作辨ぜず、未だ諸根を伏せざれば、姪蕩女の顔色妙好なるを見、姪意爲に動き志放逸に在りて姪蕩女に著しく、口に軟柔恩情の辭を出し、親附の心を懷き、與に語つて周旋し、彼家に日々に分衛を懈らず、比丘其好色を覩、音聲を聽聞して、姪意爲に亂れ、迷惑憤錯して自ら覺る能はず。而も佛經に曰ふ、「目に好色を見れば、姪意爲に動く」と。又世尊の曰はく、「女人を觀ると雖も、長者は母の如く、中者は姉の如く、少者は妹の如く子の如く女の如し。當に内に身を觀じ、皆惡露にして愛すべき者無く、外は畫瓶の如く中に不淨を滿すを念じ、此四大、地水火風の因縁もて合成し、本無所有なるを觀すべし」と。時に比丘、空觀を曉らず但色視のみを作せば、姪意則ち亂れ、姪女人の爲に頰を説いて曰はく、

淑女は年幼童にして清淨、顔貌は端正にして殊妙好なり

一一に容を觀るに等倫無し、吾意に志願す共に和同せんことを

時に姪蕩女、此比丘の所説是の如きを見て、「古本より兇惡の食姪を知らず、反つて清淨奉戒の意を以て待つに、之を仁賢と謂はん、意んで罪壘を犯すは、其來言に隨つて、當に之に折答すべし。」

即時に偈を以て報じ、頌して曰はく、

當に飲食を持して來り、香華好衣服

若干種の供養あるべし、爾らば乃ち仁と俱ならん

是に於て比丘、偈を以て女に答へ、頌して曰はく、

吾に財業有ること無し、我行舉動を觀よ

乞匄を以て立つのみ、所得有らば相與へん

是に於て姪女、偈を以て頌して曰はく、

假使卿身に財業無きを、何が爲に志を立てて致し難きを求むる

卿の所作の如きは羞慚無し、馳走して促く出でて我家を離れよ

時に比丘を逐出して追うて祇樹門に至る。諸比丘、即ち來つて佛に詣り、世尊に啓白

して具に本末を説けり。佛の言はく、「此比丘、宿命は曾て水鼈たり、姪女は曾て獼猴た

り。故に亦相好むも志果を得ず。還自ら侵欺して正教に入らず、惱患を増益して今に於

ける是の如し。姪女に志願し願ふも心に從はず、逆に折辱せられ慚愧して去る。佛の言は

く、「乃往過去無數世時に、大江水中に鼈の居遊する所あり、其江の水邊は樹木熾盛なり。

彼叢樹の間に一の獼猴あつて彼樹に止頓せり。時に於て彼鼈江水より出でて、遙かに樹木を見るに此獼猴あり、而も與に談語して稍稍前行し、之に親近せんと欲し數數往返す、相見る日あり、日日是の如くして之を視ること懈らざるに、則ち姪意を起し、心爲に迷惑し汚染穢濁にして自ら覺る能はず、則時に偈を以て歎じ、頌して曰はく、

顏貌は赤黄にして眼而も青く、叢樹の間に遊び枝格に戯る

吾今問はんと欲す毛の滑澤なる、何の志求をか欲し何をか存する所ぞ

獼猴偈を以て答へて曰はく、

吾今具に鼈の本末を知る、國の王子爲らば聰明有らん

今卿何が故に而も我に問ふや、我此言を聞いて狐疑を懷けり

是に於て鼈、復偈を以て答へて曰はく、

吾心に常に存するは志、卿に在り、心に恩愛を懷き思想して念ず

是を以ての故に而も相問ふ、當に何の法を以てか會するを得べきやと

獼猴、偈を以て報じ、頌して曰はく、

鼈當に之を知るべし我は樹に處するなり、應に君と共に合會すべからず

假使我と俱なるを得んと欲して、叢樹の間に在つて相供養するや

是に於て鼈、復偈を以て答へて曰はく、

吾服食する所は肉を以て活く、柔軟甘美は果藏に勝れたり

當に獲べからざるを貪求すべからざるも、當に汝が爲に衆の捺果を致すべし
爾時彌猴、偈を以て報じて曰はく、

假使卿が身を樹に處せざるに、何が爲に我に致すべからざるを求むるや
もし今我を觀て羞慚無くんば、日自ら馳走せん、見るに忍びざればなり

佛、諸比丘に告げたまはく、『爾時の彌猴は今の姪蕩女人足なり、鼈とは分衛の比丘是なり。彼時放逸にして之を慕求せるも願の如きを得ず、今も亦是の如し。』
佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説和難經第三

聞けること是の如し、一時佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十人とも俱なり。

爾時、和難釋子は、多く眷屬を求むるに其人を覩ず、行跡を察せずして、出家を欲する有り、便ち鬚髮を除いて沙門と爲り、成就戒を受け、本末、何より從來する所、父母の名字、善惡好醜、識と不識とを問はず。趣いて人を得んと欲し、鬚髮を下すに具足戒を授く。諸比丘呵すらく、『當に此を爲すべからず、趣いて來人有れば輒ち沙門と爲し、眷屬を得んと欲して後患を顧みず。當に本末、何より從來する所、舉動の安諦を問ふべし。侵欺せらるるを爲して後悔ゆとも及ぶ無けん。』和難比丘、都て諫を受けず、値うて人を見るを得ば、輒

ち鬚髮を下す。

爾時、世に兇惡人博掩子有り、遂に和難釋家子の、無央數の衣被鉢器有り。好んで眷屬を求め、趣いて來學するを得ば、本末所從來處を問はず。便ち鬚髮を下すを聞き、其身飢凍して以て自活する無ければ、往いて誑詐せんと欲し、心に豫め計を設けて和難の所に詣り、恭敬肅肅として稽首して禮を爲す。威儀に法則あり、坐起安詳として卒暴有ること無し。和難釋子、其人に告げて曰はく、『沙門は安隱にして無憂無患なり、愛欲に親近するは則ち吉祥に非ず。懈怠して行無し。人知らざれば愆の爲に壞せられ、而も愛欲を得ひ、無央數に煩惱の害を致す。愛欲に貪著せば度を得ること能はじ。』其人答へて曰はく、『我身は愛欲を棄捐して沙門と爲ること能はず。』和難又問ふ、『子何を以ての故に沙門爲らざる。沙門たらば多く衆利を獲ん、子便ち意を降し、出でて沙門爲れ、所學の德行吾悉く供給せん。』其人答へて曰はく、『唯諾す。命に従ひ、諸の憂患を除き、假使安隱たらば、便ち沙門爲らん』と。

則ち鬚髮を除き成就戒を受く、沙門と作ると雖も教を受けて使ひ易く、故に自ら示現し、恭敬にして失無く、精進勤修して未だ曾て懈怠せず、忍辱もて教に順ふ。時に和難信すべく保つべきを見て内態を觀ぜず、復狐疑せず。之を信すること一の如し。諸の衣被及び鉢、震越の諸の供養の具を以て、皆用て之に托せり。外に出でて遊行するも意中安隱にして、態を作すを謂はず。悉く衣鉢、諸の供養の具を斂めて、馳走し藏寶して獨

【震越】チーヅラ
(Tibetan) 臥具又は
衣服と譯す。

り一處に在り。博掩子と俱共に飲食せり。時に和難、彼新弟子の所在を聞き、即時に速に還り其室中を觀るに、竊取せる所多し。周匝して普く問ひしに、今所湊を爲すも、權もて時に現ぜず、但遙に之を聞くのみ。

彼博掩子は、落度兇暴にして、佯つて沙門と作り、卿を欺詐し、竊に、財物を取らんと欲せり。衆人答へて曰はく、「卿は性倉卒にして本末を問はず、便ち鬚髮を下す。今取る所の物、獨處に在り、博掩子と俱なり、而も共に食飲せり。以て彼に在るを知るも、恐れて禁制せず、默聲して内に憐めり。諸の比丘聞き、具足して佛に白す。

是に於て大聖、諸の比丘に告げたまはく、「此博掩子は落度の人、但に今世のみならず。畏しき形貌閑居の像を以て、竊欺する所有り、前世も亦然り。和難比丘は刈らずして續いて之を信ぜよ。乃往過去久遠世時に、時に王舍城に一りの賢人有り、姪蕩家に入りて姪女と俱なり。飲食歌戲して相娛樂し、所有の財業久しからずして殫盡せり。其財物は姪女に悉く之を奪取せられ、復其家に入るを聽さず、姪女之を逐ひ、數數發遣するも、都て肯て去らず。時に姪女人、其家より驅出し、去つて更に財を求めば、爾乃來還せよと。財を求めて得ざれば、財を求むるを用ての故に、鬱單國に到る。彼國に到ると雖も識知る所無し。時に鬱單國に大尊者有り、多財饒寶にして勢富無量なり。佯つて仁賢を現じて尊者に往詣す。

「吾は賈客たり、衆人の導として某國より來り、多く財寶を致せり、道に惡賊に遇ひ悉

【王舍城】 ラーヂヤアリハ (Rājagṛha) マガダ國の都城。

く劫奪せられ皆財業を失へり、貧窮委厄、以て自活する無く、纔に命を濟ふを得んとして盡力奔走し、今尊者と歸す。左右に給侍せん」と。

時に於て尊者、之を見ること此の如く、威儀に法則あり、行歩進止に威神徳有り、「此れ則ち佳人なり、吾爲に設計せん、興復せしむるの故に。」其人黠慧なれば、聰明辯才あり、舉動機に應じ、志は懈怠せず、意性寤め易く、極可の尊者而も以て自ら樂しむ。其心を謹慎し、未だ曾て放逸せず、所作成辦し事として成ぜざる無し。身行清淨に、口言柔軟に、繼續有ること無く、工談美辭なり。衆人の見る者歡喜せざる無し。尊者の眷屬、家中の大小、悉く共に敬愛し皆共に讚譽せり。尊者の見るも然り。踊躍慰勞し、咸く以て慶と爲す。其行跡を見るに漏失有ること無く、即時に付信せり。時に尊者其人の徳を観るに、内外表裏に瑕短を覩せず、普く之を勸助せり。其人の所作は成立する所有り。第一に恭敬し未だ曾て輕慢せず、最も篤信せられ、弟の如く兄の如く、等しくして差特無し。戒定安諦に欺誑有ること無く、稍稍付信するに大財業を以てするに、即時に竊取し、之を出して外に在り。車に財寶諸の好物を載せ、還つて王舍城に至り、妖姪蕩女と飲食し相樂しむ。彼異時に於て其人現ぜざれば、普遍く行索するも所湊を知らず、藏中と觀察せば、大に財寶を失ふこと稱計すべからず。財寶無きを見て、遍行して求索せるも所湊を知らず、乃ち人に從つて聞くに、此人還つて王舍城に至り、姪女と俱に飲食せり。此れ博掩しにして是れ長者に非ず、仁賢人に非ず。尊者心に念すらく、「以て遠近に走る、復得べからず」と。

甚だ自ら瞋恨し、數吒して偈を説く、

是れ賢君子に非ず、外貌は好華を以てせり

色もて人を信すべからず、及び柔軟美辭もてするも

舉動行を觀察せよ、外に現るる佳善の如きも

明者は常に遠慮すべし、共に止つて當に察試すべく

乃ち志性の悪を知らん。博掩子聲を揚ぐるも

吾時に棄捨せず、譬へば雜毒食の如し

云何が反復無けん、亦復恩情に薄し

知者は與に俱ならず、救ふと雖も當に捨すべからしむ

我時に適之を見、信の故に欺侵せらる

非賢に賢貌を現じ、財を竊んで亡走せり

佛、諸の比丘に告げたまはく、「爾時の尊者は、今の和難比丘身是なり。落度欺者は、今

の博掩子の沙門と作つて和難を欺きし者はなり。前世に相侵せば今世も亦然り。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説邪業自活經第四

聞けること是の如し。一時、佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十

人と俱なり。

時に和難釋子、人の爲に經を説き、生活の業を論じ、但飲食衣被の具のみを講じ、人の爲に經を説き、福德事報應の果を講じ、未だ曾て道誼の慧を講論せず、大に衣被飲食の諸饌を得たり。此を擗取し已りて立ちどころに聖賢を離るる若干事有り、俗經典、世間の飲食を説き、種種非宜の説を興起し、度世無極の慧を演ぜず。諸比丘所行の分衛を見るに、人家に在つて、但俗事衣食の供を説くのみなれば、即ち時に訶諫し轉相告令ぜり。衆學之を聞き、即ち共に追隨して所爲を訶諫せり。『云何が賢者なる。世尊大聖は、已に聖通身最正覺を以て、世の妙法を講じたまへば及び難く了じ難し。玄普の道教は無念無想にして、其心名を離れ安隱にして患無く、明者の達する所なり。無央數億百千劫より、本諸佛に従つて聽聞奉持し、皆安隱に度せり。』

諸の比丘聞いて家の信を以て家を離れ道を爲すも、而も返つて更に世俗の經典を説き、多想多求、諸事、世俗の飲食、無益の義を興發し、聖賢の迹を離れ、乃ち復世俗の事を講論せり。時に比丘往いて世尊に啓す。佛、比丘に告げたまはく、『是れ沙門に非ず、此れ出家の業を具足し、法に因て生活するに非ず。但衣食を求むるのみにして未だ曾て教導せず。』時に佛世尊、無數の事を以て之が所作の道法の教に非ざるを呵したまひ、諸比丘に告げたまはく、『和難釋子は愚昧の丈夫なり。但今世に衣食の利を以て、世俗の經典を廣く説法するのみに非ざるなり。自ら名を顯し衆をして供養せしめんと欲す。前世も亦爾り。乃往

【和上】ウパード
ヤー (Upathya)
視教師と譯す。受
戒の時の師。

過去無數世時に、異の閑居に於て多く神仙有り。其中に所在して一の仙人有り。愚冥無明にして心閉ぢ意塞り、國王太子及び諸臣吏の爲に、唯但飲食諸饌衣服の具を講説し、經道を論ぜず、處るに時節を知り、見るに車馬に乘じ、逆爲して經を説き、或は迷へる者の爲には往いて經を説き、或は罣礙に處するに爲に經を説き、或は衣食世俗の諸饌の爲に、爲に歎じて經を説く。是に由ての故に美飲食、諸の供養の具を致せり。時に異學梵志之が此の如きを見て、國王太子及び諸大臣の爲に經典を講説せるに、遙に乘騎を見たり。時に諸仙人往いて和上に啓し、及び餘の仙人之が斯の如きを聞き、皆共に訶諫して所爲に非ずとす。時に於て和上五通仙人に之を問ふ。菩薩即時に呵譴す。らく、一當に是の如くなるべからず、其れ此非義の事を犯す有り。若くは誹謗有り、此二人を計する、皆善哉に非ず。奇雅と爲さず、爲に此經を説くも、聖賢住を離れて典籍に應ぜず、其聽受者も亦宜に應ぜず、則ち兩ながら墮落せん。」

是に於て和難、偈を以て頌して曰はく、

兩俱に解誼せず、之を計せば兩ながら墮落す

說法に理を得ず、經を聴くも義を解せず

世俗に於て値ひ難き、神仙は道誼を講ず

俗を以て衣食を供し、無知なれば此を歎説す

粳米飯を服食し、上美の肉を全供し

以て聖賢の誼に依り、典籍を論解せんと欲す

遊志もて閑居に在り、飯食に果粮を採る

是れ吾歎樂する所、神仙は此法を歎ぜり

道徳は寂として歌ふ所、法利は梵志爲り

威儀もて自ら調伏せば、非法を樂むを得ること無し

節を知つて少く求め、家を捨てて分衛を行ぜんより

寧ろ此業を以て活きなば、經典に違するを得ること無し

佛、諸比丘に告げたまはく、『爾時常に衣食諸饌を以て説法し、道を論ぜざる者知らん

と欲せば、今の和難釋子是れなり。』諸の梵行を淨くする、其和上とは今の比丘衆是れな

り。五通仙人は我身是れなり。前世に相遇へば今も亦相値ふなり。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説是我所經第五

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十

人と俱なり。

爾時一の尊長者有り、財富無量にして、金銀珍寶稱數すべからず。勤苦して治生し、飢

渴寒熱、諸難に觸盲し、諸患を憂感し、道理を以てせずして此財業を積めり。財富を爲す

と雖も、自ら衣食せず、布施する能はず、二親を供養し奉事する能はず、妻子僕使を給足する能はず、中外家室親里に益無し。安んぞ能く布施して福徳を爲さんや。衣は即ち麤衣なり、食は即ち惡食なり、意中に慍慍なれば、父母窮乏し、妻子裸凍すとも、家室の外、與に交通せず、各自ら兩隨し、常に煩惱を恐れて求索する所有り、所作慳貪に慍慍此の如し、少福無智にして第一矜矜として齎持する所無し。本治生の時、或は能く至誠なるなり、或は至誠ならざるあり、財寶を積累すること稱計すべからざるも、衣食すること能はず。時に於て壽終せるも、既に子性無ければ、所有の財寶は皆没して官に入る。世尊、比丘に告げたまはく、『且く聽け、愚冥の下士は微妙の寶を得るも衣食する能はず。父母妻子奴客に供せず。萬分の後、復益する所無くして而も減損有り。比丘此を聞いて、具足して佛に啓さく、『唯然り世尊、一長者有り、名號を某と曰ふ、財富無量なるも衣食すること能はず、父母妻子僕使に供せず、布施すること能はず、一旦壽終して財物没して官に入れり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『今此尊長者は、但に今世に慳貪にして、財寶を愛惜するのみに非ず、前世も亦然り。乃往過去無數世時に、大香山有り、無央數の華芡諸藥及び胡椒樹を生ぜり。華芡樹上に、時に一鳥有り、名けて我所と曰ふ、其中に止頓せり。假使春月藥果熟するの時、人皆採取して服食せば疾を療す。時に我所鳥、喚呼して悲鳴す。此果は我所なり、汝等取る勿れ、吾心に人をして之を探らしめんを欲せず。』唯叫喚呼する

も衆人續いて取つて其聲を聽かず、彼鳥薄福なる愁憂叫呼して聲休絶せず、是に縁て命過せり。

佛の言はく、『是の如く是の如し。比丘是間に於て、愚騃の子は下士たり、行を治めて財を求め、或は正或は邪、財寶を積累するも、一旦命盡くれば財身に隨はず、彼鳥の我所と名くる者の如きは、華菱樹及び諸藥樹を見て、且成熟せんを欲し、叫喚悲鳴して皆是れ我所といふも、人遂に採取して禁制すること能はざるに由る。』

時に於て世尊、則ち頌を説いて曰はく、

鳥有り我所と名く、香山に所在せり

諸藥樹成熟せば、叫喚して是れ我所なりと

彼叫喚の聲を聞いて、餘鳥皆集會するも

衆人藥を取りて去れば、我所鳥は懊惱す

是の如く假使人、無量の寶を積聚し

既に飲食を念はず、施さざれば斯鳥の如し

縣官及び盜賊、怨家水火子

之を奪ひ或は燒没すること、我所の藥果の如し

好く飲食する能はず、床臥具も亦雨り

香花諸の供養、所有皆是の如し

既に人身を得るを致し、種類に來歸せんも

命盡くれば皆捨て去り、一として其身に隨ふ無し

是故に當に徳を殖ゑ、後世を顧念すべし

人の作す所の功德は、後世に且人を待つ

壽終に臨んで、心中に湯火を懐くを得ること無し

吾前に放逸を爲せり。故に當に徳本を造るべし

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾時の我所鳥を知らんと欲すれば、則ち今の此尊長者

是なり。是故に比丘當に此を修學すべし。當に慳惜すべからず。垢濁の心を除き、常に清

淨を修する、是れ諸佛の教なり。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛說野雞經第六

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十

人と俱なり。

爾時佛、諸の比丘に告げたまはく、『乃往過去無數世時に、大叢樹有り、大叢樹の間に

は、野猫有りて遊居せり。産に在りて日を経るも食せず、飢餓極まらんと欲して、樹王上

を見るに一の野雞有り。端正姝好にして、既に慈心を行じ、一切の岐行喘息人物の類を愍

哀せり。時に於て野猫、心に毒害を懷き、雞命を危ふからしめんと欲し、徐徐に來り前んで樹下に在り。柔軟の辭を以て頌を説いて曰はく、

意は寂とし、相異殊なる、魚を食し若は好服せんとせば
樹より來つて地に下れ、當に汝が爲に妻と作るべし

時に野雞、偈を以て報じて曰はく、

仁者は四脚有り、我は身に兩足有り

計るに鳥と野猫とは宜しく夫妻爲るべからず

野猫偈を以て報じて曰はく、

吾多く遊行する所の、國邑及び郡縣に

餘人を得んと欲せず、唯意に樂ふは仁に在るのみ

君は身に端正を現じ、顏貌に第一を立つ

吾も亦微妙の好あり、行ずること清淨なること童女のごとし

當に共に相娛樂すべく、如し雞遊んで外に在らば

兩人共に心を等しうする、亦快樂ならずや

時に野雞、偈を以て報じて曰はく、

吾卿を識らざらんや、是誰に何をか求むるや

衆事未だ辦足せざれば、明者は歎ぜざる所なり

野猫、復偈を以て報じて曰はく、

既に此の如きの妻を得、反つて杖を以て頭を撃つは
中に在つて貧を劇しと爲す。富者は雨寶の如し

眷屬に親近し、大寶財は無量なれば

以て家室に親近し、息心に堅固を得ん

野雞、偈を以て答へて曰はく、

息意なれば自ら卿に従はんも、青眼は惡瘡の如し

是の如き鏹繫を見るは、牢獄に閉在するが如し

青眼、偈を以て報へて曰はく、

我と同心ならず、言口は刺棘の如し

會當に何を用て致すべき、愁憂當に思想すべし

吾身は臭穢ならず、戒徳香を流出す

云何が我を捨てて、遠く遊んで別處に在らんとか欲する

野雞、偈を以て答へて曰はく、

汝遠く牽挽せんと欲するも、凶弊なる蛇虺の如し

彼皮を拵んで柔軟なれば、爾乃ち申叙を得ん

野猫、偈を以て答へて曰はく、

速すみかに來下らげして此こゝに詣たれ、吾われに所誼しよぎする有あらんと欲ほつす
并ならに當まさに親里しりに語かたり、及びおよ父母ふもに啓けすべし

野雞やけい、復偈またげを以もつて答こたへて曰いはく、

吾われに童女どうにょ婦ふ有り、顔正かまただしく心性しんじやう好よし

禁戒こんがいを愼つしむこと法ほふの如ごとく、護意ごいして違ちがせざらんと欲ほつす

野猫やめう、偈げを以もつて頌ほして曰いはく、

是こゝに於おいて蕪くちやう杖じやうを以もつてするも、在家ざいけには正教しやうけうに順したがひ

家中けちゆうに尊長そんちやう有り、法戒ほふがいを以もつて益やくと爲なす

楊柳やうりゆう樹じゆは外そとに在あり、皆時みなときを以もつて茂盛もじやうす

衆しゆは共ともに仁にんに稽首けしゆすること、梵志ぼんしの火ひに事つかふるが如ごとくならん

吾家わがは勢せき力を以もつて、諸もろの梵志ぼんしに奉事ぶつじせば

吉祥きしやうにして多おほく子こを生なみ、當まさに財寶ざいほうを饒かたかならしむべし

野雞やけい、偈げを以もつて報ほうじて曰いはく、

天當てんまさに汝なんぢが願ねがひひくみ、梵枝ぼんじやうを以もつて卿きやうを撃うつべし

世よに於おいて何なにぞ法ほふ有あつて、云何いんかが雞けいを食じせんと欲ほつするや

野猫やめう、偈げを以もつて答こたへて曰いはく、

我當われまさに肉にくを食じせざるべし。暴露ぼうろに清淨しやうじやうを修しゆし

諸天衆に禮事せば、吾此輩を得ると爲す

野雞、偈を以て答へて曰はく、

未だ曾て此、野猫の淨行を修せしを見聞せず

卿所滅有らんと欲してか、賊と爲りて雞を噉はんと欲する

木と果とを分別し、美辭もて伴つて喜笑するも

吾終に卿を信ぜず、安んぞ雞を得て噉はざらんや

悪性にして卒暴、面を覩るに赤きこと血の如く

其眼は青きこと藍の如し、卿は當に鼠蟲を食すべし

終に雞を食するを得ず、何ぞ行じて鼠を捕へざる

面赤く眼は正青に、叫喚して猫を言ふ時

吾衣毛は則ち堅ち、輒ち避けて自ら藏れんと欲す

世世卿を離れんと欲せるに、何の意あつてか今相振つや

是に於て猫、復偈を以て答へて曰はく、

面色豈好からんや、端正皆童なりや

當に威儀則、及び餘の諸の功德を問ふべし

諸行は當に具足すべく、智慧は方便有り

家居業に瞭了せる、未だ曾て我に比有らず

我常われつねに洗沐せんもくを好み、今好衣いまかうえの服ふくを著つく

起舞おど歌聲かせいの音ねあり、乃すなはち爾我なんぢわれを愛敬あいまうせよ

又當またまさに仁にんが足あしを洗あひ、其そが爲ために頭髻づけつを梳くしるべし

又當またまさに礙戲げけを調しらへば、然しかる後我のちわれを愛敬あいまうすべし

是こゝに於おつて野雞やけい、偶いを以もつて答こたへて曰いははく、

吾自われじ愛あいし、怨家をんげをして頭あたまを梳くしらしめざるに非あらず

其爾それなんぢと相親あひましまば、終つひに壽長じゆながを得えざるなり

佛ぼつ、諸比丘しよびくに告つげたまはく、『爾時このときの野猫やめうを知らんと欲ほつすれば、今の梅遮比丘せしやびく是これなり。時とき

の雞けいとは我身われみ是これなり。昔相遇むかしあひあへるもの、今いまも亦是またかくの如ごとし。一

佛說ぼつせつ是こゝの如ごとくにして、歡喜くわんぎせざる莫なかりき。

佛說前世諍女經第七

聞きけること是こゝの如ごとし。一時佛あるときほたけ、舍衛しやゑの祇樹給孤獨園ぎじゆきこどくえんに遊あそびたまふ、大比丘衆だいびくしゆと俱ともなり。

爾時このとき調達心じゆたつしんに毒害どくがいを念ねんじ、如來にがはを誹謗ひぼうし、自ら道有みちありと謂いわふ。衆人之しゆにんを呵かし、天龍鬼神てんりゆうきせん、

釋梵四王しやくばんしやう、悉しつく共に曉諭げいゆすらく、『害がいを懷いだいて如來にがはに向むかふことを得うること勿なれ、世尊せそんを謗ぼう

ること莫なれ、世尊せそんは一切三界いっさいさんがいの尊そんたり、三達智有さんたつちあり、畢礙へいゑする所無なし。天上天下てんじやうてんか歸命きめいせざ

る莫なし。云何いかなが誹謗ひぼうして罪つみを得うること無量むりやうなる。卿おやうが佛ぼつを毀こらんと欲ほつするは、由よし手てを舉あ

【四王】東方持國、南方增長、西方廣目、北方多聞。
【三界】欲界、色

界、無色界。

【三達智】宿命明

天眼明、漏盡明の
三明に同じ。

げ日月を擲たんと欲するが如し。一塵を以て須彌を超えんと欲するが如く、一毛を持して
虚空を度するが如し。

調達は之を聞くも其心を改めざりき、時に諸比丘具に以て佛に啓すらく、「調達は但に今世
嫌有つてか、懐結すること乃ち爾るや」と。佛、諸比丘に告げたまはく、「調達は但に今世
のみならず、世世是の如し。乃往久遠無數劫時に一梵志有り、財富無數なり、一好女有り、
端正殊妙にして色像第一なり。諸の梵志の法において其勢姓なる者は、假使處女なるも
明經者に與へんとす。時に梵志諸の同學五百の衆に請うて、供養すること三月、其所知
を察せり。時に五市人中に、一人有り、最上の智慧あり、三經を學び、博く五典に達し、
章句次第して經義を失はず、問者を發遣するに、疑難する所無し。最も上座に處するも、
又年は朽耄にして面色は醜陋にして人に似類せず、兩眼復青し。父母は愁憂し、女も亦惱
を懷けり。「云何が當に此人の爲に姉と作るべきや。何ぞ怨鬼に異ならん。當に之を奈何に
すべき」と。」

【六博】雙六の意

時に遠方に一梵志有り、年既に幼少なり、顔貌殊好に、聰明智慧あり、三經に綜練し、
五典に通達し、上は天文を知り下は地理を觀、災變吉凶、皆預め能く觀、能く六博、妖
異蠱道、懷妊の男女、產乳の難易を知り、十方の蜎飛蠕動、岐行喘息、人物の類を感傷し、
四等心、慈悲喜護を懷けり。彼勢姓大富梵志、諸同學五百の衆を請ひ、供養すること三月、
女に處せんと欲するを聞き、尋時に往詣して一一難問す。諸の梵志等咸く皆窮乏し、

辭の以て答ふる無し。五百の衆智皆及ばざれば、年少の梵志則ち上座に處せり。時に女の父母及び女之を見、皆大に歡喜し、「吾女婿を求むる其目甚だ久し。今乃ち願を獲たり。」と。年尊梵志曰はく、「吾年既に老ゆるも、久しく我女を許し、以て妻婦と爲さんとす。且以て我に假さば、所得の賜遺悉く用て卿に與へん。此婦を置くべし。我年の高きを傷け、相毀辱する勿れ。」年少答へて曰はく、「法を越して以て人情に従ふべからず。我應に之を納むべし。何爲れぞ卿に與ふべき。」

三月畢竟じて即ち處女を用て年少梵志に與ふ。其年老いし者心に毒惡を懷き、「卿は相毀辱して我婦を奪へり、世世所在に卿と怨を作し、或は當に危害すべく、或は毀辱を加へ、終に相置かざらん。」と。年少梵志、常に慈心を行じ、彼獨り害を懷けり。

佛、諸比丘に告げたまはく、「爾時の年尊梵志は今の調達是なり、年少梵志は我身是なり、其女とは瞿夷是なり、前世の結、今に解けず。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛說墮珠著海中經第八

聞けること是の如し。一時佛、王舍城の靈鷲山に在して、大比丘衆五百人と俱なり。一切の大聖、神通已に達せり。

時に諸比丘、講堂の上に於て坐し、共に議して言はく、「我等の世尊は無數劫より精進し

【五道】 地獄、餓鬼、畜生、人、天

て懈ゆるらず、生死しじう五道ごだうの患うれひに拘からず、佛道ぶつだうを得えて一切いっさいを救濟きうさいせんと欲ほつしたまひ、精進しやうじんを用もちての故ゆゑに九劫くきやくを超越ちやうえつし、自ら無上正眞むじやうしやうしんの道だうを致いたし最正覺さいしやうがくを爲なしたまへり。吾われ爲なに度どを蒙かうり、以もつて橋梁きやうりやうと爲なす。』

時に佛ほとけ、遂つひに比丘びくの所議しよぎを聞きたまひ、起たつて講堂かうだうに到いたり、之これに問とひたまはく何なんの論ろんぞと、比丘びく白まをして曰まをさく、『我等われら共に議ぎすらく、世尊せそんの功德くどくは巍巍ぎぎ無量むりやうにして、累劫るいきやくより來きたり、精進しやうじん厭いとく無く、諸難しよなんを避よけず、勤苦きんくして道だうを求もとめて一切いっさいを濟すくはんと欲ほつし、中なかに墮落だらくせず、自ら佛ほとけを得えるを致いたしたまひ、我等われら度を蒙かうれり。』と。

【彌勒】 マイトレ
一ヤ(Maitreya)慈氏じしと譯やくす。當來たうらい出し土どして釋尊しやくそんの處ところを補おぎなふべき菩薩ぼさつ。

【羅刹】 ラークシヤサ(Bakasa)可畏こゐと譯やくす。惡鬼あくおにの名な。

佛ほとけ、比丘びくに告つげたまはく、『實じつに所言しよごんの如ごとし、誠まことにして異こと有あること無し。吾われ無數むすぶ劫きやくより以來いらい、精進しやうじんして道だうを求もとめ、初はつより懈怠けだいな無く、衆生しゆじやうを慍傷みんしやうして之これを度脫どだつせんと欲ほつし、精進しやうじんを用もちての故ゆゑに自ら致いたして佛ほとけを得え、九劫くきやくを超越ちやうえつして彌勒みらくの前に出でたり。我念われんすらく過去かこ無數むすぶ劫きやく時に、國中こくちゆうの人ひとを見るみに、多おほく貧窮びんきゆう有あれば、慍傷みんしやうして之これを憐あはれ、何なんの方便ほうべんを以もつてか、而しかも豐饒ぶつじやうせしめんとて、當まさに海うみに入まつて如意珠にぎしゆを獲え、乃すなはち所救しよきう有あるべきを念ねんじ。鼓くを擲うち鈴しやうを搖ゆがし、『誰たれか海うみに入まつて珍寶ちんぼうを採求さいきうせんと欲ほつす』と。衆人しゆじん大會たいかいして上船じやうせんすべきに臨のぞみ、更さらに教令けうりやうを作なすらく、『父母ふぼを捨すてんと欲ほつし、妻子しよしを惜おしまず、投身としん沒命もつめいして當まさに共ともに海うみに入まるべし。所以ゆゑは何なんん。海うみに三難さんなん有あり、一いちには大魚たいぎよなり、長ながさ二萬にまん八千里はつせんりなり、二にには鬼神きじん羅刹らくしやく其船そのふねを翻ぼんぜんと欲ほつす。三さんには振山ちんざんの故ゆゑに。』

此令このりやうを作なして怨無をらなきを得えたるに、適た更さらに令りやう已をつて衆人しゆじん皆悔みななめり。時ときに五百ひやくご人にん、心獨こころひと

【閻浮提】 ジャム
ブドギーバ (Jam
budvipa) 此世界
のこと。

り堅固にして、便ち風を望んで帆を擧げ、船に乗じて海に入り、海龍王に詣り従つて頭上の如意の珠を求む、龍王之を見るに、一切を用ての故に、勤勞して海に入り、窮士を濟はんと欲せば、即ち珠を以て與ふ。時に諸の賈客、各各寶を採て悉く皆具足せり。船に乗じて來還せり、海中の諸龍、及び諸鬼神、悉く共に議して言はく、『此如意珠は、海中の上寶なり、世俗人の當に獲べき所の者に非ず、云何が海を損じて閻浮提を益する、誠に之を惜しむべし。當に方計を作して、還其珠を奪ふべし。之を失して人間に至るべからず。』と。

時に龍鬼神、晝夜に圍遶すること若干匝なり、其珠を奪はんと欲す。導師德尊く、威神巍巍なれば、諸鬼神龍、船を翻じて如意珠を奪はんと欲すと雖も、力任へざる所なり。時に於て導師及び五百人、安隱に海を渡る。菩薩踊躍し、海邊に住し低頭下手して海神を呪願せるに、珠繫つて頸に在り。時に海龍神、因縁に便を得、珠として海に墮せしむ。導師感激すらく、『吾行いて海に入り、船に乗じ難を涉り、勤苦すること無量、乃ち此寶を得、當に衆乏を救ふべきに、今に於て海神反つて海に墮せしむ。』と。邊侍の人に勅して器を捉持し來らしむ。『吾海水を辨して底泥に至るも、珠を得ずんば終に休懈せじ。』と。

即ち器に水を辨し、精進力をもつて苦難を避けず、壽命を惜まず、水は自然に趣いて悉く器中に入れり、諸の海龍神、之を見ることが是の如ければ、心に即ち懼を懷く。『此人の威勢精進の力は、誠に世の有に非ず、若し今水を辨せば久しからずして海を竭せしめん。』

即ち珠たまはを持もちして來きたり、辭謝じげして之これを還かへす。『吾等聊われらか試こころみしに、圖はからざりき精進しやうじんの力勢りきせい是かくの如ごときを、天上天下てんじやうてんげ、能よく君きみが導師だうしに勝かへるる者もの無なけん。』と。

寶たからを獲え齋さいらして還かへり、國中寶ちゆうちゆうたからを觀み、求願ぐくわんして七寶しちほうを雨あめらさしめ以もつて天下てんげに供くせば、安隱あんいんならざる莫なし、爾時そのときの導師だうしとは則すなはち、我身わがみ是これなり五百ごひやくの賈客かかくは諸弟子しよだうし者しや是これなり。我將わがしやう導だうする所ところは即すなはち精進しやうじん行ぎやうなり。大海だいかいに入いつて還寶珠またいしゆを得え、諸もろの貧窮びんぐうを救すくへば、今いまに佛ほとけを得え、生しやう死じの海うみを竭つして智慧ちゐ無量むりやうに、群生ぐんじやうを救濟きうさいして度どを得えしめざる莫なし。』
佛說ほとけせつ是かくの如ごとくにして、歡喜くわんぎせざる莫なかりき。

佛說旃闍摩暴志謗佛經第九

聞きけること是かくの如ごとし。一時佛あるとき、舍衛しゃゑの祇樹ぎじゆ給孤獨園じやくどくえんに遊あそびたまふ。大比丘衆だいびくしゆ千二百五十せんにひゃくごじゆう人と俱ともなり。

【波斯匿】— プラセ
I. ナジツト。(Pers
C. C. II) 勝軍と譯す
舍衛國の王。

爾時そのとき、國王こくわう波斯匿はしなは、佛ほとけ及び比丘衆びくしゆを請しやうじ、中宮ちゆうぐうに於おいて飯いひせしめんとなす。佛祇樹ほとけぎじゆを出いで、大比丘だいびく及び諸菩薩しよぼさつ、天龍てんりゆう神鬼しんきと、眷屬けんじやくに圍遶ゐらうせられ、釋梵しやくぼん四王しやうわうは華香けかう妓樂ぎがくもて上うへより供養くうやうしたてまつり、香汗かうあせを地ちに灑こぼげり。時に於あつて世尊せそん、大衆だいしゆと俱ともに、舍衛城しゃゑじやうに入り王宮わうぐうに詣たらんと欲ほつす。比丘尼びくに有り、名なけて暴志ぼうしと曰いふ。木魁もくけいを腹はらに繫けけたれば、懷妊わいじんせるに似に如ごとたり、因よつて佛ほとけの衣えを牽ひき、君きみは我夫わがむ爲なり。從したがつて有身うしんを得えしも、衣食いじきを供くせざる、此事このこと云何いん。』と。
時に諸もろの大衆だいしゆ、天人てんじん釋梵しやくぼん四王しやうわう、諸天鬼神しよてんきしん及び國くにの人民じんみん、驚惶きやうわうせざる莫なし。『佛ほとけは一切いっさい三

【摩尼】マニ(Mani)の如意味珠のこと。九十六種【九十六種】九十種外道の事。

界の尊爲り。其心清淨なること摩尼に過ぎたり。智慧の明は日月に超え、三世を獨歩して能く速ぶ者無し、諸邪を降伏すること九十六種、歸伏せざる莫く、道徳は魏魏として喩を爲すべからず、虚空無形なれば汚染すべからざるも、佛心は彼に過ぎ、等侶有ること無し。此比丘尼は既に佛弟子なり。云何が惡を懷いて如來を毀たんと欲するや。」と。

是に於て世尊衆會の心を見、決疑を爲さんと欲し仰いで上方を瞻たまふ。時に天帝釋尋時に來下し、化して一小鼠と作り、擊魁の繩を齧めるに、魁即ち地に墮す。衆會之を覩、瞋喜して交集り、之が所以を怪しめり。時に國王瞋るらく、「此比丘尼は家棄て業に遠ざかり、佛弟子と爲るも如來無極の徳を歎譽すること能はず。反還つて妬を懷き、大聖を誹謗するや。」と。

即ち侍者に勅して地を掘り深坑と爲し、之を倒埋せんと欲す。時に佛、解喻したまはく、「是吾宿罪なり。獨り彼殃に非ざるなり。乃往過去久遠世時に、時に賈客有りて好眞珠を賣る。枚數甚だ多し。既に團明好なり、時に一女有り、詣つて之を買はんと欲す。向に諧偶せんと欲するに一男子有り、選して益價を倍にし、獨り珠を得て去る。女人得ざれば、心に瞋恨を懷き、又從つて請求せるも、復肯て與へず、心盛に遂に怒る。「我前に眞珠せるに、便ち來つて還奪し、又從つて請求するも、復肯て與へず。汝我を毀辱せり。在在所生當に汝に怨を報すべし」と。所在に毀辱して悔いて及ぶ所無し。」

佛、諸比丘國王及び諸比丘に告げたまはく、「買珠の男子とは則ち我身是なり。其女身と

は則ち暴志はれなり。彼恨を懐くに因て所在生處に常に相謗らんと欲するなり。佛説是の如くにして衆會疑解し、歡喜せざる莫かりき。

佛說鬻彌猴經第十

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

時に諸比丘、會して共に議して言はく、『此に暴志比丘尼有り、家を棄て業に遠かり、學道を行じ三寶に歸命す。佛は則ち父と爲し、法は則ち母と爲し、諸比丘衆を以て兄弟と爲す。本道法を以て沙門と爲る。道誼を遵修し、三毒の垢を去り、佛法及び比丘僧に供持し、一切を慇哀し、四等心を行じて乃ち得度すべし。而も反つて惡を懐き、佛を謗り尊を謗り、衆僧を輕毀す。甚だ義怪すべし。未曾有と爲す。』

【三寶】佛寶、法寶、僧寶。貪、瞋、癡。

時に佛徹聽したまひ、往いて比丘に問ひたまはく、『屬何をか論ずる所ぞ。』比丘具に向に議する所の意を啓す。時に於て世尊、諸比丘に告げたまはく、『此比丘尼は、但に今世のみ如來の惡を念ぜず。在在所生、亦復是の如し。吾自ら憶念すらく、乃往過去無數劫時に、一彌猴王有り、林樹に處在して果を食し水を飲み、一切の蚊行喘息、人物の類を慇念して、皆度せしめ無爲に至らしめんと欲せり。時に一鼈とて知友爲り、親親相敬ひ初より相竹はず、鼈數往來して彌猴の所に到り、飲食言談し、正義の理を説けり、其婦之が數出

でて在らざるを見、之が外に於て姪蕩節ならざるを謂ひ、即ち其犢に問はく、「卿が數出づるは何れに至湊する所と爲す。將に外に於て放逸無道無からんとするや」其夫答へて曰はく、「吾獼猴と結んで親友爲り。聰明智慧にして、又義理に曉く、出でては輒ち往造し、共に經法を論じ、但快事を説くのみ。他の放逸無し」と。

其犢信ぜず、謂うて然らずと爲す。又獼猴の我夫を誘謀して數出入せしむるを隕り、當に圖つて之を殺さば吾夫乃ち休むべしとて、因て便ち伴つて病む。困劣して床に著き、其犢瞻勞し、醫藥もて療治するも竟に背て差えず。其夫に謂つて言はく、「何ぞ勞意を須ひて其醫藥を損する。吾病甚だ重し。當に卿が親親する所の獼猴の肝を得べし。吾乃ち活きんのみ」其夫答へて曰はく、「是吾親友なり、身を寄せ命を託して終に相疑はず、云何が相圖つて、用いて卿を活かさんや」其犢答へて曰はく、「今や夫婦爲り、同じく一體を共にするも、相濟ふを念ぜず、反つて獼猴の爲にするは誠に誼理に非ず」と。

其夫、婦に逼られ又之を敬重し、往いて獼猴に請はく、「吾數往來して君の所頗に到るも、仁は扞屈して我家の門に詣らず。今相請うて舍に到り小食せんと欲す」獼猴答へて曰はく、「吾は陸地に處し卿は水中に在り、安んぞ相從ふを得んや」其犢答へて曰はく、「吾當に卿を負ふべければ、亦儀に任すべし」獼猴便ち從ふ。負うて中道に到つて獼猴に謂つて言はく、「仁、知るを欲するや不や。相請ふ所以は吾犢病んで困み、仁が肝を得て服食して病を除かんと欲す」獼猴報じて曰はく、「卿、何を以ての故に早く相語らざる。吾肝を樹

に掛けて齋持せずして來る。促に還つて肝を取り、乃ち相從はんのみ」と。

便ち樹上に還つて跳跟歡喜す。時に鼈問うて曰はく、「卿當に肝を齋して來つて我家に

到るべし。反つて更に樹に上り跳跟踊躍するは、何の所施とか爲す」獼猴答へて曰はく、

「天下の至愚は卿に過ぎたる無し。何の肝有つてか而も掛けて樹に在る所ぞ、共に親友と爲

つて身を寄せ命を托せるに、而も還つて相鬪り我命を危ふからしめんと欲す。今より已往、

各自ら別行せん。」

佛、比丘に告げたまはく、「爾時の鼈婦は則ち暴志是なり、鼈とは則ち調達是なり、獼猴

王とは、則ち我身是なり。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説五仙人經第十一

聞けること是の如し。一時佛、王舍城に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十人と、諸の

菩薩と俱なり。

佛、諸會者に告げたまはく、「乃往久遠無數劫時に、五仙人有り。山藪に處し、四人主と

爲り、一人は給侍なり。供養奉事して未だ曾て意を失せず、果を採り水を汲み、進むに時

節を以てす。一口遠行して果水漿を採り、懈廢眠寐せば時を以て還らず、日以て中を過ぐ

れば四人食を失ひ、懷恨飢患して、其侍者に謂く、「卿は給使令なり、何を得てか是の如き

や。卿の所行の如くば、殞呪と爲るべし。宜しく族姓たるべからず。」侍者之を聞いて憂戚言ひ難く、退いて樹下に在り、水邊に近く坐し、偏に一脚を翹げ、思惟し自責すらく、「勞を執りて積むこと久しきに、今四仙の時食の供に違せり、既に道教を失ひ四等に順ぜず」と。遂に感じて死す。其足常に七寶の屐を著け、足を翹げて坐せり。屐を著けて水に墮して一隻を没せり。

命過の後、即ち外道に生じ殞呪子と爲り、年十餘歳、共同輩を路側に戯る。時に梵志有り、過ぎて戲童を見るに、人數猥多なれば過ぐ之を觀察して殞呪子を見るに、特に貴相有り、應に王者たるべく顏貌殊異にして、人中に於て上たり。梵志命じて曰はく、「爾に王相有らんや」梵志又曰はく、「吾經典の如し。儀容形體、讖書と符合する。爾は則ち之に應ぜり。深く吾語を思へ、誠諦欺く無けん。斯國の王、當に某日某時を用て薨殞すべく、必ず爾に位を禪らん」童子答へて曰はく、「唯之を廣むる勿れ、協せて靜密ならしめよ。設し仁が言の如くんば當に重く念恩すべし、敢て自ら憍らず」と。

梵志言畢つて尋いで逃れて遁走し、出でて他國に之けり。後日未だ幾ならずして王薨じて嗣を絶せば、賢士を婢求して以て國胄と爲さんとす。群臣議して曰はく、「國の主無きは人の首無きが如し。宜しく速に使者を發遣して有徳を勤求し、時を以て之を立つべし」使者四に布き、遙に斯童の異人の姿有るを見、輒ち尋いで人を遣し還つて群臣に啓さく、

「唯王制を嚴にし、威儀法駕もて幸に來つて奉迎せよ」群臣百寮、踊躍せざる莫し。使者の所白の如く、嚴駕して奉迎し、香湯もて洗沐し、五時朝服、寶冠劍帶、先王の法の如し。前後導衛して國典に違せず、卽位して殿に處し、南面して制を稱し、境土安寧、民庶歸悅せり。時に於て梵志仰いで天文を瞻、下地理を察して、已に嗣立せるを知り。卽ち宮門に詣つて覲んことを求む、門監啓して曰はく、「外に梵志有り、尊に覲んことを欲求す」と。王詔して之を見るに、梵志進入して占謝呪願し、又王に白して曰さく、「我瞻る所の如し、今前誓を果せり。寧んぞ審諦なる」王曰はく、「誠なる哉、道人の神妙なる。恩を蒙り祚を獲たり」王曰はく、「道人、豈、半國分藏の珍寶を欲するや。婦女美人、車馬侍使、得んと欲する所を恣にせよ」梵志答へて曰はく、「一も欲する所無し。唯二願のみを求む。一に曰はく、飲食進止、衣服臥起、王と一に等しきを相須ひ、前後有ること勿れ。二に曰はく、國事に參議し、所決に同意し、自ら専らなる莫れ」王曰はく、「善い哉、思うて二願を嗣がん、此豈易からずや」と。

王國を修治するに常に正法を以てし、萬民を枉げず。梵志は恩を受けて因て自ら橋恣し、重臣を輕蔑せり。群臣忿怨し、俱に進んで諫めて曰はく、「王は尊く位は高し。宜しく國臣耆舊と參議すべし。偏に乞士を信ぜば、遂に悠慢して群職を陵侮せしめ、鄰國之を聞かば將に嗤ふ所爲らんとし、以て寇難を致さん」王曰はく、「吾少くして之と久しく木誓有り、安んぞ廢すべけんや」臣諫めて止まず、「若は王の食饌せば但之を須ふる勿れ。則ち必ず改

むるなり」と。

王遂に之を可し、梵志の出づるを伺ひ、復還るを須たずして則ち之に先つて食せり。梵志悲つて曰はく、「本要あるに、云何が今先に獨り食せりや」王曰はく、「吾先に食すと雖も、卿出でて未だ歸らず、豫め別に饌を案するも卿自ら來ること晚ければなり」梵志罵つて曰はく、「咄、殖呪子、義理を顧みずして本誓に違せり」と。

群臣之を聞いて臨臣の君を毀つとし、咸く奏して殺さんと欲す。王群臣に詔すらく、「何の罪を以てか之を罪せん」と。各各進みて曰ふ。或は云はく「甑もて之を蒸せ」と、或は云はく「之を煮ん」と、或は云はく「杖解せん」と、或は云はく「臼搗せん」と、或は云はく「五椀もて耳を截ち舌を割り、目を挑りて之を殺せ」と。王聽す所無し。「吾道法を奉せば慈心もて衆生の類を愍哀し、蠕動を害せず、況んや人命を危くせんをや。但資糧を給して驅つて國を出でしめん」と。

群臣詔を奉じて即ち衣糧を給し、逐うて境を出でしむ。獨り遠路を涉り、寒暑に觸冒し疲極憔悴し、似類する所無くして他國に到り、異梵志の家に詣る。舊く與に親觀たり。又而も問うて曰はく、「卿何より來れる。何をか綜習せんとする所ぞ。何の經典をか業べる。能く悉く念せりや」答へて曰はく、「吾遠くより來り飢寒に逼られ、誦習せる所を忘る」梵志心に念すらく、「此人は誦せる所今已に廢忘し、能化する所無し。當に田作せしむべし」と。輻ち奴子及び犁牛を給して耕せしむ、梵志の耕種に奴子を苦役せしむるを見るに

酷して地を平かならしめ東西に走使す。奴子無聊なれば自ら水に投ぜんと欲し、往いて河
 側に到れるに、則ち一隻の七寶の屐を得たり。心に自ら念言すらく、「大家に與へんと欲す
 るも大家に恩無し。父母に與へんと欲するも必ず賣つて噉食せん。梵志は我を困め役使無
 頼なるも、吾當に奉承すべし。屐を以て之に上らば寛恣を獲べし」と。

則ち屐を齎して還り、用て梵志に上る。梵志欣豫し、心に自ら念言すらく、「此七寶の
 屐は、其價奢り難し。吾王意に違せるも屐を以て奉上せば、僇咎解すべし」と。

尋いで王國に還り、屐を以て王に上り、深く自ら前の罪疊を陳悔す、「願くは原赦を得
 ん」と。王曰はく、「善い哉」王即ち之を幔裏に納めて別座に之を坐せしめ、諸の群臣を
 會して則ち之に請して曰はく、「卿等寧ろ前に逐へる所の梵志を見しや不や」答へて曰

はく、「見ざるなり」「設使見ば當に之を如何がすべき」答へて曰はく、「當に其手足を斷
 じ、其耳鼻を截ち、頭を斷じ腰を斬り、五毒もて之を治すべし」王曰はく、「設使見ば能く
 之を識るや」臣曰はく、「不審なり」王寶屐を出し以て群臣に示し、梵志に出づるを命じ、
 臣と相見えしめ、「此異寶を致す、當に共に之を原すべし」群臣啓して曰さく、「此梵志の
 罪や山の如く海の如し。赦すべからざるなり。屐一隻を獻する何の施補する所ぞや。若し
 一編を獲ば罪除くべきなり」王即ち之を可とし、重ねて梵志を逐ひ、更に一隻を求めしむ。
 梵志懊惱して、「吾木呼嗟す。轉劇を加ふ」と。故の主人に還る。主人問うて曰はく、「卿何
 所に至つて而も從來する所ぞ」と。

梵志ぼんし之これを匿かくして敢あへて對説たいせつせず、偶たま行いいて還かへると云いふ。則すなはち犁牛りぎゆ奴子ぬしを付つけ耕種こうしゆせしむること前まへの如ごとし。時ときに於おいて梵志ぼんし、奴子ぬしに問とうて曰いはく、「汝なんぢが前まへの寶屐ほうげき、本何もとより得えしや」奴子ぬし俱ともに行いいて屐げきを得えし處ところを示しめし、水側すゐがはに至いたつて遍へん悉しして之これを求もとむるも、隻處せきよを知らず。奴子ぬし捨すて去さる。梵志ぼんし心に念ねんずらく、「此寶屐このほうげきや必ず上流じやうりゆうより來きたる。下行げいぎやうして之これを求もとむるも得えざらん」と。即すなはち流ながれを逆さかりて上行じやうぎやうせるに、大蓮華おほれんげを見る。流ながれに順したがつて波なみを廻めぐり、魚口ぎよく之これを衝つく。其華このけ甚ただ大だいにして千餘葉せんよふ有あり、梵志ぼんし心に念ねんずらく、「屐げきを得えすと雖いへど、此華このけを以もちて之これを上からば、儻も過くわし過くわを解とけ、復前龍またぜんりゆうを得えべし」と。

便すなはち復華またげを執とるに、則すなはち四仙人しせんじんの樹下じゆげに坐ませるを見る。前まへんで爲ために禮らいを作すし、問訊もんしんすらく、「起居ききよに聖體しやうたい萬福まんぷくなりや」仙人せんじん曰いはく、「然しかり、卿きやうの從來じゆうらいする所ところは」答こたへて曰いはく、「吾われ王意わういを失しし、一屐いちげきを獻けんすと雖いへど、過くわを解とけるに足たらず、故ゆゑに流ながれを逆さかつて來きたり、之これを求もとむるも未いまだ獲えず」と。仙人せんじん告つげて曰いはく、「卿きやうは學人がくじんたり、當まきに進退しんたいを知るべし。彼國王かのこくわうとは是吾等これわれらが子こなり。存待ぞんたい愛敬あいけいし、同食どうじきし坐起ざきし參宜さんぎせるに、云何いんかが一旦いつたん之これを罵ののつて殞しゆ呪じゆといふや。卿きやうの罪つみは重おもし。當まきに相誅あひちがひ害がいすべきも今相問いままねはじし」樹下じゆげを指示しじし、「則すなはち王わうが先身せんしん侍者じしや爲たりし時とき、仙せんに供給くけいせし時とき、坐まして一脚いっかくを翹かたげ、憾結かんけつして終はりぬ。寶屐ほうげき水みづに墮だし、一隻いっせうは脚あしに著つけたり、便すなはち自ら取とり去され」梵志ぼんし屐げきを取り稽首けいしゆ謝過しゃくわし、還かへつて本國ほんこくに到いたり續つづいて以もちて之これを上かる。王わう即すなはち歡喜くわんぎし、群臣ぐんしん意解いげし、其寵位きちゆうゐを復ふせり。」佛ぶつ、諸比丘しよびくに告つげたまはく、「爾時なんときの王者わうしやは則すなはち吾身わがみ是これなり。四仙人しせんじんとは拘留秦佛くわうじん、拘那

【拘留秦佛】 クラ
リツチャンダ(ア
akuechanda)所應
斷已斷と譯す、賢
劫千佛の第一、過
去七佛の第四。

【拘那含文尼佛】

カナカムニ(Kanami)

譯す、賢劫千佛の

第二、過去七佛の

第五。

【迦葉佛】

カシヤバ(Kasyapa)賢

劫千佛の第三、過

去七佛の第六。

【調達】

デーワダツタ(Devadatta)

天授と譯す。釋尊

の從兄弟。

含文尼佛、迦葉佛、彌勒佛是なり。其梵志とは調達是なり。」

佛説きたまへば、爾時、歡喜せざる莫かりき。

生經卷第一

生しやう

經きやう

卷第二まきのだいに

西晋三藏竺法護譯すせいしんさんざうぢくほふこやく

佛說舅甥經第十二ぶつせつぐせいきやうだいにじふに

開けることは是の如し。一時佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆と俱なり。佛、諸の比丘に告げたまはく、「乃昔過去無數劫時に、姉弟二人あり、姉に一子有り。舅と俱に、給官御府に金縷錦綾羅縠、珍妙異衣を織る。帑藏中に琦寶の好物を見、貪意爲に動き、即ち共に議して言はく、「吾織作し勤苦して懈らざるも、諸藏物の好醜多少を知る。寧ろ共に取り、用て貧乏を解すべけんや」夜人定つて後、地窟を鑿作し、官物を盜取すること貲數すべからず。明監藏者、物の減少するを覺り、以て王に啓白す。王之に詔して曰はく、「廣く之を宣べ、外人をして舅甥盜者を知らしむること勿れ。王多事なれば覺察する能はざるを謂うて、後日に至り、遂に當に懼伏して必ず復重ねて來るべし。且く警守を嚴にして以用て之を待て、得ば收捉して、放逸せしむる無かれ」藏監詔を受けて即ち守備を加ふ。其人久久にして則ち重ねて來り盜む。外甥舅に教ふらく、「舅は年尊く、體羸く力少し、若し守者の爲に得られなば自ら脱すること能はじ。更に地窟より却行して入

り、如し見るを得しめば、我力強盛なれば當に舅を濟免すべし」と。

舅適窟に入るに守者の爲に執らる。執ふる者喚呼す。諸守人甥を捉ふるも制せざれば、明日識られんことと畏れて輒ち舅の頭を截ち、窟を出でて持ち歸れり。晨曉に藏監具に以て啓聞す。王又詔して曰はく、「輿に其尸を出して四交路に置け。其れ啼哭して死尸を取る者有らば、則ち是れ賊魁なり」之を四衢に乗て警守日を積む。時に於て遠方より大賈有りて来る。人馬車馳し墳壙して路を塞ぎ、奔突猥逼し、其人は射鬪し、兩車の薪を載して其尸上に置けり、守者明朝具に以て王に啓す。王詔すらく、「微に伺ひ、伺ふこと周密ならざれ。若し燒者有らば收縛して送り來れ」と。

是に於て外甥、將ひて僮堅をして炬を執つて舞戲せしむ。人衆總鬪なれば、火を以て薪に投じ、薪熱ゆること熾盛なり。守者覺らず。具に以て王に啓す。王又詔して曰はく、「若し已に蛇維せば更に守者を増し、嚴に其骨を伺へ、來つて骨を取る者、則ち是れ原首なり」と。

甥又之を覺り、兪猥の釀酒もて特に醇厚ならしめ、守備者に誥つて微にして之を酤る。守者連昔飢渴せば、酒宗を見て共に酷飲す。飲酒過多なれば皆共に酔うて寐ぬ。俘囚酒瓶もて骨を受けて去る。守者覺らず。明復王に啓す。王又詔して曰はく、「前後警守するも竟に級獲せざるは斯賊絞點なればなり。更に當に謀を設くべし」と。

王即ち女を出す。莊嚴瓔珞、珠璣寶飾して房室に安立せしめ、大水の傍に於て衆人侍

衛して非妄を伺察せしむ。必ず利色の來つて女に趣く者有らん、素より教へて女を誡め、
逆に抱捉を得、喚べば衆人をして則ち收執すべからしむ。他日異夜に甥尋いで竊に來り、
水に因つて株を放ち、流に順つて下らしむ。唱叫奔急なれば、守者驚き越けるに、謂く、
「異人有り、但株杙のみを見る」と。是の如く連昔、數數變らざれば守者翫習し、睡眠し
て驚かず。甥即ち株に乗じて女室に到る。女則ち衣を執る。甥、女に告げて曰はく、「用て
牽衣を爲して、我臂を捉ふべし」甥素より矧黠なれば、預め死人の臂を持して以用て如
に授く。女便ち衣を放ち、轉じて死臂を捉へ、而も大いに稱叫するも、遅く守者の寤むれば
甥脱走を得たり。明具に王に啓す。王又詔して曰はく、「此人の方便、獨一無雙なり。
久しく捕へんとするも得ず、當に之を奈何にすべき」と。女即ち懷妊し十月にして男を生
ず、男大にして端正、乳母をして抱行して國中を周遍せしめ、人行り、見て與に嗚嘯する
有らば、便ち縛して送り來れ」と。兒を抱くこと終日なるも、嗚嘯者無し。甥餅師と爲つ
て餅爐の下に住す。小兒飢ゑて啼けば、乳母兒を抱いて餅爐の下に趣き、餅を市ひ兒に餽
せんとす。甥既に兒を見、即ち餅を以て與へ、因て而も之に鳴く。乳母還つて王に白して
曰さく、「兒と行くこと終日なるも來近者無し。飢ゑて餅爐を過ぎしに時に餅を賣る者、餅
を授けて乃ち鳴けり」王又詔して曰はく、「何ぞ縛送せざる。」乳母答へて曰はく、「小兒飢
ゑて啼けば餅師餅を授け、因て之に鳴く、是れ賊と意はず、何に因て之を囚ふるや」と。
王、乳母をして更に兒を抱いで出でしめ、及び諸の伺候をして、兒に近づく者を見ば、

便ち縛して將來せしむ。甥美酒を酌り、乳母及び微伺者を呼請して、酒家に就て酒を勧む。大醉して眠臥せるに、便ち兒を盗んで去りぬ。醒悟するに兒を失ふ。具に以て王に啓す。王又詔して曰はく、「卿等頑戾なり。狂水に貪嗜して既に賊を得ず、復兒を亡失せり。」甥時に兒を得、抱いて他國に至り、前んで國王に見え、占謝答對し經を引き誼を説く。王大いに歡喜し、輒ち祿位を賜り、以て大臣と爲して、之に謂つて曰はく、「吾の一國に智慧方便の、卿に遠ぶ者無し、臣女を以てせんと欲す。若し吾の女、當に以て相配すべくんば自ら欲する所を恣にせよ」對へて曰はく、「敢てせず、若し王見て其質を哀まば、某國の玉女を索めんと欲す」王曰はく、「善い哉、所願に従はん」と。

王即ち名有り、自ら以て子と爲し、使者を遣して往き、往いて彼王女を求めしむ。王即ち之を可とす。王心に念言すらく、「續くも是盜魁なれば前後狡猾ならん。即ち使者を遣して我女を迎へんと欲す。其太子を遣し五百騎乘、皆嚴整ならしめん」と。王即ち外に勅し疾に車騎を嚴にせしむ。甥は賊臣たれば即ち恐懼を懷き、心に自ら念言すらく、「若し彼國に到りなば王に必ず覺られ、執へられんこと疑はず」と。便ち其王に啓すらく、「若し王遣されなば當に入馬五百騎をして衣服鞍勒を具し、一も差異無からしむべく、乃ち婦を迎ふべし」と。

王、其言を然りとし、即ち往いて婦を迎ふ。王、女をして飲食もて客を待ち、善相娛樂せしむ。二百五十騎は前に在り、二百五十騎は後に在り、甥其中に在り、馬に跨りて下ら

す。女の父自ら出でて屢之を觀察し、王騎中に入り射ら甥を執て出す。
「爾是非を爲し、前後に方便もて捕ふるも何ぞ得巨き」稽首して答へて曰はく、「實に爾り是なり」王曰はく、「卿の聰哲なる天下無雙なり、卿の所願に隨はん」女を以て之に配し夫婦と爲すを得たり。

佛、諸比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや、爾時の甥とは則ち我身是なり。女父王とは舍利弗是なり、舅とは調達是なり。女婦國王とは父輸頭檀是なり。母摩耶是なり。婦翟夷是なり。子羅云是なり。」
佛是を説きたまふ時、歡喜せざる莫かりき。

佛說閑古經第十三

聞けることは是の如し。一時佛、拘留國に遊び轉遊したまふ。大比丘衆五百人と俱なり。稍く城裏聚落に至るに自然の好音有り。佛其中に傾したまふ。時に彼聚落に梵志長者有り、無央數の衆と悉く共に普聞すらく、「大寂志有り、姓を翟曇と曰ふ。釋族、姓子なり。國を棄てて轉じて城裏聚落に遊び、大比丘衆五百人と俱なり。彼佛大聖は名稱普く聞え、流れて十方に遍く、宣揚せざる莫し、疑者は肅驚し、戰戰兢兢として欣戴せざる莫し、號して如來至眞等正覺明行、成爲善逝世間解無上士道法御天人師號佛世尊と曰ひ、則ち以て哀みを天上人間、諸天魔梵、沙門梵志に加へ、天人を開化し、證するに六通を以て

- 【舍利弗】 シャーリフトラ (Śariput) 身子と譯す、佛十大弟子の一、智慧第一。
- 【輸頭檀】 スツドーナ (Suddhāna) 淨飯王の兄。
- 【摩耶】 マーヤー (Māyā) 幻生と譯す。
- 【翟夷】 ゴータミ (Gotami) 明女と譯す。
- 【羅云】 ラーフラ (Rahula) 羅睺羅のこと。
- 【拘留】 クルー (Kuru) ゴウタマ (Gautama) 地最勝と譯す。
- 【六通】 天眼通、

天耳通、神足通、他心通、宿命通、漏盡通。

し三界に獨歩し、所説の經法は初語亦善く、中語亦善く、竟語亦善し。其義を分別するに微妙の見諦あり、梵行を淨修せり。斯の如きの如來至眞等正覺を觀るを得ば、善い哉慶を蒙らん。若し能く稽首し、敬つて道教を受けば、功祚無量ならん。」と。

時に於て梵志長者、往いて佛所に詣り、足下を稽首し却いて一面に坐し、敬問占謝せるに、又手して佛に白す者あり。揖讓する者あり、遙見して默する者あり、却いて一面に住する者あり。時に於て世尊、梵志長者に告げたまはく、「假使、人來つて汝に問ふ者有らば、何所の沙門にも當に供養奉事すべからず。」答へて曰はく、「及ばず、唯佛之を説きたまへ。」佛の言はく、「其れ沙門梵志有つて、眼を妙色に著し、耳に五音を貪り、鼻に好香を慕ひ、口に美味を存し、身に細滑に倚る。諸法を志すも欲を捨てず。貪嫉恩愛志求して厭く無し。梵燒の痛是の如きの比あらば、沙門梵志、當に供養奉事尊敬すべからず。」佛に白して言さく、「來問者有らば當に是を以て答ふべし。乃ち善義に合し、則ち法化に應ぜり、所以は何ん。我等、色聲香味細滑の法に著し、恩愛の著あり、貪求厭く無し。斯輩の類は、五陰に迷ひ、六衰に惑ひ、官爵俸祿、財物富貴、以て憊倦せず、俗と別無し。是を以ての故に、當に奉供して此等の類に順すべからず。佛、梵志長者に告げたまはく、「假使、人來つて汝に問ふ者有らば、當に供事奉敬尊重すべし。何所の沙門、梵志、當に云何にすべきや。」世尊に白して曰さく、「其れ五陰六衰姪怒癡に著念し、色聲香味細滑の念に習濟せず、斯等の徳を積み、溫雅和順なる、正しく當に、此の如きの輩の沙門梵志に供事すべし。」

【五陰】 色陰、受陰、想陰、行陰、識陰。
【六衰】 色等の六塵能く人の眞性を衰耗せしむるをいふ。六賊ともいふ。

【五戒】不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不飲酒戒、不妄語戒。
 【清信士】優婆塞のこと、即ち在家の男の佛道に歸依せるもの。
 【迦蘭陀】カランダ(Karanda)王舎城の北方にあり、竹林精舎のある園

佛、城裏聚落の梵志長者に告げたまはく、『汝等、何が故に此言を説くや。寧ろ比類有りや。安んぞ沙門梵志の、已に姪怒癡を離れ、又人をして離れしめ、及び色聲香味細滑、恩愛の著、心惱の熱、諸情厭く無きことを知るや。』佛に答へて言さく、『吾等、數沙門梵志を見るに、端正殊好に、色聲香味細滑の所欲を捨し、閑居に處在し、若し樹下に坐し、塚間曠野に諸の瑕惡を棄て、志に所求無く、燕居獨處す。彼則ち永く色痛想行識諸法の念を除き、求を斷じ空を念す。常に此等沙門梵志を察するに、姪怒癡を離れ、亦人をして離れしめ、色聲香味細滑の念を捨す。聽聞是の如し。斯を以て樂と爲す。恩愛の著永く以て除盡し、可意の色欲、諸の慕求する所、耀然として已に離れ、則ち時節を以て所樂に供事し、五陰六情亦復是の如し。我、此等の沙門梵志を觀するに、閑居に所在し、若し樹下に坐し、塚間曠野と獨にして燕處し、則ち已に永く眼耳鼻聲香味身受心法を除き、衆の徳本を積み、恭順和雅す。是の如きの比像あり。我等之を觀するに、沙門梵志は姪怒癡を離れ、及び人をして離れしむ。我等今日自ら併及び法僧に歸し、五戒を奉受し、清信士爲らん。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛說舍利弗般泥洹經第十四

聞けること是の如し。一時佛、王舎城の迦蘭陀竹園中に遊びたまふ、爾時、賢者舍利弗

【沙彌】 シユラマ
ネーラ (Vramane) 勤策男と譯す。
出家して未だ修行の熟せざるもの。
【般泥洹】 パリニ
ルワーナ (Parinirvana) 滅度と譯す。
涅槃に入ること。
【諄那】 碎末といふ、沙彌の名。
【舍利】 シヤリーラ (Śāriṅga) 身骨と譯す、聖者の遺骨なり。

【四意止】 四念處に同じ、身受心法是なり。
【四意斷】 已生の惡を除斷し、未生の惡を生ぜざらしめ已生善を助長せし

は、那羅聚落在在り、疾を得て困劣し、寢ねて床に在り。諸の賢者沙彌と俱なり。時に於て舍利弗、尋いで般泥洹し、侍者諄那供養奉事して如法に已に訖り、鉢衣服を取つて、王舍城に就き竹樹間に到る。已に日映時なり、燕處より起つて鉢衣服を取つて阿難所に至り、足下を稽首し、却いて一面に坐す。諄那沙彌阿難に白して曰はく、「唯然り。仁者、知るを得んと欲するや不や。賢者舍利弗は已に滅度を取り、我今和上の舍利及び鉢、衣服を齎持せり。賢者阿難、諄那に報じて曰はく、「便ち我と俱に佛所に往詣し、敬事修禮せよ。儻し世尊に従はば、要法を聞くことを得ん。」時に於て阿難、諄那と俱に、往いて佛所に詣り、足下を稽首し退いて一面に坐せり。又手して佛に白さく、「我身癡極にして、復力勞無し、柔弱疲劣にして修法すること能はず。所以は何ん。諄那(晋に碎末)沙彌來つて我所に詣り、足下を稽首し、我爲に説いて言はく、「仁者知らんと欲するや。賢者舍利弗已に滅度を取れば、并に衣鉢及び舍利を齎せり」と。」佛、賢者阿難に告げたまはく、「汝意に諄那の舍利弗比丘を念する、戒品を齎して滅度せりや。定品慧品解脫品度知見品にして滅度せりや。又吾是法を了して最正覺を致せり。乃ち分別して説かば及び四意止、四意斷、四神足、五根五力、七覺意、八聖道行にして、佛の所現信なり。汝今に於て、舍利弗比丘が又般泥洹を見て、而も反つて愁戚し、涕泣悲哀し、自ら勝ふる能はず。」

賢者、世尊に白して曰さく、「舍利弗比丘は、滅定慧解度知見品を齎持せずして滅度し去

め、未生善を生ぜしむ。
 【四神足】四如意足ともいふ。欲、勤、心、觀の四。
 【五根】信、精進、念、定、慧。
 【五力】五根の作用を表はす。
 【七覺意】進、喜、輕安、念、定、行捨。
 【八聖道】正見、正思、正語、正業、正精進、正命、正念、正定。

れるなり。世尊は是を以て斯法を分別し、最正覺を成するも、分別して説きたまへるのみ。及び四意止、四意斷、四神足、五根五力、七覺意、八聖道行、亦此を齋さずして滅度せるなり。」

阿難、佛に白さく、「唯然り世尊。舍利弗比丘は戒眞諦を奉じ、妙辯才有り。講法厭く無く。其四部衆之を聽いて倦まず、之を説いて懈らず。多く勸助する所有り、未解を開化し、心をして欣豫せしめ、奉命せざる莫く、節を知り足るに止め、常に精進し、志常に定止せり。大聖智、無極の慧有れば、卒に問ふも之に對へ、言辭は機に應じて發遣し、博達能了し、音に尋いで答報し、一切能く通じ、智慧を寶と爲し、衆德具足せり。舍利弗比丘、巍巍たる是の如し。故を以て我舍利弗比丘滅度を取りて去るを見て、愁憂悲哀し、心に感感を懷いて自ら勝ふる能はざるなり。佛、阿難に告げたまはく、「生者の世に在る、安んぞ久存すべき、諸の思想緣起の法有り。必ず當に歸盡すべく、壞敗し永沒せん。法は當に崩敗すべく、法は應當に壞すべく、爾らさらしめんと欲するも終に得べからず。佛、阿難に告げたまはく、「佛、本自ら説けり。一切の恩愛は皆當に別離すべし。夫れ生あれば終有り、物成れば敗るる有り。合すれば則ち散ずる有り。應當に滅盡し壞敗すべし。爾らさらしめんと欲するも、安んぞ如意なるを得ん。應當に終沒して無常に歸すべし。離別の法、散ぜさらしめんと欲するも、安んぞ獲べきを得んや。佛、阿難に語りたまはく、「舍利弗所遊の處、佛心は則ち安し。以て慮と爲さざれ。應當に別離すべし。壞敗は無常なり。」

至らざらしめんと欲するも、安んぞ獲べけんや。法起れば滅する有り、物成れば敗るる有り、人生るれば終有り。興盛なれば必ず衰へ、應當に無常なるべし。別離の法至らざらしめんと欲するも、未だ獲べからざるなり。譬へば大寶の山の嵩高の頂の、一旦にして崩摧するが如し。是の如く阿難、舍利弗比丘の、衆僧の中に在つて今滅度を取れるは、寶山の崩るるが如し。無常壞敗なればなり、別離の法、至らざらしめんと欲するも、安んぞ如意なるを得ん。』

佛、阿難に告げたまはく、『猶し大寶樹のごとし。根芽莖節、枝葉華實、具足茂好なるも、大觚の卒に墮つれば、則ち缺滅を現じ、之を視るも感無し。是の如く阿難、舍利弗比丘の、衆僧に存在して今滅度を取れるは、衆僧の威滅するなり。應當に滅盡すべく、無常の衰耗は、至らざらしめんと欲するも豈得べけんや。是故に阿難、今日より往、自ら身行を修め、已に歸依を求め、法を以て證と爲し、經典に歸命し、餘の歸を求むること勿れ。云何が比丘、是行を作すや。是に於て比丘、自ら身行を觀じ、内外の非我、當に自ら觀察すべし。其心を調御し、諸の世間を觀じ、皆無點なるに由つて、内に痛痒を觀じ、外の痛痒を觀ず。内外我に非ざれば善哉に入る。其心を調御し、世の無明を察し、内に其心を觀じ、亦外心を觀じ、内外を得ざれば善哉に入る。自ら其心を調へ、世の無點を觀じ、上月を觀じ、亦外法を觀じ、内外に倚らざれば善哉に入り、其心を調御し、世の無點を觀ず。』佛、阿難に告げたまはく、『是を其身行を修し、自ら歸依を求め、法地に處し、法に歸命

し、他地に處せず、餘人に歸せずと爲す。佛、阿難に告げたまはく、「其れ比丘、比丘尼、清信士、清信女、我に從つて教を受け、自ら其身を修し、自ら歸依を求め、法地に處し、法地に歸し、法に歸命し、他地に處せず、餘人に歸せざれば、出家比丘を佛弟子と爲し、此教に順ふ者は則ち佛教に順ふなり。」
佛説是の如くにして、阿難及び沙彌、諸の比丘衆は、經を聞いて歡喜し、教を受けて退きぬ。

佛説子命過經第十五

開けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。

爾時舍衛城中に、一の異人有り、息男命過せり、父母愛重して欲念せざる無く、之を視て厭く無ければ、子の憂を以て狂亂して志を失し、門戸より中庭街路に奔走して子を求む。「願くは來つて我を見よ。當に何所に於てか汝が形を觀るを得べきや。」と。

時に於て是人、其門路に隨つて舍衛城を出で、祇樹給孤獨園に至り、往いて佛所に詣り默然として前に立てり。佛、其人に問ひたまはく、「汝、何を以ての故に、本其心を制せるに、今や諸根變没して常ならず、憔悴癡極せる。」其人佛に白して言さく、「用て我諸根の變異せるを問ふと爲すや。所以は何ん。獨り一子有り。家を擧げて愛重し、敬愛せざる莫く、之を視て厭く無きに、今以て命過せり。子の憂を以てして狂癡を發し、其心迷亂し、軒窓

及び門戸を開いて子を求索す、願くは來つて我を見よと、何所にか子を求めん。』

佛の言はく、『其れ人恩愛の著あり、別離すれば則ち憂へ、啼泣悲哀し、憂惱の患あり、

合會は離るる有り、適所愛有るも、必ず惱患を致さん。』

爾時、其人、佛の所語を聞き、心中に忽然として世の無常、三世は幻の如きを了し、

即ち佛戒を受け、稽首して退きぬ。

佛說比丘各言志經第十六

聞けること是の如し。一時佛、越祇音聲叢樹に遊びたまふ、尊比丘と俱なり。

一切の聖賢、諸通已に達し、皆悉く著年なり。其名を賢者舍利弗、賢者大目連、賢者

迦葉、賢者阿那律、賢者離越、賢者邠釋文陀弗、賢者須菩提、賢者迦旃延、賢者優波離、

賢者離垢、賢者名聞、賢者牛詞、賢者羅云、賢者阿難と曰ふ。是の如きの比、大比丘衆五

百人あり。爾時賢者大目連、及び大弟子、天の明に向はんと欲するに坐より起つて、往

いて賢者舍利弗の所に詣る。時に舍利弗、遙に諸の大弟子の相隨つて來るを見、適此

を見已つて、離越の所に至りて、之に謂ひて曰はく、『離越、且く大衆衆の來るを見よ。諸

の目連等なり。』

賢者離越、尋時に往いて舍利弗の所に詣り、手に涼扇を執り、舍利弗の所に詣る。所以

は何ん。今日且當に舍利弗に因て講法を聞くを得べければなり。大弟子と一時心を同じう

【大目連】 マハー
マウドガリヤ
ナ (Maha-maudgalyayana) 佛十大弟子の一、神通第一
【迦葉】 マハー
カーシヤパ (Mahakasyapa) 大飲光と譯す、佛十大弟子の一、頭陀行第一
【阿那律】 アヌルツタ (Anuruddha) 佛十大弟子の一、天眼第一
【離越】 レーヅダ (Kevata) 室宿と譯

す。

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

【須菩提】スプー

せり。時に舍利弗、大弟子を見、尋いで以て賢者阿難を勞賀す。『善來阿難、能く自ら枉屈

して佛の侍者と爲り、世尊に親近し、聖明の教を宣ふ。當に阿難に問ふべし。心に疑

を懷く所なり。音聲叢樹は其れ樂しと爲すや。威神巍巍、華實茂盛し、其香は芬馥にして

柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹の間に在つて、而も雅徳を現するや。阿難答へて

曰はく、『常に時節を以て具足行を修し、其議を分別し、微妙を成就し、梵行を淨修し、發

起する所多く、成就する所多し。博聞に至つて言教を曉了し、心意闡解し、快見に處し、

諸の四輩の爲に經典を講説し、粗、要言を擧げて、諸の曠野深谷の患を濟ふ。是の如

し。舍利弗比丘、應に音聲叢樹の間に在るべし。』

時に舍利佛、復離越に問はく、『卿が意に云何。賢者阿難が説く所の辯慧は、猶し獅子吼

のごとし。今離越に問はん。仁者此を觀る。音聲叢樹を快樂と爲すや不や。威神巍巍、華

實茂盛し、其香芬馥として柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹の間に在つて、而も雅

徳を現するや。離越答へて曰はく、『唯、舍利弗、假使比丘、閑居燕坐し獨處を樂しみ、家

想を除去し、而も愛欲無く、衆人に在つて而も放逸ならず、輕戲を樂はず、懼怕定然と

して其心亂れず、志空行に在り、是の如きの比丘は、應に音聲叢樹の間に在つて、則

ち雅徳を現すべし。』

又舍利弗、復賢者阿那律に問はく、『卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不

や。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥して、柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在

りて、而も雅徳を現すべし。』

又舍利弗、復賢者阿那律に問はく、『卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不

や。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥して、柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在

りて、而も雅徳を現すべし。』

又舍利弗、復賢者阿那律に問はく、『卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不

や。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥して、柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在

りて、而も雅徳を現すべし。』

又舍利弗、復賢者阿那律に問はく、『卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不

や。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥して、柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在

りて、而も雅徳を現すべし。』

又舍利弗、復賢者阿那律に問はく、『卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不

や。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥して、柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在

りて、而も雅徳を現すべし。』

又舍利弗、復賢者阿那律に問はく、『卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不

つて、而も雅德を現するや。阿那律答へて曰はく、「唯、舍利弗、假使比丘、天眼もて徹視し、道眼清淨に天人を覩、三千大千佛の國土普く見て礙無きこと、譬へば假喻に、有眼の人の高樓閣に上り、上より下を視るに、悉く所有の人民の行來出入進退、居止屋舎を見るが如し。是の如く舍利弗、比丘天眼もて三界を覩見するに、一も罣礙する無し。音聲叢樹の間に在つて、則ち奇雅を現す。舍利弗、大迦葉に問うて曰はく、「卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂を爲すや不や。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥として柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在りて、而も雅德を現す。舍利弗、假使比丘、自ら閑居に處し、人に閑居を勧め、自ら賢聖を修し、人に聖賢を勧め、自ら弊衣を服し、人に弊衣を勧め、自ら止足を知り、人に止足を勧め、自身に少求し、人に少求を勧め、自身寂然に、人に寂然を勧め、自身精進し、人に精進を勧め、自身に心を制し、人に心を制するを勧め、自身定意に、人に定意を勧め、自身に專修し、人に專修を勧め、自身に戒具三昧智慧解脫度知見慧あり、人に勧むるも亦然り、自身教化し、衆人を勧發し、法義を聽採し、開化して經を説き、法に於て厭く無く、人に勧むるも亦然り。是の如く舍利弗、比丘は音聲叢樹の間に在つて、則ち奇雅を現す。又舍利弗、大目犍連に問はく、「卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不や。威神巍巍として、華實茂盛し、其香芬馥として柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在りて、而も雅德を現するや。」目連答へて曰はく、「唯、舍利弗、假使比丘、大神足を得、威聖無量にして普尊自由

に、其神足に於て所念自在なり。變化示現無央數の形に於て能く一身を變じて不可計に至り、則ち還一に合す。此牆壁山藪谿谷に於て、通過して礙ふる無く、無間を出でて無孔に入り、地に入りて復出づ。譬へば水に入るが如し。水を履んで濡れず、陸地を行き、虚空に處するが若し。結加趺坐し、若は飛鳥の如く、身より火燄を出す。大火聚の如く、身中に水を出す。流泉の猶如く、其身濡れず、今日日月、威神光光として天下を照し、地より舉手し、日月を捫摸し、大なる其身を化して梵天に至る、是の如く舍利弗、比丘、音聲叢樹の間に在つて、則ち奇雅を現す。」

爾時目連、舍利弗に問うて曰はく、「卿が意に云何。音聲叢樹に在りて、快樂と爲すや不や。威神巍巍として華實茂盛し、其香芬馥として柔軟人を悦ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在つて、而も雅徳を現するや。」舍利弗答へて曰はく、「假使比丘、制心自在に身教に隨はず、自ら其室に於て三昧正受し、發意の頃、明旦中日冥、定意にして一心に入定し、夜半後夜、自由に所行し、常に自在を得、聖礙する所無し。譬へば長者の如し。若し尊者子、淨水もて洗沐し、新好衣を著し、所有の具足少乏する所無く、其所欲に隨ふ。何衣を得んと欲すれば、衆寶瓔珞、香花伎樂あり。明旦日中向夜、止らんと欲する所の處に、衣裳服飾、臥起床榻、悉く自在を得たり。是の如く目連、制心して亂意に隨はず、明旦日中、闇冥に入定し、夜半後夜、其所欲に隨ひ、禪定三昧、其所觀に隨つて皆自在を得たり。比丘は、音聲叢樹にあつて則ち奇雅を現す。」

【三脱門】空、無
相、無願の三三昧
と同じ。

爾時、賢者舍利弗、目犍連に謂く、「賢者已に説けり。吾等の類、蓋ぞ各志を言ひ、其辯才に随つて各其意を宣べざる。寧ぞ俱に往いて佛大聖に詣り、此事を啓説すべき、佛の所説の如く吾當に奉行すべし。目連答へて言はく、「唯、命に是れ從はん、是に於て舍利弗、前んで世尊に白さく、「我等の類、各所知を演べん。今故に啓白す、其理を得たりや不や。」是に於て世尊、舍利弗、賢者阿難を讚じたまはく、「善い哉、善い哉、阿難の説く所や。所以は何ん。比丘博聞にして則ち持して忘れず。若し説法有らば、初も善く、中も善く、竟も善く、其義を分別して微妙に具足し、梵行を淨修して能く此を分別し、是の如きの像法を、博聞普達し、之を觀ること自在に、其心清淨に、諸根を降伏して皆能く曉了し、則ち四輩の爲に粗略して要を擧げ、經典を演説して各所を得しむ。善い哉善い哉、離越。若の説く所や。所以は何ん。假使比丘、閑居に在つて其行寂然に、其心清淨に、空無を分別す。善い哉善い哉、阿那律。爾の説く所や。所以は何ん。今卿が天眼、三千大千佛國を親見すること、高樓上に於て察見下に在るが如し。善い哉善い哉、迦旃延、爾の説く所や。所以は何ん。汝四諦を見て、復狐疑無ければなり。善い哉善い哉、須菩提。能く空法を解説し、空を以て本と爲せばなり。善い哉善い哉、牛呵。爾の説く所や。所以は何ん。生死の苦を畏れ、泥洹を樂しむ。善い哉、邪釋、經義を分別し、佛典を演説せる。善い哉善い哉、優波離、罪福を分別し、法律を奉修せる。善い哉善い哉、離垢。三毒罪を去り、三脱門を得たり。善い哉、善い哉、名聞。善徳を清修し、并に衆人を化す。善い哉

善い哉、羅云。禁戒を守護し、違犯する所無し。善い哉善い哉、大迦葉。樂んで閑居に在り、他に閑居を勸め、十二事を以て常に自ら身を修め、亦他人を勸む。善い哉善い哉、日蓮。大神足無量なるを得、天尊自在に、一を分けて萬と爲し、萬を還らに合す、能く日月を捫摸して身梵天に至る。善い哉善い哉、舍利弗。明旦日中、日入に入定し、夜半後夜に禪定三昧し、常に自在を得ること、長者子の沐浴して衣を著け、寶瓔珞を以て晝夜三時に、恣意に服する所の如し。

佛、諸比丘に告げたまはく、「汝等各所知を説けり。皆快く法に順ひ、違錯する所無し。復吾言を聽け。云何が比丘か、音聲叢樹に在つて快樂を爲すや。威神巍巍、華實茂盛し、其香芬馥として柔軟人を悦ばし、音聲樹に在つて而も雅徳を現するや。是に於て比丘、明且其衣鉢に従つて聚落に入り、若し異國に在らば、樹下に處在し、是に於て明且、衣を著け鉢を持し、彼國邑に入り、若し聚落に於て、諸根門を護り、分衛もて始竟し、飯食し畢訖つて、衣鉢を藏去し、其手足を洗ひ、燕處に獨坐し、結加趺坐し、正身直形に、安心して前に在り、則ち世を觀するに、一切は無常なり、心に自ら念言すらく、「假使吾身、漏盡意解せば、乃ち坐より起ち、輒ち所言の如く、諸漏盡きざれば、坐より起たず。比丘是の如くば、音聲叢樹に在つて、則ち奇雅を現す。」

時に世尊、而も偈を説いて曰はく、
博聞して法を持するは微妙なる最たり。經典を分別し法義を解し

無央數の爲に而も講説す、閑居に志有りて獨處を樂しみ
 内に自ら身を觀じ外に勸化す。執御して禪を樂しみ身自ら行じ
 世尊博聞の教を遵修す。燕處に在る有り若くは樹下に
 其目清淨にして著する所無し、身病四百四を蠲除し
 衆生若干の種を覩見す。樹間に燕處するの德斯の如し
 譬へば師子の山居に由るが如く、閑居に獨處し寂靜に猗る
 止足し解脫し類に隨つて教ふ。燕處に處在するの德斯の如し
 淨妙の智慧もて普く人を解し、心に自在に諸根の定を得
 一切知足して諸の惡を棄つ、燕樹に處在するの德斯の如し
 是の如き上人微妙を説き、各各講法して所知に隨ふ
 演ずる所善い哉上義に順はんと、往いて世尊に詣つて所説を叙ぶ
 其れ天中天に廢礙する無く、音聲は梵の如く寂志尊なり
 其諸の神通は普く平等にして、尊師時に應じて慧門を開く
 彼時世尊除雲と曰ひ、此に因つて教を興す吾言を聽け
 諸の比丘所應の行の如く、樹間に燕處せば志奇雅なり
 諸の微妙を食り多少の求あり、最勝は其心行を分別し
 衣を著け鉢を持し威儀に則あり、其行は鳥の虛空に遊ぶが如く

【阿修倫】 アスラ
(Asura) 非人と譯す。

【阿和提】 アワン
ティー (Avanti)

其れ能く此の如きの妙を修する有らば、聖にして嫉を興さず害を懐く無し
寂然に至るを得て塵垢を去る。燕樹に處在するの徳斯の如し
佛説是の如くにして、諸の大弟子、天龍鬼神、阿修倫、經を聞いて歡喜せざる莫かり
き。

佛説迦旃延無常經第十七

聞けることは是の如し。一時佛、阿和提國に遊びたまふ。爾時賢者迦旃延、諸比丘に告ぐ
らく、「諸賢者聽け、一切の合會は皆當に離別すべし。復安隱なりと雖も、會す疾病を致さ
ん。年少も當に老ゆべく、復長壽なりと雖も、會す當に死に歸すべし。朝露花の如し。日
出づれば即ち墮す。世間の無常なるも亦復是の如し。年少強健なるも、常に存すべからず。
譬へば日出でて天下を照らすが如し。久しからずして則ち沒す。是の如く賢者、合會別有
り、人生れて死有り。興盛なれば必ず衰へ、一切の萬物皆無常に歸し、壞敗盡に歸す。樹
果熟すれば、尋いで墮つるの憂有るが如く、萬物の無常なる亦復是の如し。合會に離有り
興者必ず衰ふ。譬へば陶家の諸の瓦器を作るに、生者熟者、壞敗せざる無きが如し。
是の如く賢者、合會に離有り興者は必ず衰へ、生者に死有り、恩愛は離別し、所求所慕、
如意を得ず。爾時、則ち惡の應變怪現有り。其病見前し、諸相危熟し、身に疾病を得、命
轉盡に向ふ。骨肉は消滅し、已に安隱を失ひ、大困失を得、懊惱言ひ叵し。體は適困極

し、水漿は下らず、醫藥も治せず、神呪も行ぜず、假使、解除するも復益する所無し。醫
 の見る是の如く、尋退捨去し、最後に命盡き、鞭靴に至り殞危に與り、若し變ずるを爲さ
 しんとも、命盡きんと欲するの時、則ち六痛有り。苦毒に遭ふ。鞭靴の惱、衆患普く集
 り、己の欲せざる所、自然に來至し、轉向して氣を打し、或は塞りて通せず、但出氣のみ
 有り、入氣有ること無く、出息も亦極まり入息も亦極り、諸脈斷せんと思ひ、好顔を失
 ひ、臥起に人を須ひ、人に常に飲飼せられ、醫藥糜粥を得て之を含むと雖も、必ず復苦極
 り、消化する能はず、虚空を捉へんと欲し、白汗流出し、聲は雷鳴の如く、惡露自ら出
 で、身は其上に臥し、賤處に歸し、命盡き神去る。載して野田に出し、或は火もて之を燒
 き、身體臭腐して識知する所無し。飛鳥の食する所となり、骨節支解し、頭項處を異にし、
 連筋斷節し、消えて灰土と爲る。一切は無常なり。是時に當つて身所在を爲すや。頭足手
 脚何所に處すと爲す。初始め死せし時、出でて塚間に在り、父母兄弟妻子皆共に之を逐
 ひ、親厚知識も亦復是の如し。啼哭愁憂し、悲哀呼嗟し、胸を推して殞悶し、葬埋し已訖
 つて、各自自ら還歸するも、亦救ふこと能はず。身獨り自ら之に當り、棄捐して地に在る
 こと、猶し瓦石の如し。馨香味を聞かず、細滑も亦見ず、色及與五欲、識知する所無し、
 是を以ての故に、身の無常を知る。父母に孝順し供養し、沙門諸道士を恭敬し、布施持戒
 齋蕭し、禁を守り行を修し、起住迎逆に稽首作禮し、又手して自ら歸す。今や諸賢者、識
 省して此を察せよ。當に無常、苦、空、非身を念すべし。

是に於て偽を説いて曰はく、

已に此の如きの大恐懼を見、人身を計求する甚だ得難し

當に精進を行じて頭火を救ひ、諸の勤苦を除いて大安を立つべし

往古の佛時には値うて閑ならず、吾我を計し及び放逸なること莫し

此無量苦、生死の患、地獄の酷に遇ふこと無きを得たり

志愛欲に在るも惡を爲すこと無く、諸の根本を伏するが故に此を説けり

惡及び諸想を念ずるを得ること無く、寂然に至るを得ること賊を壞するが如し

是我所と念言するを得る無くば、是に於て我無く亦吾も無し

不尊を得て自ら勢と謂ふ無かれ、身の諸事を攝し其心を伏せよ

常に當に羞慚して身の時を知るべく、軀命を捨棄して所著無かれ

長夜に惡趣に在るを得ること無く、愼んで此が爲に是患に遭ふこと莫れ

復閻羅界に往至すること勿れ。常に當に孝順して二親を供すべし

功德を積累して後護と爲し、是に因つて疾に賢聖の路を得よ

衆安を求めて惡を犯す勿れ、邪教を承けて卒暴を爲す無かれ

此を觀察せば以て常に施を興し、愛欲と諸の瑕穢を棄捐せよ

然る後當に父母、妻子親屬及び知友を求むべし

常に佛教を承けて命に違はず、將に後世に値就せざる無かれ

【閻羅】ヤ(4)(Y)na
地獄のこころ。

假使疾病して父母、妻子親屬及び知友を求め

救護せしめんと欲するも得ること能はず、功德智慧は後世の明なり

賢者迦旃延、諸比丘の爲に說法すること此の如くにして、比丘歡喜し、則時に教を受け

ぬ。

佛說和利長者問事經第十八

聞けること是の如し。一時佛、那難國波和奈樹間に遊びたまふ、大比丘衆比丘五百人と俱なり。

爾時和利長者、往いて佛所に詣り、足下を稽首し退いて一面に坐せり。佛、長者に告げたまはく、「吾、汝に問はんと欲す。假使、魔來り、及び魔の官屬及び無央數の諸の外異道ありて問はば、時を以て答へよ。汝、當に諦に聽くべし。善く之を思念せよ。」唯然り、世尊、願樂くは聞かんと欲す。」

是に於て長者、諸の大衆と教を受けて聽く。佛、長者に告げたまはく、「何をか大魁と謂ふ。」長者白して曰さく、「唯然り世尊、大魁に四有り、何を謂つてか四と爲す。一に曰はく地種、二に曰はく水種、三に曰はく火種、四に曰はく風種。是を四大魁と曰ふ。」佛の言はく、「何をか地種と謂ふ。」答へて曰はく、「謂はく五事有り。立堅強不柔羸羸、能往返者なり。佛の言はく、「善い哉、善い哉、長者。能く彼諸の地種を解せり。永く現ぜざるや不

や。長者答へて曰はく、『唯然り世尊、我身能く地種を知るも、滅没は知るべからず。佛の
 言はく、『善い哉、復問はん。何をか水種と謂ふ。』答へて曰はく、『唯然り、世尊、水に五事
 有り、津液通流、細滑微碎、形貌有ること無く、猶し羅網の遍く諸脈に至るが如し。佛の
 言はく、『善い哉善い哉、長者。汝乃ち能く水種の滅没して處時を知らざるを知るや。』答
 へて曰はく、『唯然り、世尊、無常に歸すれば永く現ぜざるを知る。』佛、長者に告げたまは
 く、『何をか火種と謂ふ。』長者答へて曰はく、『温暖の類、能く人を熱せしめ、消化する所有
 り、而も能く焚燒するは、光檢の類なり。佛の言はく、『善い哉、長者。汝乃ち能く火種
 の滅没して復現ぜざるを知るや。』答へて曰はく、『能く無常に歸盡して現ぜざるを知る。』
 佛、長者に告げたまはく、『何をか風種と謂ふ。』長者答へて曰はく、『風に五事有り、寒冷の
 類、輕飄駛疾、飄吹する所有り、出入通を得、諸の響聲有り。佛の言はく、『善い哉善
 い哉。爾乃ち能く風種の忽然として没して復現ぜざるを知るや。』答へて曰はく、『唯然り、
 世尊。能く風種の自然に歸盡するを知る。佛の言はく、『善い哉善い哉、長者。』世尊、又問
 ひたまはく、『豈其種の寂聲を親見せずや。』答へて言はく、『唯然り、其種聲の平等にして
 稱ふるが如きを知る。』其四大魁は何の所にか處すると爲すや。』答へて曰はく、『飲食恩愛
 を欲するに綺る。』又問はく、『其四大魁、何の所にか猗ると爲すや。』答へて曰はく、『展轉相
 依なり。』又問はく、『何の所にか趣くと爲すや。』答へて曰はく、『色諸入に趣く。』又問はく、
 『諸入は何の所にか歸すると爲すや。』答へて曰はく、『罪の塵勞に歸す。』又問はく、『何に因

てか罪の卑劣有るや。答へて曰はく、「唯然り、世尊。其識及び身は、各自ら別異にして各離散す。」又問はく、「命盡き身壞しなば、何の所にか趣くと爲す。」答へて曰はく、「豈、所趣有らんや。身に心意無く、身識は各別なり。」又問はく、「長者は續いて故識を以て所趣に歸するや、更に異識を得るや。」答へて曰はく、「唯然り、世尊。故識を齎さずして所趣に歸す、故識を離れざるも亦異識無し。」云何が長者、法を見るや。」譬へば世尊の眼識非常なるも、耳識は異なる有り、共に合同ならざるが如し。是の如く世尊、生死に没し、是の如きの所見厭ふ無くして以て命を存す。」佛の言はく、「善い哉善い哉、長者。今に於て長者、一切の所問、報答應の如し。寔實にして虚しからず、寧ろ是實ならざるや。」答へて曰はく、「實ならざるなり。所以は何ん。大聖の説の如し。是の世間に於て所與實ならず、欲法悉く虚し。我念すらく世尊、此世俗の事、皆以て虚しく立ち、未だ會て法有らざるなり。」佛の言はく、「善い哉善い哉、長者。假使説有るも世事は皆虚しく、悉く未曾有なり、則ち諸佛の説なり。所以は何ん。世事悉く虚しく、一も實有ること無し。是に於て世間皆未曾有なり。」

佛説是の如くにして、和利長者、教を受け歡喜して退きぬ。

佛説佛心總持經第十九

聞けること是の如し。一時佛、兜率天國に遊びたまふ。賓は大海の邊、佛、所行樹に近

く、師子座に於て、無央數の諸天眷屬に圍遶せられて爲に說法したまふ。

彼時、世尊、安詳摩夷、亘天及び淨居身天子に告げたまはく、『諸天子、當に知るべし總持有り、佛心の法と名く。過去如來至眞等正覺の所説は、四部會の爲にす。最も後世に於て救攝擁護し、白歸を得しめ、普く特勝を獲、所生到處に一切義を護り、諸の菩薩の大乗を學する者の爲に法恩を蒙らしめ、普く至るを得しむ。一切の所爲に則ち超異有り、故を以て説くのみ、今や諸賢、亦當に之を受け、持誦誦讀すべし。我滅度の後、最後世時に、四輩衆會の、大乘を學ぶ者、其名を聞く者は、當に分別して説くべし、他人の爲に講じ、心に忍辱を懷けば心に自在を得、其音難を聞く。設し其名を致さば、超異の徳性あり、如來所説して復攝護したまひ、已願最上に所見自在なり。其れ聞かんと欲する有らば當に爲に之を説くべし。』衆會對へて曰はく、『唯然り世尊、當に聖教を受くべし。佛の所言の如く、終に敢て違せじ。如來の教を普然に具足せしめたまへ。』衆會又問はく、『何をか世尊、佛心總持法と謂ふや。』世尊告げて曰はく、『今次第に説かん。無垢離垢は一切義を具足し、已に速得せば、所作の諸徳に邊際有ること無し。三世平等に、一切十方、諸慧を具足し、一切に示現し、諸の所有の藏あり、諸法自在に具足成就し、所作通達し普了周匝の、除一切眼は、皆三界に於て普く十方に至り、寂然憺怕、諸脫門を獲、法界を分別し、猗著を究竟し、皆一切諸の所作爲を念じ、餘心を超度し、已に解脫を得ば結轉法を除き、普く虚空に於て、本性清淨無垢なり。三處を勸化し、過去當來現在、平等の三世に斷除し

て餘無く、所有を離れ、第一度を證し、所行は言の如く、所作成就せん。一切に大慈にして大哀を興し、一切人に於て而も所度無し。」

佛、天子に告げたまはく、「是を佛心總持の法と爲すなり。四輩の爲に説く。菩薩乘を求め、其れ諷誦する有り、懷うて身心に在らば、諦曉了識なり。此經を持する者は、諸の思想を懷くこと、譬へば如來の頂に立在し、思へば則ち見るを得るが若し。其れ能く見る有り、若は聞く有る者は能く經法を持す。若し持者有らば、未だ曾て忘るること有らず、學を究竟し、當に復住するを得べし。道に於て住する所、説經は寂然たり。故を以て經を講ず、所持は當に持すべし。未だ曾て忽疑せず。是を以ての故に、能忍總持せば一切の所聞、所得は海の如く、不起法忍に逮ぶ。一切法に於て而も自在を得、罣礙する所無し。解脱門に至り如意具足なり。現在法に於ても、我法教に於ても、當に重任を受くべく、諸の重擔を棄つ。此族姓子は則ち見佛を爲す。若し此等を覩ば當に従つて聽受すべく、當に其法を觀すべし。其形を察する莫れ、當に毀替して輕易すべからざるなり。」

摩夷互天子佛に白して言さく、「唯然り、教を受けて敢て違せじ、普く當に如來の命を宣傳すべし。然して後世に於て、是經法を以て四輩の爲に説き、及び菩薩乘に、當に爲に分別すべし。若し誦得する有り、若し忘るる有る者には當に爲に開示すべし。族姓子、汝當に見るを得しめ、及び聽聞せしむべし。如來所説の言教を護り、我等も亦當に如來の所説を奉受すべし、此族姓子、當に大義を成すべし。」佛、摩夷互天子に告げたまはく、「卿、當

に奉行すべし、今の所言の如きは、是れ則ち佛教なり。佛説是の如くにして、摩夷亘天子、淨居諸天、一切の衆會、天龍鬼神、世人阿須倫、經を聞いて歡喜しき。

怨家は知識に倣り、而も強ひて親友を結ぶ

諸王の所行は多く、則ち土地に主たり

其國は大巨多く、而も常に鬪諍を興す

當に弊眼を造るを爲せ、是に於て説くこと是の如し

陀飢梨尼、陀飽梨尼

師比丘、跪羅陀、薩儻陀、沙瑜投陀漚、阿夷比兜波、昧痺跪那旃、跪離那波羅、翅提尼

陀槃尼、尼披散尼、摩呵曼那兜梨那、

其れ是に有ることく、我に於て空耗なれど所有の財寶は、之を速得せしむ。若し過去せるは則ち是神呪を以て當に手を以て授け、其手足を重ね、膝を擁護して臍に重ね、常に皆重ぬと見るべし。脅をして重ぬるを見しめ、下をして重ぬるを見しめ、頸をして重ぬるを見しめ、心をして重ぬるを見しめ、四部衆をして皆重ぬるを見しめ、悉く平等ならしめば、從來する所の處、風其華を散す。

漚那提奴、漚那提陀、漚彌提屠、漚提屠、披健陀、吒闍叱者、

朱陀闍陀、波沙提、波沙檀尼耶薩迦彌仇、彌遮羅翅、朱羅鈴摩尼、阿提陀、

浮彌羨那伊余羅頭、那翅祇禰彌、比闍禰彌、薩披那樓、彌檀窶南摸、摩迦尼、阿禰比耶、令所祝吉、梵天勸助。

佛說護諸比丘呪經第二十

【羅閱祇】 ラーヂヤケリハ (Rājagṛha) (王舍城のこと。)

【摩竭】 マカダ (Magadha)

開けること是の如し。一時世尊、摩竭の羅閱祇城の東に遊び、奈樹間に在したまふ。梵志丘聚す。是より北上して鉢提山中天帝石望に上りたまふ。

爾時、無數の比丘、各各馳走し、忽忽として安からず、捕魚師の網を布いて魚を捕ふるに、魚都て馳散するが如し。世尊遙に無數の比丘の各各馳散し、擾擾不安なるを見たまひ、

佛、比丘に問ひたまはく、「何が爲に馳散し擾動する斯の如く、魚の網を畏るるが若きや。」

比丘對へて曰はく、「我患に遭うて所在安からず、諸の賊盜、鬼神羅刹、諸の象及び龍、

餓鬼師子、及び諸の妖怪、鬼魅非人、熊羆諸邪、溝邊溷鬼、蠱道巫呪に遇ふごとし。」佛、

比丘に告げたまはく、「當に汝が爲に説くべし。常に當に一切を救濟し擁護すべし。諦聽し

て善く之を思念せよ。」比丘答へて曰はく、「唯然り、教を受けん。」佛の言はく、「何等をか一

切の救濟擁護と爲す。是の如し。

阿軻彌、迦羅移、嚧隸嚧隸、般鉢、阿羅鉢、摩丘、披賴兜、呵頭沙、

翅拘梨因提隸者比丘、披漚羅、須彌者羅難、樓在者羅、

阿耨破者、阿羅因阿羅耶、耶勿遮坻鉢、移河鉢、

若し解脱せざれば、我當に勸解すべし。其爲に擁護救濟し、安吉祥無患ならしめん。
若し賊鬼神羅刹靈道符呪あるも、四百里周匝を護りて、敢て燒す者無けん。其恭順ならず、
是呪を犯す者は、頭破るること七分なり、所以は何ん。
佛、比丘に告げたまはく、『今吾普く天上世間を觀じ、若し是の如く呪せば、呪願擁護
し、終に恐懼無く、衣毛緊たす、其宿命に南無と請はざるを除く。世尊の所呪者は、吉
梵天の是呪を勸助す。』

佛說吉祥呪經第二十一

聞けること是の如し。一時佛、舍衛城に在したまふ。是を名けて轉法輪と曰ふ。能く踏
ゆる者無し、是地廣普なれば若し繞す者有らば、佛皆之に説き、今當に講誦すべし。大人
聖賢、具足して彼に歸す。

時に佛、賢者阿難に告げたまはく、『吾、汝が爲に神呪の王を説かん、汝當に之を持す
べし。佛の所説なり、至誠行なり、趣道行なり、十二因縁行なり、月行なり、日行なり、
賢者行なり、日月俱行なり、諦に聽け。善く之を思念せよ。』

阿難教を受けて聽く、是の如し。

休樓、牟樓、阿迦羅、鐺羅、莫迦垣羅毘提、波羅鈴波芻阿尼呵、耶提阿尼、耶提阿提邪
提額禰末諦盧盧羅羅毘提摩那、羅羅波夷吒、

無軍總持は諸印の王なり、諸佛の所説なり、至誠行と爲す。修道行、平等跡行、日行、月行、如日月行と爲す。一佛、阿難に告げたまはく、「此總持句は、佛の句爲り、尊上句爲り。學句、聖賢の句、得利義句、所懷來句、無兵仗句爲り、若し族姓子、族姓女、若し此句に入らば、無數解百千の門に入り、能く分別して説かん。」

佛、阿難に告げたまはく、「雪山の南脅に大女神有り。設陀憐迦羅(音に攝聲)と名く。五百子及び諸の眷屬有り。彼、此經を聞き、即ち自ら起つて往き、聲を擧げて怨を稱ふるく、「嗚呼痛しい哉、嗚呼何を以てか劇しきや。吾身本時に若千百衆生人の精を取つて以て飲食と爲せり。命を害して之を服せり。今や堪へず、復犯すこと能はず、沙門瞿曇は四部衆の爲に、而も擁護を設けたり、所以は何ん。若し善男子善女人、是神呪を受け、童男童女、郡國縣邑聚落に入り、是吉祥呪を持し、若は諷誦し説かば、能く繞す者無けん。所以は何ん。今沙門瞿曇が所説の神呪は、非人を遣逐し、衆忠を滅除し、常に此に住し、而も魔宮に現す。」諸弊魔言はく、「天王知らんと欲するや、沙門瞿曇は以て汝が界を空にせん、今や天王、當に共に被鎖して諸の群從を將む、暫く兵衆を勅すること、譬へば菩薩の初に樹下に坐するが如くすべし。」魔、被るに鎖甲を以てし及び諸の兵衆と、往いて佛所に詣りぬ。」

是に於て世尊、阿難に告げて曰はく、「是大女神設陀羅迦羅は、雪山の南に止り、五百子と俱なり。遙に如來が是神呪總持印呪を説くを聞いて恐怖して憍を懷き、衣毛爲に堅ち、

諸魔一切の官屬、及び餘の衆魔に及ぶ、時に於て彼魔、其鎧翰を被り、眷屬と俱に往いて
 世尊に詣り、惡心もて沙門瞿曇に詣らんと欲す。彼時に菩薩有り、名けて降魔と曰ふ。
 魔及び官屬を降し、還つて佛所に詣り、聖足を稽首し又手して佛に歸し、世尊に白して言
 さく、「我已に此弊魔及び諸の官屬の諸兵を發遣せしを攝制し、并に設陀迦醜大女神を而
 も之を制伏せり、敢て非を爲さず。亦敢て繞さず、比丘比丘尼、清信士清信女、敢て中害
 せず、妨廢する所無し。善い哉世尊、願くば總持法印を説き、四輩衆の爲に皆擁護を得し
 め、安隱なるを得しめたまへ。唯佛哀を加へ、普く人民に及ぼし、安隱なるを得しめたま
 へ」といふ。

是に於て世尊、是神呪を爲し、時に應じて欣笑したまふ。阿難、佛に問ひたてまつらく、
 「世尊何が故に笑ひたまふや。笑ふは當に意有るべし。」佛、賢者阿難に告げたまはく、「汝、
 寧ろ降魔衆菩薩の道行殊特にして、魔官屬を降し、設頭迦醜大女神の技術皆以て懷敗し、
 心に憂戚を懷き、彼に於て忽然として没して現せず、斯に到つて是總持の印を説くを見し
 や。」

爾時世尊、此總持印王の一切の諸惡、鬼神及び諸の妖魅を攝伏し、一切の繞を除かんこ
 とを思ひたまふ。

伏鳩、伏鳩、休浮、休樓阿祇提。
 是の如きは總持印王の呪なり。其れ鬼神、女神、鳩杵、龍、金翅鳥、及び諸弊獸、一切

の衆魅有つて、至意に意道に在る有り斷他懷來爲食爲句。跡甘嘗爲月動搖善震動意爲心。何に況んや細微なれば微ならざる無きなり。其大德總持は、無擇無冥にして所斷無く、其心に其十事を誦し、讀んで今に於て笑ふ。當に所作すべき者も亦選ぶ所無し。

佛、阿難に告げたまはく、「是れ無擇句なり、總持句なり、無所選句なり、安隱句なり、擁護句なり、於諸衆人無所繞句なり、無所害句なり、禁制句なり、諷誦者句なり。四部衆の爲に則ち擁護を設く。人と非人と犯す能はざるなり。若は臥出時、所在の寤寐に、敢て繞す者無し、況んや佛の所説をや。其れ此呪を聞けば安隱ならざる莫し。」
佛説是の如くにして、歡喜して去りぬ。

生しやう

經きやう

卷第三まきのだいさん

西晋三藏竺法護譯せいしんさんざうちくほふごやく

佛說總持經第二十二ぶつせつそうぢきやうだいにじふに

聞けること是の如し。一時世尊、摩竭に遊び、法閑居に在したまふ。佛の道樹に之いて初めて成道したまひし時、萬の菩薩と俱なりき。一切成就し、普賢菩薩は無願を行じて其行に餘無く、及び空無菩薩、蓮花藏菩薩、寶藏菩薩、行藏菩薩、妙曜菩薩、金剛藏菩薩、力士藏菩薩、無垢藏菩薩、調定藏菩薩、一萬の菩薩と俱なり。一佛世界三千大千摩數の菩薩と俱なり。各各異佛國より、而も此所に來會せり。從方來化師子座にあり、佛足を稽首し、佛前に在りて師子座に坐せり。時に於て此等の菩薩大士は、吾我を計せず、清淨無瑕にして各心に念言すらく、『此に於て何の因か不可思議なるあつて、諸佛世尊所有の境界は能く稱量する無く、諸佛世尊の本の所願は而も殊特有り、何の因か諸佛如來の感動せる、何を謂つてか所爲不可思議無罣礙行なる。云何が世尊、無念無想にして、此殊特を致したまへる。』

時に於て世尊、尋いで此等諸菩薩の心の所念と、諸坐の菩薩の諸佛に處無く亦住せざる

無く、如來諸佛の威神一切の光明を問はんと欲せるを知りたまひ、「佛の威神徳は精進踰ゆる無く、而も皆立つるを得、皆諸佛の諸の總持法に入り、廣大聖覺なり、是等の所入の殊特なる此の如し。畢礙する所無し。身の所入も亦皆是の如し。諸佛眷屬は諸取を棄捐し、諸佛の法は而も獲べからず。而も常に安隱なり。

時に於て蓮華藏菩薩、諸法所趣の心に入り、畢礙する所無く、所念の法門に諸の弊礙無し。諸菩薩の行を普賢願と爲す。合集等しく行じ、正しく願に住し、諸佛の法に入り、十方佛を見たてまつり、大哀を加へ、無極を度し、衆生を降伏し、惡趣を休息す。一切の菩薩、諸三昧定に本際を觀了し、諸佛の慧は所行無盡に、歸伏せざる莫し、諸の道慧に趣き、皆總持を照し、諸度蓮花の藏を分別す。其諸の菩薩、佛の聖旨を承け、各自ら説言し、諸佛盡く聽く。諸佛世尊は所行無量、極大變化にして、其本相に隨ひ、諸法を曉了し、一切を皆知る。諸佛は超異なれば都て陰蓋無し。諸佛世尊は普く法界に逮び、法界に入り、諸佛の世界の有無處行に畢礙する所無し。何をか十と爲す。兜率天に在つて現に壽命を盡し、忽ち洩するも能く禁制すること無く、亦處有ること無く、母腹中に入り、十月にして生じ、又家を棄捐し、而も樂んで外に出づ。心常に欣悅し佛樹下に坐し、一切諸佛の法を積累し、一時の頃に普く諸佛土を示現し、如來感動瑞應し、常に法輪を轉じ、悉く徳本を殖る、分別解説す。佛を得るの時に當つて、具に菩薩を成じ、而も法を以て成す。諸佛世尊は、永く住處無く、在在智慧あつて而も之を建立す。是を佛子と爲す、處所有る

こと無く、亦所住無し。復次に佛子、諸の世尊は十數目有り、何等を十とする。一切を教化し、諸度無極に、皆一切諸の無智の法を除く。常に大哀を修し、十種力有り、普く法輪を轉じ、群黎を教化し、衆生を禁制し、平等覺を成ず。前類を開通し、所住無からしむ。此に於て無行相法自ら歸し、己に寂然を得、亦他人をして覺滅度に至らしむ。是を十と爲す。復次に佛子、復十事有り、疾く如來を見る。何等か十なる。適諸佛を見ば則ち衆生を觀る。便ち一切を棄てて諸の歸趣する所なり、要を取つて之を言はば、速疾に福德眷屬を具足し、速に諸徳の本を受け、即ち清淨を得、短乏する所無し。便ち狐疑を除く。適諸佛を見、衆生等の爲に、大乘を示し、所畏する無からしむ。尋いで成親を得、不退轉を爲す。適、諸佛世尊に速見するを得、疾に分別衆生の源を求め、而も之を聞度し、便ち世を速度し、衆生根を淨む。適、諸佛世尊を速見するを得、便ち弊礙無し是を十と爲す。」

佛說是の如くにして、諸菩薩經を聞いて歡喜せり。

佛說所欣釋經第二十三

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十人と俱なり。

所欣釋子は、遊至する所多く、出入に節無く、詣る所の門族、稱計すべからず。或は晨

【薄拘慮】ツクク
ラ(Vakula)善容
と譯す。

に或は冥に、或は早入し冥出す。時に於て阿難、優陀、薄拘慮等、一處に合會し、所欣釋子に謂うて曰はく、「賢者、何が爲に而も多く行來するや、時節を知らず、何ぞ時に出で時に入らざる所詣の處、自ら節量せざるや。」所欣釋子、尋いで衆賢を罵り、麤獷の辭を出ださく、「卿等の無智なる、擾擾動搖して自ら安きこと能はず。嗔呼惡口す。卿等憚意して、衆僧の爲に興立する所有らず、吾今出入するは常に衆僧の爲に所當を嚴辦するなり。卿等能く是の如きの勞に任するや。諸衆僧の爲に辦する所有りや。吾に多く、事理有りと謂ふを得ること勿れ、諸賢の多務なる吾身よりも甚し。所欣釋子、卿等且く復合辦する所有り、吾衆僧事を辦するの如何なるを知れりや。」

時に諸比丘、同じく共に發意せり、彼時に三人、言語柔軟、威德殊妙に、本福行に依りて獲致する所多きこと彼に過踰せり。所欣釋子は、鈍愚の男子、卒暴決を以て愚驢自ら用ゐ、強ひて所求有るも、志の如きを得ず、一異天有り。長者の家に詣り、大甕に満てる若干の供養を得たり。賢者阿難は、他の長者に詣り、柔軟の辭を以て、宿德堅強なれば爲に經法を説き、其家人をして歡喜踊躍せしめ、從つて分衛を得、大いに供養を得たり。隨意の所施に強ひず、求めず。時に諸比丘、往いて佛に啓し、具に本末を説けり。佛、諸比丘に告げたまはく、「此に於ける四人は、但に今世に功を諍うて分衛するのみならず。唯一人有り、所獲薄少に、餘人は多く得るなり。阿難比丘は、衆人に勸助して一切安んずる所なり。往古久遠不可計時に、他異土に於て、時に四人有り。以て親厚を爲せり。相斂聚會し

て共に一處に止れり。時に獵師有り。射獵して鹿を得、來つて城に入らんと欲す。各共に議して言はく、「吾等計を設けて其獵師に従ひ、當に鹿肉を索め、誰が多く獲しやをしるべし」と。

俱に即ち發行す。一人辭を陳べ、其麴言を出して、而も高く自ら畜ふ、「咄、卿男子、當に我に肉を惠むべし。之を食ふを得んと欲す。第二人曰はく、「唯兄肉を施せ、弟をして食ふを得しめよ」第三人曰はく、「仁者愛すべし。肉を以て相與ふ。吾之を食はんと欲す」第四人曰はく、「親厚は肉を捐さんも、唯施さしめられんことを。吾之を食はんと欲す。俱共に飢渴すればなり」と。

時に獵師四人の言辭を察し、各の所言に隨つて偈を以て報じて曰はく、

卿の辭甚だ麴類なり。云何が相もて肉を與へんや

共言人を刺すが如し。但角を以て相施さん

復偈を以て第二人に報じて曰はく、

此人を善哉と爲す、我を謂ひて以て兄と爲す

其辭は肢體の如し。便ち一脚を持つて與へん

復次に第三人に偈を以て報じて曰はく、

愛敬して我に施すべし、而も心に慈哀を懷けり

辭言腹心の如し。便ち心肝を以て與へん

復次に第四人に偈を以て報じて曰はく、

我を以て親厚と爲す。其身同契を得たり

此言快く善い哉、肉を以て皆相施さん

時に於て獵師、其所志、言辭の曇細なるに隨つて、各肉を分ち與へたり。時に於て天、

頌して曰はく、

一切男子の辭柔軟は其身に歸す

是故に曇言すること莫れ、衰利は身を離れず

爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『第一の曇辭は則ち所欣釋子なり。第二人は聽陀和黎ふ

り。第三は黑優陀なり。第四は阿難なり。天、偈を説くとは則ち吾身なり。爾時相遇ふ、

今も亦是の如し。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説國王五人經第二十四

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ。大比丘衆千二百五十

人と俱なり。

爾時、諸尊比丘、各心言を發すらく、『賢者舍利弗、賢者阿那律、賢者阿難、輪輪、及

び諸の弟子五百の衆は、木俱に一時に家を棄て道を爲し、食慕する所無く、世榮を志

さす、悉く沙門と爲る。」と。

時に舍利弗は、智慧を嗟歎して最も第一と爲す。衆の狐疑を斷じ、鬪諍を和解し、道義を分別して通ぜざる所無し、冥中に炬火有り、照耀する所多きが如し。時に阿那律は、巧便を嗟歎して衆人の匠と爲す。成就する所多く、若干術を現じ、人をして喜悅せしむるは、工巧第一なり。時に於て阿難は、端正を嗟歎し色像第一たりと。顏貌殊妙なれば、見て欣ばざる莫く、衆人愛重し、一切は尊敬し、歎じて佛に三十二相有りと爲す。時に於て輪輪は、既に勤めて修習し、未だ曾て懈ること有らざれば、精進を嗟歎して世間に倫無しと。又能く海に入り、成辦する所多く、如來世尊は現に釋種に生じ、國を棄て王を捐て佛道を成ずるを得たり。端正無比にして色像第一たり。星中の月の如く、光明は日に超え、體長は丈六、三十二相、八十種好あり、其聲は八部、萬億の音を出し、所講の說法に、天龍鬼神、人物の類、各聞解を得、皆其所を得、佛の諸の兄弟、伯叔の子、各自ら譽むと雖も皆佛に歸命して、以て弟子爲り。佛の功德や稱限すべからず。無數百千億劫より功德を積累し、自ら佛たるを得るを致せり。一切人の爲に其道路を示すと。

俱に佛に往詣して其本末を問ふ、『誰か第一爲る。我等聚會して各各自ら己の所長を歎す。』佛、比丘に告げたまはく、『此諸人等、但に今世に各自ら稱譽して常に己身を歎じ、第一無雙たるのみならず、前世も亦然り。生生歸する所、皆吾所に伏せり。吾尊は無極なり、所以は何ん。乃往過去無數久遠世時に一國王有り。名けて大船と曰ふ。國土廣大に、

群僚大臣普く亦具足し、其土は豐熟に、人民熾盛なり。王に五子有り。第一は智慧、第二は工巧、第三は端正、第四は精進、第五は福德なり。各自ら己の所長を嗟歎す。其智慧者は、智慧の天下第一なるを嗟歎し、偈を以て頌して曰はく。

智慧は最も第一なり、能く衆の狐疑を決し
難解義を分別し、久怨の結を和解し

能く權方便を以て、人をして其所を得しむ

衆庶觀て歡喜し、悉く共に等しく稱譽す

第二者は工巧を嗟歎し、偈を以て頌して曰はく、

工巧に技術有り、能く成就する所多し

機關は木人を作り、正しく能く人形に似る

舉動して屈伸し、觀る者欣ばざる莫し

皆共に之に歸遺し、所技依因すべし

第三人は、端正を嗟歎し、偈を以て頌して曰はく、

端正は最も第一たり、色像は比倫し難し

家人顔貌を觀、遠近聞かざる莫し

皆來つて之を尊敬し、事を慎み普く慇懃なり

家人の奉ずる天の若く、日の浮雲に出づるが如し

第四人は精進を嗟歎し、偈を以て頌して曰はく、

精進は第一爲り、精進して大海に入らば

能く諸の患難を越え、多く珍寶財を致す

勇猛は能くする所多く、是に由りて礙ふる所無し

家業皆成辦し、親里は敬欣して戴かん

第五人は福德を嗟歎し、偈を以て頌して曰はく、

福德は第一爲り、所在に自然を得

富樂極り有ること無く、生生福田を爲す

福は天帝釋、梵天轉輪王爲り

亦佛道を成ずるを得、具足道法王なり

各各自ら己の長ずる所を説き、各第一と謂ふ。能く決する者無し。各自ら意を立て、

相に爲に伏せず、轉相謂つて言はく、「我等各當に自ら功德を試み、丈夫の相を現じ、遠

く諸國に遊び、他の土地に詣らん、爾らば乃ち殊異の徳誰か第一爲るやを別知せん」と。

時に智慧者は、他の國土に入り、其國の人民の善惡、穀米貴賤、豪富下劣を推問せり、

其國中に兩長者有り、豪富及び難し。舊くは共に親親なりしも、中に共に相失ひ、衆人

構狡なれば鬪つて怨を成ぜしめ、年歳を積有せるも、能く和解する者無きを聞き、其智慧

者は權方便を設け、好饋遺百種の飲食を齎して長者の門に詣り、求索奉現す。長者即ち

見るに、其齋す所の餽遺の具を進め、其長者の名を以て、辭謝問訊すらく、「前者相失へば意及ばざるを以て、衆人構狡し、遂に怨結を成じ積年違曠し、言會することを得ず。一侍面して其辛苦を叙せんことを思ふ。故に飲食饋遺の物を遣す。唯納受せられ、譏責せらるる無かれ。亦父怨母驛無し。故に我を遣し來り、以て相諭意す」と。

其長者聞いて欣然として大悦し、「吾和解を欲する、其日久し。但、親親の以て相諭意する無きに、乃ち復信を辱らし、枉屈して相諭す。誠に所望に非ず。同じく厚意を念じ、便ち來旨に順はん。敢て命に違せじ」と。

其智慧者、長者の意を解し、燿然として疑無く、辭出して退き、第二の長者に詣る、亦復是の如し。其意を解諭する前の所言の如く、便ち共に尅期し、共に其處に會し、衆人を聚合して仇怨を和解し、時に應じて醺飲し、諸の伎樂を作し、共に相娛樂せり。各各本末和解の意を相問ひ、乃ち此人の善權を以て兩怨を和解し、親たること故の如くならしむると知り、各自白ら念言すらく、「吾久しく相失へるに、一國中の人和解する能はず。乃ち此人をして遠來して相聞和解せしむ。其恩や量り難し。辭して盡す所に非ず。各百千兩金を出して之に奉遺せり、即ち此寶を持つて諸の兄弟に與へ、偈を以て頌して曰はく、

言辭の具足する所、辯能く經典を造る

正士は能く博聞し、安隱して究竟に至る

我を觀よ、智慧を以て、此若干の寶を致し

衣食自ら具足し、井びに及び人に布施せり

時に第二の工巧者は、轉行して他國に至り、時に應じて國王、諸の技術を喜び、即ち材木を以て機關木人を作るに、形貌端正にして生人に異る無し。衣服顔色、黠慧にして比無く、能く歌舞に工に、舉動人の如し、辭言すらく、「我子の生は若干年なり」と。國中恭敬し、多く餽遺する所あり、國王之を聞いて、命じて技を作さしめ、王及び夫人、閣に昇つて觀る。伎歌舞を作すに若干方便あり、跪拜し進止する生人に勝れたり。王及び夫人、歡喜すること無量なり、便ち角に瞻眼して夫人を色視す。王遙に之を見、心に忿怒を懷き、促して侍者に勅し、其頭を斬り來らしめんとし、「何を以て瞻眼して吾夫人を視しや。謂ふに惡意有つて色視せしや疑はず」と。其父啼泣し、涙出づること五行、長跪して命を請ふらく、「吾に一子有り、甚だ重く之を愛せり。坐起進退、以て憂思を解くに、愚意の及ばざる是失有るのみ。假使殺さるれば我共に當に死すべし。唯以て哀みを加へて其罪臺を原されんことを」と。

時に王悲ること甚しく、背て之を聽かず。復王に白して言さく、「若し活さずば願くは自手もて殺し、餘人を使ふこと勿らしめたまへ」王便ち之を可とし、則ち一肩楯を抜けるに、機關解落し、碎散して地に在り。王乃ち驚愕すらく、「吾身云何が材木を瞋れるや。此人の工巧なる天下無雙なり。此機關を作る三百六十節、生人に勝れたり」と。即ち以て億萬兩金を賞賜せり。

即ち金を持つて出で、諸兄弟に與へ、之に飲食せしめ、偈を以て頌して曰はく、

此工巧者を觀よ、多所に而も成就し

機關を木人と爲し、生者に過踰せり

歌舞して伎樂を現じ、尊者をして歡喜せしめ

賞を得ること若干寶なり。誰か最も第一たるや

第三の端正者は、轉じて他國に詣る。人民、端正者有つて遠方より來り、色像第一、世

間希有なるを聞いて、人民皆往いて奉迎す。飲食百味、金銀珍寶、用て上りて之に遺る。

其人伎を作せば衆庶益悦び、瞻戴の光顔は星中の月の如し。驕貴の女の多く、財寶有り

て、衆藏に盈滿せるが、獻するに珍異無數億の寶を致せり。

此寶を得已つて諸の兄弟に與へ、偈を以て頌して曰はく、

善い哉色は花の如く、端正なる顔貌足り

女人の尊敬する所、又常に安隱を得

衆人の觀察する所は、猶し星中の月の如し

今若干の寶を致し、自ら食し并に人に施す

第四の精進者は、轉じて他國に詣る。一江の邊に到り、一梅檀樹の流に隨つて來下せる

を見る。衣を脱し水に入り、泗截接取す。國王家急に梅檀を求むれば、即ち載送して上

れり。金百萬を得たり。所得の寶、稱計すべからず。

諸兄弟に與へ、偈を以て頌して曰はく、

精進は最第一なり、勇猛能く海に入り

衆の珍寶を致し、以て家親屬に給す

頼むらくは我江水に浮び、妙梅檀を接得し

金若干數を致し、自ら食し及び人に施せり

第五の福德者は、轉じて大國に詣る。時に天暑熱なれば樹下に臥せり。日時映中に餘樹の蔭移るも、此人の臥する所の樹蔭は動かさず、威神巍巍として端正殊好なること、猶し日月の如し。彼國王薨じて、太子の嗣立すべき者有ること無し、衆人議して言はく、「當に賢士を求めて以て國主と爲すべし」と。人を募りて四に出でて、國內に應立すべき者を選択せしむ。使者按行するに、一樹下に此一人有つて世に於て希有なるが、樹下に臥するも樹蔭移らざるを見、心に自ら念言すらく、「此は凡人に非ず、應に國王爲るべし」と。尋いで往いて過く啓し、國の大臣に具に本末を説けり。時に於て群臣、即ち威儀を嚴にし、導從騎乘し、印綬冠噴、車駕衣服して則ち往いて奉迎す。洗沐塗香、衣冠被服し、佩帶し畢訖つて、皆拜謁して臣と稱す。車に昇つて宮に入り、南面して詔を立つ、國即ち太平に、風雨時節あり、即時に勅外す。詔に四人有り、一には智慧、二には工巧、三には端正、四には精進なり、召して中閣に至り、一時に俱集し、侍衛に住せしむ。

時に福德王、偈を以て頌して曰はく、

福功德有る者は、天帝釋爲るを得

帝王轉輪王、亦梵王爲るを得

智慧及び工巧、端正并に精進

皆福徳の門に詣り、侍立して臣僕と爲る

時に福徳王、遂に高位を以て諸兄弟を署し、各所を得しめたり。」

佛、諸比丘に告げたまはく、「爾時の智慧者は則ち舍利弗是れなり。工巧者は則ち阿那律

是れなり。端正者は則ち阿難是れなり。精進者は則ち輪輪是れなり。福徳王とは即ち吾身

是れなり。此等爾時各自己の所長を稱歎して以て第一と爲す、今に於ても亦然り。昔

爾時の世、皆吾に如かず、而も各自ら嗟歎す。吾佛道を成じて三界の尊たり。今皆吾に

歸し、以て弟子爲り。佛に依て得度す。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説鬘狐烏經第二十五

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十

人と俱なり。

爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、「調達は凶危なり、横に嗟歎者を見て其理を得ず。」と。拘迦利比丘は調達を嗟歎し、調達も亦復拘迦利比丘を嗟歎せり。其れ彼二人、横に相嗟

【拘迦利】 コーカ
ーリカ (Kokaliya)
惡時者と譯す。調
達の弟子。

歎して義無く理無し。諸比丘聞き、往いて世尊に白さく、「唯然り、大聖、拘迦利比丘を觀るに、正典に因依り、法律の教に縁り、信を以て出家して、沙門と爲るも、横に調達を歎じ、非を以て是と爲し、義理を得ず。又彼調達も拘迦利比丘を嗟歎し、非を以て是と爲し、是を以て非と爲す。」と。

佛、諸比丘に告げたまはく、「今此輩は愚癡と等なり。但に今世に横に相嗟歎し非を以て是と爲し、是を以て非と爲すのみならず、前世も亦然り、乃往過去久遠世時に、黃門命過せり。親里即ち取つて樗樹の間に棄つ。彼時蠱狐鳥、來つて其肉を食はんとし、時に共に相嗟歎す。

樹間の鳥、狐の爲に偈を説いて曰はく、

君が體は師子の如く、其頭は仙人の如く

脂は猶し鹿中の王の如し。善い哉好華の如し

時に於て蠱狐、即ち樹間に、偈を以て讀じて曰はく、

誰か尊なる樹上に在るや。其慧は第一最に

其明は十方を照し、紫摩金を積むが如し

時に於て鳥、偈を以て報じ、頌して曰はく、

君は則ち大師子なり、君を見んと欲するの故に來る

君の脂は鹿王の如し。善い哉利義を得ん

蠱狐復偈を以て報じ、頌して曰はく、

誠に信實もて相知り、俱に相歎するに至誠もてす

紫摩金を合積するごとし、所問あらば此を服食せん

爾時、彼を去ること遠からず、大仙人有つて閑居に處し、淨修して道を爲せり。狐及び

鳥の轉共に相譽むるを聞き、心に自ら念言すらく、『彼等の類は横に相咨嗟するも、彼の言

は皆虚し。一も誠實無し。』と、

偈を以て問うて曰はく、

吾久しく所興を見、此に至れるに俱に兩舌なり

自ら樹間に藏し、俱に人の肉を食せんとす

時に於て鳥、瞋恚し、偈を以て仙人に報すらく、

師子及び孔雀、共に禽肉を食せんとするに

彼髡滅頭に於て、次第して活を求むるや

仙人偈を以て答へて曰はく、

樗樹は臭の下極、一切の鳥の惡む所なり

衆鹿の依因する所に、死せる黄門の身を棄てしに

汝が輩下賤物、俱に來つて此に聚會し

黄門の身を食し、自ら稱して上人と爲す

佛、諸比丘に告げたまはく、『爾時の蠱狐を知らんと欲すれば調達はなり。烏とは拘迦利是れなり。仙人とは則ち菩薩是れなり。爾時共に相敷じ、非を以て是と爲し、是を以て非と爲す。今に於ても亦然り。』

佛說比丘疾病經第二十六

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

時に一比丘の疾病に困篤せるあり、獨自一身に、等類有ること無ければ、視る者有ること無く、亦醫藥衣被飯食無く、起居すること能はず、惡露自ら出で、身は其上に臥し、四向顧視するも、來つて救濟する者無し。便ち自ら歎息すらく、『今日吾身、救無く護無し。』と。時に阿難、見て往いて佛に白さく、『唯然り大聖、吾身今日未曾有を得たり。如來世尊は大慈大哀なり。苦比丘有り、當に救濟を念すべし。』吾乃ち往世無數劫時に、此比丘の疾病の患を救へり、今に於ての世も亦然り、乃往過去久遠世時に、空閑處に於て、多神仙五通學者の彼に在つて獨處せるあり、各各相勸め、轉相佐助し、各各果を取り、以て相給足し、以て籌算を作す。設使疾病あらば、轉相瞻療せり。時に摩納學志有り、緩急する所有らば、常に馳走して趣けり。一學志有り。若し急緩疾病の厄有るも、初より視瞻せず。時に彼學志、急緩有るの時、救者有ること無く、則ち自ら獨立して伴無く偈無し。彼異時に

於て、身に疾病を得しも、療贍者無く、亦果を持して食を授與する者無し。」
 是時五通仙人、彼和上を見、之を見ることは是の如く、心に自ら念言すらく、「此人孤獨に
 して、救護有ること無し。」と。心に之を敏念し、即ち其所に往到し、即ち之に問うて曰は
 く、「摩訶學志、卿が强健なりし時、頗る消息有り、問訊寧からずや、親厚朋友有りや。」即
 時に報じて曰はく、「無きなり。和上も亦親友無きや。知識の厚き、我の父母、家屬親里、
 此を去ること大遠なり。」又問うて曰はく、「此梵志、共に一處に頓して、親友の與に、結ん
 で知識と爲らざるや。」答へて曰はく、「無きなり。」和上答へて曰はく、「親友を結ばず、知
 識有ること無くば、何を以てか人と爲す。」卿餘人を見れば、展轉相敬ひ、展轉相事へよ。卿
 が獨するは不なり。今日孤獨なるも救護無けん。」時に於て仙人、摩訶を扶接し、之をして
 坐せしめ、自らの所頓處に將詣し、之に勧めて安心せしめ、親厚に將詣し、而も以て療治
 す。

則ち偈を頌して曰はく、

妻子を棄捐し、出家して所慕無し

卿和上は父爲り、等類は即ち兄弟なり

頓して梵志と俱なるも、而も相供視せず

疾病の困篤なるを得るも、孤獨なれば所依無し

子を察し此を見已つて、梵行は親友と爲り

【拘翼】

帝釋の名

普く行するに子の恭敬もてし、展轉して相瞻視す

時に佛世尊、往いて比丘に詣り、而も之に問うて曰はく、『今疾病を得たるもの、醫藥床臥具を瞻視する有りや。』白して曰さく、『孤獨なれば瞻視者無く、醫無く、藥無く、家を去ること甚だ遠し、父母を離れ、兄弟有ること無く、親里伴侶供侍者無し。』

世尊、又問ひたまはく、『卿が強健たりし時に、頗る有疾者を瞻視、問訊せしや不や。』答へて曰はく、『不なり。』世尊告げて曰はく、『卿が強健たりし時、人を瞻視せず、疾病を問訊せず、誰か當に卿を瞻視すべきや。』善惡對有り、罪福に報有り、恩生は往反し、義絶稀疎なり。佛は一切三界の救と爲り、五道を救度す、當に卿を捨すべきや。前世に救へり。

今亦當に然るべし。佛、之を扶起し、水を以て洗はん」と欲したまふ。時に天、臂を伸ばす頃、の如きに、忽然として來下し、之を洗浴せんと欲す。佛の言はく、『拘翼、卿は天上の香潔の中に在り、安んぞ能く穢濁臭處を救洗せんや。』天帝釋答へて曰はく、『向に世尊説きたまふ。此比丘本人を瞻す、疾病を視されば、孤獨にして救無し。佛は十方一切の救を爲し、功德具足して乏少する所無きに、尙之を瞻視したきふ。況んや我罪福未だ斷せず、而も福興らざるをや。』時に佛、手を洗ひたまふに、天帝水を灌ぐ、還復之を臥せしめ、共に醫藥を飲ましむ。即時に除愈せり、爲に經法を説き、即時に道を得たり、

世尊偈を以て、之を讚じて曰はく、
人當に疾病を瞻、諸の危厄を問訊すべし

善惡報應有り、果を種ゑ、實を獲るが如し
 世尊は則ち父爲り、經法は以て母と爲す
 同學者は兄弟なり、是に因りて度を得
 佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説審裸形子經第二十七

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

爾時、國王有り。梵志女に囚て一子を生ぜる。名けて至誠と曰ふ。外道異學、審裸形子、而も爲に字を作る。其裸形子は、智慧聰明に、超異の慧有り。講説する所有り、降伏する所多し。諸の經典に於て、博せざる所無し。普く衆人の爲にす。其國王と共に博く衆誼に達し、往いて世尊に詣る。其尼毘に四姉弟有り、梵志に因つて生ず、異學を敬樂す。一を饗養と名け、二を興食と名け、三を金誠と名け、四を誠雪と名く。時に裸形子、佛所に遣詣し、世尊を試みんと欲す。『皆法則を受け、悉く經誼を知り、具に來つて我に説け。』と。爾時、姉弟各相謂つて言はく、『吾等共に沙門瞿曇の所に詣り、其學動を試み、行歩進止、其長短を取らん。便ち共に往詣し、居家を棄捐し、悉く沙門と爲り、具足戒を受く。時に佛世尊、往世の諭を以て、而も之を聞化し、本原を導示し、諸根の従ふ所、功德の本

【尼毘】ニルゲラ
 ンタ(Nirgrantha)
 六外道の一。

なり。貢高を棄捐し、其憍慢を除き、皆羅漢を得たり。時に裸形子、諸の姉弟に問はく、
『試むる所云何。』諸女則ち無央數誼を以て世尊を嗟歎し、經典、法律の妙を稱譽すること勝
限すべからず。時に裸形子、女の言を受けず、『汝等家事を以て往いて試みに、道を亂さん
と欲し、反つて世尊の爲に、攝取、迷惑、誑詐せらるる所たり。譬へば人有り、行いて水
中に入り垢濁を洗去し、身を淨潔ならしめ、反つて水に溺れて死するが如し。汝等是の如
し。往いて佛を試み其道意を壞し、其舉動を視、其長短を取らんと欲するに、反つて瞿曇
の爲に、迷惑せらるる所たり。汝溺して自ら失ひ、己を濟ふを得ず。譬へば人有つて行い
て果樹に入り好果を採らんと欲し、反つて禽獸虎狼の爲に食はれ、身を亡して還らざるが
如し。汝等も是の如し。往いて沙門瞿曇を試み、其法則、舉動、長短を取り、以て來つて
吾に語るを、而も反つて汝溺し、所聞せる瞿曇の爲に惑はさる。譬へば蛇虺弊蟲兇惡の人
の、尙親近すべく、信すべく、樂むべく、吉祥安隱の法を致すべきが如し。世尊瞿曇は、
是功德安隱の誼を求むるも、終に得べからず。諸女答へて曰はく、『世尊の道徳は、人の四
塵瑕穢の毒を去り、人をして安隱寂然ならしむ。虚空尙取有るべきも、如來世尊に未だ曾
て短有らず。男女の之を見る、安隱ならざる莫し。時に我等の爲に微妙の誼を説き、吝數
道稱す、我等歡喜して稽首歸命したてまつる。』と。

時に比丘僧、具足して佛に啓さく、『唯然り、世尊、且く外學裸形子を觀るに、異語有り、
佛道を誹謗し、反つて諸女を譏り、汝等何が故に世尊に歸命せるや。其舉動を觀じ、當に

長短を取つて、而も來つて我に語るべきに、反つて迷惑沈溺を爲し、其身を自ら濟ふ能はずと。佛諸比丘に告げたまはく、「裸形子、四女人を遣し、來つて佛を試み、其長短を取らんと欲するも、世尊は無瑕なれば何に従つてか伽を取らん。佛、尋いで開化して皆得度せしめ、無著證に至る。乃往古久遠世時に、一國王有り、名けて迦隣と曰ふ。他の國王と結んで怨仇を爲し、往いて之を壊せんと欲す。即ち四女を遣す。端正殊妙、姿顏無雙なり。而も往いて之を試み、其長短を取らんとし、内匿賊と爲つて阿脂王の許に詣る。時に阿脂王に尊太后有り。端正殊好にして、尊敬せざる無し。威神巍巍として殊德無量に、瑕穢有ること無く、柔和無類にして名稱は遠く聞え、安詳柔和なり。迦隣王女、阿脂王の功徳、世の希有にして名稱遠く聞え、八方上下、宣揚せざる莫きを嗟歎し、「我等が父王、諱を迦隣と爲す。故に相遺來し、以て相給侍し、左右に奉在せしむ。我父王の辭に曰はく、其王の徳殊に、微妙にして及び難し、瑕垢有ること無く、安詳にして暴ならず、忍辱にして穢無く、人と語言せば、才辯殊異に、名を聞いて輒ち伏すと、我言を受けざるも、其國は阿脂王に屬し、大國王と爲し、又國號を虚空と曰ふ。王の所止處に一大臣有り。名けて細那と曰ふ、聰明智慧にして聖達及び難く、卒慧も尋答し、王が輔臣爲り」時に迦隣王、女が言に隨はず、棄てて大國細那土界に詣らんとし、大衆と俱なり、周匝圍遶せり。王、傍臣に問はく、「當に之を奈何せん、吾自ら門を開いて捨て去り、此他門より入らんか」傍臣對へて曰はく、「恐懼を得る無し、天王自ら安んぜよ。譬へば師子の林間に處するに樹木

を畏れざるが如し。今此に住するも亦復是の如し。城郭則ち安く、護を得て患無し」と。
偈を以て頌して曰はく、

以て自ら其門を開き、反つて此國界に入る
阿蘭の大士、師子林樹の如し

安護にして護を得、自然にして所畏無し
其欣踊國王、以て長く安隱なるべし

人健く論證し、其言流溢せり。阿脂王、其迦隣王の、財利を以ての故に、及び其名稱、
發意の越く所を聞き、則ち歎頌して曰はく、

此事大佳なり、微妙にして量り難し
名徳流布し、衆惡有ること無し
能く住法に堪へ、此に

誑詐する所有ること無からんとす

又問うて曰はく、「其れ此仙人は、天帝の神なり。皆迦隣國界に遊び、威神廣大なり。彼
我徳を聞かば、即ち當に勝つを得べく。其迦隣王、便ち當に破壊して自ら降伏すべし。」時

に阿脂王、心に自ら念じて曰はく、「彼諸仙人は終に妄語せず。諸仙人曰はく、「吾當に勝
つを得べし。功徳無量なれば所説此の如し。」諸臣報じて曰はく、「唯然り、大王、仙人の至

誠なる、終に虚言ならず」と。

偈を以て頌して曰はく、

諸の迦隣勝を得、是に縁つて而も降伏し

阿脂王は計を失ふ。仙人の説是の如し

善い哉言の質直なる、所興に所失無し

何を以て此言を説くや。自然に聲音有り

天王當に之を知るべし。言の至誠なる斯による

所行に放逸無くば、而も當に勝法を得べし

又言はく阿脂王、而も當に復勝を得べし

此云何が至誠なる、更に我爲に解説せよ

大臣答へて曰はく、「曾て聞かずや。失聖仙人は剛強にして化し難く、手に利劍を執り、
 條貌畏るべし。丈夫男子は人民を以ての故に、其徳本を承け、而も之に降伏するも、自ら
 歸すと云はず、其れ阿脂王は大丈夫爲り。方便授計する亦復是の如し。又其眷屬や和順し
 て教を承け、異心有ること無く、志離別せず、所作無上に、威徳巍巍たり。假使、阿脂
 王勝を得ずば、今願くは天王、目もて自ら之を視よ。王の勇猛を以て計策方便せば、權借
 及び難く、遂に破壊せじ。説し相信ぜずば、且く自ら目もて見よ」と。

偈を以て頌して曰はく、

方策ある尊雄の計は、時を知つて強精進なり

勇猛にして權略有り、此を察すれば則ち勝を知る

阿脂の名は德忍、諸の瞋恚を開化す

阿脂王の堪任なる、迦隣焉んぞ勝を得んや

時に王、言を用ゐず、師を興し兵を起し、往いて阿脂國に詣る。

其忿蹄の兵は、大臣輔佐し、聰明智慧、勇猛精進なり。無上心を以て、和して離別せず、又阿脂王、身自ら勇健

に、其力聖強、時に應じて迦隣王に勝つを得たり。迦隣王伏し、自ら歸して僂拜し、生

捕收攝し、尋いで便ち之を放てり。

是に於て天帝釋、偈を以て頌して曰はく、

賢聖は忍辱を歎じ、諸の瞋恚を開化し

迦隣王を降伏し、阿脂王は獨り勝てり

佛、諸比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや。爾時の迦隣王とは審裸形子是なり。阿

脂王とは則ち我身是なり、欣踊大臣とは則ち舍利弗是なり。帝釋とは阿難是なり。爾時相

隨つて以て伴黨爲り。義理相化し、上下相承く。今亦是の如し。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説腹使經第二十八

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十

人と俱なり。

爾時、其國の米穀踊貴にして、人民飢餓せり。佛と諸比丘と、各散去して諸國に流遊し、以て歲節を爲さんと欲す、賢者阿難は、博聞多智に、法に於て厭ふ無く、辯才無礙なり。佛の所説の經を、無數人の爲に、經典を護受し、精進及び難し。心に自ら念言すらく、『假使世尊、餘國に詣り、而も歲節を造り、他域に處せば、無央數の人は其徳本を失はん。坐具乏少する所無し。假使如來、此舍衛に止り、而も歲節を爲したまはば、安隱する所多く、爲に徳本を成ぜん。』

時に於て世尊、群黎を慰傷し、之を救護せんと欲し、舍衛城に入りたまふ、波斯匿王、の傍臣人民、往いて國王に詣り、阿難も自ら往いて、此本末を説く。王波斯匿、阿難の言を聞き、佛を請ふこと三月、及び比丘衆に若干種の饌もてす。飲食具足し、病瘦には藥を給し、一切所安に、其所樂に隨ふ。是の如く三月、乏少する所無く、佛と比丘衆、舍衛に歲節せり、時に諸の比丘、心に自ら念言すらく、『賢者阿難は、功徳及び難し。未曾有を得、行權時を知り、誼理を曉了し、國王波斯匿を勸化し、世尊及び比丘衆を供養せり。歲節三月皆安隱ならしめ、比丘衆をして九十日中に憂慮有ること無からしむ。一切に安を施し所供に乏しき無く、比丘衆をして各自自ら安隱ならしめ、復遊馳して他國に至らざらしむ。』時に佛、徹聽もて諸比丘の共に此事を議せるを聞きたまひ、尋いで即ち往いて比丘衆の所に到りたまふ。『汝等同に何をか講論する所ぞ。』諸比丘衆、本末を具足して如來に

啓白す。佛、比丘に告げたまはく、「賢者阿難は、但に今世に權を行じ時を知るのみに非ず、
 前世も亦然り。行權方便せり、乃至往古久遠世時、波羅奈國に、時に王有り梵達と名く。
 王大徳有り、名稱遠く聞えたり、時に國飢饉にして米穀踊貴し、人民は飢餓し、乞ふ者
 衆多なるも、以て供すべき無し。王施與を喜び、四面より來り乞ひ、集ること浮雲の如く、
 十方より皆至れり。力の所任に隨つて而も之を供給せり。布施是の如ければ、休息有るこ
 と無く、穀米遂に貴し。天轉旱酷に、復降雨せず、所種收まらず、人民飢困し、乞ふ者日
 に滋く、王宮の門に詣れば、倉廩虚竭せり。時に諸臣吏、各共に議して言はく、「今此國
 王、敢て來り乞ふ者に、尋いで即ち施與して人に逆ふ能はず、天旱して雨らず、乞ふ者遂
 に甚しく、米穀踊貴し、倉庫虚盡し、將に國を壊せんと欲す」と。
 時に諸大臣、國を救護せんと欲し、往いて王の所に詣り、具足して王の爲に此議を啓説
 すらく、「王の施與する所今省息すべし。法に於て依るべし。須らく後に豐亨有なれば、爾れ
 ば乃ち復施したまへ」王、之に告げて曰はく、「吾施與する所、懈止すること能はず、寡人
 令有らんも、志布施を願へば、焉んぞ本心に違せん。又來り乞ふ者に、何ぞ忍んで之に
 逆ふや、其來らざる者には乃ち施す所無し」時に諸の群臣、各共に誼して言はく、「吾
 等宜しきに於て當に共に計を作すべし。諸の窮士をして來つて乞ふを得ざらしめん、爾
 らば乃ち斷たんのみ」と。
 時に於て王、施して未だ曾て懈廢せず、心に自ら願うて言はく、諸の倉穀をして消滅

せしむる莫らしめんと。時に諸法明吏、四遠に告勅すらく、「往いて王に從つて乞匄せしむるを得ざれ、敢て乞ふ者有らば、皆誅罰を受け、命を都市より棄てん」と。

四遠より乞ふ者、來つて其國に詣り、此急教を聞いて敢て行乞せず、王に見ゆるを得ず、愁憂懊惱して諸大臣に問へば、審に是命有り、又父母に問はく、「實に急教有つて乞を得ざるや」答へて曰はく、「之有り、行乞を得ず」乞者又問はく、「假令遠方に諸使吏有つて、東西南北、皆糜價穀糧飲食に足るに、今此臣吏、獨り飲食を欲す、故に惡教を出だして諸四遠に勅し、諸の貧窮乞士をして、門に詣り王に從つて乞匄するを得ざらしむ。假使乞ふ者あらば罪皆應に死すべし。唯遠方の使のみ、倉庫を見るを得ん」と。

展轉傳語して、衆人皆諸臣の建つる所にして、王の所爲に非ざるを知れり。一梵志有り、飢窮日を経、行いて乞匄し、以て其命を救はんと欲し、遍行求索して、妻子を給足す。假使殺賤なれば乞匄するも得易く、所獲無量ならんも、設し殺飢貴なれば乞匄するも獲難く、馳走して乞匄し、至らざる所無きも、纔に活命を得るのみ。心に憂悴を懷いて復言ふべからず。其歸時に於て梵志に謂つて言はく、「汝勤苦に遭ひ、乞匄して患に遇ひ、至らざる所無きに、而も得ること能はず。何ぞ王に詣り、其に從つて乞匄せざる。本聞く國王、敢て乞ふ者有らば人意に逆はず」と。梵志婦に答ふらく、「汝聞かずや。國王に令有り、人、王に詣つて乞匄せしむるを得ず。唯遠方の使のみ、乃ち進見を得、其糜價を給す。餘人の乞ふ者、皆當に斬らるべし」と。梵志、婦に答ふらく、「我身今日安きを求むるを得んと欲

して、反つて危害せられ、既に他に依仰せば、復毀辱せらる。其婦答へて曰はく、「諸臣吏の如きは四遠に告勅するも、唯遠使のみ前むを得、餘人を聽かず、卿自ら應に言ふべし、遠くよりの使來なり、大王を見んと欲すと、食乃ち度を得ん」と。

時に於て梵志、即ち婦の言を受け、杖を執り使を奉じ、使冠を著奉し、王宮の門に詣る。門吏曰はく、「子、從來する所ありや」答へて曰はく、「遠くよりの使來なり」門吏、王に白して其本末を啓し、即時に之を現す。「子從來する所ありや。今十六國、穀米飢貴に、各自、界を守るに、何に従つて自ら到れる。何國より來れるや」吏具に是に問ひ已るに、梵志答へて曰はく、「聞く、王德に服するが故に使來せらる」吏又問うて曰はく、「是國界に於て、彼國を見るや」聚葉墟聚、達知すべきに足る、假使爲すこと已らば、唯願くば天王、獨り爲し已れる者、所求得易く、大王を見んと欲す。故に來つて見んことを求む。門吏の之に問へる、其對是の如し」王曰はく、「之を現せよ」梵志即ち入る。王之に問うて曰はく、「誰が爲に使來せる」梵志對へて曰はく、「求めて恐懼せず、唯聽許せられなば、乃ち敢て王に啓して使來する所を説かん」王之に告げて曰はく、「便ち具に自説せば恐懼を原除せん」王又問うて言はく、「誰が與に使を爲すや」梵志啓して曰さく、「大王之を知らんと欲するや、我腹の使として來るなり」と。

時に於て梵志、即ち頌を説いて曰はく、
衆人、財利を求め、或は諸の怨賊に遇ふ

我、腹の使と爲つて來る、國主唯願くば恕したまへ

誰か最も尊勢と爲す、誰か其れ第一先なる

我實に腹の使爲り、大王罪責したまふ勿れ

諸佛及び緣覺、聲聞聖弟子

寂然處を捨置して、城落聚に入りて乞ふ

窮厄して所依無く、生身に苦患に遭ふ

今我腹の使爲り、唯人尊恕せられよ

時に於て王、之を愍傷し、則ち偈を以て梵志に報じて曰はく、

梵志當に卿に施すべし、赤犍牛千頭

乃ち犢子と俱なり。焉んぞ使に惠まざるを得ん

吾語使者の爲に、飢乏する所を給與せん

使者の爲に作使し加施せん、恐懼する無かれ

佛、諸比丘に告げたまはく、『知らんと欲するや。爾時の梵志とは阿難是なり。梵達王と

は波斯匿王是なり。爾時阿難、開化して悦ばしめ、戴仰無量なり。是に於て阿難、今世に

在國して、復波斯匿王を化す。穀米飢饉なるも、世尊及び比丘衆を供養し、三月の中に乏少

する所無し。是故に比丘、當に善言柔和の辭を學すべし。當に巧辭方便の語を作すべし。

是れ諸佛の教なり。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説弟子過命經第二十九

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

爾時異比丘に弟子有り。志性溫雅に、功德殊異、意行仁賢に、至誠安隱、身常に侍従して和上に宿衛し、恭順良謹に、精進及び難く、法教に順從して師命に違せず、時に於て短命なり、宿世に種うる所、其壽薄少なれば、幼少にして亡没し、即ち天上に生じて切利宮に在り。適天上に生じ、則ち天上を觀するに、久しく堅固ならず、但大火のみを觀る。

【阿夷利】アーチヤ(Ācārya)軌範と譯す。弟子の軌範となる者。

吾本志す所、如意を得ず、究竟に至らず、善師友と相守ること能はず、今善師を捨てて反つて惡友に隨ふ。是に於て至尊和上、及び阿夷梨、衆諸の等類、修梵行者、四輩の弟子、比丘比丘尼、清信士清信女に遠遠す、佛世尊有り、普一切智あり、其慧は遍見なり。號して如來至眞等正覺と曰ふ、今悉く大聖世尊、和上師友及び諸の同學に遠遠し、無央數劫百千の數にも値ひ難く見難し。世間に興るも遇ふを得べからず。經典を講説し、深妙優奧なること限り難し。未だ曾て所念せず、口に發言せず。而も爲に安隱なり、皆之を聞けず。分別智慧もて諸の緣起を説けば、各各解了す。我有因に從つて、無央數劫に未だ聞見せざる所を、悉く爲に解決せり。吾本和上に遭遇し、此經典法律に値ふべく、家を乘

てて道を爲し、沙門と作るを得たるも、超異に至らず。是の如き等の類、當に興立すべき所なり。究竟を得ざるに、今反つて當に放逸行を爲すべきや。今吾、寧ろ先に世尊に詣り經義を諮詢すべし。」

則ち自ら曉責して己身を感傷し、即ち其夜を以て威神光光として明徹遠照し、往いて世尊に詣り、足下を稽首し、却いて一面に住す。佛、其心の眞正にして道を樂み、純淑法に在るを見、爲に四諦苦集盡道を説けるに、即ち四諦を見る。是に於て世尊、其本根の如く、而も爲に分別したまへば、果證に至るを得、歡喜踊躍して其嚴戒を受け、佛足を稽首し、右に三遶し、巴りに忽然として現ぜず。時に於て和上、心に弟子の功德性行を念じ、愁憂感結し、泣涕雨淚して自ら解する能はず、等類諫諭するも思を究むること能はず、時に於て比丘、往いて世尊に啓すに、世尊告げて曰はく、「比丘を呼びて來れ、之に問はん、比丘何んが憂惱を爲し、自ら解する能はざるや。」比丘白して曰さく、「弟子終に沒せり。」佛の言はく、「何が故に愁憂して自ら解すること能はざるや。」比丘白して曰さく、「唯然り、世尊。我彼弟子、甚大良謹、仁賢溫雅に、名徳量り難し、未だ究竟有らざるに、而も中天に沒せり。故を以て憂悒し、自ら寛かなること能はず。」佛、比丘に告げたまはく、「復愁憂すること勿れ、所以は何ん。卿の弟子は已に究竟に至り、天上に生ずるを得たり。今日夜半、佛所に至り、威神巍巍として光明遠く照す。足下を稽首し却けて一面に住す。吾、天子の爲に經法を講説し、具足廣普して聖諦を分別せば、是に於て天子、即ち座上に於て至聖

の法を成ぜり。佛、比丘の爲に此本末を説けば、即時に歡喜して其愁憂を除き、復涕泣せず。

時に於て世尊、一比丘に教へて憂惱患を除く。時に諸比丘、各心に念言すらく、「未曾有を得たり、大聖世尊は、無上の藥を以て此比丘の憂惱患を療せり。彼弟子の疾病して命過せるを愁憂懊惱せるに於て、能く解する者無きに、佛世尊を見たてまりて、衆患皆除けり。眞に如來至眞等正覺爲り。億千劫に於て佛徳を歌頌せんも、窮盡すべからず。佛、時に遙に諸比丘衆の共に此事を議するを聞きたまひ、佛即ち往詣して諸比丘に告げたまはく、「向に共に會して、何の所論をか爲せるや。」比丘、佛に白さく、「唯然り、世尊、向に共に會して佛の功徳を歎ぜ、聖尊は無量なり。諸の未度を度し、諸の未脱を濟ひ、諸の未滅を滅し、一切姪怒癡の患を療治する無上醫爲り。常に法藥を以て諸の心病を療したまひ、向には比丘の憂患を斷除したまふ。是を以て踊躍して自ら勝ふる能はず。佛、諸比丘に告げたまはく、「汝が云ふ所の如く、今此比丘、弟子の終るを見て愁憂感結し、自ら解すること能はず、獨り佛世尊のみあり、前世の宿命も亦復是の如し。乃至往古久遠世時に、異閑居有り、一象、子を生ぜり。地に墮して未だ久しからざるに、其母終亡せり。彼を去ること遠からず、仙人所處に上威神の功徳具足せる有り。志、大哀を懷く。遙に象子を見るに、其母命終して、纔に能く足を擧ぐるのみ。東西遊伴して自活すること能はず。即時に扶將して所止頓に詣り、之に飲ますに水を以てし、果を採り之を飼ふ。彼時に

象子、仁和賢善に、功德殊妙なり、義理を樂しみ、冀うて安隱を得、憂患有ること無く、諸衆の惱を除けり。時に於て仙人、臥起に處を同じくし、身形轉長く、衣毛鮮澤なり。則ち水漿を以て仙人に供養す。其好果藏もて、然る後自ら食す。往反慇懃に、奉持して懈らず。彼時に仙人、象子を愍哀し其徳行を觀じ、之を愛すること子の如く、之を視て厭ふ無く、之を敬すること極無し。

時に天帝釋、則時に發念すらく、「今此仙人は志、象子に在り。猶念して厭ふ無し。今我寧ろ別して愁感せしむべし」と。時に天帝釋、示現して之を試み、化して象子をして忽然として地に死して血を流離せしむ。仙人之を見るに、象子死亡せり。憂愁言ひ回く、涕泣横流し自ら解する能はず。餘仙人聞いて、來つて之を諫曉するも、憂を除くこと能はず、復食飲せず、

時に天帝釋、自ら其身を以て、虚空に住ざし、即ち仙人の爲に偈を説いて曰はく、

仁者以て家を棄て、此に至るも眷屬無し

諸仙人の法に、憂死は善哉に非ず

假使悲んで涕泣し、能く死者をして生きしむれば

皆當に聚つて憫泣すべし。假し啼哭するも活きざれば

已習共に頓止して、而も象子と俱なり

則ち慈恩の情有れば、愁憂せざるを得ず

死人は死に哭して、其れ啼哭有る者なり
明智は憂を懐かず、仙人の慧もて何をか啼かん

時に天帝釋、其仙人をして憂惱を懐かしめ已りて、即ち象子をして活きしむること故の如くならしむ。時に於て仙人、象子の活くるを見て、尋いで大いに踊躍し、自ら勝ふる能はず、復愁憂せず。

時に天帝釋、即ち尋いで仙人の爲に、而も頌を説いて曰はく、

以て卿が憂惱と、心に懐ける所の愁感を抜け

今に於て仁に患無く、而も子の憂感を除き

人をして愁惱を離れしめ、及び一切の親屬

卿の今日に歡ぶが如く、象子の起てるを見て放つ

時に天帝釋、偈を以て頌して曰はく、

吾、卿を愁傷する故に、諸の憂感を除かんと欲し

故に此因縁を興し、塵勞を増益す

明者は斯を曉了す。恩爱は苦患を生じ

則ち其内外を察し、變化を興すことを得ること無し

佛、諸比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや、爾時の仙人とは、則ち今の此和上是なり。時の象子とは死せる弟子是れなり、天帝釋とは則ち我身なり。爾時相遇ふ、今も亦此

の如し。二

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

生經卷第三 畢

生しやう

經きやう

卷第四まきのだいし

西晉三藏竺法護譯せいしんさんざうぢくほふごやく

佛說水牛經第三十

聞きけること是かくの如ごとし。一時佛いちじふつ、舍衛しゃゑの祇樹給孤獨園ぎじゆきこどくゑんに遊あそびたまふ、大比丘衆だいびくしゆ千二百五十人にんと俱ともなり。

爾時そのとき、佛ほとけ、諸比丘しよびくに告つげたまはく、「乃昔夫世ないしやくこせに異曠野閑居いくわうやけんご有り。彼時水牛王かのときすうおう有り、其中そのなかに傾止とんじし、遊行ゆぎやうして草くさを食じして、而も泉水せんすいを飲のみむ。時に水牛王すいご、衆もろくの眷屬けんぞくと至湊しすする所ところ有り、獨ひとり其前そのまへに在あり、顏貌げんぼう姝好しゆかう、威神ゐじん巍巍ゑゑ、名德みやうとく超異ちゆういし、忍辱にんじやく和雅わがし、行止安詳ぎやうしあんじやうなり、一獼猴いちみこう有り、道邊だうへんに住ぢゆう在ざせり。彼水牛の王かのすいごのわうの眷屬けんぞくと俱ともなるを見み、心こころに忿怒ふんぬを生しやうじ、嫉妬しつとを興おこし、便た即すなはち摩瓦石まゐしやくを揚あげ、空くうを以もつて之これを擲なち、輕慢毀辱けいまんきゐじやくす。水牛默然すいごもくねんたり。之これを受うくるも報むかいす。過くわ至しして未いまだ久ひさしからず。更さらに一部いちぶに水牛の王すいごのわう有り。尋たづいで後のちに従したがつて來きたる。獼猴みこう之これを見み、亦また復たが罵詈めりし、摩瓦石まゐしやくを揚あげ打擲うちなす。後のちの一部いちぶ衆前しゆぜんの牛王ぎゆうわうの默然もくねんとして報はうぜざるを見み、之これに効たごうて忍辱にんじやくし、其心和悅そのこころしやくし、安詳あんじやうとして雅步がふし、其毀辱きゐじやくを受け、以もつて恨うらみと爲なさず。是等これらの眷屬けんぞくの過去こくわして未いまだ久ひさしからず、又一また水牛犢すいごぢやく有り。尋たづいで後のちに従したがつて來きたり、群ぐん

牛に隨逐す。是に於て獼猴、之を逐うて罵詈し、毀辱輕易す。是水牛積懷恨して喜ばざるも、前の等類の忍辱して恨みざるを見、亦復學んで効ひ、忍辱和柔なり。道を去ること遠からず、大叢樹間に、時に樹神有り。其中に遊居せり。諸の水牛の毀辱せらるると雖も、忍んで而も瞋らざるを見、水牛王に問はく、卿等何が故に、此獼猴の狠に罵詈するを見、摩瓦石を掲ぐるを觀るも、而も反つて忍辱し、默聲して應ぜず、此義何の趣なる、何等の意か有る」と。

又復偈を以て、而も之に問うて曰はく、

卿等何を以ての故に、放逸なる獼猴を忍べるや

兇惡を過度し、等しく諸の苦樂を觀す

後來も亦仁和に、坐起而も安詳なり

皆能く忍辱を受け、彼等尋いで過去せり

諸角默して擲杖し、衆の墮落を建立するも

又恐懼の義を示し、默して報を如ふる者無し

水牛報じて曰はく、以て偈を説いて言はく、

以て輕んじて我を毀辱するも、必ず當に他人に加ふべし

彼當に之に加報すべく、爾らば乃ち抵患を得ん

諸の水牛過去して未だ久しからず、諸の梵志大衆群輩仙人の等有り。道に順つて來

る。時に彼彌猴、亦復罵詈し、毀辱し輕易し、塵瓦石を揚げ、盆を以て之を擲てり。諸の梵志等、即時に捕足し、脚を以て之を踢殺せば、則便命過せり。

是に於て樹神、即ち復頌して曰はく、

罪惡は腐朽せず、殃熟して乃ち患に遭ふ

罪惡已に満足せば、諸殃爛壞せず

佛、諸比丘に告げたまはく、『知らんと欲するや。爾時の水牛王とは我身是なり。菩薩爲りし時、罪に墮して水牛と爲り、牛中の王爲り。常に忍辱を行じ、四等心、慈悲喜護を修し、自ら佛を得るを致せり。其餘の水牛諸の眷屬とは、諸比丘是なり。水牛の犢及び諸の梵志仙人とは、則ち清信士居家學者なり。其彌猴衆の則ち害を得たるは尼捷師なり。本末是の如し、具足して究竟し、各所行を獲、善惡朽ちざること、影の形に隨ひ、響の聲に應ずるが如し。』

佛說兔王經第三十一

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

佛、諸比丘に告げたまはく、『昔兔王有り、山中に遊在して群輩と俱なりき、飢うれば果藏を食し、渴すれば泉水を飲み、四等心、慈悲喜護を行じ、諸の眷屬に教へて悉く仁

和ならしめ、衆惡を爲す勿れ、畢に此身を脱して人形爲るを得、道教を受くべしと。時に諸の眷屬、歡喜して教に従ひ、敢て命に違せず。一仙人有り、林樹に處在し、果藏を食噉して山水を飲み、獨處して道を修め、未だ曾て遊逸せず、四梵行、慈悲善護を建て、經を誦し、道を念ず。音聲通利し、其音和雅にして、聞いて欣ばざる莫し。時に於て鬼王、往附して之に近き、其所誦の經を聽き、意中に欣踊し、以て厭と爲さず。諸の眷屬と、共に果藏を齎して道人を供養す。是の如く口を積み月を經、年を歴たり。時に冬寒至り、仙人還つて人間に到らんと欲す。鬼王之を見、衣を著け鉢を取り、及び鹿皮囊、并に諸の衣服もて、愁憂して樂しまず、心に戀恨を懷き、捨來せしめんと欲せず、之に對するに涙出で、問はく、「何にか趣く所ぞ、此に在つて日日相見、以て娛樂を爲し、飢渴するも食を忘れ、父母に依るが如し。願くば一に意を止め、假止して發する莫れ」仙人報じて曰はく、「吾に四大有り、當に慎しんで將護すべし。今冬寒至り、果藏已に盡き、山水氷凍し、又巖窟の以て居止すべき無し。適、捨て去り人間に依處し、分衛して食を求め、精舍に頼止せんと欲す。冬寒を過ぎじりなば、當に復相就くべし、以て慍慍する勿れ」一鬼王答へて曰はく、「吾等眷屬、當に行いて果を求むべし。遠近募索して當に相給足すべし。願くば一たび意を屈し、慍傷して濟はれんことを。假使捨て去らば、憂感の戀、或は自ら全からざらん。假使今日、供具有ること無くば、便ち我身を以て道人に供上せん」道人之を見、感惟哀念して之を恕するに至心に、當に之を奈何にすべきと。仙人火に事へ、前に生炭有り、

【定光佛】デー
イ
バムカラ(Dipaṅkara)
然燈佛のこと

兔王心に念ずらく、「道人我を可せば、是を以て默然たり」と。便ち自ら身を擧げて火中に投ず、火大いに熾盛なり。適火中に墮せば、道人救はんと欲するも、尋いで已に命過せり。命過の後兜率天に生じ、菩薩身に於て功德特に尊く、威神巍巍たり。仙人之を見、道德の爲の故に身命を惜まざれば、愍傷して之を憐み、亦自ら剋責し、穀を絶して食せず、尋時に神を選して兜率天に處せり。」

佛、比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや、爾時の兔王とは則ち我身是なり。諸の眷屬とは今の諸比丘是なり。其仙人とは定光佛是なり。吾菩薩と爲つて勤苦することは是の如し。精進して懈らず、經道を以ての故に軀命を惜まず、功を積み徳を累ぬること無央數劫、乃ち佛道を得たり。汝等精勤して放逸を得ること無く、懈怠を得ること無く、六情を斷除すること頭燃を救ふが如く、心に所著無く、當に飛鳥の虚空に遊ぶが如くすべし。」佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛說無懼經第三十一

昔、人有りき。作性仁賢に、經戒を修奉し、精進して徳を守り、每性自ら剋し、行じて過惡無く、一身に遵行して天下の則爲り。行來の四輩は、自意に憾を休め、行正しくして迷はず、布施持戒、忍辱精進し、一心智慧に、怖望する所無し。法を以て自ら衛り、行來の同學に、異計有ること無し。若し法會有らば、輒ち往いて經を聽き、以て厭倦せず、

佛の功德を念ず、如來至眞等正覺、明行成爲善逝、世間解、無上士道、法御天人師、爲佛世尊は、弘恩を流布し、法の義を敷じ、唯無畏を志す。法は本柔潤に、法香は普く薰じ、十方悉く聞ゆ、惡を去り善に就き、居家は穢れ爲り、出家に弊無し。志常に法を思ひ、法を以て務と爲し、勤めて經法を誦すること、猶し甘露を服するが如し。法を道業と爲し、療治する所多し、法を橋梁と爲し、諸の往返を通ず。法を舟船と爲して、諸の末度を度し、法を日月と爲して、晝夜に照明し、諸の窈冥を去り、陰翳消除して無形を觀る。又聖衆を信ず、衆中の學者は、猶し衆流の大海に遊ぶが如く、聖衆の中、或は道跡を得、或は往來を得、或は不還を獲、或は無著緣覺果證を成じ、或は菩薩を行じて不退轉に至る、一生補處、無上正眞、亦是に由て生ず。此則ち無極なり。至深の道海は菩薩の奉ずる所、周旋往來して一切を度脱し、輿載せざる靡し。道慧は高妙にして、畢礙する所無し。其人毎に行せば、出入の四輩は常に三寶を宣べ、身自ら歸命し、并に一切を化し、常に三事を尊ぶ。一に曰はく、功德を興立して佛寺を修治す。二に曰はく、經を誦して道を念じ、典經を宣布す。三に曰はく、一心定意にして放逸無く、四等心、慈悲喜護を奉ず。空無相無願の法を行じ、善權を解了し、隨時に人を化して道意を發さしむ。其人年長なれば、命終らんと欲するの時、四輩衆學、及び諸親里、五種諸家、咸く往いて問訊すらく、「將に恐怖無く、安心して懼るる勿れ。」と。

其人即ち偈を以て衆人に答ふらく、

吾衆惡を棄捐し、諸の功德を奉行せり

今の身是を以ての故に、一も恐畏の心無し

猶し橋梁有り、柱強ければ上下堅きが如し

人の牽船に乗じて、度つて彼岸に至らんと欲するが如し

衆人之を聞いて、悉く共に欣悦し、之に代つて踊躍せり。其人命盡きて壽終の後、兜

率天に生じ、彌勒に稽首して不退轉を得、諸菩薩と經を講じ法を論じ、不逮を開化せり。

佛說五百幼童經第三十三

聞けることは是の如し。一時佛、婆羅奈國に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人及び諸菩薩と俱なり。

爾時、五百の幼童、行步遊戯せり。同心等意にして相結んで作爲り。日日共に行じ一體

にして異無し。一日見ざれば猶し百日の如し。甚だ相敬重せり。彼時に一日俱に行いて

遊戯し、江水に近き、沙の塔廟を興し、各自ら説いて言はく、「吾塔甚だ好し。卿吾に効

うて作れ。」と。其五百の童、善心有りと雖も宿命福薄なれば、時に山中に於て天大いに

卒に雨り、積水流行し、江水大いに漲り、流溢して外に出で、五百の諸童の幼童を漂没し、

水中に溺死し、隨流に墮せり。衆人之を見て歎惜せざる莫く、各心に念言すらく、「憐む

べし、憐むべし。」と。

父母聲を擧げて、悲哀して大いに哭し、自ら勝ふること能はず。死喪を求索すれども所在を知らざれば、益用て悲酷せり。時に衆人往反し、諸比丘、具に佛意に白す。

佛、衆人に告げたまはく、『各豫め之を知り、宿命を請はざれ。』諸の父母を呼び、之に告げたまはく、『恐るる莫れ、此兒五百世に宿命應に然るべし。今壽終すと雖も、兜率天に生じ、皆同じく發心して菩薩行を爲さん。佛、威神を放ち、其光明を顯し、其父母をして子の所在を見しむ。佛、時に遙に五百童を呼び來らしめたまへば、尋時に皆來り、虚空中に住し、花を散じて佛に供し、下つて稽首禮す。『自ら佛に歸命せば世尊の恩を蒙り、身喪亡すと雖も天上に生ずることを得、彌勒佛を見たてまつり、唯慈澤を加へ、諸の不逮を化す。』

佛の言はく、『善い哉、卿等快く計り、道の至眞を知り、塔寺を興立せば、是に因りて天に生じ、既に生天を得、彌勒を見て法誨を諍受せり。佛、爲に法を説きたまへば、威然として歡喜し、不退轉に立てり。各父母に白さく、『復愁憂すること勿れ、人各命有り。稽留すべからず、努力精進し、法を以て自ら修せよ。人の三界に在る、猶し繫囚の如し。得道して世を度せば乃ち自由を得、三寶に歸命し、三流を脱し、菩薩心を發さば、乃ち長久を得、四使水に遊んで四漬を度脱せん。』父母之を聞いて、悉く其教に従ひ、皆道意を發せり、時に諸天子、足下に稽首し、佛を遶ること三匝し、禮を作して退き、忽然として現せず、兜率天に還れり。

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説毒草經第三十四

昔一國に大叢樹有り、樹木天に參ずるも、折傷者無し。中に樹神有り、明に義理に達し、出入に節を行じ、衆と同じからず。四方より來趣するもの樹木を經歷す。時に樹神悦豫し、人の欲する所を恣にせしめ、採果薪草するも以て恨と爲さず。蔭涼の泉水は服する者大いに安し。時に一鳥有り、他方口に弊惡毒草を含み、此樹を飛過せり。因りて其上に投じ、適上枝に墮せり。毒其樹を侵し、尋いで枯るること半に過ぎたり。時に叢樹神、心に自ら念言すらく、『此毒最も凶なり。適樹上に墮せるに、須臾の間に今半樹枯れたり。日未だ中に至らざれば、未だ冥を盡さざるの頃に、是の如くば悉く枯れ、未だ十日を滿たざるに恐らく皆毀死せん。此叢樹木、當に之を奈何にしてか斯毒害を去るべきや。』時に虚空中に天神有りて曰はく、『是の如く久しからずして、明人有つて來り、道路を經歷して斯叢樹を過ぎん。卿、樹間に所藏せる金を取り、雇うて此毒樹を掘り、其根株を盡し、餘り有ること無からしめよ。爾らば乃ちよく安からん、設し爾らざれば、日未だ冥からざるの頃に毒樹悉く枯れ、悉く叢樹に及ばん。樹神之を聞き、因つて人形に化し、路側に住して之を待てり。已に到りなば即ち其人に語らく、『吾に金藏有り、當に以て相賜ふべし。願くば毒樹を掘り、其根を窮索せよ。』其人重金藏寶を得と聞き、即ち言はく、『唯諾

す」と。便ち前んで之を掘り、其根源を盡せり。樹神喜悅して尋いで金藏を與へたり。其人取り去り、家居して富を致せり。樹神歡然とし、毒難を離るることを得、衆樹長く安んじ、花果茂盛し、毒患を慮らず、諸罪皆散ぜり。

佛の言はく、「叢樹とは、謂く三界なり。樹神とは、謂く發意菩薩なり。鳥の他方より毒を取つて來るとは、謂く魔事衆想の無明に従つて致すなり。虚空神とは如來至眞等正覺なり。諸の學者をして魔法に従はず、當に善友菩薩大士修同志者に順つて、乃ち三垢衆勞の厄を抜くべからしむ。樹を掘り根を盡すとは、謂く姪怒愚癡の冥を消すなり。設し爾らざれば三處に溺在し、罪蓋自ら覆うて威勢有つて衆生生死の惱を拯濟すること無し。藏を賜ふを得とは道法藏を謂ふ。菩薩大士展轉して相助成すること、猶し萬川流の大海に合するがごとし。樹神欣然として、悉く憂患無く、還つて樹に處すとは、以て能く無所從生大哀法忍を逮得し、因つて三界に往いて廣く一切を度し、寶喜樂を得。家居して富むとは、以て總持を得、六度無極し、三十七品あり、四等心を修し、四恩十力、相好四無所畏、諸根寂定に、無限寶を爲し、道富無量なり。家に還歸すとは、本淨眞道の際に解歸するなり、佛身を示現し、廣く道化を宣べ、十方を開度せば、恩を蒙らざる靡し。」

佛說鬘論經第三十五

昔一鼈王有り、大海に遊行して周旋往來し、以て娛樂を爲し、時に海邊に出でて水際に

【四等心】 慈悲喜捨の四無量心。
【四恩】 父母恩、國王恩、衆生恩、三寶の恩。
【十力】 知覺處非處智力、知三世業報智力、知諸禪解脫三昧智力、知諸根勝劣智力、知種種解智力、知種種

界智力、知一切至
所道智力、知天眼
無礙智力、知宿命
習氣智力、知永斷
【四無所畏】一切
智無所畏、漏盡無
所畏、說障道無所
畏、說盡苦道無所
畏。

【六畜】馬、牛、
羊、豕、犬、鷄。

臥す。其身廣長にして邊各六十里。而も其上に在り、時を積み日を歴るも、陸地に寐息して轉移せず。

時に賈客有り、遠方より來り、遙に視て之を見、謂く、「是れ依るべきの水邊好處高陸の地なり。」と。五百の賈客、車馬六畜、數千頭有り。皆止りて頓止し、飲食を炊作せんとし、薪を破し火を燃し、諸の牛馬驢駱駝を飼ひ、行來臥起せり。時に於て鼈王、身火焼に遭ひ、救ち擾動を作し、因て即ち身を移し、馳せて大海に入り、東西に遊走するも火害息ます。賈人之を見て謂うて地移ると爲す。海水流溢せば悲哀呼嗟し、「今定んで死す、當に之を奈何にすべき。」と。鼈身苦痛なれば、復忍ぶこと能はず、因りて其身を没して大水の中に入り、衆人を溺殺し、失馬六畜、皆共に併命せり。

菩薩時に諸弟子に告げて曰はく、「喩を假りて譬を引き、以て其意を解すなり。遠來の估客とは三界人を謂ふ。五百の群衆とは、謂く、五陰六衰、諸入の難なり。鼈身廣長に各六十里とは、二六に牽連する十二因縁は、輪轉無際にして、五趣に周流し、一も解息無きを謂ふ。火を燃し炊作して食具を爲すとは、三毒熾盛にして情欲の發興するを謂ふ。鼈馳走して大海水に入るとは、十惡を犯し、三惡地獄餓鬼畜生の中に没溺して、言ふべからざるが若きを謂ふ。是故に如來は、其聖德、無極の大慧を降し、生死に往返し、危厄を救濟す。罪の覆蓋する所、盲冥にして解せざれば、法耀を顯示し、心をして開闡せしめ、咸く無上正眞の道意を發さしむるなり。」

佛說菩薩會爲鼈王經第二十六

昔菩薩、曾て鼈王爲り。大海に生長して諸類を教化せり。子民群衆、皆仁徳を修し、王は自ら正を奉じ、四等心、慈悲喜護を行じ、衆生を愍むこと母の抱育して赤子を愛するが如く、海中を遊行して不逮を勸化し、皆安からしめんと欲す。衣食充備せば飢寒せしめず。其海深長にして邊際限り難きも、而も悉く周至して更歴せる靡く、以て危厄を化し、衆罪を索めしむ。

時に於て鼈王、海を出で外に於てし、邊に在りて臥息し、積んで日月有り、其背堅慘なること、猶し陸地高慘の土の如し。賈人遠來して之が高好なるを見、因て其上に止り、薪を破り火を燃し、飲食を炊作し、其牛馬を繫け、莊物積載し、車乘の衆諸は皆其上に著せり。鼈王之を見るに、火もて焚燒せられ、其背を焚炙し、車馬人從つて咸く其上に止れば、困み言ふべからず、趣いて水に入らんと欲するも、衆賈を害し、爲に不仁に墮し、道意を違失せんことを畏る、適強ひて忍ばんと欲するも痛言ふべからず。便ち權計を設けて海の淺水に入り、自ら其身を漬けて火毒を除伏せば、衆賈を危からしめず、兩ながら違する無からしめ、果して意念の如し。輒ち方計を設くるに、衆賈恐怖し、海水漲り、湖水卒に至れば吾等定んで死なんと謂ひ、悲哀呼嗟して、諸天釋梵四王日月神明に歸命す、「願くは威徳を以て唯救濟せられんことを。」と。

鼈王然るを見て心に益之を愍み、因つて賈人に報ずらく、「慎んで恐怖すること莫れ、吾、火焚を被るが故に捨てて水に入り、痛を息めしめんと欲す。今當に相安んずべし、終に相危せじ。」と。衆賈之を聞き、自ら以て欣慶し活望有るを知り、俱時に聲を發して、「南無佛」と言ふ。鼈大慈を興して還衆賈を負ひ、移つて岸邊に在れば、衆人脱するを得て歡喜せざる靡く、遂に鼈王を拜して其徳を數すらく、「尊は橋梁爲り、多く過度する所あり、行は大舟爲り、載せて三界を越ゆ。設し佛道を得ば、當に復生死の厄を救脱すべし。」鼈王報じて曰はく、「善い哉善い哉。當に如來と言ふべし。」各自別去せり。

佛の言はく、「時の鼈王とは我身是なり。五百賈人とは五百の弟子、舍利弗等是なり。宿命を追識して弟子の爲に説き、咸く徳を修せしむ。」

佛說毒喻經第三十七

昔一家有り、家喜んで毒を行す。一たび毒を行じ已つて家中富を得たり。宿命の罪福自ら其を然らしむるも、一國之を惡み、敢て往來して與共に從事せず、危害せられんことを畏れて一國之に遠ざかる。行いて子婦を求むるも肯て與ふる者無し。各各相合すらく、「此行毒の家は世の最惡なり。義理に順はず、人命を害せんと欲す。設し與に婚姻するも、行毒に處無ければ、反來して人を危くせん。是故に之を遠ざくること、猶し劇賊を離るるが如し。賊の人と鬪ふや、手拳相加ふるも尙強弱有り。行毒の家は默然以て人に與ふれば、

人卒に此害を被り、命を救ふべからず。」と。

咸く共に知らしめ皆之を遠離せば、與に従事する無く其人困極し、遍く子の婦を求むるも、肯て與ふる者無し。因て他國千餘里の外に行いて、其子の婦を求む、其人の家當めば既に復豪貴なり。婦の家は貧乏にして且復貴からず、彼家の富めるを見て貪りて其女を與ふ。毒を行ぜざるが故に、盃財物を入れ、尋いで婦を迎へて來る。在家中、耗損諧はざれば、當に毒害を行悉く備り、婦禮を失せず。出入節に應ず。時に其家中、耗損諧はざれば、當に毒害を行じて乃ち富を得べきのみとし、姑嬢姑に勅し、其をして毒を行じ某人を害殺せしむ。吾家の木業、自ら應に其れ然るべし。」と。婦聞いて愁憂し、姑嬢に白して曰はく、「我家慈を行じて、初より加害無し。行毒に任ぜざれば、死死すとも犯さじ。」と。姑嬢罵詈するも肯て受教せず。因て毒神に語らく、「今此婦を取れども、毒藥を行じて以て人に加害せず、而も肯て従はず、當に之を奈何にすべきや。」毒神答へて曰はく、「吾當に之を化して教に違せざらしむべし。」と。

毒神便ち往き、化して毒蛇と爲り、來つて其婦に越く。其婦恐怖して所至を知らず。或は頭上に現じ、食すれば其前に現じ、飲めば器中に現じ、臥せば床上に現じ、行歩すれば後を逐ふ。其婦恐怖して所到を知らず。癯瘦骨立して飲食すること能はず、毒神之に勅して毒藥を行ぜしめ、乃ち相置くのみなれば、窮困して計無く、之を可して教に従ふ。

時に本土比舍に、人有つて此國邑に到り、其女を見るに身癯瘦して安からず。以用て愕

然として、「何が故に是の如きや。」と。女具に意を語らく、「還つて我家に到りなば、父母に宣白して疾く我を迎へしめよ。爾らされば載ち死せん。」と。人還つて具説するに、父母之を聞いて愁感憤憤たり。父は車馬を嚴にし、疾行して女を迎へんとし、其郷土に到り、具に姑嬢に諭すらく、「女母悲泣して夙夜に女を思ふ。故に遣して之を迎へ、當に相見るを聽すべし、久しからずして來還せん。」と。姑嬢聽去し、父、女を載せて還る。便ち姑嬢に語らく、「卿の家は毒を行ぜば、吾汝が女を奪へり。復相與へじ。設し共に諍はば、自ら官法有り、應に爾るを得べし。此は是滅門の憂なり。肯て聽さざる者なり、行毒の事を棄てなば、乃ち相て婦を還さん。」夫婦共に議すらく、「此婦端正なること世の希有なり。之を棄つべからず。寧ろ毒業を棄てん。又官家に聞えなば、便ち相危害せん。」便ち毒業を止め其と約誓し、敢て復犯さず、毒神を還棄し、家中遂に安し。

其毒神とは四魔を謂ふ。行毒して富を求むるは、諸の魔天、惡鬼神の輩を謂ふなり。日夫婦を迎ふるも、國中の人民肯て與へずとは、又其人の魔の教に従はざるを謂ふ。婦を迎ふとは、行いて他方に到り求めて以て人の爲にするなり。便ち取つて婦を得とは、染法を謂ふ。教へて毒を行ぜしむるも言に従はずとは、魔を覺知して五陰に墮せざるなり。人を還歸せしめて父母に語らしむとは、般若善權の教に従ふを謂ふなり。父の執つて將歸すとは本無に従ふを謂ふなり。其女智をして毒を止めしめば乃ち女を與ふとは、三毒の樂安想を去り、四等を求應し、六度無極善權方便に因て、一切三界を度するを得、正眞無極の

【般若】 プラッシュ
ニヤー (Pratin) 智
慧のこと。

慧に至るを謂ふなり。

佛說誨子經第三十八

凡人有り。父早く命過せば、少小にして孤寡、獨り母と居せり、未だ教勅を被らざれば、出入節ならず、禮教に拘らざる、先聖が典籍の教を違失するも、肯て學問して經法を諳受することせず。唯、愚伴迷惑の衆を以て、以て徒類と爲し、嗜酒博戲、高坑華飾、有表無裏、情欲を放恣し、嘔天雅歩し、以て孝順せず。修德經心あらば當に用て身を立つべきも、身に衆惡を犯し、口に麤麁を言ひ、心に毒害を念じ、所生親の遺教を念ぜず、唯非法亂行を以て業と爲せり。母甚だ之を患へ、因て教勅して其至密威儀法節を示し、心行を改め、身を慎み、口を護り、先聖の典を奉じ、其祖父所生の則を修し、世尊無極の道を敬受せしめんと欲す。

因つて慈意を以て妙誨を演出し、而して子に告げて曰はく、

子常に柔和を行じ、伴を結んで善友に従ひ
 恒に宣喜勸助して、長く正法の化を修せよ

子又母に問うて曰はく、

若し常に柔和を行ぜば、何を以て爾りと爲すや
 設し善友と結ばば、何の用か増益を爲すや

假し恆宣勸助せば、何ぞ此義を修すると爲すや
長く正法化を修せば、何の所にか施を加ふる有りや

母、子に告げて曰はく、

若し常に柔和を行ぜば、衆人の愛敬する所たり

設し善友に結ばば、堅住して能く動く無し

恆宣勸助せば、大財富を獲るを致さん

長く正法化を修せば、壽終して天上に生ぜん

子、母に白して曰はく、「善い哉、親教。其誨は無上に、其法は無限に、巍巍として量り

難く、稱戴すべからず。吾の愚冥なる其日久し。恩に背き、僞に向ひ、至眞を識らず、

容色に迷ひ、種姓に惑ひ、自ら謂ひて才智ありとし、不明を明と謂ひ、不達を達と謂ひ、

尊卑を別たす。親の明誨あるも善を賤し、み悪を貴び、孝養を惟はず。慈親の徳あるも厚を

捨てて薄に就き、愚伴を侶と爲し、遂に是れ癡惑の日の甚しさを致さしめぬ。親化を蒙

るに頼つて顯すに慈仁を以てし、懸澤に垂流せば、乳養の本、轉興隆ならしめ、十方に通

じ、啓受頂奉して敢て遺忘せじ。」

子、稽首して謝し、親命を修行して終始違する無し。子、法の如く進み、常に柔和を行

じ、一國宗べり、善を擇んで友と爲し、能く侵すもの無し、恆に勸助を行じ、離別を合偶

し、鬪諍を和合し、大いに供遺を得、財寶無量なり。稽首して佛に歸し、五戒を奉受し、十

善を修行すれば、諸天衛護せり。國王之を聞き、召して大臣と爲す。王、之に告げて曰はく、「朕、德行は一國之を悦ぶと聞けり。故に以て相命す、國に良臣無し。唯良輔爲らば、士を清寧ならしめ、四國德に歸し、爾れば乃ち顯榮せん。其人曰はく、「諾す。敢て聖に違せじ、唯恐らくは薄德なれば功教に副はざるを、慚愧と爲すのみ。聖教に違負せば黎庶怨望せん、自ら難しとする所以なれば、敢て命に順はじ。」王曰はく、「仁が言行舉動進止を觀るに、果して能く之を辨ぜん。故に相召すのみ。」と。其人默然たり。立てて大臣と爲す。王復告げて曰はく、「某許國王は本時、吾と親親無二なり、猶し一體の如し、傳口者有り。兩頭相闘ひ、身相失はしむ、年月時久しく、各爾く廢礙せり。能く解する者無し。卿、身躬自ら往いて和すること故の如くならしめんと欲す。當に重く相して財寶重位を賜ふべし。」其人曰はく、「諾す。」と。因て家財を取り、美饌を供作し、又寶物を齎して往いて彼國に詣り、跪拜陳謝すらく、「素自ら閑塞なるも天潤を被蒙し、王の爲に使用する所なり、此飲食金銀珍寶を遣して以て大王に貢す。前者謬誤せば、舉動當らず、相に聖意を失うて、從來闊別して年載を積累せり。慚愧羞耻し、踧踖顔無し。故に貢遣を遣す。願くは殃咎を恕し、其罪過を原したまへ。其王之を聞いて心中欣然たり。亦返つて已を責むらく、「吾久しく意有つて和解を得んと欲するも、能く發する者無し。彼をして意を興さしめ、先來して相謝せるは、是吾不逮の致す所なり。」と。便ち手に筆を執り、書を作つて之に報ずらく、「惟れ別れて載を歴、言面するを得ず、毎に舊好を思ふ。何の口懷を捨てて中間隔絶せる

は、不及の致す所なり。忽拊を見ざるに、復賢臣を遣し、美供環琦もて、以て相謝す。尅して來意を抱き終始忘れず、願くば一たび同會し、及び久迥を散せん。今珍琦を寄す。是身の所有なり。貴に微心を致し、言面乃ち叙す。」と、彼王之を得、歡然すること無量なり。尅期會日し、快く共に相娛む。一本所失を察するに、蓋、言ふに足らず、傳者の過差が乃ち此患を至せり。以て比國の爲に友親意厚し、急緩相救はん、自ら大臣を遣す、名計すべからず。」と、寶もて其位を増益せり。

阿難佛に白して言さく、「母の至教より能く大なるは莫し。」と。佛の言はく、「至れる哉。」復佛に問うて言さく、「將來の世、皆此教を承くるや。」佛の言はく、「從と不從と有り。所以は何ん。將來の世、人民悖亂し、惡を貴び善を賤み、情意を放逸にし、臣は君を害せんと欲し、子は二親を殺し、弟子は師を危くし、弘德を念ぜず。乳養の恩、其れ没せしめんと欲す。獨り奉事を見るも其師を嫉妬すること猶し怨家の如し。罪焉より大なるは莫し。所以は何ん。弟子後世には、前に在らば陽供し、後に在らば攻めんと欲す。心與に同じからず。師、天下に出でて道化を宣傳し、一切を度脱するも反つて之を憎惡するは、罪中の罪なり。喻を爲すべからず、後世の徳人は時時有るのみ。天下に樹多きも、香樹は希有なり、香草は尅に生ず、少小の山地に金寶を出すのみ。好人の徳を行するも亦復是の如し。惡人行する時には伴黨相隨ふも、眞を識る者は少し、彌勒佛の時は徳人乃ち多く、善を貴び惡を賤み、偏黨有ること無し。道德は盈盈として稱量すべからず。修徳無上にして罪殃を

【三乘】聲聞、緣覺、菩薩をいふ。【三毒】貪欲、瞋恚、愚癡をいふ。

爲さず。親に孝し君を敬ひ、師長を奉承し、三寶に歸命し、三乘興隆し、三毒消索し、所
度無量に、皆道を得しむ。阿難之を聞いて悲喜交集る。『將來末世、乃ち此患有り。如か
じ、山野愚民癡人の、此輩に勝るる者の、能く去就進退の宜しきを知るには。』と。
稽首して退きぬ。

佛說負爲牛者經第三十九

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十
人と俱なり。及び衆の菩薩あり。

時に佛、明日に衣を著け、手に應器を執り、城に入りて分衛したまふ。時に遠方の民、
一大牛を將ゆ。肥盛にして力有り、此城中の人に賣與せり。城中の人買うて以て之を出
し、以て之を殺さんと欲す。城門中に在つて佛と相遇ふ。其主牛を見るに、既に大に多勢
なり。犇突を畏るるが故に、十餘人に請ひ、牛を將ゐて共に行く。牛遙に佛を觀、心中に
悲喜し、鞞を絶して馳逸す。數十人救はんとす。救ふも制すること能はず、走つて如來
に趣く。如來則ち本の宿命を知憶したまふ。阿難之を見、前んで搏せんと欲するのみ。
之を一面に逐ふ。如來に觸れんことを恐るればなり。一切の衆人も亦恐懼を懷き、來つて
佛を傷けんことを畏る。佛、阿難に告げたまはく、『之を來るを聽せ。之を呵することを得
ること勿れ。』と。牛徑に前んで佛に往趣し、前の兩脚を屈して而も佛足に鳴く。涙出で

て交横し、口に自ら演言すらく、「唯然り世尊。加ふるに大哀を以てし、危厄を救濟し、此難を脱せしめたまへ、今是れ其時なり。大聖は遭ひ難し、億世時に有つて出づる所以の者は衆生の爲の故なり。唯弘慈を垂れ、一たび濟拔せられんことを。」佛の言はく、「善い哉。甚だ感哀すべし。意の迷へる人は乃ち斯患に値ふ。」

阿難、天龍鬼神人民を従へ、愕然たらざる莫し、甚だ所以を怪しみ、畜生の類の自ら天尊に歸すと。阿難長跪し、前んで聖尊に問はく、「此牛佛を見て何が故に自ら歸せるや。本末云何。」佛の言はく、「乃往過去久遠世時に轉輪王有り、四天下に王たり、千子七寶あり、治するに正法を以てし、萬民を枉げず、天下太平、人民安寧、五穀豐盈なり。又四德有り。民を視ること子の如く、民の奉ずる猶し父のごとし。沙門梵志、長者人民、啓親せざる莫し。身未だ會て病まず。永く安寧を得。四域に徳を宣べ、十方に徹す。時に轉輪王、四方に遊觀し、還、宮に歸らんと欲す。時に古世の一親親人の、而も債主の爲に拘繫せられ、縷在して樹に著き、去るを得ざるを見る。時に轉輪王、七寶侍従の停住して進まず、之が所以を怪しむ。遙に故舊の人の爲に拘せられ、五十兩金を負うて、去ることを得ざるを見る。聖王之に報すらく、「之を解して去らしめよ。當に卿が百兩金を倍すべし」と。其人自して曰さく、「吾復轉じて某に百兩金を負はせ、當に以て之を償ふべし。捨置する」と能はず。聖王即ち諸の臣下に勅し、宮に到つて其百兩金を與へしむ。臣下言はく、「諾す」と。即ち債主を解して家に還歸することを得たり。其人數數、王宮の門に詣つて

金を求むるも得ず。債主之を求むれば避けて處を知らず、遂に生死に在つて周旋往來するも、無數の劫に所負を償はず。今世に至つて此牛中に墮し、所債は賣る所の數千兩金なり。故に來つて佛に歸す。宿縁の牽く所なり。」

佛、阿難に語りたまはく、「時の轉輪王とは則ち我身是なり。其債主とは此牛是なり、佛は聖王爲れば、之を保つて償を爲すも、意に之に與へざれば、故に來つて佛に歸して債を求索せり。佛、牛主に告げたまはく、「佛、卿が爲に分衛を行じて倍償せん。」牛主肯てせず、還、牛を得んと欲す。佛、復重ねて告げたまはく、「吾、牛身の斤兩輕重に稱へる、若し千斤の金を與へん。故に肯てせざれ。」時に釋梵天俱に來下し、又手して佛に白さく、「佛、分衛したまふこと勿れ。得んと欲する所の金萬千億兩は、吾等之を致さん。」と。

兩牛皮を布き、釋梵四王、金寶を積累し、兩牛皮に満てて爾乃ち各罷む、牛を將ゐて祇洹中に到り、其中門より入り、佛身及び聖衆形、諸菩薩の徳を觀察するに、巍巍無量に、光光堂堂たること猶し星中の月の如し。威神照らすこと遠く、稱計すべからず。因て時に思惟し、佛法衆を念じ、七日命盡し、忽ち天上に生ず。尋いで憶うて自ら宿命を世尊の功徳を織り、來つて人間に還り、華を散じて佛を供し、其恩徳を報じ、佛足に稽首せり。佛爲に經を説きたまへば、即ち無上正眞道意を發し、輒ち立ちどころに不退轉地に在り、無生忍に従ふを得、乃ち天上に還れり。

佛說光華梵志經第四十

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆と俱なり、千二百五十の菩薩、無央數人ありき。

【維衛佛】ギパンン(Vipassin)毘婆沙佛のこと。過去七佛の第一。

【乾香和】カンダルム(Kandharva)

時に衆人無央數千、皆來つて集會し、佛所に在り、悉く鬚髮を下し、行じて沙門と作り、各自ら五百の群從と道德を修治し、精進懈らず、神通を成得し、生死の根斷じ、普く道證を獲、十方に周旋し、衆生を濟度せり。阿難、佛に白さく、「此等の衆學、宿し何の行有り、本何の徳を修してか、乃ち此譽を致し、神通の慧、然も第一爲るや。」佛、阿難に告げたまはく、「乃往過去久遠世時に、劫數を経歷すること九十有一、維衛佛の時、國王有り、名けて旃頭と曰ふ。城を旃頭摩提と號す。爾時一梵志有り、光華と名く。博く衆經を學し、廣く法典を宣べ、義として達せざる無し。五百衆有り、侍從啓受し、數數、維衛如來に往詣し、經典を聽受し、群衆を誘化し、愚冥を開發し、正眞を勸示し、行じて沙門と作り、徳を修し業を爲す。時に彼國中に五百の營從あり、五百人を將ゆ、大臣群僚、亦沙門と作る。大長者有り、諸の群衆を化すれば、皆復家を捨てて行じて沙門と作り、奉行精進して禁戒を犯さざれば、命終の後、天上に生ずるを得、天上の壽盡きて人間に來生し、是の如く上下し、終つて復始る、九十一劫なり。此佛世に於て皆沙門と作り、悉く佛所に會し、佛の爲に禮を作し、退いて一面に坐す。諸天龍神、乾香和、阿須羅、迦留

尋香と譯す。乾闥婆に同じ。

【迦留羅】ガルド (Garuda) 金翅鳥と譯す。

【眞陀羅】キムナラ (Kinnara) 人非人と譯す。

【摩休勒】マホーラガ (Mahoraga) 大蟒神なり。

【三逆】三明に同じ、天眼、宿命、漏盡これなり。

羅、眞陀羅、摩休勒、人と非人と、來到せざる靡し。佛所に會し、足下に稽首し、選つて一面に住しぬ。佛、時に便ち笑みたまふ。

阿難、佛に問ひたてまつらく、「何の因縁あつてか笑みたまふ。至眞世尊は終に虛欣したまはず。唯其意を説きたまへ。」佛、阿難に告げたまはく、「此衆人、天龍鬼神の來會せる者を見しや不や。」答へて曰はく、「已に見たり。」

佛、阿難に告げたまはく、「維衛佛の時に、一大國有り、旃頭摩提と名く、王を旃頭と名く、皆大法を奉じ三寶に歸命せり、時に梵志有り、光華と名く、三達を總攝し、衆經に博

綜し、義として達せざる無し。維衛佛の十方を化し、天上天下、啓觀せざる靡きを見、五百の衆を誘ひ、佛所に往詣して沙門と作り、咸く經戒を受けたり。時に其國王、國を棄

て王を捐て、五百衆と亦沙門と作る。大長者有り、亦群從を化し、五百の衆は行じて沙門と作り、普く道化を受け、進んで神通を獲、四等心慈悲喜護を奉じ、九十一劫惡趣に歸せ

ず、天上人間に生じ、今人身を得ば、悉く來つて此に會ひ、亦普く出家し、行じて沙門と作り、經戒を啓受し、皆道證を得たり。知らんと欲するや。爾時の所行の梵志は豈異人

ならんや。斯觀を作すこと勿れ。則ち吾身是なり。國王人民、及び大長者の衆、皆是れ維

衛如來至眞と同時の學者なり。彼種る、此に獲る、功唐捐ならず。皆自ら之を得たり。」

佛、是を説きたまふ時、無央數人、皆無上正眞道意を發し、時に應じて不退轉地に立ち、

一生補處、亦不可計なり。羅漢を成ずるを得るも亦復是の如し、佛、是を説きたまふ時、

歡喜せざる莫かりき。

佛說變誨喻經第四十一

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆と俱なり。爾時、一の居士有り、世の苦患を厭へり、萬物は非常なり。身の所有の財物は幻の如し。天地に寄居すること、猶し過客の一として食るべき無きが如し。唯道の眞正のみ、永く常に存すべし。因つて便ち出家し、行じて沙門と作り、精進懈らざるに、志本達せず。則便山に入り、山中に修行し、夙夜に廢せず、身命を惜まず、布施持戒し、忍辱精進に、一心智慧もて守志動ぜざるも道證を得ざれば、心變悔して還つて白衣と作らんと欲す。一學道年を積み、勤務して休まざるも、然も心冥冥として所趣を知らず。本人間に在りしに、數説議を蒙り、口舌流盈せるに、今山中に在つては復所獲無く、進退宜しき無く、所湊を知らず。衣を脱し還つて我業に就くに如かざるも、猶豫して未だ定まらず。」

時に山神樹神、之を視、其功夫の、方に成就せんと欲するに、反つて家に還らんと欲し、志取穢に在るを惜み、之に代つて恨恨たること、喻を爲すべからず。因つて則ち比丘尼身を化作し、冀くは亂意を化し、道心を發し、其志を堅固ならしめんと欲す。其比丘尼に、身に珠寶を著け、面色光榮たること世の所有に非ず、復女人を現するに、顏貌端正にして色像第一なり。姿耀焯燁として衆類の逮ぶ無し。具に相謂つて言はく、「卿、比丘尼、

【十善】
 不偷盜、不殺生、
 不妄語、不兩舌、
 不惡口、不綺語、
 不貪欲、不瞋恚、
 不邪見。

何が故に身に寶瓔珞を着け、唇口妙好なること猶し赤眞珠の如くなる。比丘尼曰はく、「寶は幻化の如く、唇は彩畫の如く、端正なること膏に喻へん。何の食るべきか有つて、卿が今身の如くなる。色は端正なること猶し春華の如しと雖も、身若し果落ちなば久しく樹に著かず、四大合散し、正主有ること無し、唯心を本と爲す。三界中に在つては獨來獨去、一として隨ふ者無し。禍福の身を追ふこと影の形に隨ふが如し。三處皆空にして、一として頼るべき無し。罪の覆ふ所爲れば、五陰六蓋は心閉意塞し、三昧を解せず。比丘之を聞いて心即ち覺了し、審に言の如しと知る。四大を識別するも、本は因縁の合するなり。身を食つて自ら害し、本空を割判すること猶し寄居の如し。十方人を觀るに親疎有ること無しと。則ち心了意解し、諸漏盡くるを得、生死已に斷じ、悉く起分無し。出入自在に、垢墜に著せず、爾乃ち達知せり。山樹故き有り。化すること浮雲を除くが如し。樹神跪拜し、自ら辛苦を陳ぶららく、「三界に周旋し、五陰の覆ふ所たり。十二牽連し、忽始相因る。唯愍哀せられて此覆を救濟せられんことを」と。即ち爲に經を説き、心を開解せしむ。五戒を奉受し、十善を修行し、三塗を塞惡し、道心稍前み、遂に無極に至り、佛の正眞に入れり。

時に於て世尊、諸比丘に告げたまはく、「其本末を解し、執心當に堅かるべくんば、後悔を得ること無し。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛說馬喻經第四十二

昔^{むかし}長者^{じやうぢやう}有り、一好馬^{いっかうま}を畜^{たくは}たり、初^{はつめ}之^{これ}を得^とし時^{とき}、志操^{しさう}犇突^{ほんとつ}にして御調^{ごてう}すべからず。
適^{たたく}、被騎^{ひき}せんと欲^{ほつ}すれば前^{まへ}の兩脚^{りやうきゃく}を舉^あげ、跳上^{でうじやう}遊逸^{ゆういつ}し、四出^{ししゅつ}横走^{わうしやう}して徑路^{きやうろ}に從^{したが}はず、溝^く渠^きに入り、樹^{じゆ}、牆^{せう}壁^{へき}を突^つく。其主^{そのしゆ}長者^{じやうぢやう}、甚^ただ憤恨^{ふんこん}を懷^{いだ}き、還歸^{えんき}して家^{いへ}に在^あり。鞭撻^{べんたく}酷毒^{こくどく}して水草^{よふさう}を與^{あた}へず、獨^{ひとり}り窮困^{きゆうこん}せしむ、飢餓^{きが}に心惱^{しんねう}むも、而^{しか}も自ら^{みづか}剋責^{こくしやく}して心中^{しんちゆう}に計^{けな}無く、何^{なん}の施^{ほどこ}すやを知らず、空中^{くうちゆう}に聲^{こゑ}出^いで、則^{すなは}ち之^{これ}に告^つげて曰^いはく、「其主^{そのしゆ}に順從^{じゆんじゆう}なれば、時^{とき}に患^{げん}難^{なん}無^なけん。」

時^{とき}に馬^{うま}の心解^{しんげ}く。明日^{あした}長者^{じやうぢやう}、故^{ゆゑ}に乗騎^{じやうき}して試^{こころ}み、以^{もつ}て鞍勒^{あんりやく}を著^つくるに、馬^{うま}即^{すなは}ち之^{これ}を受^うけて、復^{また}跳躍^{でうりやく}せず、騎上^{きじやう}に鞍住^{あんぢゆう}せば、亦^{また}爲^{ため}に態牽^{たいけん}せず、東西南北^{とうしゆうなんぺい}、行從^{きやうじゆう}して違^{ちが}はず。穀^{こく}を與^{あた}へ之^{これ}に飲^のませ、隨^{ずい}時^じ消息^{そくしき}して、飽滿^{ほうまん}して氣力^{きりき}を肥盛^{ひせい}ならしむ。後騎^{のちき}して行^ゆかんとすれば、轉^{うらたつ}遂^{つひ}に調柔^{てうじゆう}に、日^{にち}日^{じつ}成就^{じゆうじゆ}して、後^{のち}二子^{にし}を生^{しやう}す。數^{すう}歳^{さい}に至^{いた}つて長者^{じやうぢやう}之^{これ}に乗^{のち}するも、後^{のち}に順從^{じゆんじゆう}せず、跳踉^{でうりやう}横走^{わうしやう}し、韁^{かうけん}鞞^{だんげつ}を斷^た絶^{ぜつ}す。捶杖^{すいのしやう}を之^{これ}に加^{くは}ふるも以^{もつ}て行^{ぎやう}を改^{あらた}めず。還歸^{えんき}して之^{これ}を餓^がせしめしに、乃^{すなは}ち己^{おのれ}が殃^{わざはひ}を思^{おも}ひ、食^{じき}するに臭草^{しゆうさう}を以^{もつ}てし、飲^のむに濁泉^{じやくせん}を以^{もつ}てするも、自作^{じざく}己^{おのれ}受^うす、何^{なん}んが復^{また}怨^{うら}む所^{ところ}ぞ。

夜^や行^{ぎやう}して母^{はは}を見^み、長跪^{ちやうき}して問^とうて言^いはく、「今^{いま}や大家^{だいか}に、獨^{ひとり}り憎毒^{ぞうどく}せられて水草^{すゐさう}を得^えず。撻^た鞭^{べん}甚^ただ酷^{こく}なり。母^{はは}獨^{ひとり}り高處^{かうじよ}して親感^{しんかん}を念^{ねん}せず、行來^{ぎやうらい}欣欣^{しんしん}として一身^{いっしん}に喜樂^{きらく}し、高望^{かうまう}遠視^{えんし}

すること猶し鴻鵠の若く、子孫が獨り此酷に遇へるを憂へざるや。」と。其母答へて曰はく、
 「是れ卿が身の過なり。何の怨責する所ぞ。長者勒を授け鞍を被らしめば、即便騎を
 受け、汝隨順して東西之に従はば、便ち愛せられんのみ。斯事極めて易し。而るに卿は
 之に反す。故に此殃を得たり。」と。子母の教を聞き、明日即ち従ふ。長者之を試みるに
 安然として之に順ひ、之に騎すれば身を授け、行かしむるに即ち行き、住せしむれば即ち
 住す。長者大いに喜び、馬即ち調良なり。飲食時に隨ひて母と異ること無し。
 假りて以て喻を爲すなり。長者とは佛を謂ひ、馬は學人に喩ふ。佛教を受けざれば、放
 心恣意し、道化に従はず、故に爲に説法して去就を知らしむ。跳踉走行し、制すべから
 ざれば、加ふるに捶杖を以てし、爲に五戒十善を演じ、天人中に生ぜしめ、罪者には示す
 に地獄、餓鬼、畜生、勤苦の難を以てし、三界の患は往來輪轉し、一として安かるべき無
 し。設し惡を犯さざれば、五戒十善乃ち之を聞化し、四等六度、神通の行、十方に在つて
 諸佛共に會し、三毒消除し、諸の陰蓋を去ること、其子の母に従ふが如し。長跪して問
 うて言はく、「前んで其師が所行の法則を聞かん。」師説くらく、「深淺の行は皆意有り、故に
 五戒十善の因を天人の爲に説く。空無相願、六度無極、四等四恩もて生死に在らず、滅度
 に住せず、乃ち正眞に入る。勇果の徒は神通乘に處して三界を周旋し、一切を度脱す。」

佛說比丘尼現變經第四十三

昔舎衛の城あり、城を拘薩と名く。國中に諸の蕩逸姪亂の衆有り。専ら凶惡を爲して徑路に隨はず、一國之と患ひ、以て酷苦を爲す。伴黨相追ひ共に惡逆を爲す。官家求取せんとするも馳走して得回し。

時に於て國中の諸比丘尼、俱に共に遊行し、樹下に精專なり。正道を思惟して心に懷を捨せず。衆の比丘尼の智慧第一なるを名けて差摩と曰ひ、神足第一なるを蓮華鮮と名く。各各德行有り、威神巍巍たり。時に天小熱なれば、俱に行つて洗はんと欲し、流水の側に詣り、凶衆遙に見て即ち惡心を生じ、姪意隆崇なり。以て之を犯さんと欲す。比丘尼の適衣被を脱し、水に入りて洗浴するを候ひ、尋前して衣を挈き、持ちて遠處に著し、牽いて之を犯さんと欲す。時に比丘尼、逆意を發せるを見、意中に愴然として之を慙みて愚と爲し、因て兩眼を脱して其掌中に著け、以て諸逆に示すらく、『卿が我を愛する所は、唯面色を愛するのみ。今我以て盲ひたれば、何の好むべき所ぞ。』復、腸胃身體五藏手脚の各異るを示し、棄てて一面に在り、凶衆に謂つて言はく、『好める、所在せりと爲すや。』逆凶此を見て忽然として恐怖し、世は無常に、三界は寄の如く、其身は化成にして骨血は不淨、貪るべき者無きを知り、尋いで衣被を還し、稽首して悔過すらく、『所作無狀、反逆無義なり、願くば其殃を捨せん。』

長跪叉手して各五戒を受け、將に佛所に至つて、地に稽首し、自ら其罪を責むらく、『盲冥無知なれば、迷ひ來つて日久しく、惡を作して罷めず。世世當に禍危を受くべきを

覺らず。今大聖の恩を垂れて救濟するを蒙り、乃ち比丘尼の威徳化眼に感じ、罪を去つて罪輕く、稍無爲に近し。」

佛の言はく「善哉、惡趣已に離れ、轉じて當に成就すべきこと、樹花枝の果實の以て茂るが如し。行も亦斯に従ふ。諸人欣然として求めて沙門と作り、佛即ち之を聽せり。正心を木と爲し、尋時に出家し、諸根を守護し、衆殃永く除こり、五蓋存せず、三毒消滅し、佛子孫爲り。以て生死を斷じ、自然の神通あり、爾乃ち佛の大恩を識別せり。」

【五蓋】心を蓋ふ五種煩惱の意、貪欲、瞋恚、俗慢、悼悔、疑の意。

佛說孤獨經第四十四

昔一人有り、幼少にして孤苦、獨一身もて居せり、廣田に種作し、益するに犁牛有り。五穀を得收し、乳酪醃餈、衆果菜茹、限量すべからず。遠近の諸食の者に供給し、往來して毎に窮困に與ふ。名徳流布して普く十方に通ず。時に衆喩を説けば、其意を解悟す。當に伴黨を得べく、獨りは諧ふべからず。衆人咸く來り、皆共に居止す。其人の邊に在るも居家遂に多く、更に城邑を立つ。婦を取り子を生子、子大いに衆多なり。父轉年大なり。諸子に教告すらく「當に施行すべく、身口意を護つて恩を布き徳を施せ。子各違錯して其教言に従はず。」父今已に老ゆるに、何ぞ寂然ならざる。妄りに所教有るも、誰か當に之を受くべき。」と。父、子の憫を得て、心に自ら念言すらく「吾本一身所豊なれば、廣く遠近に施し、下不逮に及ぶ。今諸子を得るも我身心を亂し、其教に従はず、子無きには如かず。」

佛の言はく、「人本神を立て、一身清明にして能く所益有り、正行を奉ずるも、強ひて所觀有り、本無を解せず、自ら有身を見る。因て五陰六衰の惑を生じ、反つて所迷を爲し、正眞に至らず。後三界は一切皆空と解せば、五陰悉く除こり、三毒自ら滅し、乃ち無上正眞の道に至る。」
佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

生經卷第四 畢

生

經

卷第五

西晉三藏竺法護譯

佛說梵志經第四十五

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、千二百五十の比丘と俱なり。

爾時、世尊、晨旦に衣を著け鉢を持し、舍衛城に入りて分衛したまひ、次第に食を求め、即時に轉行して梵志の舍に到りたまふ。時に彼梵志、遙に世尊を見たまつるに、威神巍巍として諸根寂定に、其心湛靜なり。諸根を降伏して復衰入無し。日の昇つて山崗に出づるが如し。月の盛満なる衆星に獨り明かなるが如し。帝釋宮の初利に處するが如く、梵天王の諸梵中に在るが如く、高山上にして大積雪の四遠に現するが如く、樹華の茂れるが如し。其心愴泊にして水の清きが如く、三十二相其身を莊嚴し、八十種好其體に遍布し、威神光光として稱限すべからず。之を觀るに日の如く、即ち座より起つて眷屬と俱に前行して奉迎し、佛足を稽首し、請うて別床に坐す。佛便ち坐に就きたまふ。時に梵志、梵志の婦、心に踊躍を懷き、若干の種食、香潔の饌もて手もて自ら斟酌し、供養極り無し。

飯食し畢訖れば鉢を挙げ手を洗ひ、更に卑桶を取つて、佛説の經を聽く。時に於て世尊、即ち梵志及び妻子僕從下使の爲に、經道を講説し、其心を開解し、其義を分別し、諸佛の法を、其本源に隨つて分別を演べ、布施持戒、忍辱精進、一心智慧もてし、病に應じて藥を與へ、尋いで而も心に苦習盡道を解せり。時に於て梵志妻子僕從下使、即ち座上に於て四聖諦に逮れり。要を取つて之を言はば、則ち天眼を得、佛法衆に歸し、五戒を奉受せり。是に於て梵志、即ち座より起つて佛足を稽首し、世尊に白して言さく、『大聖、恩を弘めて利義を現するを得、今日獲る所衆患を度す。皆是れ如來至眞等正覺の救濟したまふ所、猶し大雲の虚空に周くば、普く天下に雨らし、潤澤する所多きが如し。世尊は是の如く、常に大哀無極の慈を以て、廣く大法を説きたまふ。』

佛、諸比丘に告げたまはく、『汝等寧ろ梵志が今宣揚する所、口の所説を聞きしや。比丘、對へて曰はく、『唯然り世尊、已に見、已に聞きぬ。』佛の言はく、『今此梵志、諸の眷屬と與に皆大利を獲、是の如く具足せり。吾異世に於て、此梵志をして廣普を獲るを得しめたり。乃往過去久遠世時に、波羅奈城に一の尊者有り。名けて所守と曰ふ。是梵志の種なり。點慧聰明にして義理を識解し、卒對の辭あり、口言柔美なり。王の爲に敬せられ、常に王心に可へり。其國多く葡萄酒漿飲食の具行り。王及び人民、飲食快樂せり。彼時梵志、異の技術を作し、娛樂する所多く、王をして欣愕せしむ。王大に歡喜して、多く賜遺する所あり、其所欲を恣にせしむ。梵志王に白さく、『我當に家に歸りて、自ら其婦に何の志

求をか欲するやを問ふべし」王即ち之を可とし、梵志便ち還る。家に到つて婦に問はく、「我
 異術を興し、王をして歡喜せしめしに、我所願を許せり。汝何をか求むる所ぞ、誠を以て
 我に告げよ、卿が爲に致來せん」婦、梵志に問はく、「君は何をか願ふ所ぞ」其夫答へて曰
 はく、「我一縣を願ふ」其婦答へて曰はく、「縣邑を用て來れ。我願くは百種の璽路莊飾、
 臂劍步瑤の屬、種種の衣服、奴婢乳酪、醜醜飲食を得ん」時に於て梵志、復其子に問はく、
 「汝何をか求むる所ぞ」其子答へて曰はく、「我所願は歩行を用るす、車馬に乗じて王、
 太子、大臣と俱に遊ぶことを得ん」時に於て梵志、復其女に問はく、「何の志願をか欲する
 や」其女對へて曰はく、「我求むる所の者は、珠寶を得て以て自ら身を嚴にし、上妙の被
 服もて千女の中央にして獨り姝好なるを欲す。除の異願を以てせんや」時に於て梵志、又奴
 婢に問はく、「何の志求をか欲する」奴言はく、「車牛、覆田の耕具を得んと欲す」婢曰は
 く、「確磨を得て粟を舂き、麵を礎き、以て安きを得んと欲す。四大人食を得ざれば、則ち
 悦喜せず、以て自ら安きこと無し」時に於て梵志、還つて王所に詣り、具足して王の爲に本
 末を説く、此れ妻子奴婢の求むべき所なり。復偈を以て重ねて歌して曰はく、

大王願くば之を聽したまへ、所願各各異る

我家の心同じからず、婦は百璽路を索め

男は車馬乘を求め、女は珠寶飾を願ひ

吾前に畜ふる奴婢は、田及び礎磨を求む

時に於て王、偈を以て答へて曰はく、

汝の所欲に隨はん、則ち與に心に違せざれ

時に應じて梵志をして、皆歡喜悅を得しむ

其王皆以て賜ふこと、各各志願の如し

如意に具足を得たり、歡喜して一も恨無し

佛、比丘に告げたまはく、『知らんと欲するや。爾時の國王とは則ち吾身是なり。爾時の

梵志とは則ち今の梵志身是なり。其妻とは今の梵志の妻是なり、子は則ち子、女は則ち女、

奴は則ち奴、婢は則ち婢なり。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説君臣經第四十六

開けることは是の如し。一時佛、王舍城靈鷲山中に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人

と俱なり。

爾時、諸比丘、心に自ら念を興し、佛の威神を受くれば、諸天之を感じて未曾有を有た

り、是に於て世尊、常に慈愍を以てしたまふ。調達は而も反つて害意もて如來に向ふ。佛

大哀弘意を以て之を待たまふ。或は復比丘、而も此言を説くらく、一往者世尊、豈調達が

凶惡心もて詔害を懷けるを察知せざらんや。而も捨家して其頭髮を除き、而も沙門と作ら

しむ。或は比丘有り、各各議して言はく、『佛已に調達の凶惡心もて危詔を懐けるを預知したまへり。或は議して言ふ有り、『誰か調達をして頭の鬚髮を除いて、而も沙門を作らしめしや。佛、遙に之を聞きたまふに、諸比丘衆共に此事を議せり。便ち其所に到り、諸比丘に告げたまはく、『調達の凶惡なる、稱量すべからず、要を擧げて之を言はんも、言竟るべからず。』』

佛の言はく、『是の如く是の如し。其比丘、調達は常に害心を以て如來に向ひ、未だ會つて和悦せず。吾慈心を以て而も之を降伏せり。昔過去久遠世時已來量り難し。爾りしより以來、佛久しく之を知れり。調達は凶惡にして心に危詔を懐けり。吾慈心を以て而も之を降伏し、續いて知ること是の如し。故に沙門と爲し、善徳を建立し攝取せしめんと欲す。是を以て本と爲し、出家に由因し、縁て救護を得て計せんと欲す。調達は但に今世のみに吾の便を求めて、害心を懷き、吾常に至眞に、慈心弘普もて之を降伏するのみならず、乃往過去久遠世時に、勝計すべからず。波羅奈城に國王有り、號して大猶と曰ふ、法を以て國を治し、萬民を枉げず。王に大臣有り。密善財と名く。智慧聰明にして通ぜざる所無し。名徳超異し、世と同じからず。其性は吉祥に、殊妙和雅、安隱無患なり。常に慈心を懷いて感哀する所多し。志懷柔潤なり。其王は慈無く、釋子哀心あるも、志に慈を懷かず、常に人の過を伺ひ其便を得んと欲す。心に凶惡を懷き、一として善快無し。

時に於て彼王、密善財大臣と俱なりき。大猶王、大臣に告ぐらく、『一人をか食する所ある

り、何の所言を説いてか獲安する所多く、危害を致さずして長益を得るや、時に應じ偈を以て、而も歌頌して曰はく、

食と言と少くば獲ること多く、不忍は長大を得ん

忍辱は損過を致す。密善財云何とする

密善財大臣、偈を以て王に報じて曰はく、

大王是は瞋種なり、悲恨は心の所爲なり

無害無瞋怒なる、則ち正本の所行なり

王、復偈を以て問うて曰はく、

何を以てか安寐を得る、何の行か憂患無き

何を以てか一法に至る、密行は善財を致すや

賢聖何をか歎する所ぞ、至滅は能く憂へず

誰か能く此事を保ち、愁を除き無患ならしむるや

大臣、偈を以て答へて曰はく、

瞋を棄つれば安寐を得、悲を除けば憂患無し

怒は毒の本なり、大王當に知るべし、此は

聖賢知の歎する所なり。此に縁つて憂患無し

此義を以て王に答へ、忍辱行を嗟歎す

瞋恨を毀替す、此義を以て王に答ふ。

分別して降伏せしめ、雅より其便を得ず。

凶悪も加ふる能はず、之、平等の徳を立つるなり。

佛、諸比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや、爾時の國王大猶は則ち調達是なり。大臣密善財とは則ち我身是なり。以て佛道を得、具に本末を演ぶ。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛說拘薩羅國烏王經第四十七

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

爾時、世尊、明旦に衣を著け鉢を持し、城に入つて分衛したまふ。國王波斯匿に四大臣

有り、拜して四將と爲し、四部兵を合して他方小國を伐たんと欲す。時に於て四臣、遙に

世尊の衆と俱なるを見、即ち佛所に詣つて足下を稽首し、退いて一面に住しぬ。世尊これに

問ひたまはく、「諸仁者等、何の所湊をか欲する。」諸臣對へて曰はく、「王波斯匿は臣等を

遣し、行いて四部兵を擧げ、他國に詣つて小國を攻伐せんと欲す。唯然り、世尊。我等の

身は此國王の爲に興立する所多く、及び餘の衆勞あり。常に危命を畏る。今當に遠行すべ

く、行けば當に戰鬪すべく、攻伐する所有り。是の如く發行するなり。」

世尊讚じて曰はく、「善い哉善い哉、諸賢及び難く、所作及び難し。是を報恩と爲す。而も復有り。設し行少有なれば所作失はず、汝等の身、王の体祿を受くれば所作當に然るべし。此事佳善し。慎んで儀像を爲し、則ち正士を成ぜば、大神恩を報ずるなり。則ち反復有らん。諸賢之を聽け。但に今世に此國王の爲に興立する所有り、功効を成就し、所作及び難きのみならず、昔過去久遠世時に、沙竭國に、大いに諸の烏衆有りて、而も來つて集會し、其國に止頓せり。彼に烏王有り、名けて甘庶と曰ふ、八萬の烏に主たり。中に在つて獨尊なり。烏王に婦有り、名けて舊梨尼と曰ふ。時に於て壞驅す。阻惡食有り、心念是の如く、鹿王の肉を得て食せんと欲し、至誠して王に白さく、「此食を得んと欲す。今に於て我身、小しく此念を發せり。善柔鹿王の食を得て食し乃ち活きんと欲す。爾らずんば死せん。沙竭國王は、善柔鹿王の肉を得て之を食噉せんと欲し、獵者亦募つて行いて之を求め、之を捕へて將來せり」

時に於て烏王、其音聲を聞き、烏衆を合會す。「汝等當に行くべし。沙竭國王に、大善鹿王、形貌有り。須具夜と名く。其肉を得んと欲す」彼時に四烏、募に應ずらく、「吾等善柔肉を取るに堪任せり。國王を用ての故に、生命を惜まず、當に此事を辦すべし、餘烏をして我後を透うて行かしむる無かれ」時に於て四烏、數數往いて大衆の會所に至り、各自ら議して言はく、「何の方便を以てか而も之を取ることを得ん」

彼時其人國王の使者、往いて太子に告げて、烏の數來るを説く。則ち遣りて所逝至處

を守護せんとするも、願の如きを得ず。然る後復大鳥の衆を遣して須具の肉を求め、今現に此に在り。便ち彼に遊隨し、即時に肉を取り、之を擧げて去りぬ。時に國王子、大鳥衆を見、恐懼馳走し、還つて國王に白して具に本末を説く。國王之に問はく、「鳥の従來する所、乃ち此に至れるや。」太子白して曰はく、「我四鳥を見る、色像斯の如し。數數彼鹿苑に來至し、吾も亦數往けり。然る後四鳥來到せり。」

時に沙竭王、即ち外人に勅して捕へしむ。鳥師鷹を致して將來せしむ。四鳥之を見て、畏るること危命に在り、故に往いて取來するあり。即時に教を受けて輒ち遣す。鳥師應に往くべし、若干變を以て其所趣を觀、方便を造立し、羅を張つて鳥を捕へ、輒ち以て之を獲、生じて國王に上る。時に於て沙竭國王、其四鳥に問ひ、而も之を呵罵すらく、「汝等何が故に數此に來至して、吾境界を犯せるや。」四鳥答へて曰はく、「唯然り大王、我所樂に非ずんば願つて此に至らず。又王有り、名けて安住と曰ふ。八萬の鳥と俱なり、以て眷屬と爲し、之を尊師と爲せり。其婦舊梨尼、懷妊受胎して此阻極を發せり。而も以て惡食なれば、須具善柔鹿肉を食瞰するを得んと欲す。彼王遣來す。其君の教を受くれば身命を惜まず、自ら投じて沈沒し、而して謹教に奉ぜり。吾所願に非ざるなり。」時に國王聞いて未曾有を得、愕然として之を怪しむらく、「彼白らの食心もて此食を作すこと莫し。自ら王教を受けて此方計を作し、身命を惜まず、其君王の爲に驅命を投棄す。今の所爲、誠に所及に非ず。世に於て希有なり。俗人に求めんと欲するも此反覆有り。君父の教を受くるも

尙得べからず。泥んや鳥獸をや。其命を奉宣すること、及び難く及び難し。實に未曾有なり。」と。

是に於て諸鳥、王の爲に偈を説いて言はく、

唯願くば大國王、我を沙竭國に止めたまへ

我等が王は安住、八萬衆と俱なり

婦は舊梨尼と名く、善柔の肉を欲思す

是大王の鹿苑は具足して王食を爲す

我等國王の使なり。命を奉じて此に來至せり

君の敎命を受く、敢て自ら此に至らざるなり

是に於て國王、心に自ら念言すらく、「此事得難し、未曾有と爲す。」時に於て國王、諸鳥

に告げて曰はく、「汝が罪過を赦せば汝が所湊に在れ、常に解脫を得て拘制有ること勿れ。」

佛、諸臣に告げたまはく、「爾時の四鳥身を知らんと欲するや不や。今汝等四臣則ち是な

り。安住國王は今の波斯匿王是なり。今や國王諸兵臣吏、卿等の將ゐる所は八萬の鳥是な

り。爾時、脱することを得、危害を見ず。今も亦是の如し。」

佛説是の如くにして、四臣兵吏及び比丘僧、歡喜せざる莫かりき。

佛説蜜具經第四十八

聞けること是の如し。一時佛、舍衛國の給孤獨園に遊びたまふ、大比丘と俱なり。
 爾時、梵志、異道術に迷惑して佛法を信ぜず、佛教を亂さんと欲す。城中を行じて遙に
 佛の來れるを見、惡んで靚んと欲せず、竊に他舍に入る。『世尊瞿曇、我を見ること無きを
 得ん。』

時に於て大聖、慙傷して之を憐み、尋いで其所に到り、目前に住したまふ。避去を得ん
 と欲するも水く得ること能はず。又馳走せんと欲するも自ら致すこと能はず。佛所に來
 詣せり。彼時世尊、爲に經法を説きたまふに、尋時に歡喜して善心生ぜり。輒ち佛及び法
 衆僧に歸命し、戒禁を奉受し、佛を遶ること三匝し、稽首して退き、其家に還歸し、即ち
 應器を取り、中に蜜を盛滿し、兩手もて之を擎げ、佛所に來詣して奉上せんと欲す。佛、
 諸比丘に告げたまはく、『是鉢の蜜を取つて衆僧に布與せよ。』時に一鉢の蜜もて、佛及び衆
 僧、皆満足を得、鉢滿つること故の如し。即ち復佛に授く。佛、梵志に告げたまはく、『汝
 是蜜を取つて、大水無量の流に投著せよ。』梵志又何が故なるやを問ひたてまつる。佛の言
 はく、『水中の蟲蠶龜魚鼈に具足して、悉く其味を蒙らしめよ。』梵志教を受け、即ち水
 中に投じ、還佛所に至り、或は驚き或は疑ひ、踊躍悲喜す。時に於て世尊、尋いで以て欣
 笑したまふに、五色の光口より出で、上は梵天に至り、普く五道を照し周遍せざる靡し。
 還つて身を遶ること三匝、菩薩の決を授けては光頂より入り緣覺の決を授けては光口よ
 り入り、聲聞の決を授けては光臂肘より入り、上天の福を説いては光臍より入り、人身を

【龜】すつぽん。
 【鼈】うみへび。
 【蠶】すつぽん。
 或はどろがめ。

受くるを説いては光膝より入り、地獄餓鬼畜生を説いては光足より入る。

時に於て阿難、座より起ち、衣服を脱へ、右膝を地に著け、長跪叉手して佛に白して言

さく、『佛は妄に笑ひたまはず。笑へば會ず意有り。』佛、阿難に告げたまはく、『汝見たり

や。梵志の蜜を以て佛に奉り、比丘僧に布き、餘蜜を水に投ぜしを。』對へて曰はく、『唯

然り。』今此梵志、然る後來世二十劫を経るも惡趣に墮せず、二十劫を過ぎて當に緣覺を得

べく、名けて蜜具と曰はん、諸比丘對へて曰さく、『唯然り世尊、吾等悉く此梵志を見る

に、一鉢の蜜を以て饑益する所多く、而も緣覺を得ん。』

佛、比丘に告げたまはく、『是に於ける梵志は、但に今世に一鉢の蜜を以て饑益する所多

きのに非ず、前世の宿命も亦復是の如し。乃往過世、稱計すべからざるに、一婆羅門

有り、往いて閑居寂寞の處に入れるに、神仙有るを見たり。博愛する所多し。或は人有つ

て説く。『今此仙人は往古及び難し。當に往いて啓受すべし。』人有り、報じて言はく、『用

て此養身滿腹の種を見るを爲せ』と。爾時一仙人有り。五神通を得、心の所念を見たり。

即ち樹下閑居の處に於て、空中に踊在して其人の前に住せり。其人之を見て歡喜踊躍し、

善心生ぜり。即ち其家に還り、鉢に蜜を盛滿して之を奉授せり。時に仙人受けて虚空に飛

在せり。是施德に緣つて、後國王となり、名けて蜜具と曰ふ。正法を以て國を治め、國を

治むること年を積み、壽終の後、天上に生ずるを得たり』と。

佛、比丘に告げたまはく、『知らんと欲するや、爾時の五通仙人とは則ち我身是なり。爾

時の梵志は今の梵志是なり。爾時、蜜を施して天人の福を受け、是に縁て今世に亦復佛に施し、後縁覺を致せり。」

是に於て賢者阿難、偈を以て佛を讚すらく、

世尊は哀愍すること多く、自然に至誠もて度したまふ

諸天人世の爲に、衆の獄繫著を懷きたまふ

故に諸天世間尊と爲す、法に於て自在に法教を雨らし

歡悅の心を以て多く勸むる所あり、出家上天無數千なり

今無利に勝れて皆利を得、其悦心有つて佛に歸命したてまつり

恭肅慇懃に少薩を造らば、命壽の終るに臨んで趣安を見ん

爾時世尊、賢者阿難を讚じて曰はく、『善い哉善い哉、審に云ふ所の如し。復次に阿難、

若干の行を造つて乃ち所立を成す。佛は一切を救ふこと母の子を念するが如し。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説雜讀經第四十九

聞けることは是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘と俱なり。

爾時、一比丘尼子有り。家を捨て道を爲し、喜んで家家に詣り、諸の白衣と雜錯塵穢

し、行純一ならず、母數之を呵すらく、『爾するを得ること勿れ。行に節限有り。若し

法會有らば、經を講じ義を説き、乃ち行すべきのみ、效進して俗間の事を爲すことを得ること無かれ。父も亦之を呵するも、亦肯て父母の法教を受けず。人間に在りて家居造亂し、但惡人の不成就子と、共に相追隨せり。諸の兇人に遇ひ、共に之を搦捶し、手拳を加得し、今や水中に投げて、久しく乃ち置かんと欲するのみ。叫呼して脱するを得て捨てせり。諸比丘聞いて而も往いて之を救へば、家に還歸することを得たり。諸比丘衆而も往いて佛に白し、其本末を説けり。佛、比丘に告げたまはく、『此人但に今世のみ家居の教に隨はず、其行に迷惑するのみならざるなり。乃往過去久遠世時に、諸鳥巢有り、實して家居に近し。人數喜び探し、之を捕取せんと欲す。』鳥の妻、鳥に謂へらく、『人家に近く巢を作すを得ること無かれ。人を信すること莫れ。卿を取つて之に苦毒を加ふる無きを得ん。』其鳥之を聞き、捨てせんと欲すと雖も、心に戀戀を懷いて避去すること能はず。衆人數數、共に之に觸燒するも、故に捨てせざれば、衆人捕得して盡く其毛羽を掬ち荆棘もて頸に繫けり。天時に霖雨なれば泥溺して行き巨し。又飛ぶこと能はず、徐徐に自ら曳き、歸つて其巢に到る。

妻時に偈を以て、歌頌して問うて曰はく、

誰か皆毛羽を掬ちしや。今天復陰雨なり

荆棘を被つて鐵と爲せるに、而も戸を立つるは何をか謂ふや

鳥偈を以て婦に答へて曰はく、

我身吉祥なれば所縁有り、今に於て天時に大霖雨なり

汝促して戸を開いて我を惱ますこと無かれ。且食を持して來り我命を活かしめよ

其婦、偈を以て答へて曰はく、

我は所念の如く所造の如し。卿が纒哲する所は食る所多し

今凶厄に遭ふこと華を得るが如し。後方に當に更に其實を獲べし

我所頌亦受くべし。具足して醑を成じ醑酬を致す

此勤苦衆惱に値ひ已つて、當に屏猥處に詣つて閑居すべし

彼を去ること遠からず、一の神仙梵志道人有り。遙に其聲を聞き而も歌頌して曰はく、

惡罪果を觀されば、是に緣つて苦患に遭はん

故を以て罪を作すこと莫れ。將に大惱を受くること無からんとす

佛、諸比丘に告げたまはく、爾時の烏妻を知らんと欲するや否や。今此比丘尼是なり。

其烏夫は出家子の沙門と爲りて打擲を被れる者是なり。爾時の仙人は則ち吾是れなり。昔

日相遇へば、今世に相値ふ。

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説驢駝經第五十

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆と俱なり。

爾時、一比丘有り。新學遠來の客此國に至る。諸比丘に猗籌を求めんと欲す。諸比丘聞くも猗籌を與へず。『今子を觀するに、行具足せず、舉動不祥なり。將に此に於て損耗業を造ること無からんとす。』と。

爾時新學、猗籌を得ざれば、復餘處に詣つて猗籌を求索す。彼諸比丘、本末を問はずして速に猗籌を授けんとすれば、前の比丘聞き、即ち往いて問うて言はく、『卿何を以ての故に本末を問はずして便ち猗籌を與ふるや。』比丘答へて曰はく、『吾猗籌を授くるに、固より妄にせざる有り。當に我に奉事し、供養するに時を以てすべし。新比丘有り。安詳雅歩し、舉動暴ならず、入出進退に儀法を失はず。類佳人の如し。凶惡に似ず。』と。

主比丘獨り在つて出でず、新學比丘、復衣鉢を取り、主比丘を取つて搥捶榜笞し、地に就きて縛束し、猶其口を繋けて將に喚ぶ所無からんとす。人其聲を聞き、即ち其夜に於て馳進行走せり。天曉に向はんと欲す。諸比丘衆、適其聲を聞き、皆來つて之に趣き、其繫縛を解き、則ち其意を問ふ。時に彼比丘、本末爲に説き、比丘に語らく、『當に共に分布し行いて之を求索し、我に還衣鉢を得しめよ。』諸比丘答へて曰はく、『吾等卿に語れり。妄信を得ること莫れ。猗籌を與ふること勿れ、將に任せらるる無からんとすと。自在放恣なれば吾語を用ゐず。作すべき所のもの今自ら省るべし。』

時に諸比丘、具に世尊に啓す。佛の言はく、『諸比丘、此比丘は、但に今世に是凶人の爲に侵枉せらるる所、本末を知らずして妄信するのみならざるなり。所在相遇へば、輒ち所

侵を爲すなり、乃往過去に梵志有り。草驢駝と名く、瓦器を載して門戸を持する有り。道路を行くに遙に一奴を見、道傍に住せるに遙に梵志を覩たり。稍來つて之に近けるに、心に劫奪せんと欲し、之と相見る。梵志之を信すらく、「此人我を見、來つて我に奉事し、施與する所有らんとし、來つて我に親附す」と。

彼時に梵志、偈を以て頌して曰はく、

汝四衢に處すれば、顔貌に反覆有り

人未だ本末を知らず、選擇觀察せざるも

其道入此を觀るに、淨修して最法を行じ

衆の凶惡有ること無し、當に施して我に供事すべし

爾時、餘の梵志、道に共に偈に行き、皆共に謂つて言はく、「此人を信すること莫れ、將に卿を欺いて財物を擄奪する無からんとす」と。

偈を以て頌して曰はく、

梵志、趣いて人を見るを得ること無かれ、四衢路に於て妄信すること莫れ

其目を搖動せしめ面に理無し。定んで將に卿の物を奪はんとす

彼時に梵志、伴語を信ぜず、反つて威奴を信す。未だ所益有らざるに、佐助供養す。時に於て彼奴、夜半に向ひ、人の斷絶せるを見、即ち奔走して前み、梵志を擄捶し、脚膝を破傷せば、眼眩して地に躡し、其財物を奪へり。草驢駝梵志、所有を亡失し、又復其膝を

破らるれば、地に蹴れて啼泣すること猶し小兒の如し。怨を稱して呼嗟せり。時に一天有り、淨修梵行と名く、

偈を以て頌して曰はく、

其財を求むるは利に於てし、而も愍哀を行じ

懺悔而して自ら用ゐ、尊師の教に従はず

皆當に是患を得べし。彼梵志の苦の如きは

愚に従つて路を慎まず、罪を獲ること梵志の如し

佛、諸比丘に告げたまはく、『爾時の梵志草驢駝とは、今此比丘の新學比丘に猗籌を授くる者是なり。髡鉗惡奴なり。新比丘の心に惡を懷いて猗籌縁に依るは、是劫奪者是なり。』

彼等の諸異梵志は、今の諸比丘の彼比丘を難する者是なり。爾時の淨修梵行天とは今の吾身是なり。爾時相遇へば、今も亦相値ふなり。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説孔雀經第五十一

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘衆千二百五十人と俱なり。

諸比丘、悉く共に集會し、皆共に嗟歎し、心に世尊を念じて未曾有を得たり、『一人あ

つて世に興り、號して如來至眞等正覺と曰ふ、一切諸の外異學を毀壞したまへば、忽然として幽冥に、復光曜無し、未だ佛有らざる時、妙供養を致し、衣被飲食、床臥の具、恭事せざる莫し、自ら之に歸せる者も、佛の世間に現じたまへは、是等の類は、言誨行はれず。佛、道耳を以て、遙に比丘が共に講義する所を聽きたまひ、即ち其所に到り、諸比丘に問ひたまはく、『向には何をか論ぜるや。』諸比丘、具足して自ら啓説すらく、『我等集會す。平等正覺、適世に興り、諸の外異學、便ち没して現ぜず、忽然として幽冥に、復光曜無しと。』

佛、諸比丘に告げたまはく、『吾未だ世に興らざるに、外學熾盛にして、日月無く燭火を明と爲すが如し、日月適出づれば燭火明無し。今佛世に興り、異學皆没し、復威曜無し。獨り佛の慧明のみ、炤らさざる所無し。但に今世に殊異行有るのみならざるなり。前世も亦然く未曾有法あり。乃往過去久遠世時に、一大國有り、北方邊地の土に在り。號して智幻と曰ふ。智幻土の人、鳥を齋持して來り、波遮梨國に至る。其土の國界に此鳥有ること無し。亦異類奇妙の禽無し。時に彼國人、鳥を持ち來るを見て歡喜踊躍し、自ら勝ぶること能はず、供養奉事し、飲食せしむるに果藏もてし、日日月月、而も之を消息せり、遠方の鳥、而も之を覺見し、皆來つて集會すること稱げて數ふべからず。一國普く共に供養奉事し、尊敬すること無量なり。彼異時に於て、一賈人有り、復他國より三孔雀を齋らして來る。時に衆人、徯妙なる殊好、羽翼の殊特なる、行歩の和雅なる、未だ曾て有らざ

る所を見、衆人共に觀、其音聲を聴き、心に踊躍を懷き、又前に加ふる千億萬倍なり。皆鳥を棄てて復供事せず。鳥に威曜無ければ、忽然として色無きこと、日の出づれば燭火現ぜざるが如し。永く復心に諸鳥許り在ること無し。普く悉く愛敬すること彼孔雀に於てし、之を視るに厭ふ無く、前に諸鳥に敬養する所の具は、皆以て孔雀の形に供養し、尊敬自ら歸せば、諸鳥皆没して處所を知らず。

時に於て天有り、即ち歎頌して曰はく、

未だ日光を見ざる時、燭火を獨り明と爲せり

諸鳥本事へられ、水飲及び果蔬もてす

音聲具足せるに由り、日出づれば樹間に止り

諸鳥の供せられし所、今に於て悉く永く無し

當に此殊勝を觀すべし。尊卑無ければ事へらる

尊上 適興現すれば、卑賤に敬事すること無し

是に於て賢者阿難、世尊の教に縁つて心に踊躍を懷き、頌を以て讚じて曰はく、

如し佛興出せず、導師世に現じたまはずば

外沙門梵志、皆普く供事を得ん

今佛具足音もて、明白に法を講説したまへば

諸の外異學類、永く諸の供養を失ふ

佛、諸比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや、爾時の孔雀とは我身是なり。鳥とは諸の外異學なり。天とは阿難なり。時に於て世に在り、經法を講ずと雖も、未だ三毒を除かず、生老病死、究竟すること能はず。塵勞の垢を除き、梵行を淨修す。今に於て如來世間に興り、如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解天人師無上士道法御號佛世尊、今に於て說法して、具足究竟し、梵行を淨修し、諸の塵垢を離れ、姪怒癡、生老病死を除き、三界を獨歩して而も所畏無し。諸邪衆外異學を降伏せば、歸伏せざる莫く、一切度を蒙れり。」

佛、是を説きたまふ時、歡喜せざる莫かりき。

佛說仙人撥劫經第五十二

聞けることは是の如し。一時佛、王舍城靈鷲山に遊びたまふ、大比丘、千二百五十人と俱なり。

爾時、錦盡手長者舍利弗の所に至つて經法を誦誦し、其家に還歸し、所居處を厭うて其鬚髮を下し、而も沙門と爲る。未だ羅漢を得ざるに、一切の所造、皆已に備足せり。時に諸比丘往いて世尊を見たてまつる。「今我等錦盡手を察するに、稽首面見し、法律を説くを聞き、尋時に出家して、而も沙門と爲る。博聞多智にして若干法を講じ、言談雅麗にして庠序猶無く、禪思を興起し、故に復家に還る、世尊是の如し。其所應に隨ふ。未だ羅漢

を得ず、無根無著法なるも、以て未だ成就せず、生死を觀見し、周旋廻轉して解脱を得ず。佛の所教の如くんば、如來至眞等正覺は所獲安隱ならん。

佛、諸比丘に告げたまはく、「何ぞ怪みを爲すに足らん。吾無上正眞道を成じ最正覺爲り。錦盡子、舍利弗の爲に教化せられ、四患を度すと雖も、吾異世に於て、凡夫身を以て、廣く經法を説き、諸の勲苦を度し、乃ち殊特を爲せり。往昔過去久遠世時に、一仙人有り。名けて撥劫と曰ふ。五神通を得たり。時に國王の爲に、奉事せらるること愛敬無量なり。神足もて飛行し王宮に往返せり。彼時に國王、仙人を供養し、一切に施して安し。坐して王邊に在り、日日是の如し。王、仙人に奉ずるに、布髮して行じ、手に自ら斟酌して、百種の飲食あり、有年歳を積み、供養すること限無し。時に於て彼王、小縁の務有り。王に一女有り。端正殊好にして世に於て希有なり。王甚だ敬重し、之を重んずること無量なり。女未だ出門せず。王、女に告げて曰はく、「汝我を見しや不や。仙人を供養し、奉事慇懃に、敢て意を失はず」女、則ち白して白さく、「唯然り、已に見たり」王、之に告げて曰はく、「今吾に事有り。當に遠く遊行すべし。汝之を供養せよ。亦當に我の如く事へて意を失すること莫れ」時に彼仙人、空中より飛下し、王宮内に至る。王女來るを見、手を以て之を攀げ、坐して座上に著す。適手を以て攀ぐるに、體の柔軟なるに觸れ、即ち欲意を起す。適欲意を起せば愛欲興盛に、尋いで神足を失す。故に飛行すること能はず。思惟經行して、神足を復せんと欲するに、故に獲ること能はず、時に彼仙人、國王女を見、貪欲の意

起り、志に従ふこと能はず。歩行して宮を出づ。是の如き所爲は、其音暢溢れ、聞知せざる莫し。時に無央數人、皆來つて集會せり。王行事畢つて還つて其宮に入り、其仙人の無欲を失し、恩愛中に墮し、其神足を失して飛行すること能はざるを聞く。

王、時に夜、其宮に至り、獨り竊に自行し、往いて仙人に見え、足下を稽首し、偈を以て頌して曰はく、

吾聞く大梵志、卒暴皆貪欲なりと

何の所教にか従ふと爲すや。何に因つてか色欲を習へるや

時に撥劫仙人、偈を以て王に答へて曰はく、

吾實に爾り大王、聖の所聞の如し

已に邪徑に墮せり。以て王の吾に遠さかるが故なり

王、偈を以て問うて曰はく、

不審なり慧の在る所、及び善惡の所念や

假使欲心を發せば、本淨に伏すること能はざるや

時に撥劫仙人、復偈を以て王に答へて曰はく、

愛慾は義利を失ひ、婬心鬱然として熾なり

今日王語を聞く、便ち當に愛慾を捨つべし

時に於て國王、仙人に教告せるに、仙人羞慚し、剋心もて自ら責め、宿夜精勤し、久し

からずして即ち獲、神通を還復せり。」

佛、諸比丘に告げたまはく、「爾時の仙人撥劫は今の舍利弗是なり。國王とは吾身是なり。」
佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説清信士阿夷扇持父子經第五十三

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘千二百五十人と俱なり。

一清信士有り。子有りて聰明なり。智慧辯才もて在在所興し、博せざる所無し。能く自ら堅立して、而も懈怠無し、明了殊絶なり。又家業買賣の利を曉り、多く財寶を獲、父母を供養せり。佛は威神もて護り、諸天宿衛し、無央數人の共に愛敬する所なり。父意に可せず、之を愛念せず、常に憎惡もて見、驅使して舍を出し、數捶杖を加へば、復堪ふること能はず、馳せて他國に至り、異土に在りて賈作せり。治生方便もてし、計校興造し、時節失はず、所業を廢せず、多く財寶を積めり。清信士、多く財寶を積めりと聞き、遙に人を遣し呼びて來歸せしむ。子背て還らず、清信士、復人を行かしむ、一設使來らずば財物を遣し來れ。」と。慇懃に諫曉するも都て背て遣さず、其子報じて曰はく、「父、我を困苦せしこと復計るべからず。我をして心を發して遣遺する所能はさらしむるに至るなり。復自ら往き難し。」と。

時に清信士、比丘衆に對ひ、自訟説意すらく、其子の病有つて父母に願はずと。諸比丘具に以て佛に啓す。世尊告げて曰はく、「此清信士は、但に今世に子と不和なるのみならず、前世も亦然り、福德殊異に、造行する所有り、違失する所無きも、其心を可せず。比丘且く此を觀するに、其子の智慧殊特に、徳に量るべからざるも、其心を可せず、其聲を聞かんと欲せず、復思うて得んことを欲せり。」

佛、諸比丘に告げたまはく、「乃往過去久遠世時に一人有り。名けて阿夷扇持と曰ふ。獼猴師と爲つて獼猴に教ふ。舉動法則、技術戲笑、悅豫する所多し。衆の人民に於て此技術を以てす。無央數の人、悉く共に愛敬し、遠近皆來り、其技術を觀る。是恩を蒙り、多く財利を獲たり。其阿夷扇持は、前後の獼猴が大に衆物を得るも、搥捶搏躡せり、其人異日、彼獼猴を將りて城中に入り、柱に縛著して搥捶毒痛し、毀辱折伏せり。時に於て獼猴、竊に默出を得、馳走して山に入り、閑居獨處し、仙人に近附し、之に依て止頓し、果臝を採取して仙人を供養し、復自ら之を食せり。阿夷扇持、之を聞くに、走つて其虚空閑山中に在りと。而して人をして之を呼んで來還せしむ。獼猴背てせず、遙に之に報じて曰はく、「吾今續念するに、前に我を困毒せるの衆患量り難し、前時に我父、横に過罪無きにも毒を加へらる。毀辱言ひ巨し。今故に馳走し來つて山中に入るなり」と。阿夷扇持、便ち自ら往いて獼猴に謂つて言はく、「來歸して家に還れ」と。默聲して背てせず。仙人報じて曰はく、「亦原して置くべし」仙人に答へて曰はく、「吾、之を置くのみ。」仙人報じて曰は

く、「敢て強致すべきも、小しく之を勸諭し、然る後行かんとすべし。假使強ひて之を致さんと欲すれば、儻は能はざるなり」其人答へて曰はく、「假使方便もて之を致して去らんと欲するも、肯て往かざれば、吾當に計を作すべし」と。

即時に偈を以てして歌頌して曰はく、

卿賢柔善子、譬へば鹿の蔭に就くが如し

便ち樹枝より下らば、飢餓死無きを得ん

爾時獼猴、偈を以て答へて曰はく、

不仁和して我を生ず、我自ら志性を知る

何に従つて靚聞する所ぞ、獼猴は柔賢爲り

我諸方面に到るも、未だ中間の念有らず

假使邪長有らば、終に意を制すること能はず

吾今續いて之を念するに、君、阿夷扇持

我を將ゐて城中に入り、柱に縛して毒痛を加ふ

今に於て之を忘れず、搥捶せられなば我に苦毒あり

我已に自在を得たれば、君が困に就くこと能はず

佛、諸比丘に告げたまはく、「知らんと欲するや、爾時の阿夷扇持子は今の清信士子是なり。清信士とは則ち今の父なり。其仙人とは我身是なり。是の如く具足して當に分別して

説くべし。」

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説夫婦經第五十四

聞けること是の如し。一時佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊びたまふ、大比丘千二百五十人と俱なり。

清信士有り、其婦端正にして、面貌殊好に威光巍巍なり、威徳倫ぶる無し。聰明智慧、言語辯才に、悦豫する所多く、衆人の敬ふ所なり。時に於て大智、之を敬重せず、憎惡して歡ばず、之を見んことを欲せず、反つて更に不急の老嫗僕使を敬愛して妾と爲し、而も之を敬重せり、其婦、鞞心の異にして不和、志、下使に在るを見、便ち其夫に謂ふ、「儻は當に出家して道を爲し、比丘尼と作るを聽さるべし」數數是の如くなれば、鞞使ち之を聽せり、卽便出家して道を爲し、比丘尼と作る。晝夜に精進行道し、未だ久しからずして羅漢を證得せり。然るに後時に於て、其清信士が敬ふ所の女人、非常に歸して没せり。時に清信士、便ち行いて求索し、前時の所妻の比丘尼と爲るを得たれば、之を呼んで家に歸らんとす。比丘尼背て之に隨はず、「吾已に出家せば則ち他人爲り。更に異世に生ぜば、罪福同じからず。」と。時に比丘尼、聞き往いて世尊に白して其本末を説けり。

佛、諸比丘に告げたまはく、「是清信士は、前世に此有徳の人を毀辱せり。但に今世のみ

ならず。又此女人は生生有徳にして、殊特の志有り、此人常に之を壞亂せり。今比丘尼、已に大路に入れるに、復之を毀たんと欲す。願に従ふを得ず。『佛、比丘に告げたまはく、『乃古無數世時に、一の梵志有り、婦を蓮華と名く。端正殊好にして、面顏殊妙、色像第一、世に於て希有なり。名徳及び難し。其梵志に一の婢使有り、而も之に親近して、婢を順敬し、肯て蓮華の婦を恭敬せず、喜んで之を見ず。反つて婢の語を用ひ、婦を將ゐて舍を出で、山間に至り、優曇鉢樹に上り、諸の熟果を擇んで取つて之を食ひ、諸の生果を乗てて用て婦を與ふ。其婦問うて曰はく、「君何が故に獨り熟果を噉ひ、生果を棄下し、而して持て相與ふるや」其夫答へて曰はく、「熟するを得んと欲せば、何ぞ樹に上つて自ら之を取らざる」其婦答へて曰はく、「卿我に與へず、我得ること能はず、當に夫の命に従ふべし」婦即ち樹に上る。夫、婦の樹に上れるを見、尋時に樹より下り、諸の荆棘を以て樹の四面を遮り、下りざらしめんと欲し、樹上に置在し、之を捨て去る。便ち死せしめんと欲す。時に於て國王、諸大臣と共に行つて遊獵し、彼樹下を過ぎて其女人を見たり。端正殊好に顔貌殊異なり。世の希有なる所なり。即ち女人に問はく、「卿は何人と爲す、從來する所と爲すや」其婦本末を彼國王の爲に、所變の故を説けり。王、女人を見るに、女の相具足し、衆取有ること無し。心に自ら念言すらく、「其彼梵志は愚騷無智、是丈夫に非ず、而も、此女人を敬意せず」と。棘を除いて載せ去り、其宮内に至り、立てて王后と爲す。其后智慧辯才及び難し。互に樗蒲を用ひ、及び六博書疏に通利す。遠近の女人、來つて共

に博戲せば、王后郎ち勝ち、能く當る者無し。時に於て梵志、遂に彼王に后有り、端正にして博戲に工なり、其來者有るも王后勝を得、歸伏せざる無く、能く勝つ者莫しと聞き、心に自ら念言すらく、「且是れ我前婦なり、是れ異人に非ず。其我前婦は博戲第一なり」と。又彼梵志も亦博戲に工なり。王に詣つて其技術を現せんと欲す。時に王后、一梵志の形像此の如く、及び其顔貌長短好醜を聞き、即ち心に念言すらく、「是我前夫なり」と。時に於て梵志、王宮の門に詣る。王即ち之を見、遂に博戲を試む。侍人を齒と名く。

時に於て梵志、偈を以て頌して曰はく、

髮好長きこと八尺、其眉若くは畫の如し

柔軟なること上第一、當に熟果蘊を念すべし

是に於て王后、偈を以て答へて曰はく、

往時の婢自在なれば、其志 其許を好む

敬重を第一と爲すや、劫取を第一と爲すや

時に梵志、復偈を以て王后に答へて曰はく、

閑居龍處に詣れ。龍象常に遊ぶ所なり

彼に於て相娛樂せん。當に熟果蘊を念すべし

王后、偈を以て梵志に答へて曰はく、

獨り自ら熟果を噉ひ、生者を棄てて我に與ふ

是吾宿の因縁なり、梵志が劫取する所なり

時に於て梵志、心中に懷恨し、即ち自ら剋責し、悔ゆとも及ぶ所無し。

佛、諸比丘に告げたまはく、『爾時の梵志は今の清信士是なり。其婦とは今の婦是なり。』

彼國王とは吾身是なり。爾時亂を起し、今も亦是の如し。』

佛説是の如くにして、歡喜せざる莫かりき。

佛説譬喻經第五十五

過去無數劫時に獨母有り、麻油膏を賣るを業と爲す。時に比丘有り。日日是母の許に於

て、麻油膏を取り、佛の爲に燈を然し、有年數を積めり、佛、後に比丘に決を授けたまは

く、『汝後に當に作佛すべし。諸天國王人民、悉く往いて比丘を賀す。比丘言はく、『我

恩を受けたり』と。獨り母、比丘の授決を聞き、便ち佛所に到り、白して言さく、『此比丘、

麻油膏を然すものは、我所有なり。願くば佛、復我に決を授けたまへ。』佛の言はく、『此比

丘佛と作らん時、汝當に共に從つて受決すべし。』

佛、舍利弗に告げたまはく、『是時の比丘とは提想竭佛是なり。時の獨母とは我身是なり。

昔維耶離國に、一長者有り。佛の來化を聞き、即ち佛所に詣り、稽首して足を禮し、佛に

白して言さく、『意に佛に請はんと欲す、一時に三月なり』と。佛黙して之を可したまふ。

即ち衣を攝し鉢を持して長者の家に就きたまふ。餘人の請へる者、復得ること能はざれば、

【提想竭】 デイ

【維耶離】 (Dipani-kara) 然燈佛のこ

【維耶離】 ワイシ

【維耶離】 (Vasiri) 毘耶離國のこと。

【不起法忍】無生法忍のこと、見惑を斷じ空理を證ること。

皆悲意を興し、長者を害せんと圖り、便ち日と剋し兵を擧げ、舍を圍むこと數重なり。長者怖慄し、至心に佛に於てし、復他想無し。佛爲に說法したまふに、若干要語もてせば、長者及び眷屬、皆不起法忍に逮ぶ。佛座より起ち出でて外人を解し、害害の告報を説き、和慈の福を數じ、若干要語もてせば、衆人意解し、八萬四千、無上正真道意を發せり。」

諸比丘、佛に白さく、「今此大會に、佛を見たてまつり意解せるは、是れ時に遭ふと爲すや。宿、因縁有りと爲すや。」佛言はく、「今此衆會、一時に度せる者は、皆宿、佛と因縁有るが故なり。」比丘白して言さく、「願くば佛、本末もて之を説きたまへ、聞く者功德を増益せん。」

佛言はく、「昔一國有り、居は大海に近し。時に王を薩和達と名く。慈を以て國を治め、民を視ること子の如し。國に大災有り、三年雨らざれば、人民飢餓せり。王、梵志道士を招し、當に雨るべきや不やと問へり。占者答へて曰はく、「滿十年に乃ち雨有らんのみ。王、此語を聞き、人民の死盡せんことを恐れ、愁憂して樂します、一當に何の計を作してか以て國人を濟ふべきや」と。復念じて曰はく、「唯當に身施以て衆生を救ふべきのみ」と。便ち齋戒清淨し、又手を十方に向けて曰はく、「我前後に作せる所の善行を以て、若し福報有らば、願くば海中に生じ、大身魚と作り、肉を以て衆に供養せん」と。便ち口を閉ぢて食はず、七日にして命終し、生じて魚と爲るを得たり。身長四千里、具に宿命を識れば、便ち海岸上に墮し、正に黒山に像る。人民山を見、那ぞ是山有るを得しやを怪しみ、皆往いて之

を視、乃ち大魚なるを知り、國を擧げて皆往き、乃ち解取して食し、飢困を免るを得、國遂に還復し、豐熟なること故の如し。」

諸比丘に告げたまはく、「爾時の魚とは我身是なり。爾時我肉を食せる者は、今の維耶離國人是なり。如來往に、肉を以て衆生を活せるは一世中のみ。今道慧を以て識神を救護し、本無に還復し、長く三界を離れ、衆苦永く滅せり。菩薩の勤苦は三施を具足す。何をか三施を謂ふ。外施、内施、大施なり。是を三施と爲す。衣食珍寶、國土妻子、是を外施と爲す。支體骨肉、頭目髓腦、是を内施と爲す。四等六度、四諦非常、十二部經を衆生の爲に説く。是を大施と爲す。求道の法、三施具足せば、乃ち疾く佛を得ん。」

佛、是を説きたまふ時、無數の衆生、皆無上正眞道意を發せり。首達者年尊は五千人を教化し、惟先は年少なるも、其智深遠なれば、諸の國土を行じて六萬人を教化し、展轉して首達と共に會せり。首達の弟子、惟先の智慧勇猛なるを見、悉く往いて之を崇めんと欲す。首達、諸學者に謂ふ、「惟先は年幼にして其慧薄少なり。」と。惟先竊に其言を聞き、「菩薩法者は當に相供養すべし。諸國土に行じて視るは、佛を見るが若し。今我に護無し。而も同法の意を起せり。」と。惟先、其夜默然として其國土を去りぬ。所以は何ん。學者をして首達を供養せしめんと欲すればなり。首達は惟先を誹謗せしを用ての故に、摩訶泥梨に墮すること六十劫なり。既に出でて人爲るを得るも、舌無きこと六十劫なり。所以は何ん。心口意を制せざるが故なり。而も菩薩法を失へり。罪盡き已つて後、前の功德に逮び、自

【摩訶泥梨】マハ
ニラヤ(Mahāniraya)大地獄の意

【阿彌陀】アマミタ
(Amida) 無量と譯す。

ら致して佛を得、號して釋迦文と字す。」

佛、諸願者に告げたまはく、「其首達とは則ち吾身是なり。惟先とは今現にある阿彌陀佛是なり。其坐中の一切皆悉く言はく、「其失や小のみ。罪を得ること甚大なり。佛、諸會者に告げたまはく、「身口意は護らざるべからず。其信する有る者は奉行して道を得、所作過惡なるも、能く自ら覺改悔首せば、其過微輕なることを得べし。昔無數劫時に一人有り。大に布施を興し、外道梵志を供養すること無數千人なり。數年の中に諸梵志法、經を多く知る者を、上座と爲すを得たり。中に諸梵志有り。年者多智なること會中第一なり。時に儒童菩薩、亦山中に在り、諸の經術を學び、博せざる所無し。時に來つて會に就き、其下頭に坐せり。次に所知を問ひ展轉するも如かず。乃ち上座に至り、長老梵志の所知を問へり。亦儒童に如かず。十二年已に滿ぜんと欲するに、向とす。經を多く知る者、當に九種物を以て以用て之に施すべし。九種物とは、金馬銀鞍勒、及び端正の女、金澡澣、及び金澡盤、金銀床席なり。皆絶妙好なり。是の如きの比に九種物有り。長老梵志、便ち自ら思惟すらく、「吾十二年中、我に係る者無し。而も此年少、數ち乃ち吾に勝てり。人羞恥すべし。物は言ふに足らず、失名は易からず」と。便ち儒童に語らく、「所施の九物、盡く當に相與ふべし。卿小し我より下り、吾をして上に在らしめよ」儒童答へて曰はく、「吾自ら理を以てし、強ひて上に在らず。若し我劣るを知らば、我自ら下に在つて、恨むる所無きなり、梵志懊惱し、座を避けて之に與ふ。七寶の校飾、極めて精妙爲り。長老梵志、

【阿惟三佛】阿毘三佛ともいふ、アビサムブツダ (Abhisambuddha) 等現覺と譯す。

因て儒童に問はく、「卿の學問、何に求索する所ぞ」答へて言はく、「吾、阿惟三佛を求め、萬姓を度脱す」長老梵志、心に毒害を生じ、内に誓願して言はく、「當當に世子子の心を壞し、成ずることを得ざらしむべし。若し故に佛となせば亦之を亂さん。宜しく復念言すべからず。善惡は殊途なれば、恐らく相遇はざらん。唯當に大に徳を修すべし。爾らは乃ち相遇はんのみ。便ち六度無極を行じ、兼ねて諸善を修し、恆に廢捨の意無けん」と。是に於て別去し、施主の九物は諸の梵志に與へ、各之を分たしめじり、各一銀錢を減じ、追うて儒童に與ふ。「九物を受けざれば、吾の等しく普く之を分得せしめん。儒童受け已り、各自別去す。菩薩道成じ、調達は恆に菩薩と相隨ひ、俱に生じ俱に死し、共に兄弟と爲りて。恆に菩薩を壞す。爾時の長老梵志は調達はなり。儒童とは釋迦文佛是なり。本誓を以ての故に、恆に相離れず、是其本末なり」と。

師言はく、「學するには當に善知識有るべし。昔、驢一頭有り。其主恆に馬と相隨はしむ、飲食行來、常に馬と俱なり。馬行くこと百里なれば、亦行くこと百里なり。馬行くこと千里なれば、亦行くこと千里なり。衣毛嗚呼、馬と相似たり。後驢と相隨ひ。飲食行來、驢と俱なり。驢行くこと百里なれば、亦行くこと百里なり。驢行くこと千里なれば、亦行くこと千里はり。毛頭驅、悉く驢に似ることを爲し、嗚呼喉癆、純ら是れ驢爲り。遂に老死に至るも、復馬と作らず。學者も亦是の如し。善知識に隨はば則ち日に精進なり。精進なれば道駛さを得す。惡知識に隨はば、則ち日に懈怠す。懈怠せば是を長波と爲すな

り。〇

昔、外國に婆羅門あり、天に事へ、寺舎を作り、好んで天像を作り、金を以て頭を作る。時に盜賊有り、天像に登つて其頭を挽取するも、都て動かさず、便ち「南無佛」と稱すれば、便ち頭を得て去れり。明日婆羅門、天頭を失ふ、「天頭、若去れりや」と。衆人聚會すらく、「天神頭を失ふ、是れ無有神と爲す」神、一婆羅門に著す。「賊人我頭を取らんとするも得ること能はず、便ち「南無佛」と稱するに、諸天皆驚動せり。是故に我頭を得たり」と。諸婆羅門言はく、「天、佛に如かず」と。皆去つて佛に事へ、復天に事へず。賊人「南無佛」と稱するすら、天頭を得て去る。何に況んや賢者の「南無佛」と稱するをや。十方尊神敢て當らず。但精進して懈怠を得ること勿れ。

昔、沙門有り、晝夜に經を誦す。狗の床下に伏する有り。一心に經を聽いて、復食を念せず。是の如く年を積み、命盡きて人形を得たり。舍衛國中に生じて女人と作る。長大して沙門の分衛するを見れば、便ち走つて自ら飯を持して與ふ。歡喜することは是の如し。後便ち沙門を追うて去り、比丘尼と作る。精進して應眞道を得たり。

昔、國王有り、城外に於て大に伎樂を作せり。國中の人民、皆共に之を觀る。城中に一家有り。其父疾有り。行歩すること能はず。家室共に扶けて、將に強ひて行かしめんとして城を出づ、便ち樹下に止り、自ら致すこと能はず。家中に語つて言はく、「汝行いて觀じて來り、還るに乃ち我を將て歸れ」時に天帝釋、一道人と作りて其邊を過ぎ、便ち病人を

呼んで「汝、我に随つて去れ、我能く汝の病をして愈さしめん」と。人聞いて大に喜び、便ち起つて随つて去る。釋遂に將ゐて天に上り、天帝宮に至つて、金珍寶を見るに、世の所有に非ず。意中に念を生じ、従つて求め乞はんと欲す。人有り、語つて言はく、「従つて瓶を求むべし」と。病人便ち前んで釋に語つて言はく、「我去らんと欲す、願くば此瓶を乞はん」釋、便ち之を與へ、之に語つて言はく、「此中に物有り、汝が所願在らん」と。病人即ち持ち歸り、室家相對して共に之を探り、即ち心中所欲の金銀珍寶を得たり。意を恣にして皆因る。大に宗親を會し、諸家内外共に相娛樂せり。醉飽已後、因つて瓶を取つて之を跳らせ、「我、汝の恩を受け、我をして富饒せしむ」跳躑止まざれば、便ち地に墮して之を破せり。所求復得ること能はず。佛の經戒は、譬へば寶瓶の如し。初め聞いて精進なれば、所願必ず得ん。後小して懈慢して、經を忘れ戒を失ふ。譬へば瓶破れなば、復得る所無きが如し。法家婦女、金銀珠環を著くるに、四事有つて天上に上生す。一には金銀珠環を著く。若し明經者有つて、經を聞いて歡喜し、脱持布施す。是二福もて天上に生ずることを得、二には若し遠方の沙門、塔寺を興起するを見て歡喜し、金銀を脱して布施し勸助す。是二福もて天上に生ずることを得、三には若し貧窮困厄の人、佛が布施の第一行なるを説くを聞き、便ち解いて布施す。三福もて天上に生ずることを得。四には疾病を得、命終の時に臨んで脱持布施して、我命を救助せんとす。目に自ら施を見れば、是人命盡きて、歡喜して懼れず。天に上生ずることを得。是を以て法家の婦女は、四事行有つ

て金銀寶環こんぎんほうくわんを著つけ、天上てんじやうに生しやうずることを得うるなり。』

生經卷第五 終

昭和五年二月一日印刷
昭和五年二月十日發行

昭和國譯大藏經 經典部 第二卷

不許複製

編纂者

新編國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

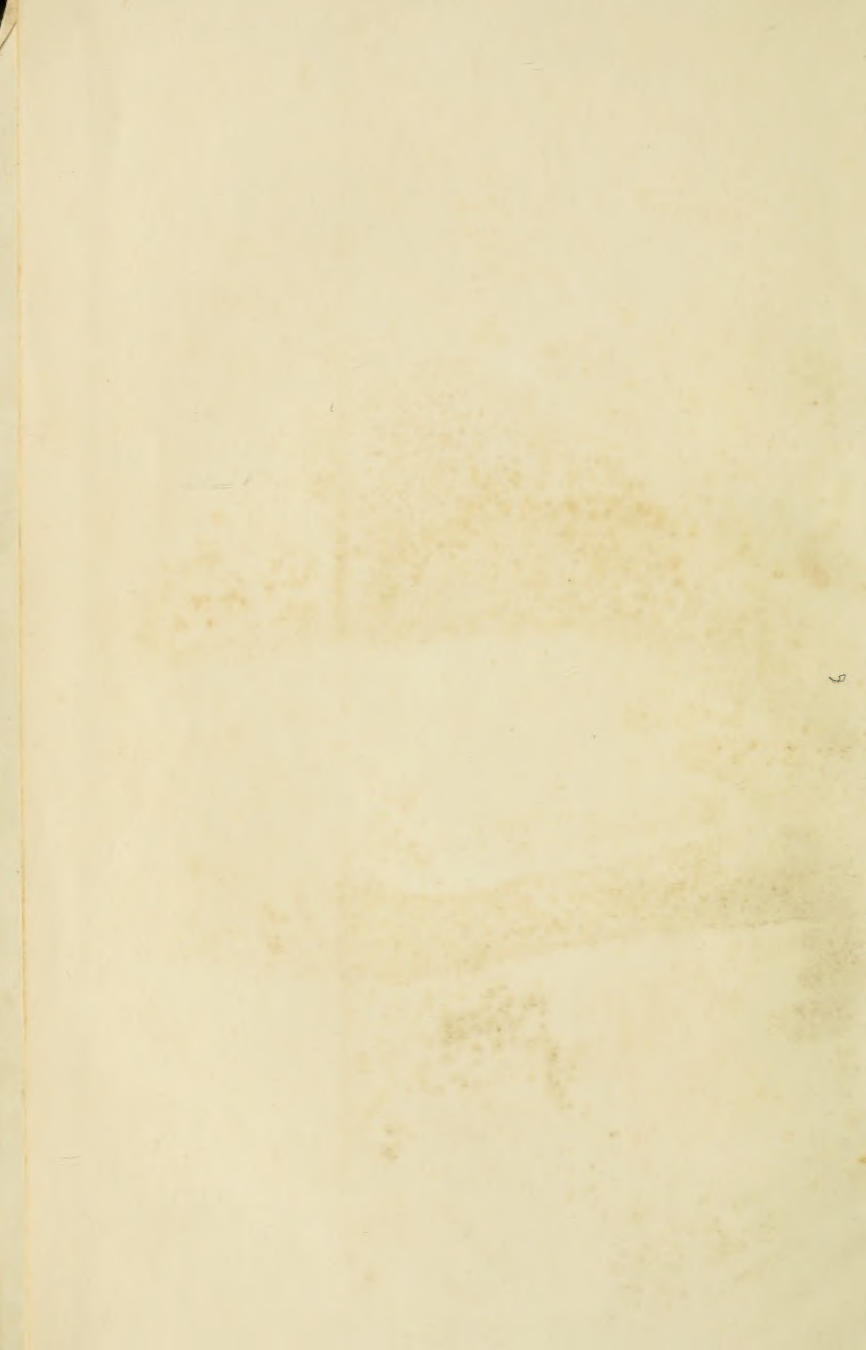
東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

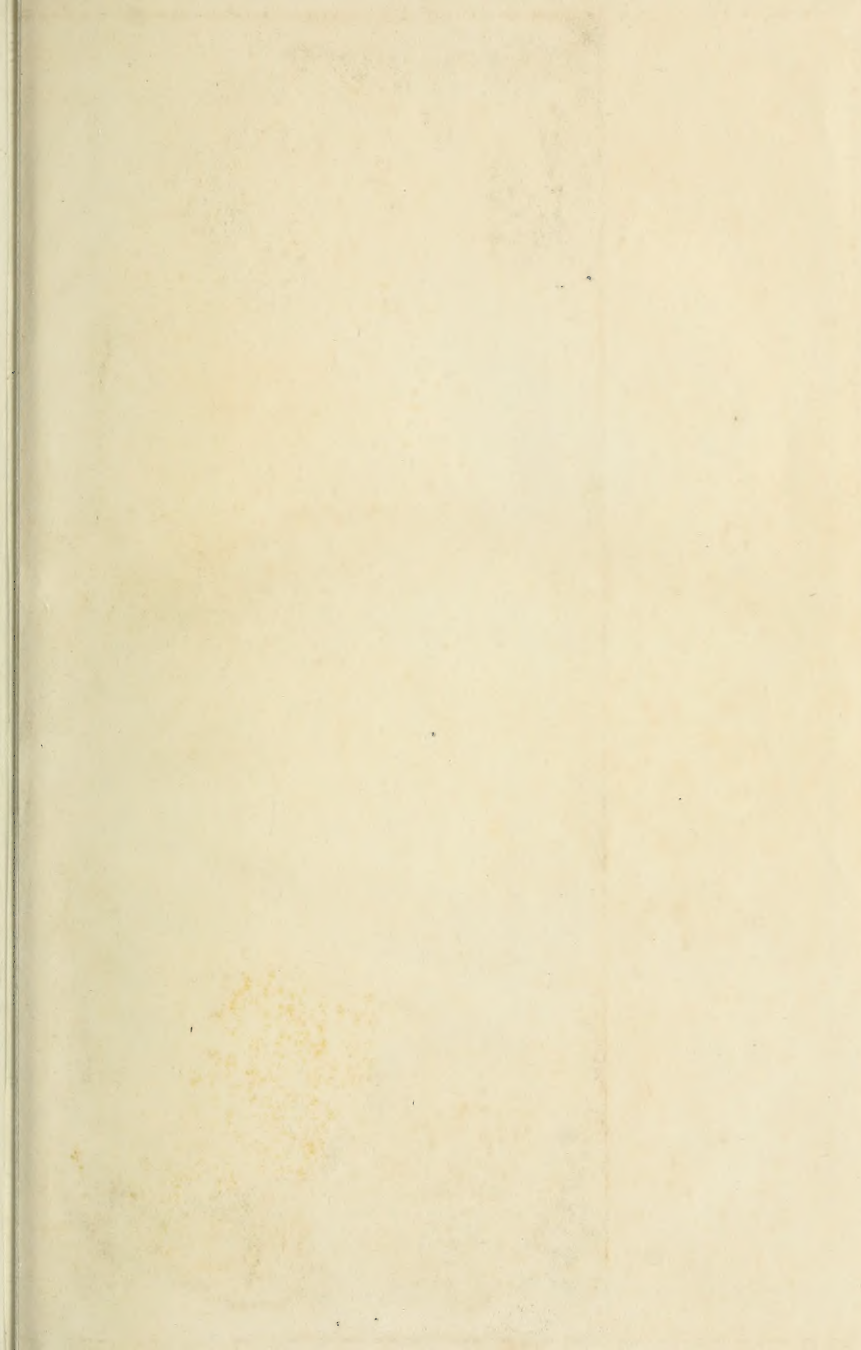
發行所

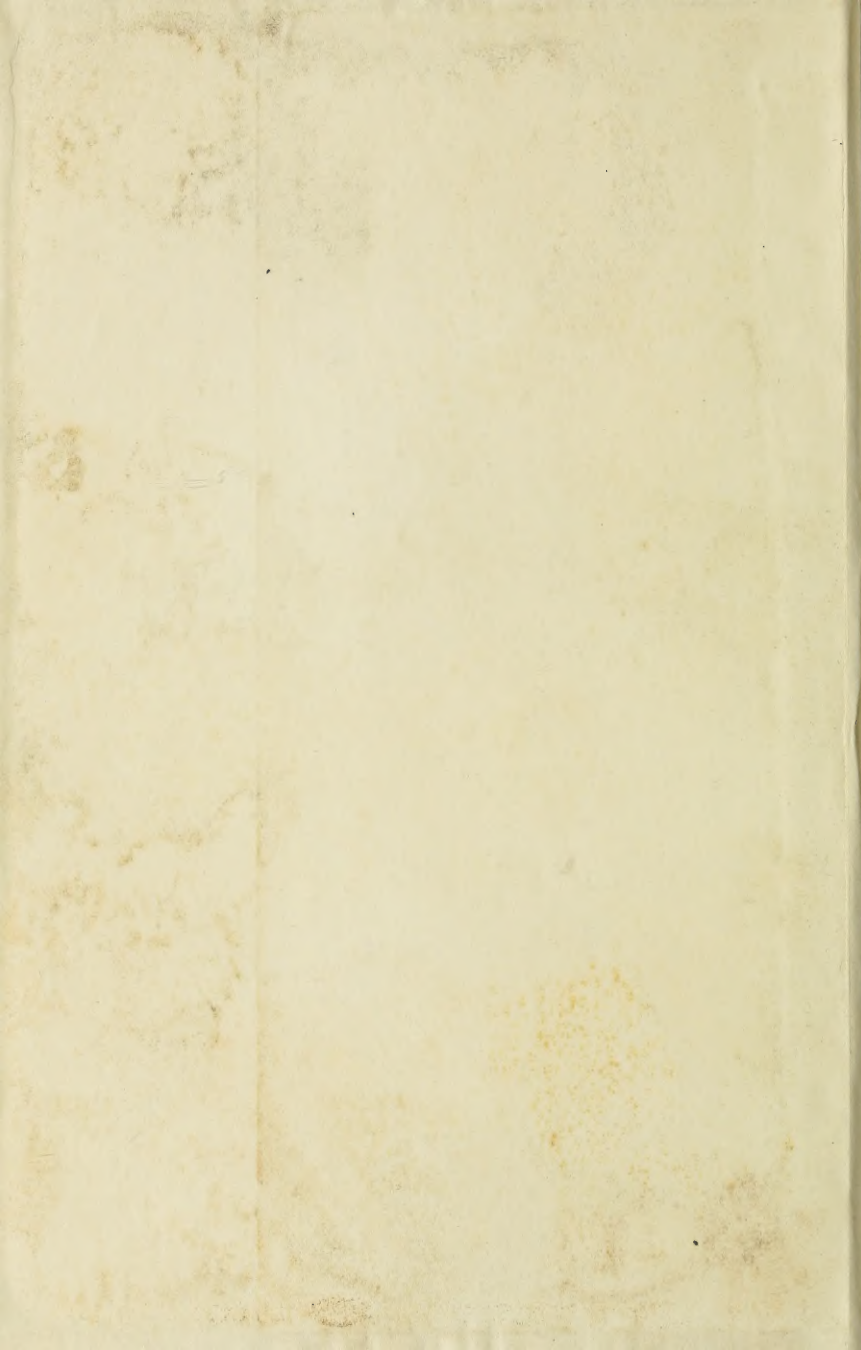
東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社 東方書院

電話下谷四二五九
振替東京六八一







EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3837